大正八年一月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第三十四年第一號　第三百六十五號

印度マドラス大學教授 ナラス著

曹洞宗大學教授 立花俊道譯

新刊 佛教の要諦

釋尊影像、アジャンタ壁畫等の寫眞版十一頁入

四六判總洋布製

正價貳圓六拾錢

郵税十二錢

慘憺たる戰雲收つて今後世界を擧げて最も喧しかるべきは思想問題である。想界に於ける前人未踏の境地を發見して將に來らんとする新文明に培ふべき一大資源たり得るものは、恐らく現代の科學的新眼光に照せる佛教の教理ではあるまいか。本書は最も的確に之を證明するものである。本書一度び出づるや、印度本國の學徒は勿論、歐米の識者は競つて之を愛讀し、現に印度カルカッタ大學、マドラス大學を始め、英米の諸大學でも學生必讀の指定參考書としてゐる。著者は最新の科學、哲學の大家で、又佛教の熱烈な信者である。今明快比類なき此全譯成る。敢て一讀を請ふ次第である。

『余は佛教の智識を得んと欲する萬人に此書の熟讀を勸む。惟ふに此書はかゝる主題に關する空前の良著と稱するに憚らず』――スマンガラ大僧正

（スマンガラ大僧正は云ふ迄もなく印度に於ける世界的大學者である）

九版出來

ノベル賞金を得たる白耳義文豪 マーテルリンク著

文學士 栗原古城譯

死後は如何

四六判總洋布製

正價壹圓五拾錢

郵税十二錢

▼朝あれば夕あり。生あれば死あり。死後を窮むるは即ち斯の生を知る所以也。

東京本郷西片町 玄黄社

電話小石川一三九番

振替東、七九九五番

芥川龍之介氏著及び裝幀

傀儡師

（一月七日發賣）

著者具さに名匠の苦心を盡して一作をゆるかせにせず、茲に漸く此一卷を公にする事となれり。收むる所「地獄變」「戲作三昧」以下、何れも寶玉の光輝と、古金襴の色彩とを備へたる氣品高き作品のみにして、獨り新興文壇の異彩たるのみならず、日本の文藝に空前の新生面を開き、獨一無類の作風を完成せるもの也。

特製箱入最上製
大版三百三十頁
定價壹圓四拾錢
郵送料八錢

菊池寛氏著
芥川龍之介氏跋

心の王國

（一月七日發賣）

昨年の創作界に、近來稀有の逸品を以て推稱せられたる『忠直卿行狀記』を始め、『大島の出來る話』以下小說戲曲の作中、その最も自信あるもの、一切を集めて此の一卷となせり。新らしき心理小說、新らしき舞臺藝術として、此の一卷の如何に重きを現下の文壇になすものなるかは、改めてこゝに云ふを須ひざる也。

特製箱入最上製
大版三百二十頁
定價壹圓參拾錢
郵送料八錢

傑作小說書類

有島武郎氏著 **迷路** 價八拾五錢 送料六錢

久米正雄氏著 **學生時代** 價壹圓廿錢 送料八錢

廣津和郎氏著 **二人の不幸者** 價九拾錢 送料六錢

相馬泰三氏著 **荊棘の路** 壹圓四拾錢 送料八錢

志賀直哉氏著 **夜の光** 壹圓四拾錢 送料八錢

江馬修氏著 **受難者** 壹圓六拾錢 送料八錢

東京牛込矢來中の丸
振替東京一七四二番
新潮社
電話番町 八〇九番 八九九番

平和來！

全國民の戰捷を記念すべき

一大世界大戰史出づ

大隈侯爵　東鄕元帥　軍事參議官陸軍大將　松川敏胤　海軍大學校長海軍中將　佐藤鐵太郎　諸閣下題序

東京帝國大學文科大學教授　文學博士　箕作元八先生編　菊判最上製全二卷

最新刊

一九一四年—一九一八年 世界大戰史

前編發行　千二百五十頁

前編　一九一四年より一九一五年八月迄大戰一年間の經過細叙。地圖大判着色石版四枚大小五十圖三色版二、二色版二寫眞版廿四枚

特價六圓　正價八圓　郵稅廿錢

歐洲大戰の勃發するや、獨逸の暴戾に對して宣戰の大詔は煥發せられたり、爾來四星霜我帝國が聯合與國と並馳して海に陸に至大の功績を樹てし事は、世界の齊しく嘆美する所也。今や時勢は急轉直下、遂に獨墺の全敗に歸して、世界の秩序は再び回復し、吾人も亦戰捷國民たるの光榮を荷はんとす。この有史以來の大活劇は戰捷國民として永久に記憶せざる可らざる最大史實たるを以て、弊社は夙に箕作博士に請ひ、一昨々年以來最善の準備と計畫とにより、同博士主監の下に第一流の學者專門家を網羅し、完備大成せる大戰史の編纂事業を經營せり。收むる所大戰の由來、交戰列國の內政外交、經濟財政、軍備及動員の實況等、確實なる研究を基礎として、平明詳細に記述せられ、本書三分の二を占むる陸戰史、海戰史に至りては軍事當局よりも幾多貴重なる材料を仰ぎ、萬一の誤謬なきを期せり。玆に第一書成りて、此最善最大なる大戰史を提供するを得たるは弊社の光榮とする所とす。今や講和は目前に迫れり。世界大戰の戰捷記念として、戰後經營の根本的資料として、何人も本書を備へ本書を讀むの一大義務たるを確信す。

◇內容見本進呈——御申込次第

東京神田　冨山房　振替五一〇

坪内芳賀兩文學博士推薦

新譯繪入

摸範家庭文庫

全部六卷

クリスマス年末年初何より上品な教育的な文明的贈答品

裝幀の絢爛插畫の美麗豐富古今内外に類を絶す。



坪内博士序 杉谷代水先生譯 **アラビヤンナイト** 上下	芳賀博士序 中島孤島先生譯 **グリムお伽噺** 全	坪内博士序 楠山正雄先生譯 **イソップ物語** 全	長田幹彥先生譯 **アンデルセンお伽噺** 全	平田禿木先生譯 **ロビンソン漂流記** 全	可愛らしいお伽模樣繪附書棚に收めて全部割引拾二圓五拾錢 現品は全國有名書店と三越呉服店にありますから何よりも御實見を願ひます

——(定價各卷金貳圓六拾錢郵税各卷十二錢)——

裝幀は極彩色金欄模樣、それへ三色版を貼りこんだ額にしてもよい横は表紙、中の繪ょ三色版や石版や凸版や寫眞版や、有ゆる手を盡して金のかつた繪が毎卷に二百乃至三百以上も入つて居ます。繪ばかりが此書の効能ではありません、擇ばれたお話の材料が貴いです。いづれも世界に抜きいでゞ、永く不朽の讀物たるもので、文章が又第一流文士の心血をそゝいだ新譯でありまして原文の趣味と情愛とを最も平易に面白く表はしてありまして家庭團欒の讀物として此位善美を盡したものはありません。父兄母姉諸君にして、此の本を子弟たちに購ひ與ふることはいかに敎育的でありませうか、子弟たちにしてこの本を買つていただく事はどんな幸運なことでありませうか。

慈愛深き父母は愛兒の爲に、此上品にして優しく面白く美しき世界に名高き教訓お伽繪本を求めたまふこと吝かならざるべし

東京神田 冨山房 振替五〇一

米國大統領ウィルソン氏著

衆議院議員 關和知氏譯

縮刷 新自由主義

米賜天覽

現今世界第一の巨人として、又現代平和の盟主として億兆の渇仰を受け、人類輿望の中心たる米國大統領ウィルソン氏が其金口を開き赤心を吐ける稀世の名著は湧くが如き江湖の要求に促がされて縮刷を刊行せり、其立論の雄大にして而も深遠を極めたる、其主義の高邁にして直ちに眞理を示現せる、一面曠世の大碩學たる氏の活きたる政治哲學にして、他面又此無二の大哲人が現代に漲れる新思潮の大勢を豫見し、社會問題、民本主義、民衆政治の基調を闡明して此を解決すべき最高標準を道破せる豫言的獅子吼なり。恭なくも曩に 天覽の榮を賜ふ、苟くも此『新自由主義』を味讀せざれば、現代世界の一大思潮を解する能はざるべし。

菊半截形・箱入美本
定價金壹圓・送料內地
八錢・臺樺廿錢・支卅錢

岡本綺堂氏新著（四六判美本〇定價壹圓四十錢 送料前同）

玉藻の前

日本古來の傳說中、最も興味多きは『玉藻の前』に關するローマンス也。本書は文壇の大家として有名なる岡本綺堂氏が絢爛の筆を以て新らしく見たる玉藻の前、最も興味多く近代的に描寫されたるものにして、妖艶無比の美人の周圍に起る美しき色彩のローマンスは恰かも一大繪卷物を展開する如く、一度び之を繙かば不可思議の色彩は卷を閉つるに忍びず。

東京市麴町區飯田町一の二
株式會社 天佑社
振替東京一〇一二八
電話番町一一七九


純品質主義
東洋一の鷹印帽子
タカ
株式會社
高橋製帽所

▼説苑





12
1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇七
商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ



THE VILLAGE IN WINTER
BY EDWARD W. REDFIELD

大正八年を迎ふ

茲に吾人は大正八年を迎ふるに方り、月並的な紋切形の賀辭を列ねる代りに、此の來るべき一ヶ年に於て吾人は恐らく何を爲さゞる可らざるかを考へて見たい。顧れば、大正七年は實に世界に取つて正義と平和との産みの苦みの絶頂であつた。一昨年の暮より世界の人々に手に汗握らした露獨單獨講和は、急轉してブレスト・リトヴスク條約となり、何れ丈け吾人の心膽を寒からしめたか分らない。之に伴ふ昨年春期の西部戰線に於ける敵側の大々的攻勢は、ロイド・ジョージの言つた樣に、一時吾人をして聯合與國は今や未曾有の一大危機に在りとの喚聲を發せざるを得ざらしめた。併し乍ら吾人は能く此危機を堪へ通した。斯くて昨年晩夏の勝利以來、聯合與國の忍耐と苦辛と努力とは漸を以て酬ゐられ、以て遂に平和と正義との幸福なる誕生を見るに至つたのである。今や疑惑と憂慮とを以て始つた大正七年は、光明と希望とを以て最後の幕を彩り、來るべき大正八年が如何なる清醇稀麗の新粧を以て現れ來るべきかを豫想せしめて漫ろに吾人の胸を躍かしむるものがある。平和と正義との世界歴史は、實に此年より始ると謂つてよい。而して吾人は實に此の新なる歴史を作るの聖業に參加するの光榮を有するものである。

此時に方りて唯だ吾人の深憂に堪へざるは、我國の所謂識者と稱する者の間に、這の聖業に參加するの精神的準備ありや否やの事である。見よ、世界は平和と正義との權威晈として天日の如くなるに、我國の一部には、今尚ほ固陋の見に泥りて大勢の道義的趨迫を苦とする者甚だ多いではないか。されば吾人の眼前には、世界の人々と新世界の經營を共にする事の外、又國内の民心を世界的に啓發せねばならぬといふ、二重の仕事が横つて居る。大正八年は世界に在ては光榮の歴史の第一頁である。而かも我國に在ては世界的覺醒の徹底の爲に産みの苦みを嘗むべき特別の時期かも知れない。少くとも吾人は識者と共に此覺悟を以て新しき年を迎へんとするものである。

何となれば此れ丈けの努力に成功した上でなければ、吾人は世界の人々と共に、眞に所謂欣喜雀躍の熱情を以て、來らんとする新世界に入ることが出來ないからである。

中央公論



第卅四年第一號
一月號
第三百六拾五號

都市改善論

法學博士　渡邊鐵藏

一　緒論

國民の經濟生活改善が我國目下の緊要事であることは輿論の一齊に唱ふる所である。從つて政府公共團體は社會政策的の調査施設其他の方法につきて種々考慮を廻らしてをるようである。近來輿論の力が我國の政治上に著しき影響を與へ得るに至つたことは誠に喜ぶべき現象であると思ふ。正しき民意に出來得る限り迅速に隨ふことは政治をして國民多數の幸福に添はしむる所以である。正當であり、重要であり、有效である計畫施設も逡巡遲疑して其實行の時機を失すれ

は既に效果を失ふか、更に些細なる對症療法の實用に苦心するか、或ハ之を其の儘に放置して其れに於ける施すべからざる狀態に陷らしたる嫌がある。議會に猶ほにして立案と實行に緩なることは常に正當なる政策、緊急なる改革の實現を阻害するものである。社會問題の解決につきては殊に時機を失することによつて重大なる結果を惹起すべきことは、病者に對する醫藥の手當の遲れたる場合に生ずべき結果と同一に考へられる。況んや全く手當をせず、或ひは誤りたる手當をなしたる場合に生ずべき結果の怖るべきことは何人と雖も想像するに難くないことであらう。

我國は日清、日露の兩戰役を經て更に今回の世界大戰爭に參加し一強國として世界的地位を確保することを得るに至りたることは喜ぶべき事實である。之によつて將來の國際關係の安穩平易を豫想することは固より早計であるが、兎に角明治維新の大業によつて國家の內部的基礎を作りたる此日本國が、其後五十年にして漸く近隣よりの強力なる外部的壓迫を顧慮するの必要なき境遇を開拓し、地球上に於ける一國家として外部に對して一應安固なる基礎を築き得たと考ふることは誤りでない。此の如く日本の國家的發展或ひは俗に所謂國威發揚が一段落を告げて、國家の外部的基礎が或程度まで出來上りたる時に於いて、國民は顧みて內を慮ひて其の經濟組織に於いて、社會組織に於いて、政治組織に於いて幾多の缺陷が存在し、又發生せむとしてをることに氣付いたやうである。之に基ゐて生じたる大なる輿論の聲は國民の經濟生活の改善と選擧權擴張の二者である。刻下の問題とし國民にとりて軍備擴張就中陸軍擴張なぞよりも遙かに〳〵重要な意義を有してをる是等の諸問題の解決が、所謂國是若くは國家百年の長計の樹立に劣らぬ實際的の緊急事項であることは多數國民の同意する所であると信ずる。(余は陸軍現役年限短縮、常備陸兵大縮少論を持してをるが、之は他の必要なる機會に於いて論じたいと思ふ)余はこゝに社會政策の實行論、選擧權擴張論をなさむとするのではないが、國民の經濟生活の改善と頗る密接なる關係にある我國の都市生活の改善が焦眉の急務であり、且つ今や實行上絕好時期であ

ることについて熱心なる議論を進めたいと思ふ。

二　大都市膨脹の傾向

人口の都市集中は近世產業國の一般の傾向であつて、我國に於ても農業國時代より商工業國時代に推移する徵候の現はるゝことの著しきに伴ひて漸次に人口の都市集中の傾向を生じ、最近に至つて殊に甚しいやうである。大正六年末我國（本國）の人口五千六百八十餘萬人中、四十一個の人口五萬以上の中以上の都市に居住するものゝ總數は八百八十七萬餘人であつて、全國總人口の一五・六パーセントであるが、其内の大部分五百九十餘萬人は東京、大阪、京都、神戶、横濱、名古屋の所謂六大都市に集中しておるのであつて、全國人口の一〇・四パーセントが僅々六個の都市に包容せられてをる有樣である。而して山岳國である我國の地勢、太平洋上に於ける海國としての我國の地位に併せて我國民經濟の要求を考ふれば、將來に於いても我國（少くとも本國）が工業國並びに商業國の色彩を益々濃厚ならしむることは必然の趨向であり、且つ正に國家の經濟政策の取るべき針路であると思ふ。然らば國內の工業都市、國際的商業都市が將來益々膨脹すべきことは何人と雖も直ちに豫想し得べき事實である。現在に於ける六大都市と數個の工業都市の急激なる膨脹を見て驚く者は、皆之を以つて一時的現象なりとせず、此豫想の正當にして且つ迅速に出現すべきことを疑はないであらう。此の如く都市就中大都市は多數の人口を包容して、國民經濟の中樞的活動機關となり且つ將來益々其重要の程度を增すべきを以つて、今に於いて都市の重要なる意義を認め、其包容し又包容せむとする多數の住民の幸福を增進し、國民經濟の中樞的活動機關としての能力を充分に發揮せしむるために、現在我國の都市の有するあらゆる缺陷を匡正し、將來に對する永久的の計畫を建つるにあらざれば、我國の都市は遂に單純に多數人の不衛生なる集合地として何時までも封建時代的都市、田舍的都市の面目を改むるの機なく、近世的商工業國として活躍すべき運命を持ち既に其の道程にある日本國

は、斯式の現狀、無能力なる都市を活動の主要舞臺として又中樞機關として生きねばならぬことゝなるであらう。設備不整備ノ都市が其住民の時間と勞力と健康とに重大なる損失を與へ其活動力と生活の幸福を減殺することの甚大なることとは我國の大都市を歐米の大都市と比較して見る者の皆頗る痛切に感ずる所である。斯の如きは國家的の大損失であつて、之を救濟するために一定の計畫を立て、最迅速に之を實行することは我國の現狀よりいへば焦眉の急務であるのみならず、所謂一日遲るれば百日の損となるものであるといはねばならぬ。

三　近代都市の使命

都市發達の源を尋ねれば 人類は生命上の危險少なく、地味、富源、交通、氣候等の諸條件の秀れたる場所を選むで住むものであるが、多數の人口が集中するには單に居住若くは原始的産業の好適地である以外に、或ひは財貨交換の市場として、或ひは製造工業の好適地として、或ひは一地方若くは一國の政治上、軍事上の中心地として適當なる諸條件を備ふることを要するのである。此の如く多數の人口が一地に集中して都市を形成するに至るには經濟上及び政治上、軍事上の理由が存在するのであるが、封建時代の都市と近世的産業國時代の都市とは自ら其成立發達の經路に差違を存してをる。前者が政治上軍事上の要求を主とし、後者が經濟上の要求を主として成立發達せるものなることはいふまでもないことである。然るに米國其他の殖民地國並びに各國の諸殖民地の都市及び多くの貿易港を除く外、歐羅巴各國並びに我國に於ける現在の大都市は多くは其起源古く封建時代の都市の繼續發達せるものである。從つて是等の大都市は近世的産業の勃興と共に漸次に經濟的に重要の程度を增し、新に發展せる純然たる工業都市、貿易港と共に、皆各國國民經濟の樞軸地となり、世界經濟の一市場となるに至つたのである。加之ず近世文明國家の大都市は一國文化の源泉地であり且つ發現地である。是に於いて現代の大都市の使命の奈邊に存在するかは固より明瞭であつて、各都市をして最有效

に此使命を果さしむるために都市の各種機能の改善、理想的建設計畫を企圖することは單に其市民の永久的利益なるのみならず國家的の重要問題である。

四　我國に於ける都市改善の緊急的必要

茲に於て吾人は我國の都市殊に大都市が國民經濟の樞軸地として、又多數者の密集住居地として、果して適當なる状態に建設せられ經營せられてをるかを見ることを要する。抑も大都市は其經濟上の效力を發揮するために、又密集生活より生ずる不便、不利、不健康を除却するために種々の施設をなすことを要する。試みに之を分類して列擧すれば次の如きものである。

一、經濟的設備
　イ、生産的＝道路、軌道、河川、運河、築港、埠頭、倉庫等
　ロ、消費的＝市場、屠場、電燈、瓦斯等
二、健康上の設備
　イ、衞生的＝上水、下水、掃除、病院等
　ロ、保健的＝住居、公園、廣場、運動場、船遊場、水泳場等
三、保安的設備＝警察、感化、防火等
四、社會的設備＝公會堂、葬場、火葬場、墓地等
五、文化的設備
　イ、教育的＝幼稚園、學校、圖書館、博物館等
　ロ、藝術的＝美術館、奏樂堂等
六、社會政策的設備＝救貧、孤兒、養老、救療、宿泊、給食、職業紹介等
七、娛樂的設備＝劇場、寄席等

是等諸般の事項の内には都市本來の事業あり又國家的の事業もあるが、其總てに亘つて都市が直接、間接の經營若くは指導をなして之を完備せしむるためには巨額の費用と幾多の年月と、優秀なる理事者の能力と、自覺せる市民の努力と

政府の後援とを必要とすることは勿論である。歐米の諸都市は市民と市理事者と政府が相協力して都市の改善、整備を計畫して逐日其面目を改めて多くは近世的都市として充分の效果を發揮し且つ市民の安寧と幸福を保障し得る狀態に達してをる。我國に於ては從來國民の資力薄く、しかも國家的發展に急なりしため、地方の財政と事業は顧る遑はず、大小の都市は勿論一國の首府と雖も維新後五十年を經過して今尙ほ全く封建都市の舊態より脫することを得ず、僅に一部に於て近世的設備を見るのみにして、徒らに黃塵、泥濘、混雜、危險、災害、高價の裡に不便と、不愉快と、不安と不利とを慨嘆しておるのみである。明治四十三年の十一月某日倫敦に到着せる余は直ちに地下鐵道と自働車によつて瞬時にして日本大使館に運ばれたが、大正二年九月米神戸に歸着せる余は數臺の車を連ね遲々として三宮停車場に辿り着いた。そして時間と勞力の徒費若くは不經濟的使用より生ずる損失の重大なることを考へねばならなかつた。場末、橫町に至るまで「ペーブ」された歐羅巴の大都市の街路に慣れては雨後の東京の街に出づるに靴の上に更に「オバー、シユー」たるものを穿かねばならぬことが嫌である。萬丈の黃塵を吸入することは尙更嫌である。電車を田舍的交通機關として全く市內より排斥し地下鐵道を以つて市內交通機關とせる倫敦のことを思ひ出すと、電車の內外に多摩河原の礫の如くに吾々を積め込む東京市が怨めしくなる。年每に改善さるゝ伯林の新市街、殊に區劃整然として、爭ふて最新の設備を裝置せる郊外の住宅の著しき進化の有樣を考ふれば、東京大阪等の郊外住宅地の道路、建築が不規律、粗雜を極めてむしろ退化的傾向を有し、加之閑靜なる住宅地に工場の新設せらるゝ如き暴狀に驚かざるを得ぬ。更に首府東京に於いて較軍、蠅軍の襲擊に苦しまねばならぬことは勿論東京市中最健康地と稱せらるゝ余の住む靑山の高段地に於いてさへ每年夏の豪雨と共に大小の汚物が道路に氾濫浮泛するを見るに至つては遂に啞然たらざるを得ぬ。我國の大都市に於ける斯の如き狀態が果して避くることを得ざりし當然の歸結なりしや、又將來に於ける改善が可能なりや否やの問題は後に說

く所によつて自ら明瞭であると思ふが、我國の大都市を歐米の大都市と比肩せしめんとすることは無用であり、或ひは尙早であるかの如く考ふる人も一部にはあるようであるから、それは憂ふべき誤解であることを切言して置かねばならぬ。吾等とて勿論一躍して直ちにあらゆる點に於いて我國の都市を歐米都市の如くならしめよと主張するのではなく、現在に於いて既に重大なる缺陷を現せる我國大都市を此ままに放置するときは遂に如何とも收拾整理すべからざる狀態に陷ることを虞るゝが故に、此期に於いて先づ將來に對する根本的の計劃を定め、而して後、近世的都市として缺陷の最大なる方面より着々として改善の途を講ぜむことを欲するのである。此事たる尙早どころではなく或方面に於いては既に時期を失したる恨みがある位である。我等はむしろ都市改善促進論が益々諸方面に於いて勃興することを豫期するものである。

都市改善建設の實行を容易にする爲めには一般的根本法規の制定が必要であるが、外國に於いては英國の「ハウシング、エンド、タウンプランニング、アクト」及び「ビルディング、アクト」を初めとし獨逸、墺太利、瑞西、佛國、米國等各國家的立法若くは都市の條例を以つて是等の規定を設けてをる。我國に於いては明治二十一年初めて東京市區改正條例を公布し、翌二十二年に東京市區改正土地建物處分規則を公布せるのみであつて爾來約三十年間僅に東京市のみにつきて都市の近世化に關する準據法が存在せるに過ぎず、大正七年四月に至つて漸く東京市區改正條例の改正を見たると同時に之を大阪市及京都市に準用するの法律が制定せらるゝに至つたに過ぎない。然るに翌五月に於いて內務省に都市計畫課が新設せられ、別に都市計畫調査會が設けられて都市計畫に關する一般的根本的の方針を定めて都市の改善を促進するの擧に出で、今や正に都市計畫法案及び建築法案の二者が起草審議せらるゝの氣運に達したることは我國の都市改善の急務なることを信ずるものゝ均しく欣幸する所である。我等は一日も早く根本方針を規定する一般的の法規が制定

せられ、更に土地區劃整理に關する各種の法令の公布を見て、遂に我等の理想たる六大都市に關する[illegible]決定せられて、着々として實行の時期に入ることを待つありである。

幸に二大都市計畫に關する根本法及建築法規の制定を見るに至り、各都市に關する具體的の都市計畫が決定せられて實行せらるゝに至るまでには政治上、財政上並びに實行上種々の困難に遭着すべきことは固より豫期せねばならぬことである。しかしながら市民の熱心と、市理事者の勇氣と技倆と政府の後援とを以つてすれば我國の大都市をして近き將來に於いて近世的都市の面目を發揮せしむることは敢て難事ではないと信ずる。

五　都市計畫の要領と我國都市改善の主要問題

我國に於ける都市改善の必要は各都市によつて各々緩急の程度に差あれども大都市に於いて其の必要の度の大なることとは勿論である。我國の六大都市就中東京市及び大阪市に於いて最急迫の問題となつてをることは明である。しかし此等の大都市は其起原に於いて、又發達の經路に於いて各特徴を有し、或ひは政治軍事の中心地として、或ひは文化の淵叢地として、或ひは國內商業の中樞地として、或ひは國際商業港として、或ひは工業地として、若くは此二三の資格を併せ備へて現狀に發展し來つたものである。從つて是等各都市が其使命を果すために必要とする設備は自ら異らざるを得ない。而して是等の大都市は最近數十年の間に於いて徐々に其各自の必要とする幾多の近世的設備を成就し、今や其擴張改善の必要と根本的都市計畫決定の必要に迫られてをるのである。近世的都市の必要とする諸設備につきて普遍的の論議をなすことは此論文の目的ではない、故に以下都市計畫の要點並びに東京大阪等の最重要都市に於いて目下缺陷と感ずること最大なる設備のみについて余の考ふる所を述べ、且つ或程度まで、其の救濟手段に關する自己の意見を述べたいと思ふ。但議論實際問題に亘るときに多く東京市の實例を說くことは東京市が余の現住地であることと、近代文明

國の首府として頗大なる缺點を有してをることに基くものであつてまた已を得ざることである。

都市計畫の要領は地域の制限、公共的營造物の配置、道路系統、交通機關系統の計畫、建築制限等であつて、上下水道瓦斯、電燈の敷設、路面築造等の計畫が之に伴ふのである。先づ都市の内に工業地域商業地域、住宅地域無制限地域等の區劃をなすことは頗る肝要なることであつて、之によつて各地域は各自に適切なる設備をなし得るのみならず、住宅地に工場が介在して煤煙、音響、異臭、汚水、危險を以つて住民を脅かす如き憂ひをなからしむることを得る。東京の山手方面の地主、住民が、工場の新設を恐れて競々たる現狀を見れば地域制限の重要なる一端を察することが出來るのである。但舊都市に地域制限を理想的に行はむとすることは種々の困難が伴ふものなるを以つて過渡時代の緩和的方針を考慮せねばならぬことは當然である。次に公館、公園、娯樂場、市場、屠場、火葬場、墓地等の公共的營造物の配置を適當に定むることも必要なることである。場合によつては各種の官廳其他或種の公共的營造物を一定の場所に集中して所謂公館區域を形成せしめ、或ひは其都市の活動の中心機關となるべきもの例へば取引所、交換所、商業會議所、大銀行(若くは中央銀行)等を一定の場所に集めて之を市の中心點(シヴイツク、センター)となす如きことも適當である。例へば東京につきていへば各所に散在する中央官廳其他の主要官廳を既に或る方面に於いて計畫せらるゝ如く霞ケ關方面に集中し且つ新式の建物の中に包容することが出來るなれば官吏、使丁、來廳者の來往に要する時間の大ひに節約せらるゝは勿論種々の點に於いて官廳事務の敏活を來すべきことは鏡にかけて見るが如くである。幸にして多くの中央官廳は永久的建築物にあらずして、しかも既に改築の時期に達せるもの多きを以つて、此理想の實現は割合に容易であると思ふ。且つ移轉の結果として生ずる空地を東京市に於いて利用することが出來るならば其の效果は莫大なるものであつて所謂一擧兩得の良策といふべきである。廣く此種の市内土地利用策を講ずることは東京市にとりて特に頗る重大なる意味を

れするに至つて、一は都市として此問題を解決することが如何に東京市に於ける實際問題より、其の財政上重要[illegible]永遠に亘る根本的改善を施すこと能はず、東京市は愈々複雜化して、遂に近世的都市としての能力を失ふの日あるを認むるであらう。此點は余が此論文を草するに至りたる主要動機の一つであつて、更に後段に於いて特に大いに論じたいと思ふ。

次に道路系統は都市の動脈系統ともいふべく末梢に至るまで精緻なる組織を必要とし、其の敏活なる作用によつて始めて都市は其の能力を充分に發揮することを得るのである。此の如く道路系統を定むることは都市計畫上頗る重要なことであるが、新都市を建設するに當つては容易なる事柄であるに反して、舊都市の改善をなすに當つては巨額の費用を要して最も困難なる問題である。東京市は約三十年の日子と巨額の經費を費して漸く現在の如く數個の幹線系統を完成し得たに過ぎない。以つて新建設市街の道路系統を豫め確立することのいかに重要なるかゞ了解せらるゝであらう。

交通機關（道路を含まず）が道路と同意味に於いて住民の活動力を增加し、都市の經濟的能力と居住の便宜を增加せしむることはいふまでもなきことであるが、交通機關の系統と能力の優秀なることは數十萬若くは數百萬の都市住民のために平常時間の節約をなさしむる點に於いて大いなる意義を有するものである。此點に於いて東京市のことを考ふれば種々の事情により遺憾ながら理想的の交通系統を作り得ざる狀態にあつて現在の如き混亂の狀態に陷つてをるのである。是等の障害原因を探究して、出來得る程度の救濟手段を講ずることは市當局者のみならず、全市民が熱望する所に相違ない。其解決策につきては久しく諸方面に於いて研究せられ既に其發表せられたるものをも見るのであるが、余も亦東京市内土地整理問題及び住居問題と關聯して一個の私案を有してをる、しかしそれは別に項を改めて論ずることを適當と信ずる。

建築制限とは建築物をして火災、震災、其他の危險に對抗することを得せしめて、都市住民の生命及財産上の危險を減少せしめ、又衛生上の要求に合せしめて健康の維持を保障し、其外建築に際して土地の正當なる利用をなし、又市街の外觀の醜惡と不統一とを避けしめむがために建築學上種々の制限を設くるものである。是等の目的を達するためには火災、震災の危險多き區域、或ひは低濕の區域には特に建築上の制限を設け、又一般的に建築物の最高限度、最低限度を定め、空地の保留の程度を指定し、建築物の沿ふべき線に關する規定、建築物の構造設備に關する規定を設け、或ひは又特に危險なる目的に利用さるゝ建物其他特殊の建物を建築すべき地域及其建築構造等に關する制限を設くる等頗る詳密なる法規の存在を必要とするのである。歐羅巴の主要都市に於いては此種の建築に關する法規が古きは既に三十五年前より備はり、米國の諸都市は最近に及んで爭つて此種の規定をなし着々其效果を擧げてをるのである。我國に於いては、古來著名なる地震國として又火災名物國として多數の人命と巨億の富を燒盡せるに拘らず今日に至るまで此種の建築に關する法規の制定を見ざりしことはむしろ奇怪の事といふべく、幸にして目下都市計畫調査會に於いて審議中の建築法案が可決せらるゝに至らば此怠慢の譏りを免るゝことを得るであらう。

右の外**上下水道**、**電燈**、**瓦斯**等の普及完備を計畫することは市民の衛生及び日常生活の便宜の點より見て忽諸にすべからざることはいふまでもなきことである。東京市の如きは下水の不備特に甚しく雨水の氾濫、蚊軍の襲來、溝渠の異臭、不潔すべて不快、不衛生の種ならざるなく、從來財政上の不如意によつて斯の如き澁滯を來せることは已むを得ずとするも、これとて市民の自發的要求熾んにして且つ之に添ふ充分の覺悟あれば其速成は敢て難事ではないと思ふのである。

最後に**路面築造**のことは、殊に東京市の如く甚だ廣大且つ車馬、自働車の往來益々激しからむとする所に於いては頗る急務であるが、一時市內數個所に僅々數町づゝ見本的の路面築造がなされたるのみにて其後一向に進捗の模樣なく最近

に至つて漸く主要街路の路面や道の舗装費、隧道が現れんとする位で、眞に心細き次第である。市中二の都式費中に於ける四の内部会を賄はるの状況を見るは、實に首府の市民の恥となすべく、此點についに勃發し一路面や道を建設するのなどある。

以上都市計畫の要領と其重要を説き之に關聯して特に東京市につきて二三の主要問題に觸れて其解決の必要を論じたのであるが、それには勿論市の財政を顧慮せねばならぬ。此點につきては後段において別に論じたいと思ふ。是等の都市計畫の事業の結果として都市の能力の改善せらるゝは勿論市民の都市生活の幸福の増加すべきことは勿論である。しかしながら都市生活の改善につきては右の外にもなほ看過すべからざる問題が數多くある。其内最も重要なるものは最近に東京市大阪市等の大都市に於いて頻りに攻究さるゝ住宅問題並びに食料品日用品供給機關の問題等である。一般的に都市生活の不足と高價を救濟するの途を論ずることは固より刻下の急務であるが、今是等の點まで議論を進むることは徒に論述の範圍を廣からしむるものであるから、こゝには單に都市の改善に直接の關係を有する住宅問題の解決方法のみにつきて卑見を述べて見たい。

六　都市住宅問題解決の一案

住宅問題は建築家の立場からも、經濟的及社會政策的の立場からも種々論ずべき問題がある。田園都市、中流階級の住宅、勞働者階級の住宅、生活費と家賃の關係等何れも夫々の立場から研究の對象となり得る。しかし住宅問題につきて一般的に詳細なる研究をなすことは此論文の一項目としてはあまりに重大であり、且つ内容が豐富に過ぎる。よつて余は都市住宅問題の一般的論究を他の機會に讓り、こゝには單に住宅問題解決の實行方法の一として、住宅建築の經營的組織につきて一個の案を提出したいと思ふ。

元來、日本人は獨立家屋に住むことを好み、そして其家屋は多くは木造の粗末なものである。前の現象は日本が嚴格なる家族主義の國であることゝ、從來生活費の增加未だ歐米の如く甚しからず家庭を持つことが割合に容易であつたことゝに淵源すると解せられる。後の現象は日本人の性質として他の多くの事業に於ける如く一定の組織の下に協力して、永久的の事業をなすの思慮と忍耐とを缺けることに起因すると思はれる。兎に角、我國都市の所謂燐寸箱の如き小屋が何の統一もなく勝手に無雜作に立ち並びて、火に逢へば一溜まりもなく灰燼に歸し、又忽ちに譯も無く各自思ひ〳〵に建替へらるゝ有樣を、歐米都市の家並み揃ひたる堅牢にして大規模の家屋と比較するときは其相違が單に富の程度の相違より來るものと見ることは出來ぬのである。こゝに於いて吾人は我國の家屋建築の經濟的組織において大なる缺陷のあることを感ぜざるを得ぬ。あらゆる大資本を要する事業には多數者の資本を集合せしむる方法をとり、法人或ひは組合の組織を取らるゝが常である我國においても多くの營利的事業及公共事業は近來此形式を以つて行はれてをるのである。建築事業は一時に割合に大なる資本を要するものなる故外國では盛んに建築會社、建築組合が活動してをるのであるが、我國において建築に關して未だ此種の企業組織の發達せず都市住宅を微力なる個人の建設經營に放任したることとは都市建設上の無計畫、建築の法規上の不取締と相俟つて、我國の都市住宅をして逐年むしろ退化的傾向を現はさしめ、依然として粗雜、危險、不衛生、不便のものたらしむるに至つたものであると信ずる。數年來我國の大都會殊に大阪及び東京において、建物會社若くは土地建物會社の設立せられたるものあるも、其の多くは不動產の投機的賣買若くは賣買の周旋を目的とするに過ぎずして自ら地主家主として眞面目に永續的に住宅の建設經營に當るものは稀である。大都會に於ける不動產價格は逐年騰貴の傾向あるを以つて之が資本家の投機の目的物となることは又免れ難きことであつて、たとへ建物會社等の設立を見るも之に公共的の性質を帶びしむるにあらざれば、常に純然たる營利事業として市民の生

活の本質を没殺の目的物として居る為眞ならしむる弊害を避くることを得ないのであらう。こゝに於いて建築會社たゞは公共的建築會社、都市の直接經營、大企業家の自己の事業の關係者に對する直接住宅供給等の四種が考へられてをるが、余は一般的政策の都市住宅問題の解決方法として公共的建築會社に關する一案を提出せんとするのである。余のいふ**公共的建築會社**といふは市、資本家、一般市民の三方面より資本を集中して、特權を有する株式會社を設立し住宅、公益的設備の建設、管理及び或場合には其經營資金の貸付けをもなさしめ、且つ必要ある場合には都市計畫事業の包括的又は部分的請負をなさしめむとするのである。今説明の便宜上余の適當と考ふる此會社の事業綱領等を項目を分つて論じよう。

(一)目的

甲、住宅の建設經營
- イ、細民住宅
- ロ、中流住宅
  - 1. 獨身者のため
  - 2. 家庭を有する者のため

乙、公益的設備の建設管理並に特に必要ある場合には其經營
= 食料品、日用品市場、屠場、簡易食堂、中流獨身者のためにする食堂、浴場等

丙、公に指定されたる都市計畫事業の包括的又は部分的請負

丁、乙及丙に屬する建設事業に對する資金の貸付

(二)資本

甲、株式を發行し市及び資本家をして之を引受けしむること、但市は土地を以つて出資となすことを得。

乙、小額債券を發行し中産以下の階級より零細の資金を集中すること

(三)事業

甲、割増付債券の發行を許可すること

乙、官有地及市有地を無料又は低料にて使用せしむること。但、使用許可の時より五年間を無料とし、次の五年間は附近の一般借地料の六割を徴收し、其後は八割を徴收す

丙、家屋税を免除すること。但建設家屋登記後三年間

丁、會社設立後七年間配當率年五分に達するまで政府より補給金を與ふること

（四）干渉及監督

甲、賃貸料の制定、變更は監督官廳の許可を要す

乙、營業用不動産の處分をなす場合には監督官廳の許可を要す

丙、利益配當の方法は　普通株に對して政府補助金を受けずして先づ年五分の割合にて配當をなし得たる後、なほ利益金ある場合においてのみ市の特株に對して年五分の割合に達するまでの配當をなし、なほ餘剰あるときは普通株に對してのみ貸借對照表作成當時の日本銀行利子歩合を超ゆること年一分の割合に達するまでの配當をなすことを得

丁、剩餘金の積立を以て増資することを許さず

（五）設立地　現住人口十萬以上の都市に各一個

以上は余の特殊建築會社案の梗概であるが、その趣旨については尚ほ幾分の説明を要することゝ思ふ。先づ此會社の目的事業につきていへば主として間接的に都市生活の改善と都市の改善に直接の關係あるものゝみを選擇したものであつて、都市自身の財力と能力の及ばざる範圍につきて、代つて之を完成せしめ或ひは助力を與へしめむとしたのである。又

是等の事業に資金の貸付をなさしむることは市町村ミユニシパル、バンクの一業務を行はしめむとしたのである。其資金は此會社の發行する債券により一般吸收せる資金の一部に據るのである。

次に資本を市、資本家、一般市民の三面より吸收せむとしたることは大いに意味のあることであつて、第一に市をして此會社の株主たらしむる理由は此會社の事業が都市生活の改善を目的とすることにある以上は、市は單に利權によつて之を保護するのみならず自ら出資して此會社の成立を容易ならしめ、同時に株主として、常に此會社と利害關係を保持して發言權によつて此會社が業務執行上公益に反するの方向に進むことを掣肘し得るの利益がある。殊に市が出資として土地を提供せる場合には永久的に會社に對して有利なる基礎を與ふることゝなるのである。第二に資本家をして出資せしむる理由は彼等をして薄利を以つて公益的事業の遂行に助力せしめむとするの趣旨である。第三に小額債券を發行して一般の市民其他より零細の資金を吸收せむとしたることは最も重要なる意義のあることである。元來我國は、既に此論文の冒頭に於いて論ぜし如く、從來國家的發展と產業の振興に全力を注ぎて、國民の經濟生活及び社會生活の改善に意を用ふること少きに過ぎたのである。其結果として、後節に於いて述ぶる如く中央財政が常に地方財政を壓迫せるのみならず、中央財政は產業資金と共に相率ひて全國のあらゆる零細なる資金を吸收し去つてをるのである。彼の最零細の資金の集合なる郵便貯金の如きも大部分中央公債及勸業債券等にのみ投資運用されてをるのである。斯の如きは最不合理なる利用方法であつて此種の最零細の資金はむしろ主として公益的若くは社會的事業に放資利用せしめて、直接に其資金を提供せる中以下の階級の者の利益を圖るべき筈のものである。是故に今後は出來得る限り此種の下層方面より出でたる零細の資金は力めて此建築會社債券の如き公益的社會的事業の方面に投資運用せしむる事が肝要である。其實行方法として例へば郵便貯金規則を改正して郵便貯金により購入保管すべき證券の種類及び預入し得る證券の種類の

内に公債、勸業債券同様に此建築會社債券を加へて郵便局をして此建築債券の買入れ保管をなさしむる如きは建築債券の普及上、正當であり且つ頗る實效あることであると信ずる。此外政府及日本銀行等があらゆる點に於いて建築債券に對して勸業債券と同等の取扱ひを與ふることは正當であると信ずる。從來人材皆中央政府に集り、民間に人物尠く、自主的に公共事業、社會事業を計畫實行するの力を有せざりしことは我國に於いて此種の事業の振はざりし一因ならむも、あらゆる零細の資金に至るまで悉く中央政府と産業界に吸收し去られたることが他の強き原因となつてをることは疑ひを納れぬ所である。余は建築債券の普及を希望すると共に將來は、種々の場合に於いて資金の性質と運用の方法が相應せる合理的の形式を取るに至らんことを期待するものである。

次に此建築會社に與ふべき特權は種々考へ得られるのであるが、先づ既に債券を發行せしむる以上は之を割増付となすことを許すことは募集の技術上必要なことである。これは日本勸業銀行の債券に對抗せしむる上に於いて特に必要なることである。余は此種の債券を割増付きを以つて發行することによつて公衆の射倖心が弊害を生ぜしむる程度に達するとは考へない。但割増の方法によらずとも公衆の注意と、投資心を喚起せしめ得ること充分なるに至りたるときは勿論之を廢すべきである。なほ債券發行の最高限度は日本勸業銀行、日本興業銀行の場合の如く拂込資本金の十倍迄農行銀行の如く五倍迄許可することは或ひは多きに過ぎるかも知れぬ。勸業債券資金も多くは長期貸付に固定するものであるが建築債券資金は貸付金に充つるもの以外は、むしろ大部分が會社所有の不動産として永久的に固定するものなるを以つて債券發行額は拂込資本金の二倍若くは三倍以内となし置くにあらざれば、いかに債券の償還期限長くとも賃貸料收入の漸増のみを以つて償還をなすには大なる困難を感ぜしむる虞れがある。加之此程度の債券を發行したるのみにても、若し債券資金の固定の程度甚しき場合にはやはり債券償還に困難を感ずることあるべきを以つて、なほ特別の方法を

ますることも必要なるべく、即ち[illegible]一定の時期において一定の金額を[illegible]て[illegible]適當なる[illegible]上下は券に転移することを得せしめ、或ひは又債券所有者をして其所有債券を以つて一定の住宅を購入することを得せしむるの途を開くことも適當である。或ひは賃借人中特に其住宅を自己の所有となさんと欲するものをして債券を所有せしむることに勉むれば右の賣買は双方の利益において最容易に行はれ得ること丶信ずる。債券發行の妙味はむしろ此間に存するのであつて、之を以つて薄資階級に對して分割拂と同一の結果に終るべき方法によつて近世式に整頓せる住宅を獲得せしむるの途を開くことはむしろ會社の目的に協ふものといふべきである。此方法の圓滑に行はるること明となれば債券發行限度を更に增加せしむるも可である。此外一定額以上の債券所有者には特に住宅賃借の優先權を與へ、且つ低少なる程度の賃貸料割引を行ふも可であると思ふ。株主に對しては政府の補給期限經過後に於いてのみ住宅賃借權を與ふるも可である。次に官有地、市有地を一定期間無料又は低廉なる料金にて使用せしむる理由及家屋稅を一定期間免除する理由は特に說明する必要はないと思ふ。

次に此會社は種々の特權を有するものなる故賃貸料金制定、不動產處分、利益配當方法等につきて政府が上記の程度の監督をなすことは當然であると思ふ。なほ右の外會社の理事及技師の任命に關し政府及市に一定の權限を與へることも必要であらう。

以上述たる如き余の建築會社案は其可否につきてなほ研究の餘地はあり得ると思ふが、此の如き方法を以つて大資本と有能なる理事者、技術家を集めて大企模に此種の事業に着手することは單に住宅問題の解決に止まらず、廣く社會政策的事業及都市計畫事業の遂行を容易ならしむるものなることを信ずるのである。

都市住宅の建築が右の如き方法によつて近世式に又低廉に供給さるゝことを得れば市民の幸福此上もないことである

が、こゝに忘るべからざることは廣大なる市有地の存在することが此案の實行を容易ならしむる一の重要なる條件であるといふ點である。なほ右の幸福の價値を減少せしめざるためには住宅地域の指定と交通機關の完備とが大切な條件となるのである。

七 土地利用論(東京市土地整理論)

あらゆる人と、あらゆる自然が其全力において最有效に利用せらるゝことは、一の國民總體の利益であり、又人類全體の利益である。

此原理に對しては何人と雖も異存はあるまい。人材の用ひられざるは國の亂るゝ基である、自然の利用せられざるは民の貧しき因である。自然の中殊に主要なる土地が充分に利用せられざることは其國民の損失であり又怠慢である。古今東西土地を貴ばざる者なく、沃土を慕ふて流轉し、曠野を獲んとして、流血し、寸地を隣人と爭ふの態である。一頃の土地を有すれば俗塵を捨てゝ、花や紅葉の間に親戚の情話を樂むことも出來る。地代を懷にしてモナコに遠征することも出來る。國を建つるもの、家を立つるもの、皆土地を望むで止まざるは無理もないことである。我國は古來豐葦原瑞穗の國と稱して農を貴んで一段と土地を重んずるの風がある。此山又山の國の谷間に數千年來おとなしく住むでをつては勢ひ土地をたいせつにせざるを得ぬのである。されば猫額の土地と雖も耕されざるはなく、汽車の窓より望む遙かの山の上にもアムフイセーターのように畦道が見えてをる。それでもなほマルサスの人口論が恐ろしく大勇斷を以つて耕地整理を行ふに至つたのである。我國の耕作に適する土地は此様に重箱の隅をホジルように現在の人力の及ぶ限り殆ど遺憾なく利用されてをるのである。それでさへ供給が不足勝ちであつて最近の如く需要の激増せる場合には米價暴騰して遂に米騒動さへ起るのである。こゝに他方我國の都市に於ける土地利用の狀況如何を見るに、右と全く異つた狀態にあるように思はれる。

都市の地面はいふまでもなく其上の空中も建築に利用されないのであるが、我國に於てはこれに反し、[illegible]を見たる人のすべて氣付く如く、立體的には充分に利用されて居ないようである。我國が地震國であり又家屋は木造であるといふ點よりして從來高層の建物を作ることが許されず又經濟的に不可能であつたとしても、既に西洋式の建築も出來、又建築學も發達してをる今日に於いては、大建築を行ふに適當なる企業組織を用ひて今少しく土地を上方に利用すべく、人口一を以つて建築を行ふことが土地政策の上より見て其都市の永遠の利益である。就中我國の首府東京市の如きは、人口二百數十萬を算する世界的の大都市であるに拘らず立體的は勿論平面的にも土地利用の緩慢最甚しいものである。以下少しく東京市の實際につきて市内土地利用の狀況の一端を擧け、之に對する余の意見を披瀝したいと思ふ。

試みに最近の東京市統計年表を取りて見るに市内土地の總坪數は約二千三百三十萬坪であつて、其内官有地八百五十萬坪、市有地百二十六萬坪、私有地千三百五十四萬坪といふ割合になつてをる。即ち總面積に對し官有地三六・五パーセント、市有地五・四パーセント、私有地五八・一パーセントの割合である。全市面積に對し市有地面積は殆んどいふに足らざるに反し官有地は三分の一以上を占めてをる有樣である。而して私有地一坪半につき一坪の官有地が存在する割合となつてをる。右の八百五十萬坪の官有地の種別は皇宮地、離宮地、皇族邸地合せて百三萬坪、社寺地約二十二萬坪、官用地二百七十三萬坪、公園地四十八萬坪、道路、堤塘、河川溝渠等合せて三百五十一萬坪、雜地三十四萬坪等である。官用地中最大部分を占むるものは陸軍省であつて約百萬坪を所有し、鐵道院の四十三萬坪、文部省の三十四萬坪、大藏省の二十萬坪、海軍省の十二萬坪等が之に次ぐものである。而して陸軍省用地は牛込區に於ける三十萬坪、小石川區に於ける二十萬坪、麴町區に於ける十九萬坪、赤坂區に於ける十萬坪等が其主なるものである。今是等の官用地の總計面積を私有地の總計と比較するときは一對五の割合になつてをる。換言すれば私有地五坪につき一坪の官用地が存在することゝなる

のである。斯の如く見來れば私有地に對して官有地、官用地の割合が頗る大なるように思はれる。東京市が首府であつて皇城の所在地、中央政府の所在地である以上は或程度までは大なる官有地の存在することは當然であるが、二百三十萬の市民の大部分の者の住居並に仕事の場所に對して、僅に數萬人の中央官廳の官吏が仕事のみをなす場所が前者の五分の一の面積を占むることはいかにも廣きに過ぐるように思はれる。勿論各官廳とも、それ〴〵土地を充分に公用に供し、又鐵道院の如く事業の性質上土地を要すること多きものもあるであらうが、一般的にいへば官廳用地節約の餘地が充分あるように思はれる。就中市内に於ける陸軍省用地の如きは前記の如く特に頗る尨大なるものであつて、之を合すれば四谷區の二倍に近く又日本橋區よりも遙かに大きいようである。所謂軍閥の威勢が土地にも張られてあるように見える。陸軍省のいかなる方面の用地に幾何の餘剰ありやは余の知る限りでないが、余の眼に觸るゝ狹き範圍内に於いても市内に公用に供せられざる土地があると思ふ。且つ市内に於ける陸軍省所管の營造物の内には市内に置くことを要せず若くはむしろ市内に置かざるを可とするものが多々あるようである。若し陸軍省が大英斷を以つて其市内に於ける用地を整理して數十萬坪を東京市に下附するならば市民の慶福之に過ぎず、余のいふ公共的建築會社の如きも其成立が容易になることとであると信ずる。

次に余が最熱心に主張せむとする所は丸の内に於ける官有地の大部分を東京市に下附することである。詳言すれば大手町一丁目及び二丁目、元衞町、錢瓶町、道三町、永樂町一丁目及二丁目、に亘る範圍の官有地であつて、其總坪數は十三萬六千餘坪である。余の之を主張する理由は、東京驛正面に於ける廣大なる三菱所有の地所は大正時代に於ける近世的商業中心地となるべく今正に盛んに發展せむとする有樣なるを以つて、東京市をして之に隣接せる土地を獲得せしめて其上に三菱地所に於けると同程度の近世的商業街を建設せしめて、之より生ずる貸地料を以つて市の一大永久的財

あらうとするのは是等の土地の大部分には現在大藏、内務、文部、司法、會計檢査院、警視廳、印刷局、官舍等が立ち並んで居るからであるが是等は殆すべて永久的建築物でなく殊に其多くは改築の時期に迫つて居るのであるから之を霞ヶ關方面の公館區域及び其他の適宜の場所に移すことは割合容易であると思ふ。斯の如くして竹平町の一帶を中以上の住宅地域とし、其他を商業地域となし、市をして一定の條件を協定して前述の公共的建築會社にあらざる別の建築會社の設立を助け、之をして此區域に於ける家屋建築、經營の任に當らしめむとするのである。若し此種の理想にして實現されむか、此地域と三菱地所と相合して東京の中心に一大理想的の近世的商業街を現出し、兩地合して約三十萬人の人を收容し得べく、東京市は當分の間、市の中心に於いて商業地域の不足を覺ふるの虞がないと信ずる。

要するに東京市内殊に中心に近き點に於いて官用地其他廣漠に過ぐる土地を占むる者あるを以つて、是等の使用を保護する市の支出額過當に巨額に上り且つ右は多く市税を負擔せざるものなるを以つて、上下水道、其他の諸施設に對する市の支出額過當に巨額に上り且つ右は多く市税を負擔せざるものなるを以つて、是等の使用を保護する市民の損失少からず。殊に近來東京市に人口の集中し來ると共に市内に住居を求むることを得ざるものは皆郊外に其居を求むることとなり、從つて將來東京市は眞内部殊に中心の一部さへ充分に利用せられざる内に益々不必要に外部に發展することとなり、從つて將來東京市は之に對して上、下水道其他の諸施設をなさゞるべからず、しかも斯の如く東京市が散漫なる膨脹をなすに當つて一々之に文明的設備を加へざるを得ざることとなれば、東京市は不當に巨額の土木費のために常に苦まざるべからず。市民も亦遂に之に堪え得ざるに至るであらう。斯の如き結果の生ずることを慮るゝを以つて余は東京市を外部に發展せしむるに先立ちて、内部の土地利用策を講じてこゝに適要の住居と事務所と人口とを吸收せしめよと主張するのである。

斯の如くして市の内部の整理をなす外、市は市の郊外に於いて豫め地域を限定して該住宅地に適する土地を獲得する

ことに他公共的建築物の如きもの、又は市直營の住宅建築を容易ならしむるの準備をなして置くことが肝要である。市が市内のみならず郊外に於いて多くの地所を所有することは其財政上の基礎を鞏固ならしむるのみならず、其公共的施設をなすに當り種々の便宜を與ふるものである。此意味に於いて獨逸の諸都市伯林、ミュンヘン、ライプチッヒ、ストラスブルヒ、ハノーフェル其他若何れも市の内外に廣大なる市有地を有し、伯林の如きは市内の市有地は少けれども郊外には市の面積の約二倍半に當る廣大なる市有地を有してをるのである。近者東京市會に於いて芝浦埋立地の處分を議決したることは、一時の財政上の遣繰りのために永久的の好財源を失ひ且つ將來の都市計畫の事業を困難ならしむる虞があると思ふ。彼の地こそは何事か東京市の都市計畫の最初の實行を試むべき試驗場であつたと考へる。

以上東京市の土地に關する政策の一端を述べたのであるが、右之と關聯して豫め東京市及び其近郊に亘りて住宅地域・商業地域、工業地域其他を指定して置くことが必要であつて、之あつて初めて各人は其欲する所に定住することを得べく、交通機關も亦是等の地方を有効に連絡すべく豫め理想的系統を考案することを得るのである。余は東京市の地域制限につきては簡單に言へば現在東京市の發展せる狀態と等しく所謂山手方面を住宅地域とし、隅田川左岸を工業地域とするを以つて適當と考へてをる。住宅地域には健康地を選び工場地には運輸荷積の便ありて且つ市の風上に當らざる所を選ぶべきは言ふまでもなきことである。此點に於いて芝浦埋立地を工場地とすることは東京市の中心に煤煙を送るの虞あるを以つて之を避けねばならぬと考へる。終に東京市内各地域の現狀と將來の發展を豫想して、いかなる交通機關系統を計畫すべきかにつきて私見を述べたいと思ふ。

八　東京市の地下鐵道系統

交通機關系統の問題はむしろ余の論ずべき適當の範圍にあらずと考へ、且つ此論文のあまりに長きに亘ることを恐る

るが故に、ここに之を詳論することは他日に讓り、以下高速度鐵道問題のみにつきて卑見を述ぶることにしたいと思ふ。

抑も東京市の電車の名状すべからざる混雑を來す原因は次の諸點にあると思ふ。

一、東京市が散漫に膨脹せる結果徒歩にて用達をなし得べき範圍少く、且つ電車の乘客は多く割合に長距離、長時間乘車することを要すること。

二、交通機關が放射路線を選む場合に交叉點となるべき市の地理上の中心點に廣大なる宮城並びに其外廓の存在するために理想的の交通系統を作り得ざること。

三、近時東京市へ人口集中の傾向著しく其ため市内に住居を見出すこと能はざる者、及び市内の生活の高價を避けむとする者等が争つて居を郊外に定めて郊外居住者の激増を來し、是等の人が潮の如く市内に往來し、且多くは長距離を乘車すること。

右の三點に現はれたる困難を救濟するために長距離乘客を速に運び去ることと、宮城迂廻を避くることとの二要件を可能ならしめねばならぬ。それは高速度地下鐵道を以つてするの外解決の途がないのである。而して成るべく小數の線路を以つて最も有效なる效果を擧げ且東京市の財政上速成可能なりと信ずる程度にて余の考案せる東京市高速度地下鐵道系統は次の如きものである。

甲線、(周回線)＝淺草、上野、本郷三丁目、水道橋、九段、四谷見付、信濃町、青山三丁目、六本木、飯倉、御成門、新橋停車場、歌舞伎座、新富座、茅場町、水天宮、兩國、厩橋、淺草。

乙線、(高田線)＝高田馬場西方より、山手高田馬場驛、新宿の北手、鹽町、四谷見附、麹町五番町英國大使館北手、吹上御苑の北端、西本丸下、大手町、東京停車場、日本橋南、茅場町。

丙線、(澁谷線)＝道玄坂南西より、山手澁谷驛、青山一丁目　赤坂見附、新帝國議會横、霞ケ關、日比谷公園東北隅、東京停車場、日本橋南、茅場町。

丁線、(王子線)＝王子停車場、染井墓地、山手巣鴨停車場、白山春日町、水道橋、一ツ橋、大手町、東京停車場、日本橋南、茅場町。

此外後日には目白、早稲田、江戸川、水道橋間を聯絡するも可である。

以上四線總延長約三十哩、工事費一哩四百萬圓乃至五百萬圓と見て(或技師に聞合せたものである、其技師は技術上も工事可能なりと言つてをつた)總工事費一億二千萬圓乃至一億五千萬圓である。此全部を市營事業として行ふとしても右の全額だけならば目下東京市債を募集することは可能であると考へ、又公債費の市税負擔も可能であると信ずる。其說明は後段財政を論ずるときに讓る。

扨て簡單に右の四線の意味を說けば、甲線は所謂人の出盛場を一週するのであつて、乙、丙、丁の三線は郊外住宅地と市内の執務地とを連結するものである。而して此乙、丙、丁三線の山手線外方の終點附近に大企模の新住宅地域を設定せむとするのである。將來東京驛正面の新開商業地域が充分に發展し、殊に余の理想とする前述の大手町附近一帶の官廳地域が商業地域に變じて之に加はるに至らば、右の乙、丙、丁三線が東京驛前に集中するもなほ足らざるを憾ゆるに至るかも計られない。

右の外余はなほ甲武線を速に延長して兩國橋に至らしめて江東の市民を迅速に市の中央に散ずるの途を開き、又鐵道院高架線を速かに萬世橋より上野驛まで聯絡せしめて北部山手の市民が迅速に市の中央に往來し得るの途を開くことを肝要と信ずる。然らざれば山手線は佛を作つて魂を入れざるに等しいと考へる。すべて是等の點は大正七年十月都市研

究[illegible]の席上にて意見を述べて、それが十一月[illegible]に[illegible]、[illegible]池下流の運[illegible]、山手線の連絡、甲武線の延長を以つて最急務とすることを主張し一此篇の筆をとゞめる。

九　都市改善の財源

ここに遂に最後の問題にたどり着いた。あらゆる都市改善の事業はすべて皆財源と睨合ひの姿である。いかなる經濟的計畫と雖も財源の點に於いて行き詰るのである。就中既に述べたる如く常に中央財政の壓迫を蒙る我國の地方財政にあつては一層困難を感ぜざるを得ぬのである。從つて此際中央政府はあらゆる資金を自ら吸收するの態度を改めて、地方公債及建築債券の如きものにも資金の向くことを助け、税源に於いても性質上當然地方税たるべき筈のものは之を地方に與へ、又殆文明國の都市の面目を備へざる迄に設備の後れたる我國都市の事業を促成するの意味を以つて適當なる地方特別税の賦課につきては、あまりに之を躊躇せざることを至當と信ずるのである。

此財源問題は頗る愼重に研究論議するの必要があるのであり、余も其考へでゐたのであるが、余は今既に時を持たざる故、簡單に都市改善事業の税源として最適當なるものを掲げ、別に東京市につきて増税負擔の可能及び公債募集の可能とを説き、以つて東京市に於ける都市改善事業の速成の可能にしてむしろ此際之を遂行することが市民の責任なることを述べて此あまりに長かりし論文を終りたいと思ふ。

先づ都市改善事業の税源としては土地に關する租税にして地方的性質並びに社會政策的性質を備ふるものを以つて最適當とするのである。第一に何人も此種の税として異論を挾まざるものは地價増加税である。第二は庭園税であるが、之は市内の土地の都市的利用を促進する上に於いても最よい税である。其他都市改良事業によつて特別の利益を得たるものに對して所謂ベターメント、タクスとして特別の負擔若くは改良税といふべきものを課することが正當である。或ひ

は又娯樂税アミユズメント、タクスを課するもよい。之は獨逸では多くは救濟事業の方に用ひられるのであるが、娯樂をなす際に自己の住む都市の改善事業に對し僅少の負擔をなさしむることも又理なきことではない。しかし是等の税額は左程多きに上らないものであると考へらるゝ故に、余は此際擔税力ある戰時利得税に對して附加税を課することを適當と考へるのであるが、惜哉本税の方が間もなく廢されるので長蛇を逸するの感がある。余の理想としては國税戰時利得税の徴收を三年間延長し同時に國税と同率の附加税を課したいのである。兎に角東京市の各設備の缺點今日の如く甚しきに至りたる際に於いては、余は市民が是等の新税の徴收を嫌はざるのみならず喜んで其成立を歡迎せむことを期待するのである。而しここに注意すべきことは東京市民は日本の他の大都市の市民に比較して驚くべき市税を負擔してをることである。都市税平均一戸當り横濱十九圓、京都十四圓、神戸十三圓七十錢、名古屋十三圓四十錢、大阪七圓七十錢、東京五圓といふ數字である。更に之を歐米の大都市の市税に比すれば倫敦六磅十志、紐育二十七弗三十仙、巴里五十二法、伯林三十八馬克(取急ぎたるため紐育は一九一二年其他は皆六七年前の數字を得たるのみ)である。即ち東京の市税は急に之を倍額となすとも増税目の種類さへ適當に選擇すれば現今の如き擔税力の激増せる時には敢へて一般市民の大なる負擔とはならぬと考へるのである。詳細の議論は他日を期することゝする。次に一般金融市場の狀況を見るに東京市の如きは其組合銀行の總貸金高が戰爭前には三億圓代なりしものが今や十七億數千萬圓に激増してをる。其大部分は内國債外國債を引受け貸付、割引に出てをるのであるが、此際二億圓位東京市債を消化することは困難でないと考へる、況んやそれは一時に募集されるものでもない。政府は既に來年度に於いて六億圓の募債を計畫して居るようである。東京市も亦其仲間入りをすることは正當であり、且絶好の時期である。東京市募債について市理事者と政府の決心を促し増税について市民の覺悟を促すものである。(完)

文明の回顧と人生の新展望

文學博士　姉崎正治

歴史家は「うしろ向きの豫言者」だといふが、獨り歴史家のみならず、一般に我々は、今まで餘りに強くうしろを顧みるに傾いた。人間は二脚の動物として直立する樣になり、腦髓を身體の上に戴き自在に四方を展望する自由を有しながら、四脚獸の昔を固守して、餘りに脚下に氣を取られすぎた。現在の紛々たる人生に氣を呑まれるに加へて、過去の來歴に拘泥し、爲に回顧と現實泥着とから割り出す將來觀が、展望のない、理想と意氣とに乏しい、濁りの多いものになるのは、自然の結果である。理想家といふ名が空想家と同一視せられ、世に豫言的熱情がなくなつたのは、此の爲である。我々は何故に理想を力にして、新展望に向つて前進し得ないのか。

回顧すれば保守的になり、何事をも過去で律し、現實に拘泥すれば、脚下に氣をとられて展望を缺く。新見地に立ち、理想の力で新天地を開拓する爲には、場合によつては、此の回顧と執着とを打破する必要がある。十八世紀の末に出た政治的革命の平等思想と、それに續いた産業革命の結果と、此の二つで人類は一つ新眼界を開き新生活に入りながら、尚ほ過去を回顧し、現實に泥着し、其の紛々の間に展轉反側して、終に所謂る生存競爭の大破裂を來した。此が十九世紀文明の結末であつた。而して此の大爆發の中に、人間は現在文明の缺陷を痛切に感ずる（必しも其の處在をつき留めないにしても）と共に、又自らの天性と人生の眞義とに思ひを沈め、其の中から人生の新展望を開かうと望み且つ努力しつつある。

勿論人間は、現在に處するに、過去と絶縁する事は困難であり、將來を展望するには、現在を全然離れるといふ事は出來ない。而かも深刻の經驗、非常の轉機に際しては、今までの生活や思想から百尺竿頭更に一歩を轉じ進めて、新天地を開拓する明と勇とを得るものである。一個人にしても、青春の危機に際して大煩悶の後、大死一番して新活路を開き、回心の實を擧げるが如く、人類の文明も同樣の大死復活に依つて新展望を開

く。世界大戰が果して、人類の大死一番となるか、人類文明の囘心が果して、新生命を開展するか。我々は、全世界と共に、此の大試練に逢着しつつあるではないか。

＊　＊　＊　＊

此の大轉機の意義を尋ねる爲に、先づ見易い事實の方から出發して、大戰の當初に於ける兩大關、ドイツとイギリスの態度に關して觀察して見やう。

今回の大戰を以て此の兩國の覇權爭だとする見解は、全然眞理でなくとも、少くとも開戰の最近因由としては事實の眞相に當つて居る。即ち詳しく述べるまでもなく、英國は、二百年來世界中に獲得し來つた領土と利權とを固守主張する側に立ち、ドイツは五十年來の新興國として之に挑戰したのである。そこで此の覇權爭の裏に、兩國民の如何なる心理的態度が潜んで居るか、又大戰の進行並に結末と共に此の心理狀態が如何なる變遷を經たか。此等の問題を進めて來れば、戰爭に伴つて現はれた人類思想の開展と共に、將來の新展望に對する一道の光明を得ると思はれる。

ドイツ人の精神的遺傳には、我々日本人の想ひも及ばぬ恐怖心と猜疑心とが根を占めて居る。即ち約千年前までは、四方をあばれ廻はつた人種が、其後中世紀以來、大陸の眞中に國して、四方の外敵に侵され、内には分裂爭鬪の苦い經驗を嘗めた國民として、郷黨同志の團結心と比例して、強く郷黨外の異人を恐れ且つ憎む事は、第二の天性となつて今日に及んで居る。特にプロシヤ人は、此點で最も深い排外精神を養ひ來つて、外人即仇敵といふ考で固めつつ、自らの維持發展を計つて來た人民である。例へば、プロシヤ人にとつては、ロシヤ人は半アジア民族（アジアといふ事は必ず匈奴の獰猛を聯想する）であつて、ロシヤ兵といへば食人鬼の群集（Horde 此の一語に深い背景がある）だとし東プロシヤなどでは、今に小供をおどかすに、ロシヤ兵が來るといふ言葉を用ひるのである。其上、西の方では、ルイ十四世の侵略を被り、ナポレオンに殆ど全國を蹂躙せられた記憶遺恨で、フランスといへば文明の道具立を具へた仇敵といふ念を絶ち得ない。されば、今回戰爭の破裂した時、ドイツの一學者が、公言して、「ドイツの文化は特有だ、外國人は之を理會し得ない、理會しないから皆敵だ」といつたのは、此の遺傳から出た心理狀態を表白したもので、全國民皆多く此の心理に染まつて居る。されば、三十年前にロシヤとフランスとの同盟が不思議に（當時の感にそうであつた）成り立つたのは、種々他の原因事情はあつたにしても、云はば、ドイツの恐怖猜疑が之を生み出した、又た其の成立を激發したといふ面白い事實であ

然るに、此の民族精神が昂じて慢心傲慢に進んだのが最近五十年來、特に最終カイゼルの治世に於ける著しい現象である。即ちフランスと交へた十年の間に帝國の統一を成就し、三國同盟で大陸に於ける地歩を固め得たとの自信に加へて、學術工業の進歩、教育上の國民訓練、軍備の斷えざる擴張、此等に依つて、自信が頻に加はり、自負から慢心にまで進んだ事、此等には國民的成功として誠に驚嘆すべきものがある。此の進取の氣象、訓練鍛錬の能力等については、日本では遺憾なく嘆美を極めて居たのであるから、今更に之を述べる要はない。然るに此の自信自負の奥には、どうしても千年來の遺傳がぬけないで、他國、特に英國に對する畏怖は嫉妬となり、猜疑は輕蔑に轉じ、自ら頼む事は必然他を輕蔑する事となり、終には他を倒すに非んば自ら立つ能はずといふ心理狀態に陷つた。此にも外部四圍の事情、已むを得ないといふ客觀的事實もあるが、而かも其の主觀的心情が、一層此の心理狀態を煽り立て、自ら好むで衝突を激發して、大戰をも敢てするに至つたのである。多くの觀察者、評論家が一致する如く、こゝ數年乃至十數年の平和政策で成し得た筈の事をも、計畫成熟（自分の打算のみならず、他から見ても）の軍事行動で、一擧にして之を掴み取らうとあせつたの

註 西部戰線に於けるドイツ軍隊の中には[illegible]多く、此の如き大勢の下に於て、好戰的國民主義の行動者であつたものは、其の無反省な好戰的軍國主義の所産には、民族の[illegible]と自負慢心との結合が[illegible]混合が精神を支配して居たのである。即ちも〃開戰の當初に於つて國民全體が開戰に熱中したのは、一方軍備充實の自覺から出た事ではあるが、他方東方境上ロシヤの動員が全國民の心を震かし震駭し、而して西方境上フランス軍の小部隊が國境に闖入したとの浮説が人心を動かして、開戰の理由（或は口實）が十分だと考へしめた爲である。Russische Horden（ロシヤの群兵）Halbasiatische Barbaren（半アジア的蠻人）などいふ言句が、其頃のあらゆる言説に現はれて居る中には、其の精神の興奮狀態を見るに足る。又「灰色の自動車」がフランスからロシヤへ金を運ぶ爲にドイツ國内を通過するといふ浮説が全國に恐慌を來たし、自國の自動車に向つて發砲するに至つた事、又外國人を見れば、之を毆打してかゝつた事など、其の妄想の恐慌を見るべしである。此の如きは俯仰天地に愧ぢない義務を起す者の精神にはあるべからざる心狀態であつて、積極的には現在の自負慢心と共に、消極的には遺傳の畏怖猜疑とが相からまつて現はれたに外ならぬ。（外國に對する探偵と陰謀も亦同じ心理の産物である）。

ドイツ軍がベルジクや北フランスの占領地で行つた狂暴殘虐の行爲は云ふまでもなく（此に一々之を述べる要のない程の事實）、交戰國が段々に加はるに從つて、一々其に對する狂熱的憎惡心を激發した事、終には殆んど總ての中立國、特にアメリカに對する憎嫉罵詈の如きも、皆此の同じ心理狀態の所產であつた。ヘッケルが云つた所では、「野蠻人たるロシヤ人、狂氣のベルジク人、墮落のフランス人、狡猾のイギリス人、破落漢の日本人等が、集まつて、優秀人種たるドイツ人を包圍する」といふ心が、民心を風靡し、自信慢心の間に猜疑と憎嫉とが充滿した。そこでイギリスが兵を以て起てば、之を最も惡むべき、又神罰を被る國民だとし、次で日本、次でイタリア、新に加はる敵を、其次き〳〵に最も憎むべき不倶戴天の仇だと興奮し絕叫したのは、要するに、精神の奧に潛むで居るヒステリー的憎惡を發表したものである。

アメリカの一戲畫が此を表した話はかうであつた。カイゼルが壁上に（Gott strafe）（神よ罰せよ）と書き、其の下に次ぎ次ぎに額をかけ、初はイギリス、第二は日本、第三はイタリアの名を表はして居る。ここへいたづら小僧が來て、「其次ぎはどこ？」と書いて居る。此が實にドイツ國民の精神狀態であつたので、好むで敵を求め、中立國をも敵になる樣に挑發し、終に「其の次はどこ？」をアメリカに求めて、之をも敵にし上げたのである。（此の事に關して長い物語をなし得るが、略する）。世界を敵とするといへば、如何にも豪壯痛快に聞こえるが、敵にしないでも濟む者をも敵として向ふへ廻はしたのは、ドイツ人自らのなした所で、此の如きは、先から述べて來た精神狀態の結果であつて、其の軍國主義の裏面には畏怖猜疑が強く働いて居た。世界が好むでドイツを袋たゝきにしたのではなく、ドイツが自ら之を激發したのであつて、ドイツ國民の遺傳と現在の慢心と相合して得た自業自得である。

遺傳境遇の方から見れば、氣の毒な點はあるが、理性で之を制御し得ないのみならず、自負と慢心とで之を狂的に煽動した事は、到底赦すべからざる罪である。

要するに、ドイツ國民最近の進取發展には、確に驚嘆すべきものはある。但し自國の歷史に對する回顧、現在の世界に對する自己中心の觀察、將來の國運に對する功利一偏の打算、此等には長じて居ても、此から百尺竿頭一步を進める新展望を缺いて居たのである。新展望の開濶な精神がないから、偏見に執着し、爲に他を顧る餘裕がなくなる。此を通俗に云はゞ、「ドイツ人は、他人の心を映して見る鏡を持たない」と共に、自分自らに對して、一番大自省を施して、同心的轉變を畫する戒責と頭

績[illegible]

ドイツの事を比較的に長く述べたのは、世にドイツの[illegible]を許る人は多いが、其の長所に對する[illegible]出來ない點に缺陷を有つは[illegible]ない人もあるから、之に對して注意を促したい爲である。

但し、此の如き缺陷を有し、新提案を缺き、同心的轉回をなし得ないのは、獨りドイツ國民のみでなく、今日まで地上の國民[illegible]を免れない。日本の如きも、其の一つであつて、明治維新當時の宏壯な精神、開國進取の雄大な氣象は、五十年後の今日、半は稍消え、一方は自愛固執を事とし、又一方には他の諸國と共に十九世紀文明の弊害に陷つて、爲に内を空虛にもしかれまじき利權擴張に熱中し、國民の活力を軍國主義に消耗しつつある。

日本自らの事については、暫く別論に讓り、開戰の初め、ドイツにとつて當の敵となつたイギリスについて觀察して見たい。

* * * *

島國として、自家の生存に關しては安固の感と自信とを貫き得た事は、國民の心理狀態に於て、イギリスが日本と共通に有する長處であるが、ドイツ人の如き畏怖や猜疑は、イギリスには殆ど[illegible]も風力の根本になつて居る。其上、十八世紀末には、自國で其氣機[illegible]を造り出し、其の結果十九世紀に所謂[illegible]て、世界に於ける國力充實の第一者となり得た。[illegible]と共に執拗の性質、而して此の優者たる位置を主張し固守する[illegible]神、此にイギリスの長所もあるが、又缺陷もここに横はる。即ち、獨り自國の事のみならず、世界の事を觀察し、處置するに、常に此の優越權固執といふ一點から着目して、個人の氣象にも國家の行動にも之を現はす。

此の位置固執は、勿論只管現狀維持で滿足するものでなく、消極的には新興國民で此の國是に妨害となるもの（特にドイツ）に對抗し、積極的には、植民地領地の統一を帝國主義で鞏固にせうとしたのが、十九世紀の最末年以來の政策であつた。頑固な樣で而かも進取的に、防禦に似て而かも進擊的な心理態と、其から出る政策は、一面ドイツの進取に似て而かも極かに遙ふ。されば、ドイツがあまりあせつて「世界的強國か、然らずば滅亡か」(Weltmacht oder Niedergang) と壯の中に悲調を帶びた侵略的軍國主義で動いたに反して、イギリスは、Britannia

rules the waves を歌ひ、どつしり坐り込んで、而かも鷲の眼鋭く、鷲の翼を張つた。此點では、ドイツが之に對して、嫉妬のやきもきと共に、憤懣に絶えなかつた事も、自然といはなければならぬ。

今日になつても「海洋の自由」に對する反對が先づイギリスからきこえるのは、實に此の勢力維持の考から來る自然の結果である。但し其の勢力固守のイギリスにも、多少の新氣運は動きつつあつた。即ち内にあつてはアイルランド自治問題と、外には各屬地の自治と自治植民地との聯合等に關する問題が、帝國主義の内容解釋を一轉して、共同聯盟（Commonwealth）の意義に轉じつつあつた。此の共同聯盟の思想は、ドイツの Kultur 主張と相對して、面白い現象であり、且つ多少の新展望として注意すべきものである。然し兎に角、イギリス國民の精神狀態は、戰前までは、勢力固守といふ意地で固めて、其がベルジク中立侵犯問題で意外の覺醒に逢つたのである。此の覺醒と戰時の經驗とが相合して、今や新展望を得つつあるが、其は後にして、今は少しく方向を轉じた觀察をして見やう。

* * *

十九世紀、特に其の後半に世界の思想界を動かした最大の勢力は、生物進化の學說である。所謂る進化論の内容は、今一々茲に之を述べる要はなからうが、其の着眼點は、ダーウヰンが大著作の標題の示す通りに、生物の「種の起原」を生存競爭（寧ろ生存の爲の苦勞）と自然淘汰（又は適者生存）との勢力に求め、「人間の由來」と動物狀態の生活を結びつけて說明するにあつた。勿論、ダーウヰンは「人間の由來」に於て、人間の特性を指摘するに勉めはしたが、其の大體の傾向が、人間生活の起源由來を生物の生活狀態に求めるにあつた。（ダーウヰンの先驅としては地史の上の進化論があつた）。

此に於て、進化論の影響は、人間の生活に關して、新展望を與へるのでなく、由來を求めるにあり、此の過去の回顧を現在の說明にも、將來の揣摩にも用ひる方に傾き、甚しきに至つては、動物の生活を以て人間を律するにも至つた。生物學の範圍では、ハックスレーが「自然に於ける人間の位置」の如き、此の極端には至らなかつたが、新展望ではなくして、過去の回顧と現在の檢査にあつた。最後の著作「進化と倫理」に至つて、稍や向を轉じたか、兎に角、其學說は進化の跡を尋ねるにあつた

此の傾向は、ドイツの學者が、進化論を人間社會に應用するに至つて著しくなり（ラッツェンホーフェルやグムプロヰッツ）、人間現在の生活を、過去野蠻時代の生活で照らして見、進んでは動物の赤裸々なる生存競爭といふ假定をすら人生の標準とする

に至つたドイツの學者も軍人も人間生活の最高形式を國家に置き、國家は、威力だと解釋して、威力の競爭に於ては强者の權利のみが一切を判定する力だとし、而して道德とは此の競爭に勝つ外に存しないとした。日本でも此學說を輸入した人々があつて（特に故加藤博士と丘博士）「强者の權利」といふ觀念は、多くの尊信者を得たのである。今此處には、一々此等の學說を檢査するのが目的でないが、兎に角、思想の傾向が回顧的である事は明白で、旣往を以て現在を說明し將來を照らすにある。而して此の傾向が人間生活に關する學問（社會、經濟、歷史は勿論、宗教や教育に至るまでも）を支配し、學問といへば、由來を尋ね、因緣事情を說明する事となり、現在の檢査にも常に現狀說明で滿足し、之が應用としての將來乃劃策はあつても、限界が回顧的視點で限られ、或は現狀の束縛を脫するを得なかつた。

學問の此の傾向は獨り思想の範圍に留まる事でなく、文明の實狀、人生の現實が又思想の傾向と相互に影響し、相共に同一傾向を增長した。即ち、植民政策や商工利權の爲の國家競爭、一國內では勞働と資本との對立、同一產業の範圍での販路競爭など、產業革命を經た十九世紀の文明は、競爭の實狀に於て前古にない宏大の組織を造り出したが、其の根本觀念は排擠的競爭といふ一事に歸着した。茲に於て人性の欲望を基礎とした經濟學說と、人生競爭の事實と相助け、暴力（又は權力）を中心とした國家學說と、國際競爭の事實と相俟聯し、人生は、此の如き形勢に引きずられて走る外に、道はないものの如くなつて來た。

此に於て教育は、此の如き國家の爲に範疇通りに人を仕立てる方便になり、學術は利用厚生と富國强兵の道具となり、道德も宗教も、社會の出來上つた約束を護衛する忠僕となり、人生は一律になり、人心は原造の力を失ふに至つた。假令文明の利器を備へ、學術を應用し、交通を促進して、世界は面目を新にしたにしても、軌道は一路であり、人の天性は此の一路の追求に熱中して他を顧みる遑もなくなつた。即ち由來を求め、現狀から將來を推測するにしても、又其間には所謂る進步はあるにしても、人心には新展望を開き、新生命を創造する力が段々に枯渴した。恰も日夜同し機械を操縱する者が、終には機械を使ふ人たらずして、機械に使はれる機械に化してしまふ如くに、人生は、所謂る進化、所謂る競爭の臼の中に搗かれ廻はされて、自ら自らを發揮し得ざるに至つた。

此點から見て、ドイツの軍國主義とイギリスの商工主義（commercialism）とは、表面現象こそ大に違へ、人の天性を殲滅

的に一路にした事に於ては同一の傾向を代表して居る。即ち軍國主義は（必ずしもドイツに限らず、）、一般に人生を國家といふ組織の方便器具として、之を威力伸張の目的に用ひるにあり、商工主義は（此もイギリスに限らない）、人の天性を利益獲得の方面に集中し束縛して、産業的競爭の侵略に偏用するにある。ドイツは、先に述べた如き心理狀態、畏怖猜疑と自負慢心との土臺の上に軍國主義を築き上げて、之を助ける方便として商工主義を實行し、イギリスは、又自尊固守の心を基にした商工主義を助けるに海上權の占有を以てした。

但し責は此の二國のみにあるのでなく、十九世紀以來の國家、一つとして此の二つ、即ち富國強兵を兼ね備へやうと多少ともあせらないものはないので、責といふべくんば、列國皆共同責任を帶びるべきである。而して大戰は、實に此の相互排擠の事實と、生存競爭といふ觀念と、二つが合して迷路の極に破裂したものである。此意味に於て、此の大戰をドイツとイギリスとの爭鬪戰だといふのは、當然であるか、但し尚ほ大局から云はど、十九世紀文明の歸結として當然來るべき歸着點であつたのである。

* * * *

以上の事は、多くの人も既に道破して居る點であるが、其と共に看過してならぬ事は、前に述べた如く人生を一路一律にして、人性の自主自發を阻害した結果、人間自らが自らに對する反逆を起したといふ點である。即ち、人間には動物的本能と共に、理性、感情、想像、聯想等の自由な活動があり、社會生活の上には相互幇助や相互模倣が重大な勢力として動く。此事はダーウヰンも特に注意し力說して居るが、此等諸方面の活動を多樣に又自由に發達して、人間の天性は始めて滿足を得、そこにのび〳〵とした希望あり勇氣ある生活を送り得るのである。特に人間は此等の活動に、自主の自覺を明にし、活動の自由を得なければ、滿足しない。然るに「生存競爭」の生活は人間の天性を一方は動物的に還元し、又一方には「文明」の組織で之を機械的にして來た。其結果、人生の活動を事務的に乾燥に且つ粗雜急激にして、其間に自發活動の餘裕を與へない。勞働者の方からは「なまける權利」(the right to be lazy)を主張するが、富有階級も亦奢侈の虛榮に驅使せられる有樣となつて、人は自ら求める生活をなさず、他に追はれる生活に陷り、出路を知らない。此に於て自由の發露を要する人性は、どこかに出口を求める。此の鬱積に對して一つの噴火口を與へたのは、活動寫眞であつて、世界を通しての活動寫眞熱狂は、人心が一路になつた生活を破らうとする一つの輕便な（而かも侮り難き勢力ある）革

命である。

活動寫眞熱狂と同一の精神狀態は、工業上からストライキとして過激思想の宣傳にも現はれ、日本では學生生徒のストライキや米騷動にも現はれた。而して十九世紀文明が積み重ねた内緒事情と、抑へ抑へて來た人性の反抗とは、終に大戰爭として爆發し、其の大爆發の中に又ロシヤ等の革命として大變動を起した。戰爭には利害や感情、續いては主義の衝突もあるが、其心理狀態の基本には、人生を一路にし機械的にした所謂る「文明」に對する、人間精神の爆發といふ重大要素が横はるのであるから、其の結果として革命が（其の原因事情の存する所に）生じたのも自然である。僕が先に（「人本主義の實行」）戰爭を稱して人間本能の還元と稱したのは、こゝの事で、長い間幽閉せられて居た人間が、其の單調と束縛とに堪えかねて、機會を得ては猛獸の如くに荒れると同じ現象である。活動寫眞でさへ、其力は兒童青年を動かして兇行をも働かせる。此の如き噴火口を求め、或はストライキに、或は墮落文學に、或は極端思想の宣傳に、極々小噴火口を求めつつあつたのが、十九世紀末から今までの人心狀態であつた。そこへ軍國主義の組織を整へ、侵略を主義とする社會教育を施して來たドイツが、機會を伺ひ、口實を求めて開戰し、人生の常規に飽きはて、爆發的變化を要求して居た人[illegible]で[illegible]口[illegible]

軍國主義なるものは、人間の大[illegible]いふ一方に[illegible]得し、而して外に向て突すべき對手を求め、此に對して爆發させるもの、砲彈や小銃と同じ裝置である。自由の發露を[illegible]へておけば自然に他に轉じ得る本能性を狭く強く壓迫しておいて、而して、時に爆發するのであるから、戰爭（特に平時軍國氣風で固めて來た人民の戰）が、本能を還元して野獸性を發露するは自然の勢である。況や今回の戰爭の如く、人性を傷め、人間が機械にして來た所謂る文明の最後の行きつまりとして爆發した者が、其の本能の發露に於て獰猛惡辣になるのは、人間の天性が自己に對して反逆を勃發する自然の結果である。此に於てドイツ軍が當初ベルジクで行つた如き兇暴はいふまでもなく、何れの方面に於ても、敵味方共に、戰鬪に猛烈を極めたのは、人間人性の自家叛逆、獸性本能への還元に外ならぬ。

軍國主義でなくとも、常にスポートやゲームの遊戲中に、本能の還元的發露を充たして居たイギリス人や、又平生から冒險性に富んだイギリス植民が、此等の習性を戰鬪に轉じ、爲に存外能く鬪つたのも、同じ道理である。即ち常務の條理を破る遊戲に依つて、平時本能の發露を求めて居た者が、平日の束縛、

所謂る「文明」の一律に反抗しつゝ、機に乘じて其の勃々たる本能性を戰爭に爆發したので、軍國主義ならぬ國民にも戰鬪の強みのあるのは此の爲である。ドイツの軍人が、自分と同じ樣な軍律で鍛へた精兵でなくば、眞の戰は出來ないと考へ、イギリス軍を輕蔑した爲に、大きな誤算を來し、思はぬはめに陷つたのは、此の人性の消息を解しなかつた爲である。アメリカが戰爭に加はつて以來、ストライキは熄み、人心が緊張して、擧國一致の態度に移つたのも、人間天性の上から見れば、同じく本能の還元を戰爭の一方に集中し得たためである。此點に於ても、ドイツ軍閥は、自分の心理から推して、他を誤解し、爲にアメリカの人心を激發して、己れに敵するに至らしめたのである。

* * *

本能の還元といふ點から觀れば、大戰は十九世紀文明の總勘定として、人間天性の爆發だといふ事を看取し得る。然るに、人間の行動は、赤裸々に本能の還元を發表する戰爭に於ても、本能のみで動くものでなく、理性、感情等が複雜に綜錯して、之を刺激し、補充し、之を誘導し、勸發する。ドイツ人の軍國主義讃明、クルツールの主張、イギリス人が國際正義の高調、フランス人の人道的良心、而して終にはアメリカの唱へた國際的民本主義の主張など、皆本能の爆發に對する理性や感情の後援であり補充である。但しかく云へばとて、還元的本能の本が正體であつて、此等の後援補充は表面の口實だと（日本の軍國主義者が解釋する如く）いふのでは決してない。人性は、その爆發的方面に於ては、盲進突擊の戰鬪を本色とするが、而かも、同じ本能は之を他方面に轉じ得るものであり、且つ理性や感情も亦實に重大な力、人間の本性である。今まで人間の進化して來たのは、此等高等性能の力であるから、戰爭に伴つて現はれた理性や感情の主張も、亦決して單に口實でなく、眞面目に眞劍の主張である。此事は、今までに度々意見を公表しておいたから、更に重說する要もない譯であるが、茲に本能の方面を主として說いた結果、誤解を生ずる事のない樣に、重ねて述べておく。特に戰鬪に現はれる本能性も、之を他に轉換して發露し得る事は、呉々も注意すべき事である。

大戰は、人間が文明の束縛に對して發した叛逆、人間本能の還元的爆發として二十世紀の始に破裂したが、一體叛逆でも爆發でも、火藥や地震と同樣永く續くものでなく、一旦の大變遷を經た後には、自然に自ら消えるものである。此は本能の通性であつて、動物は色慾發露の場合には狂する如くでも、其の滿足と共に平靜に復し、いくら餓えて亂した人間でも、食に飽いた後は、食を忘れる。大戰爭の後の平和が來る場合亦此と同じ

であり、戰爭繼續中でも、國家的本能に伴って理性が働いて、信仰も理性が働き、終には本能を破壊し盡す様になつた。前に述べた種々の主義主張が、戰爭中に段々有力になつて來たのに、一面に於て此の現象であり、ドイツの軍國主義すら、終には主張を他に轉じてクルツールを重んじ、終には自ら破滅して、「威力は權利なり」といふ信條をも棄てるに至つた。

此點に於て、ドイツ側は、始は戰鬪本位の威嚇政策で突進し後に段々理性の說明を加へる様になつたに對して、イギリスは始から國際正義の主張で動き、アメリカは民本主義の本據を明にして後に戰爭に參加した。此は、やはり軍國主義の有無と共に、兩方に於ける國民の氣風に因由する事で、平素から人民各自の自發自由を重んじて來た英米二國民は、本能の爆發のみで動かず、其他の天性が活動する餘地を有して居たのである。一國の軍國主義が、國に對して危害であるのみならず、自國の民心に對しても、盲目的突發を敢てせしめる危險性を有するのは、此にある。

* * * *

さて、此まで述べて來て、其の結果、人生の新展望に移り得やう。

約して云はゞ、ドイツ國民は、最後に精神的挫折の來るまで、何なの主張も得なかつたに反して、既に大戰中には、何か新らしい新主義が開かれねばならぬ。今後の各國は、自國の展望を如何に展開して、どれだけ貢獻になるかといふにある。

假令ば、自國特有の文化といふ主義はあるにしても、ドイツ國民には世界征服の外に人生に對する展望を缺き、國内に於てすら、少しでも之に反對する者は之を壓抑した。特に自國の文化は、ドイツ特有で他國人の理會し得ざる所だとしながら(哲學者オイケンの如きも之を力說した)、而かも其の文化を世界に普及せうといふに至つては、自家撞着で、要するに威力での征服が其の目的であつたとしか見られぬ。

之に對して、聯合國側にも戰に臨むに當つては、事の緒に臨する外に明確な抱負や見込はなかつたが、只一つ重大な主張且つ感奮が存して居た。即ちベルジクが小國ながら、中立の義を主張して目にあまる大敵を引き受けた一事は、爾後聯合國の主義自覺を一貫する義憤感慨の中軸となつた。此の一事も、其初に當つては、一八三一年のロンドン條約を尊重するといふに外ならなかつたが、此の一事の中から小國民の自由と條約の神聖(即ち國際信義の主張)といふ主義が明になり、其が段々に開展して、ウヰルソン大統領の十四項目ともなり、此からその實行の討議に移るまでに至つた。此の開展の經過や十四項目の內容

は、今一々之を述べないが、結局、一國内と國際關係とを通じてデモクラシー即ち民本主義を宣揚するにある。而かも、デモクラシーは今まで考へた内容では不備なる事も段々明になり、進んで政治上、社會上、國際上、人生のあらゆる方面に通じた人格本位といふ新展望を宣明するに至つた。

即ち、デモクラシーの主張は、單に政治上に平等の民權を重んずるといふ民本主義に滿足せずして、國際的に諸國民の自由を重んずるといふ意味を開展し、社會上には一切人民に生活品性の自發發達を自由にするといふ民本主義となり、進んでは世界人類に對して、同樣の自決權と共に協調協心を要求するに至つた。正義といつても、今までに出來上つた規約を守るといふ回顧的靜的正義でなく、一切人民に對して十分に自發統治の機會を與へるといふ進取的正義たるべしといふにある。又人道といふのも、一切人類を一律に總括して其の權利を尊重するといふ抽象的人道でなく、人間天性の中に不盡の源泉を發揮し人格の力、特に新理想によつて新展望を與へる人格の力、此の如き人格の協同によつて、人生の生々發展を發揮せんとするにある。

＊　　＊　　＊

「新人生の發展」即ち、人生の新展望を、此點でも闡明する爲に、暫く戰爭や戰後經營の問題を離れて、學術思想の方面から觀察を下す要がある。

先に述べた如く、十九世紀の學術は說明を目的とし、思想は進化の跡を尋ねるに熱中した。說明は事情の眞相を發揮するが、新事實を創作する力なく、進化といふ觀念だけでは、物の起源と經過とを明にするが、新展望を與へない。此に於て學術界には、之に對する反動として、又新展望を希求する爲に、事實以上更に價値を求め、進んで價値を作り出すといふ思想が發生しつつあつた。「價値の創作」といふ事も、畢竟は事實探求の結果を應用するに外ならぬが、其の應用といふ事は弘く深い意味を生じ、事實を探りつつ、而かも新事實を作り出するいふ事になる。手近い例で云はゞ、救貧の爲に貧民の生活狀態を研究する事が、又直に社會生活改善の事業となり、それが又新な社會的理想を發見する事にもなる。青年の心理を研究するにも、單に觀察だけでなく、青年の精神轉換又は煩悶に對して同情ある指導を與へ、此の如き研究と事業との間に、人生に對する新理想に逢着して、之を宣揚する。云はゞ學術の活用と共に、人生を學術に密接し、研究の中にも常に人生の新方面を發揮するといふ方に着眼して、今までに存しない理想をも發見せうとする。

此の着眼と方法とは、特に英米二國で發達し、産業組織にが

けるギルド共同制の學問と實行へ、ラスキンに行きカアライル等が主唱して居ること、又は社會學のエヂンバラー學派（ゲッデスとスレーターが之を代表すること）がなしつつある地方改良の研究と實地指導等、皆此の新見地から出た價値創作の學術である。アメリカに於ける市政問題、社會事業、感化傳道事業、宗教教育事業なども皆同類で、其のやり方は獨り學と術との密着のみならず、其の實行の結果、研究者は實際人生に對する熱情を得、此の熱情と研究と實行との中から、新な人生の展望を得つつあるのである。所謂るプラグマテスムの氣風は、此の如くにして價値創作の學風として、研究にも實行にも一道の活氣で貫いて居る。

此の如き學術で發揮して來る人生の活動は、今迄の進化を同じ方向に續けるのでなく、百尺竿頭一歩を進めて新價値を創作するにある。創作的進化としてベルグソンが人生を觀察した見地が是でなる。人生を學說或は觀念の定まつた形式範疇で律する今までの學風を棄てて、活きて動き、動く間に常に新活力新生面を發展しつつある人生を、我々自らの思想に捕捉し、此に依つて思想を活かし、而して又思想理想に依つて、人生を嚮導し人生に新展望を與へる。人生を單に思想に寫し取るだけでなく、思想が人生の活力に共鳴して活きると共に、人生を又思想で動かす、此の意義に於ける學術の發達、學術が實行世界に應用された所以である。此の點から見れば、學術の活用といふ事も、單に結果の應用に止まらず、人生の思想を活かすと共に、人生を思想の力で動かす事になる。此に於いて歴史は「うしろ向きの豫言」たらず、眞に先見的展望を與へる智慧となり、政治や法制は、單に安寧秩序を維持する規律でなくて、人生の根本を新に築き上げる活事業となり、教育や宗教は、人を常規に訓練し又は既成の信仰で繋ぎ留める鐵鎖でなくて、人生の自由な開展を新展望で開く創作的感化力となる。

* * *

社會の實狀の中にも學術思想の中にも、此の如き新展望の機運は、十九世紀末年以來動きつつあつた。そこへ大戰が破裂し地大に震ひて新なる泉の湧くべき勢を加へた。假令ひ、開戰の動機には利權競爭の問題が有力な背景となり、戰爭の進行には利害問題を離れないにしても、爭點論點は、又道德問題、人類全般に亘る社會問題にも移らざるを得ない。特に人間天性の還元的爆發を經た後には、本能の順當な發展が、一層の活氣を帶びるのは、發熱後人體の活氣を增すと同じである。此も今まで時々に指摘して來たが、特にベルジクの中立侵害といふ國際正義の問題と、ドイツ陸海軍の兇行といふ人道問題とが、段々に爭

點を道徳問題に轉ぜしめ、其の解釋としては、軍國主義の絶滅、デモクラシーの宣揚といふ事に集中して、最後はドイツ軍國主義の破滅となつて戰爭の幕を閉ぢた。ドイツの敗北は、思想の力に屈せられた結果である。然らば次の幕が世界的デモクラシーの問題で開くのは自然の順序であつて、各國民の自由自決、國際聯盟、資本と勞作との自由など、皆此の根本問題の特殊適用に外ならぬ。

デモクラシーの觀念が、政治上の民主主義から一轉して社會的正義を樹立する民本主義となり、其の主義を實現する爲には人間の天性を如何なる方向に發揚すべきかといふ人本主義（新人道主義）の問題に轉じつゝある。此も今まで度々説明して來た處であるが、その結局問題は、人間の天性なる者がどこまでも今までの進化を繼續して其の軌道に限られるか、又は創作的新開展を施して、新方面に發展し得るや否やといふ事になる。

一個人間の天性といふ中で、食慾と色慾との二者、其の根底に於ては、動物生活からの遺傳性に外ならぬ如く見え、而して個人なり國家なりの生存競爭は、前に述べた此の二慾本能の結果に外ならぬ。然し本能が不變だといふのは、實は個人生活の話であつて、團體的に云はゞ、人間は、太古の時既に共食の發團に依つて、食慾の發表に動物と異なる特質を發揮し、又男女の交合を藝術にするといふ事で色慾の發現にも變化を來して居る。食事を神事だと思ふ觀念（特に印度の如き）、又共同の食事を以て家族種類の團結から進んでは、神人の結合を表象する如き、動物の食慾と異なる人生の重大事であつて、人類の社會的結合に於ける新事實である。色慾も、愛情といふ實情に加へて之を理性に適しとつた觀念や、又社會生活の關係から發生して來た結婚といふ制度に依つて、人間の家族結合の道德的基本となり、此の基本から出發した相互扶助、相互模倣、相互競勵の事實を擴張し來つて、茲に國家社會にも又人類全體にも及ぶ結合力を、其中から發揮したのである。儒教が「夫婦室に居るは人の大倫」だといふのは、ダーウヰンの言葉で云はゞ、色慾本能から出る人類の同情生活を道德の基本とするに當る。

卽ち此の二慾の展開醇化に於て、人類は、今までにも數段の創作的進化を經て來て、今日の人生は此から一歩を進めた進化の階段を如何に新にするかといふ問題に逢着して居るのである。此の醇化の道程を、本能結合、義理結合、理想結合として（新時代の宗教二七一八〇頁、殊に本誌人本主義の實行參照）見れば、今回の戰爭は、大體に於て國家といふ義理結合の衝突に爆發して、其の中に逢着したのは、人類全體の精神的關係といふ理想結合を如何にすべきかといふ問題であつた。本能も義理も消滅はしないが、而かもこれを

統合して向上せしめ、之を醇化し洗練して、人生に新面目を實する覺悟が出來るや、又其の方嚮如何といふ事になつて來た。食慾色慾の根本本能すら、此の如き發達、否精神的醇化を經て、今日の問題まで進んで來た。其他の人性、事物嫌惡、畏怖猜疑、慢心、權勢慾の如き、第二の人性の如く見える性質も、今までのまゝに留まるとは限らず、場合によつては人轉換を經べき性質を持つて居る。所謂る煩惱の氷とけて菩提の水となり氷多きに水多く、惡人も回心一番大善を發揮する。況や又、同情、愛着、相互依賴、模倣、訓練、名譽心の如きも、其の内容を充實し、其の範圍を擴張すれば、新面目を呈するは必然の事である。例へば權勢慾の如きも、權勢の内容、又其を使用する目的に應じて惡にもなれば善にもなり、愛情も色慾に基いた男女の間柄から出發して、其間に詩も生ずれば、家族も生じ、天然の美を慕ひ、宇宙の奧秘に打ち込む愛情にもなり、愛國の行にも、殉教の誠にも、又人道の爲にする獻身の行にも發展する。所謂る理性も、其の發達の始には自家防衛の本能から出發して生活狀態を調節する爲に案配工夫を施す向に働いて來たが、終には自己精神の理性と宇宙萬有の秩序とを結合する思想生活にまで進んで來た。

此等の新展開には、事情境遇に應じた進化があると共に、自ら[illegible]進化すると同時に[illegible]に加はり、創作的進化の方に人間の天性を醇化し改造して今に至つた。人生は、進化の方面であると共に、又創作の方面である。兩者として生存する爲には、今までにも人類は幾多の新展望を開き、創作的精神を以て、其の上に加へて來たのである。

此等の事は、一見しては、實生活に縁遠い事の様に思はれようが、其實、現在に差し迫つた問題であつて、戰爭中に起つて來た諸の論點も、又戰後の世界をどうするかといふ問題も、所詮は人性の轉換又は新展望如何といふ事に歸着するのである。何となれば、デモクラシーの觀念が人本主義の實行に進んで來たといふのは、畢竟人間の生活に、個性發展の自由を十分に與へ、而して此の如き自覺ある個人の、社會的結合を如何に醇化するといふにある。

卽ち個性の發展には、單に進化の跡を追ふ以上更に創作的進化を要し、無盡の源泉から人格の力を自在に發展せしめるを目的とし、而して社會結合に對しては、戰爭で振盪を蒙つた各勢力（卽ち偏狹主我の愛國心）を打破して、人類の將來を理想とする新結合に移るを要求する。詳しく云はゞ、一方社會改造の問題に於て、例へば資本と勞働との關係を圓滿にするには、階級思想、特權の別を撤去して、眞に相互扶助、相互向上の生

活を遂げ得べき共同的產業組織を目的としなければならぬ。此の爲には、一方社會の組織制度の上に大改革を施す要あるは、一勿論ながら、其の組織の中に活き、其の制度を活かして行く個人の精神が、今までの如く、相互排擠の競爭のみに固着して居ては、制度も組織も死物となるは勿論である。然らば、心境開濶、能く他を容れ他と相し得る人心狀態を、如何にして作り出すかといふ人性問題が、社會改造の根本たるは明白である。

* * *

此に於て現下の問題に歸らう。

戰後世界の大問題、又大難關たる國際聯盟にしても同じであつて、民族國家が、單に過去に執着し、主權萬能といふ現在の觀念に固着して侵略をも是認するならば、過去に於ける如き衝突は必ず再發すべく、國際聯盟の形は成つても、魂はなく、第二第三のドイツが現はるれば直に破滅する事は、鏡にかけて見るべきである。そこで國際聯盟の實を擧げるには、其の方策條項以上更に、各民族の自由自決を重んずる事は、一社會内に於ける個人個性の尊重と同じく、其間に國際的民本主義を實行するを要す。此の爲には、又一國の主權は、法理上最上權であるにしても、道徳實行上には能く他と互に相容れ相許し相讓る人道的見地に立つを要する事になる。而して此事には、個人が個性の發揮と共に社會的結合を重ずるを要すると同じである。

國民が内國をして世界の舞臺に國際協調の實力たらしめる爲には、即ち啻に國際聯盟に加入して不承不承に其の末班に引きずられるだけでなく、主義あり意氣ある主動者たらしめる爲には、人民が國家主權の後だてとなつて、輿論の土臺の上に、國際聯盟の主義を貫徹せしめる覺悟を要する。國民に此の如き輿論の力あらしめるには、國内にも民本氣風が實力を有して、閥族の專横を絶滅し、階級の爭を杜絶して、一國協心の實を民意發揚の上に築き上げなければならぬ。此意味に於て國際的民本主義の實行には、國内に於ける民本主義の實行が其の基礎となるべく、又同時に、世界の中に侵略的軍國が存して他を威嚇する樣ではならぬから、國内の民本主義は、國際的民本主義の宣揚充實を必要とする。此の如くにして民本主義の發揚は、各國自治の問題であると共に、世界治平の依つて立つべき基礎であつて、其の實行は、世界を通じて人間精神が新展望を開いて、之が實現に努力するにある。若し此が出來れば、各國に於ける社會改造と、世界を通ずる新國際政策と相待ち相輔けて進み得る。從つて社會改造が出來なければ國際聯盟も出來ず、二者互に相輔けなければならぬ。而して其基礎は又人性の改造にある。

此に於て只[illegible]、[illegible]て、即ち、[illegible]の人性を國民的に[illegible]すると共に世界的に[illegible]て、家族、國家人道に通じて人性を醇化すべしとの新展望となつて來る。要は、人間が各自の自由に基いて、家族、國家等人間生活の結合を充實し、而して此の自由自決の個人が家族に於ても國家に於ても結合の精神を實行し、國家は又世界の群衆に立つて人類の結合に貢献するにある。此が即ち人性、本來の結合性を十分に發[illegible]化する所以であつて、本能から出發した家族や血族を安固にし、義理正義で成立つ國家社會の團結を充實し、而して其の基本の上に理想精神の結合を築き上げるにある。一言にして蔽せば、人間天性の結合性を、人類全體に通じて鎔冶し開發するにある。其故に之を稱して人本主義と稱する。デモクラシーとか人道とかいふ概念は、此の消息を云ひ表はさうとして、また十分でなく、且つ其等には從來の聯想が附け纏ふから、別に此の名稱を作つて、人生の此の新展望を命名するのである。

此の如き意味に於ける人本主義の實行には、從來人間が第二(或は根本)の天性だとして作し且つ實行して來た[illegible]他競爭の性能を轉換して、同情ある相互主義の確信を以て進むを要する。人性の轉換といへば、至難の事にきこえるが、而かも先に述べた如く、社會事業や學術思想に於て、十九世紀末以來段々人[illegible]實行[illegible]け、[illegible]に新になつて[illegible]行するにある。フランス人の望には、此等[illegible]て現はれ、アメリカ國民の主張では、國際的デモクラシーとして世を動かし、ベルジク國民に血と涙との犠牲を供へて、此の主義の中軸となつて來た。而してドイツ國民も、軍國主義の破滅と共に、此の展望を開いて新なる國民的生命を發揮する事と思はれる。ドイツの精神的文化が、此の新展望に依つて、軍國主義に昏迷せられない前の光彩を放つ事を祈りたい。

此の如き人本主義は、今までにも宗教、特に佛教とキリスト教とが之を意識して、世界歴史の上に一度は新紀元を劃し[illegible]た事實である。アジアは曾て佛教の一乘主義に依て此の如き精神的結合を示したのであるが、今や其の殘骸の横はるのみ。キリスト教は、キリストに現はれた神人融合の實を、ローマ帝國瓦解後の西洋世界に、多少は實行し得たが、其も近世特に十九世紀の文明に破られた。然し枯骨更に生命を新にし、いり豆に花の咲く時が來ないと限らない。否今や十九世紀文明の總勘定を片附けるに當つて、同じ人本主義は他の方面、即ち人類の社會的結合といふ意識から新に發生して來た。

此時に當つて、時勢が解決を我々に迫りつゝある問題は歴史

の同國に滿たし、所謂る生存競爭の現在に捕はれて、益す迷路に陷るか、若くは新展望を開いて、玆に人性の轉換を斷行するかといふにある。所謂る進化の跡を追ふて、舊軌道を固守するか、又は人性不斷の源泉から無盡の靈性を汲み出し、新展望ある人生を創作するか、此が現下の問題。我々の去就を決すべき分岐點である。此の去就を決するには困難も勿論多端であり、又人本主義の前途には、難關が續々横はつて居る。然し、此の困難に對抗して難關を打破する個人並に國民のみ、世界の先導者となり得る。怯懦にして世界の落伍者となるか、將た又勇あり信ある嚮導者主動者となるか、此が我々の上に蔽ひかゝつて居る問題である。別の言葉で云はゞ、富強の力のみを頼みとするか、思想理想の力を押し立てるか。眼ある人は、世界の現狀に照らして、人生の新展望について熟思すべきである。

戰後世界も亦依然として國際競爭の舞臺

――英米の資本政策的民主主義に對する獨逸の世界的民主主義の逆襲――

ドクトル・オブ・フイロソフイ（ハーヴアト）　鷲尾正五郎

今日でこそ獨逸皇帝は皇帝と云ふ地位に伴ふ責任を廻避する能はずして退位蒙塵を餘儀なくされて居るが、本年六月、講和運動の開始に先つ數三ケ月、皇帝は既に自ら獨逸民主運動の先陣に立つて揚言して「獨逸國民は民主主義のためアングロサクソンの資本主義と戰ふものである。彼等英米人は他種族を經濟的に征服して世界の富を壟斷せんとするものである」と言つて居る。此の言葉は當時暗雲漲る獨逸の天地に霹靂の如くに響き渡つたものである。其後獨逸の形勢は九天直下の勢を以て變化し、敗戰に次ぐ革命と革命に伴ふ民衆の輕擧騷動は流石の獨逸と雖之を防ぐ能はずして、一時世人をして獨逸も亦過激派の運命に陷るものかと危ぶましむる程であつたが、此は固より一時の變象で、軈て講和の成立と共に人心定まれば、獨逸は着々として

[illegible]民族主義を實現するであらう。而して[illegible]
義運動を導くべき根本精神は、要するに獨逸國家組織上より醸出されたる精神、卽ちカイゼルの爆破した野心に歸するであらう。獨逸精神は、英米の資本勢力と其の勢力に伴ふ奢侈浮逸傲慢不遜に對する反感となつて結晶すべき事は正に是れ天の運命ではあるまいか。

誰が何と評しても、今次の大戰は、要するに、彼の灰色の空を戴く歐洲の一角に閉されながら、絶倫の精力を抱いて世界に光明の天地を求めんとした種族の努力が結晶したもので、獨逸の軍國主義其れ自身は既に英國の資本勢力に對する敵として現れたものであつた。然るに英國の資本主義に對し獨逸が四十年間國民の膏血を犧牲として鍊へて來た軍國主義が哀れにも資本勢力を中心とする世界の包圍攻撃を受けて遂に破滅の運命を觀るに到つたのである。併しながら斯くも不見目に破れた獨逸は今や軍國主義に更ふべき新しい武器を執つて立たんとして居る。新しき武器とは資本勢力の正面の敵、卽ち徹底的民主主義である。

私は嘗て米國に於て或る獨逸人と語り、加州に於て本當に働いて居る者は獨逸人と日本人であつて、英米人は遊民であると、其場限りの氣焰を吐いて、彼れ獨逸人より固い握手を受けた事[illegible]ここに、[illegible]「世界に於て[illegible]」[illegible]喝采を受けたと云ふ話を聞いて思はず膝を叩いた。日本人は働く國民であるかどうかは頗る疑問とせざるを得ないが、獨逸人は確に働いて活きる國民である。英人で米國へ移住する者は多く資本關係を辿つて商買の機會を狙いに來るのであるが、獨逸の移民は多く溝堀りより築き上げたものである。英米を資本國家と云ふならば、獨逸は勞働國家である。戰前に於て獨逸實業の發達は將に英國の勢力を驅馳せんとして居たと云はれるが、此は或る意味に於て事實であるに違ひないが、併し後進の資本の獨逸が資本政策で英國と競爭が可能な筈がない。獨逸實業の發展は全く組織的努力の賜であつた。獨逸の實業家が英國其他先進國の市場に侵入して優越の位置を贏ち得たと云ふのは、皆働いて取つた位置である。其の働き振りは聯合側の非難する如くに隨分惡辣なものであつたかも知れないが、少くとも獨逸は資本政策の横暴、卽ち遊んで他人の勞働で金を儲けると云ふ高壓手段を用ゐず、亦用ゆる餘力もなかつた。であるから、戰前あれ程實業の發達した國でありながら、國民の努力は緊張の極に達し、資本家氣質卽ち遊民氣質は獨逸社會の一般に感じなかつ

た所である。英米と獨逸との勞働政策を比較してみても兩民性の相違は一目瞭然である。八時間勞働と云ひ其他英米殊に米國の勞働法は、餘裕有り餘つて勞働者を甘やかすための規定であるかの觀があるに反し、獨逸の勞働法は勞働能率を高め其他凡て眞に勞働者を獎勵し保護するための法律であつた。獨逸で若し英米のやうな放漫な横着な勞働政策が行はれたならば、これこそ獨逸國家滅亡の端であらう。英米の所謂"レード・ユニオンなるものは、資本家階に對し勞働者自身も富の恩澤に浴し、遊民の生活を享受せんとする示威運動であつて、畢竟彼等兩者の利害は一つである。資本家の富なくして勞働者は富ます、勞働者に遊民生活を頒たずして資本家自ら安んずべからざる組織であり、而して希求する所、彼等兩者共他國民に寄りて寄生なる所以は、カイゼルの言つた如く彼等が天下の富を壟斷し他種族の勞働を犠牲とな得べき資本的權力を維持せるがためである。

今次の大戰は、英米にとりては此の權力を維持せんがための戰であつて、之を維持せんがためであればこそ、資本家と勞働者の間に容易に動かすべからざる結托が保たれ、英米佛の社會黨は聲を潜めて主戰派勞働者の鼻息を窺つて居たのである。然るに此の目的を成就せんがために、彼等の所謂デモクラシーが獨逸に對し對外プロパガンダとして悼く世界に宣傳せられ、今日迄世界を瞞着して居たと云ふ事は何たる罪であらう。此の邊に伏在する矛盾は獨逸社會黨の看取する所となり、露帝の瓦解する所となつたのは固より當然の事である。民主主義の徹底的な擧は之を博く世界に及ぼして總て英米資本政策の瓦解を齎らさんとするは天命と評すべきか。獨逸民族の臥薪嘗膽の跡は此の點に於て成らずんば遂に成る所がなからう。

獨逸を世界民主主義の敵であると言つて叫つた上に、西班牙風までも獨逸製であると銘を打つて、惡い事と云へば何でも獨逸へ塗り附けて、日本人までも獨逸は惡者であると思はせた英米プロパガンダの勢力には感服せざるを得ないが、獨逸人は實は寧ろ氣の毒な國民である。英米から獨逸へ渡り、殊に南獨逸を旅行した人は、英米人の傲慢不遜な態度から脱して急に獨逸人の平民的な寧ろ卑屈的な程丁寧な態度に接して、故郷へ歸つたやうな感じが起つた印象を忘れまい。ゲーテ・ハイネ時代の獨逸人は皆斯う云ふ風であつたらうと想像せられる。固よりゲーテ・ハイネ時代の獨逸人と雖其の平民氣風の反面に強い自我心を表して居た事は否むべからざる事である。本來國として見ても勞働國の位置にあり、人として見ても勞働階級に屬し、其の境遇に於て絶倫の精力を有つて居た獨逸國民の事であるから、彼の文明は努力生活の反映である。彼の文學は深刻なる哲學

主義で、彼の哲學は頑迷な唯心論である。瀟洒な情とか冴えた理性とか云ふものは彼には到底求められない。此の意味に於て野蠻と許せば彼は野蠻であらうが、人道の敵とは抑も誰が言へる事であらうか。プロシヤの覇氣と科學文明の發達は其後如何に獨逸人の思想感情を變化したとは云へ、勞働者の氣慨と之に伴ふ平民氣風は依然として彼の天賓である。獨逸の軍閥自身が勞働者根性を忘れず、また勞働者の運動に對して親しい理解があつた事實に徵しても、獨逸國民性の根本は何處にあるかが察せられる。獨逸政府が民主主義の敵と咀はれながら、露國に於ては過激派運動を援け、米國に於てはＩＷＷと結び、佛蘭西に於てはカイヨーやメルビーの徒を使嗾し、更に英國に對しても中立國の社會主義者を通じてヘンダーソン、マクドナルド、ウムゼー等の一派を動かして居た事は偶然の隱謀と云へやうか。如何に巧な隱謀家と雖思想感情の相通ずる所なくして是程の運動が出來たであらうか。

戰前英米の社會、殊に倫敦の上流社會は腐爛の極度に達し、資本主義に伴ふ必至の腐敗は英國社會を内部より崩壞せしめんとする形勢であつたが、幸に之が警鐘を撞いてくれたものは獨逸であつた。今次の戰で英國は助かつたと云ふ譯であるが、戰後獨逸側の代表する勞働勢力と英米側の賴とする資本勢力との兩國の形勢が、戰前の倫敦の社會狀態に鑑みて理解する事が可能やうと思ふ。此の暗黑の印象を强くするために私は茲に適當なる一例を擧げて置く。本年五六月の頃であつたと記憶する。英國國會議員にして雄辯家の稱あるペンバートン・ビリングと云ふ人が雜誌ビジラントの紙上に於て、英國は戰爭中にも拘らず尙ほ獨探のプロパガンダを許して居る事を諷刺した事がある。其の話の筋で特に私の面白いと思つた點は斯うである。當時英國政府の propaganda bureau は二十年來英國に歸化せる或る和蘭陀の劇評家の推選によりて、オスカー・ワイルドの「サメロ」を近世英文學の代表的傑作として舉げ、有名なる女優舞蹈家モード・アランをサメロに扮せしめ、此の興行を英國のプロパガンタとして博く中立國に紹介せんとする計畫を立てた。此を聞いたペンバートン・ビリングは、雜誌ビジラントの誌上に於て「サメロ」は英國のプロパガンダにあらずして寧ろ獨逸のプロパガンダであると喝破した。「サメロ」は王公貴族の腐敗とバプテズマのヨハネを對照して、肉感に訴へるために書かれた甚だしい病的遊蕩文學である。上流の社會は此を觀て情慾の刺戟を受け、下層社會は正に眞赤な革命思想を起す種類の文學である。一言にして言へば「サメロ」は英國の社會組織即ち其の資本家組織を咀ふ文學である。正に獨逸の用ゆべきプロパガンダである

事は明かである。ペンバートン・ビリングは更に「サメロ」の批評に次いで「黒本」の存在を指摘した。彼の言ふ所によれば獨逸の秘密探偵局には「黒本」と云ふものを編纂してあつて、其の中には英國上流の人士にして既に獨探となれる者及び婦人を用ゐて腐敗せしめ得べき者數千人の名を書いてあつて、而も此等の名前の中にはアスキス以下アスキス閣員數名が含まれて居ると云ふのである。勿論此はペンバートン・ビリングの虚構であらうが、虚とは知りながら英國の社會は愕然として騒ぎ立てた。軈てモード・アランの起訴によつて裁判事件となり、一時人心が動揺して戰爭の報告よりも裁判沙汰を注意して讀んだと云ふ程であつた。然るに裁判の結果ビリングは無罪の宣告を受け、アランの方はビヂラントの紙上で其の名譽を傷けられたのみならず、法庭で兄の淫行までも曝かれて、道德的の淫婦とまで侮蔑されたと云ふ始末であつた。事件の眞相は取るに足らない一種のブラックメールであるが、此が斯くまでも英國の社會に反響を起したと云ふ事は何を意味するか。獨探勢力の怖るべき事と其の獨探のプロパガンダは英國の社會に對して爭ふべからざる正義の力を盾として居る事を告白するものではなからうか。正義の力も軍閥の利用する所と爲つては世界から忌憚せらるべき隱謀であらうが、堂々たる民主主義運動の利器として現れたならば軈て資本家の社會を根底から覆すべき力ではなからうか。

× × × ×

戰後獨逸の取るべき途は二つある。國際社會主義運動によりて英米の資本勢力に當るか、國家社會主義を以て之に抗するかの孰かである。日本には今回の獨逸の政變と過激派とを結んでまだ國際社會主義の夢を見て居る人があるやうであるが、私は此は皮相の觀察であると思つて居る。勿論世界の理想は國際社會主義まで行かなければ徹底しないであらう。また國際社會主義は何等かの形で一面の勢力として存在するであらうが、世界の大勢はまだ國際社會主義が重なる運動になるまで進んでゐない。而して今日の所、國際社會主義の運動の氣運を遮る者は英米であつて、英米は表面の看板は何であるにしても事實上經濟的帝國主義政策を以つて進む以上は、獨逸としてはどうしても之に當るに國家社會主義を以てしなければならぬ運命にある。のみならず獨逸の强味は努力と組織の力にあつて、其の精神は依然として敵愾心によつて養はるべきものである。他方英米に於ては此等の優越權は資本勢力にあつて、資本家も勞働者も此の優越權を捨てるものではない。英米側と獨逸側とはたゞに國家經濟の上に於て利害が一致せざるのみならず、勞働者の利害が

一致しない。此は睹々火を見るよりも明かなる事實である。

之を米國に就て觀るに、其の勞働者の中心勢力たる、ゴンパース氏の率ゆるツレードユニオンは資本家組織を是認し、妥協政策に依つて勞働者の位置を向上せしむる事を目的とし、ＩＷＷの如き非國家的思想には全然反對し、寧ろ斯る過激思想を當面の敵として戰つて居る。米國の輿論も一般に國際社會主義の思想を排け、ＩＷＷの首領連は悉く檢擧せられて現に苛酷なる刑に服して居る。今日列強の勞働者中で米國の勞働黨は最も打算的である。英國に於ては、流石に社會生活が米國よりも急進して居るだけに、勞働黨の中には妥協政策に飽き足らずして極端なる理想論を唱へた者もあるやうであるが、此は頗る少數であつて、多數は寧ろ强迫的に資本家の財布を絞り取らうと云ふ態度で、自家本位の打算的である事は米國の勞働黨と大差がない。此に加へて英國の保守黨は公然世界的民主主義と云ふやうな思想を斥け、英國は自己の利害の爲めに戰つたのであると臆面もなく言つて居る。他國民の利害を犠牲にしても、英國國家を富まし從つて英國勞働者の要求を滿さんとする事は明かである。英米は此の目的を達する爲め資本勢力に伴ふ利權政策を以つて獨逸に當る事も是れ亦明かなる形勢である。

之に對して獨逸の力とする所は努力である。英米の利權政策を傾き盡して努力一國の貿易にしたいと云ふのが獨逸の願である。獨逸の社會黨は既に一昨年以來、自由貿易の聲さへ聞けれぱ如何なる犠牲を拂つても早く戰爭を終熄せしめたいと云ふ態度を示して居つた。此の主張の結晶とも觀るべきものは、獨逸植民大臣デルンバーグ氏の所說であつた。

デルンバーグ氏は國際平和同盟の前提として、原料品の國際管理を主張した。卽ち世界の原料は各國民の要求に應じて公平に分布すべきものにして、如何なる國家も自家一個の利害のために原料品の產出分布を獨占する事を許さないと云ふ說で、此は正に獨逸の第一に要求する所であつて、英米殊に英國に對して眞向から弓を引いたものである。其の人道上の基礎は英國と雖正面から否定する事は可能ないであらうが、英國たるもの却却此を許すものではない。辭令に巧なる彼は何とでも口實を設けて獨逸の主張を牽制するであらう。デルンバーグ氏自身も原料品の國際管理と云ふやうな事が、國際委員の手で實際掌れ得べき事であると考へては居ないであらうが、獨逸にとりては此の問題は主義の問題である。獨逸としては國際經濟競爭の自由と海洋の自由さへ保證せられるならば、ウヰルソン氏の十四ケ條は承認して苦しくない。アルサス・ローレンに就ては固々獨逸の領地であつたものを佛蘭西に取られ、佛蘭西が長く之を經營

してゐたのを普佛戰爭によりて再び回復したものであつて、これを亦佛蘭西に返すと云ふのは公平なる所置とは云ひ兼ねる。況して二州は歐洲の富源地である。之を失ふと云ふ事は獨逸にとりては苦痛である。而已ならず現に二州の住民の過半は獨逸種族である。併しながら此も敗戰の運命とあらば忍ぶより外ない。其他ポーランドの復古と云ひ、バルカン諸民族の獨立と云ふが如きは、舊の軍國主義の獨逸ならば甚だしい打撃であらうが、方針を一變して民主化したる新獨逸にとりては反つて好都合であるかも知れない。此等諸州諸民族の獨立は形式上の沙汰であつて、經濟的には寧ろ獨逸の勢力範圍に來るべきものであると獨逸は極め込んで居るかも知れない。ブレスト條約の破棄は聯合側の要求なくとも將來獨露親善の必要上獨逸の自ら進んで爲さんとする所であつて、條約の締結されたる當時に既に社會黨は之に反對したものである。斯く考へてみれば講和の中心問題は自由競爭と云ふ問題であつて、獨逸は此によりて戰前の商權を徐々に回復せんと望んで居る。然るに此は正に英國側の怖るる所であつて今日も尚英國の論者中には、戰後國際經濟戰の大勢が定まるまで獨逸に原料品を與へまいと云ふ意見を臆面もなく發表するものがある。海洋の自由に到りては既に英國の干渉によりてウヰルソンの意志が牽制せられて居る。米國にありてさへ、共和黨の强硬論者中には獨逸に自由競爭を許す事は新しき武器を投げるやうなものであると强辯してウヰルソンを壓迫する者がある。自由競爭と海洋の自由、此の二つの問題がどう解決せられるか、此は講和問題の中最も興味ある要點であると私は考へて居る。此の際英國は此の自由をも奪つて一擧にして獨逸を粉碎せんとするか、將た爭ふべからざる正義の力を認めて此の點を讓るか、孰れ種々の策略が其の間に行はれる事であらう。

講和條約は如何に決せられるにせよ、戰後獨逸の運命は國家社會主義にある事は最早疑ふの餘地なく、彼は此の主義の下に組織的努力の力に訴へて英米勢力に對抗すべく、英米も亦大體國家社會主義の方針に從つて國內經濟組織の統一を計り、獨逸の努力に對し資本政策を以つて之に當るであらう。形勢茲に到れば、獨逸は必ず英米利權政策の打破を絕叫するであらう。而して彼の新武器は民主主義である。獨逸の民主主義は先づ國際自由競爭の要求となり、次いで中立國及び英米屬領地に於てプロパガンダとして用ゐられ、更に英米本國に於ても再び極端なる社會主義者の活躍となつて現れるであらうと思はれる。民主主義の利刄は今や英米資本制度の咽喉に擬せられんとして居る。英米の資本勢力は最早武力を以つてしても滅ぼすべからず。

之を滅ぼさんとすれば其の弱點を突かなければならない。而して弱點とは何ぞ、云ふまでもなく他種族の勞働である。獨逸の社會黨は此所を狙つて居るに違いない。英米の屬領地の勞働者及び其他英米が使役して以つて利用せんとする勞働者間に社會主義が汎く傳播すれば、是れこそ英米資本政策瓦解の端である。英米は天下の富を壟斷して居ても世界の人口を壟斷して居らない。英國は植民地土人の勞働を借らずして其の經濟組織を維持する能はず　米國も移民や墨其西哥人の勞働を借らずして、其の大產業組織は成立の見込なく、最近の情報によれば、米國は戰時建造の商船を用ゐて航海事業を發展せしめんため大に支那人を水夫として歡迎せんとして居る。米國は勞働の供給を支那人に求めんとする程勞働の缺乏を感じて居る。而も米國の魂膽は支那人を米國内に移民として用ゐず、たゞ支那内地に於て其他南米西伯利亞等の外國企業に於て用ゐんとするのである。英米は本國の勞働市場を獨占せんがために、既に獨逸植民政策の裏を掻いたのである。日本の南洋に於ける植民政策も、今後必ず陰に陽に彼等の妨害する所となるのではなからうか。

此の怖るべき資本勢力の侵害を防ぐため、戰後の世界は一齊に民主主義の世界的適用を英米に向つて迫るべきであるが、伊佛の態度は固より信ずべからず、東洋各民族は未だ民主主義の何者たるやを解せず、日本すら英米のプロパガンダに心醉して居る有様であれば、況して支那印度は、大局より觀て英米の懷柔政策は彼等の敵である事を看破するに到るは容易の事でなからう。併しながら玆に獨逸にとりて鑑とすべき露西亞と云ふものがある。

露西亞は窮せりと雖まだ精神的に獨立を失つてはゐない。トルストイを産みクロポトキンを産んだ露西亞は其の國民性に於ても理想に於ても英米のそれとは正反對である。常識と偏狹は彼の解せざる所である。彼は利を以つて誘ふべからず、況んや慈善事業を先驅とする英米のプロパガンダを以つて誘はれるものでない。彼の欲する所は「徹底」と云ふ二字である。彼は今や民主主義に徹底せんとして惱んで居るのである。我々は今日でこそレーニンやツロツキーを山師と見做し買國奴と見做して居るが、彼等と雖殘忍の他面に理想の閃きを失つてゐない。永く他郷に漂流生活を送つたユダヤ人であるとは云へ、彼等の思想感情は純粹に露西亞人のそれである。ドストエウスキーの小說を讀んだ人はレーニン、ツロツキーの如き殘忍と理想との兩面は露西亞人にとりて決して矛盾の性格でない事を認めるであらう。否寧ろレーニン、ツロツキーはドストエウスキーの小說に現れて來る典型的革命家の性格に適中せる事を驚くであらう。

而してレーニン、ツロツキーは英米政度に親しく殊に之に精通しながら、始めより之を獨逸の軍國主義よりも憎んだ男である。彼等が獨逸の金を用ゐて露西亞を崩壊せしめた動機は、英米評論家の言ふ如く私利私慾に基く陰謀であつたとは必ずしも斷定する事が可能ないこ固よりユダヤ人なる彼等の事であるから、普通一般のスラブの如き單純なる思想家ではなくして、實利に長けた一面あるは否むべからざる事としても、其所に理想に對する何等かの憧憬なくして危險極まる局面にあれ程執着して仕事が出來たであらうか。今より百年の後史家が彼等の運動を評して果して何と言ふであらうか。兎も角も彼等は二歩も三歩も時代を先に歩いて居る人であつて、彼等の運動こそ英米人の今日恐れて恨る所である。

到底彼等は懷柔政策を以つて導き得るものでない事を見越したる英米は、戰勝の勢に乘じ、此の際大々的に反過激派勢力を援けて彼等を孤立せしめんと計るであらう。先づ親英米の政府を立てゝ徐々經濟勢力を發展せしめんとする事が彼等の目的であらうが、露西亞ばかりはさう彼等の注文通りに行くものでなからうと私は觀て居る。近來露國の形勢に就ては英米筋の齎す情報以外殆ど何事も傳へられず、從つて露西亞の先途に就て今日豫想を逞ましくするも畢竟空想に過ぎないのであるが、私は此夏以來露國に過激派政府の復活することあるべきを思つて居た。八九月の頃ミリユーコフヤゴルキー等の如き人物さへも獨逸に款を通じ必ずしもレーニン、ツロツキーに反對せざる態度を示した事は事實であつて、此と同時に過激派政府自身も從來の非國家的思想を捨てゝ國家的組織統一の必要を認めて、及ばずながら之に努力せんとしたのであつたが、聯合側の煽動に依る反過激派運動に妨げられた。其後露國の形勢は混沌として知るべからず。獨逸の屈服したる今日、過激派は後援者を失つて斃れるか、或は聯合國は干渉の口實を失つて過激派は反つて其の勢力を回復するか、孰かであらうが、孰にしても英米佛は已れに都合の善い勢力を援けて之に反する者を挫くであらう。想ふにレーニン、ツロツキーの勢力は所詮今日のまゝ維持されるものではなからう。彼等の政府は瓦解して恐らく英米勢力を後援とする政府が之に更つて興るであらうが、併しながら此は一時の事である。如何なる政府が樹立されても、露西亞の國民性は軈て自らを發揮して、英米の懷柔政策に落る事はあるまい。私は露國の將來は、大體獨逸に於て勃興せんとする新民主主義運動の精神に倣つて國家的組織統一の緒に附くであらうと觀て居る。露西亞人は英米のデモクラシーに對しては理解もなく、また理解があつても嫌ひである。都市の勞働者は悉く革命思想

に感染し、多數の農民が依然として政治を知らず、されば上に一中心勢力となるべき資本家もない露國にどうして英米のデモクラシーが行はれやう。露西亞は軍國主義で治まるか、然らざれば徹底的國家社會主義で治るより外に望がない。軍國主義の破滅したる今日露西亞の道はたゞ一つである。

戰後の獨逸と露西亞との間には相互の主義理想に於て一味の同情が通じて居る。此に加へて、露國國民性の理解を有し地理の利を占むる獨逸の勢力は何としても英米側で爭ふべからざる強味である。英米側にして露國より獨逸の勢力を驅馳せんとするならば、資本政策を以つて之を牽制するより外に途なく、現に米國の實業家は折此の野心を抱いて居るやうであるが、露西亞は支那とは違ふ。英米の資本政策は忽ち露國革命黨の呪ふ所となるであらう。今日戰亂の機に乘じたればこそ、西伯利亞の獨立とか西伯利亞政府とか云つて騒で居るが、歐露の復活は軈て其の勢力を西伯利亞に展べ、西伯利亞は彼の轄に納まるべき事は自然の數でなからうか。況んや背後に獨逸の組織的民主主義の援助ある場合に於て、米國と雖どうする事も可能まい。

露獨の提携は英米に對し民主主義の逆襲を行ふに就きて一大勢力である。新民主主義の下に若し露獨の提携成るとすれば土耳其、バルカンは總て風を望んで其の勢力範圍に集るであらう。今日でこそバルカンは反對互に異解を以つてして殆ど收拾すべからざる形勢を呈し、此上には如何に英米を中心とする聯合國のプロパガンダは早くも切込まんとして居るが、講和後も永く此所で英米の勢力が維持せられたものと思ふのは誤りに近眼者流の觀察である。講和運動に關する獨逸の着眼點はもつと遠大なる大局に注がれて居る事を識らねばならぬ。講和は敗戰に次ぐ獨逸必然の策であるとは云へ、今日の大勢は獨逸有識者の昨年以來洞察してゐた所で、たゞ折角遣つて來た戰爭であるから、遣れる所まで遣れと云ふ作戰の勢に制せられて、遂に今日の悲運を觀るに到つたのである。

戰に敗れて汎獨主義の野心を失ひたる獨逸は、戰後民主主義の下に中央歐羅巴を統一せんとは敢に天の征服人道の意表に出づるものと稱すべきである。今後の獨逸の戰は正々堂々たゞ英米に向つて、民主主義の徹底的解決を要求する事である。公明正大世界に訴して恥ぢざるプロパガンダとは此の事である。獨逸の旗幟は總て印度に翻りスエズ・ジブラルタルを過ぎて、遠く海を超へてメキシコの野に樹立せられ、更に南米を聯ね得ないとは誰が言ふ。此等の國は皆新民主主義の理想によりて開放せらるべき國ではないか。兎も角も資本勢力對勞働勢力の戰鬪が此等の國に於て特に激しい勢で戰せられるであらう。

× × × ×

以上の所論は私一個人の偏激なる臆想ではない。新聞電報ばかりで天下の大勢を觀て居る人にとりては少々偏激のやうに思はれるかも知れないが、私の指摘した事實は現に世界の裡面に漲れる暗流であつて、而も此の暗流を眺めて怖れて居る者は誰よりも先づ英國の保守黨である。彼等の中には獨逸の民主化を喜ばず、反つて舊勢力を援け、之と結托して社會主義や勞働黨の勢力を防止せんと試みた者さへもあつた。今日でも斯くする事が大英國の運命を救ふべき本當の方針ではあるまいかと眞面目に考へて居る人がある。露西亞革命の時も、英國政府はケレンスキーを牽制し反つて舊勢の挽回運動に同情を寄せた事あるは蔽ふべからざる事實である。仔細に英國の輿論を視察する人は、英國は決して獨逸の民主化を喜んでゐないと云ふ事を認めるであらう。實を言へば民主主義の逆襲は既に英國國内にも及ばんとして居るのである。獨逸の軍國主義が滅びて時代は一轉し、外面英國の勝利となつたやうであるが、勢力の走る所人工的制裁を以つて防止し得べきものではない。一轉した時代は更に再轉して、利用せんが爲めに宣傳された民主主義は本當の民主主義に成つて來たのである。英國内に於ける勞働黨の勃興が即ち是れである。英國の勞働黨は今や既にツレードユニオンの範圍を超へて厖然たる綜合的勢力とならうとして居る。之に加へ戰場から歸つて來る兵士は案外急進に對して反感を持たず、寧ろ自國の統一黨を敵視し、昔は統一黨或は自由黨に屬してゐた者も今は擧つて勞働黨の援助者であると言はれて居る。而して此の將に勃興せんとする厖然たる勞働黨を率ゐる人は誰かと云ふに、それはケレンスキー時代に露西亞に使して、當時の英國の對露政策を非難して、ストックホルム萬國社會黨會議の運動に同情を寄せた結果、政府と意見合はずしてロイド・ジョージ内閣を去り、野に下つて新しく勞働黨の組織統一に盡瘁したヘンダーソンである。而して此のヘンダーソンこそは來らんとする選擧競爭に於てロイド・ジョーヂに對抗し得べき唯一人として仰がれて居る。私は此の勞働黨の勃興があつても、英國の對外政策は依然として利權政策を以つて進み、之に依つて獨逸勢力に對抗するであらう、從つて國際社會主義運動は前途絶望であると確信して居るが、併しながら英國が戰勝に依つて反つて從來の期待を裏切られんとして居るやうな形勢ある事だけは認めざるを得ない。

× × × ×

顧つて日本を觀るに、日本の事は言ふに忍びない。英米佛でさへも獨逸非難の旗を捲いて、寧ろ冷靜に運命の進展を凝視し

居る時に、今更のやうに獨逸を罵倒して彼れ輕卒なる批評の國民である。獨逸の國民性と其の國際的位置に對して何等の理解をも有せず、十年前の英國も今日の英國も變りがないと思つて居る人が得意然する時である。此んな時であるから凡て言ふだけが野暮であらうが、たゞ我國戰後の外交につきて一言して置きたい事がある。

日本は英米の尻馬に乘り、英米思想の糟粕を嘗めて騷ぐ時ではない。英米からは反つて侮られ、獨逸からはアングロサクソンの手先であるやうに思はれる境遇に自らを陷れてはならない。國際外交の上に於て英米と提携する事は姑く別問題として、主義主張に於ては日本には自ら日本の採るべき方針がある。即ち英米に向つて民主主義の世界的適用を迫る事である。國際外交の上に於て日本は何處までも獨逸を敵とする必要がなからう。主義主張の上では寧ろ則せずして民主化したる獨逸と步調を一つにしなければならぬ運命にある。斯くする事は我國の態度を世界に是認せしめて反つて英米の傲慢心を收める所以であらうと思ふ。戰後の我外交は此の主義主張と國際外交との調節運用に其の妙を發揮すべきものである。而して此の主義主張と國際外交との調節運用を行ふべき中心的舞臺は[illegible]支那問題である。日本は支那に於て英米にも屈せず獨逸にも倚らず、[illegible]主義の大勢を適用して、獨立の支那を[illegible]に導か[illegible]上に獨立の位置を保つ事が出來ない運命に陷ることであらう。

日本の方針としては、支那の民族自治自決以外にあつてはいけないと私は考へて居る。而も此は單に政治上の自治自決ではなくして、經濟上の自治自決であらねばならない。所謂云へば國際問題として支那に經濟的自治自決が何所にあるかと直ちに疑ふ人があるであらうが、無いから此が日本の爲すべき機會であるのである。[illegible]我々の働くべき要點は米國の政策即ち支那の「獨立確保」と「門戸開放機會均等」との二つの主義の批評である。此の二つの主義に矛盾はないか？先づ門戸開放の方から述べてみるに、此は列強が相互を保障する主義であつて支那を保護する主義ではない。要するに云へば我も人も支那に於ては同じ權利を有する、[illegible]國のみに權利を與へないといふ主義で、此は今日迄列強が行つた政策の慣例を踏襲して説明する迄もなく何人も認める所であらう。斯る列強の經濟政策の下に支那自身が何の政治的主權を行ひ得やうか。經濟的の自治自決がなくして支那の獨立國土保全は畢竟空文である。偶々隣國の武力侵略を防ぐ口實に供せられる位の[illegible]して[illegible]には、[illegible]國土保全門戸開放の[illegible]外交[illegible]

今日迄日本の政治は[illegible]にして[illegible]であ

以上の所論は私一個人の矯激なる空想ではない。新聞電報ばかりで天下の大勢を觀て居る人にとりては少々矯激のやうに思はれるかも知れないが、私の指摘した事實は現に世界の裡面に漲れる暗流であつて、而も此の暗流を眺めて怖れて居る者は誰よりも先づ英國の保守黨である。彼等の中には獨逸の民主化を喜ばず、反つて舊勢力を援け、之と結托して社會主義や勞働黨の勢力を防止せんと試みた者さへもあつた。今日でも斯くする事が大英國の運命を救ふべき本當の方針ではあるまいかと眞面目に考へて居る人がある。露西亞革命の時も、英國政府はケレンスキーを牽制し反つて舊勢の挽回運動に同情を寄せた事あるは蔽ふべからざる事實である。仔細に英國の輿論を觀察する人は、英國は決して獨逸の民主化を喜んでゐないと云ふ事を認めるであらう。實を言へば民主主義の逆襲は既に英國國内にも及ばんとして居るのである。獨逸の軍國主義が滅びて時代は一轉し、外面英國の勝利となつたやうであるが、勢力の走る所人工的制裁を以つて防止し得べきものではない。一轉した時代は更に再轉して、利用せんが爲めに宣傳された民主主義は本當の民主主義に成つて來たのである。英國内に於ける勞働黨の勃興が即ち是れである。英國の勞働黨は今や既にトレードユニオンの範圍を超へて超然たる綜合的勢力とならうとして居る。之に加へ戰場から歸つて來る兵士は案外獨逸に對して反感を有たず、寧ろ自國の統一黨を敵視し、昔は統一黨或は自由黨に屬してゐた者も今は擧つて勞働黨の援助者であると言はれて居る。而して此の將に勃興せんとする超然たる勞働黨を率ゐる人は誰かと云ふに、それはケレンスキー時代に露西亞に使して、當時の英國の對露政策を非難して、ストックホルム萬國社會黨會議の運動に同情を寄せた結果、政府と意見合はずしてロイド・ジョーヂ内閣を去り、野に下つて新しく勞働黨の組織統一に盡瘁したヘンダーソンである。而して此のヘンダーソンこそは來らんとする選擧競爭に於てロイド・ジョーヂに對抗し得べき唯一人として仰がれて居る。私は此の勞働黨の勃興があつても、英國の對外政策は依然として利權政策を以つて進み、之に依つて獨逸勢力に對峙するであらう、從つて國際社會主義運動は所詮絶望であると確信して居るが、併しながら英國が戰勝に依つて反つて從來の期待を裏切られんとして居るやうな形勢ある事だけは認めざるを得ない。

×　×　×　×

翻つて日本を觀るに、日本の事は言ふに忍びない。英米佛でさへも獨逸非難の旗を捲いて、寧ろ冷靜に運命の進展を凝視し

て居る時に、今更のやうに獨逸を罵倒して快ぶ輕卒なる無自覺の國民である。獨逸の國民性と其の國際的位置に對して何等の理解をも有せず、十年前の英國も今日の英國も變りがないと思つて居る人が得意額する時である。此んな時であるから凡て言ふだけが野暮であらうが、たゞ我國戰後の外交につきて一言して置きたい事がある。

日本は英米の尻馬に乘り、英米思想の遺骨を奉じて騷ぐ時ではない。英米からは反つて侮られ、獨露からはアングロサクソンの手先であるやうに思はれる境遇に自らを陷れてはならない。實際外交の上に於て英米と提携する事は姑く別問題として、主義主張に於ては日本には自ら日本の採るべき方針がある。即ち英米に向つて民主主義の世界的適用を迫る事である。實際外交の上に於て日本は何處までも獨逸を敵とする必要がなからう。主義主張の上では寧ろ期せずして民主化したる獨逸と步調を一つにしなければならぬ運命にある。斯くする事は我國の態度を世界に是認せしめて反つて英米の敬畏心を收める所以であらうと思ふ。戰後の我外交は此の主義主張と實際外交との調節運用に其の妙を發揮すべきものである。而して此の主義主張と實際外交との調節運用を行ふべき中心舞臺は勿論支那である。日本は支那に於て英米にも偏せず獨露にも倚らず、世界的民主主義の大勢を順用して、獨立の外交舞臺を開かずんば遂に國際上に獨立の位置を保つ事が出來ない運命に陷るであらう。

日本の方針としては、支那の民族自治自決以外にあるまいと私は考へて居る。而も此は單に政治上の自治自決ではなくして、經濟上の自治自決であらねばならない。斯う云へば實際問題として支那に經濟的自治自決が何所にあるかと直ちに難ずる人があるであらうが、無いから此が日本の乘ずべき機會である。先づ我々の衝くべき要點は米國の政策即ち支那の「獨立領土保全」と「門戶開放機會均等」の二つの主義の批判である。此の二つの主義に矛盾はないか？先づ門戶開放の方から調べてみるに、此は列強が相互を保護する主義であつて支那を保護する主義ではない。惡く言へば我も人も支那に於ては同じ權利を有する、一國のみに權利を與へないと云ふ主義で、此は今日迄列強の行つた政策の實例を擧げて說明する迄もなく何人も認める所であらう。斯る列強の經濟政策の下に支那自身が何の政治的主權を行ひ得やうか。經濟的の自治自決がなくして支那の獨立領土保全は畢竟空文である。偶々隣國の武力侵略を防ぐ口實に供せられる位の事である。してみれば、米國の所謂支那の領土保全門戶開放の二主義は看板外交の表徵と見做してよい。

今日文明國の政治は其の實質に於て主として經濟政策であ

る。經濟的獨立なくして政治的獨立は不可能である。若し米國の支那の獨立領土保全の主張にして眞面目な主張であるならば、其の必要條件として支那の經濟的自治自決を認めて之を擁護しなければならぬ筈である。此所が日本のプロパガンダを以つて逆襲すべき中心點である。

然らば支那の經濟的自治自決とは何を意味するかと云ふに、此は通商の自由の外何等經濟上の特種權利をも列强に與へないと云ふ事に歸着すべき問題である。今日迄既に列强が獲得したる利權は別として、今後凡ての利權獲得運動を許さないと云ふ方針を日本が自ら進んで樹立し、一方此の主義の下に日支親善の基礎を固め、他方此のプロパガンダを盛んに歐米諸國に行つて、英米政府及び實業家の野心を牽制する武器とすべきである。一體英米の對支政策は輿論で行はれて居るのではなくして、實業家殊に極東に利害關係を有する實業家と政府との隱謀によつて行はれて居るのである。東洋問題に就ては英米一般社會は殆ど沒交渉で、彼等は支那問題の何たるかをも解せず、從つて日本を排斥すると云ふやうな考もないのである。日本のプロパガンダは此の一般社會の輿論を目的として行はれねばならぬ。政府や當面の實業家を對手としての運動は畢竟妥協に終らずんば衝突である。

支那の經濟的自治自決主義を樹立するため第一に論議すべきものは上述の門戸開放の意義を糺す事であるが、第二に實際問題としては四國借欵の目的及び性質を明かにする事である。英米としては支那の獨立よりも國際管理を希望するは言ふまでもない事である。また支那に滯在する英米人の多くは支那を以つて慢性病者と見做し遂には斃れるものと決め込んで居るやうである。此は彼等の希望する所であつて、支那の運命は結局此所に到るのかも知れないが、日本としては飽くまでも此の意見を排斥し此の形勢を防止する方針で進まねばならぬ。であるから四國借欵も總て支那を國際管理に導く階梯となるべき性質のものであるならば、日本は人道上の主義から云つても實際政治の方針から考へても之に反對しなければならぬ。全々四國借欵を打切ると云ふ事は可能ない事でもあらうし、また或は反つて不得策でもあらうが、少くとも四國借欵は全然信用借欵とし、支那の經濟的主權を侵害するが如き抵當借欵たらしめざるだけの主張を立て置く必要がある。日本は今日まで東洋に於て專ら露國の武力侵入を防いで來たのであるが、此の危險は今度の戰爭の結果で全然去つたものと見做してよいが、之に代るものは英米の資本政策の侵入である。今日以後の日本の對支政策は之を防止する目的を以つて立てられなければならない形勢となつて

居る。而して之を防ぐ武器は最早武力にはあらずして民主主義の應用である。露獨の民主主義を借りて英米の侵略主義を防がなければならないとは、何と云ふ運命の逆轉であらう！

若し支那に對する英米の利害關係が有無相通すると云ふ通商貿易の範圍に限られて居るならば、固より非難すべき性質のものでもなく、また實際防ぎ得べきものでもないが、英米の目的は需要供給の自然的關係に基く商權の擴張よりも、寧ろ支那に於て支那自身の事業を自分等の手で遣らうと云ふ野心、即ち資本政策である。自分等の有り餘る資本を用ゐて他國の富源と勞働とを支配せんとする野心である。自然的需要供給の關係から云へば英米と支那との關係は極薄いもので、到底日本のそれに比敵するものではない。支那の原料たる鐵綿花羊毛等は多く英米自身の要せざる所で、また今日支那に於て要せらるる加工品は機械類を除きては主として日本の供給する所であつて、雜貨化學工藝品などの範圍では米國は少くとも今後二十年間は日本の敵ではなからう。加ふる日本は地理の利を有し支那との需要供給の關係が自然に成つて居る。此が英米に對して日本の强味である。日本は何所までも自然的需要供給の範圍で英米と競爭し、資本政策の競爭には加はらざるのみならず、飽くまで之を撲滅する事に務めねばならぬ。支那の獨立を危くして延ひて日本自身の打撃となるべきものは正に此の資本政策の競爭である。支那に對する日本の資本政策は支那人の反感を招き、英米資本勢力侵入の口實を與へるもので、我國にとりて此程愚策はない。

私の此の意見に對し、論者は批難して、支那の第一に要求する所のものは資本である。英米の資本政策を排斥して支那の經濟的開發が可能るかと言ふであらうが、私の排斥する資本政策とは利權獲得を目的とする投資の事で、支那の經濟的主權を侵害せざる正當なる投資、即ち支那の自主的發展を前提とし、其の發展の將來を信用として、資金に對する普通一般の利息を目的とする投資は固より歡迎する所である。今日の米國の發展は其の源を尋ぬれば歐洲資金に負ふものであるが、歐洲人の米國に對する投資は槪して斯る普通一般の目的のために行はれたので、決して利權獲得運動ではなかつた。此が米國の獨立を保全した所以で、支那の經濟的發展も之と同一の方向に進み得ないと云ふ理由はなきのみならず、此は何所までも日本の眞實なる援助によつて開拓せられなければならぬ運命である。

此を要するに日本の對外政策は支那を中心として、戰後勃興すべき獨逸の自由競爭政策と一致すべきものである。此の政策の表面に現るべきプロパガンダは即ち民主主義の逆襲である。

日本は此のプロパガンダを用ゐ、先づ支那人をして世界的民主主義の奇義に徹底せしめ、英米の資本政策は獨逸の軍閥主義に代る世界の專制力である事を自覺せしめねばならぬ。支那四億の民の勞働は斷じて之を英米資本の犧牲に供すべきものではない。

日本が支那及び列强に對して此の主義を表明するには、講和を機として今日は絕好の秋である。靑島の如きは支那の要求通りに無條件に之を還附し、先づ支那をして我國の誠意のある所を認めしめ、彼を援けて講和會議に十分に參加せしめ、會議の席上東洋民族自治自決の大方針を樹立すべきであるが、仄聞する所によれば、我外交の劃策此の方針に出でずして、英佛の秋波を迎へて區々たる利權獲得に腐心せるものゝ如し。英國としては、米國大統領の主義主張を牽制するため、佛と結び、更に日本を取込みて、講和方針の大局を制する考であらうが、英國の尻馬に乘つて從來の外交方針を固執せんとする我國の將來は寒心すべきものである。區々たる靑島一つのために支那の疑惑を招き、列强に利權政策の口實を與へて、我國の將來が確保せられると思ふのであらうか。新聞紙の傳ふる所によれば、英米實業家の利權獲得運動は既に西伯利亞に於て着々開始せられんとすと云ふ。我自らの方針定まらずして、疑心闇鬼を實きて徒らに焦心するとも所詮及ばざるべし。

英米の實業家は戰後東洋に於て利權擁護及び獲得の方針を以つて進み來るは固より必至の勢である。而して此等實業家の利害が國際問題を惹起するに到らば、政府が彼等の後援者となつて現れ來る事も當然豫想せらるべき事である。此の大勢は到底外交の折衝によつて防ぐ事は可能ない。之を防ぐには支那人及び露西亞人自らの民主運動に俟たなければならない。日本の方針としては、彼等を援けて此の民主運動の氣運を促進するより外に採るべき道がない。此の大局の目的のために必要とあらば、日本はたゞに靑島のみならず、滿洲をも放擲すべきである。日本は凡ての利權政策を否定して、之に代ふるに植民政策を以つてし、支那、南洋、西伯利亞にどしどし移民を送り、彼等をして健實なる生產事業に從事せしめ、東洋民族自治自決の大方針を標榜して親しく支那人及び露國人と交つて彼等の間に民主主義の精神を涵養し、英米の利權政策を根柢より破壞すべき方針を採るべきである。露國の過激派なども徒らに之を怖れずして、寧ろ彼等を善導する程の氣慨を以つて進まねばならぬ。戰後の日本の國家としての使命も民族としての膨脹策も此の點に在る。若し我政府及び國民の自覺と努力が此の方向に出でずして、依然として保守主義を固執するやうならば、日本の前途は

迎要衝淵である。英米獨の勢力が東洋に擴張せらるるに從つて、日本は列強からも顧みられず、支那諸西亞からも顧みとせられず、今日までの東洋における位置は槿花一朝の夢と散るであらう。

法律の社會觀・社會の法律觀

—穗積先生の『法窓夜話』を讀みて—

法學博士　牧野英一

穗積陳重先生の『法窓夜話』が第四版になつた。既に第四版になつた位であるから、今更改めて其の如何なる書物なるかを說く必要はなからう。法律の書物と謂へば、兎角抽象的な理論を說いたものであるが、之は具體的な事實を述べたものである。法律上の議論と謂へば、いつも沒趣味な內容のものとのみ思はれるのであるが、之は極めて面白い東西の物語を書いたものである。法律の書物として斯の如き書物の出來たことは、多くの人の意外とする所であつた。法律の議論として斯の如き敍述が公にされたに付ては、何人も一種の興味を感ぜねばならぬ所であつた。而して讀書社會は、其の增刷を促し〳〵て、終に今、第四版が公にされることになつたのである。初版の出たのは大正五年の一月であつた。之が註釋書でも教科書でもない法律書であるから面白い。一體、註釋書でも教科書でもない法律書が重版したといふことは、餘り例のないことであるやうに思ふ。

□

考へて見ると、生生の法理學の講筵に、其の席末に列なつたのは、もう十七年あまり前のことになる。昨日のことのやうに思つて居たが、もうさうである。而して今、此の書物を讀み說みして居ると、其の十七年の昔のことが、ありありと目の前に出て來るのである。毛の擦れた制服の寒かつたことや、ペンの尖をきしませながら忙しく筆記したわびしさなど思ひ出される。さうかと思ふと、圖書館のスチームの暖かな裡でいろ〳〵

な書物に讀み耽つたことも今更ながら懷しかつたし、白紙のやうな頭の中へいろ〳〵な先生の學説の詰め込まれるも、其々もの珍らしかつたやうに思ひ出されるのである。而して其のいろいろな先生の最後の先生が穗積先生で、卒業の年に承つた其の法理學の講義の中には面白い多くのお咄があつたのである。而して其の面白かつたお咄の幾多が今、茲に、此の書物の中に出て居るのである。

其の講義でも、矢張、私共は筆記をさせられたのである。併し、其の筆記と筆記との間には説明が這入るのであつた。其の説明と説明との間にはお咄が這入るのであつた。其のお咄とお咄との間には議論が這入るのであつた。其の議論と議論との間には暗示が構成されるのであつた。暗示と暗示とが靜かに私共の智識慾をそゝり、やんわりと併しながら矢張強く私共の研究心を刺戟して行く間に、又ペンを執り、筆記の先を急ぐのであつた。

筆記と法律とが、お咄の媒介に依つて、哲學的な、社會學的な、廣い深い暗示を私共に與へたのであつた。今、此の書物に依つて、其のお咄が繰り返されて見ると、其の暗示が又新たに活躍せねばならぬ。其の暗示の下に研究を初め、研究を續けて居る私が、其の十七年前の當時の心持のやうなことを書いて見ようと思ひ出したのである。暗示を與へたのは先生である。

若し私の考へて居る所に少しでも採る可きものがあらば、それは先生のお蔭である。暗示を受けたのは私である。暗示が軌道を外れて居れば、それは更に思ひ直さねばならぬ。暗示を只暗示として、筆の走るまゝに書いて見やうかと思ひ出したのである。

□

此の書物には若穗積君が序文を書いて居られる。親爺の著書に伜が序文を書くといふだけでも、既に甚しく面白い。而も、其の序文に曰く「法律の話と云へば直ちに乾燥無味が聯想されるのも無理はありません。併しながら、法律が道德宗教と相並んで人生の大法則である以上、而して此の人生なるものが乾燥無味でないならば、法律談としても乾燥無味な筈はないのであります。父が此の雜談集を公にしますのも、恐らく法律談は乾燥であるといふ濡衣を乾したい微意でありませう」と。然り。法律は人生の一面である。人生に曲折がある如く法律に曲折がある。若し人生に意味あるものとせば、法律にも亦意味がなければならぬ。唯、從來の法律論は、曲折のある人生を、四角四面な型に閉じ籠めてしまひ、意味のある筈の人生を、無意義な概念的形式に壓し付けて了つた爲め、法律乃至法律論は人生と沒交渉な無味乾燥なものにされてしまつたのである。若し法律

乃至法律論を、科學として其の妥當な地位に立たしめ、思想として其の當然な立場を占めしめんとならば、「此の人生なるものが乾燥無味でない」と同じやうに「法律談とても乾燥無味な筈のない」やうに研究が進められ、主張が構成されねばならないのである。

□

さて、此の書物には、物語が通計百收めてあるが、其の第一は「パピニアーヌス」が「カラカラ」帝に殺されたお咄である。「パピニアーヌス」は「ローマ」の法學者である。「カラカラ」帝が其の弟を故なく殺し、而も「パピニアーヌス」に對して其の罪案を作れと命じたとき、「パピニアーヌス」は之を拒絕したのであつた。爲に「パピニアーヌス」は直ちに斬首其の所を異にせねばならぬことになつたのであつたが、其の拒絕の時に『殺親罪を辯護するは之を犯すより難し』と主張したのであつた。之がお咄の第一である。

「パピニアーヌス」は所謂「ローマ」五大法學者の一人で「ローマ」法下吾人の爲めに幾多の貴重なる意見を遺した人であるが、若し「パピニアーヌス」の數多き意見の中で如何なるものが最も大きなものであるかといふならば、恐らく、右の語がさうであると謂はねばなるまい。右の語は彼の法律上の意見ではない。併し、それは彼の法律生活上の大意見である。惟ふに、「ローマ」法は、今後と雖も、尚、相當に永い生命を保つことであらうが、兎に角昔の「ローマ」の法律であつただけに、段々と歷史的のものになりつゝあるのである。併し、法律といふものが人生から滅却されない限り――而して人生は果して如何なる時に於て法律を不必要とすることを得るであらうか――「パピニアーヌス」の右の語は殘るに相違ない。換言すれば、右の語は、法律の最高の意義、其の最も徹底したる論理的意義、其の最も純粹なる規範的本質を表明したものとして、吾人に最も深い哲學的暗示を與へつゝ、法律其者と共に其の運命を續けて行くことであらうと思はれる。

□

新律綱領にも、改定律例にも、大逆罪に關する規定がない。其の何故に然るかの物語がある。第八話「副島種臣伯と大逆罪」がそれである。新律綱領の草案中には謀反大逆の條かあつたのださうだが、副島參議が之を見て『本邦の如き國體萬國に卓越し皇統連綿として古來曾て社稷を覬覦したる者無き國に於ては斯の如き不祥の條規は全然不必要である。速に削除せよ』と命ぜられたのであつたさうだ。舊刑法制定の時、之が問題になつたが、其の時は特に上奏を經て、皇室に對する罪及び內亂に關

との明文定められることになつたのださうである。惟ふに之を規定しなかつたといふのも面白いし、又之を規定したといふのも面白いと謂ひ得よう。第一に、何故之を規定しなかつたのが面白いか。まことに副島參議の主張のやうに、それは不祥の規定、不必要の規定であつたからである。王政復古の當時に於ては皇室と國家とが絶對的に無條件に認められねばならなかつたのである。法律で之を何とも規定しないことは、まさしく皇室と國家とを絶對的に無條件に認める所以であるのである。之を規定するはつまらぬ聯想を社會に引起すだけのことで、全く不祥な規定であるのである。加之、當時の法律は論理的の編制の下に出來たものでない。其の刻下の必要を必要として出來たものである。之に右樣な規定を設けるといふことになると、それは全く無用の閑文字に歸着することになる。法律殊に應急的法律に閑文字のあることは、機械殊に危險なる機械に不用の裝飾があると同じく、場合の如何に依つては却て害がある。少くとも不必要なことであるのである。私は、此頃出來る應急的法律(右の意味に於ける)が、種々な場合を論理的に想像した不必要な規定を含むことと、時として多きに過ぎずやと思ふことがあるのである。第二に然らば、之が規定せらるゝに至つたことが何故に又面白いのであるか。謂ふまでもなく、舊刑法第二條は罪刑法定主義を明かにして、吾人の刑法上の生活は之に依つて法治的になつたのである。法治生活を支配す可き其の刑法は比附援引や不應爲律を許す可からざるもので、從て、論理的に構成されて居なければならぬものである。既に論理的に之を構成する以上、刑法典は最早應急的法律ではないのである。されば、それが皇室に對する罪內亂に關する罪から初まるといふのは當然である。加之、既に法律を論理的に考へるといふ素養が社會に完うされた以上、皇室の法律上の地位が法律的に明白にせられるのは、最早不祥事として取扱ふ可き限のものでない。憲法第一條第四條が天皇の統治權を明かにして居るのも亦同じ。要するに副島參議の議論は、法律の進化、吾人の法律生活の發達といふことに關して面白い暗示を與へるものと私は考へるのである。

尙之に關聯して二つの面白い物語がある。其の一は第十三『副島種臣伯と量刑の範圍』で、刑法上裁判所に刑の裁量を許すことは副島參議が新律綱領制定當時主張された所で、それは「フランス法」刑に着目された結果であつたからであるさうである。其の當時は餘りハイカラの說として斥けられたのだといふことである。今日の刑法では、刑罰の量定に付き裁判官に自由裁量の餘地を認めるのが一般であり、而も其の自由裁量の範圍の擴

大されることが、刑法近時の發達に於て特に注意す可きことなのであるが、昔の刑法では、刑罰の分量は犯罪の如何に依りて一定して居る。竊盜などに付ても、其の贓額の大小に依りて一定し、新律綱領に依ると、一兩以下は笞五十、一兩以上杖六十、十兩以上杖七十、以下三十兩以上、四十兩以上といふやうに刻んで、百兩以上流一等云々三百兩以上絞となつて居る。「フランス」でも革命の刑法卽ち一七九二年の刑法ではさういふ風であつて、裁判官を法律の單純な自働機械と見たのであつたが、一八一〇年に「ナポレオン」が刑法(卽ち現行刑法)を作つたときは所謂『何月以上何年以下の懲役に處す』といふ式にしたのである。それでも尙重罪輕罪の區別があつて、殺人の刑は常に重く、竊盜の刑は常に輕くといふことであつたが、我現行刑法では、重罪輕罪といふ墻壁を撤排し、殺人にも刑の執行猶豫を許し、竊盜にも懲役二十年のことがあることになつたのである。其の二は第六十二話『民權の意義を解せず』で、箕作麟祥博士が「フランス」語の「ドロア・ジヴィル」を民權と譯されたのを、明治三年の太政官內に設けられた制度局の民法編纂會では何人も理解が出來なかつたといふ物語である。箕作博士の說明は其の人々に理解せらるゝことを得なかつたが、其の會長たりし江藤新平氏は『活さず、殺さず、姑く之を措け。他日必ず之を活用するの時あらむ』と謂はれたといふことである。以て權利といふことは、當時の思想には夢想だもされなかつたのである。一體權利といふ考は、沿革上新らしいものであつて、「ローマ」法は古代法としては驚くべく發達して居た法律であるのだが、權利といふ考は明白でない。之は全く近世文明の一大思想であるといふことが出來るのである。

因に附加して置きたいが、穗積先生が、新律綱領、改定律例に付て私共に注意を促がされた點がある。それは其の上諭文中に、新律綱領には『內外有司其之を遵守せよ』とあり、改定律例には、『爾臣僚其れ之を遵守せよ』とあることである。之では法律が人民全體に對して公布されたものとはなつて居ないのである。明治十三年の刑法には只『此旨布告候事』とある。憲法發布勅語に至つて明かに、『現在及將來の臣民に對し此の不磨の大典を宣布す』とある。法律生活に關する新らしい思想が明治の思潮史に於て、如何なる時期に萌芽し、發達し、完成したかを考へるに付き面白い事實である。

□

第十四話に『商鞅移木の信』といふのがある。商鞅が秦の孝公に仕へて相となつたとき、其の新政の第一着手として、長さ三丈の木を市の南門に立てて、若し此の木を北門に移す者あらば

十金を與へむといふ令を出した。併し、人民は何のことだか解らなかつたので、誰も手を付ける者がなかつたから、更に令を下し、能く移す者には五十金を與ふ可しとした。此の時に、一人の物好きが試みに其の木を移した所、商鞅乃ち五十金を與へて令の僞なきことを示した。此に於て世人皆驚き、商君の法は信賞必罰、從ふ可し、違ふ可からずとの感を深くしたので、初めて新法實施の端が開かれ、秦國の富强を見るに至つたといふ物語である。穗積先生、之を評して曰く、其の機智は必しも感ず可きものなしではないが、此の如き兒戲を以て法令を弄ぶは宜しくない。法の威力の眞の根據は其の社會的價値であつて、信賞必罰といふが如きは、單に其の威力を確實ならしめる所以に過ぎぬ。刑名法術者流が、自ら「法を造るの弊」を嘆ずるに至つたのみならず、この法律萬能主義の爲めに永く東洋に於ける法律思想の發達が阻害されたと。私は、之を次のやうに論じて見たい。抑も法律の本質を定めるには、之を其の實質的方面と形式的方面とを區別してかゝらねばならぬ。實質的方面とは法律が社會的規範として妥當性を有することである。形式的方面とは法律が一定の力に依つて强行せられるものであるといふことである。法律が其のノーマルな狀態に在るときは、それが此の兩者を併せ具有するのである。併し、生理的に絕對にノーマルな人間を見ることの出來ないが如く、法律も亦、個々のものに就て論ずれば、此の兩方面を完全に具備することが出來ないものと謂ふことが出來よう。斯の如くにして法律の發達には、或時期には其の實質的方面が重しとせられ、他の時代には其の形式的方面が高調せられ、相交錯して進化の過程を踐んで行くのである。併し、法律は此の兩箇の方面を具備することに因つて存立するものであるから、一定の時代に於て其の實質的方面が特に重しとせられても、其の半面に於て一定の程度の强制力が豫定せられねばならぬので、若し强制力が其の一定の最小限度を下るに於ては、實質の立派な其の規範も單純な迂遠な敎訓として取扱はれてしまふことになる。孔子の徒は禮樂を以て法を行はむとした。（尤、彼等は禮樂形政と謂つて居たのである。）予輩の解する所では、禮樂は孔子の認めた强制方法であつたのである。禮樂の强制力が弱まるに從つて、堯舜の道は、最早、法律でないものになつてしまつたのである。之に對して、或一定の時期に於て、法の强制力が特に高調されても、其の內容が社會的價値を失ふに於ては、社會は、最早、其の法律を遵奉しないのである。或場合には法律を空文にしてしまふ。「デズエッドー」といふ現象、即ち法の不施行に因る法の廢止と事實がそれである。それでなくても、判例が法律の內容を變化させてしま

ふ[illegible]ことなし、[illegible]て其の[illegible]制力に依つて、其の法律を強いんとするならば、茲に社會的[illegible]爭が起る。されば法律は如何なる鞏固な強制力の下に立つても、其の內容か又其の一定の最小限度を下るに於ては、法律としての存立を失ふことになるのである。右樣の一般的觀察からして商鞅の改革を考へて見ると、彼は、正しく法律に付き其の強制力の方面を高調したものであつたのである。彼を以て刑名の徒と一概に蔑しつけるのは、吾人の立場からすれば甚だ偏頗な批評である。現に彼の改革は、秦の富强を致す所以のものであつたので、吾人が、今日、强大なる國家の力の下に社會的立法る行はんことを希望するのも、同一の趣旨である。實際に於て、禮樂派の政治論は、當時、最早時勢後れになつて居たのである。而して、商鞅は時勢の變遷を見るに於て一の新らしい男であつたのである。唯、商鞅は禮樂派に對する反動運動の渦流に投じたままで押し流されてしまつた。法律の實質に關する考慮を餘りしなかつた。從て、秦をして富强ならしむる所以のものと、秦をして其の富强を保持せしむる所以のものとを混同してしまつた。爲めに自らも身を滅ぼし、秦も亦滅ぶに至つた。私は穗積先生が商鞅の改革を『機智』とされ、其の方法を『兒戲』とされたことに付て幾分の不滿を有する。併し、商鞅の改革は全く半面[illegible]たことに[illegible]我方の[illegible]代[illegible]て論ずれば、所謂自由法運動が法の社會的價値を高調するに[illegible]して、商鞅の遺却した半面が特に吾人の反省を促がすもの大なりと信ずる。

抑も法律萬能主義には二箇の意義があると思ふ。其の一は成文法其者をそのままに解釋して、それで法律の適用が完うされると信ずるものである。其の二は苟も法律として一定の事項を命令する以上、それは必ず思ふ通りに實行出來るものであるとするものである。成文法を其のままに解釋することを以て法の適用を完うするものと考へることは、法を單に歷史的事實として理解することである。法を社會的規範として理解するに於ては、法の實質が社會と共に進化せねばならぬことを認めねばならね。又、法律として命ぜらるゝ以上は其の法律が必ず思ふ通りに實行せらるゝものであると信ずることは、國家の力を單に有形的な力と見るものである。國家の力には無形的な精神的な要素があるので、而して、此の要素の爲めに、其の有形的な力が其絕對的な力になるのである。有形的な力は、如何に强くとも、所詮相對的たるを免れない。有形的な力は、それが精神的な意味を有することに依つて、初めて本當に絕對的なものになるのである。力が精神的な要素を包含すといふのは、力が

社會乃至國民の理解納得の上に行はれるといふことである。其の理解納得を得るには、力の作用即ち法の實質が社會的價値を持たねばならぬのである。從て、法は單に法として命ぜらるゝことに依り萬能たることを得るものでないと謂ふことになるのである。されば、以上何れの意味に於ても、法律の形式的意義を立場とした法の萬能主義は、到底許す可からざる思想で、而して其の許す可からざるものなることは、其の主義が法律の實質を考慮しないといふことに存するのである。此の如くにして法の實質即ち其の價値性といふことが法律思想の中核になるので、從て、法律の形式を、其の强制力を除外し、價値判斷の對象として法律を論ずることが、科學としての法律論の特殊な使命になるのである。

官僚主義とデモクラシーの爭といふことが現下の問題になつて居る。問題の政治的社會的意義には、私などの喙を容れる限りでないことがあるやうである。併し、法律の上から之を考へて見ると、前上論じたやうなことになりはしないであらうか。私には、官僚派の議論とデモクラシー派――之を派と謂ふことが若し許されるならば――の主張との間には、論理の遭遇に適切でないものがあるやうに思ふ。官僚派は政治の形式を論ずるのである。デモクラシー派は其の實質を論ずるのである。國家といふ統制の下に吾人の生活を規律することが必要である以上、而してそれが歴史的の大事實である以上、政治の形式は決して觀過されてはならぬ譯である。併し、若し此の必要を論ずるに方つて、「ロシヤ」の現狀、過激派の跋扈などを引合に出して來ることになると、どうも甘く納まらない。政治の形式的意義といふことにも、自ら右の如く限界があるからである。之と同時に、政治の實質、即ち其のデモクラシゼーションを論ずるに付ても、それが、單なる理想に止まらず、飽くまでも現實な政治たらむと欲する以上、職業政治の沒落を考へねばなるまい。唯、現下の政治論としては、政治の實質論が如何に高調されねばならぬかが問題となるのであらうと思ふ。丁度、現時の法律論として所謂自由法論が力說されねばならぬやうに。

若しさう理解して來ると、尙議論がある。若し、現代の政治論乃至法律論として彼のデモクラシーや自由法論が高調されねばならぬとならば、其の議論乃至主張は、政治乃至法律の形式的意義を豫定した上でのものであらう。若し此の豫定が確立してない以上、其の政治論には國民的統制がなく、其の法律論には、社會的規律のないものであるのである。併し、政治論といふ以上は國民的統制を豫定するのである。法律論といふからには、社會的規律といふことを條件として考へて居るのである。

惟ふに、デモクラシー派の議論にも脈絡がないとは言へない。それは自由法論にも隨分無茶なものがあるのと同じである。併し、政治乃至法律の實質、換言すれば、其の社會的價値を論ずるに對して、政治や法律やの形式的方面を叫ぶのは、論理としても妥當でない。實際としては商鞅移木の信といふことになるのである。

□

第十六話『竹内柳右衛門の新法賭博を撲滅す』には condictio ob turpem causam の議論がある。民法の第七〇八條の問題である。先づ物語の筋はかうである。伊豫の西條領に賭博が流行して困つたことがあつた。時に竹内柳右衛門といふ郡奉行があつて、種々工夫の末新令を發した。其の趣旨は一方に於て賭博の禁を解き、他方に於ては、負けた者から訴へて出た時には、相手方を呼出して對審の上、賭博を爲した證迹明白な場合には、被告より原告に對して勝ち得た金を殘らず返させることにするのであつた。此の法律の爲めに賭博の風習が已むだといふのである。穗積先生之を評して曰く、深く考へて見ると、此の新法は根本的に誤まつて居る惡立法である。法律は固より道徳法とは異るけれども、道徳法を度外視してはならぬ。竹内の新法は、同意の上にて惡事を共にしながら、自分が不利な場合には直ちに相手方を訴へて損害を免れようとする如き不徳を人に教ふるものであつて、善良の風俗に反すること、賭博其者よりも甚しい。之は結果にのみ重きを置きて手段の如何を顧みなかつたものであると。要するに、民法第七〇八條でなければならぬことになるのである。民法第七〇八條には、『不法の原因の爲め給付を爲したる者は其給付したるものの返還を請求することを得ず』とあるのである。賭博で負けた金は、其の返還を請求することが出來ぬのである。

さて、之に關して、尚少しばかり、法律の本質に付き議論が許されたい。抑も、公の秩序、善良の風俗に反することに付ては、法律は其の制裁をせねばならぬのである。之は實に法律の使命である。併し、法律は、其の制裁を全うする責務を有するだけに、其の制裁其者が又公の秩序、善良の風俗に反するものであつてはならぬ。法律はどこまでも、正當な方法堂々たる態度を以て不正なものに對する制裁をして行かねばならぬ。されば、法律の進化といふことは、法律上の制裁が醇化するものであるといふ點に其の特色の一を有することになるのではあるまいか。而して既に、法律を以て暴に代ふるに暴を以てするものでないとするならば、法律は其の使命を全うするに付て、常に窮屈な思をせねばならぬのである。即ち、此の點に、法律の力の

限界を認めることが出來よう。即ち、法律は決して萬能のものでないのである。法律の萬能でないといふことを主張することは、主權を以て絕對な權力なりと思惟する者にとりて甚しく不愉快なことである。併し、それでもそれは法律の性質上、論理的に當然なことである。而して斯く法律の萬能でないことを信ずることは、其の半面に於て主權が、形式上、絕對であつても、實質上、一定の合理的規範に拘束されることを意味することになるのである。主權は合理的規範に從つて作用することに依り、其の文化的意義を全うすることになる。憲法第四條に、統治權が憲法の條規に依つて行使せらるゝことを規定して居るのはそれである。即ち、法律には其の性質上論理的に一定の限界あることを知ると同時に、其の限界内に於ける作用の最大限を全うすることに努めるのが、法律生活の要點であらうと思ふ。法律上の制裁が醇化するといふことを以て、法律進化の一の特色と考へることは右に述べたが、更に、法律が單純な制裁の法律から助長の法律となり、鎭壓の法律から豫防の法律になることなども、斯樣な考を擴張することに依つて亦理解せられるのであらうと思ふ。民法第七一八條の規定は、規定自體としては、何だか物足らぬもののやうな規定であるが、私は法律の本質に對する一種の暗示をそこに看取し得るやうに思ふ。右樣に考へることに因りて又法律と道德との區別を理解することが出來る。道德は內、(心意)法律は外(行爲)などと謂つたのは昔の論である、今日では兩者の間に性質上の區別を認めることが出來ぬ。只分量上の差異があるに過ぎない。而して、其の分量上の差異の因つて來る所は、法律が其の力を振ふに方つて常に自ら疚ましからざる方法に依らねばならぬといふ點に存するのである。法律は此の如くにして其の使命を全うするに缺ける所があるやうになるのであるが、實はそこが法律の貴い所ではあるまいか。法律は萬能なものでない。萬能ならずと謂へば、法律は有難くないもののやうになるが、實はそこに法律の貴い所があるのである。

□

第二十一話に『法律の事後公布』といふのがある。之は德川時代の刑法の話で、刑典其者は極めて秘密に付せられたが、刑の執行は之を公衆の前に於てしたといふ事實を擧げ、『法規は之を秘密にし、裁判は之を公にした結果、人民は之に依つて如何なる犯罪には如何なる刑罰が科せられるかを知ることが出來た』としてある。穗積先生は其の法理學の講義に於て、法は秘密法から公示法に進むといふことを說かれ、其の例證の一として德川刑法の事を擧げられたのであつたが、此の『法律の事後

公布」に就て私はそれを思ひ出だすのである。抑も、右の「法は秘密法から公示法に進む」といふことに付て學者間に異論があるやうである。私は曾て此の原則を說いたとき、或法制史家が之を批評し、そんな事實がどこにあるかとされたことがあつた。又或他の法制史家は、徳川百箇條には特別な事情があるのであるから例證にはならぬと謂はれた。又第三の法制史家は、そんな原則は嘘で、古い「ハンムラビ」の法典を初めとして、法律は其の性質上公示的のものであると說かれたことがあつた。私は此處で此の問題を深入りして論ずる積りはない。殊に法制史上の議論などは思ひもよらぬことであるが、一寸思ひ付いただけのことを述べて見ると、私には右の原則が相當に興味あるものに思はれるのである。一體、法律が其の抽象的な規定として成立するに至るまでには、其の初め裁判といふ階段を經たといふこととの多くの事實を書物で見るのである。之を稱して法律が潛勢的から現勢的に進むといふことが出來よう。其の潛勢狀態に於ける法律が、現勢狀態に移る或時期に於て、法律は、其の法を行ふ者にとりては、既に一の抽象的準則として成立しながら、其の法を行はれる者にとりては、未だ然るものとして認められないことがあり得るやうに思はれるのである。今日でも單純な處分から、內規となり、それから法令と進んで來るのである。其の內規といふのが學者の說く秘密法なのである。而して、此の心理的過程、論理的過程が、徳川刑法には特に明白に現はれて居ると思ふのである。歐羅巴の刑法を說く者も、罪刑法定主義が成立するに至つた十九世紀の刑法までは、罪刑は擅斷であつたといふのであるが、而も其の擅斷的だと謂はれながら、矢張、其の時代の刑法が歷史上斯く〳〵であつたとされて居る所を見ると、法律の其の一種の狀態をそこに看取することが出來ると考へられるのである。徳川百箇條の如き此の點に付て模型的な立法例が他にもあるかどうかは知らぬが、其の一種の進化過程は認め得られるのであり、又實に之を認めることに因りて、權力及び法律に依る團體生活の發達から、個人の覺醒に伴ふ權利思想の發達に至る過程を理解することが出來ると思ふのである。吾人の團體生活が成立するが爲めには權力が必要であつた。而して其の權力の下に於ける法律は、權力行使の方法であるに止まつて、人民に法律上の權利を認めるといふものではなかつた。それで、法律が多少抽象的な包括的な規定に進んでも、それが公示的の法律となるまでには一種の秘密狀態が成立す可き譯である。其の秘密狀態に於ける法律が個人の充實に因る權利思想殊に民權思想の進步につれて公示法に進んで來たといふ所に、法律進化の面白い事實が理解されるのである。尤、法律の公示は

程に權利思想の發達にのみ因るものでない、權利思想の發達しなかつた德川時代に於ても、無論幾多の公示法があつた。否、適切に謂へば、法律に依る規範は之が周知せられるのでなければ、法律としての作用は、全うされるものでない。此の點から論ずるならば、權利思想の發達を待つまでもなく、法律は其の性質上公示されねばならぬものである。「ハンムラビ」法典も公示された。十二表法も公示された。德川時代の高札なども亦同樣である。併し、一方に於て、法の潜勢狀態秘密狀態といふ事實も亦考へて見ねばならぬ。而して右の兩箇の事實、即ち、法律の公示せらる可きことと、法律は一定の發達を遂げるまでは潜勢狀態秘密狀態の過程を經ねばならぬといふこととを調和して理會する爲めに、穗積先生は今茲に「事後公布」といふ語を用ゐらるゝことになつたのである。事後公布といふのは論理的に學る矛盾である、而も其の矛盾裡に法律の進化に關する面白い暗示がある、と私は考へるのである。

〔二〕

第二十五話に「動物物の責任」といふのがある。之は、古い法律に於て、利害關係人に對し罪を科し又は之を賠償に提供した例を面白く、[illegible]穗積先生は種々な事例を、目を以て目に報い齒を以て齒に報いる「タリオ」の主義も、又[illegible]」の無上命令に因る責任といふやうな正義論も皆包括して説明す可きもの、即ち、種族保存性に基く一種の心的作用から理解す可きものとせられるのである。私は、ここで古代法に關する社會學的の法則と、正義の觀念に關する認識論的基礎との間に如何なる關係ありやの問題に立入る積りはない。併し、社會學的に論ずれば、古代法の現象も所謂正義の觀念も同一なる心理的作用の發露と見得るのであるが、之を規範的價値判斷の基礎に於て論じ、所謂正義の觀念が、古代法の現象に對し如何なる意義に於て其の醇化されたものであるかを問題として提出して置きたい。さて、次に、穗積先生は古代法の現象と所謂正義の觀念とを同一系統に屬するものとせらるゝ他方に於て、相對主義を左の如く批評して居られるのである。曰く、「相對主義論者は、刑罰は社會の目的の爲に存して居ると云ふ。成程それには違ひないが、其の目的の中には直接被害者たる個人及び其の家人、親戚並に間接被害者たる公衆の心的滿足といふものをも含んで居ることを忘れて居るのは、確に彼等の缺點である。形こそ變れ程度こそ異なれ木を斬罪にし、牛を絞刑にし、「子のあたまふつた柱」を打[illegible]の原素は文明の刑法にも存して然るべきものである。所謂「正義の要求」とは此の心的滿足を云ひあらはしたものにはすぎまいか」理論は往々此の[illegible]を期望に[illegible]

嚴に之を排斥するけれども、是れ畢竟、刑法發達史を知らず、且又、此の報復性は種族保存に必要な情性であつて、これあるが爲めに權利義務の觀念も發達したものであることを知らないからである。』と、私は先生の以上の評論には聊か不滿がある。少しく之を論じて見たい。

抑も、刑罰は應報的に科す可きものであるか、應報刑論、或は社會防衛を目的として科す可きものであるかが（目的刑論）、所謂刑法理論の爭である。應報論即ち絶對論では、善因に善果ある可きが如く、惡因に惡果ある可きは當然であるとするのである。而して、刑罰は、國家が此の原理に基いて其の權力を振ふもので、同時に之に依つて國家乃至法律の權威が全うされるといふのである。之に對して、社會防衛論即ち相對論に於ては、社會防衛の必要に基きて國家は刑罰權を行ふといふのである。縱令小さな犯罪と雖も、それが累犯となれば、重く罰する必要があらう。縱令重い犯罪と雖も、それが偶發的な犯罪であるならば、刑の執行猶豫といふことにしてよからうといふのである。其の結果、刑罰は犯罪よりも犯人を主にして考へねばならぬといふことになり、玆に主觀主義即ち犯人主義といふものが主張されることになつた。從來の客觀主義即ち犯罪主義に對するものである。

斯く、社會防衛論は其の中心思想として主觀主義を主張するのであるが、實は、論理的には、防衛論と主觀主義とは之を區別せねばならぬものである。防衛論が單に防衛論として止まる範圍内に於ては、右の所謂心的滿足は決して度外視されて居ないのである。即ち、從來の應報刑論はそれが先生の所謂心的滿足論といふ意味に於て、初めて目的論的意義を有するのであると謂ひ得る。これ實に私共が應報論に對する批判的態度の第一歩であるのである。されば、私共は心的滿足といふことを無視して居るのでない。

併し、若し、應報刑論を以て廣く目的的に理解す可きものとせば、應報思想は如何なる意味に於て共同生活の保持といふことに對し意味あるものであるかを考へねばならぬ。之が批評の第二歩である。『報復性は種族保存に必要な情性で』あつた事實は之を認めるが、吾人は更に、何故にそれが然るかを研究せねばならぬ。玆に於て、本能的行爲としての報復性を（換言すれば社會的事實としての應報思想を）、目的的行爲としての防衛性として（即ち、社會的理想としての正義の觀念として）理解し、節制し、擴張して行かねばならぬことになる。而して、此の理解と節制と擴張とに因つて新らしき文明の刑法が成立す可きである。私共の主觀主義は此の如き立場に於て主張せられる

ものである。穗積先生は、報復的要素も亦文明の刑法に存して然る可しとされ、又報復性を變性とするのは、畢竟刑法發達史を知らないものであるとせられるけれども、報復的要素は文明の刑法から漸次除外されねばならぬのである。私は、報復的要素の多少が刑法の進化の程度を知る標準になるものと考へて居る。而してそれは、刑法發達史上、吾人の本能行爲が目的行爲に進化する事實に基き、其の事實に對して、價値判斷に基く批判を加へる結果である。事實は單に事實としてのみでは何等の規範性を有せない。事實から規範を抽出するに方つては、之に對して價値判斷を下すの必要があるのである。されば、刑法發達史上、報復性の如何なるものなるかを知らずといふ批評は、絕對論に於ける正義の觀念卽ち應報刑論に加へらる可きで、之を吾人の相對論に加へらるゝのは不滿に思ふのである。現に、穗積先生は第八十三話「食人刑」に於て、「刑罰は復讐に起り、正義に成り、仁愛に終るのである」と論じて居られるが、私は此の趣旨で刑法理論の相對主義を說いて居るのである。刑法の進化と進步とは、此の意義に於て理解せらる可きものである。

惟ふに、應報論を哲學的に深く說いたのは「カント」であるとされて居る。「カント」は「カント」以前の思想に對して「コペルニクス」的變革を與へたとされる人である。責任論に付ても單純な反撥的報復思想を、全く反對な方面から說くことに依つて、其の所謂無上命令に因る責任論に變革したのである。私共の立場も亦「カント」に同じいのである。「カント」に依つて與へられた說明と思想とに對し、更に「コペルニクス」的卽ち「カント」的變革を與へて見たいといふのである。「カント」に依つて「カント」の上に出でむとするものと謂ひ得るであらう。

□

第四十七話に『大木司法卿の造語造字案』といふのがある。之は泰西の法律を輸入したに付て、我邦に其の種々なる概念を表示するに適當なる語と字とがないことからして特別な文字を拵へるといふ案があつたとの物語である。卽ち、新字を製し之に原音に近い發音を與へたのである。大木司法卿の發意で委員が組織され、明治十六年に『法律語彙』といふものが出版されたのであつた。斯樣な企が到底實行せらる可きでないことは勿論である。穗積先生評して曰く、『數年間多大の勞力と費用とを費して大きな餅を畫いたのは餘程面白い現象と謂はねばならぬ』と。而して之に次ぎて、第四十八話『法律の學語』以下に種々な術語、例へば憲法とか、民法とか、國際法とかいふ語の譯語として成立した沿革、且それに關する先哲の多大なる勞苦のことを述べられて居る。第五十八話『自由』に於ては、『自由なる語

自由なる思想の開[illegible]は實に福澤[illegible]つてもよからう」といふことが書いてある。此の兩つの物語を對照して私が面白いと思ふことは、何故に、其の一方が畫餅に屬し、其の他方が成功したかの理由である。造語造字の企は論理的に出來て居るのであるが、社會が其の必要を感じて居なかつたのである。官吏とか學者とかいふ連中は新字新語の必要を感じたであらう。併し、社會はそれを必要としなかつたのである。惟ふに、當時の社會はそんな形式的な或ものを希求して居たのでなく、もつと實質的な或ものを要望して居たのである。即ち、『自由』の語に付ては、福澤翁自身も不滿足を感じて居られたので、『英語に之を「フリードム」又は「リベルチ」と云ふ、未だ適當の譯字あらず』として自由の觀念の講釋に種々苦心されたのであるが、社會は其の譯語がエチモロジーの上から論じて適切なりや否やを論ずることなく、又其の説明が定義として體を得て居るや否やを考ふることなく、速かに此の譯語と此の思想とを受け入れたのであつた。明治の初期に於て、自由といふ語及び其の思想に關する社會上の要求が既に無意識的ながら十分發達したといふことが知られるのである。どんな論理的な仕事でも、それが社會的下地のない限り、成功するものでない。一定の思想が思想として指導の力を發するには、社會にこれを受入れる準備が出來なければならない。[illegible]て、社會に其の準備が出來て居るときは、其の思想が用語に於て不完全に、説明に於て不十分な所があつても、其の思想は社會的に價値あるものとなるのである。惟ふに、社會學派の立場は實に茲に在るのである。先覺者指導者、換言すれば學者の思想と社會の發達との間に此の如き關係を看取することに依りて、學者の創定するか思想の社會に對する進化的作用を理解することが出來るのである。

此の點に關聯して、私は『權利』といふ語の沿革が知りたいのであるが、『法窓夜話』に之が洩れて居る。此の文字は何人の創意に成るものにや。初めは「權理」と書かれたさうであるが、何時の間にやら『權利』になつたといふことである。權理と書くのが適當であるか、權利とするのが尤であるか、そんなことは兎も角として、權利といふ語に依つて表はさる可き思想欲求が熟して居たにつれて、此の語――寧ろ變な語ではあるまいか――が廣く用ゐられて怪しまれなくなつたのである。」

□

六十五話に「ジョン、オースチン」夫人「サラー」といふのがある。「オースチン」は例の分析學派の「オースチン」である。「サラー」夫人は、其の夫の死後、其の遺稿を整頓して、其の大著を吾學界に與へて與れた人である。其の「サラー」夫人が、

いかにも女らしい、いかにも學者らしい、いかにも學者の夫人らしい、而してそのいかにも、學問と人道との恩人らしい態度が細かに叙述してある。「サラー」夫人が夫の遺著に題した序文は『絕代の名文と稱せられて居るのであつて、我輩は之を讀む毎に只管感淚を催すのである。我輩は每年大學に於ける法理學の講壇に於て「オースチン」の學說に說き及び、此夫人「サラー」の功績を語る時には、每に此序文を以て、かの諸葛孔明の出師表に比するのである。古人は出師表を讀んで泣かざる者は忠臣にあらずと云つたが、我輩は「サラー」夫人の此序文を一讀して感淚に咽ばない人は眞の學者ではないと評した程であつた』と先生は說いて居られる。「オースチン」は不遇な貧乏な學者であつた。併し「サラー」夫人は其の不遇と貧乏とを償ひて餘りある夫人であつた。一八六七年八月十二日の「タイムス」は「サラー」夫人の死を報ずると共に『夫人が其齡已に高く、而も病苦と戰ひながら、此法理學上の大產物を公刊したのは、吾人が夫人に對し深厚なる感謝を捧げざるを得ない所である。此擧たるや、眞に「サラー」夫人が其夫の爲めに最も高貴なる記念碑を建立したものと云はねばならぬ』と論じた。

其の高貴な記念碑に、法律を以て主權の命令なりと論じたものであつたのである。大凡、法律の定義としては、これ位平凡なものはあるまい。これ位無味乾燥なものはあるまい。何人もこれ位のことは知つて居るのである。併しこれ位のことでは、法律の定義として我慢が出來ないのである。私は私の講義上に於て必ず此の定義を述べるのであるが、學生はいつも不滿足な顏をして之を迎へるのである。

併し、私は考へたい。之は「オースチン」が其の不遇と貧乏と鬪ひながら漸くにして得たる定義である。之は其の「サラー」夫人の情と愛とに依つて支持された定義である。之は平凡なものでもなければ、無味乾燥なわけのものでもない筈である。

若し、之を平凡とし、無味乾燥だとすれば、それは吾々のせいであらうと思ふ。吾々は永らく御無理御尤の法律の下に生活したのであつた。法律は、吾々の爲めに、吾々が造り、吾々が維持するものなりとの思想、卽ち法律を以て吾々の權利を明かにしたものであるとするの思想は、吾々の父祖の間には發達して居なかつた。法律はお上のお達しであつた。卽ち主權の命令であつた。「オースチン」の謂ふのを俟たず、昔から吾々は法律をさう心得て居たのである。

併し、「オースチン」の定義は、そんなものでない。其の大きた二冊の書物の中に書いてある思想は、そんな受動的なものでない。其の定義の前提には、强い反抗的な意義と大きな理想的

な題目とが限定されて居るのである。

第一に、「オースチン」は自然法說に反對したのである。自然法說は法の理論的存立を說いて、從來の主權に反抗した。併しそれが爲めに成法に對する侮蔑とまで脫線したのである。法は社會的規範である。而も實際的規範である。若し法の本體たる自然法の爲めに成法其者を排斥すとせんか、法が實際的規範として、社會統制の要件たる實は何所にあるか。法は、主權者の命令として、現實に成立する成法其者である。之が法を論ずる第一要件でなければならぬ、と「オースチン」は考へたのである。

第二に、「オースチン」は裁判所の職能に對する從來の見解に反對した。一般には、裁判所は、記憶す可からざる過去より成立する法律を宣言するものであるとされて居るのである。併し、「オースチン」は「イギリス」に於ける「コンモン、ロー」の發達に考へて、此の如き見解を『小供らしき擬制』と罵つたのである。裁判所は、其の一定の權限の範圍內に於て立法するものであると論じたのである。

第三に「オースチン」は法典編纂の必要を說いて居る。判例法を辯護しながら、併し、其の缺點を認め、法典編纂が主權の命令たる法律の形式として妥當なることの主張をして居るのである。「ドイツ」の歴史派は法典を無用としたものとされて居るのであるが、「オースチン」は「サヴィニー」が決して絶對的に法典を無視したのでないことを、同情しつゝ評論し、只法典具體論の採るに足らざることを論じたのであつた。

第四に、「オースチン」は法律に於ける種々の概念の分析を明かにした。これ其の法理論が分析法理學と稱せられる理由である。法律の分析的研究、即ち、各種の概念に付き其の定義及び區別を明かにすることは、固より法律學の要部である。併し吾々は法律學が只此の如きのものとして取扱はれて居ることに飽きて居るのであるが、「オースチン」の其の態度は、實は從來の自然法論と「コンモン、ロー」とが、あまりに空疎なか、又は、あまりにオッポーチュニストたるに對する反抗と考へねばならぬのである。

「パウンド」の說く所に依ると、英法に於ては、自然法論と裁判所の職能に對する思想とが妙に結び付いて、法律の發達を停滯せしめたといふことである。自然法論に依る法の絶對性といふことと、裁判所は只法を宣言するのであるといふことからして、唯、現在の判例が絶對的な法として取扱はれることになつたといふのである。之は十九世紀末の狀態であるが、二十世紀に至つてから、形勢が漸次一變して來たといふのである。

若し此の如き理由に基く此の如き停滞が事實であるとすると、「オースチン」の所說は之に對する救濟たらずんばあらずである。「オースチン」が自然法を排斥したのも、裁判所の職能に關する從來の學說を「小供らしき擬制」としたのも、皆一種の理想的態度である。而して法律を以て主權の命令とし、法典編纂を主張したのも、其の主權といふのが「イギリス」のパーリメントに歸着することであり、其の法典といふのが其のパーリメントのアクトたるを意味することになると考へて見ると、それは吾々の學生が其の定義に付て普通に考へる或ものとは全く異つたものになるのであらうと思ふ。

二十世紀になつてからの「イギリス」の法律の發達には教訓多き幾多の事實がある。「ドイツ」の歷史派は、慣習を以て國民的精神の表現の最も醇なるものとしたのであつたが、二十世紀の「イギリス」に於ては、國民的精神がスタチュートの上に現はれて居るのである。「イギリス」は最早不文法の國ではないのである。

「オースチン」の考は、斯く考へることに因りて、反抗的なものであり、理想的なものであつたと見ねばならぬことになる。反抗的なるが爲めに「オースチン」は不遇と貧乏との間に死んだ。併し、理想的なるが爲めに、其の精神は漸次實現されつゝあるのである。其の不遇な貧乏な境遇の裡には、花の如き「サラー」夫人があつたのである。其の理想的な論篇の間には、健氣な「サラー」夫人の氣魄が籠つて居るのである。

□

第九十七話に法典實施延期論の物語がある。私が郷里の中學を卒業して初めて東京へ出たときは、其の論戰は既に終を告げて居たのであつたが、併し其の餘燼はまだ相當に激しかつた。法律學に志して上京した田舍の一書生に對してそれがどれほど刺戟になつたらうか。大學に入つてから「ドイツ」に於ける「ザヴィニー」「テイボー」の法典爭議といふことを聞いた。法律上の論議には、損害賠償の義務があるかどうか、有罪かどうか、積極か消極かなどいふ討論會よりも、尚外に問題があることを知つた。「ドイツ」に於ける其の法典爭議は第九十七話になつて居る。

我邦では、江藤新平氏が「フランス」法典を以て直ちに我法典と爲さんとされたことがあつた。之は第六十一話に載せられて居る所である。其の後「ボアソナード」起草の民法が、一度は立派に法律となつたのであつたが、法典延期論の爲めに潰ぶされて終に現行民法が出來たのである。江藤氏は、日本と歐洲とは風俗を異にするも民法なかるべからざるは則ち一なりといふ理

由の下に、「フランス」民法採用說を主張されたとのことであるが、「フランス」民法を直ちに我民法とせようなどとは隨分突飛な議論であつたものである。即ち、氏が、民法なかる可からざるは即ち一なりとした理想的な活躍は餘程面白い。穗積先生之を論じて曰く『始めて江藤氏の如き進取の氣象の横溢した政治家があつて突進の端を開き、銳意外國法の調査を始めたからこそ、後年の法制改善も着々其步を進めて行くことが出來たのである。我邦の如く數千年孤立して居つた國民が俄然異種の文化に接觸した場合には、種々の突飛な試驗をして見て、前の失敗は後の鑑戒と爲り、後ち始めて順當なる進步を爲すに至るのは已むを得ぬことである。現に民法編纂の沿革から云うても、初めは江藤氏の敷寫民法で、中ごろ大木伯の模倣民法と爲り、終に現行の參酌民法と爲つたのである』と。江藤氏の突飛な議論は初めから行はれなかつた。併し、當局者は「ボアソナード」の模倣民法を採用したのであつた。が、今度は國民がそれを許さなかつた。泰西の法律思想が日本の學者の頭腦を透過してから、日本人の手に依つて茲に日本の民法が出來たのである。

穗積先生は法典實施延期戰を以て「ザヴィニー」「ティボー」の法典爭議と其の性質に於て毫も異る所なしとして居られる。（第三五二頁）。まことに、「ドイツ」に於ける民法の發達と我邦の民法の發達こ對比することに依つて、種々の面白味を發見することが出來ると思ふ。

「ドイツ」に於ては、十九世紀の當初に於て既に例の「ティボー」の論が破れたのであつた。併し、十九世紀の終末に於ては法典が編纂されたのであつた。「ティボー」が負けたのか勝つたのか。「ザヴィニー」の論が行はれることになつたのか、潰ぶれることになつたのか。江藤氏の論は容れられなかつたが、民法なかる可からずとした點は、我國民の理想となつた。而して實際出來上つた民法は矢張西洋式の民法であつたのである。

私は、常に考へて居る。如何なる理想主義と雖も實證的基礎がない以下は存立し得るものでない。如何なる實證主義と雖も、理想的分子なくんば成立ち得るものでない。論理的には理想たる規範と實證たる法則との間に超ゆる可からざる境があるといふが、實際には、理想主義の發展には常に實證的な或ものを要するのである。江藤氏の理想も「テイボー」の理想も、其の理由のままでは成立することが出來なかつた。其の理想が實現するまでには、一定の進化過程に從つて、實證的階段を踐んで行かねばならなかつたのである。而も ザヴィニー」の歷史主義も我法典延期論も、結局は其の歷史を尊重し、其の延期を主張する所に一の理想があるので、其の理想を發展せしめることに因り

て、一は歴史より出でねばならなかつた。他は『民法出でて忠孝亡ぶ』などと嘆きて國粹論を主張しながら、實は矢張西洋式のものを作つたのであつた。

振子は動揺せねば止まない。其の一端を理想とし、其の他端を實益とする。其の一方は常に他方を豫定しながら、振子其者は常に動揺せねばならぬのである。振子には力が働らく。其の力は、謂はば、振子の運動に一歩を進めたものである。思想家といふものも亦さういふものであらうか。故に、思想家は常に現實に一歩を進めるし、又常に徹底せんとして居るのである。現實に逆ふが故を以て之を斥けるのは、社會をして進歩せしめる所以でない。徹底せんとするが故を以て之を非せんとするは、人生をして向上せしめる所以でない。

我邦に於ける法典の爭は、「ドイツ」に於ける其の爭が「ドイツ」の法律學を進歩せしめたやうに、我邦の法律學を發展せしめたものであつた。而して其の爭は、獨り法律學のみならず、一體に學問乃至思想の向上に付て大きな暗示を與へるものであるのである。

□

第七十五「末期養子と由井正雪事件」といふのがある。末期養子は、徳川氏が幕府の基礎を固うするが爲めに採つた大名取潰し政策の結果として、同[illegible]禁ぜられた所であつたが、其の結果として浪人が多くなつた。「浪人は社會の危險分子である」(第三二六頁)。幕府はこれが爲めに五人組制度を整備し、比隣檢察の法を勵行したのであつたが、終に爆發して由井正雪事件となつた。幕府が末期養子の禁を解いたのは、之が爲めで、即ち「幕府は從來の大名取潰しの政策が意想外の結果を招き、之が爲めに却て危險分子を天下に増殖するものであるといふことに氣付き、警察法を以て其末を治めるよりは、寧ろ其源を塞いで大名取潰しの政策を棄て、浪人發生の原因を杜絶する方がよいといふことを悟るに至つた」といふ考證物語である。考證としての史學上の價値を玆で論するのではない。社會哲學として、末期養子解禁の事實を考へるのも亦面白くはあるまいか。

□

夜が更けた。外には霜の降るらしき寒さが隙から身に迫つて來るのである。「法窓夜話」の中には「ソクラテス」の類が見える。「モーゼ」の類も見える。「マンスフィールド」の類も見える。「ベーコン」の類も見える。其のいろいろな挿話を見るに付け、い[illegible]ここに考へられる。

英國古代決鬪の話といふ珍奇なものを見るにつけても、[illegible]

珍奇な制度に關して一言なければならない。「ハンムラビ」と「日の神」を見ても亦何とか謂はねばならないやうな氣がする。例の「エジェリヤ」の源泉といふのもなつかしいのである。其作麟祥・津田眞道、西周、加藤弘之諸先生の肖像を見るにつけ、又梅先生のそれに接するにつけ、謂はんと欲する所、尙一二に止まらんや。

併し夜も更けた。火鉢の火も消えた。明日の講義のことも考へねばならぬ。さらば、先生の健康を祈りつゝ。(十一月十五日夜)

如何にして國民思想を統一し得べき乎

柳澤健

一

わが臨時敎育會議は、數次に亘る委員會を開催して所謂『人心の歸嚮統一』に關する件を審議したが、結局に於て大要左の文意に依る建議案を起草したといふ事を、新聞紙は傳へて居る。その文は、

『本邦固有の文化を基として時勢の進運に伴ひ益々其發達大成を期し朝野一致共同して內は國家百年の長計を建て外は以て世界の文明に貢獻せんことを要す』

今この建議案を一讀するに、『本邦固有の文化』に據つて、現代の混亂を極めてゐる國民の思想をば統一しやうといふのである。然らば、この建議案に對する批評は二段に分れる。一は、『本邦固有の文化』といふものは何を指すかであり、二は、謂ふ所の『本邦固有の文化』に據つて、果して國民思想の歸嚮統一を爲し得るかどうかである。

この國民思想統一のモチーヴとして『本邦固有の文化』なる如何にも調子のよき言葉を用ゐ、これを『武士道』とか『古神道』とか『孔孟の道』とか或は『敎育勅語』とかいふが如き具象的の辭句を用ゐるのを避けられたことに於て、予は、臨時敎育會議名

委員の巧妙なる技巧を限り無く感嘆するものではあるが、同時にまた、其懸賞の辭句を掲げて無學なる民衆を（無學ならざる民衆が何處にあらう？）迷ふことなく嚮導されるだけの親切心がそこに無かつたことを衷心の遺憾とするものである。

「本邦固有の文化」と言へば、勿論、外國にその例を見ない文化を意味する譯である。さうした文化は、果して何であらう乎。

予は、幼少の時から日本人の勇武に付いて繰返し聽いてゐる。また、日本人の奉公心に付いて、所謂愛國心に付いて、繰返し聽いてゐる。そして其等が萬國にその比儔を見ないといふことも繰返し聽いてゐる。予は、さうした熾んなる言葉に醉つて、我民族の偉大を、同時にまた自分自身の偉大を想はない譯には行かなかつた。そしてこれさへあれば、支那が攻めて來やうが、露西亞が攻めて來やうが、また、假令世界列强が擧つて攻めて來やうが、負けるやうなことは斷じてない！と自誇してゐた。

而して、疑も無く支那は負けた。露西亞も亦負けた。自誇の感情は事實の裏書によつて、確信にまで變じた。この邊で若し予が、何等かの突然の災害で死することになつてゐたら、予は、世界に冠絶せる民族の一人なりとの榮耀を感じながら幸福なる狀態の死を經驗することが能きてあつたであらう。然るに、『長生すれば恥多し』といふ諺が予に祟つて來た。卽ち予は、幸福なる死を經驗する代りに、不幸なる生を經驗するに至つた。幾多の外國歷史、幾多の外國小說から得た種々の知識が、先づ自分の確信の土臺石をゆるがしはじめた。ついで、今度の大戰爭が現はれて來、そのなかの夥しい實例が、ゆるぎかけてゐた自分の確信の土臺石をすつかり拔き去つて了つた。旅順口の閉塞隊に誇つてゐた日本民族たる自分に、ゼーブルージの閉塞隊の活動は何といふ確信のぐらつきであつたであらう。風流艦長八代大佐の仁川攻擊に誇つてゐた日本民族たる自分に、ガブリユル・ダヌンツイオのトリエスト航空攻擊は何といふ確信のぐらつきであつたであらう。二子を旅順に失ひ金州城外夕陽に立つて詩賦したわが乃木將軍あるを誇つてゐた日本民族たる自分に、同じく二子を戰場に失ひしかもその哀傷を詩句にすらも現はすを敢てしなかつたテオドル・ルーズヴエルトの行動は何といふ確信のぐらつきであたであらう。

我日本のみと確信してゐたところのものは、他の諸國も亦然るにあらずやとの疑念にまで崩れて行つた。而して、この他の諸國も亦然りとの疑念が、更に崩れて、他の諸國より更に劣れるにあらずやとの絕望的疑惑に墮することと果して無しと、斷然言明し能ふであらうか、予は怪しく思ひつゝあるのである。

予は、かゝる手近の例を拾つて、我國固有の文化なるものに

[illegible]の感情を表白しなければならないのを、深く悩みとする予は、既に『確信』から隕落したときの痛苦の生々しい記憶の[illegible]を失つてはゐない。更に、文化に對する問題について、墜落することは予の堪ふるところではない。それほどに予は『日本的』なるさまざまのものに臆病になりつゝある。

斯くの如き背教的態度に於て、予は、所謂日本固有の文化に對せんとする者であるが、玆に一層予に致命傷的な背教的態度を採らせるに到らしめる動因は、日本固有の文化を冷眼視するに至つたといふ點よりも更に一歩進んで果して日本固有の文化なるもの存在せりやといふ疑念である。

先づ予は日本の古代史から眼を向けて行かう。

予は、嘗て法科大學に學んだ折、約半歳に亘つて筧法學博士から古事記講義を聽講するの榮を得たことがある。同博士の說明せらるる所に依れば、わが古事記は、世界總ての教理及哲理を包含して餘蘊無く、釋迦、基督は言ふを俟たず、近くタゴール、オイツケン、ベルグソンの思想までも共一卷中に明かに觀るを得べしとのことであつた。併しながら、如斯說明によつて、博士は、日本文化の特異性を聽衆の頭に印象される代りに、その世界性を——換言すれば、古事記が日本に固有ならざる文化であることを、聽衆の頭に印象されることになつて了つた。併し、この事は、更に正しい結果を示しつゝある。恐く、古事記に現はれてゐる所のものが、日本固有の文化であり、その文化の下に、現代の『八百萬神』的の思想の混亂を統一し得るといふことは、偽りに、この二千年來の日本の苦しみながらに生育して來た道程を、踏みにじることになる。予は、二千年の日本文化史が、空に等しいものだとは、流石に考へられない。

古事記の生むだ日本最初の（固有のではない）文化は、佛教の傳來といふ激しい外來思潮の洗禮によつて、美事なる改宗を完成した。この時代——推古の時代を過ぎ飛鳥朝時代より奈良朝時代に亘る間——に於ける『咲く花の匂ふ』がごとき佛教文化は、日本に於ける最も光彩ある時代を現はしてゐた。併しながら、わが臨時教育會議の謂ふ『本邦固有の文化』が、その時代の文化を指してゐるものとは到底解釋されない。殊に、その時代の文化は、決して本邦固有のものでは無くて、全くの外來思潮であつたのではないか。

藤原氏の隆盛時代を中心としてゐる平安朝の文化は、吾々が、『大鏡』や『増鏡』やを通じて見られるやうに極めて女性的な頽廢味を帶びた文化であつた。而して、奈良朝時代等が、佛教の光明的方面を享けついでゐたに反して、この時代は、その悲觀的方面を著しく享けついでゐたらしく思はれる。かゝる悲觀

的女性的頽廢的の文化を以て、日本固有の文化なりとし、以て今日の人心の歸嚮を統一すべきモチーヴにするといふことも亦到底想像は能きない。

鎌倉時代、吉野朝時代から足利時代に至る三百數十年に亘る時期は、能く歐羅巴の中世期とともに暗黒時代の語を以て評せらるる程、文化運動の極めて乏しく且軍國的運動の極めて熾んだつた時代である。かゝる文化の貧弱を極めた時代の文化を捉へて、日本固有の文化なりとし、世界の文明に貢獻しやうといふのではあるまいことは、此亦容易に知るを得る所である。

更に時代は徳川氏の大權掌握時代にはいつて行くのであるが、こゝでも亦我々は、外來思潮たる儒教の洗禮を受けた文化の改宗(コンバーション)を何よりも眞先に眼に映すのである。しかも、この改宗(コンバーション)は、種々の形に於てその反動を生み、或は元祿時代の驕奢となり、或は民間に於ける享樂思想の醸成となるに至つた。從つて、茲に於ても、予はわが臨時教育會議の謂ふ日本固有の文化が、當時の外來思想たる儒教の文化を指すものとは信じられぬとともに、驕奢華美の思想、柔弱享樂の思想を生める文化を指すものでもあるまいことは、確かに推知し得るのである。

更に、時代は明治に移るのであるが、外來思想の潮流の激しさに於ては、決して、奈良朝時代や徳川時代やに劣つてゐない。加之、奈良朝時代や徳川時代やに於ては、夫々に佛教、または儒教が、その純粹な形を以て這入つてきたのに過ぎなかつたけれども、明治の時代に於ては、單にこれ等と匹敵し得べき基督教の侵入のみに止らずして、これとは對蹠をなせるエピキュリアン風の思潮まで同時に侵入してきた。言はゞ、濁れる洪水の氾濫であつた。そして、それは、この大正に移つても阻止することは能きなかつた。否、却つて、世界大戰の前後に亘つて、この潮流の氾濫は、一層の勢を加へたかの觀さへあるのである。

わが臨時教育會議の謂ふ日本固有の思想が、この眼前目視の混亂せる文化を指してゐるのでないことも亦明白過ぎるほど明白である。

予は餘りに冗すぎる程、判り切つたことを細叙してきた。しかも、その細叙から讀者に與へた印象は、結局、日本には固有の文化を以て目すべきもの無しといふ結論に來るであらう。然りとすれば、予の細叙も無益ではなかつた譯である。

全く、予は、日本固有の文化なるものを、尠くとも、日本文化史のメーン・カーレントの上からは發見し得ない。予は現に、最近某雜誌に送つた論稿のなかに書いた。——『自分は、佛教を受け容れ、儒教を受け容れ、また更に基督教を受け容れた日本文化史を通觀して、如何にわれわれ民族がFlexibleであるかに

疑く。更なる、日本は、といふ親子の所有者といふことも、といひ切の所有者であつた。……」

予は以上の所論によつて、『本邦固有の文化』とは何を意味するか全く不明であることをば述べた。從つて、臨時教育會議の建議案に對する批評の第二として分類して置いた『本邦固有の文化』に據つて、果して國民思想の歸嚮統一を爲し得るかどうかといふ命題は、最早、解答する必要がなくなつた譯である。

二

モーリス・バレスや、ジヤン・モレアや、または、文藝批評家のブリユンテイールやが、頻りに唱道した傳統主義に付いては、新らしがり屋の多い日本人の間に、誰も無く共鳴した者があつて、一時、新聞や雜誌の端でさうした論議が試みられてあつたことを予は目擊した。その時に、予は、子供の時讀んだことのある『はらわたの洗濯』といふお伽噺を想い起した。蛙が、人間の喫煙するのを見て、己れも喫煙がしたくなり、道に落ちてゐた卷煙草を拾つて口にしたが、その苦さが腸一杯に染まつて了つたので、腸を漸くのことで抽出して水で洗濯し、それを樹枝に掛けて乾かして置いたところ、盜まれて了つて遂に腸を持たない惨めな日を送らなければならなくなつたといふ寓話である。日本の傳統論者は、日本の傳統といふものに付いて無關心であつた多數の日本人をして、過去を振り返つてその傳統日本の傳統と稱するものの本體を檢討すべく注意を向はしめ、その結果、日本に良い傳統無きことを明白過ぎるほど明白に教へてしまつた。煙草さへ喫はなかつたならば、腸を失くすことはなかつた筈であつて、『敗北』といふ言葉が、この場合を遺憾なく説明してゐるのである。

兎に角、傳統的文化をば我々多數の日本人がまるで持つてゐないといふことは、辛いけれども承認しなければならぬ事實である。予は、予の知れる青年學生(それ等の思想は最も光彩に富み、將に擡頭せんとするゼネレーションの群を照し出す炬火ともなるものである)の書架を覗いて、曾てそこに、過去に於ける日本文化に影響を及ぼした書册——例へば、『古事記』であるとか、『大日本史』であるとか、『武道大鑑』であるとか『假名交り水滸傳』であるとか、『讀史餘論』であるとか——を見たことはない。それに代はるに、トルストイを、モンテスキユを、ミルを、ベンサムを、または、ギヨーテを、パスカルを持つてゐるのである。現代の青年にとつては、新井白石や本居宣長の名前よりも、マコーレーやフイヒテの名前の方が、遙かに親しげにひゞく。

斯うした現象を、單に、新日本の青年たちの淺はかなる好奇

心にのみ歸因するものと說くべきであらうか。堅實剛健な處を失つた浮華輕薄の傾向であると、一概に見るべきであらうか。

予は、日本文化史を通觀して、そこに本邦固有の文化と名付け得べきメーン・カーレントは遺憾乍らこれ無かりしを承認せざるを得なかつたのであるが、それと同樣の意味を有つた現象をば、現代の青年を支配してゐる。文化の圏内に於て見なければならないことをまた遺憾乍らに承認する者である。

從つて、文化に對する我等の態度は、過去に根ざしたものに對する回顧であつてならないとともに、現狀維持に對する滿足であつてもならない。我等のほんたうの使命は、新日本の文化を創設するにある！といふ態度でなければならない。すべて、これから！である。新らしきエホバの仕事を造ることである。

そのためには、更に熾んに、更に激しく、外來思潮がこの日本の國土に滲入して來るのでなければならない。その思想の濁流をばゆるやかに抱き込むで、何時の間にか綺麗に澄まして了ふだけの寛容と活力とが無い限りは、どつちみち、日本が世界に立つてゐる存在事由（レエゾンデエトル）すらもない譯になつてくるではないか。「清濁併せ飲む」といふ東洋の諺は、何を敎へてゐるのであらうか。全く予は、思想の潔癖家が、特にこの國の有力なる社會に多過ぎるのを痛嘆せざるを得ないのである。

併し、この外來思潮の侵入によつて、萬國に冠絕する我國體の精華が第一汚されでもしたら、お前はどうする氣だ！と言つて詰問を試みる論者が若しありとすれば、予は、佛敎傳來の時に當つてかの聖德太子が三寶の奴と仰せられたにも拘はらず、なほ日本國民は三寶より更に遙かの高位にわが大權の所在を思考して迷はなかつた光榮ある歷史を引用しやう。更に、孔孟の敎が殷熾を極めた時に當つて孔孟二聖三軍を指揮して皇國に攻め來りし時、如何にするぞと問はれて、即答に困つたといふ儒者が幕府の榮職を占めてゐた時から僅か經つか經たぬに、尊王壤夷のプロパガンダが漢學者賴山陽の彩筆からほとばしるにいたつた光榮ある歷史を引用しやう。

國體に對する我民族の確信は、本能にまで至つてゐる。かうした民族的本能は、我々が黃色人種であることと同樣に、Fatal な運命である。遺傳が、環境の影響よりも強力であることを敎へてゐる社會學やまたは醫學やが間違ひであると證明されない限りは所謂國體擁護者は充分安心してもいい譯である。

三

今次の世界戰爭の休戰に關する獨逸側の提議が、外務省着電として現はれる遙か以前に、わが船橋強力無線電信局のアンテナは、獨逸ナウエン無線局が發した電波を一瞬の間に感じて了

つた。

予は、臨時教育會議の官設にかゝる思想統一機關に多大の至囑を爲し難いのは、さうした官設機關に蓄電して來るであらう外國思想が遙か以前に民衆の持つアンテナに感電してゐることを信じてゐるからである。思想統一機關が外來思潮に對する對應策について腐心してゐる間に、既にその外來思潮は民衆の間に瀰漫してゐるに違ひないと信じてゐるからである。

兎に角、個人が社會から脱離して孤立の生活を遂げ得ないと均しく、今日の日本は世界の思潮から孤立した生活を爲し得ない。『テムス河の水は日本橋下の水と相通じてゐる』この判り切つた事實を強いて認めざらんとして悪戰苦鬪してゐる數多の先覺を予は見る毎に眞に焦燥の念に堪えない。かうした先覺は、常に著しく保守的で回顧的であると見らるるにも拘はらず、眞の意味で決して保守的でも回顧的でもない。彼等は、民族の踏み來つた足跡の記錄を、——歴史を、すこしも繙讀してゐない。過去の歴史が、例へば佛教傳來について、儒教傳來について、または天主教傳來について、必然的に教示してゐるところのものを、すこしも讀んではゐない。

全く歴史が示してゐる通、外來思潮は、あらゆる人爲的閉塞の存在にも拘はらず死の如く強き力を以て滲入するものである、既に、過激黨を逐斥し、危險思想の禁止をなし、[illegible]の段階を企てゝゐる現代日本の政策の下に於ては、猶お盤石に叩きつけらるゝよりも更に速かに日本が外來思想をその國内に輸致しつゝあることは當然のことと言はねばならない。

思想は風の如く自由に世界を吹き廻つてゐる。昨日佛蘭西を吹いてゐた思想は、今日極東の日本に吹いてゐる。今日倫敦のウエストミンスター・アベーの屋根を壞してゐる風は、明日京都の東本願寺の甍を落すかも知れない。兎に角、世界は、思想の上から見ても、一團の塊をつくつて自轉しながら、太陽の周圍を大きく廻つてゐる。是非善惡や利害得失やの問題ではない。法律家の言を借りれば最も壯大なるNatural Lawである。

斯うした明らかな事實——世界の思想は同時に日本の思想となつてゐるといふ事實を通觀すれば、この場合、新日本の使命は意味の無き『我邦固有の文化』を發達大成するのにあるのではなくて、實に、世界の雜然たる諸文化を統一調和することによつて『世界の文明に貢獻』するにあるのでなければならない。予が、本誌十一月號に書いた『日本に於ける生活狀態の改善』のなかに、『その總てを採れ！』と言つた標語の精神は、また實にこの文化の問題にも通じてゐるのである。この意味を更に新聞論説的の口調に翻譯すれば、『世界の大勢に順應して、以て我國の

思潮問題を解決すべし』といふのにある。

予は、こゝに至つて、思はずも米國の爲政者や英國の爲政者、さては佛國の爲政者の巧妙なる手際に想到して三嘆暫時ならざるを得ない。ウツドロー・ウイルソンの長口舌のなかに常にテマとして現はれてゐる『民主主義（デモクラシイ）のために！』といふ標語。それから、サ・グレーやロイド・ジョージの獅子吼のなかに絶えずリフレンとなつてゐる『人道（ヒユーマニテイ）のために！』といふ標語。ジョルジユ・クレマンソーやポール・パンルヴエやの口から虎のやうな喊聲となつて現はれてゐる『自由（リバテイ）のために！』といふ標語。然るにこれと時を同じくしてかのカイザーの口から、ベトーマン・ホルウエヒの口から、或はかの哲學者ルドルフ・オイツケンの口から、我等が耳にした標語は何であつたか？『獨逸文化（クルツール）のために！』といふ標語ではなかつた。予は、獨逸の文化宣傳の正否や獨逸文化の優劣をこゝで問題とはしない。たゞ、英・佛・米の爲政家が、世界の隅々までひゞきわたり得る標語を作成して、その國民に熾んなる自尊心と愛國心とを湧かしめるとともに、爾餘の國民の心にも言ふかたなき快感と同情との念を湧かしめるその——巧妙さを感歎するとともに、獨逸爲政者の用ゐた標語が獨逸以外の國民の心に不快と反抗との念を湧かしめるに止まらず、獨逸自身に於てさへユンケルの徒以外に尠なからぬ不滿の感情を生じさせるその拙劣さを蔑視せざるを得ない。

かうした標語、——註釋も無く投げ出され、僅か二三語（ワーヅ）から成り立つてゐるに過ぎない斯うした標語が、一般の民衆を容易に導くその力の大なることは、眞に驚駭に値するほどである。單純にして直接的なる民衆は、何よりも、直截端的なプロパガンダを愛好する。實際に於けるその内容はどうであつてもいいのである。米國大統領が皇帝的なる獨裁的政治を行ふといふことゝ民主主義の政治をするといふことゝは決して論理上同一つ觀念にあるものとは認め得ないのである。併し、民衆は、論理上の點まで考査はしてゐない。『民主主義のため』ならば、米國大統領が何をやつてもいいのである。『軍備擴張もいいし、西比利亞投資もいいし、宣戰布告權の掌握もいいのである。『民主主義のために！』といふ言葉は、民衆にとつては、六字の聖名や、念佛やとすこしのかはりはないのである。人を殺して泣きながら念佛をする芝居の場面は、決して單に默阿彌の二番目物にあるばかりではない。

かゝる强力なる魅力的なる標語を、予は曾て既往現在を通じて日本の如何なる爲政家の口よりもこれを耳にすることを得なかつた。偶々これを探せば、『獨逸文化のために！』といふ言葉より如何なる點に於ても更に貧弱なる『日本固有の文化のため

に！』といふが如き標語ではなかつたか。

予は、『朝野一致共同』して、この標語を、——世界に呼號して充分の同感と應援とを得ることが能きる標語をば、案出することを切望する。その標語を記した大旆の下に、世界の民衆が直ちに讀み得て微笑する標語の大旆の下に、わが民族が歩調を整へて進軍し得る日の來ることを翹望して止まない。民衆はその標語に醉つて、自分こそ『人類』の使徒であると空想する。斯くして、世界の諸の思想は、この大旆の下に蝟集し來つて、ある意味ですべて日本化（ニッポナイズ）される。これこそ、新時代に於ける極東のグロッタ・アデュラである。あらゆるものは、皆こゝに流れ入り、しかも流れ入りたるあらゆるものは『日本的』の美と光との洗禮を受けて再び世界の表へと還元することが能きる。

四

予は、日本には固有の文化なしと言つた。從つて、かゝる無內容なる日本の文化を以てして强力なる外來思潮に抗するは全く無意味なることを言つた。而して、玆に到つて、吾等の態度は、進んで外來思潮の洪水を招致し、其氾濫の中より新文化を創設するにあることを說いて來たのである。

斯う說き來れば、この思想統一問題——換言すれば新文化創設問題をば解決するためには、全く各個人の力のみに委して充分であるかの如き觀を一般國民に與へたやうに思はれる。併しながら、予の所期するところは、決して個人の力のみでは實現し得ないのであつて、どうしても、國家の巨大なる權力に頼らなければならないのである。

國家の權力を玆に持ち來つたことを以て直ちに、官設調査機關か若くは官設思想取締機關かが必要であるといふ風に解釋する人があることを慮かつて、予は、早口を以てこれを說明する。それは、調査機關でもなく、取締機關でもない、極めて强力なる社會政策實行の機關なのである。換言すれば、民をして充分恒産あらしむる設備を實行して吳れる權力が必要なのである。『恒産無ければ恒心無し』と說いた支那聖賢の言葉は、經濟學と道德との恒久的なる聯盟を、實に適確に言ひ現はしてゐる。デカダントの思想が驕奢なる貴族ボードレールの寢室と饗宴とから生れ、サンヂカリストの思想が腐息の立ち迷ふてゐるセーヌ河の裏街から湧いて出たやうに總べての惡德なる思想は、『富』の多過ぎる所と『富』の少な過ぎる所とに生れ、且つ、育つものである。若し人にして、日々の勞働に適應する不足ならざる收入を得ることができ、且つ健康なる身體の所有者であることができたならば、彼の思想は、充分なる包容力と批判力とに於て缺くるところが無く、美德に遊び惡德を捨て、常に最も美事な

る社會的平準性を示してゐることとなるであらう。かゝる健康なる典型を持つてゐる人々は、『富』を多すぎるほど持つてゐる階級の者が保守的であり、『富』を少なすぎるほどしか持つてゐない階級の者が破壞的であるのに反して、等しく建設的である。從つて、斯うした建設的方面を多量に有してゐる健全な階級者を能きるだけ數多くこの社會に作つて行くといふことは、やがて、外來思想のなかに混入してゐる數多の邪惡な現象を、人爲的ではない自然的な經過のなかに綺麗に排除して了つて、そこに美と光との新らしい思想の塔を建設するといふことになるのである。

過剩に富める者から適當なる方法を以て富を强制收用し、それを移して、落ちついて飮食すらも能きぬやうな貧しい者たちにその者の勞働に相當した程度に配布して行くことは政府の强大なる權力を以てするのほかこれを實行し得る方法がない。

日に月に、恒産を失へる民は增加しつゝある。それと同時に、數多き民は恒心を失ひつゝある。しかも、眼を轉じて外を見れば、世界思潮の洪水は澎湃としてわが脚下に迫りつゝある。

而して、この重大なる形勢を左右し得る力は、實に政府のみにある。しかも、それは『教育』を掌る機關に分掌されてゐる權力ではなくて、主として『産業』を掌る機關に分掌されてゐる權力である。

予の論はこゝに確立する。日本に於ける思想の統一を計らんがためには、先づ第一に政府自ら强力なる社會政策を實行して、この社會をして、恒産ある社會たらしめるにある。その實行にして完うせば第二には、單に日本の民衆のみならず世界の民衆にも共鳴し得べき標語を作つて、あらゆる場合にこれを高調するにある。第三に、世界に横行する思想を總べて享け容れ、而してその雜多なる思想を調和することによつて燦然たる新文化を創成し得るものなることをわが新日本の使命なりと確信するにある。かくしてこそ、初めて、日本の生める文化が、臨時教育會議の建議案にいふ『世界の文明に貢献する』ことが能きるのである。

——一二・八——

國體の精華を發揮するの秋

法學博士　上杉愼吉

四箇年有餘に亘れる大戰爭も漸く終り、大正八年即ち耶蘇紀元千九百十九年を迎ふるに方つて、眼を擧げて我國の現狀を觀れば、思想の方面にも政治經濟其他各般の方面にも、何と無く不安の模樣の見ゆるは、洵に憂慮す可き重大の時機と謂はなければならぬ。此時に方つて新日本即ち眞日本は如何なる方針を執らなければならぬ乎。少しく余輩の信ずる所を述べて、我國民の歸嚮す可き處を示さんと欲する。而して余輩の述べんと欲する所は、要するに相變らずの國體論である。今や國體の精華を眞に發揮す可き時期なる事を說かんとするのである。

一

國體とは其國に於て主權が何人に屬するやを言ふのである。主權は國家構成の根本要素であるから、その何處に在るやを以て其國の建國の體制即ち國體と言ふのである。我國體は憲法第一條が示す如く、萬世一系の　天皇が主權者たるに在る事は天孫の建國と共に定まり、永久不變即ち所謂天壤と共に窮り無く、億兆の仰ぎ見る所であつて、明かなること日星の如く今更余輩の說明を俟つまでもないのである。

二

統治とは國家の存在する所以、即ち余輩の常に述べて居る所の最高の道德たる所以を、國家に於て實現するが爲めに絕對無制限の權力を行使する事である。主權の形式は絕對無制限の權力である。其實質は最高の道德を負擔して、之を國家に於て實現するに在る。統治の眞髓は此主權の形式と實質とが一致して分れざる事に在る。主權の形式は法律學の論として、如何なる國家に於ても同一でなければならぬ。此主權が果して其實質を充實するが如くに行使せらるゝか否かゞ、古來歷史の事實に於て、又政治哲學の理論に於て人の腦漿を絞りし難問題である。主權者の國家に存在するのは何れの國家に於けるも同一なれども、其國の建國の歷史、主權者の成り立ち及び性質、君民の關係等に因つて主權者が實質上統治の目的を完全に充實する

事を得るや否やが必ずしも同一でないのであつて、此處に主權者の品質が分れるのである。而して古今東西の歴史を觀れば、主權者が眞に能く其實質を充實して統治の眞髓を發揮した事は殆ど之を見ることを得ないのであつて、寧ろ絶對無制限の權力を濫用又は誤用して、其目的に反する行動を爲したる實例を以て滿ちて居るのである。之れが我國體の精華の萬國無比と爲す可き點であつて、我國に於ては統治を「しろしめす」と謂ひ、唯絶對無制限の權力を行ふ事のみを眼中に置かず、統治の實質を充實する事を以て根本義としたのである。之が所謂「惟神道」であつて、我　天皇の本質は法律上の形式論として主權者たるに止らず、能く主權の存する所以の實質を充實するに在るのである。之れ我建國の大精神に基くのであつて、天祖天照大神は高天原即ち理想國家を此日本國即ち葦原中國に行はんとて皇孫を降されたのである。天祖は如何なる御方である乎と言ふに、當時の日本人は、天地創造の神の子孫であつて宇宙人生の一切を支配し、我日本人は此人に絶對的に憑依し奉つる事に由つて人の人たる所以の本性を遂げ、道徳を行ひ、其理想に到達する事を得る精神又は意思の主體であると信仰して居つた。此信仰が建國の基礎であつて、歴代天皇は此天祖の精神、建國の信仰に基て天日嗣の位に登らせられ、天祖の遺蹤を體得し天祖猶在ますが如く國を治し召したのである。されば　天皇には形實一致の主權者たる本質を本來具へられたる方であつて、支那の孔子の教に於て「治國平天下」の天子の道を述べたれども、唯堯舜を理想とするのみで之を實現したる事は一度も無く、西洋の學問に於て君主の正に行ふ可き所をいろ〳〵言ふけれども、唯學者の理論に止り歴史の事實は專制の事實のみを陳ぶるに反して、我　天皇は本來斯くの如き性質を有し、現實に主權の存する所以の本義を充實し發展せられつゝ今日に及んだのである。之れ我國體の精華の最も根本的なる最も重大なる點であつて、　天皇の主權の行使が本質上國家の最高の道徳たる所以を實現し、人民をして其本性を遂げしめ人類の理想に到達せしむるの一致して離れざるは、洵に古今を通じ東西を兼ねて萬國無比と言はなければならぬ。

三

國體の精華として次に擧ぐべき根本的に重要な事は君民合一と云ふ事である。教育に關する勅語に「我臣民克く忠に克く孝に、億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは是れ我國體の精華」と宣ひしは此意味であつて、民力合一して建國の理想たる、即ち宏遠なる肇國深厚なる樹徳の精神たる最高の道徳を行ふに、人民の力を合し、人民は　天皇と合一して之を實現しつ

つある事が、我國體の精華として最も尊ぶ可き所である。「克く忠、克く孝で」あつて、種々の道德を行へども忠孝を以て根本とし、孝は　天皇に忠なるに一致するに於て意義を爲すものとし、人民合一し、合一したる人民は　天皇に合一して、國家の存する所以を實現するのが我日本國の萬國無比なる所である。人民は眞に同胞と信じて居るのである。世界に民族多しと雖も、我日本民族の如く精神的に民族の結合の堅きは無い。而して民族の結合は　天皇を中心とし、天皇に統一せられて存するのである。天皇に統一せらるゝも、形式的に絕對無制限の權力に服從するのではない。即位の勅語に示されたる如く、眞に「義は則ち君臣にして情は猶ほ父子の如く」に、言ふ可からざる精神的の結合を爲して居るのである。此日本國民の離る可からさる合一と、君民の離る可からさる合一とは、又萬國無比の國體の精華とす可きである。

四

余輩が國體の精華を發揮すると言ふのは、右に述べたる事を時勢の進步、文化の發達に伴つて益々發展する事を言ふのである。我歷史を回顧すれは神武以來二千六百年に近く、其間我國體は微動だもしたる事なく、建國の精神たる國體の精華は綿々として絕えず發展したのであるけれども、時勢の變に從つて、時に汚辱あり、以て前古なかつた屈辱、同事千古を失つたる時代も少らずあつたのである。徳川氏の末葉に至つては實に口に云ふに忍びざるものあり、建國の精神は著しく衰へた。明治維新の大いなる意義は之を其原に復へして國體の精華を再び發揚せんとするに在つた。即ち　天皇の主權者たるの形式は不變の如くであるけれども其實質の失はれたるを恢復して、再び　天皇の主權に歸つて國家の最高の道德たる所以を實現し、擧國人民の力を再び振作して、中間に君民の疏通を壅塞するものを撤去して、君民合一盛んに經綸を行ひ、國體の精華を建國の初の如くに發揮せんとするのが明治維新の根本精神であつて、之を中興と爲す所以である。明治天皇即位の初め、之より以後親ら政を行ひ、神武創業の原に復へらんと宣はせられた。明治元年の「民を率ひ民と共に一新する」の御宸翰にも「中葉朝政衰へてより武家權を專にし表には朝廷を推尊して實は敬して之を遠け億兆の父母として絕えて赤子の情を知る事能はさるやう計なし」上下相離れたる有樣なりしが故に、是より親ら政を行ひ、「君臣相親みて上下相愛し德澤天下に洽く國威海外に輝く」の古の如くになさんと宣ひ、「天下億兆一人も其處を得さる時は皆朕の罪なれは」誠意努力主權の實を發揮して民と合一し、是より其統治を行はんと宣はせられたのは、維新の精神を言ひ表はしたものと申さ

なければならぬ。かの五ケ條の御誓文に掲げられたる宏謨は人の皆知る處であつて、要するに天皇親政に依つて國家の存する所以の目的を益々到達し、民力を貽す所無く暢達し、君民合一盛んに經綸を行ふのが明治の御代の大方針であつたのである。此方針に則つて益々國體の精華を發揮するが爲めに實施せられたる事柄は一々擧ぐるを得ざれども、明治の進歩は實に古來未曾有であつて、此の如く國體の精華の發揮せられた時は開闢以來曾て無いのである。其二三を言ふならば、明治の初め四民平等と定められた如きは非常の大英斷と言はねばならぬ。徳川氏時代程階級の形式の甚だしかつた時代は無いのであつて、一朝にして公武士庶皆平等を定められたのは、踔厲風發維新の大精神の存する所を見るに足るのである。明治五年に徴兵の制度を定め全國皆兵とし、國を守るの榮譽は四民悉く例外なく之を負ふ事の出來るものとしたのも亦大精神の發する所と申さねばならぬ。又租税は悉く均一と定められ、如何なる者の子も教育より除外せらるゝ事なきものと定められた如きは、固より時勢の進運によるとは言ひながら、之に據つて建國の大精神を益々發揮せんとするの宏謨を窺ひ知る可きである。明治二十一年に自治制の施されたるも亦同様である。斯くの如くにして益々民力を暢達し「大に皇基を振起」したのである。

五

憲法發布の根本精神も亦茲に在る。益々　天皇主權の實を充たし、天皇の力に由つて民心を暢達し、民力を合一し、君臣合一して建國の精神を發揚するが憲法發布の大なる趣旨でなければならぬ。我先師穗積八束博士が明治二十二年の憲法の基礎は既に水戸の勤王論に在りと言はれたのは、能く憲法發布の趣旨を道破したものと爲す可きであるが、余輩は寧ろ憲法發布の大精神は既に天祖建國の時に定まると言はんと欲する。憲法發布に方つて明治天皇は之を皇祖皇宗の神靈に誥げられ、憲法を發布するのは「皇祖皇宗の遺訓を明徴に」するものであると宣はせられた。又「此れ皆皇祖皇宗の後裔に貽したまへる統治の洪範を紹述するに外ならず」と宣はせられたのは、憲法が天祖建國の精神を發揚し、歷代天皇の行はせられた統治の趣旨を、此秋に方つて益々發揚するを以て大精神とする事を窺ひ知るに足るのである。又憲法發布に方つて國民に向つて宣はせられた勅語には、日本の建國は皇祖皇宗が臣民の協力扶翼に倚りしものであり、此の光輝ある國史の跡を貽したるも亦臣民の愛國殉公の精神によるものであるとし給ひ、臣民が將來相與に和衷協同し力を合せて　天皇と負擔を共にして國家の隆興を圖らん事を冀ふが故に此憲法を發布すると宣はせられたのは、憲法の精神た

る建國の精神。維新の宏謨を益々恢弘して、人民合一君民合一の國體の精神を益々發揚せんとするに在る事明かなりと言はねばならぬ。

六

明治維新の大精神は國體の精華を發揮するに在りしなれども、回顧すれば維新以來屢々國體論は世論の問題となつた。維新當時に國體論の盛んなりしは言ふまでも無いが、明治十四年國會開設の詔勅の出でたる前後には、國體論は頗る際どき所まで行つたのである。矯激なる自由平等、民主共和の論も行はれた。當時の議論は立憲と民主とを混同し、一方は憲法を制定す可しと言ふに對し、國體論を以て國會開設を尙早なりとしたのである。十四年の國會開設の詔勅は立憲と國體とは無關係である、憲法を立て國會を設くるも　天皇の大權は毫も動かさるゝ事なく、大權中心の制度を取る事が定まつて發せられたのであるが、之に對して政黨內閣を主張するの聲甚だ高く、國體論は絕えなかつたのである。憲法實施の後に至つても、常に大權論と政黨內閣論とは國體論を中心として爭つた。明治の末年學者の論として美濃部博士の忌憚なき國體に對する異說が現はれ、余輩は極力之に攻擊を加へて世間の視聽を惹き、一時國體論は頗る盛んであつた。大正の初め憲政擁護の運動と表裏して學者の思想に起り其後民本主義の論が現はれ、[redacted]は俄に起らず續いて來たのである。

七

然るに今や國體論は略ぼ定まれりと言つて可なる狀態となつた。學者は如何なる言葉を用ゆるも、今や國體の根本については軌道を逸れた異見は無いと言て宜しい。世上の新聞雜誌の論調も國體は根本として認むるといふ事に一致して居る。政黨が政綱を發表し宣言を爲すにも先づ國體を揭げざるなく、政府も必ず國體を尊重する事を宣言せざるは無い。大隈內閣も寺內內閣も又今の原內閣も、何を措きても先づ國體を重んじ、皇室中心主義を執る事を直接間接に宣言して居る。政友會でも憲政會でも又は國民黨でも、大會に於ける首領演說とか宣言とかを爲すに當つては、必ず先づ國體を言ふ事を忘れぬのである。美濃部博士の如きも余輩との論爭以來屢々其根本思想は皇室中心に在る事を述べられて居る。之は博士の辯解せらる、までもなく、余輩とても初めより博士の信念を疑つたものではない。美濃部博士に同意して盛んに余輩に挑戰した市村(光惠)博士も、其後屢々皇室中心たるに於ては固より異見無き旨を力めて述べて居られる。所謂民本主義なるものを高唱して我國に於ける民本主義の喇叭手とまで言はれたる吉野博士も、近頃は我國體無

此の國體には厚き信念を有し、皇室を尊崇するに於ては人後に落ちざる事を頻りに世間に分らせるやうに力めて表白せられて居る。大學では筧博士が熱心なる尊皇主義者として多數の學生の熱烈なる尊敬を受けて居らるゝのは人の知るが如くである。此等の現象を見ても、國體の根本については從來諒解の足らざりしものが溶けて、略ぼ定まれりと見る可きであらうと信ずる。

八

國體論は已に定まつて、之を基礎として新しき發展を爲さんとする機運今や熟したものと言はなければならぬ。新しき機運とは國體の基礎の上に我建國の精神、明治維新の意義即ち國體の精華を益々發揮せんとする事を言ふのである。然るに大正三年以來突然歐洲の大戰爭が破裂して、人類の歴史あつて初めて見るの大渦亂を生じ、凡ての事物は平調を破られたのである。此間に我日本國民は一方には我國の世界の事件に對する有力なる地位を自覺すると共に、國運の非常に困難なる事を氣着いたのである。日本帝國の前途は實に測り知る可からざるものがあるといふ事を上下を通じて考へるに至つた。今日本人の心持を喩へて云へば、波瀾渦卷をなして湧き立ちかへる世界の大海に、扁舟に棹さして居るが如き感情がして居る。實に伸るか反るかの時である。彼岸に達して光明を見る可き乎、又は波瀾の間に覆沒す可き乎、大日本乎亡日本乎、實に危急存亡の秋にある事を自覺し來つたのである。それと共に此扁舟に棹さす七千萬の舟人は暗黑なる天空を望み、吹き荒るゝ暴風に曝され互に顔を見合せ手を握り合ひ、眞に一致して百倍の努力をしなければ此困難を乘切る事は出來ないと覺悟し、國を擧げて結合し、此大難に當らんと決心するの自覺が漸く起り來たのである。近來の民主主義などいふ論の盛んなるのも、一面には斯かる心理の赴く所を示すのである。要するに擧國一致せざる可からざるの自覺は國民何人の頭にも湧き來つた。國民の完全なる合一は我國體の精華として　天皇の御稜威の下に君民合一するに由るのである。此世界歴史の一轉機、我國運の一轉機に方つて、國體論の略ぼ定まるものあるは當然であつて、此自覺に由つて大日本帝國は新らしき發展を爲さんとし、又發展をなさなければならぬのである。

九

歐洲大戰爭の我國民に與へたる教訓は各方面に亘り實に多々あるのであるけれども、余輩は茲に我國民が歐洲大戰爭を見て我國體について深き自覺を喚起し、厚く我國體に信頼し、之を本として國家將來の進運を開かなければならぬ事を明白に知り得

たり、[illegible]同れの國民と國家と云へる活き自覺を得た一國家ありての我一といふ自覺である。之は我國に限る事ではない、否、我國に於けるよりも歐洲諸國に於て最も顯著である。英佛人の中には戰爭前に於て、我の存在は國家を離れては無いといふ事を自覺せざる者が多數であつた事疑を容れぬ。然るに戰爭の起りてより我は「英吉利人たる我」「佛蘭西人たる我」であり、國家無ければ我無しといふ強烈なる自覺が各人に起つた事は著るしい現象であつて、英佛を見たる人の驚嘆する所である。米國の如きも戰爭に由つて初めて眞に一國家として自覺したと言はれて居る。斯くの如き國家と個人を合一して、國家在りて初めて我ありといふ自覺、即ち余輩の常に所謂「國家心」は大戰爭に據つて我國民にも強く確かに認められるのである。而して我日本國は如何なる國家なるかと顧れば、國體の精華實に萬國無比であつて主權の形體兼ね備り、眞に國家ありての我といふ事は我日本國に於て最も純粹に發現せられて居る事を知るに及んで、我國民の間に強烈なる我國體の自覺と衷心よりする我國體に對する尊崇信賴の念を起し、此國家を愛護するの情念が油然として湧き來つたのは寔に當然と言はなければならぬ。

一〇

戰爭は[illegible]示した。されば進步は人智[illegible]と言へる。現代は個人智識の[illegible]の發達したる[illegible]時代である。現代は組織の時代と言ふも亦可ならん。凡ゆる方面に於て組織が益々發展して力の根源となつて居るのである。國家は本來人類共同の組織の最も完全なるものであつて、國家が最高の道德たる所以は完全なる組織たるにある。併し乍ら國家内に於て國民が如何に組織せられたならば最も能く國家の國家たる所以を達する事が出來るかは、處により時により異なり、國によつては組織の極めて不完全なるもあるのである。この組織の完全なればなる程國民の結合が固く、國家として統一すればする程國家の力が強き事は言ふまでもない事で、國家の性質上然らざる可からざる事であるけれども、大戰爭は國家に於て組織の力が如何に偉大なるかを最も明白に知らしめたのである。我國民は英佛米獨の組織を以て相戰ふ狀況を見て、組織良好なれば百倍千倍の力を爲す事を見て、如何に國家に於て組織の重んず可きかを知つたのであるが、此點に於ても亦我祖國を顧みて我國體の精華に言はん方なき讚嘆の念を起さなければならぬのである。世界國多しと雖も我國程立派に組織せられ結合統一せられて居る國家は無い。唯一天皇の御稜威の下に七千萬人一人も異心を抱く者無く完全に結

合して居るのである。噂に據れば獨逸皇帝は數年前日本の統一を羨む可しとしたさうであるが、此組織統一は彼が如何に羨むでも一朝一夕に五十年百年で出來るものではない、實に二千六百年、否、天祖以來悠遠なる歷史の賜物である。我忠實勇武なる祖先努力の結果である。如何なる國と雖も遽かに之を得る事は出來ぬ。我々は斯の如き幸福なる國家に生れたのである。組織の完全なるは、巧みに構成して之を實現する事を得る。併し乍ら人工に因る機械的の組織は之を精神的の結合に比ぶれば遙かに微弱である。「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」、死生を共にする精神的結合は、何物も當る可からざる絕大の力である。天下何の國か我日本の如く精神的に結合せられたる組織の力を有するものある乎。我國民は唯一 天皇の下に結合し、天皇の爲めに生命を鴻毛の輕きに比し、天皇の爲めに命を捨つるを無上の幸福とし、國民相互に眞に一家同胞の感情を有し、七千萬の力は七億にも働く可き力を有つて居るのである。組織の時代に二千年來養ひ來れる組織の力を以て世界の表に現はれ來れる我日本は幸なる哉。國民は我國體の精華に對して之を自覺するに從ひ、言ふ可からざる力の自覺を生ずるのである。

二

第二に我國民は大戰爭の經過に連れて、我國體の眞に萬國無比である事を自覺したのである。戰爭の第四年露國皇帝の沒落は我國民に向つて非常な感動を與へた。さしも堅固に見えたる露國皇帝が一朝にして仆れたのを觀て、我も危なしと考へた馬鹿者も無知の老人輩の間にはありし如くなるが、漸く革命の經過を觀るに從つて露西亞皇帝の本來如何なるものでありしかを知り、ロマノフ家の祖先の如何なるものでありしか、其成立の如何なるものでありしか、國民との關係如何でありしかといふ事を今更ら諒解して、顧みて我國體の尊嚴無比なるを知り、彼れ露國皇帝とは絕對に論を同じくするものに非ざるを認めて、我 天皇の神聖至貴眞に天壤と與に窮り無く萬世に亘つて動かざる事を悟つたのである。又戰爭の終りに臨んで獨逸皇帝の沒落蒙塵したりし事は、同じく我國體の尊嚴無比なるを知らしめた。獨逸皇帝が皇帝といふも主權者に非ず、二十五聯邦の主權を代表する聯邦會議を主宰し其決議を實行する機關に過ぎざる事は、獨逸憲法を見たものは皆知る所であり、其威權赫々なる如く見ゆるも本來統一の歷史無く分裂を以て本性とする獨逸諸國が、七十一年の憲法に據り極めて巧妙なる寄木細工式の組立より、又ビスマルク等の虛々實々の術策に依つて作り上げられたる普魯西王の覇權に過ぎざる事も、少しく西洋の歷史を讀、

な者の知る所であり、[illegible]の諸國[illegible]は帝の羈絆に服す[illegible]を喜はず、不快の感情は絶えず存し、加ふるに國民は[illegible]に[illegible]み故無く皇帝を崇拜する者に非ず、社會主義の思想極めて旺んなる事も亦、獨逸の事情を闚見する者の皆知る所であつたけれども、今や忽然として沒落したのを觀て寄木細工の餘りに脆弱なるに驚き、翻つて我　天皇は眞に世界無比であり、我日本の如き國家國體は天下唯一である事を悟つて、我國體に對し無上の權喜と衷心よりの信賴を感じ、此國體の下に國民眞に一致して　天皇の御稜威を仰ぎ、國體の精華を發揮して國家の理想を遂せんとする覺悟の甚だ堅きものあるを致せるは、偶然ながら大戰爭が我國に與へた大なる賜物である。或は英吉利白耳義伊太利は何ほ君主を有するといふ者もあらんかなれども、彼等も亦我　天皇とは全く違ふのである。英吉利は國王あれども夙に何事をも爲さざる地位に居り、佛米よりも一層徹底したる民主國なるは人の周く知る所である。白耳義は國王あれども憲法に明文を以て主權は人民に在りと載せて居る國である。白耳義國王は眞に世襲の大統領である。伊太利國王は人民の選擧によつて其地位を得たものである。彼等と我　天皇と全然本質を異にする事は明かである。(因に言ふ、姉崎文學博士は新聞紙上に民本主義の行はるゝは國の君主なると民主なるとには依らぬ、ウヰルソン[illegible]民主主義の[illegible]であると[illegible]はない。現に英吉利も白耳義も君主國であるといふ事を忘れて居られたが、上述の區別を明かにして置かなければ博士の說は種々な誤解を生ずると思ふ。)

二

戰後世界の大勢は如何に變化す可きか、俄かに逆賭する事は出來ぬが、我日本の爲めに非常な困難なる形勢になる事は暫くまで之を覺悟せねばならぬ。將來の世界は何といつても英米獨三國の支配する所である。而して英米が戰勝の餘威を以て太平洋及び東洋に殺到し來るならば我日本の困難は實に非常であらうと思ふ。英米は何事を爲さんとしても爲し能はざる無き地位と實力とを得來るであらう。東洋の平和と自由とを維持するは我日本の任務であるけれども、此狹少なる國土と貧弱なる物資を以て七千萬人が何を爲し得るか。惟ふて爰に至れば終夜眠を爲す事も出來ぬ。講和會議より其後に於ける列强混亂のほども思ひやられる。之に處して有色人種唯一の强國たる日本は何を爲さんとする乎、之に嚮るの國是は如何に定む可き乎、我國民は必死の覺悟を以て非常の決心を爲さなければならぬ秋である。然るに之に嚮るの途如何、唯我國體の精華を發揮するに在る耳。此以外に日本の國力の根源は無いのである。賴る處は唯

此一つである。今や世界の大勢に乘じて我國體の精華を發揮するの必要は古來未だ無き所、我々は奮勵努力しなければならぬ。而して世界の大勢は我國體の精華を發揮するに最も適當なる機運を與へて居る。大戰爭は第十九世紀文明の破綻である。個人主義物質主義我利主義生存競爭の世界觀人生觀に基く力の偏勝なる主義は到底人類を救ふに足らざる事が明白に暴露されたのである。斯に於てか理想國家の要求が勃然として起らなければならない。國家を理想的に觀て理想的の國家に於て最高の道徳が實現されなければならぬと理解する時に、我大日本帝國を顧みて國體の精華が玆に光を放つ可き時が來た事を思はねばならぬのである。此世界歷史の一轉機こそ實に我國體の精華の發揮せらる可き一轉機であると信ずるのである。國體の精華を發揮するの機運已に熟し、之を發揮するの素地亦業に成る。知らず如何にか之を發揮せんとする。

一三

玆に於て我々は國體の精華を發揮するを遮ぐる元素又は事情の尠からず存在する事を考へねばならぬ。我國に於て國體の尊ぶ可きを說き國體の精華を發揮す可きを論ずるのは、議論も何も有る可き事ではない、平々明々誰も認め誰も主張するを要せず、誰も反對せざる事でなければならぬ。然るに歷史を回顧するに、國體論が絕えず矢釜しいと云ふのは夫れ丈けの事情が纏綿したからである。余輩は今國體の精華の大に發揮せられんとする秋なるを論ずるに方つて、事實を有りの儘に匿くす所なく眞面目に嚴肅に、何が斯の如き事情であるかを考へて見なければならぬ。我歷史に於て時々　天皇の名の下に、國體の名の下に自己の私を成したる者が存したのである。是が常に國體論の誤まられた理由である。往古世襲の氏族が　天皇の下に其局に當つたが、遂に　天皇の名の下に私曲を爲し權を專らにするに至つた。後には外戚なる者　天皇を擁して人民の怨を受け累を　天皇に及ぼした。實力武士に移り源平二氏の爭となるや共に天子を挾んで權を爭つた。一方は一方を　天皇に反對すると罵るのである。故に勢窮つて足利北條の反逆となり、南北朝の對立となり、順逆の大義名分溷濁して判らざるに至つて終つた。下つて戰國の世に於ても權勢を得たる者常に天子を挾んで天下に號令せんと欲した。斯の如くなれば國體論は權勢ある者の用を爲し、權勢に反對する者は國體に反するとせらるゝに至つたのは當然である。德川氏は遂に天子を有名無實として最後に除かれたのであるが、明治の世となつてかの藩閥の如き、　天皇國體といふ事を說くを以て自己の利益とする者と、之に反對せんが爲めに知らず識らず國體に反するに至つた者とを生じたの

は、實に悲しむ可き事と言はねばならぬ。維新以來の政權の爭は、國體を笠に着る者と之に反對する者との爭の如くであつたのは、如何にも痛恨に堪へざる事と思ふ。余輩が國體論を矢釜しく說くのを見て、彼は藩閥官僚擁護の論を爲すと言はれたのは、余輩の卒直なる考から觀れば洵に不思議千萬としたのであるが、事情は斯く言はるゝやうになり來つて居た事は悲しむ可き事態と云はねばならぬ。藩閥官僚非なるか、無暗に政府官吏に反抗する事を奨勵し之を快とするの極國體を非議せる者が否なるかは知らぬが、兎に角事情は斯くの如くである。維新後世態の變を觀れば、德川氏時代に武士以外の階級の言ふ可からざる壓迫を受けて居た者が俄かに四民平等となり、官吏も町人百姓も共に羽織袴を着、フロックコートを着るやうになれば、上を凌ぎ上に逆ふ事が風を爲して快とせられたのは當然の成行とも觀られる。野心家が是に乘じて政黨を發達させたのは如何にも狡猾であるが、藩閥も官僚も大に罪有りとせねばならぬ。天皇が統治せらるゝに舊勢力を利用せらるゝ事は當然である。併し乍ら此勢力が國體の名に於て自己の權勢を張らんとするならば、假令それは無意識に、不知不識さる形式と成つたにしても、我國體の爲めに大に悲しむ可き事と言はねばならぬ。政黨が勢を得て政治の中心となるに至れば古の源平二氏の時代の如く、再び斯かる事態を生ずるに至らぬとも限らぬ。其の何れなる階級なるかは姑く問題として、斯くの如き何れかの中間者が天皇と人民との中間に蟠り居りては、到底擧國一致して天皇の御稜威の下に民心を合一するといふ事が出來ぬのである。所謂上下隔塞して明治天皇即位の御宸翰に宣はれたる如く「上下相離れ君民は父子たる」の實も失はれ、國體の精華の發揮せらるゝ事が出來ぬ。國體は光を失ひ、天皇の力伸びす、人民の力伸びす、建國の精神、維新の理想、憲法の本旨と共にこれに終るのである。國民が一人たりとも利己に自分の得にならぬ、自分が損しても他人の得になると、事實は別として、考へる者があつたならば我國體の精華は消失せるのである。又事實國體によつて、勤皇によつて特別の私益を受ける者があつては、我日本の萬國無比たる所以は全然堕しきのである。今國體の精華の發揮せられんとするに方り十分之を考へて、斯くの如き者を一掃し、何の遮げも無く此理想を達する事を考へなければならぬ。

一四

天皇大權の行使に當る上下の官僚は君民の間を疎通して合一の實を擧ぐる任務を負て居る者である。併し乍ら動もすれば上の威光を笠に着て人民を見下すに至るは陥り易き弊害である。官僚も頑固まれば國體の精華を發揮するの邪魔物となるのでも

る。官僚は眞に國民の指導者でなければならぬ。併し乍らそれだけの品位と實質とを具へてこそ初めて其の目的を達するので、其品位と實質無く官僚の城壁に立て籠るに至つては、大權行使の防害物と言はねばならぬ。かの貴族なる者は最も國家の公と自己の私とを混同し易い者である。其他富家、資本家、如何なる者でも國家の制度によつて特別の私益を得る者があるならば全然之を排除しなければ、眞に君民合一の理想を達し國體の精華を發揮する事は出來ないのである。

一五

國體の精華を發揮して建國の精神を充實する眞日本を建設せんとするには、極度まで天皇の威力を伸べ、極度まで民力を合一し、極度まで君民合一の實を擧ぐるに努めなければならぬ。國體及び之を基礎とする秩序制度によつて特別の私益を得る者を全然一掃して、何の防害も無き廣々たる日本に於て其理想を達する事を圖らなければならぬ。近頃衆議院議員選擧法改正の議ある事を聞くが、政府及び政友會が之を改正せんとするのは、結局自黨の利益と世間の人氣とを顧慮するに外ならぬ。畢り次の選擧に有利なる地歩を占めんとする者である。憲政會の議論も其動機は此外に無い。併し乍ら言ふまでも無く選擧は國家の公器で政黨の私有物ではない。政黨の懸引きに玩弄せらるゝ如きは國民の忍ぶ能はざる所である。何故に斷々乎として直ちに普通選擧を採用せざるか。選擧權の制限は其時代其國の事情に出つて之を定むるものであるけれども、特別なる事情が無いならば固より普通選擧でなければならぬ。我選擧法は普通選擧を目標として進む可き事余輩の年來唱へる如くである。政友會は小地主を根據として立つの政黨である。米價問題についてもそれが爲めに徹底的の處置を取る事を得ないで、普通選擧の採用は恐らくは政友會の沒落を意味するであらう。之れ制度を私する者である。斯の如きは斷じて排斥しなければならぬ。憲政會も資本家に出つて立つの政黨である。資本家と結托する事は歐羅巴でも政黨として已むを得ざる事とせられて居るが、我の如き國體にあつては何處迄も之を排斥しなければならぬ。物價騰貴の原因は何と言つても通貨の増加にある。何故に通貨縮少を行ひ得ざるか。國民は誠に迷惑千萬と言はねばならぬ。華族なる者の廢止す可きは勿論である。今の公侯伯子男の制度は明治十七年に制定せられたのであるが、之歐洲封建の遺物たる彼等の貴族制度を模倣したものである。我國には本來貴族なる者は無い。皇族は別として國民は悉く天皇の股肱皇室の藩塀であつて特別の階級の其間に介在するを許さぬのが國體の本義に合するのである。歐洲の國王は封建諸侯の發達したるものであつて、

臣の諸侯に對して比較的優越の地位を占むるのみ。國王の下に段階を成す貴族あるは當然である。貴族あるによつて國王は階段の上に立ち、辛じて尊きの地位に居るのである。何故に之を模倣した乎。我 天皇は絶對の尊である。段階を追ふて辛じて尊きを維持するものではない。我徳川時代の事を見ても、徳川氏は諸侯の優れたるものである。故に階級を嚴にして辛じて其地位を保つた。我 天皇は惟神至聖臣民群類の表に在り、一切の人民と種を異にするのである。段階を追ふて尊きのではない。華族の如き皇室の藩屏と稱し、特別の利益を共有するものは我國體に合はぬのである。今や社會の實力は資本にある。從て一切の制度は資本家の利益を保護するが如くに出來て居る。例へば近來貯蓄を奬勵すると言ふが、下級の人民が其生活費を節約して貯蓄したる資金は集つて資本家の用を爲すのである。富豪の奢侈贅澤は近來其極に達して居る。余一は々其の實情を知て居るが、此を見て下級の人民が憤慨するのも無理はない。若し富豪を憎むの念と國體に對する反感と混同せられる事あるならば、之を如何に爲んとする乎。聞くが如くんば大阪邊の富豪は從來餘り國家を離れて我無きを自覺して居らなかつた。然るに先頃の米騒動で財産の不安を感ずるや頻りに國體に縋るの志を生じたと云ふ事である。危い哉、斯くして貧民の不平が國體に及ぶ事あらば、[illegible]の事であらう。[illegible]國體の精華を發揮するの方法を[illegible]す可きである。[illegible]均一である。徴兵制度も不公平である。[illegible]を文字通りに實行し、國民に何の不平も無く眞に[illegible]の感情を存して、國體の精華を發揮するの途を講ずる事こそ目下の急務とす可きである。近頃臨時教育會議に於て民心の統一を計る可き事を決議したといふ事を聞くが、何ぞ民心の統一を言はん、民心は國體に於て統一して居るのである。是を遮ぐるものは種々の防害物である。是を除きて初めて民心の統一を言ふ可きであらうと信ずる。要するに民力合一、君民合一の國體の精華を發揮するは一切の障害物を打破して新局面を展開しなければならぬ。是を如何に組織する乎は吾人の新に研究す可き題目であらう。そは慎重の考慮を要するが其方針は玆に在らねばならぬ。

一六

我國體の精華を發揮すれば眞に理想の郷を開拓して人類の本然を遂する事を得るのである。眼を擧げて世界列國を觀れば、國に民主あり君主あれども、君主なるものは我 天皇とは根本的に異り、偶然の原因に由り誤つて發生したるもので、到底國家の理想を遂す可き資格無きものである。諸國が漸く革命を行つ

て之を廢し、又は之を有名無實にして立憲の極致と爲すは洵に當然と言はなければならぬ。然らば民主國は能く國家最高の道德たる所以を實現しつゝありやと言ふに、從來行はれたる代表民主の制度は議員專制か大臣專制か又は最近の富豪專制に陷りて、人民の利益は毫も暢達せられぬのである。民主制は如何にしても一部の專制に陷るのである。故に民主國に於て人民の政治、人民に依るの政治、人民の爲めの政治なる事が絶叫せられるのである。然ればとて直接民主の政治は實行す可からず、之を行ふとも矢張一部專制に陷る事は同一なる事は實驗の示す所であり、余輩の屢々論じた所である。是を佛英米の諸國について觀よ、思ひ半に過ぐるものあらん。眞に擧國一致何人も力を貽さざる無く、何人も特別の利益を受け特別の不利益を蒙る事なく、國家の理想を實現する事を得る國家は、決して誇張の言を爲すにあらず、眞に我日本あるのみである。今や世界歴史の一轉機に際し我國體の精華を發揮する秋來つたのである。素地は已に成れり、是を遮ぐる一切の事物を排斥して玆に新日本即ち眞日本を建設し、新局面を開拓して建國の精神を成就す可きではない乎。而して之を世界に及ぼし人類を救濟する眞に我國家の使命であるとせばならぬ。神武天皇即位の詔に「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ふて宇と爲す」とあるの宏謨は斯くして實現せられんとする。急務は現存の一切の障害物を打破するに在る。

(附言今や上下を通じて皆私を思ふ者のみ、何の情實繫累もなく行き掛りもなく名利の念を離れ榮達を思はず衆民に媚びす唯國濟民の策を立て之を實行せんとする者殆んど一人もなしと云て可なる有樣である。あゝ誰と共にか國事を語らん。之れ余の本論を以て江湖に問ふ所以である。庶幾くは大方の君子本論に關し其の見る所を示して東京帝國大學法科大學研究室上杉宛高教を賜はらんことを)

我が軍國主義論

(姉崎博士の所説を疑ふ)

海軍大佐　水野廣德

一　序論

獨逸は敗北した。獨逸は屈伏した。恰かも降り積む[illegible]へに抵へし松が枝の、曉の冷やさにポキリと折れたるが如く、四年有餘の惡戰苦に、友は反き、内は亂れ、遂に哀を聯合軍の軍門に請ふに至つた。多年世界の空を暗くしたる血腥き戰雲漸く霽れて、再び平和の光を見んとするは、人類の爲め誠に慶祝の至りに堪へぬ次第である。縱ひ獨逸治政家に罪ありとするも、獨逸國民に罪なし。全世界を敵として祖國の爲めに奮闘勇戰し、然かも今や時利あらずして敗戰の憂苦に沈む敵國に民に對して、武士の同情一滴の涙なき能はずである。勇敢と愛國とが人間の美德であるならば、過去五年の間に獨逸國民の爲したる處は、縱ひ最後に破れたりと雖ども、亦以て永く青史を飾るに足るであらう。負けた獨逸にして尚ほ且つ然り、勝ちた聯合軍の稱揚すべきは勿論である。併しながら顧つて戰後に於ける世界の大勢、將來に於ける帝國の地位を思へば、憂心自ら忡々たるものがある。自分免許の正義人道の勝利か、敵に冠したる惡魔下道の敗滅か。祝勝の酒醉ふべきか、將た醉ふべからざるか。唯獨逸の屈伏以來、獨逸必敗の豫言者續々として自ら名乘りを揚げて現はるゝを見る時、我が國亦先見の明ある多士濟々たるを知り、潜かに意を強ふするに足るものがある。之と同時に[illegible]として[illegible]を[illegible]む[illegible]は獨逸なり[illegible]逸敗れたりと云ふ。軍國主義の敗れたのではない[illegible]鑑みて、僕は益々軍國主義の必要を感じ[illegible]ないであらう。茲に新世界の鑄造せられんとする大正八年の新年に際し、僕の軍國主義觀を述べて新軍國主義の陣頭たらんと期するものである。

最近、大阪毎日新聞紙上に連掲せられる文學博士姉崎正治氏の筆に成る「第十九世紀文明の總勘定」なる雄篇は、作者が日本學界の一權威たるの點に於て、僕謹んで之を誦讀し、大に學ぶ所があつた。然るに十二月三日の論文「軍國主義の害毒と其の破滅」なる文章に至りては、僕等軍國主義を信ずる者の承服し難き處にして、爰に鈍才を顧みず、敢て所信を披露し、姉崎博士の高敎を請はんと欲するのである。

本論に入るに先ち、豫め博士に對する僕の立場を明かにし置くの要あるを認む。僕博士と一面の識なきも、博士が我が國思想界の大家として、一部の學界並に國民の間に尊信せらるゝを知り、心潜かに畏敬の念を抱ひて居るものである。唯性懶惰にして從來多く博士の著書を繙くの機會を有せず、從うて博士平生の主義意見に關して深く知る處なきも、新聞雜誌等に於て屢々、博士の言説に接したるを以て、略ほ其の大體を預知すること

とが出來たと思ふ。

博士は『人の性は善なり』卽ち人間は生れながらにして社交的なりとの肯定の下に、人類永久の平和を夢み、否な永久平和時代の必ず到達すべきを說き、此の理想境に達することに努力せられて居る樣である。人間の性が善であるか、惡であるか、將た社交的であるか、爭鬪的であるかは別問題とし、若し博士の說かるゝ如く、又博士の信せらるゝが如く、近き或は遠き將來に於て、永久の平和時代（正義に基づく）が到來するとすれば、人類の幸福洵に之より大なるはなく、僕亦博士と其の歡びを分たんことを希望するものである。若し明日にも斯くの如き理想時代が現はるゝとせば、僕等少數の職業的軍人が其の職を失ふ位は毫も憂とするに足らない。併しながら人類の死滅以前に斯の如き絕對平和の黃金時代の到來するや否やは、今日甚だ疑問とする處にして、現に聯合國殊に英佛兩國が膺懲を名として敗戰の獨逸に臨む態度の如きを見れば、永久の平和は愚か、五十年の平和さへ保し難いと思はれる。米國の哲人大統領ウイルソン氏が、國際聯盟を唱道せる間に、次の戰爭を生むべき種子は旣に着々として、或は歐洲の野に、或は東亞の原に、植へ付けられ、培はれつゝある。要するに其の現實すると否とに拘はらず、正義に基づく永久平和の理想境に達せんことをの望む情に於ては、僕亦博士に一步を讓らずと雖とも、之に達する迄の道程に於て、博士と僕とは大に其の進むべき道と、採るべき手段を異にして居るものである。卽ち僕より見れば博士は理想の憧憬に急にして現實に對する打算の念を缺ひて居られると思はれる。其と同時に博士より僕を見れば、現實に拘着して理想に對する信念の弱いものと思はれるであらう。理想に忠實にして現實に背反すべきか、將た現實に順應して理想を空論とすべきかゞ議論の分るゝ處である。

二　軍國主義の解釋

姉崎博士は『軍國主義の害毒と其の破滅』なる論說の冐頭に於て

「軍人の中には、軍國主義を解して、一國の獨立體面を維持し主張する爲めの必要方法だとし、苟くも國防設備があれば、其が軍國主義だとする人がある。此は一片の塗抹的言論であり、且軍主國義の偏見から出た强辯に外ならず。云々」

と言はれて居る。言句に多少の相違はあるも、大體の趣旨に於て僕は此の種の軍國主義論者である。昨年十月『中外』雜誌創刊號に於て、軍國主義に對する意見を問はれたる際、僕は之に對する卑見の結論として次の如く述べた。

抑も軍備の强弱は、一國限りの絕對問題にあらずして、國際

門に於ける利害關係なり。百萬の軍兵を有する國も、二百萬の國軍を有する國に對しては强しと謂ふべからず。僅に一隻の軍艦を有する國も無海軍の國に對しては優越の地位に在り、一朝事に臨んで、强者が弱者を制するの理は一なり。故に世界の軍備にして全然撤廢せらるればいざ知らず、苟くも或一國にして、僅に一師の兵、一隻の艦と雖も、之を存備する間は、軍國主義の跡は絶へず。

近時往々軍備制限論なるものを聞く。其の果して如何なる標準に基き、如何なる範圍に於て實施せんとするやを知らずと雖も、若し之に依つて戰爭の勃發を防止し、軍國主義の撲滅を圖らんと欲せば、是れ五十步百步の愚策にして、到底其の目的を達成すること能はざるや明けし。但夫れ之に依つて、平時經濟上に於ける國民の負擔を緩減せんと欲するに在りとせば、固より是れ別問題なり。

此に於てか敢て曰ふ。人類の生活慾にして存する限り、世界の戰爭は絶へず。戰爭の絶へざる限り軍備の撤廢は行はれず、軍備にして撤廢せられざる限り、軍國主義は滅びず。中略。今日軍國主義を呪ふの國は、畢竟是れ耳を掩ふて鈴を盜むの類に過ぎざるなり。

之を換言すれば、苟くも國家にして軍備を整へ、自他相防ぎ

用ひ[illegible]たにはならないと云ふのさ

ある。僕は今日に於ても[illegible]主義を信奉せるものである。されば此の點のみに對しても、僕は仲士に向つて一言するの義務があると信ずる。

抑も軍國主義なる言葉の淵源は何であるか。又其の眞の解釋は何であるか。言葉の淵源に至りては、軍事（ミリタリー）なる語を主義化したるものなること以外、寡聞の僕、其の深きを知らない。故に之を字義上より解釋すれば「軍事立國主義」とでも云ふのが至當であらう。而して現時の如く、軍國主義を以て侵略主義、强權主義の代名詞と爲すに至りたるは、近年我國及び獨逸の優勢なる軍事威力をば、嫌ひ、恐れ、嫉み、惡むの結果、英國人に依つて放たれたる惡聲に基づくのである。英國の此の惡聲に對し、獨逸は之に酬ゆるに海洋獨占主義（ネーバリズム）なる言葉を以てし、英國が大海軍を擁して、世界の海洋を獨占するの非を攻撃した。左れば英人の云ふ獨逸の軍國主義（ミリタリズム）と、獨人の云ふ英國の海洋獨占主義（ネーバリズム）とは、海陸の差こそあれ、全然異名同質のものである。軍國主義が侵略主義なれば海洋獨占主義も亦侵略主義と云へる。海洋獨占主義が國防主義なれば軍國主義も亦國防主義と云へる。今日聯合國及米國が政略的に軍國主義を排すると同時に、米國は海洋獨占主義を排する爲め、獨逸と共鳴して海洋の自由

を呼んで居る。此の點に於て、博士の心醉せらるゝ米國は流石に公平（其の動機と目的の如何を問はず）であると云ばねはならぬ。

然らは軍國主義なるものゝ眞の解釋は何であるか。惟ふに之に對しては表裏二樣の解釋がある。即ち其の一は純粹なる主義上の解釋にして、他の一は不純なる政略上の解釋である。而して前者は專ら對內的にして、之を行ふて國家の強盛を圖るを主義とし、後者は主として對外的にして、之を唱へて他國の發展を阻むを目的として居る。僕の信ずる軍國主義なるものは前者に屬するもので、博士の責むる軍國主義なるものは後者に屬して居る。博士は外國人就中英米人が政略的に說く對外的軍國主義なるものを、其の儘無批判に輸入して、直に之を對內的に論ぜんとせらるゝもので、そこに大なる缺點を發見せらるゝは止むを得ぬ次第である。

曾て「中外新論」創刊號に於て、軍國主義に關し、朝野各方面に亙る人士の評論を求めた。其の際答案者數十名の軍國主義に對する解釋は多種多樣にして、或は眞正なる國防主義と爲し、或は狂暴なる侵略主義と爲し、其の他或は當として之を擁護し、或は非として之を排斥し、殆んど其の歸一する處を知らなかつたことを記憶して居る。之を以て見るも、軍國主義に對する解釋は今日尚ほ未だ一定して居ない。少くも我が國に於ては、自家獨斷以外に、斷定的に軍國主義の定義を下すことは出來ない。歐米に於ても、獨逸人が自國發展の爲めに說く對內的軍國主義と、英米人が獨逸を非難する爲めに說く對外的軍國主義とは、其の間に多大の差異あること、恰かも海洋の自由に對し、英國と米獨とが其の意見を異にせるが如くである。

然らば博士の云はるゝ軍國主義なるものは、如何なる意味のものであるか。博士は之に對し、自問自答して曰く、

「然らば軍國主義者は我々に反問して、其方のいふ軍國主義とは何だと問はう。答は簡にして明。國防の必要から出發し、軍備を整へる必要を基礎とし、而かも軍事思想を否く攻擊精神と同一視し（現に軍人に多く之を高唱する）此の精神を外に發しては侵略を行はふとし、內に對しては萬般の設備を此の精神に基く主義組織で一律にせうとする氣風、主張、實行、此が軍國主義である。

成る程、博士自ら云はるゝ通り、答は極めて直截簡明である。流石は文學博士たる人の言であると肯づかれる。併しながら此の答は博士自ら「其方のいふ軍國主義』と云はるゝ如く、博士並に博士一派の人々の解釋たるに過ぎないので、決して之を以て天下御免の定說と云ふことは出來ない。僕としても同意す

る點もあり、反對する點もある。左れど前述の如く軍國主義に對する考は今日尚ほ未だ一定しない。故に博士が軍國主義なるものを、相應の論據の下に、如何に惡解して魔道主義、害毒主義と攻撃さるゝとも、又之を善解して富强主義、節制主義と稱揚さるゝとも、是れ博士の御自由であると共に、僕も亦博士と同樣の自由を有する。

斯くの如く、軍國主義に對する博士と僕との所見は、旣に解釋の根本に於て相違して居る。故に其の解釋の何れが正しきやは、互に水掛論にして、判者さへ見出すことが出來ない。之を以て僕は此の點に關して博士と論議するの無益なるを認め、之を省略して直に軍國主義其のものゝ事實論に移らんと欲するのである。而して本論に入るに先ち、豫め博士並に世人の誤解を防ぎ置くべき一事項がある。博士も

斯くの如き軍國主義の破綻は、日本の軍國主義者が師範と仰ぎ模本とした獨逸の破滅で、何事よりも明かに之を示して居る。軍國主義者が如何に之を强辯するも此の一事は眼前の事實である。

と云はれて居る如く、軍國主義を論議するに當りては、勢ひ獨逸の軍國主義を引合に出す必要がある。然るに獨逸は目下休戰中とは云へ、今日尙ほ我が敵國である。敵國を辯護するは間接に之を利する譯である。敵國を利するは國法の許さゞるのみならず、僕自身と雖も誠に屑しとせざる處である。併し更に博士と論議せんと欲する處は、敵、味方などの境を超越したる主義上の問題である。僕の言論或は獨逸主義を辯護することありとするも、是れ決して敵國獨逸を辯護するのではない。博士並に世人は、曾て、僕の最も畏敬する眞の愛國的學者福田德三博士に加へたる如き「プロジャーマン」「ジャーマンペイ」などの讒誣的誹謗を加ふることなく、學者的紳士的態度を以て、僕の說を聞くの雅量を有せられんことを希望するのである。併しながら僕は敢て此等の低級なる讒誣を恐れ、或は又縱ひ之を受くるも、心中皎々毫も疚しとするものでないことを附言して置く。

三　軍國主義は勝てり

議論の方針として、先づ博士の說に對する大體論を述べ、順次細目に移らんと欲するのである。前揭博士の論を約言すれば、獨逸今回の敗戰は其の軍國主義が禍を爲したるに在りと言ふのである。成る程獨逸は敗れた。獨逸は屈伏した。最後の一錢、最後の一兵を存する限り、敵をして一歩も自國の領土を踏ましめずとの「ヒンデンブルグ」の豪語も、今は空しく過去の夢となつて、未侵の境域を撤退し、不敗の艦艇を捧げて、哀を聯合國及米國の脚下に請ふて居る。國家としては無上の屈辱、國民と

してば無限の悲哀である。是れ博士の言はるゝ如く眼前の事實にして何人も之に對し强辯するの蠻勇を有すまい。併しながら此の事實のみを以て、直に博士の言の如く、獨逸の敗北は其の軍國主義に基き、聯合國の勝利は其の自由主義に因るものと斷ずることが出來るであらうか。結論を先とし、僕をして言はしむれは、今次歐洲戰爭の勝敗は、決して博士の言ふが如く聯合國側自由主義の勝利にして、獨逸側軍國主義の敗北と斷ずることは出來ない。又決して英米人の言ふが如く、聯合國側の正義人道主義が獨逸側の横暴專制主義に打ち勝つたものと斷ずることも出來ない。然らば聯合國は何故に勝ち、獨逸側は何故に敗けたのであるか。答は簡にして明。曰く、聯合國米國並に之に黨する國々の有せる人力、財力、物力の優越なる數量が、中歐同盟國の數量に打ち勝つたに過ぎないのである。軍事學上に於ては此等の三大力即ち人力、財力、物力の數量を總稱して兵力と云ふ即ち聯合國側の偉大なる兵力が、中歐同盟側の劣小なる兵力に打勝つたに過ぎないのである。然らば何故に聯合國は此の大兵力を集め得中歐同盟は之を集め得ざりしやの問題に至りては僕別に意見あるも、軍國主義に關係なきのみならず、遺憾ながら今日未だ之を發表するの自由を有しない。唯其の一大因子は英國の强優無敵なる大艦隊であることは、疑の餘地なき事實である。

抑も今回の大戰開始以前に於て、世界列强中最も危險る侵略主義を抱ける不純なる軍國主義（博士の言はるゝ如き）國は何國かと問へば、何人も指を露國に屈するに躊躇しなかつたであろう。此の危險なる邦國を東隣に有し、四十年の宿怨夢寐にも忘れざる佛國と西方境を接す。加ふるに海上に於ては、英國が大艦隊を推して虎視眈々、臥榻の外を窺ふあり。獨逸が戰前軍備の充實に努力したるは、現代の如き國際關係に於て、國家防衞上誠に止むを得ざるに出でたものありしならんと、僕は信ずるのである。現に我が國民の如きも、海の彼方四千浬を距つる米國の海軍擴張に對し、ビク／＼然として生膽を冷やしつゝあるではないか。今日我が國に獨逸程の國富なきは、不幸か將た幸かである。兎に角、戰前に於ける露國の軍國主義は、獨逸よりもヨリ大であつた。少くとも獨逸と同一程度であつたと云へる。是に於てか僕は二つの疑問を生ぜざるを得ない。疑問とは何ぞや。其の一に曰く今日の獨逸の軍國主義撲滅を絶叫疾呼する英國は、何故に獨逸よりもヨリ强烈なる露國の軍國主義と提携して、此の戰爭を開始したかの問題である。惟ふに露國の破滅に英國に取りては、此の點に於て遇然の幸であつたと言はねばならぬ。其の二に曰く、今日正義人道を高唱し、獨逸軍國主義打破世界民主化を以て參戰の大目的とせる米國は、何故に歐洲戰爭

勃發の端に於て、聯合列國と共に戰爭に參加せざりしやの問題である。蓋し獨逸の軍國主義は開戰後に爽發したるものでなく、數十年來取り來れる主義である。戰爭二年半を過ぎて後、始めて御氣が付く程、ウイルソン大統領は呑氣な男ではあるまい。殊にウイルソン氏は米國參戰の前年十二月、兩交戰國團に向ひ、双方の講和に對する希望條件を問ひ合はせる照會に於て、『米國より見れば此の戰爭に對する交戰兩者の言分は、双方一樣平等にして曲直あるを見ず、故に此戰爭は無勝負引分（ノービクトリーピイス）の講和でなければならぬ』と云つて居る。然るにも拘はらず、半年經たぬにアノ仕末である。以て各國戰爭の眞の目的と理由とが、果して那邊に存するやを察することが出來るではないか。之を以て觀るも、露西亞や獨逸の軍國主義なるものが、博士並に英米人の言ふ如く、夫れ程惡性のものであるや否やは、尙ほ大に研究を要する問題であると思ふ。

併しながら僕は斯かる屁理窟を以て、妄りに此等の友國を責むるものでもなく、又誹しるものでもない。僕を以て見れば、英國の開戰も、米國の參戰も、各其の國家の繁榮と安泰とを圖る上に於て、當然取るべき手段と謂ふべく、若し之を爲さざるに於ては、國民としては甚だ意氣地なく、政治家としては誠に不忠實なるものと云はねばならぬ。國家絕體至上權の認めらるゝ現代に於て、他國が爲めに自國の重大なる利益を犠牲とするが如きは、所謂宋襄の仁として亡國の笑を千載に貽すのみならず、國家としては一種の罪惡である。僕は英米兩國が最も適當なる時機に於て、蹶然起つて强敵獨逸を倒したる國民の意氣と、政治家の手腕とに敬服するものである。唯其の動機と目的とが、彼等自ら謂ふ如き眞の正義人道の發動であるや否やは、講和會議の濟まざる今日、尙ほ大なる疑問として留保するの必要を認める。

由是觀之、英米人の口吻をば鸚鵡的に眞似ざる限り、主義として軍國主義が果して害毒的なるや否やは、之を事實の上に徵するの外はない。今回の戰爭に於て、聯合國は正義人道の大小を腰間に手挾み、軍國主義打破の長鋏を振り翳し、世界に向つて號呼したる處、外觀頗る堂々たるものであつた。世界の多くの國は、或は之に共鳴し、或に雷同し、或は之に阿附して、聯合國の馬前に馳せ參じた。日、英、米、佛、露、伊を始めとし支那暹羅より、有るか無きかの中米諸國に至る迄、總勢二十何個國の大勢を以て、中歐同盟獨墺勃土の四個國に對し包圍攻擊を行ふた。而して聯合側は勝つた。中歐側は負けた。擲ぐるも、蹴るも、殺すも、活かすも、今や聯合國及米國の意の儘である。獨禍東漸を憂ひたる人々も、嘸ぞや安眠が出來るであら

う。

勝ちたるものは強く、負けたるものは弱きは天下の公理である。併しながら幕下力士が五人十人聯合して横綱を倒したりとて、直に幕下力士は強く、横綱は弱しと云ふことは出來ない。之と等しく、獨逸敗れたりと雖ども、未だ直に獨逸を以て聯合諸國より弱かりしと云ふとこは出來ない。米國の參戰以前に於ける歐洲の戰局は如何であつたか。老大なる露國は東方より、強靭なる英佛は西方より、共に全力を盡して獨逸を夾撃したるも勝つ能はず、露國自から潰へて聯合國の旗色日に益々怪しくなつた。英國も心細くなつた。佛國も心配し始めた。伊國も動揺の色を呈した。是に於て英は「バルフーオア」氏を、佛國はジョツフル將軍を、伊も亦使節を米國に遣派し、或は船を、或は人を、或は物資を、米國民に歎訴し、大統領に歎願し、遂に米國をして戰爭に參加せしむるに至つた。斯くて聯合國は米國なる大兵力の應援を得て、四年四ケ月の年月を費やし、斯く獨逸を撃破否な屈伏せしめ得たのである。若し此時米國が「一樣平等（イーブンエクォール）」主義を固持して、聯合國に加勢せざりせば、バツトルに勝ちたる獨逸は恐らくワーにも勝つたであらうと思はれる。是れ米國參戰の眞の最大理由であると思ふ。左れば講和會議に於ても米國が最大發言權を有せるは當然の權利である。

之を以て餘り氣なく正直に言へば、英國も、佛國と、露國と伊國も、恐らくは米國も、單獨にては到底獨逸に對抗し得なかつたのである。即ち獨逸は是等の何れの國よりも強かつたのである。此の點に對しては己惚れ強き歐米人も、恐らく無條件にて承認するであらう。とは云へ、僕は此等の國民を以て決して怯懦なりと云ふのではない。劣弱なりと云ふのではない。國民としては何れも極めて勇敢である。大和魂を以て威張る日本人も、動もすれば及ばぬ樣な點もある。就中佛國民の如きは、曾て全歐を蹂躙したる大那破烈翁時代に於ける父祖の血潮が、今尚ほ彼等の血管に迸つて居ることを認めしめた。今回の戰爭に於て、英軍の強靭、佛軍の勇敢、獨軍の剛勇は、個人としては何れ劣らぬものである。唯英佛は國家として、時代に應ずる準備を怠つたと云ふ非難は免れ得ない。自尊自矜の英國人すら、次の如く自白して居るさうである。

「吾人の敵は實に頑強にして、如何に能く戰ふべきかを諒解す。否吾人は正直なる率直を以て自白せざるべからず。我が敵は實に勇敢に戰ふことを熟知するものなり。而して此の敵たる數代の間十分に準備したる強敵なるに、我が聯合軍は佛國軍を除く外には一人の有能なる將帥をすら有せざるなり」

（本誌前號福田博士論文中より借用）

斯の如く、聯合軍が其の兵力に於ては數倍になり、其の人口に於ては霄壤に及ばず、其の面積に於ては遙に懸隔と云ふ有りを以て、敢然三國を敵とし、而かも常に優勢を持續し得たる所以のものは何故であらう？民族の勇敢、教育の進歩、産業の發達、軍事の整頓等、其の他種々あるべきも、之を總括すれば、其の軍國主義に依る國民訓練と、國家組織と、社會制度の賜と云ふべきである。抑も國家として強きは罪惡であるか、弱きは善德であるか。姉崎博士の説かるゝ永久平和の理想時代の到達せぬ限り、又國家を裁判すべき最高機關の實現されぬ限り、國家は自ら衞る爲めに強からざるべからずである。白國の悲劇も、北佛の慘劇も、事の善惡は別とし、畢竟國家の弱かりし罪に歸するのである。夫れ國家は強からざるべからず、而して軍國主義は國家を強くするに、最も適切なる手段なりとすれば、軍國主義は決して排擊すべきでないと信ずる。試に見よ、口に軍國主義の撲滅を唱ふる英國に於ても、米國に於ても、戰時施設は悉く獨逸の軍國主義的組織と軍國主義的制度とを採擇模倣して、唯其の及ばざらんことを力めたではないか。惟ふに戰後歐米各國は、戰時中に於て驗得したる此の主義を存續して、國家諸機關の能率增進を圖るであらう。

我が國が貧乏世帯を抱へて、遣り繰り算段に苦勞をしながら、尚ほ軍備の充實に力を致さんとする所以は何であるか。單に[illegible]とするのみではあるまい。必ずや天下一朝事ある秋、國家を防衞し、國民を安全ならしむる爲めであらう。然りとすれば其の目的を達する爲めには、軍備は必ず強きを要する。軍備を強くする爲めには、國家自身が強くなければならぬ。而して茲に強と稱するは、單に軍隊や軍艦の如き武力のみを指すのではなく、人力、財力、物力の綜合力即ち兵學的に所謂兵力を指すのである。此の點に於て獨逸は國家として確かに強かつた。我が國の如きも將來國家として強からんことを欲せば、獨逸の長所を學ぶの雅量を有せなくてはならぬ。然らば獨逸の長所とは何ぞや。曰く、其の軍國主義に依る國家社會の編制である。抑も軍國主義なるものは、國是、國策などに關する政治上の主義でなく、國家社會の編制に關する行政上の方策である。今回の戰爭に於て、獨逸が『ワー』に敗れたるは、主として其の外交政略と高等作戰失敗の罪である。『バットル』に勝ちたるは、專ら其の軍國主義の賜である。是に於てか敢て云ふ、『軍國主義は勝ちたり』と。

四　軍備と軍國主義

以上は『獨逸の敗北は其の軍國主義に因す』と云ふ姉崎博士の大問論に對する、僕の駁論の大要である。以下順次博士所論の

細節に對して卑見を述べるであらう。博士は『一般に國家の存立と軍備との關係については之を別論に讓り』と言はれて居る。本來軍備と軍國主義とは密接不可離の關係を有すること、恰かも唇齒の如く、又輔車の如く、國家に軍備あればこそ、軍國主義の必要がある。國家已に軍備無ければ、最早や軍國主義なるもの丶必要を認めない。左れば博士と軍國主義を論ずる爲めには、先づ博士の軍備論を聞く必要がある。然るに博士は軍國主義の本體とも云ふべき軍備を論ぜずして、直に軍國主義を攻撃して居られる。是れ恰かも家屋の大黑柱を引拔きて、此の家は脆弱なりと論ずるの類である。今日博士の軍備論其ものを聞き得ざるは、僕の頗る遺憾とし、又大に物足らずと感ずる處である。

已に軍國主義の本體たる軍備論を聞く能はずとせば、軍國主義の根本に就き二三論議するの根據を見出すことが出來ない。故に此の點に關しては博士の軍備論を伺ひたる後に讓り、此處には專ら博士の所謂軍國主義の害毒論に就き、僕の所見を述べたいと思ふ。博士は曰く、

『國は力なり、故に强からざるべからず』と云ふのが軍國主義の標語となつて居るが、其の力には富の力もあれば、道德や思想の力もあることを輕視乃至無視して、武力を偏重する點に軍國主義の特色がある。』

國は力であるか、將た道德であるかは別問題とし、所謂優勝劣敗（博士は此の語を好まれぬか知らぬが、好きと嫌ひとに拘はらず、現實の事實である）の今の時代に於て、國は必ず强からざるべからざるは、前述の通りで、排軍國主義の博士と雖ども、恐らく承認せらるゝ處ならんと信ずる。從うて强國たる爲めには、必ず武力を要することも御異論あるまじと思ふ。而して軍國主義が武力を偏重するや否やは、人各其の見る處を異にし、博士の如く一概に武力偏重と盲斷することは出來ない。國際間に於ける軍備制限の協定確立せざる限り、一國軍備の標準を定むることは不可能である。故に何處までが適當の武力にして、何處から以上が偏重の武力なるやを定めることも出來ない。凡そ國家が軍備を整ふる最後の目的は、戰爭に際し一に成るべく容易に敵に勝たん爲めである。而して容易に敵に勝たん爲めには成るべく優越なる軍備を必要とするは自明の理である。

然り而して軍備なるものは、單り陸上兵力のみならず、海上兵力も亦軍備の中である。獨逸の軍國主義を咒ふ英國に於ては、所謂『世界第一海軍』を標語として、海軍充實の爲めには國家は個人の權利も自由も、之を犧牲に供して厭はさる程の武

力偏重を說き執つて居る。博士の好きな米國の如きも、近年何を感じてか、大に海上武力偏重主義に傾き、我が國民の安眠を妨げて居る。英米兩國が獨逸の如く、陸軍々備を張らざるは、一に是れ接壤の假想敵を有せざる、其の國地形の然らしむる處に過ぎない。之を以て見れば、武力を偏重するは、獨り博士の嫌ふ軍國主義の獨逸ばかりでないと云へる。

又博士は軍國主義は富の力や、道德や、思想の力を輕視乃至無視すると云つて居られる。是れ何を論據として說かれしやを知らずと雖ども、兵術兵器の進步發達せる現代に於て、世界何れの國か、富の力や、思想の力を輕視乃至無視して、軍事の完成を期せんとする愚國があるであらうか。博士が實例として引かるゝ獨逸は、果して富の力を輕視して居つたであらうか、國民思想の力を無視して居つたであらうか。獨逸が富の力を重視し、極力之が增進に努めたるは、獨逸商工史を一讀せらるれば、直に博士の謬見を解くに足るであらう。獨逸が國民思想の力を重認し、專心之れが訓練に力めたるは、今回の戰爭に於て獨逸國民が老幼婦女に至るまで、飢寒缺乏を忍んで一致團結、能く祖國の難に當りたるを見ても知るべく、感情的とまで嫌はるゝ獨逸嫌いの博士と雖ども、恐らくは之を是認せらるゝであらう。之れに依つて考ふれば、軍國主義なるものは博士のが甘せらるゝ如く、富の力や、思想の力を無視若くは輕視して、獨り一時武力に偏重するものでないと云ふ事を知ることが出來る。

五　軍國主義と攻擊精神

博士は又日く、

「此の武力偏重は、どうしても攻擊精神として、萬事に攻擊進取の態度となるは、必然の勢ひであつて、其の出發點は、國防思想にあつても、終末千里の差を來して、歸着は侵略主義となる。國際關係に於ても、外交の背後に兵備ありと云ふよりも一步を進めて、場合に依つては、兵力を威嚇にして外交を左右せんとする。」

武力偏重は獨り軍國主義のみの產物でなく、現代世界の大勢であることは前述の如しである。併しながら武力の偏重偏輕如何に拘はらず、軍事に精神攻擊の必要なるは事實である。攻擊精神の缺けたる軍事施設は、魂のなき案山子と等しく、國防の重きを任かすことが出來ない。左れば世界何れの軍隊に於ても、攻擊精神の必要を認め、之が涵養に努力せざる處はない。聯合軍最後の勝利も、歸するところ此の攻擊精神の賜である。此處に軍隊の備あれば、そこに必ず攻擊精神の必要がある。之を以て軍國竝兵主義の我が國の如きに於ては、國民に擧つて

攻撃精神に富まねばならぬ。其の軍國主義たると、たらざるとに依つて、毫も異なる處はない。然るにも拘はらず、博士は此の攻撃精神を以て、軍國主義の害毒たるかの如く說かれて居る。元來攻撃精神なるものは、之を換言すれば優勝精神にして單に軍人が戰場に於て武力を以て敵を撃つことのみを謂ふのではない。實業家が經濟戰に於て十露盤を以て勝利を得んとすることも、政治家が言論戰に於いて文鎗辯舌を以て政敵を攻むることも、學者が科學の力を以て自然を征せんとすることも、其の外形こそ異なれ、皆是れ攻撃精神の發露であると思ふ。博士が口に、筆に、軍國主義を非難せらるゝのも、亦是れ此の精神の發動に外ならずと云ふべきである。左れば潑溂たる攻撃精神に富むものは、個人としては向上の未來を有し、國家としては發展の將來を有する。而して攻撃精神の最も旺盛なるは、個人に在つては靑春血氣の漲るゝ時代、國家に在つては、新興意氣の迸ばしる時代である。之を以て攻撃精神なるものは、人類の向上發達に資する道德的精神にして、他に對する攻撃精神と、之に應ずる反撃精神との砥礪研磨に依つて、個人も、社會も、國家も、世界も、發達進步して行くのである。若し果して攻撃精神が軍國主義の產物とすれば、是れ軍國主義の害毒でなく、寧ろ功德であると云はねばならぬ。

六　軍國主義と侵略主義

博士は又軍國主義は攻撃精神を生み、攻撃精神は威壓侵撃となり、國家としては遂に侵略主義となると言はれて居る。抑も攻撃精神の目的は、敵に對して勝を制するのである。制勝主義は之を敵より見れば、威壓侵撃と認めらるゝことは自然の勢である。今回の戰爭においても、獨逸軍隊並に獨逸國民の旺盛なる攻撃精神は、聯合國より見れば非常なる威壓侵撃と思はれたであらう。獨逸の屈伏したる今日、獨逸人は恐らく聯合國の態度と行爲とを以て、甚大なる威壓侵撃と思つて居るであらう。比近なる例を擧ぐれば、博士の軍國主義に對する攻撃の如きも僕より見れば文學博士なる肩書の下に、大なる威壓侵撃の跡が認めらるゝ。苟くも敵に對して勝を制せんと欲せば、威壓侵撃を用ゐずして其の目的を達することは出來ない。極端に云へば勝利そのものが卽ち威壓侵撃である。故に攻撃精神に威壓侵撃の伴ふは、止むを得ざる自然の狀勢である。

斯くの如く攻撃精神に威壓侵撃の伴ふは、止むを得ざる處なるも、之を推廣して、軍國主義は侵略主義なりと云ふことは出來ない。否な侵略主義は軍國主義のみの特產物なりと云ふことは出來ない。博士は軍國主義は侵略主義の母なりと云ふ適例として、獨逸の「モロツコ」事件における態度や、今回の開戰を

擧げられた「モロッコ」事件は之を略し、今回の開戰に關しては、僕不敏ながら一年有餘の間、之が起因に就きて專心的に研究した。而して其の學び得たる結果は、日本國民として今日尙ほ、言へぬが花の吉野山、敵愾心の熾盛なる戰時中に發表せられたる、政略的、感情的、プロパガンダ的の文書のみを以て是非曲直を辨ぜんとするは、所謂片言を聞ゐて獄を斷ずるの類にして、史實研究者として取るべき態度でないと信ずる。米國中立時代に大統領ウイルソン氏の言へる『兩者一樣平等』の語は、蓋し此間の眞相を看破したる僞らざる告白ではなからうか。

敵味方一千萬の生靈を奪ひたる今次大戰の眞の責任者が誰なるかは、尙ほ攻究を要する問題なりとは云へ、獨逸が侵略主義の國たりしは爭ふべからざる事實である。就中膠州灣占領の如きは其の最も惡辣なるものにして、僕は獨逸の侵略主義を否認するものでもなく、又毫も獨逸を辯護するものでもない。併しながら一歩を進めて博士に問はん、由來侵略主義なるものは、果して獨逸一國の專有物であるであらうか。苟くも過去一世紀否な半世紀間に於ける世界歷史の梗概を知れるものは、一考の猶豫なく『否』と斷言するであらう。露國の侵略主義は言ふも管なり。英國の南阿併呑は如何、英國人の大多數は之を以て自衞權利擁護の發展と稱するも、當時英國議會中有志の異議は、英國の行爲を以て侵略的となし、慨歎措かざりし人數幾十萬に達した。米國の巴奈馬運河地帶占取は如何。米國人は之を以つて世界文明の進步と米國自衞の爲めと言ふも、元の所有者たる「コロンビヤ」國民は之を以つて米國の奪掠と爲し、今日尙ほ深恨を抱ゐて居る。其の他佛蘭西の「チュニス」占領、伊太利の「トリポリー」占領等、何れか侵略主義にあらぬはない。日清戰爭、日露戰爭、朝鮮併合の如きも、我が國より見れば國家防衞の正當手段である。而かも歐米人の或る者殊に米國人の多くは、之を以て侵略主義と爲し、今日尙ほ我が國の眞意を疑ふて居る。獨逸前帝の如きは之を種子にして、頻りに黃禍論を疾呼し、世界の視聽を惑さんと努めたものである。

凡そ從來の戰爭には次の如き四種類ある。即ち（一）純粹なる國防戰、（二）自國の利權擁護戰、（三）自國の利權發展戰、（四）他國侵略戰である。而して此等の戰爭中、何處までが消極的なる國防戰、擁護戰で、何處からが積極的なる發展戰、侵略戰であるかは、甚だ不明不確である。前述の如く、日露戰爭も、南阿戰爭も、當人に於ては正當なる國防戰、擁護戰と稱するも、他人は之を以て不正なる侵略戰と認めるものもある。日本の朝鮮併合も、米國の巴奈馬占取も、亦之と同樣である。今回の戰

爭に於いて、聯合國も、獨逸側も、共に國家の防衛戰とする稱も、其の裏面には兩者共に若干の侵略的野心を抱懷したるは、爭ふべからざる事實である。幾多の交戰國中、眞の國防戰を行ひたるものは、獨り白耳義あるのみである。由是觀之、侵略主義なるものは必ずしも、傲慢不遜と熱罵せられ、强欲非道と酷責せらるゝ獨逸ばかりの專有物でなく、正道人道を大呼し、自由平等を高唱する君子國も、何れは御多分に洩れぬのである。換言すれば、侵略主義なるものは現代國家の常習通有性にして、博士の言はるゝ如く、軍國主義の特産物ではないのである。斯く言へばとて、僕は決して今日の敵國を辯護するのでもなく、又今日の與國を非難するものでもない。唯僕の信ずる主義の爲めに寃を說くのである。

七　軍國主義と自尊と殘忍と

博士又曰く、

『軍國主義氣風が獨逸國民全體に浸潤して、獨逸國家が此の如き態度を以て他に臨んだ事は顯著の事實で、彼等自ら神の選民を以て任じ、「Deutschland Über alles」を高唱し、自家のKulturを以て他を支配せんとしたのは自然の結果である。此の態度は國際關係に於て優勝劣敗のみを眼中に置く威力主義となる。』

世界何れの國民か、何れの民族か、多少の自尊自負の念を有せざるものがあらうか。英國人も、米國人も自ら世界第一國民を以て任じ、日本人は天孫人種と己惚れ、支那人は中華の民と氣取つて居る。印度人も、亞弗利加人も、恐らく彼等の國民若くは民族的自負心を持つて居るであらう。吾人は世界に比類なき萬世一系の君主國として皇德を欽慕するも、無禮にも、米國人の多くは專制主義のミカド國と爲し、「ウイルソン」氏をして世界民主化の聲を擧げしめた。英國人の如きも世界の平和はアングロ、サキソンの手に依つてのみ行はるゝと己惚れて居る。獨逸人が自ら神の選民を以て任じ、自家の文明を以て世界を光被せんとしたるのは、有爲なる國民が當然持つべき理想である、抱負であると僕は信ずる。此の點に對しては獨逸人よりもヨリ以上に大なる野心を有せる國が、獨逸以外に有ると思ふ。現代我が國民の如く、口に天孫人種、神州男兒と己惚れながら、何等の國民的大抱負なく、何等の民族的大理想なく、徒らに歐米人の糟粕を嘗め、歐米人の吸殼を吸ひ、以て學者振り、政治家振り、紳士振るは尙ほ恕すべしとするも、歐米人に對して先天的に卑下自拜する奴隷的根性を有するに至りては、せめて獨逸人の有する氣魄の半分なりと有つて欲しいと思ふ。若し獨逸國民の有しゐる理想と、抱負と、意氣と、信念とが、博士

のふの如く、軍國主義に依つて蹂躙せられたりとすれば、北の點のみを以ても、僕は大に我が國民に向つて軍國主義を獎勵するの必要があると信ずる。

博士は又獨逸軍隊が白耳義に於て行なひたる殘虐行爲を以て、軍國主義の罪に歸して居られる。白耳義及北佛に於ける獨逸軍隊の殘虐行爲（恐らく事實であらう）は人道上誠に許すべからざる罪惡である。秋毫も假さず、一絲も緩しめずと云ふ王者の師より見れば、極惡非道の惡魔である。無血無淚の殺人鬼である。内省みて良心に恥ぢざる質の正義人道主義者は、堂々鼓を鳴らして大に獨逸の罪を責むべしである。併しながら獨軍の殘忍非道を以て、直に軍國主義の罪と爲すに至つては、更に博士の詳細なる說明を請はねばならぬ。抑も戰場は、愛と仁とを說く教會にあらず。道と法とを說く教場にあらず、彈丸と劍の交はる修羅場である。生か死かを決するドタン場である。人間心意の昂奮絶頂に達せる時である。生きんか爲め、勝たんが爲めに、敵を殺すを名譽とし、義務とする時である。之を以て勝者が敗者に對して、往々常規を逸するは、戰爭其のものゝ性質上免れ難き處である。

左れば戰場に於ける殘忍行爲は、果して獨逸軍の特有性なるや否や、是れ亦大に疑問とする處にして、獨逸軍と聯合軍と、攻守處を替へしむれば其の結果は如何であらうか。次の[illegible]しては、兵卒に逢ふることを憚かる、と云ふ解決に近い北清事變の際、各國聯合軍の爲めに北京を占領せられたる支那人が最も明確なる答を與へ得るであらうと思ふ。生か、死かの戰場に於てのみならず、米國人の如きは、平時太平の時に於てすら、黑人をリンチし、之を焚殺して快を呼んで居ると云ふではないか。斯くの如き事例を舉ぐるは、深く米國を愛せらるゝ博士に對して禮を失するの恐あるにより詳くは書かない。唯僕は、戰場に於ける獨逸軍の殘虐は誠に惡むべしで、其の罪天地の共に容れざる處であらう。併し是れ獨逸軍國主義の特産物にあらず。正義、人道、自由を口にする國民も、亦之を爲すことなきやを疑ふと云ふに止める。今や英佛米軍はライン左岸の獨逸領土を占領して居る。希くは獨逸人の口より聯合軍殘忍の聲を舉げ、爲めに正義人道に飾られたる聯合軍の美名を傷つくることなきと共に、敬愛する我が博士をして煩悶懊惱せしめざらんことを祈るのである。

博士又曰く、

『此の如き攻撃精神は、其が順當に進めば、一時好結果を收めるに似ても、其の根本に於て、他國民の心を心とせず。他人の心を已に映して見るの能力を缺くと云ふ點に於て、非常の缺

陥を呈する。打算に己のみの打算計畫となつて、對手の長所も力量をも無視し、爲めに思はぬ失敗を招き、攻擊侵略が一日挫折すれば、非常の失望落膽に陷ゐる。（中略）。他人の心を映し得ないと云ふことは軍國主義に必然の根本缺陷である。』

右は博士常用の自家肯定說にして、而かも甚だ不徹底なる論旨である。博士は軍國主義は他國民の心を心とせず、他人の心を己に映して見るの能力を缺くと說かれ、其の實例として獨逸が、開戰の始めに彼斯や英國の勢力を打算外に置いた事、後に米國の義憤と兵力を輕視した事、前後二回マルヌの敗戰、ベルダン攻擊等の失敗を擧げられた。然り、博士の言の如く、獨逸はベルダンの攻擊に、五十萬の精鋭を失ふて而かも遂に失敗した。前後二回のマルヌの戰に、巴里を指顧の間に見ながら而かも亦失敗した。米國の義憤か私憤か知らぬが、其の兵力を輕視したことも事實である。是れ獨逸屈伏の最大原因である。唯開戰の初めに於て、彼斯の勢力を左程重視するの必要があつたか、又英國の勢力を果して打算外に置いたか否かは、尙ほ一層の御研究を願ひたい。何れにしても獨逸作戰に過失缺陷ありしは事實である。併しながら作戰計畫の過誤が軍國主義に原因すとの博士の言は、甚だ受取難い說である。敵を知り、己を知るは、作戰の根本的要諦にして、間諜探偵を全世界に派出し、數十年間外國の事情を探知するに力めたる獨逸作戰本部の思慮綿密、用意周到なりしは、世界の等しく認むる處であつた。之れば獨逸作戰部は必ずや、敵を計り、己を知り、數を經とし、術を緯とし、細心緻密の計畫を立てたものと信ずるが穩當である。

併しながら誰にも勝負は時の運と云ひ、戰爭の神たる大奈坡烈翁すら、戰爭は判斷七分に運三分と云つて居る。之を以て獨軍の失敗を以て軍國主義者が『他人の心を己に映して見るの能力を缺いたゆへであると斷言することは出來ない。若し之を以て强ゐて軍國主義の罪であると云ふなれば、「アラス」や、「ソンム」に於ける英佛軍の攻擊失敗は、何主義の罪なるか博士の明答を煩はしたい。英、佛、露國が自國戰備の如何を計らず、漫然戰爭を開始して、中途米國の袖に縋らざるを得ざるに至りたるが如きこそ、寧ろ博士の所謂『他人の心を映し得ざる』放慢なる自由主義に必然の根本的缺陷ではあるまいか。

八　軍國主義と階級思想

博士又曰く、

『そこで軍國主義が國際的に發揮する攻擊精神は、國内に對しては、所謂優劣强弱を唯一の標準として高壓的態度で劣弱者に臨む階級思想となる。軍隊にも國家にも、或る程度までは上下從屬の規律を要する事は勿論であるが、其の軍國主義氣

級の階級思想に毒せられる樣になれば、社會を階級的に固定して了ふ。』

博士の説に從へば、國家社會の害毒は悉く軍國主義に胚胎する樣である。博士の軍國主義嫌ひも亦徹底せりと云ふべしである。博士は軍國主義は弱い者イヂメじやと云はれる。弱い者イヂメは博士の蛇蝎視せらるゝ軍國主義の獨逸よりも、寧ろ常に正義人道を口にする國の方がヨリ烈しくはないであらうか。常にイヂメられて居る五千萬の同胞は、博士の外は充分承知して居る處であると信ずる。博士は次に、軍國主義は社會を階級的に固定して了ふと言はれる。僕未だ獨逸の社會狀態を知らず、從うて其の階級的に固定せるや否やに關しては、博士の言を是非するの資格はない。故に潔よく博士の言を是認する。そこで翻つて博士に問ふ。軍國主義を排する英國の社會狀態は如何であるか。英國の社會が階級的に固定せることは、苟くも足一たび英國の地を踏みしものゝ、殆んど異口同音に唱ふる處である。貴族も、勞働者も、富豪者も、貧民も、子孫相傳の世襲的である。偶「ロイド、ジョージ」氏の如き、靴屋の小倅より大宰相に出世したる稀有の例外者なきにしもあらざるも、一般社會としては沈滯固定のドン底にある。勞働者や貧民の子弟が高等教育を受くるが如きは、生意氣なりと認められ、彼等自身も亦親盡りに勞働者議員を以て主として居る。英國の勞働黨は社會て議の固定化せるとは、英國識者の甚だしき誤解である。左れば不運の社會が階級的に固定せるを見て、直に軍國主義の害毒と斷ずることは出來ない。

博士は『日本軍國主義者の中には、五條の御誓文を用濟みだと發言し』たとか、『或る士官は兵卒に對して汝等の手足は命令に從つて動く機械たれと放言した』とか僅に一二人者の言を捉へて、階級思想の明證であると傲語せられて居る。日比谷公園に於ける米騷動煽動演說ならば可なり。中學校に於ける學生討論會ならば可なり。左れど學界一方の重鎭たる博士の論の明證としては餘りに貧弱である。僕の如きは軍國主義を信ずるも、必要以上の階級思想打破主義者である。

前月某日、日比谷公園に於て東京市休戰祝賀會の擧行せられたる際、東京市の考案に成ると云ふ極めて高尚優美なる二三の作り物が設けられた。其の一は半ば破壞されたる麥酒樽の造物にして、傍に軍國主義（酒器）破壞（水道課）の標札が立てられてある。流石は勤儉主義の名市長を戴ける東京市の名考案であると、轉た感服せざるを得なかつた。軍國主義を信ずる僕は、之に對する市民の偽らざる評言を聞かんものと、物好きにも寒月の夜寒の風を厭はず、約一時間ばかり其の附近を徘徊した。見

物人は入り替り、立ち替はり、造物の前に常に七重八重の人垣を作つて居る。而かも其の殆んど總ては、唯造物の技工に對する批評のみにして、軍國主義の興廢の如きは風馬牛相關せず焉である。唯僅に一組の勞働者が酒氣紛々として、『何だつて、こんなにオレ達の藥瓶を毀はして了ふんだい、巫山戯た眞似をしやがると、軍國主義だつて、水道課だつて承知しねいぞ』とド鳴り散らし、見物人を笑はせた位のものであつた。格別得る處もなき故、將に歸らんとする時、二十歳前後の二人連の學生が來た。稍や暫し造物を見た後、其の一人は友に向つて『僕は軍國主義崇拜者だがなア』と言つた。若し僕にして此の事實のみを以て、日本學生は軍國主義を崇拜するの明證なりと言はゞ、博士は何と評されるであらうか。

博士は更に獨逸軍隊を評されて曰く、

『軍國主義なる獨逸軍隊の長所は、攻擊精神の旺盛に存した如く見へるが、其の短所は規律の機械的なるに存し、一旦挫折し始めると、之を支へる事が出來なかつたのである。』

此の説は從來往々耳にした處である。獨逸軍隊の規律が果して幾干程度まで機械的なるや否やは、僕充分に之に知らない。左れど戰場突差の際、一令の下に多人數を指揮命令する爲めには、一々個人の心意を考量することは出來ない。軍隊の規律は或る程度まで機械的なるべきに、軍隊の性質上免れ難き處である。獨逸軍隊の剛强勇猛なりしは、機械的規律の嚴肅なりしに由るものと、僕は信ずる。博士は獨逸軍隊の短處として、『一旦挫折し始めると之を支へる事が出來なかつた』と言はれて居る。然るに之を實例に徵するに、第一「マルヌ」の會戰も、「ベルダン」の攻擊も、共に失敗はしたが、決して潰滅に陷ゐらない。第二「マルヌ」の戰爭も敗れはしたが、毫も亂雜に陷ゐて居ない。其の退却の整然たりしは、聯合軍總司令官自ら之を證明して居る。而して此處に機械的と云ふのは、形式的と云ふ意味ではない。命令服從關係の了解の下に於ける機械的を云ふのもである。佛國兵と英國兵と、何れが勇敢なりしやは、今日明言を憚かるも、佛國軍隊は英國軍隊に比して、遙かに機械的なるは事實である。軍隊以外の教育に機械的規律の是非は別問題にして、是れ軍國主義と直接の關係はない。

九　結　論

結論として博士曰く、

『高壓的攻擊精神、他人の心を知り得ない偏狹、自我獨尊の階級思想、而して之に伴ふ機械的規律、此の四點が軍國主義の特徵である。』

此等の諸點が、軍國主義のみの特徵にあらず、又特產物にあ

らず、口に軍國主義を攻擊する國に於て、往々却てヨリ甚しく、ヨリ大なるものあるは、以上詳論細說した通りである。博士は『獨逸敗後の屈伏は、其の軍國主義實施に因るものにして是れ必然の運命である』と斷定せられて居る。之に對し僕は最初論じたるが如く、『獨逸今回の失敗は、米國を加へたる聯合國の優大なる兵力の壓迫に依るものにして、潜水艇の功力と、米國の勢力とを、一は過大に、一は過小に誤算したる統帥部の過失に基づく偶然の運命である』と云ひたい。

博士或は問はん、『然らば其方の云ふ軍國主義とは何だ』と、博士の言を借りて、答は簡にして明である。

軍國主義とは、明日の戰爭に應ぜんが爲め、國家社會の全機關をば、此の目的に向つて集中し、之を秩序的に、節制的に、統一的に組織し、以て軍國有事の秋に際し、其能率をして最善ならしむる如く、國家社會を編制することである。

此の主義は、獨逸に於ては戰前之を實施し、以て平時に在つては產業を增進し、戰時に際しては軍事作動を敏確ならしめた。英佛米伊の諸國亦開戰後之を採用して、漸く獨逸に勝つことが出來た。

以上は僕の信する軍國主義觀と、兼て姉崎博士の軍國主義觀に對する僕の質疑である。國際關係現代の如く錯綜し、國際競爭現代の如く激甚し、加ふるに緊要問題を生じ、各國は自國の爲めに備へんとせる現代に於て、國家として生存し、以て國民の繁榮を圖り、國民の安泰利福を守らんと欲せば、軍國主義に依ることを以て最も適切堅實の策であると信ずる。今回の戰爭によつて我が國民の覺醒したる國家自給自足も、國家總動員も、此の主義に依るにあらざれば、到底最善の效率を擧げ得ざるは、英佛米諸國の親しく實驗したる處である。

之を以て軍國主義なるものは、理想的の自由人道主義より觀れば、或は多少否な多大の弊害が伴ふかも知れない。併しながら理想に向ほ遼遠なる現今の如き世に於て、國家を防衛する爲めには是等の弊害は忍はねばならない。凡そ國家の事、獨立自存よりは重にして且つ大なるものはない。米國の如き自由を標榜する國に於てさへ、國家の獨立問題は國民自ら之を解決せざるべからずとの理由を以て、英國との總括的仲裁條約を拒絕した。而して國家の獨立自存を衞るには、之を國防の力に待たねばならぬ。是に於てか三段論法に依り、國防は國家の最重最大の問題であると云ふに歸結する。國民は之に對して最善最良の策を講ぜねばならぬ。

既に述べたる如く、軍國主義なるものは、國策國是其の如き政治上の主義でなく、國政運用上の方策に過ぎない。故に姉崎

博士の憂ふる如く、侵略を目的とせるにあらず、壓制を手段とせるにあらず、況して軍閥跋扈主義にあらず、官僚萬能主義にあらず、戰爭唯一主義にあらず、唯時代の必要に基づく國民一致の國防主義を實行する爲めの計策である。故に君主國にも、民主國にも、共和國にも、專制國にも、之を適用することが出來る。而して之が實施の大綱を擧ぐれば、

一、民意を尊重し、政治を公明にし、以て國家と社會との干繫を緊密ならしむる事。

一、國民の國家思想を涵養し、國防觀念を徹底せしむる事。

一、國家社會の諸事物をば、機關的には統一し、機械的には劃一する事。

一、敎育の進歩、産業の發達、國富の增進を圖り、必要の軍備を充實する事。

一、軍隊の士氣を旺盛にし、義勇奉公の精神を堅實ならしむる事。

然り而して僕の唱ふる軍國主義は、常に軍備を基礎とせるものである。國防を目的とせるものである、之を以て幸に、完全なる國際聯盟締結せられ、各國軍備を撤廢して國際戰爭絶滅し、正義に基づく永久平和の理想境實現せられんか、僕は潔よく軍國主義を撤去し、更めて敎を博士の門下に請はんと欲するものである。唯憂ふる處は、銃砲戰絶ゆるの秋、更に一層慘烈なる經濟戰行はれ、新に軍國主義と異名同質なる金國主義若くは商國主義の發現せんことである。

感情的に、政略的に、敵本的に、坊主袈裟的に軍國主義を排する人、並に之に雷同阿附する人は、僕の意見を以て時代錯誤の奇激の言と云ふかも知れない。併しながら感情や、政略や、雷同や、阿附や、乃至外國に對する諛辭や、阿言のみにては、到底眞の理解を求むることは出來ない。眞の理解を求むる爲めには、各忌憚なき所信を披瀝し、辯論討議の上に待たねばならぬ。僕は、此の見地に立ちて本論を草したるものである。若し幸に垂敎を賜はり、僕今日の惑を說くことを得ば、明日所信を飜すに吝ならずである。終りに臨み、未知の姉崎博士に敬意を表す。(大正七年十二月十五日)

國際生活上の新紀元と日本の政治的將來

大山郁夫

過去四箇年に涉り、歐洲の野に於て文明破壞の工程を急ぎつつあつた大戰亂が、今秋に入つてより先づブルガリアの屈服を切掛に、續いて土墺の二國、及び最後に於て獨逸帝國が、順次にその跡を趁うたことに依つて、遂に急轉直下にその必至の到着點に達したことは、勝ちたる聯合側諸國民に取つては言ふを須たず、敗れたる中歐側の諸國民に取つても、それぞれ異りたる意味及び程度に於てではあるが、一樣に喜ぶべき結果を齎らし來らんとして居る。但し此場合に於て『喜ぶべき結果』といふ言葉を用ひたのは、無論廣き人道上の意味よりであつて、今假りに立場を異にすれば、或は『悲むべき結果』とも言ひ得られる場合——若しくは現に爾か言はれて居る場合がないではない。此點に關して、餘り適切なものでないかも知れないが、一二の手近の實例を擧げて見やうならば、戰時中、歐洲諸國の商工業よりの競爭の一時的停止の狀態を利用して、多少の程度に於てその懷合の裕福を感じて居る我國の一部の商工業者中に、昨今に至つて急に自家の前途を悲觀し始めた連中の少からず存在することは、最早世間周知の事實となつて居る所のものである。またその樣な實利的方面に關してではなく、所謂精神的方面に關しても亦、かの臨時教育會議主査委員會の歷々が、最近に於て議定した可なり長い題號の建議案に於て、『……殊に歐洲動亂の影響に依り、我思想界に生じたる幾多の謬見は、愈々その傾向を大ならしめんとす。誠に憂慮に堪へざるなり』と言つた樣な、さも小賢し氣な——併しながら如何にも廻り諄い形式に於てか、若しくはそれよりもつと氣の利いた、簡明率直な形式に於てかで、一種の悲觀論を提唱して居る手合も、中老以上の年輩の人々の中には、中々少からず見受けられるのである。若し夫れ露國に於ける昨年の十一月革命に於て始めて大規模の實際運動となつて現はれたるボルシエヴイズムの思想の一般的流布の危險の前に、中産階級、若しくは所有階級——就中資本家階級が、異常の不安の恐怖に壓されつつあることは、今日に

於ては、殆ど世界的現象と謂つても差支があるまい。

◇

それにも拘らず、更に廣き人道的立場より見れば、今次の大戰亂は、その終結の時に際して、世界各國民のために、極めて喜ぶべき結果を齎らし來るべき可能性を、既に幾分明瞭に示して居ると言ふのは、縱し平凡なる言ひ前との譏りを免れないにせよ、決して不當なる臆斷との批難に値ひするとはないであらう。無論、斯の如きホープフルな可能性が、果して近き將來に於て盡く完全に實現し得らるべきや否やの問題の解決は、來るべき講和會議を構成すべき絕大なる責任及び榮譽の負擔者たらんとする各交戰國の諸政治家、並に是等諸政治家を支持する背後の力たるべき關係諸國民の心的態度、及びその意識的努力に賴ることの甚だ多いことは、疑ふべからざる事實である。が、併し現下に於ける各種の事件の綜合的觀察は、此點に關して大に吾人の意を強くするものがあるのである。

けれども此最後の一點に論及する前に、我等は先づその第一着歩として、右に用ひた『人道的立場』といふ語の意義を闡明せねばならぬ。然らざれば、一部の人々に依つて常に我等の所說の上に投げ掛けられるを習ひとする一種の有意若しくは無意の誤解が、玆にも亦再び擡頭する虞れがないとは謂へないからである。我等は上段に於て、右の『人道的立場の』語の上に、『更に廣き』といふ形容句を加へたが、此形容句は決してその語の說明の全部とならないのみならず、此句自身からが、既に我等に對する誤解の媒介となるべき危險を帶びて居る。換言すれば、此句自身からが、既に或る說明を要求するのであつて、而して又た同時に、此句を說明することに成功すれば、我等は我等の意味に於ける『人道的立場』の語の說明を、半ば爲し果らせたものと見ることが出來るのである。

◇

我等は一種の偏狹なる個人的立場とか、階級的立場とかに對して、『更に廣き人道的立場』といふ語を用ひた。併し斯く言へばとて、總ての種類の個人的立場や、總ての種類の階級的立場が、本質的必然的に人道的立場と相矛盾衝突して居るものだといふのではない。個人的立場や階級的立場が、人道的立場と相背馳する場合とは、件の個人的立場や階級的立場が反人道的である場合のみを謂ふのであつて、而して斯の如き場合以外に、別に人道主義に立脚する個人的立場や、同じく人道主義より發程する階級的立場といふものが、單に理論上成立し得るのみならず、時として事實上存在して居るのを見るともあるのである。

人道的立場の國家的立場に對する關係も亦、右に說明せる所

の如き、その個人的若しくは階級的立場に對する關係より觀して、直に理解し得られるのである。普通の場合に於ては、人道的立場と國家的立場とは、兩々相對立して居る觀念として取扱はれ、而して此兩者は本質的必然的に相背馳するものとして解釋せられて居る樣である。或る一派の論客等が人道主義を捉へて、直に之をコスモポリタニズムの如き一種の空疎なる純理知主義的見解と混同する傾向があるのは、全く斯の誤れる解釋の上に立つて居るものに外ならぬのである。人道的立場は決して本質的必然的に國家的立場と相矛盾撞着して居るものではない。否、啻にそれに止まらず、具體的事實に立脚する人道的立場が國家的立場を無視して成立し得べからざるは、恰も具體的事實に立脚する國家的立場が個人的若しくは階級的立場を無視して成立し得べからざると同じ關係に立つて居るものである。

斯の如く人道的立場と國家的立場とは、本質的必然的に相背馳するものではないことは、深き論證を要せずして明かであるが、併し同時に、それにも拘らず反人道的なる國家的立場なるものが、屢ば事實上に於て存在するものであるとも亦、腹藏なく之を承認せねばならぬ。是恰も、國家的立場と個人的（若しくは階級的）立場とは、本質的必然的に相背馳するものでないに拘らず、反國家的なる個人的（若しくは階級的）立場なるものが、屢ば事實上に於て存在すると同じ關係に立つて居るものである。

右の理論に關する理解を容易にするために、甚だ卑近なる一例を示すことを許して貰ひたい。我等の日常生活に於て、度量衡の計器の正確を維持することは極めて重要なことであつて、我等の多くはそれに關する法規の勵行を、國家的立場より希望すると同時に、個人的立場よりも亦た希望するのである。けれども度量衡の計器を用ひて貨物を賣買する商人輩中の或る者は、國家的立場(それは實際に於て彼等の多くが意に介せざる)よりしては、當然其計器の正確の維持を希望せざるべからざるに拘らず、實際上に於ては自己の私腹を肥やさんがために、秘密裏に不正の計器を用ひて、只管その發覺の危險を防遏するに腐心するが如きことは、餘り頻繁に行はれつつある國家生活上の一事實である。國家的立場と個人的立場とは、本質的必然的に相背馳するものでないに拘らず、事實上に於て屢ば反國家的なる個人的立場の存在することは、此一例話に依つて極めて明瞭に看取し得られることであると思ふ。

◇

人道的立場と國家的立場との間にも亦、右の關係が絶えず行はれて居るものである。屢ば繰返して言つた通り、人道的立場

と國家的立場とは、本質的必然的に相背馳するものでないが、事實上に於ては屢ば反人道的なる國家的立場が存在して居るのであつて、その例證は今日の國際生活の上に於て、餘りに多く呈示せられて居るのを見るのである。而して世界的大戰亂が戰ひ盡くされて漸く終熄するに及んだ今日に於て、誰れの眼にも最も顯著に映ずるものは、最近の獨逸革命の際に至るまで、同國に於ける支配的地位を占めて居た官僚軍閥の了解して居た意味に於ける國家的立場――即ち自國の存立上の必要乃至便宜のためには、條約を以て『一片の紙屑』と見るが如きことは愚か、他國の獨立を脅かすことをも、世界の禍亂を惹起することをも顧みる所にあらずとするが如き國家的立場は、人道的立場といふことを如何樣に解釋するにしても、それが極端に反人道的であることは、言ふまでもないことである。この種の國家的立場を最も徹底的に代表したものは、最近の革命に至るまでの獨逸を支配した官僚軍閥の政治的信條であつて、而してそれが普魯西の中興の君主たるフリードリッヒ大王の遺策として信奉せられ來つたものであることは言ふまでもない。而して斯の如き反人道的國家觀に對して、如何にも尤もらしき理論的外殼を與へたものとしては、之を前にしてはマキアヴエリがあり、之を後にしては此マキアヴエリを『偉大なるフロレンス人』と呼んだトライチユケがある。素よりマキアヴエリアやトライチユケの此點に關する學說が興るに及んだのには、歷史的に之を正當化（ジヤスチフアイ）する根據がある。加之、最近に至るまでの國際關係の實況を見ても、事實の基礎の上に片足を置かなければならない政治家の規範としては、必ずしも全然之を妄說として一嗤に附すべからざるものがあつた樣にも見えた。國家社會に關する規範を表示する學說の有效性は、時代と共に推移するを普通とする。此點に於て實際上の適用性を主眼とする規範的學說が、初めより人類の終極目的を主題とする理想的學說と、常に相牴觸し衝突し來つたのは、誠に無理からぬ次第と謂ふべきである。併し歷史的に規範的學說と理想的學說との交涉關係を通觀すれば、是等兩者の間に於ても亦冥々の裡に漸層的接近の跡が示されてあることが現はれるのである。少くとも、縱し兩者の間に常に新しき矛盾が續々發生しつつあるにしても、舊き矛盾のギヤツプが一つ一つ癒着し吻合しつつあるを見るのである。而して人類全體としての進步は、自ら此間に標識せられ、また理想論者の主張は、普通極めて遲々としてではあるが、併し極めて確實に、自らその間に實現せられて行くのである。

◇

右に述べた樣な次第で、近世紀を通じ、一方に於ては、交通

一

發達の結果として異常の進歩を遂げた國際的協同生活が、漸に新國際道德の確立を促して來つたにも拘らず、他方に於ては、如何なる場合にも急劇に過去の傳統(善惡兩方面とも)と絶縁することを不可能とする各國家は、孰れも皆多少の程度に於て、國際協調主義の憧憬者であると同時に、マキアヴェリズムの實行者でもあつた。今次の大戰に於て、軍國主義の代表者と見做されて居た獨逸帝國の事は、姑く之を不問に附することとする。又世界に於ける一派の論客に依つて第二の獨逸とさへ呼ばるる我國の或る行動——例へば近年に於ける對支外交、若しくは最近のシベリア出兵などの裏面にこびり附いて居るものとして世界の疑念の標的となつて居る或る種類の政治的動機の如きも、亦姑く之を不問に附することとする。それにしても平和主義人道主義の本山の如く見做さるる英米佛、及びその他の諸國にしても、孰れかの方面に於てマキアヴェリズムの實行者でなかつた國家は、歷史上に於て之を認めることが出來ないのである。

斯る事情の下に於ても、國際生活——若しくは國際的社會生活の實際的進歩は、それ自體に適合する新道德觀念に依つて律せらるる國家行爲の準繩を熱烈に要求し續けたのである。近世紀——殊に第十九世紀の全部より第二十世紀初期の今日に至るまでの國際法、外交、及び政治に關する文獻に對して多少の概

念を有するものは、誰が之を疑ふことが出來やう。而して此熱烈なる要求が漸次に一般的反響を喚起した結果として、國際生活上の新環境に適應せしむべきことを目的とする樣々の國際的行爲の規律が次々と案出せられた。即ち往年に於ける國際仲裁裁判の實驗より、最近に於ける國際聯盟の企畫に至るまで、此種の提案は數限りなく公にせられた。而して本世紀に入つてより、是等の提案の多くが實際上の試練を經過すべき機運が十分に熟して來たのである。若し過去四個年に渉つて世界の禍亂を釀成したる今次の大戰亂にも、人類の向上進歩の上より見て重大なる意義があるものとせば、その一つは正しくそれが是等國際生活上の諸提案に對して、烈火炎々たる試練の熔爐を與へたことであると謂はねばならぬ。

◇

今次の世界戰亂は、各種の社會的及び國家的制度の上に、既に顯著なる價値轉換(ウムヴェアツング)を行ひ、更にまた今後と雖も、尙ほ着々それを續行する氣勢を見せて居る。斯の如き價値轉換の對象物となつたものの內に於て可なり顯著なる地位を占めて居るものは、國家存立上の必要乃至便宜の上より反人道的國家行爲をも正當視せんとする種類の國家觀——即ち從來『國家至上主義』の名に依つて了解せられたる一種の國家觀であつた。去世紀の末

に至るまでは、斯の如き國家觀が、古來多くの賢哲に依つて唱道せられ來りたる國際生活上の理想から見て極めて醜惡なるものとせられて居たにも拘らず、事實上より見れば、單にその代表者と見做されて居た獨逸に於てのみならず、陽にそれを否認することに腐心すらして居た爾餘の各國に於ても、國家國民に對して責任を有する政治家の實際上の國家的行爲の規矩準繩として、尙ほ相當の有效性を有するものとして遵奉せられて居たのである。けれどもその間に於ても駸々として進歩を續けて居た國際的社會的生活は、遂に現在に於けるその新環境の下に於て此種の國家觀の有效性を試驗せずには居られなかつた。試驗は竟に來た。それは歐洲の一角に勃發して、總て世界の隅々隈隈までその影響を波及せしめた大戰亂の形式に於て――

この試驗に於て、傳來の國家至上主義を代表して居たものは、實に獨逸帝國を中心とする敵國側であつて、之に對して國際協調主義の立場を主張したものは、實に聯合側であつた。必要の前に法律なし」とか、「條約は一片の紙屑に等し」とかの壯語を揚言して、堂々と世界の批判の矢面に立つたものは、實に獨逸の運命を擔つて居た政治家連であつた。之に對して、今日に在つては最早、條約は一片の紙屑と見做すべきでないことを證明せんとしたものは――詳言すれば、現在の國際的の境環下に於ては、如何なる國家と雖も、國際生活上の道德律を蹂躙し、國際的信義を破つては、到底安全に存立し得べきものでないことを證明せんとしたものは、實に聯合側諸國民、及びその委託を受けて重大なる局面に立つた諸政治家であつた。而してその結果は前者の徹底的大敗となり、後者の徹底的勝利となつたのである。

今次の世界戰亂を見て、それは英獨の爭霸戰に過ぎないものであると言ふものがある。如何にも近年の世界市場に於ける是等兩國の角逐の跡を見れば、さうとも受取られないではないけれども又、他方に於て佛蘭西や伊太利などの邊境を見れば、領土恢復といふ久しい問題が此戰亂に絡み附いて居ることを認めねばならぬ。更にバルカン半島の上に眼を轉ずれば、スラヴィズムとチユートニズムとの衝突こそ此戰亂の核心をなせるものと思はれないではない。斯の如く觀來れば、此戰亂の原因を極度に單純化して孰れか一つのものに歸して仕舞はうとするが如きは、畢竟無益なる努力であることが分明になる。然り、此戰亂の原因中には、幾多の複雜なる要素が交互に錯綜して織り込まれて居るのであつて、從つて更に立場を變へて之を觀察すれば、それは一面に於てデモクラシー對オートクラシーの鬪爭にも見られ、又他の一面に於ては人道主義的國際協調主義對反人

道的國家至上主義の衝突とも見られるのである。而して今我等が茲で關係して居るのは、此最後に掲げた見方なのである。

◇

右に述べた意味に於ける反人道的國家至上主義をば、今次の戰亂を通じて、世界に於ける最強の軍國として傲然歐洲の中原といふ好位置に蟠居して居た獨逸帝國が代表して居たとは、偶然にも此種の國家觀の有效性を試驗するには、最も屈強なる狀況を形づくつて居たものであつた。正義人道及び國際協調主義を標榜して居た聯合側に取つては、獨逸帝國が率ゐて居た同盟側は、相手として不足のないものであつた。否、時としては聯合側に取つては、同盟側は餘りに手剛き相手であつた。露西亞帝國崩壞以後に於て殊に、所謂『戰敗承認論者（デフィーチスツ）』なる者が英佛國内に多數簇出して、盛に絕望的叫聲を揚げて居たのは、主として、そのためと解釋すべきものであつた。けれども聯合側諸國民中の大多數者の輿論は尙ほ健全であり、彼等が彼等を代表する諸政治家に對して示した信賴は尙ほ眞摯であつた結果として、彼等は異常の堅忍不拔の精神を持續し、堪へ難き負擔に堪へ、忍び難き苦痛を忍んだ。斯くて終極に於て、彼等の忍耐は十分に酬ゐられた。米國參戰以來の戰局の轉換は、事新しいだけに、今更之を繰返す必要はないであらう。

今次の戰亂を通じて、中立諸國民の輿論といふものが、甚だ重要なる役目を務めたことは、大に注意すべきことである。此點は、國際的社會生活が現下に於て到達し得た進步の道程を標識するものとして、將又此國際的社會生活圈内の共通性が意外の程度にまで發達して居る事實を反映するものとして、當然今後の政治家の深思熟慮の對境とならざるべからざるものである。夫の自國の國家的存立上の必要乃至便宜のためには、國際條約の神聖を蹂躪する位のことは愚か、力づくで他國の獨立の上に脅威を加ふることすら顧みざるが如き主我的國家觀——換言すれば、目的のために手段を擇ばざるが如き種類の反人道的國家至上主義は、今日の國際的社會生活に於ては、最早國際的輿論の寬假すること能はざる所のものであることは、今次の戰亂を通じて、大抵の中立國民の輿論が聯合側に對する同情に傾き、中歐同盟側に對する反感となつて表はれた事實に依つて證明せられた。而して中立諸國民が示したこの態度が、直接間接に戰局の形勢を決定する上に於て、極めて重要なる條件の一つとなつたことも亦、掩ふべからざる事實である。殊に國家の目的を達するために手段の何たるを擇ばざる立場を最も赤裸々に代表する獨逸の無制限的潜航艇戰開始の宣言は、豫てよりウイルソン大統領の口を藉りて今

次戰亂の人道的解決を呼號して居た米國民の血を沸騰せしめ、之と相前後して頻出したるルシタニア號擊沈以下の潛艇の殘虐は、遂にこの壯强國民を驅つてその中立國民としての地位を棄てて、直に中歐帝國の對手國側の間に伍するに至らしめたのである。而してこの米國參戰の一事が、戰局全面の形勢の上に向つて、如何に重大なる影響を及ぼしたるかの問題は、玆に事々しく取立てて說明する必要のないことである。

◇

獨逸の代表して居た反人道的國家至上主義が、國際的社會生活の大勢の要求に促されて發生し成長したる人道的國際協調主義と相容れざるものであることは、上に述べた通りである。故に獨逸國民が斯の如き思想の支配を受けて居る間は、そが來るべき改造せられたる國際的社會生活圈內の一員となることは、全然不可能であるべき筈であつた。幸にも此思想の持主は、實は同國の支配的地位に在つた官僚軍閥であつて、決して同國の一般民衆でないことは、開戰の當初より豫想せられ、而して最近に於ける同國內の革命に依つて最終の證明を受けた所のものであつた。右の思想に關して、獨逸國內の支配階級と一般民衆との立場を最も明瞭に區別して表示したものは、米國參戰當時におけるウイルソン大統領の宣言であつた。當時——詳言すれば一九一七年四月二日——彼は米國の國會に於て今は歷史的意義を有するものとなれる大演說を試みたが、その中に於て彼は、米國が餘儀なく參戰するに至つたのは、決して獨逸國民を敵として戰はんとするのでなく、獨逸國民を迷路に導きたる無責任なる政府——人道と權利を辨へ知らずして狂暴を働く獨逸の無責任政府を敵として戰はんとして居るものであるとの主旨を述べた。ウイルソン大統領の此態度は、休戰條約締結の當時に於て、彼が聯合側の獨逸國民の信任に依つて新に組織せられる政府に對しての外は交涉を開始することが出來ないことを表明した瞬間に至るまで、終始一貫して繼續したのである。

ウイルソン大統領が、右に述べた通り、米國參戰の當初より、米國が獨逸國民に敵對するのではなく、獨逸の無責任政府に敵對するのであるとの主旨を反復して說述することを怠らなかつた理由の基底には、米國の現在總人口(約九千二百萬)の五分の一强を構成する所の一千八百六十萬の住民が獨逸種であるといふ事實に對する顧慮もあつたであらう。また米國の建國以來こ獨逸よりの歸化人の多くが、同國の新文化建設の上に偉功を樹てたといふ歷史的事實に對する追想もあつたであらう。けれどもその最も主要なる原因は、矢張り彼自身が、實際獨逸國內に於ける支配階級と一般民衆との間に、國家思想上のギャップが

現存して居たこと、若しくはそれが容易に發生し得べき可能性を有して居たことを推測した爲めでなければならぬ。而して最近に於ける獨逸國内の革命に至るまでの事件の進行は、ウイルソン大統領の此豫想の的確なることを證明して餘りあつたのである。蓋し此革命に依つて獨逸國内の政權が民衆に歸するに至つてよりは、彼等民衆が從前の支配階級たりし官僚軍閥の反人道的國家至上主義を惜しげもなく抛擲した形跡が、歴々として指點し得られるからである。

同様の傾向は露國革命の際に於ても亦、明瞭に看取することが出來たのである。殊に同國の政權が過激派政府の手に歸してよりは、此傾向が更に一層顯著なる勢調を以て表はれたのである。過激派政府の政治的罪惡が何であらうとも、それが舊帝國の侵略主義に絶縁して居たそれでないことだけは確實であつた。過激派政府の首脳者は、その政權獲得と同時に、舊帝國政府の侵略的企畫の重要部を占めて居たコンスタンチノープル領有に對する要求權を始めとし、その他一切の征服的夢想を破棄し去つた。加之、彼等は將來の國際協調主義の基調たり準備手段たるべき公開外交主義、民族自決主義、無賠償無併合主義の如きものをも提唱したのである。民衆は愚人の集團であるとの證明は縦し出來るにしても、同時に寡頭政治は常に善良なる政治であるといふ保障が得られないのである。否、ここに寡頭政治に對する時は、民衆に立脚する政治（如何なる政體の下に在るかを問はず）は、それが最も粗惡なる出來損ひの形式で行はるる場合に於ても、どことなく人道的情調の閃めきを示すことが出來るに反して、寡頭政治は常に多數人民に對する抑壓政策の上に立つ結果として、石の如く堅く氷の如く冷かであつて、自然的人情味を缺如して居るものである。革命前後の露獨の狀態の研究は、此點に於て多大の啓發を吾人に與ふるのである。

國際聯盟の企畫の主張者等は、概ね皆右の傾向を正當に認識することを誤つて居ない様である。蓋し彼等の多くは、若しくは彼等の殆ど總ては、國際聯盟の單位たる各國家は、その政體の君主制たると共和制たるとを問はず、齊しく皆デモクラチツクの政府を所有するものでなければならぬことを唱道して居る様に見受けられるからである。

國際聯盟の提案は、該聯盟の單位たる各國家がデモクラチツクの政府の上に立つべきことを前提條件として居るものであることは、一面に於ては、今次戰亂が各交戰國内に於て、多少の程度の相違こそあれ、一様に民衆の政治的及び社會的勢力の増進といふ結果を齎し來つた事實を反映すると同時に、他の一面に於ては、それは今次戰亂に依つて招き入れられた新時代が、

民衆の道德性に向つて拂つた大なる讃辭をその儘反響するものである。曾ては民衆の知識的及び道德的缺陷——と謂ふよりは、寧ろその愚昧性及び不道德性若しくは無道德性を得々と指摘することが、政治的及び社會的現象の說明者の最大任務と思はれた樣に見えた時代があつた。（斯の任務の遂行を繼續して居る一派の學者論者が、今日に於ても尙ほ殘存して居ない譯ではないが）。而してさういふ時代は、寡頭專制政治の時代、若くはそれに近く接續して居る時代であつた。されば民衆に對する斯の如き評價は、當時の支配階級たりし少數貴族の聲を代表したものと見るべきであつた。プロシアの貴族の一人が叫んだと傳へらるる『民の聲は家畜の聲なり』といふ警句は、實にこの觀察樣式の結晶であつて、專政主義を官僚專制の形式で行はうなどと主張した何處かの政治家などは、丁度誂内にその型に嵌つて居た者である。彼等は戰爭の材料としての、若しくは砲彈の餌食としての民衆を『忠勇なる兵士』と褒める時の外は、一般に民衆を以て家畜の群れと差して異る所なき『物』として取扱ふのである。彼等に取つては、民衆は『物』としては貴重なものであるにしても、『人』としては無價値なものである。斯の如き思想の支配の下に在る政治が、民衆の時代たる現代に於て全然その信用を失つたのは、洵に已むを得ざる次第である。

君主政體の下に於けると、共和政體の下に於けるとを問はず、民意尊重の根本主義の上に立脚するデモクラチックな政治は、その缺陷が縱し何であらうとも、民衆を『物』と見る僻見より解放せられて居ることだけは確實である。『民意』を認めて之を尊重するといふのは、畢竟組織せられたる民衆を以て統一的意思の主體と認めたからの事である。換言すればそれは、民衆に於て物格以上の人格としての價値を認識したからの事である。デモクラシーの道德的價値を尋ねてその泉源に溯れば、我等は竟にこの一點にまで到着せざるを得ないのである。

◇

國際聯盟の基礎的觀念が、その單位たる各國家のデモクラチックな政府を所有することを前提條件として居るものであることは、前述の通りである。故に此意味に於ける國際聯盟の最も熱烈なる唱道者の多くが、既にデモクラチックな政府を所有する諸國家（君主制の下に在ると共和制の下に在るとを論ぜず）たる英米佛白伊などを包含する聯合側に屬するのは當然であるが、併し同時にこの提案が、まだオートクラチックな政府の支配の下に在つた間の獨逸や墺匈國內に於ても、尙ほ相應の反響を喚起したのは、抑も如何なる理由に依るのであらうか。是れ恐らく、前に述べた通り、是等の諸國內に於ても、その無責任政

時を繼續して居た支配階級の政治的意味如何に拘らず、この民衆が既にその政治的地位を自覺し、「物」としてのではなく、「人」としてのその政治的及び社會的意義を獲得しようとした形勢が次第に濃厚になつて居たからである。彼等の政府が尚ほオートクラチックであり、イルレスポンシブルである間に、彼等自身はいつしかデモクラチックであることを學んだ。今次戰亂は、各交戰國內國に於ける民衆をして、それ自身と全國家の運命との間の緊密なる關係を切實に意識せしむることに依つて、益す彼等をデモクラチックとならしめたことは、內外時事の研究者の毫も疑ふこと能はざる所である。無論獨墺の政治家連は、各自の國內に於ける此形勢をば、嫌々ながらにしても看取せざるを得なかつたであらう。彼等の政府の成立上の根本義から見たら、往時の神聖同盟とは外形に於て類似しながら、內容に於ては雲と泥程の相異ある國際聯盟の思想などは、言ふまでもなく何よりも忌まはしき異端思想であつたに違ひはない。而かも彼等が一應之を顧慮し之に迎合したかの如き口吻を自國の議會に於ける演說などに於て漏らさざるを得なかつたのは、それは今から考へて見ると、全く民衆への時勢の移動を暗示して居たものであつた。——併しそれにしても、我國の官僚系並に政黨系政治家が、今に及んでも尚ほ國際聯盟の問題に關しては、少くとも公衆の前に於て、絶對の如何を守りて居るのは、一國として[illegible]た事であらうか。

◇

國際聯盟が實行可能の提案と見做されて、各國の責任政治家の注意の焦點となる樣になつたのは、僅かに今次の戰亂に入つてからの事であり、而してその組織並に運用の細部に關する考案は、此頃になつて漸く其緒に就き掛けた許りのところであるから、縱しその熱心なる主唱者中に、ウイルソン大統領を筆頭として、それ以下の多くの有力なる政治家を包含して居るにもせよ、その成立の見込が立つまでは、前途尚ほ遼遠の感がある。けれどもそれは國際聯盟の形式的成立に關して言ふのであつて、その精神的基礎に關して言ふのではない。國際聯盟の精神的基礎たるべき國際的デモクラシーを基調とする國際的社會生活の觀念は、今次戰亂がその上に加へた烈火の樣な試練の中を潜り拔けて來て、今や儼然それ自身の確立を宣明して居るのである。之に對立したる反人道的國家至上主義——卽ち自國の存立上の必要乃至便宜のために他國の獨立を蹂躙することをすら意とせざるが如き種類の、卽ち結極は世界征服主義に歸着するが如き種類の主我的國家主義——換言すれば人道を以て國家的行爲の價値を量らんとするのではなく、國家的行爲を以て人道の價値

を衛らんとするが如き流儀の國家的利己主義は、今や、全くその戰ひを戰ひ盡くして、その最後の主張者であつた獨逸の敗北と共に、痛ましき沒落の運命に陷つた。獨逸の敗北といふのは、實は斯の如き政治的信條の支持者であつた同國の支配階級の敗北のことに外ならぬのであつて、獨逸の一般民衆に取つては、此支配階級の羈絆より解放せられてからは、却て新國際社會圏内に仲間入するための途が疏通せられた譯になるのである。ウイルソン大統領が、米國參戰の當初より、獨逸の無責任政府と獨逸國民とを區別して考へたその考へ方は、是に於て益す正當であつたことが證明せられたのである。

オートクラシーに對するデモクラシーの主張を以てその戰爭目的の一に數へた聯合國が、その道連れに官僚專制の露西亞帝國を伴つて居た事實より生じたるその大なる自家撞着は、當の露西亞帝國の崩壞と共に全然消滅した。また來るべき國際社會圏内に獨逸を加入せしむべきや否やの問題は、獨逸の官僚專制の永續した間は、終極に於て否定的解答を受くべき運命に瀕して居たが、此點に關する障害も亦、同國に於ける最近の革命と共に一擧に撤去せられた。革命期を中心として、その前後の露獨兩國の政情を觀察すれば、自國内の民衆に於て人格を認むることを拒むオートクラチックの政府は、その最も完成せられたる形式に於ても尙ほ、竟に國際的協調に有害なる一種の反人道的國家至上主義より離れることが出來ないのに反して、その出發點より既に民衆の人格を當然のこととして決めて掛かるデモクラチックの政府は、その最も粗硬なる創始的形式に於てすら、既に國際的協調を支持する人道主義的國家觀に立脚する自からなる傾向を有するものであることを知ることが出來るのである。

右の意義に於ける『人道』の觀念は、決して『國家』の觀念を排除するものでないことは、今になつて態々說明の勞を採ることが全然不必要である程も、既にこれ迄に述べた所に依つて明瞭になつて居る筈である。國家を無視する世界觀は之をコスモポリタニズムと稱するのが適當であつて、之を人道主義と呼ぶのは明に名稱錯誤である。前に一言した如く、個人的個性の要求を無視する國家觀が不當である如く、國家的個性の要求を無視する人道主義は、空疎であると同時に不道德である。正當なる意味に於ける人道の觀念に於ては、個人も民族も國家も總、その内に包容せられて、そこに各々その適當なる地位を保有する底の綜合的調和を意味するものでなければならぬ。此意味に於ける人道主義を具體化したる國際的協調が、國家を以てその全組織の單位とすることから見ても、それが初めから國家の存

在を認定して掛つて居るものであることを指明するのであるが、正義人道を呼號し、國際聯盟を提唱する聯合側の有力政治家が、同時にまた民族の國家的自決主義をもその主張の一として加へて居るのは、その間に何等の矛盾が存在しないのみならず、寧ろ是等のものは皆、必然的に相補足し合はなければならないもののみであることを證してゐる。

◇

現勢の下に於ては、如何なる方面より見るも、國際聯盟の形式的成立の見込が立つまでには、前途極めて遼遠と見える程も様々の容易ならざる障害が續々擡頭することは、一見恰も人道主義の政治の憧憬者の絶望の種となるべきものの様であるが、少し突き込んで考ふれば、その必ずしも然らざることが分る。國際聯盟に關して、我等がその最も重要部分と見倣す所のものは、その形式的成立の問題にあらずして、寧ろその精神的基礎の確定の問題である。國際聯盟が形式的に成立しても、その精神的基礎が確定しない限りは、それは到底その目的を達成することを得ざるに終り、所詮早晩破綻の運命を免れないであらう。之に反して、國際聯盟が形式的に成立するに至らずとも、その精神的基礎さへ確定して居れば、國際聯盟の本來の目的は、既にその大半を達成せられて居るものと見て好いのである。此意味に於て、國民の從來の專制政治に墮つた苦き經驗に懲りた利己的な國家主義の破綻を齎らしたつた今次の戰亂は、この結果に於ては、人類の將來の向上進歩のために大に祝福すべきものたるを失はないのである。

◇

國際聯盟に關しては、まだまだ大に論じて見たいものがあるけれども、今はさうして居られる場合ではない。國際聯盟が近き將來に於ける成否の問題は、今は姑く之を不問に附することにするが、假りにこれが成立するものとすれば、如何なる形式を取つて現はれるにしても、それに加入せんとする國家は、その政體の如何に拘らず、その政府をデモクラチックの組織の上に置くことを要求せられるであらう。斯る場合が到來した際には、我國の爲政者等は、抑も如何なる態度を以て之に臨まんとして居るか。我國を代表して講和會議に列せんとする使節等は、この問題に對して如何なる定見を有して居るか、當面の國家的必要には緣遠い諸問題に關して饒舌を弄したがる政黨內閣の大臣等も、一たび斯の如き緊切なる大問題に逢着すれば、忽ち申合はせた樣に――若しくは申合はせた前書通りに口を噤んで仕舞ふのは、一體どうした譯か。我國民は將に明春に於て、憲法發布以來の滿三十年の經過を紀念せんとして居るのであるが、

彼等は否氣にも之を關知しないで居るのか。

けれども國際聯盟が、種々の故障のために、近き將來に於てその形式的成立を見ないにしても、それでも尚ほ、世界が今日に於て既に到達して居る國際的社會生活の現勢は、その圏内に於てアンチデモクラチックな政治の行はるる國家を仲間入りさせることを肯んじないであらう。それ故、或る程度に官僚專制的統治様式を保有する國家は、今後の國際的協調圏内からは、少くとも精神的に除外せらるべき運命を甘受しなければならないであらう。

この立場より考ふれば、我國の今後の政治的將來は、大に我等の懸念の種とならないで居られないのである。閥族專制及び元老干渉の痕跡が、國民の如何なる反對に遭遇しても、いつかな消滅しさうにも見えない狀態に在る我國が、現今の如き野蠻な選擧法、現今の如き民意尊重の精神を無視した議會制度、現今の如き非民本的教育、現今の如き軍人外交の忍容……凡そ是等の時代錯誤的道具立を提げた儘で、若し我國が今後の國際協調圏内に闖入することがあれば、少くとも革命前の獨逸の亞流として取扱はるる危險がないであらうか。

我等は最も眞劍に我國の政治的將來を熟考せねばならぬ瀬戸際に立つて居るのである。無反省なる現狀擁護者は、總ての改革主義者が社會的には常に辯解的地位に立てるその弱味に附け込んで、その頭上へ考へ得られるだけの惡罵を浴びせ掛くるを習ひとすることは事實である。けれども我等は、今それを構つて居る時ではない。我等は現狀展開の途をデモクラシーの方面に求むる工夫を講究する使命の衝動を感じないで居られない時機に、今正に逢着して居るのである。

デモクラシーの主張を以て國民的精神と相容れないものとする奇怪な議論を以て、その宣傳者を非國民呼ばはりすることを誇る徒輩が、今尚ほ我國の論壇に存在して居るのは不思議といへば不思議である。デモクラシーの主張者等は、究極する所、民意の國家政治の上に疏通する路を開拓することに依つて、國民精神の發揚を計らんとするものである。デモクラシーの主張者等は彼等のデモクラシーをして國民精神發揚の機關たる地位を獲得せしめんがために、努力し、苦悶して居るものである。若し夫れデモクラシーの主張を以て、我國の國體を害するものとして誹謗する頑々者流の妄言に至つては、深く之を取合はずして可なりである。我國に於ける極端なるデモクラッーの主張者等(若しあらば)と雖も、決して我國の立憲君主制の破壞を望むものでないのは無論のことである。否、事實は全く之に反して、彼等は我國の立憲君主制の此上一層完全なる發達を謀らん

がために、如何なる不當の非難の下に屈服して居るのである。

◇

國際的協調圏内へ仲間入りするために我國の政治を民本化する必要があると謂はば、それは恰も外部より來れる壓迫のために生じたる必要——即ち他律的必要なるかの觀があるが、實は我國政治の民本化の必要は、究極に於ては、我國の國民精神の發揚、及び我國の立憲代議制の完美を期するがための要求より來たるものであつて、要するに我國民の自覺せると否とを問はず、その内部生活上の衝動より來れる必要——即ち自律的必要に外ならぬものである。

只茲に特に一言したいことは、我國民が今後の國際的協調圏内へ仲間入をする必要を感じる樣になつたのは、我國の地位が世界的になつた爲めであつて、我國民より見れば、自ら大に慶すべき事でこそあれ、決して寸毫も愧づべきことではないのである。我國が今後の國際的協調圏内より除外せらるる場合には、無論我國民はそのために非常に大なる物質的損失を蒙らなければならない。が、今は此問題には暫く觸れないで置く。けれども、その樣な場合には、我國民は、折角我國の世界的地位より生じ來るべき世界的使命を盡くす機會を得ることなくして終るであらう。これは我國民に取つては、物質的損失よりは遙かに重大なる精神的損失であらねばならぬ。

我國の世界的使命の遂行に關する部分までをもスペキユレートすることは、非常に愉快な事でもあり、有益な事でもあるが、今は之に拘つて居る遑のないことを遺憾とする。けれども、その近き將來に屬する部分——殊にその目睫の間に迫り來れる講和會議の事業に關する部分は、如何に本文の結末に向つて急いで居る筆者と雖も、一言之に觸れない譯には行かない。

講和會議に列する責任と榮譽との負擔者たる各國の政治家等が、今次戰亂の總勘定をば、人道的解決の方針に據つて處理せんとする誠意を有して居ることは、我等は之を信ずることが出來る。けれども彼等は如何なる種類の問題にぶつかつても、全然その判斷の平衡を失はない程も冷靜であり得ることが出來やうか。縱し彼等が左樣に冷靜であり得るにしても、彼等の背後に在る國民が、彼等と同じ程度に冷靜であり得ることが出來やうか。殊に歐洲諸國民は實戰の場面に觸着して居るだけに、あらゆる問題に關する彼等の利害關係が極めて緊密であつて、且つ交互に相紛糾錯綜して居るのである。斯る狀態の下に於て、是等の諸國民に向つて、如何なる問題に面しても常に判斷の平衡を失はない程も冷靜であれと註文するのは、我國の官僚者流に向つて一足飛びに普通選擧制の主張者となる樣に註文すること

と程も無理なことではなからうか。

正義人道を戰爭目的の內に數へたる歐洲に於ける聯合側の諸國民——殊に獨逸國民と獨逸政府とを區別する米國大統領の宣言に共鳴の聲を揚げたる歐洲に於ける聯合側の諸國民が、此大戰終結の刹那に於て、何とも名狀し難い復讐心に燃えて、倒れたる舊獨逸政府に對する鬱憤を獨逸國民の上に移さんとする傾向が見えて居るのは、此際としては誠に自然の情の發露とも謂ふべきものがあるが、自然の情の發露も、時に依つては之を防遏せねばならぬこともある。殊に講和會議が永續的平和の基礎を置かんとする目的を有して居るものならば、尚更斯の如き自然の情の發露を防遏せねばならぬ。本誌の前號に於て、福田博士はその『勝者は誰か』と題する論文の中で、『聯合國が獨逸國民の忍容的求和に對して圖に乘つて過酷慘忍なる條件を課することなく、敵を待つにfairnessを以てすること』の必要を指摘し、且つ此結果を將來するためには、『我日本は實に有力、有效なる發言を爲す可き義務あり又た權利ありと確信する』と說かれた一點は、我等が全幅の贊意を表せざるを得さる所である。序ながら、聯合側が獨逸に對して採るべき態度に關して、例の英國の有名なる獨逸研究者たるドーソン氏が、その著『講和の諸問題』(W. H. Dawson, Problems of the Peace, London, 1917)に於て、福田博士と略ぼ同樣の意見を述べて居るのを見て、我等はその公正なる見界に敬意を拂つたことを附記し置く。

對獨態度に關して既に幾分の不合理を行つた英佛白等の國民は、その他の多くの利害關係の込み入つた諸問題に對しても亦、多少の程度に於て不合理の態度を取らないとは限らないのである。我等は毛頭、彼等が爲した今次戰亂の人道的解決の希望の表白に就いて その誠意を疑ふものでない。けれども同時に、彼等が單に此誠意を有するがために如何なる問題に對しても、決して冷靜なる判斷と合理的なる態度を失ふこと能はずとするが如き誠意萬能論は、各國民も亦感情に支配せられる弱き誘惑の下にある生活體である活事實を知らざるの罪に坐するのである。否、彼等歐洲の諸國民は殊に、多くの問題に關する彼等の判斷及び態度に對する親切なる調節者を要するのである。

斯の如き意味に於ける調節者の役目を務むる上に於ては、大西洋の彼方の米國は極めて好地位に在るが如く見える。けれども米國にしても、或る點に於て渦中に沒入する可能性から自由であることは出來ないのである。現に米國は、國際聯盟の問題に關しては、歐洲に於ける聯合側諸國とは必ずしも總ての點に於て相一致して居ない樣であり、又海洋自由の問題に關しては、

少くとも英國に對しては面倒なる立場に立たねばならぬものの如く見え、最後にウイルソンの講和條件十四個條の實演に、右の二個の條項以外の部分に於ても亦、他の友邦より爭せられんとする形勢に在るのである。

斯の如く考へ來れば、米國と雖も必ずしも總ての點に於ける好調節者といふことは出來ないのである。是に於てか總ての列強中に在つて、歐洲の諸問題に關しては、如何なる種類の僻見に依つても累せられざる——若しくはそれに依つて累せらるること最も少き筈の我國の調節者として使命は、當然重要視せられねばならない譯となるのである。只我國が此大使命を完全に果たし得るや否やは、一は本國に於ける政府者及び講和會議に簡派せられたる使節等の識見手腕如何に賴り、一は我國の政治の現在及び將來の組織及び運用に對する列強の信用如何に繫がること甚だ多かるべきことは、容易に想像が出來るのである。此點より見ても、我等は、我國の爲政者等が誠心誠意を以て我國政治の民本化を圖り、且つ即時にこの趣意を世界に向つて宣言せんことを希望して已まないものである。

其他我國の對米、對支、對濠等の外交に於て、是等の對手國が既に抱懷して居る我國に對する根抵深き誤解を氷釋せしむるために、將又、我國が當然米國、加奈陀、及び濠洲に向つて提出せざるべからざる人種的見地に依る差別的待遇撤廢の要求を實現せしむるためにも、我國政治の民本化を促進することが極めて必要である。けれども最後に於ては、我國政治の民本化の要求の依つて來る所以の最大原因は、我國民精神の障害なき發達、及び我國民生活の豐富なる充實に對する我國民自身の本然の希求心であらねばならぬ。否、此最後の一點より見れば、我等は單に我國政治の民本化とのみは謂はず、我國の教育、產業、その他一般的意義に於ける社會生活全部の徹底的民本化を熱望せざるを得ざるものである。（七——一二——一九）

正●誤●

本號公論欄渡邊博士の論文の末尾、第二十八頁第七行目「東京市民は日本の他の都市の市民に比較して驚くべき」と其次の「市税を負擔して云々」の間に「低き」の二字を脫落したる事を博士並に一般讀者に謝す。（校正係）

世界の大主潮と其順應策・對應策

世界の大主潮と其順應策及び對應策

法學博士　吉野作造

（一）

此問題を考ふるに當り先づ念頭に置かねばならぬ事は、我日本は今や完全に世界の一國となつたといふ事である。今俄かに世界の一國となつたといふ譯では無いけれども、從來は世界一般が日本の行動に餘り關心もせなかつたし、又日本自身も世界の大勢に對しては專ら受け身の地位に立つて居つた。而して我から積極的に世界の經營に與らうと云ふやうな、所謂世界的意識が朧げ乍ら國民の心頭に浮び初めたのは、今度の戰爭からの事と見なければならない。而して世界も亦戰爭の遂行上の自然の必要から、西歐の問題に日本の力を藉りたのを手初めとして、段々世界の問題に日本の發言を認めるといふ端緒を開いた。して見れば日本は最近漸やく完全に世界の一國となつたといつて差支ない。而して此事の結果我々の是非共考へねばならぬ事は、今や日本は世界の大勢に孤立して進むことは到底許されないといふ事である。少くとも我々は將來の帝國經營に於て世界の大勢と沒交涉に國運を指導すべからざるの明白なる覺悟を要するといふ事である。我々は我國の益々富强の域に進まんことを欲する。併し乍ら剛慾な守錢奴の富を增す事が一村一鄕の繁榮と何等の關係なきが如く、帝國の富强が世界の大勢と沒交涉たらしめたくない。世界の進步が日本の進步を促すと共に、日本の開發が又同時に世界の開發であり、且つ世界の開發を促すものでなければならない。

斯う云ふ見地から、世界の大勢に對する我國の立場を考へると、大勢の趨向に從つて國運を指導すべき方面と、大勢の進步に關する我國の特別なる使命を主張すべき方面、換言すれば大勢に順應して行く方面と、大勢に對應して行く方面と二つあると

云はねばならない。

（二）

帝國の將來に於ける健全なる發達を期するには、先づ第一に世界の大勢に順應して行くことを怠るべからざるは極めて明白の事理である。少くとも今日の時勢に於て、此事に一點の疑あるべきでない。昔は必ずしもさうではなかつた。何故なれば所謂世界の大勢なるものは、其頃強大なる二三國の協定によつて作らるゝを常としたからである。併し乍ら今日はさうではない。今日大勢となつて居る主なる思潮の內容は、多くは英とか米とか佛とかの二三有力なる政治家の言說に淵源する。けれども此等の言說の國際間に重きをなして、忽ち大勢を作るに至るのは、必ずや世界各國一般の共鳴と後援とを得て居るからである。隨つて此等政治家の言說は今や彼等一人の私論と見るべからず、又彼等の屬する一國の偏私的國論を代表するものに非ずして、大體に於て世界全人類の代辯者たるの地位に立つ言論と見ていゝ。されば所謂今日の國際的輿論なるものは其外觀は如何様にあれ、其根柢に於ては決して二三強國の私意に出づるものに非ざること、恰も國內の輿論が貴族階級より出づるに非ず、平民的泉源より出づると同様である。隨つて今日大勢をなす所の世界的大主潮は、若し各自國家の利己的立場を離れて冷靜に觀察する時は[illegible]公平なるものであると[illegible]を[illegible]することを以て世界的[illegible]を[illegible]第一の[illegible]なければならぬと主張するものである。

何か今日世界の大勢をなす所の大主潮であるか。[illegible]方面について云ふならば、內政にあつては民本主義の徹底である。外政に在つては國際的平等主義の確立である。若し前者を社會的正義の徹底と云ふべくんば、後者は即ち國際的正義の確立に外ならない。共に正義公平を國の內外に布かんとするものであつて、之れ實に人類共通の大理想に基礎するものたるは論を俟たない。之には何處までも順應して行かなければならない。日本には日本の特色があるとか、又は世界の進步に對して特殊の使命があると云つても、先づ第一に正義を內外に布くの國となつて居なければ、此等は初めから問題となり得ない。善良なる國民となるには、先づ善良なる人間となつてゐなければならない。尤も世間には善良なる國民たる事によつて初めて善良なる人となるを得べしと論ずるものもある。善良なる國民たる事が先か、善良なる人間たる事が先かの、時の先後は姑く玆に問題としない。少くとも論理上普遍的基礎を堅むるといふ事が、特殊的方面を大いに發揮する先決問題ではあるまいか。此點に於て予は日本が世界の一國として其生存發達の特別なる權

利を主張する前に、先づ民本主義の國となり、正義を以て國際交通の基本とするの國たらねばならぬ事を要求するものである。

此意味に於て世界の大勢に順應すべきの必要は、獨逸帝國崩壞以來益々明白になつた。正義を内外に布くを立國の理想とすべきの考は極めて陳腐な説にして、何時の世如何なる時代にも唱へられない事はない。而も實際に於て此の考の蹂躙せられた事、又此考の疑はれた事近世の如きは珍らしい。殊に陽に之を尊重しつゝ陰に之を蹂躙して兎も角も目前の成功を收めた獨逸帝國最近の大發達は、世界の多くの後進國をして正義の權威に對し大いなる疑惑を抱かしめた。我國に於ても口に正義を唱へ乍ら、事實陰謀譎詐を事として巧に利己的目的を十分に達せんとするが内外政治の常則であると得意氣に主張する者も少からずあつた。否、今日尚此謬妄より醒め切らないものがあるに相違ない。無論世界は黄金時代でないから、陰謀譎詐の行はれ得る餘地はある。今後と雖もかゝる舊式の政治的活動は決して跡を絶たないだらう。併し乍ら結局に於てかゝるものゝ蒙る批判は如何、又かゝるものゝ陥るべき運命如何を考ふる時、我々は殊に最近内外政治に於ける正義の權威著しく鮮明を加へつゝあることを思はざるを得ない。此時に方つて國家經營の方針を世界の大勢に順應せしむるを躊躇するが如きは、實に國を誤るの甚だしきものである。

（三）

吾人の生活に先づ一個の人間として努力完成すべき普遍的方面あると共に、特殊の一國の一員として又は其國民中の特殊の一個人としての特別なる能力品格を發揮すべき他の一面がある。之と同樣に大勢に順應して普遍的基礎に於て面目を整へた國家は、更に其の國家の特別の存在の理由を世界に向つて發揮せねばならぬ方面がある。之れ實に各國家の世界の進歩に對する特別の使命であつて、之れ有るが故に彼等は他の國家と共に、又他の國家に對して生存發達を主張要求し得べき權利を有するのである。此方面に於て我々は更に世界の大勢に對應して特別の要請をなし、又此要請をなす事によつて更に世界の大勢を向上發展せしめ、其内容をなす思潮を醇化豐富ならしむることが出來る。其向上發展、醇化豐富を遂げ得る所に、各國家の世界の進歩に對する使命が存するのである。又向上發展せしむる程度又醇化豐富ならしむる所以の性質等によつて、各國家の道德的品位も定まると云ひ得べきである。

只此方面を主張して世界に對應するに方つては、我々は特に次の諸點に注意する事を必要とする。（一）各國家が各特殊の存在をなす以上、世界全體の進歩に對して各其分擔講究すべき特

强い使命がある。吾人は此使命の何たるかを發見し、之によつて自から向上し且つ世界を進歩發達せしめなければならない。（二）但し此特殊的方面を高調するの餘り、世界の大勢に順應すべき方面を閑却してはならない。之れ動もすれば陥り易き弊害なるが故に特に注意することを要する。（三）されば、と云つて大勢に順應する方面のみに熱中して自國特殊の使命を忘却し、甚だしきは大勢順應の意義を誤つて利弊共に先進國の爲す所に倣するが如き態度に出でてはいけない。

（四）

何よりも大事なのは何が世界の大勢に對應すべき特徴であるかを發見することである。外國に無くして獨り我國にあるものがすべて我國の特徴にして、以て世界に對應し得べしとするならば大いなる誤りである。所謂日本特有の文物にして、世界に持ち出すべからざるは無論の事、我々日本人の間に於てすら、今日三文の價値も無くなつたものゝが少からずある。所謂國粹保存論者の間に此種半文の價値なきものを擔ぎ廻つて、以て世界に對應すべき我國の特色なりとするものがある。此等の行動に對して我々は單に憫笑に値するなどゝいふて他所事のやうに將へて居ることは出來ない。我々は此等日本特殊の文物に對し精細鋭利なる合利的批判を加へ、周到なる注意を以つて取捨選擇することを忘れてはならない。

然らば何が世界に對應すべき我國の特色であるかといふ問題になるが、之については今茲に一々擧げて論ずるの遑がない。只一つ最近日本の國體の威嚴に冒瀆する所以を説いて世界に敎ふべしとするの說に對して一言するに止めて置く。最近一部の國學者が日本の國體を世界に敎ふるの目的を以て、代表的國學者を講和大使に附隨せしむべしといふ說を發表したものあることは、讀者の已に知らるゝ所であらう。當時論壇では之を一笑に附したやうだけれども、併し之は或意味に於て餘程眞面目に考ふべき問題であると思ふ。何となれば西洋には確かに近頃共和思想が横溢して居る。此事は十九世紀前半の歴史に比較して最も著しく感ぜらるゝ。十九世紀前半に於ては土耳古の羈絆を脱して巴爾幹半島にいろ／＼の國が起つた。西欧諸國に於ても例へば白耳義の和蘭から獨立する如きものもあつた。其外政變の結果所謂國命を革めるといふやうなものも少からずあつたが、其結果として現はれた新政治組織に於ては、立國の基礎は概して全然人民主權でありながら、殆んど例外なく中欧名門の王室から聰明なる王族を迎へて立憲君主の政體を定めた。中には斯くして暗に大國の後援を得やうとか、或は久名門の王族を擁立することによつて國の品位をつけやうとか、又は斯くして速か

に諸外國の承認を得るの便宜に供しやうとか云ふ考もあつたらう。けれども兎も角國家には君主が必要だといふ考で一貫して居つたのであるが、最近は全然之に反し、何か一騒動あれば必ず國王を廢して共和にする。從來の行掛り上俄かに廢める譯に行かないから、國王を其儘置くが、何か事があつたら之を廢して共和國にするのがいゝといふのが現今の大勢のやうになつた。斯くして葡萄牙は共和國になつた、露西亞も共和國になつた、獨逸までが今や將に共和國として堅まらんとしつつある。予輩の研究する所によれば、西洋に於て最近の政變を指導する思潮の本質は必ずしも共和思想ではないと思ふ。王政を廢しさへすればいゝといふのなら、英國・白耳義・伊太利王室の今日依然安泰なるを得るの道理なく、又初めから共和制たる瑞西に動揺を見るの謂れがない。彼等の求むる所は少くとも内政に於ける社會的正義の確立である。換言すれば民本主義の徹底を求むるに外ならない。而して露西亞・獨逸に於ける王政の倒されたのは、王政が民本主義の徹底に障害を與へたからであらう。英吉利・白耳義等にあつては民本主義の徹底に何等障害となつてゐないから王室は安泰なるを得る。それでも此等の國はもと〳〵立國の基礎が民主國なるが故に、王政の存否については間々不當なる議論の横行するを避け難い。西洋の政治學でも共和國體よりも君主國體の方が吾人の國家的生活の鞏固を期する上に適當であるといふ議論があるに拘らず、萬民の完全なる精神的尊崇の中心となる皇室が無い爲めに、君主國に對する本當の諒解は西洋人には出來難い。獨り此間にあつて本當の君主國體の味を體驗し、而して之を世界に發揮し得べき地位にあるものは我日本のみである。此點に於て我々は此特殊の國體を以て世界の文明に貢獻し得べき何物かを持つて居るに相違ないが、併し其前に我々は先づ以て民本主義に徹底した國となつて居なければならない。日本のやうな國體は何故いゝか。民本主義を徹底するに都合がいゝからである。さういふ理窟で貫いて居る今日の世界に向つて、如何に日本の君主國體が世界に誇るべしとは云へ、未だ民本主義に徹底しない形で出て行つたのでは、世界は成程と納得して呉れないだらう。否、西洋の學者の中には日本があれ丈け立派な國體を持つて居りながら、其れを實際の政治に十分活用し得ないとは何と云ふ先輩政治家の蒙昧ぞと酷評して居るものがある。して見れば我々は此立派なる特色を有つて世界に對應する前に、先づ以て世界の大勢に順應して民本主義に徹底するの必要があるやうにも考へらるる。

從來の迷夢より醒むべきの秋

文學博士　三宅雪嶺

證據より論を重んずべき哲學でも、論より證據となる傾向がある。證據とて眞に證據と判明したのでなく、漠然哲學は獨逸が優つて居り、其獨逸で重要の位置を占めて居るの故を以て、爭ふ可きものでなく、先づ之を根據とせねばならぬと考へる。自由なる討究を事とせず、實際の效果を主とする政治に於ては尙更らである。一層實際の效果を主とする軍事に於ては、殆ど全く論より證據とし、如何なる良將でも、負けて來たとあつては士氣が振はず、さほど良將でなくても、金鵄勳章を得たのでは人が信ずる。緣起を重んずるのも其爲めである。いよ〳〵進まうとする時、俄かに天氣が晴れたりすると大に勇み立ち、俄かに曇るので氣が沈んだりする。常勝軍の名あるものは、常に勝つと信ずるので士氣を緊張し、能く勝つ事が出來、其代り敗けたが最後、士氣阻喪し、恢復に難かしい。

我日本が始め陸軍を佛式に、海軍を英式にしたのは、當時其一者を世界で最も優秀と認めたのに由る。佛軍が獨逸に敗られてから、佛式の陸軍を獨式に改めた。當時獨逸の軍制及び戰術が佛に優つて居たに相違ないが、其優つた證據は佛に勝つたといふにある。何といふても獨逸が全勝を得た、良い所が無ければ勝てるものでないと觀る。其所で陸軍は何でも獨逸に則り、之れに則れば間違ひ無いといふ事になる。

政治はそれほど簡單でなく、いろ〳〵の事情が入組み、其優に判別難い。けれども論より證據は作はれぬ。幕末に奔走した者が新に勢力を得、政治の衝に當る場合、參考とすべき外國に二個の潮流あるを認めた。維新前英米に接觸するところ多く、其政治に倣からうとした。明治の初めに集議院を設けたのも其關係よりした。所が維新以後他國の事情を知り、列國中露國及び獨逸が英米に劣らず、之よりも更に多く憚かられて居るを知り、世界に立つに彼等の如く成りたいやうな氣もする。明治四年出發の岩倉大使一行を始め、官吏として視察若くは取調べに出掛ける者は、獨逸の政治を吞み込み易いやうに感ずる。詰り獨逸では君主の任命した大宰相等が、國政一切の事を爲し、人民が矢釜しく言はぬ事になつて居り、君主の親任ありさへせば何でも爲す事が出來、而して其國は旭の上る勢である。幕末に有るか無いか知らなんだ普國が獨逸帝國となり、外交の中心

を佛國巴里から自國の伯林に移した。政治は何うしてもさうなければならぬと考へるに傾く。露國の强いのも獨裁專制の爲めであつて、老大なる國柄で理解し難いにしても、唯國を强くするに專制を得策とするだけは確かと云へる。前に第一の陸軍國と思つた佛國が、君主を廢し共和となつて、國威甚だ振はず、迚もそれで永續きしさうもない。

英國は世界に植民地を領有し、何國からも國内を侵されず、立派な國でありながら、大陸に對して何程の力が無い。獨逸を何うする事も出來ず、露國を何うする事も出來ぬ。海上權を握つて居つても、陸上で河童の陸に上つたのに異ならぬ。陸軍は何等言ふべきものが無い。年中議會で騷いで居るやうでは、兵を以て大陸の中原に鹿を逐ふなど思ひも寄らぬ。米國に至りては別世界に屬し、國家と看做す可きものか疑はしい。住んで居つて氣樂ではあらうが、何處でも餘り幅が利かず、歐洲の外交と全く無關係で、嘴を容れてもてんで相手にされぬ。自由とか民權とか云ふたとて、兵力を以て抑へ付けられゝば、何うする事も出來ぬ。露國を野蠻國と云つたりするけれど、其野蠻國を恐れて居るではないか。事ある每に其鼻息を覗ふではないか。獨逸が佛國と戰つた時、露國が之を後援したので、他國に於いて少しの手出しも出來ぬ。佛國を散々な目に遭すのをば、英國は唯觀て居るだけである。何でも兵力に叶はぬ。而して兵力の强いのは、專制若しくは專制類似の國であると考へる。翻つて自國を顧れば、更に神代以來連綿たる皇室があり、歐洲列國と同じく視る事が出來ず、似た所を覓むれば露國か獨逸である。英國の如き立君共和國の名もあり、我れと同列に視る事が出來ぬ。皇帝の尊嚴なる事、露の如く獨の如くすべきであつて、中にも獨は露のやうに野蠻でなく、文化に於ても歐洲に冠たる勢あり、洵に文武並び傑出して居る。剰へ新に勃興し、國運の發展する所、何處か我れに類似する。等しく他國を參考するならば、獨逸に如くはないとする事、我國政府に位置を占むる者の、期せずして一致した所である。

何にしても論より證據、專制的の國が强い。獨逸のビスマルクは伯林會議で牛耳を執つた。露國は土耳古を攻めて失敗したが、戰爭で敗けたのではなく、國力測る可からざるものがあり、斷えず印度方面に南下する。其兵力の印度に及ぶ時、英國は如何にして之を禦ぎ得るか。印度を失へば東洋方面及び濠洲方面を遮斷せられる。自由民權などは内輪の事、世界の競爭に何の役に立たぬ。論より證據、獨逸及び露國が最も憚られて居るでないか。政府に位置を占めぬ者も、斯く言はれて觀れば之を駁するに困しみ、反駁したとて議論に過ぎぬ。眼前に證據

を抉出す事が出來ぬ。政府に位置を占むる者が、この論より證據を以て位置を鞏固にする事、何れ程であつたか知れぬ。政黨内閣を目論見たりする者は概ね英國を例に引くが、大陸について餘り發言權が無い國柄である。英の如く政黨で何事をも爲るとなつては、君主を無視する事になりはせぬかと打込まれる事もある。君主を蔑にして何うするかと責められる。伊藤公と山縣公と度々此邊について議論があつた。伊藤は隨分議論の立つ方であり、歐洲の例を引くに於て遙かに山縣に優つて居るにしても、山縣から論より證據を持ち出されては、議論は難かしくなる。獨逸流儀に仕上げて來た山縣關係の官僚及び軍閥は支那との戰役、露國との戰役で着々成功し、英國に似た事は日本に不適當であり、米佛の如き共和國の爲す所は一考するの價値だに無いといふ調子になつて居る。昨年の秋まで世間で普通に官僚及び軍閥と呼び做す所は其狀態で續いて來た。露國革命で意外の感に打たれたけれど、獨逸は之と違ひ、基礎あり秩序あるから最後の勝を制し、少くとも互角以上の態度で講和する事にならうとした。所ががらりと變り、獨逸屈服といふ事になり、變つて見れば、殊に大なる變動である。

世界戰役に於てさしも評判の三帝國が消滅し、共和國となるか共和聯邦となるか測り知り難い狀態を呈する。此三帝國は百年前に神聖同盟を結び、革命運動を鎭壓するに從事したものである。鎭壓するに互に扶け合ひ、墺は露の援助を得て洪牙利の革命を鎭壓した。が、今は其當時の鎭壓策が少しの用を爲さず、專制ほど變動が激しい。露國皇帝は温厚の人、決して暴虐の方でないけれど、刑場に引出され銃殺された。皇后は不評判であるものゝ、女の身であり、政治に興つても多寡が知れて居る。併し罪の無い皇子皇女と共に殺され、死骸が分らぬといふ事である。獨及び墺の皇帝は自ら退位したので、騷ぎは露の如く劇しくない。三帝國が僅か二三年間で斯く崩壞するとは夢のやうな事實である。何と論じても打消す事が出來ず、論より證據となつて眼前に顯はれて居る。曩きに論より證據として獨逸及び露國を例證に引いた者は、如何に之を辯解しようとするか。一時獨逸の崇拜熱が驚く可きものであつた。井田男が伊藤公をシガルビスマルクと嘲つたのも此時である。シガルの啼く方をビスマルクに似せたといふのである。實は井田が公使としていろ〳〵取計らつたのであり、時の事情を詳しく知つて居つた。直ぐとビスマルクを學ぶならば未だしもの事、グナイストを通して學ぶので恐れ入るとも云つた。而して凡て官吏で視察若くは取調らべに行き、スタインに逢はぬのがなく、大抵感服を極めて歸る。海江田子の如き自分の師事したのは藤田東湖とスタイ

ンと云ふて居つた。スタインは獨逸人でも、墺國に居つて日本人に逢つた。墺は國として重きを爲さぬやうでも、獨と兄弟國であり、物質の豐富なるに於て兄分の形があり、墺でスタインに學んだのも其邊の緣故無いとはせぬ。露國は特別の國で模倣しようもないが、內務省の官吏がポベドノスチエフの書を譯して配つた事がある。如何に專制に心服する風あつたかゞ推測かられる。

それで續いて居れば、論より證據無理もないとするが、露獨墺が形無しとなつては、曩きにかの三國を世に推賞しただけ、何とか取消さねばならぬ羽目となつて居りはせぬか。實は最初獨露二帝國又は墺を加へて三帝國に則らうとしたのは、我が皇室を三國の君主と趣を同じくするやうに考へた誤謬が頗る與つて居る。維新後政府に位置を占めた者は、不圖して形式に拘泥し誠に大なる誤解に陷つた。何故に我が皇室を以てかの三帝國の君主と同じやうに視たか。凡そ世の中に之れほど甚だしく異つて居るものが鮮いではないか。唯皇帝の名に拘り、エンペロールと稱す可きもの、カイゼルと稱す可きものであると云ふだけでないか。皇帝やエンペロールや、いろ〳〵種類がある。日本の歷史を讀んで見るがよい。何處にかの三國君主のやうな事があるか。二千何百年といふ間に幾分か類似の事を求め得られぬではないが、それでは話しにならぬ。我が皇室は時代に據つて幾許か國民の考へ方が違つて居つても、常に尊崇の的となつて居り、權力の如何に拘らず尊崇の中心を形作た。權力が有るので尊崇せられたものと云へぬ。權力の極めて微弱なることもあり、政治の事は一切將軍に於いて預かつた時代も相應に久しく、皇居の垣が壞れ、市中の兒童が出入したこともある。それで依然全國の尊崇するところとなつて居つたでないか。斯かることはかの三帝國に有りやうもない。彼れに於ては權力あるところで尊崇される。尊崇は恐れられてのとこである。我が政府に位置を占めた者は何を思つてか、彼れの如くならでは國民尊崇の念が減ずるかに憂慮した。はなはだしきは獨逸皇帝の如くならねばならず、墺國皇帝の如くならねばならず、更に甚だしきは露國皇帝の如くならねばならぬやうに考へた。

固より我皇室は統治權があり、幕府も正朔を奉じた。位階は朝廷から出るに極つて居つた。けれども軍隊を以て警護した時も警護しない時も尊崇に於て變りがない。自由黨改進黨の起つた際、政府の要路者と脈絡を通じて福地が帝政黨を組織し、新聞に意見を發表した中、皇室の無事なりし原因について、或る時代に讓位を强しさせ給ふたといふを擧げた。考へやうで誤解

を措き長いか、致た宗の發起人が悉く斃れた事がある、當人も誤解ないやうにと謹つて居つた。虛位と云ふは語弊があるけれど、假りに虛位として、國民無限の度を滅じた事が無い。德川時代その所謂虛位の事がある。然し幕末に志ある者は、何條兵力を其へさせられぬ皇室を中心とし、諸藩を統一しようと企たて、其爲めに牢獄に入り、或は死刑に處せられたりした。國民が皇室に對し、恐れ多く思ふのは、權力で抑へ付けられるので恐れるのではない。其邊に少しも恐れを抱かなんだ。高山が二條橋で皇居を拜し草莽の臣と言つたのは、刑罰を恐れたのでも何でもない。お辭儀をする方が人に笑はれ、或は幕吏に睨まれる方であり、幕末に於いて注意人物とされる。而して全國に高山の風を聞いて感化した者の多いのは何であるか。有史以來論理を以て說明し難い特殊の情誼の存在して居るに外ならぬ。かの三國の君主が皇帝として專制若くは專制類似であり、我國も之と同樣にせねばならぬと考へたのは適當であるかどうか。元とは封建時代に生れ、其習慣に養はれ、平民を賤しみし士族と同座す可きものでないと心得て居つた事が原因を爲して居る。『廣く會議を起し、萬機公論に決す』るの勅あるにしても、平民共が勝手な事をしては困る、大抵に抑へ付けて置かねば、增長して法網が知れなくなると思つて居つた。何でも少數で多數を抑へ付けるやうな事があれば、之れ有りする。政治に於くことはればならぬと合點する。少數の爲めよりも、己れ自らの位置から割り出したのが多い。寧ろ自らも數人民に騙されては、政治は出來るものではなく、有力者が上に居り、凡てを指導するやうでなくてはならぬと、自分の位置から考へ、漢學で得た所から考へ、さう思つて居るところへ、西洋でも英米のやうなもの許りで無く、上から何でも下に命する國があり、剩へ其國が降々頭を擡げ來るので、英米の眞似なんかする愚の骨頂とした。國威を發揚するに獨逸のやうな好い手本がある。墺國は誠作に敗けても國威を墜さぬ。露國の如き何百年も前のやうな國で列國を威嚇して居る。少數有力者で事を取扱ふに限る。議會を設けて置くのは、實に申譯に止まる。之に拘泥らつて居つては暇どるばかりである、論より證據を見よとの事であつた。實は大間違ひであつた事今度分つたらう、直ぐ分らなくても次第に分らう。總して專大主義の嫌ひが有り過ぎる。論より證據とて、何でも其通りにせねばならぬ事なく、しようとしては必ず無理が出來る。證據は何時まで續くと限らぬ。證據のみを見ず、其證據の由つて來つた所を研究する必要がある。事が頻はしく一々研究し得ぬにしても、今少しく思慮する所なくてはならぬ。

純粹の學術でも、醫學の如き、餘りに獨逸贔負であつて、其他に何の注意を拂はなかつた。往々驚く可き事がある。學術でもさうであれば、政治又は軍事に與る者が獨露を重んじたとて怪しむに足らぬやうであるが、其儘にして置くのも如何はしい次第である。論より證據とした所が、根本より崩れた以上成る可く思ひ直し、考へ直して善後策に力を注ぐが可い。かの三帝國とて全く捨てたものではなく、其學術技藝又は社會政策等參考すべきものが多い。けれども當初政府に位置を占めた者が、自分の立場から割出して之れに則らうとした所は證據の消滅と共に捨てねばならぬ。強ひて從來の態度を守らうとしては事が面倒になる。獨逸にては事が難かしくなつたので政府を明け渡した。之れ決して責む可き事ではないが、露國の如く變亂を招かぬやうにする功能があらう。前に獨逸一點張り、又は獨露を模範にした連中は、之れに倣つて切上げるが可い。之れから英米風が勝つと云ふのでなく、之れも相應に考ふべき所がある。唯五十年間官吏の信條となつて居つた所のものが、俄然一變するの餘儀なきに至つた事、一の珍らしい現象と言はねばならぬ。之れで國內及び世界に處するに便宜を得る事が多い。

資本的侵略主義に對抗、眞正のデモクラシーを發揚

法學博士 福田德三

○

對應と云ひ順應と云ふも畢竟程度の問題である。日本が如何に世界の大勢に拮抗して行かうと思つても、夫れが世界の大勢である以上は、全然之を拒否する事は不可能である。結局順應となる外に途は無からう。然し一切萬事を擲つて世界の大勢に順應する外は無いかと云ふに、夫れでは無論可けない。大體に就いては順應する外は無いにしても、然し日本は日本獨特の立場から、順應しつゝも亦之に對抗して行かなければならない。所で果して日本が世界の大勢に對抗して行けるか何うか、即ち可能不可能の問題が玆に起つて來る。又對抗して行くとしても、果して何の程度まで行くかといふ程度の問題も起つて來る。我輩は向後の日本は一方に於て資本的侵略主義に極力對抗すると

共に他面俗樹内に潜んで居る[illegible]デモクラシーの萌芽の其れを排斥して之を鼓舞することを以て、日本の使命であると信ずるものである。以下少しく略説を加へて見よう。

○

今度聯合軍が得た大勝利は聯合國側の軍事上の勝利ではない事は、我輩が前號の本誌で論じて置いた通りである。今次の戰爭に勝つたものは實に獨逸の革命である。我國には英米論者の口眞似をして、今回の世界戰爭はオートクラシー對デモクラシーの戰であると言つたものが澤山あつた。從つて這の大勝利を觀てデモクラシーの萬歳を唱へて居る。獨逸を仆したものは確かにデモクラシーではある。然し夫れは決して英米論者の所謂デモクラシーでもなければ、從つて亦我國識者の所謂デモクラシーではある。然し夫れは決して英米論者の所謂デモクラシーでもない。英米論者の說くデモクラシーなるものは政治的のデモクラシーである。而して夫れは資本主義のデモクラシーである capitalistic political democracy である。之れがオートクラシーに勝つたのであるかと云ふに、決して左樣ではない。獨逸に勝つたのはデモクラシーはデモクラシーだが、夫れは social democracy である、社會民主主義である。我が國の論者は此ソーシャル、デモクラシーが勝てばよいとは決して思つて居たのではあるまい。此ソーシャル、デモクラシーの勝利の爲めに萬歳を祝して居るのではあるまい。

斯くて[illegible]しても、或は又[illegible]デモクラシーに[illegible]しても、我輩は之を[illegible]（假面的民主主義）と呼ぶに躊躇しない。何故なればソーシャル・デモクラシーは即ちプロレタリア階級のみを以て[illegible]と認め、全人民を[illegible]としないのであるから、本當のデモクラシーとは云はれない。即ち彼等自らソーシアルと云ふ形容詞を附けて居る。他方に英米のデモクラシーは今日與へられた政治組織の上にてのデモクラシーである。而して今日與へられた政治組織は資本主義の組織である。他日或は變つて來るかも知れないが、現在のまゝでは全人民を包含したデモクラシーではない。理窟の上では全人民のデモクラシーと言つて居るけれども、夫れは畢竟抽象論で、實際の事實に當て嵌まらない。

世界平和の克復は洵に結構で又獨逸の軍國主義が仆れたのも洵に結構だけれども、夫れと共に我々は更に更に恐るべき強敵を迎へることになつたのを忘れてはならない。之れ我輩が世界文明の危機と叫ぶ所以である。即ち我々は資本侵略主義の極盛と、而して其反對毒たる社會民主主義に面せなければならないのである。資本的デモクラシーは當然の結果として經濟的侵略主義である。もつと判り易く言へば海賊主義之である。我々はブ■

レタリアの跋扈と海賊の跋扈との間に挾み討ちにならんとして居るのである。之れが近き將來の世界を脅す危際である。日本は此大勢に對して唯順應するのみで濟まされ得るか。一切萬事を抛つて順應すべきであるか　否、斷じて否。我輩は曰ふ、日本は、否、世界の全體は、斷じて之れに對抗せなければならぬと。

○

平和克復後の世界の形勢は如何なるかと言ふに、英米は今度の拾つた勝利で益々資本的軍國主義、經濟的侵略主義を逞しうするであらう。之れは單なる想像ではない事實である。既に其端緒は一昨年巴里に開かれた經濟會議に見出される。即ち戰後獨逸に對して大々的經濟戰を開始するといふのである。之れやがて海賊主義の進化したもので、之れに由つて利するものは英國である、米國である。今や軍國的獨逸は壓れて世界の balance of Power が無くなつた。獨逸のある間は此海賊主義に對抗して勢力の均衡が保たれて居たが、獨逸が無くなつたので、世界は今やアングロ・サクソン人種の跳梁にゆだねられんとして居る。日本が如何に海軍を擴張しても、夫れは蟷螂の齒軋りに過ぎず、迚も拮抗し得るものではない。其資本的軍國主義、海賊主義は戰の上でなく、所謂經濟戰來らんとすと云ふ是れである。乍併經濟戰とは虛名である、敵なき戰とは無意味である、畢竟は軍國主義、オートクラシーを退治するといふ美名の下に、資本的侵略主義が今回の勝利に由つて完全に確保されるに至つたのである。ウヰルソンの主張する海の自由は到底英國の贊成するものではない。之れ海賊主義が滅びぬ端的の證左で、海賊主義と海の自由とは到底相一致する事の出來ぬものである。

戰後獨逸が經濟界に大々的ダンピングをやるに相違ないから、今から大に其對應準備をしなければならぬと言つて、人の好い日本を始め聯合諸國を誘つたのは、之れ實に資本閥が世界を恣いまゝに橫行せんとする準備に外ならない。戰後獨逸がダンピングする事の無いのは判り切つた事實である。然るに我國の識者、所謂專門の經濟學者の大多數が之れを受け賣りして、『戰爭の經濟が終つて經濟の戰爭が始まる。而して夫れは獨逸が戰時中に蓄積した物品をダンピングする事によつて其幕が切つて落される』と言つて居る。之れ大なる愚論で、久しい以前から我輩が駁擊を加へて已まなかつた所である。戰後のダンピングの可能を信ずるのは、獨逸を買被るの甚だしいもので、一方にあれ程の戰爭を續けながら、他方戰後ダンピングを試むる爲に物資を蓄積し得る譯が無い。然るに我國の論者は、獨逸を憎み嫌つて居た者でも、その戰後のダンピングの可能を信じて疑はなかつた。之れ彼等が常に言ふところと反對に心中恐獨病に罹

つて居たのに因り、又他面獨逸國民の心理を曲解したのに因る。獨逸は戰後のダンピングを用意しつゝ戰爭を戰つたものではない。曲直は別として、一旦戰爭を始めたからは舉國一致で戰爭に全力を傾注したのである。何の餘裕あつてか戰後の資本的侵略主義の準備を爲し得ようか。之れ我等が彼等論者に極力反對した論據である。然し我國の學者殆ど其大半は我等に反對であつた。而して今は何うであるか。獨逸には今やダンピングを行ひ得る餘力は一寸だつて無い。之れ獨逸の眞相を了解する事が出來なかつたのにも據るが、他面又資本的侵略主義者が爲めにする所あつて獨逸の怖るべきを描き出し、世界の人民を欺いた詭計にまんまと乘せられた愚論である。

○

獨逸のソーシャル、デモクラシーが今日のやうな勝利を得た事は我々の夢想だもしなかつた所である。此點に於て先見の明を誇り得るものは堺利彦君一人位であらう。今後の世界は此社會的デモクラシーと資本的デモクラシーとの對抗と云ふ大いなる危險に脅かされんとしつゝある。之に對して我日本は端的に如何に此間に處するかを考へねばならぬ。夫れには順應でなくして對應、否、對抗的でなければならぬ。即ち資本的デモクラシーに對抗すると同時に、亦社會的デモクラシーに對抗して行か

なければならぬ。而して世界列國の中、これに對抗して、眞良の文明を健全なる基礎の上に樹立せしめる、使命を帯びて居る國は、日本と佛蘭西のみである。（此點については近刊の「亞東時報」に『世界の新文明に對する佛蘭西の使命』と題して和佛兩文で書いたものと、『中外新論』所載の「戰後の世界を救ふべきは日本と佛國とあるのみ」と題する拙文を參照されたい。）

佛蘭西も昔は侵略主義の國であつたが、ナポレオンの一敗後は國是を變へて、殆ど全く非侵略的の國となつた。故に世界の經濟競爭に於て退歩した傾のあるのは事實である。十九世紀は資本的侵略の時代である。此時代に非侵略的の佛國が人後に落ちたのは已むを得ない。然し夫れが今は大いによい事になつた。英國の資本的軍國主義に對して武斷的幷に經濟的軍國主義を以て勃興して來た獨逸は崩壞して社會民主國とならんとしつゝある。露西亞も亦社會民主國となつた。然し佛蘭西は假令戰爭に滅茶苦茶に敗れても、獨逸若くは露西亞のやうな革命は來ないと思ふ。獨逸に革命の起つたのは軍國主義、武斷的侵略主義の爲斗りではない、資本的軍國主義に激勵せられたからである。否武斷的軍國主義は資本的侵略主義の武器たるに過ぎない。然るに佛蘭西には其何れも無い。だから戰爭に敗けても佛國民が社會民主化する形勢は起らないであらう。但し、此點は或は我等の佛

國に對する智識不十分で、判斷を誤つて居るかも知れない。若し然りとすれば佛蘭西も駄目であるが、今の所では軍國主義の國家でないから、其反動としての社會民主運動の力は微弱である。卽ち英米の如き資本的侵略主義の國となる運命は來さうもなく、而して然る以上は社會民主國となることはあるまい。社會民主運動は資本的侵略主義に對する反對毒(antidote)である。毒を以て毒を制するものである(此點『中外』一月號の拙文を見られたし)此二つの文明以外に、獨特の佛蘭西文明なるものが依然として存して居るのは、世界の爲めに洵に喜ぶべき事である。今迄は英獨の間に挾まれて進出の困難なりし佛蘭西が、將後大に活躍すべきは我輩の疑を容れぬ所である。

○

遠く佛蘭西と呼應して、世界の文明を其危殆の中から拯ふべき新しき力を有し、又之れに向つて努力すべき義務を有するのは我日本である。日本は如何なる意味に於ても過去に於ては侵略國ではなかつたし、又現に侵略國ではない。支那に於ける利權の獲得とか西伯利に於ける利權の獲得とかいふ事があつたが、あれは經濟的侵略主義の發露として見るも多寡が知れて居る。國民の心理としても、國政の方針としても、日本は斷じて侵略國ではない。故に之に對する反動として社會民主主義の國となる事は斷じて無いと我輩は確信する。

日本に社會主義は起るであらう。然し夫れを起すべき最も有力なる動機たる、資本的侵略主義は殆どない。故に極めて近い將來に於て有力に起るべき具體的案件が無い。資本的侵略主義にして行はれんか、如何に官憲が言論思想を壓迫し取締を嚴重にしても、其反對毒たる社會民主主義の大に勢力を得べきは必然であつて迚も防ぎやうが無いのである。だから社會民主主義の有力に起るを禦ぐ一番効果ある方法は、言論思想の壓迫や取締にあらず、日本が資本的侵略主義を行はぬ事之れである。此の外に途は無い。是れは社會民主主義者自らも認める所と信ずる。かの西伯利出兵とかバイカル奪取とかを主張する愚論家は、自ら識らずして最も有力なる社會民主主義擴張の傳道を爲しつゝあるものであると斷言して憚らない。蓋し危險なる思想家とは彼等愚論家の謂である。

斯く言へばとて我輩は決して我國に富の分配の不公平が無いと云ふのではない。又我國に社會問題が無いと云ふのではない。然し社會民主主義は是等ばかりから起るのではない。歐米諸國が常に社會主義に手古摺つて居るのは、畢竟資本的侵略主義の代償として甘受せねばならぬ所以に外ならぬ。英國の如き大資本主義の國では、社會主義さへ起らなければいゝかといふ

事にのみ活躍して居るが、ロイド・ジョージズムが盛んに行はれて居るのは英國が夫に進歩した證據だが、然し其大部分は資本的侵略主義の生産費と看做す可きである。資本的侵略主義を全く捨てれば、大製造業にロイド・ジョージズムを行ふことはあるまい。反對に資本的侵略主義を行つて居ては、如何に旺んにジョージズムを施しても偏に足らざるを憂ふるの外は無い。黒岩周六氏の言葉に倣つて言へば、ロイド・ジョージズムは或意味で蛞蝓である。資本的侵略主義といふ蛇を呑んで苦しくて堪らず、ジョージズムといふ蛞蝓を呑んだが、腹具合は依然として宜しくならない。結局は社會民主主義と云ふ反對毒を呑む外はないだらう。我輩が曾て河上博士にもう大抵ロイド・ジョージに興を醒まされたであらうと言つたのも一面此意味を含んで居る。斯う云つたからとて、我輩は社會政策が不必要であるといふのではない。唯だ資本的侵略主義をやりつゝ社會政策を行つたつて際限が無いといふ事を力說せんとするのみである。

獨逸の國家社會主義なるものも同じ筆法である。獨逸帝國が出來て極力經濟的侵略主義を行ひ初めたから、其代償として是非盛んに國家社會主義を行ふ必要が起つたのである。故に獨逸に於ける社會政策は最早行き詰りに成つたとは十數年來我輩の唱へて居た所である。然るに今度の革命は此問題を一掃した。少くとも今日の如き喧囂たる議論は起らずに成るものは民主國になる獨逸に於ては無論となつたと疑ふのがかへつて此の如くである。

○

今度の勝利でデモクラシー萬歳と云ふ事になり、此大勢に日本も順應して行かなければならぬといふ議論に一應尤もであり、而して他面に於て社會政策（反對毒としてでない）を大に行はなければならぬ事も勿論であるが然し我々は何よりも先きに我々の立脚地を熟く考へて觀なければならぬ。今度勝つたデモクラシー即ちソーシャル、デモクラシーが入つて來ないには困るが、資本的侵略主義の入つて來ることは、更に更に大に危險である。資本的侵略主義が入つて來れば、其の反對毒たる、其代價たる、其生産費たる社會民主主義の大に盛んになることは火を睹るよりも明白な事實である。されば我々は必然新たな立場から、我々の主張する社會政策、我々の主張するデモクラシーの出發點及び到着點を考へ、而して仔細に其内容を吟味しなければならぬのである。

新らしい意味のデモクラシーとは即ち言葉の本義の要求する通り、全人民、眞正にデモス全體を包含した所の眞箇のデモクラシーである。此デモクラシーは日本の國本を合理的に解釋すれば確かに相合致するものである。英米の資本主義的デモ

クラシーや獨逸の勞働階級のみを認めたソーシャル・デモクラシーではなく、全き國民を包含したデモクラシーである。而して夫れは如何なる意味に於ても侵略的であつてはならぬ。武斷的に侵略主義であつてはならぬ許りでなく、經濟的にもまた侵略的であつてはならぬのである。日本が如何に侵略主義を執つても夫れは鱓の齒軋りに過ぎない。如何に海軍を擴張しても、到底英米の海軍に拮抗すべくもない。如何に陸軍を充實しても、一度び英米の海軍に封鎖されゝば、獨逸と同一の運命に陥らざるを得ない。大陸續きの獨逸ですら封鎖されては饑餓を免かれる事は不可能であつた。況んや我國の如き四面環海の一島國では、如何に軍器糧食を自給自足し得るにしろ、一朝封鎖されゝば手足の出しようがない。だから我國が武斷的侵略主義を取つても全く駄目である。官僚軍閥の徒が如何に苦心努力するとも、其れは鱓の齒軋りで出來つこのない相談である。

武斷的侵略主義の起る事は不可能にしても、尚ほ茲に夫れより遙かに恐ろしい經濟的侵略主義、資本的軍國主義の邪道が横はつて居る。此頃多く發表される戰後の經濟論や戰後の日本對策論を観るに、軍事上の戰爭は今や漸く其終局を告げたが、戰後の世界には平和の戰爭が來らんとして居るから我邦も之に應ずる準備をせねばならぬと主張して居る。即ち我邦は漸後如何にも資本的に武裝した侵略國となる外に途が無いやうに說く者が多い。我輩は之を最も大いなる危險思想と思ふのである。(『中外新論』一月號の拙文『資本的侵略主義の危險』を見よ)日本に於ては社會主義が危險思想となる憂は斷じて無いと吾輩は信ずる。學理に基かぬ社會主義論などは少しも恐るゝに足りない。學理に基いた社會主義なら學理を以て說伏する事が出來る。思想は思想を以て、言論は言論を以てのみ打ち勝ち得る。他に之に打勝つ武器は無い。近頃永田秀次郎氏は日本の國本を危ふくするデモクラシーは一つも無いと言はれたさうであるが、我輩も永田氏の口吻を眞似て、日本の國本を危くする社會主義は一つも無いと斷言して憚らない。(但し日本が資本的侵略國となれば、社會主義は此侵略國に對しては危險思想となるは勿論である)之に反して我國本を危くするものは實に資本的侵略主義の邪道である。此資本的侵略主義の邪道こそ如何にも尤もらしい議論で物事を深く考へる習慣の無い人達を捲き込むに極めて都合の好いおためごかしの議論であるだけ、それだけ之に伴ふ危險は大きい。況んや此邪道には財力や金力が伴ふ。獨逸などに於て石炭山の所有者が世界に事を起して石炭の賣れ行きを増進させんが爲めに、私かに金を散じて外交上の問題を繁くさせるに努めたと同じく、日本が經濟的侵略主義を執る事は

假令不可能であつても、此主義を傳道してさへ居れば資本家に利益を受ける。故に彼等は喜んで其の傳道に力でも資本でも人でも供給するだらう。之れ程怖るべき危險はない。（三太陽十一月號拙文を見られたし）

殊に近來成金が跋扈して高い月給を出して官吏の古手や思想の行き詰りになつた學者をどん／＼買ひ入れる。然るに世間では彼等の立場を區別しないで、相變らずの學者、相變らずの識者と信ずるを好い事にして其[illegible]著を振翳し、經濟的軍國主義を鼓吹するものが起るかも知れない。否、現にその若干の例を我輩は知つて居る。實に危險恐るべしである。何々博士の戰後經濟論などゝまことしやかに振れ出すと、聞く聽衆は眞面目の學理に基ける議論と思ふが、何ぞ知らん其れは成金の番頭として資本階級の利益を擁護する資本的軍國主義の説法であらうとは。我輩は戰後機會のある毎に斯くの如き危險論の撲滅に力を盡くす心算である。

○

一事が萬事である。戰後日本にも經濟的軍國主義、體の好い海賊主義の説法傳道が大に起るかも知れぬ。世界の大勢に對應する前に、我々は先づ斯の如き愚論に對抗して、之が絶滅を圖からなければならぬ。幸に未だ成金が出來たと云つても小規模なもので、之を爲たのもたゞに[illegible]を[illegible]ると完全なた資本的軍國主義の洗禮を受けるまでに至つて居ない。又日本の政治も悉く之が爲めに毒されて終つたと云ふのではないから、日本は先づ國内に起らんとする資本的軍國主義を驅逐しなければならない。而して夫れと共に世界に向つては、一方資本的侵略主義の横行に對抗し、他方全人民を包含する大デモクラシー本源地として遠く佛蘭西文明と呼應して、一部のプロレタリアのみを本位とする社會的デモクラシーに對抗しなければならない。之れ即ち世界文明に貢獻する上に於て、我日本が荷へる最も重大なる使命であると思ふ。

○

斯くの如き大使命を果す爲めには、我々は先づ近頃流行の思想の統一とか、國體擁護とかいふ極めて危險有害なる頑迷思想を排除しなければならぬ。國民が先づ賢くならなければ、折角の大使命も之を果たす事は出來ない。國民を健全なる思想の上に置かなければ、到底何事も出來ない。國民を賢くし國民の思想を健全にするには、先づ言論思想の發揚を圖らなければならない。それには完全に言論思想の自由を保障しなければならない。政府當局者が露獨の過激思想の流入を防ぐと稱して、言論思想に壓迫を加へたならば、却て恐るべき危險を促進する結

果となる外は無い。言論は言論を以て、思想は思想を以て戰ふべし。資本的軍國主義を退治ると云ふのは、政治的手段に據つて之を爲すの謂ではない。飽くまで言論思想の力に據つて撲滅すべきである。

健全なる思想健全なる言論を保障する爲めには、言論者に精神上並びに物質上の自由安全を確保せねばならぬ。例へば大學教授の身分の保障、其待遇を好くする如きは、此點から考へて單なる物質的の問題でなく、日本の使命を實現する上に重大なる意義のある事である。有識者、學者が續々相率ゐて成金の番頭手代となるのは最も恐るべき事である。資本的侵略主義の大小の傳道者を人爲的に作り出すのを防ぐには、大學教授を始め言論思想の指導者たるものゝ地位身分を保障するのが第一に必要である。

○

然し日本がこの光榮ある大使命を果すのには獨力では出來ない。我等の信ずる處に據ると、世界の文明を其危機から救ひ得るものは世界列國の中で日本の外には唯佛蘭西あるのみ。我國は一方國内に於て大に言論思想の自由安全を確保すると同時に、他方佛蘭西と呼應して共に人類文明の爲めに盡くさなければならぬ。世界文明の健全なる發展を希望する上から云つて、今後佛蘭西の學問が我國に大に勃興するのは極めて必要である。獨逸の今日までの學問は著るしく經濟的帝國主義、侵略的世界政策の影響を受けて居た。獨逸の哲學がさうである。社會學がさうである。政治學がさうである。就中我輩の專門とする經濟學に至つては其影響が最も甚だしい。今は或意味で獨逸の經濟學の破産時代である。所謂經濟階段を巧妙に拵へて帝國に統一した國民經濟組織を、經濟生活發展の當然の歸結とした獨逸の經濟學は、單り海賊主義に對抗する獨逸の帝國的陸賊主義を一面に於て辯護する有力な學說であつた。夫れが今破産した。我々は或意味で頼るべき師を失つた譯である。今後は獨力に日本の特別の使命を考へた學問を建設しなければならぬ。唯だ順應する計りではいけない。今後大に勃興すべき佛蘭西の學問と密接な關係を有て、日本の立場から對應して往かねばならぬ。是れ吾輩の深く信ずる所である。（七、十二、六）

世界文壇の精華 —— 新春の好讀物

近世文學

アンナ・カレニナ

トルストイ著
相馬御風譯

菊版布製 上下二册 正價各壹圓七拾錢 郵税各十二錢

歐洲近代文學の最も偉大なる傑作にしてダンテの「神曲」ゲーテの「**ファウスト**」沙翁の「**ハムレット**」等と竝んで世界文學の最も光榮ある地位を占むべき近代の作品は正に此の「**アンナ・カレニナ**」一編たらずんばあるべからず。本書は流麗の全譯也。不完全の抄譯と同視する勿れ。

三人

ゴーリキー著
吉江孤雁譯

菊版布製 全一册 正價壹圓七拾錢 郵税十二錢

作者は放浪の間に有ゆる至難なる經驗を味ひる天才なり。其天才の靈筆が艱苦の間に磨かれて燦たる光を放てるもの即ち此作なり。三人三樣の特殊なる數奇は、近代人生活の好個の見取圖たり。

生の悦び

ゾラ著
中島孤島譯

菊版布製 全一册 正價壹圓七拾錢 郵税十二錢

本書は例の遺傳問題を中心として世紀末**デカタン**を主人公とし、極めて大膽に赤裸々に其周圍者の內祕を描破し時に性慾問題に觸る、と同時に、准天才肌の苦悶と病癖とを最も深刻に剔抉せる實驗小說なり。

先驅者

メレジコウスキー著
谷崎精二譯

菊版布製 全一册 正價壹圓七拾錢 郵税十二錢

近代文明の先驅者にして大美術家大科學者なる**レオナルド**の生涯を中心として文藝復興期に於ける伊太利人の社會的宗教的情態を描いた歷史小說の典型である。主人公描寫の精妙は云ふに及ばず、奸譎邪智の君主**ルドヴィコ**の生活や、羅馬法王の墮落を責めて火刑に遭つた**サヴォナロラ**を圍繞してゐる伊太利市民の傲慢淫蕩の生活やが驚く程に鮮明に寫されてある。

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一一二三 **早稻田大學出版部**

(賣捌) 神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 京橋東海堂 大阪盛文館 名古屋星野 (其他)

(中付一の一)



虫のゐどころ

楚人冠

一、寢られぬ一夜

一時が鳴る。午前一時といへば、もう明日か。今日とやいはん、明日とやせん。日は明日に進んで、この身一つは尙今日に取り殘されてゐる。

臥床に入つたのは十時前であつた。とろ〱したかと思ふうち、何かの物音に驚き覺めて、それからは何としても眠れぬ。眠らうとすればするほど尙目が冴えて行く。初は古則に遵つて馬の顏を描いて見た。虛空に輪臺を作つて、これに兩の眼を入れる鼻をつける口を作る。見つめてゐる中に兩眼の間にいくつか竪の皺が出來て、われ知らず自分の眼がうつとりとして來る。これならと喜んでゐると、突然馬が大口を開いて嘶く。はつと眼が覺める。今度は西洋風に垣根を越え行く羊の數を算へて見る。金雀枝の咲き亂れたケニルウヲースの城址を想ひ浮べる。此處に羊がうよ〱と居るとする。一つ二つと算へて行くうち、兎もすればあらぬ方へ駈け出すのがある。追ひかけて連れ歸らうとすれば、その間に幾つか人の知らぬ間に垣根を越えたのがある。頭が段々とぐらついて來る。次には結跏趺坐して白隱の所謂內觀の法をやつて見る。色香淸淨の軟酥丸大さ鴨卵の如くなるもの頂上に頓在すと觀ずる。之が溶けて流れて週身を周流し、雙脚を溫潤し、餘流積もり滿へて、わが臍輪以下を浴盤の中に蘸すが如くなるなら、積聚を消融し腸胃を調和しとも言はれやうが、坐りの惡い鴨の卵のやうなものかどうして頭の

上に事なく就つてゐさうぞ。動いたら落ちさうで、落ちたら破れさうで、氣が氣でない。心が臍下丹田に落ち着かずして、却つて頭の上に昇つて行く。次には不圖何かで讀んだ腕と磁氣の關係といふ事を憶ひ出して、俄に臥床の向を北枕にかへて見る。矢張り寢れぬ。骨牌を取り出して一人でペーシエンスを試みる。氣がいら〳〵するばかりである。最後にエマスンの文集を讀んで見る。何時も二十行ばかり讀めば、大抵眠くなる所を、今夜は意地惡くいくらでも讀める。讀めるだけで何を讀んでるのやら一向分らぬ。あゝでもなし、斯うでもなしと色々やつて見るが何うしても寢られぬ。今はもう何でもなれと不貞る。

忽ち我に返る。何故今まで何でもなれと、捨身にならなかつたらうか。全體おれは先刻から何をしてゐたのだ。

全體おれは何をしてゐるのだらう。眠らうとあせるのは活動であつて、努力であつて、主張ではないか。眠るといふは休止であつて、拋棄であつて、退讓ではないか。この互に相容れざるものを容れしめやうとして、おれは無益しく時を消した。眠らうとあせれば、あせる努力に頭が使はれる。頭が使はれる時腦に血が流れ行く。人間を胴中で縛つて宙に吊して、これに數學の問題を考へさせたら、見る〳〵うちに頭の方が下つて行く。考へる爲に血液が腦に向つて逆流するからだといふ。一時の間兎や角と眠る工夫を凝らしたのが、馬鹿々々しい。何で何でもなれといふ氣が出なかつたか。先づ活動を休止しやう。努力を拋棄しやう。而して一切の主張を退讓せしめやう。

燈火を消す。遠くで一番鷄が鳴く。

二、「おれ」

いや、おれが何をしてゐるかは、今夜ばかりの問題でない。全體おれは毎日何をしてゐるのだらうか。幾たびか斯く自ら尋ねて、幾たびか然かく自ら迷ふ。おれは何をしてゐるのだらうか。無用の活動と努力と主張とに、貴い時間を潰して居らぬだらうか、どうか。おれは何をして居る。おれは何をして居る。

斯く問はれて、禪門の古德のやうに、一事を作さずとも答へ得ない。さりとて兎した角したと明示し得る底の何物もない。朝から晩まで兀々と何かはしてゐるが、顧みれば一向何の取りとめもない事ばかり。生きんが爲に食ふか、食はんが爲に生きるかと問はれたら、兎もすれば、食はんが爲にと答へたくなる。よしや生きんが爲にと答へた所で、そんなら何をしやうが爲に生きんとするぞと問はれると、忽ちに行き詰まる。食つてゐる事は事實である。生きて居る事も事實である。生きて食つてゐるか、食つて生きて居るか、我ながら様子が分らぬ。夢死は知らず、酔生はたしかに今の我が身の上である。

おれは何をしてゐる。問題は見たほど簡單でない。おれが何をしてゐるかは、おれならぬ者が何をしてゐるかを見た上でなければ答へられぬ。若しおれならぬ者がおれと同じ事を日々夜夜にしてゐるならば、それはおれもおれならぬ者もしてゐる事であつて、おれがしてゐる事ではない。おしなべておれならぬ者のしてゐる事の外に、取り出でゝおれのみのしてゐる事といふべきものが有るだらうか。それが無いならば、結局、おれなどいふ者がない事になる。少くともおれはおれとして何もしてゐない事になる。おれが居ないといふのと、其處に何の變りがあらうか。

「おれ」とは何ぞや。そんな者が果してあるのかどうか。デカルトの Cogito, ergo sum では、少くとも今の自分の意味からいへば、寧ろ反對の結論にある。おれは思ふ、この故におれがある。併しおれならぬ者も思ふ、この故におれならぬ者もある。彼と我とその間に何の異なる所があらうか。おれは食ふ、おれは眠る、おれは飲む、おれは歩く。あり來りのなべての人の盡くすなる事を自分はくり返し〱して居るに過ぎぬ。假におれなる者は、名を何の何がしと稱へ、何年何月何日、何の處に生れ、今日まで四十餘年何がしくれがしの事をして、今現に某々の處に某々の勤をしてゐる者で、何等かの手腕があり、何等かの技能があり、何等かの志望と何等かの習慣とをもつてゐるおれであるとする。この特殊の一個人を假に某々の「おれ」として、是れ即ちおれだ、この一個人の外の者は、如何に似て居つても、おれでない、果然おれは此處に居る。と斯う思つて無理に「おれ」なるものを何十億の人間の中から選み出して見た。これがおれに相違ないと、強ひて自ら信じて、強ひて自ら慰めた事もある。併してのおれが果して何處に居る。

家に在つても、外に出でも「おれが〱」といふ思、喉元迄出て來るのを呼吸と共に、且つ呑み込み、且つ呑み込んで、更におれらしい者を表に出さぬのが世間でない乎。私には日々の勤がある。この勤の爲に朝から晩迄働いてゐる。この勤の何々であるかは今詳らかに語るに及ばぬ。色々の物を讀んで、色々の事を書いて、色々の人に接して、色々の口を利く。斯く舉げ來れば全く色々であるが、是を抽象して一言に約めて了へば、我を抑へるといふに過ぎぬ。兎もすれば出しやばりたがる「おれ」を隱して潜めて、何處までも「おれ」などいふ者の居ないやうに裝つて行くのが、一日の勤である。ノースクリッフ卿が米國人を嘲つて彼等に「平凡で居らるゝ天才」があると言つた。曰く「昔の米國人は互に相異なる個性をもつてゐた。今の米國人は何もかも一様である。オハヨー州のトレドに居ると、オレゴ

ン州のポートランドに居ると、何處に違つた所がある。米國の民九千萬人は、皆同じやうに頭を刈り、同じ朝飯を喰ひ、同じリボンで同じ形に娘の髮を結び、何でもかでも他人がする通りの事を行はんと勤めて居る樣、支那人に異ならぬ。思ふに米國人は多くの點に於て白色の支那人である」と斯う言つて居る。是が米國人許りを罵つたものと思つては自惚が過ぎる。

勢力ある大新聞の末班に列して居る身の、いつでも好いた事が書けるやうに、多くの人は思つてゐる。所が書けない。新聞紙には歴史がある。作法がある。この歴史と作法とを無視して、「おれ」が「おれ」の好いた事でも書いたら、「おれ」の破滅か、若くは新聞紙の破滅である。武士が主君の面目を思ふ時うかと刀は拔けぬ。そこに尊い所もあるが、又不自由もある。この不自由は新聞紙が大きければ大きいに隨つて加はる。何の氣なしに書いた事が、飛んでもない處へ思ひがけぬ迷惑をかける。僅かの人の讀む事とのみ思つて載せた事が、案外に擴がつて、かけ離れた遠い〳〵處から苦情が來る。日本人だけが讀むと思つてゐると、いつしか外國政府に迄知れてゐる。前年私が倫敦にゐた時、始終出入してゐた「タイムス」社の編輯部の中の出來事を冗談半分に一寸通信の端に書いた事がある。之が朝日新聞に出たのを、「ジャパン・タイムス」に譯載されて、その譯載された切拔を態々「タイムス」社の或人に送つて來た人があつた。之を「タイムス」の社内で見せられた時は私もぎよつとした。よもや斯な事が「タイムス」迄知れて來やうとは思はなかつた。これにつけても、うかとした事は書けぬと悔いた。

これが所謂末班に列して居る者だけにこの嘆があるのでない。黑岩周六君の如き德富蘇峯君の如き、自分で大きな新聞紙を持つてゐて自分で筆を執る以上、どんな事でも勝手次第に書けるやうに、他所目には見えるが、矢張り歴史と作法とは、この如き人をしてだに自由にはさせない。『自分の新聞だから、勝手な事が出來さうなものだが、中々さう思ふ通りに行かない』と、曾て德富君が某會の席で歎聲を洩した事がある。黑岩君にしても、社の內外の思惑も構はず勝手放題な事を書けば、社內で承知せぬか、世間で承知しない。社內の事情は何とでもなるとしても、世間が承知せぬとなると、新聞紙の勢力は全く廢つて了ふ。ヒレール・ベロックの言草ではないが、いくら勝手な事を書きたいと言つたとて、まさか羅馬法王がメソヂストになつたとか、眞鍮の錢が食つて滋養になるものとかは書けぬ。この兩君の如きですら、猶且「おれが〳〵」を押へるに相當の苦勞にはあるに觀ても、私なんどに「おれ」の存在をインスチチューションの中に沒却しなければならぬのは當然である。

自我を没して何處に生存の意義があるかと問はれたら、私は何とも答にたぢろく。今は只全力を擧げて一家十口を擁して行くに止まる。衣食の爲にのみ働いて居る者と罵られても、一言の辭がない。若る時に自分はつまらぬ男だなと、情なくも感じる。

何處かで、又犬が鳴く。

三、Emphatic Trifles——犬

今少し意義ある生活に立ち歸りたいと片時も思はぬ事はないが、衣食に追はるゝ身にはそれが全く叶はぬ。書く暇も欲しい、讀む暇も欲しい、せめて衣食を離れて考へる暇も欲しい。欲しい〳〵と始終煩悶してゐるばかり、更に埒が明かない。埒明かさる事此に正に四十年に及んでゐる。

衣食の爲にする無意義の勤と笑ふ者があるなら、姑らくその笑ふに任せる。衣食の爲にもせよ、無意義にもせよ、兎に角その勤が力一杯勤めらるゝならば、それでも其處に多大の滿足がある。この滿足がある限り、この生に或る種の意義が認められる。所が紛々たる浮世の些末な心勞は、この勤をだに心のまゝには果さしめない。エマスンは我等に訓へて曰ふ、時には世界を擧げて、汝に物々しげな些事(Emphatic trifles)を迫つて來る。友人ぢや、厄介者ぢや、子供ぢや、病氣ぢや、心配ぢや、貧乏ぢや、憂苦ぢや、此等が一時に汝の書齋の戸を叩いて、出て來い〳〵と言ふ。併し氣をつけて、うかとあのごたや〳〵した中へ出て行くな。人の氣を亂らせる力を持つのは、畢竟此の心弱い好奇心（Weak curiosity）が之を與へたに過ぎない」と。如何にも私は『心弱い好奇心』のお蔭で、『物々しげな些事』に引つ張り出されて、我と我身を苦めてゐる。馬鹿々々しいと思ひながら、あの『ごちや〳〵した中』へ出て行く。

いつかも斯ういふ事があつた。夕方勤先から家へ歸ると、妻が慌て氣味に出て來て、宅の犬が近所の子供を嚙んだといふ。やつと一日の勤を終つて家に歸れば、又してもこの惡用である。

この犬に就ては歷史がある。去年の暮我孫子で子犬を一疋貰つて、朝の九時何分かの汽車で大森の宅迄送り出した。遲くも黃昏には着く勘定でゐた。所が、其晩家に歸つても、まだ着いてゐない。直ぐ着く事とのみ思つたから、今朝犬箱の中には饂飩を二つ三つ入れてやつた切りである。この寒さに食物がなくては、飢寒の爲に死んでしまふかも知れぬ。小さな事ながら棄てておけなくなつて、急に大森驛へ電話をかけたり、上野驛の荷物係へ問ひ合せたが、皆目行方が知れない。更に大森にゐる鐵道院の某技師を電話に出て貰つて、何したものだらうと聞くと、上野驛の何某へ電話で賴むが宜いといふ。早速其官舍へかける

と、今しがた役所へ出たといふ。役所へかけると、たつた今歸つたといふ。仕方がないから、上野の驛長や大森の驛へ、引切なしに聞き合せてゐる中にやつと十時過になつて大森へ着いた。この小犬一つの爲にどれほど多くの人がどれほど時を潰されたか知れぬ。斯くてこの犬を育てゝ行く中、時々人に噛みつく。初は出入の紺屋に噛みついて傷をつけた。紺屋には相當の見舞金を送つて片はつけたが、萬一を慮つて、家内が獸醫の許へ連れて行つた。狂犬の疑はないが、心配なら豫防注射をしておけといふので、念の爲に二回注射を受けさせた。其のうち又二度も人に噛みついた。幸にして傷をつけなかつたから、事なくすんだが、今妻に聞くと、今度は近所の子供を噛んで血を出させたのだといふ。

人に噛んでは念が屆かぬと思つて、私は翌朝早くその子供の宅へ謝罪旁見舞に行つた。子供の母親が非常に心配して獸醫を招越したり、交番へ檢査を願ひ出たりした。宅でも母や妻は心配して、又もや獸醫に見せた。幸い先方は物の分つた人で、格別の難題も言はなかつたから宜いやうなものゝ、之が意地の惡い相手でもあつたら、どんな騷動になつたか知れない。その中、警視廳から二回迄も獸醫が見に來て、初めて狂犬でないと定つた。噛まれた子供の母はまだ心配して、其兄さんとかと獸醫とを連れて、氣の毒さうに又犬を見に來た。その獸醫は前に注射をして呉れた人だつたので、若し狂犬の疑があつたら、二回の注射に犬は斃れてゐたに相違ないと言つて呉れた。

これで愈事決了したと思つてゐると、突然大森町の警察から召喚状が着いて、何日何時、本人に出頭しろと言つて來た。大森々々とは一口に言ふが、所謂大森町と停車場附近の入新井村を總稱する大森との間には、大分隔たりがある。流石に私も閉口して長男を代理に遣はすと、品川警察から犬を繫留しておけとの命令であつた。そればかりのことならば、態々人を呼び立てずとも、一片の通知書で結構間に合ふ筈だと、子供心にも私の長男が不平を洩らすと、この命を傳へた巡査迄が大に同情して、全く態々呼び立てる程のことはないのですと笑つたさうだ。斯くて犬は命の通り縛つておいた。すると、縛つたなら縛つたといふ屆書を品川警察宛に出せといふ。仰のまゝに「當分の内繫留」云々の屆書を書いて出すと、「當分」ではいけぬから書き直せといふ。「改めて御命令ある迄」と書き改めて出したが、今に解放の命は來ない。警視廳へ出入する社の同僚を煩はして交渉して貰つたが、其結果警視廳の獸醫が來て見た丈で、繫留の事は其儘になつてゐる。晝夜縛つておいたのでは、犬を飼つてる甲斐もないが、夫は我慢するとても、縛り通しでは、運動

不足の爲に氣がふれて、狂犬ならぬ者迄が狂犬じみて來る。さりとて放しては危いとなると、可愛想だが殺すの外はない。いよ〳〵殺すとなれば、何して殺すか、是にも相當頭は惱ませられた。まさか自ら手を下して斬り殺す譯にも行くまいが、さりとて犬殺しに引き渡すのも可愛想だ。つまらぬ事を考へさせられるとは思ひながら、矢張り私が考へなければ誰も考へて與れる人はない。——犬一つが相應に考へさせる。

四、隣地

又斯ういふ事があつた。

私は十餘年前に大森に人の地所を借りて、さゝやかな住居を建てた。建てた當時は畑地の眞中で、富士も海も見える見晴らしの好い所であつたが、其のうち追々に四邊(あたり)に家が立ち圍んで來て、私の家は行き詰りの袋町の奥になつて了つた。若し入口の方から火事でも出たら、私の家には全く逃場がない。只僅に一本の細い畑道が、私の裏から里道に通ふやうになつてゐる切りである。然るにこの隣地の持主といふが、頗るやかましい百姓で、件の畑道を人が通ると、通る毎に畠を荒されるといふので、いつも地面一杯に畠を作つて道を塞がうとした。それにもかまはず、出入の御用聞などは、其畠の端を通つて作物を踏み荒すので、百姓は怒つて、到頭此處に嚴重な垣根を結つて了つた。

一體〳〵此處は昔からの習慣で、地主は双方で、一尺づゝ讓つて、計に二尺の小路を開けておくことになつて居る。私は之を言ひ立てゝ抗議を申立てたが、彼は頑として應じない。私も意地になつた。幸ひ彼が嚴重に結つた垣根の端が私の方の低塀へ釘付になつてゐて、之に荊や棘の小枝を隙間もなくおつかぶせてあつたので、私は正當の權利として、この釘付の所だけ打毀して垣根を取り拂つた。いくら嚴重に垣根を結んでおいても、其の端が開いてゐては何にもならぬ。御用聞は得たり賢しと皆此處から出入するやうになつた。さうすると、百姓は又百姓相應の智慧を運らして、今度は大きな糞桶を板塀と殆どすれ〳〵にどつかと据ゑた。人が通るだけの空地は苦情のないやうにちやんと殘してあるが、汚ないのと臭いのとで誰にも通れない。斯う喧嘩腰になつて來ては、今更後へ引けなくなつて、私は、住宅の側へ汚物を置いたといふ廉で交番に訴へ出た。所が百姓は交番から取拂命令に接すると同時に、しやうもあらうに、亂暴千萬な、右の糞桶を其場で叩き毀して、汚物を八方に散亂させたのである。斯くして後暫時は汚物の爲に往來も絶えたが、之が追々に乾いてなくなるに連れて、又御用聞の往來が始まつた。今度はどうするかと見て居ると、彼は毎朝御用聞の出入する時刻を見計つて、垣根の側に身を潜めてゐて、人が通り

かゝる毎に、突然飛び出して唯彼の別なく擲りつけた。朝早くからわい〳〵と双方で罵り合ふ聲で、私は幾たび見果てぬ夢を破られたか知れぬ。そのうち擲られた御用聞の中に利かぬ氣の男がゐて、之を交番に訴へ出た。其の結果はどうかといへば、全體通路でない他人の畑を踏み荒らすが惡いのだとて、あべこべに散々叱られた。

斯うなると私の方でも默つてゐる譯に行かぬ。此處が果して通路であるかないか、地境に一尺五寸宛讓り合ふのは昔からの慣例でないか、どうか。その調査方を交番の方にも、村役場の方にも交渉した。調査の結果如何と見てあれば、昔から地境に三尺の通路を開けるのは、百姓が便宜上にした丈の事で、住宅地となつてはそんな必要はない、隨つて此處は通路でも何でもないといふ事になつた。結局私の方は藪蛇になつて、百姓は凱歌を奏した。その癖私の家を建てる時、喧しく言つて私の方の板塀を一尺五寸後へ引かせたのは、この同じ百姓ヒムセルフである。嗚呼喧嘩は強い者が勝つに限らぬ、無教育無作法の者を我等は世の弱者とのみ考へてゐたが、今その過てるを知つた。弱者には弱者の強さがある。

この長い紛紜の間に、私は交番に行き、役場に行き、御用聞の苦情を聞き、百姓と談判を重ね、植木屋に垣根を毀させ、自分の方の地主にも隣地との交渉を頼み、巡査が來れば、一々出て行つて説明するなど、彼もし斯うもしやうと、隨分下らぬ事に身心を勞した。是が果しておれの天分に應じてすべき所をしてゐるのだらうかと、我ながら馬鹿臭くなつた事が、幾度あつたか知れない。

五、婚

犬も殺して了へ、家も賣つてしまへ。そんなものがあるからこそ、餘計な事に無用の心勞が出來るのだと言はるゝかも知れぬ。

好矣、犬も殺さう、家も賣らう。併しエマスンの擧げた友人や厄介者や子供や病氣はどうして呉れる。こんなものが入り代り立ち代り呼び出しに來る。馬鹿々々しいと知つて出て行く。浮世の馬鹿々々しさは果して犬と隣地の地主とだけだらうか。

世に最も馬鹿々々しからぬものといへば人は冠婚葬祭を擧げる。これが人間一生の大事と迄公認された最も眞面目なものとしてある。あれが全體何です。

相愛する所の男女が相愛の極致に到つて、肉と肉と相許すといふは、自然の美しい順序である。互に愛するの情が募りに募つて、言葉にも表はされず、筆にも盡し難くなるに至つた時、

靈と肉と併せて捧げて、是を我が愛する者に致すといふは、如何さま人間一生の大事である。この意味を以てして結婚を人間一生の大事といふなら、如何にも聞えた。所が、世間の多くの人はこの美しい自然の順序を更に人間の大事と心得てゐない。且つ愛し且つ合するを日常の茶飯と心得てゐると同時に、且つ合し且つ別るゝを、小賣商人が通りがゝりの客に對する取引よりもあつさりしたものに見做してゐる。われらは新婚の夫婦の寫眞を新聞紙に見る毎に、いつも噴き出したくなる。謂ふ所の新婚なるものが、果して文字通り新婚なりや否や。若し清淨無垢たるを以ての故に花に喩ふるとせんに、世に花嫁の數は乏しからざらんも、眞に花婿たり得る者が幾人あるだらうか。幾たびか愛を賣り、幾たびか肉を與へた後でも、或る特殊の儀式の前では、新婚の名の下に花嫁となり、花婿と稱へられて、兩個の醜面皮を新聞紙上に曝すのが常だ。

然り。今日の結婚は美しい自然の順序に非ずして、人間の作つた戸籍法上の一手續たるに過ぎない。愛する愛せぬといふが如き閑問題は眼中にない。人間年頃になれば結婚すべきものと初手から定めてかゝる。兩親や兄弟や友人がやい〳〵と人の世話を燒いて、ひたすら相手を探すに焦燥する。やがてどうにか斯うにか似合の二人をくつつけて、之を夫婦の名に合せる。合せて後初めて二人の間に夫婦の關係が出來、正式に關係したことになる。時に或は頭二人の間にそんなものゝ出來ずに了ふ事もあるが、それには不運と双方で諦めて了ふ。偶々斯ういふ手續を經ずして、同棲する者が膝下に合すれば、世間は一言にして野合とけなす。野合の徒が俗に倣うて一々其々の式を擧げずにする〳〵になつて了へば、友人眷族は、左ながら泥棒でもして來たものゝやうに陰口を叩く。相愛する者の斯くして合したのは、手續が不備ただけで、相愛せざる者が只儀禮をのみ整ふるのは、手續こそ備はつて、實質は全く無意義である事を誰も認めぬ。

いづれにしても結婚といふは男女二人の間の私の出來事である。國家が之に或る手續を要求するのは、子供の戸籍、財産の處理等國家に交渉する所があるからに止る。結婚自身は何處迄もプライベートなものである。其の證據には、子供や財産の事に無頓着な者は現に國家の要求する手續を履行せずして、事實上の結婚を行つてゐる。

儀式が要るなら、儀式も宜からう。只私の事は私に行へ。世間を騒がせるには及ばぬ話である。二人きりでやれば媒酌はいらぬ。それで物足らぬとあらば、近親と親しい友人だけの間で事は足りる。無關係のえらい人を名義上の仲人に頼んで來て、平生は格別の交際もない人々を大勢寄せ集めて來て[illegible]

のきまり悪げな男女を衆人に見せびらかすの必要が何處に在る。

凡そ結婚披露の案内は、正しく白羽の矢である。行けやうが行かれまいが、相當祝ひの品を送つてやらねばならぬ。差支のない限りは席に列らなければならぬ。時には夫婦で來いとあつて、平生出慣れぬ家内は俄に大騷ぎをしなければならぬ。さて儀式に列して見ると、三年もたゝぬ内に必ず夫婦喧嘩をするに定つた奴が、幾千代かけてどうやらして、友白髮が何とか來やかる。今日迄にさんざ可笑しな女を相手にして來た男が、一廉新婚の花婿とすましてゐやがる。目出たいか目出たくないか、それは十年も連れ添つて見た上でなければ分らぬ事を、無暗に側から目出たがつてしまやがる。時には花嫁が非常に美しい若い女であつて、顧みてわが愛する古女房の色香の衰へ行くに思ひ及ぶ時、あんまり宜い心持のするものでない。

やがて式が果てゝ宴會となると、之が日本風であれば、この婚禮披露の宴會に限つて、平生餘まり同席したことのない老若男女が變な具合に顏を合はせることゝて、藝妓も客人もいやにとりすましてゐて、頓と座が冴えない。老妓が鶴亀か何かを一さし舞ふ。花嫁が着替に立つ。知らぬ人同志がちびり／＼と酒を酌む。片時も早く坐を滑つて何處かで陽氣に飲み直したくなる。

若し又この宴會が西洋風であると、仲人が挨拶に立つて長々と新夫婦の徳を頌した後、「どうか互に末永く」とか何とかいふ。仲人自身が三度も女房を取りかへて、近頃又新しい若いのを物した人でも何でも構はぬ。この挨拶に次いで新夫婦が恥かしげに一同に挨拶する。同じやうに恥かしげではあるが、花嫁と花婿と恥しがる意味が互ひに違つてゐる。が併しこの上立ち入つては言ふまい。

又しても眼が冴えて來る。

六、葬

葬儀が人騷がせな事は婚禮にまさる。婚禮はまだしも晴れやかな事であるが、葬儀に至つては哀しい打ち沈んだ事である。この打ち沈んだ事を大びらに吹聽してまはつて、いはゞ其哀みを頒つやうな事に何の意義があるだらうか。

私は豫てより葬儀に關して斯う考へてゐる。凡そ葬儀に於て最も重んずべきは死者の意を尊重するに在る。われらと齊しく生をこの人間界に享けて來た者が、その最後に希望し要求する所のものは、萬障を排して、其の思を叶へて得さすといふが、生き殘つた親近の者の第一の心掛でなければならぬ。是は人間の神聖なる勤の一たるを失はぬ。死人に口なし、死人は其の意に反する事をせられても、言ひ爭ふ事の出來ぬ弱者である。斯

う[illegible]は最も常識に[illegible]ならぬ。この意味を以てこそ、乃木將軍の遺志に背いて、その一たび絶えた價値を再興したるが如きは、言語道斷の不埒と私は見てゐる。

この故に死者の意が初から言明されてゐる場合は言ふにも及ばず、たとひそれが言明されてゐないにした所が、死者の平生から推して、大凡そ斯らいふのが、彼の本意だらうと見當のつく所があるなら、矢張り是に遵ふのが至當である。一言にして盡せば、死者の意に遵ふといふが、葬儀の第一義であると私は考へる。

然らば、假に私が死んだとして、私はどうして貰ひたいかと問はる、ならば、私は言下に無葬主義を取ると答へる。私は生をこそ大事と考へて居れ、死をそれほどの大事とは考へてゐない。少くともわれらの住する此の世から觀て、人間に生れて來る事と、生きて居る事とは、各般の關係に於て、正に一大事である。併し死はあの世の大事かも知れぬが、この世に取つては幕の下りた芝居たるに過ぎぬ。私に役々を勤め終つた役者が、幕の下りると同時に、こそ〱と樂屋に歸り行く心持で、こそ〱と葬られたいのである。無葬と言つても私の死骸を何時迄も打捨てておけといふのではない。土葬可なり火葬も亦よし。水葬などは最も妙である。只之を極めて近しい間の者だけで執り行つて、[illegible]初めて、私の死んだ事とその儀式の濟んだ事とを公表したり新聞紙の廣告なりで、廣く人に知らせて貰ひたい。これで止しい。斯うすれば世間が通夜や告別式や葬列などに、人を煩はすことはない。私はさう思つてゐる。

けれども世間はこれで行かない。人が死んだとなると必ず其の通知を知らぬ隈もなく出す。死者と殆ど相知らざる中でもあらうが、何だらうが、構はぬ。死者の屬してゐた倶樂部の名義か、又は多年人任せにして、廣告十分にそこら中に出してゐた新年賀状の原簿か何かを元に、出せる限りの通知を滅茶苦茶に出す。出された者は默つて居れぬから、弔問に行くか、弔詞を送る。親疎の如何によつては供物もしなければならぬ。葬列にも加はらなければならぬ。その又葬列なる者が生花造花放鳥の數を列べ一線つて行く。折ふし葬場が少し近過ぎるとなると、どうです、遠い〱廻り道をして、練り歩くことさへある。葬に列する者の中には、げら〱と笑ひながら居いて行く者もある。行ふ者も形式なら、從ふ者も形式である。形式だけなら簡略すべし、中には葬儀を廣告に使ふ賢い人もある。

幸にして近時は葬列廢止といふが大分行はれる。葬列は廢されても、葬儀は依然として無意義な形式のまゝに行はれて居

る。讀む者にも聽く者にも譯の分らぬ讀經がある。此間に最も原始的な銅鑼鐃鉢なんどの音樂が交る。最後に一同燒香とある。このお經を讀んだからとて、地獄に行きかけた亡者が、廻れ右をして極樂へ向ふ事になる譯のものでない事は、誰も彼も皆承知してゐる。それを承知で、長い間眞面目くさつた顏して、殊勝氣に聽いてゐる會葬者の腹の中では、そも〳〵何を考へ何を思つてゐるのだらうか、聞いて見たい。眞個に死者に向つて敬虔なる默禱を捧げてゐる者が幾人あらう。

私が若し美術家であつても、あのなよ〳〵したおちつきのない竹の臺の展覽會場へ自作を出展する氣にはなれぬが、私は死んでも、あの薄つぺらな燈明りの強い青山齋場で葬儀を行つて貰ふ氣にはなれない。さりとて米國の殖民地時代に出來たやうな、ペンキ塗りのさば〳〵した教會堂では尚以ていやである。況んや此處へ、女には持てさうもない瘦せこけた小洋和の男が出て來て、勿體らしく聖書を朗讀し、さては作り聲して、左ながら聖者の死の如く死者の德を頌し、又斯ういふ時ならではと人の退屈もかまはず長々しい說教などされてはいよ〳〵堪らぬ。こんなおちつきのない――戸外に待ち合す車夫の高聲が筒拔けに敎堂に聞ゆるやうな――處へ人を集めて、おちついた心持で死者に對する最後の敬意を捧げしめやうとするのは、東最初から無理だ。宜なり、式を行ふ者も作られて居れば、これに列する者も半ばは作られて居る。若しすべての葬儀に會葬者の名刺受附所がなかつたら、恐らく今までの半分も三分一も人は集るまい。列する者の心は大半緣者に對する義理たるに過ぎぬ。だから名刺をおいた儘で歸る人もあれば、書生に名刺を持たせてやつてすましてゐる人もある。左あらぬ限りのものも、燒香がすめば、讀經がまだ續いてゐやうが居まいが、どん〳〵歸つて行く。片方でも又それを承知で、儀式が始まるか始まらぬ中に、早くも親類緣者が門口に立ち列んで、會葬者の歸るを見送る。始より終に至るまで、形ならざるはない。

嘗て某名士の葬儀に列した。前年この人の養母の葬式には、車馬幾千臺、供花幾百對、希に見るの盛儀であつたが、當の名士自身の葬儀には會葬者の數が前の半分にも過ぎない。其の母の葬に會して、件の名士の一顧を得んことを希へる浮薄なる人情は、名士が死んではもう葬に會するの用がなくなつたのである。怪しむこと勿れ、葬儀を營む者の側には世間體一方の葬儀である以上、葬儀に列する者の側には義理一片の葬儀たること、深く穿鑿するを須ゐぬ。

われらは人の死に際して、丁重に最後の敬禮をこれに致したい。同時に平生ともすれば忘れんとする生死に關する省察の機

會を斯ういふ時に求めたい。但しそれは今日の如き時世に於て今日の如きの人と相集つたのでは、決して得られぬ。厳粛なる會堂と、厳粛なる會衆が欲しい。今日の如くんば、人生最も厳粛なるべき葬儀が多く滑稽に終る。シルクハット厳めしい自動車上の會葬者、其名を聞へば、内閣總理大臣公爵曾我廼家五九郎といふ。名刺受附には何と届けてあらうとも。

七、送迎

停車場の送迎なるものが。その馬鹿々々しい事に於て、これに次ぐ。朝の八時半か、夜の七時八時十一時の急行列車の出る前、東京驛迄行つて見ると、歩廊は見送人で身動きもならぬ。何處へ行く人を送るのかと聞けば、近きは京大阪、遠くは朝鮮臺灣位、それが左ながら南極探險にでも出掛けるやうな仰山な見送り方である。友情が厚いのか、ヒマ人が多いのか、兎に角日本人の見送り出迎への仰々しさは、支那を除けば、世界一だ。

僅に日本國内にうごめき廻るだけでさへ、これ位である。海外旅行とでもなると、その大袈裟な事は正に言語道斷である。先づ海外旅行と事が定まれば、二月も前から殆ど全く仕事を休んで準備にかゝる。買物に駈ける、暇乞にまはる。送別では飲み留別では飲む。いよ／＼出發の當日になると、前以て事々しく通知しておいた友人知己にぞろ／＼と見送られて出かける。汽船の時はこのぞろ／＼した友人連が一所に波止場に下つて、本船出帆時刻の餘程と前から、待合なるものに陣取つて、此處で忙しさうに而かも悠々と飯を食ひ酒を飲む。いよ／＼本船に乗り移る時、この又ぞろ／＼連が何處迄もと尾いて行く。尾いて行つて何をするかと見てあれば、物珍しげに上下の甲板を駈け廻つたり、無遠慮に人の船室を覗き込んだり、又は細い廊下に大勢立ち列んで、乗客や船員の通路を塞いで、以て見送人の能事了れりとしてゐる。

何故にわれらは然かく旅行を億劫がつて、其の送迎に然かく騒ぎ立てるであらうか。思ふに、今の多くの日本人は、この點に於て時代錯誤に陥いつてゐるのであるまいか。彼等は、東海道五十三驛に十日も二十日も費した頃、道中に雲助胡麻の灰の類が充ち満ちて、所持の金子は胴巻の中に入れて、しつかり肌身につけておかなければならなかつた頃、旅は憂いものつらいものとした頃、人を見たら泥坊と思へと教へられた頃、百餘里の旅にも水杯をして出た頃を思ひ出して、今も尚旅とはそんなものかと思つてゐるのであるまいか。汽車の中に倶樂部があり、浴場があり、斬髪が出來、着物の火熨が出來、食ふには珍味に事欠かず、睡るには悠々と四肢を伸ばして寝れる今日、

汽船には、陸上の大ホテル以上の設備があつて、海氣の爽涼な中を氣兼のない乗合と、屈託のない幾日を送り得る今日、旅といへば、ゆつたりと身心併せ休め得るものと知らずして、若くは知りながら思ひ誤つて、今尚旅とはつらいものゝやうに考へて居るらしい。考へて居るだけならよいが、往々旅から歸つた相當の身分の人々に向つてさへ、長途のお疲れなど挨拶する。長途の疲などは今日てくてく歩くものにこそ言はめ、身分ある人などに向つて云々するは、無禮至極である。斯ういふ人には旅が長ければ長いほど寧ろ身の休まるものと知らぬか。

斯ういふ旅行の樂々と出來る世の中に、僅かな旅に立つとてあの仰々しい見送りは何事だらう。私が前年米國公使館に勤務中公使は一兩度本國に歸つたが、いよ〳〵米國に立つといふ前日迄ちやんと役所に勤務して、歸つた時は歸つた翌日からちやんと出勤してゐた。この公使が日本で死んだ時その遺骸を本國迄護送して行つた某陸軍武官は、出發の一兩日前に命令を受けて急に出發したのだつたが、遺骸を送り付けると、殆ど一日も油を賣るに及ばずして、直に歸任の途に就いた。私は彼が旅費の計算役に當つた爲、ホテルの勘定書を調べて見て初めて其の然るを知つた。擧げ來れば斯ういふ例はいくらでもある。斯く身輕に且つ往き且つ還る事が出來て初めて「雄飛」とやらんも出來る。日本人の所謂「海外雄飛」は、按ずるに、日本製の飛行機にでも乗つて僅々百里の旅に二度も三度も着陸して恥とせぬ底の雄飛だらう。雄飛が呆れざるを得ない。おゝのろのろする者よ、汝の名は雄飛なりとでも言つておくか。

私は平生勉めて葬儀にも列するが、又勉めて停車場の送迎もする事にしてある。出嫌ひの人の多い今日、斯ういふ折には、送迎さるゝ本人を中心として、異種類の知人が集つて、かたがた久濶の情を敍するに頗る都合が宜い。停車場の送迎は一種のフローチング・クラブであつて、倶樂部の發達せざる日本には甚有用なる一個の社交機關となつてゐる。併しそれにはそれで程度がある。あの仰々しさには及ばぬ。大官の旅行とでもなれば、小役人迄が擧げて出て行く。汽車ならば沿道の小役人までが出て來る。送らるゝ人に聞いて見ると、夜半に起されたりなんかして、隨分迷惑なと言つてゐる。そんなら知らぬ顏で寢て居ればよささうなものだが、起きて出ぬと、又何のかのと言はるゝがうるさいといふ。その時間を空費し能率を減殺し、おまけに相互を迷惑せしむること幾何なるかを知らぬ。

私の知つた人に、如何なる婚禮にも、招かるゝ限りは必ず列し、如何なる縁遠い人の葬儀にも、それと知つたら必ず列し、如何なる人の出發にも歸着にも、事情の許す限りは必ず送迎に

出かける者がある。彼等これが爲に毎日殆ど仕事も何も出來ない位忙しいといふ。如何さま忙しいに相違あるまい。併し彼は何處へ行つても、如才のない、よく出來た人で通つてゐる。家に歸つては女房や子供を窘めてばかりゐる人たる事を世間は知らない。

雞が又啼いてゐる。曉近い寒さがぞく／＼と身にしみる。

七、虛名の重誅

それらは世にありがちの馬鹿／＼しさとも見やう。私には又私だけの人知れぬ馬鹿／＼しさがある。假に名けて之を虛名の重課といふ。謂ふ心はなまじひ僅かばかり人に名を知られた許りに、分外に重く課せらるゝさま／＼の負擔である。

見も知らぬ人から手紙を寄越す。言つて來ることは大抵定つてある。先づ御高名は云々とあつて、會ひたいとか手紙を呉れとかいふ。中には何か書いて呉れといふのがある、之は幸にして字も碌に書けぬ私に取つて誠に斷り易い。又中には金を貸せの、呉れのといふのもある。之も金のない私には斷り易い。又は何々の會に入れの、何とかに祝辭をよこせのといふのもある。私の書いたものに分らぬ事があるとて質問が來る。私の文を何やらに拔きたいから承諾しろと來る。序文を書け、原稿を書け、ここに何々しろ、今何の定紋がおれと同じだから、紋服を着たお前の顏を見に、私はお前と同じ郡に生れた者だから、學校の保證人に立つて呉れ、それ〳〵色々ある、ここまでいふと言つては相すまぬかも知れぬが、正直なところ時には全くうるさい。

同國の緣をたよつて尋ねて來た者に、今まで殆んど碌なのがない。知友先輩に見限られて、彼方でも此方でも鼻をついた揚句、せうことなしに見ず知らずの同國人を尋ねて來るのが多い。殊にこれが商人となると、大抵は喰はせ者である。この前も國の者だとて洋服屋が來た。何か注文して呉れといふ。洋服の拵が上手だとか、値が安いとか、何か他に立ち勝つて誇るに足るべき點があるなら、何も同國を言ひ立てなくても、注文は取れる筈、同國だからとて、下手な洋服に高い金を拂ふ因緣はない。私は一言の下に斥けた。果して彼はひどい喰はせ者であつた。人間誰としてか故鄕に對してなつかしみを感ぜざらんや。外國にゐては「日本」の名を聞いてさへ心の時めくを覺える。全く人の至情である。之を商賣に利用して、このなつかしさを幾分でも殺がうとするのは、鄕國に對する罪惡と私は見る。少し擴充して言へば、無暗に國、國と國ぶつて見せるのは、究竟は愛國心の賊だ。

人の文を引用したいとて、わざ／＼著者に斷つて來るのは、

有り難い心掛である。さういふ行き屆いた人は、不幸にして甚少い。大抵は默つてすませて了ふ。それでも又太した差支はない。只此に見逃し難いのは彼の所謂教科書製造人の徒である。讀本に他人の文章を取るのは、著作權法の見認むる所であるのを幸ひ、彼等は勝手に採つて、膿んだものが潰れたとも言はない。それはまだ宜し、甚しきは縱まゝに改竄し添削し、標題をつけ直し、切るべからざる所を切り、加ふべからざる言葉を加へる。教科書に採用さるゝといふは、一種の光榮と存じて誰も默つてはゐるものゝ、實は誰も迷惑してゐる。何時かも私の書いたものゝ中に一二意味の解せぬ所があつて、教師用の註解書を作るのに困るとて、意味の聞き合せに來た出版業者があつた。私は一々之に註解を加へて、わざ〳〵其の出所や引例迄調べて返事してやつたに、禮一つ言はぬ。後に至つて其の教科書を見ると、其所私の教へてやつた語句は、ちやんと別の言葉に書き改めてある。如何ともし難い。これは私一人の迷惑でもないと思つて、一日文部次官迄何とか勘辨があるまいかと聞き合せたところ、國定教科書にでもあることなら責任は負ふが、民間で作つたものには取締の法がないとの事であつた。改竄といふ位では著作權法違反で訴へる譯にも行かぬから、其まゝになつてゐる。不行屆な者の行爲の爲に良民が迷惑を感じてゐる時、之を救濟するの法がないといふは、正しく法律の不備である。仕方がないとて棄てゝおくべき事かどうか、大方の教を乞ひたい。

私はどんな見知らぬ人の手紙に對しても必ず返事は出す。言はうといへば、都合のつく限り會ふ事に定めてある。併し言ひ寄る時はいくら熱心でも、戀が叶へば其まゝ忘れて了ふ者の多いと同じく、人を御高名扱ひにして、さて一二度逢ふか手紙のとりやりをすれば、大抵はもうそれ切りになる。人惡が世にも程があると、いま〳〵しくもなる。或る書物の中に、「筆で名を知られた者は滅多に人に逢ふな」と書いてある。書いた物には如何につまらぬ物でも、其の人の全力を擧げて其の人の最上の部分が出てゐるが、面と向つて逢へば、其の人の最惡の部分も容赦なく出て來るといふのである。さうすると、新聞記者などは漫に人に逢ふべきものでないのかとも思つてゐる。ダイアモンドだつて或る定つた角度から見た時にのみ燦爛なる光が見える。どう向けても光るものではない。況んや猫眼石位のどんよりした、有るか無きかの光はよく〳〵ためつすかめつした上で僅に偶に見つかるに過ぎぬ。之を見つけて後、いつそ手に取つて見たらばと思ふのは慾のぼけ損ひだ。明かに斷つておきますが、我輩は猫眼石である！

八、宴會

眞名の重點、その最も重きものを算へて、二つを得た。宴會と講演とである。

宴會も打ち解けてしんみりと語り合ふか、氣兼のいらぬ中で、勝手な事を言ひ交はして笑ひ興じられる限のものはよいが、見知らぬ人から、高說拜聽旁晩餐差上度などの案內が來たのは、行つて見ると、必ず主人が横の方で藝妓を相手に飲んでゐて、客は客で主人を餘所に飲んでゐる。高說なんどは初から聽く氣もなければ聽かせる考の者もない。只斯ういふ名目の下に他人同志が藝妓を中にして飲むだけである。實際日本の宴會には、藝妓が居ねば市が榮えず、居れば談は丸で出來ない。其處で近頃は本氣に眞面目な談でもしやうといふ時、大分洋食になつたが、この又洋食がそも〳〵氣になる。

洋食では御馳走になつた氣がせぬといふ人が大分ある。腰をかけて喰ふ爲か、ナイフや肉叉（フオーク）を使ふ加減か、洋食では何やらおちつかぬ。何となく其處にそぐはぬ所があつて、一堂渾然として融け合ふ趣がない。これが西洋であつて見ると、今日を晴れと着飾つた男女が香めでたき花鉢を据ゑた卓子を取り圍んで、妙なる音樂を聞きながら、室內のフロント露はに燕尾服りりしく着做した給仕に侍かれて、大食堂の中に杯を擧ぐる時、其處に洋食の味が出て、其處に洋酒の色が浮んで來る。凡そ宴に味ふ所は必ずしも食事でも飲料でもない。たゞこの調ひ渡る一堂の氣分が味ふべき樂しさである。この氣分は、主人の骨折にも依ること勿論だが、客にも主人と意氣込のしつくり合つた所があつて、初めて出て來る。同時に客の取り合せや、裝飾や、服裝や、作法や、言葉や、給仕や色々のものがちやんと調和して、此に宴會の興は湧いて來る。若し夫れ區々の服裝をした者が無作法に居列んで、料理も出て來ぬ中から麵麭ばかりむしやむしや喰べたり、無遠慮に手を伸ばして人の前に在る鹽を取りに來たり、魚肉用のナイフで宜い氣になつて牛肉をつゝいたり、アイスクリームが出かけた頃に長々しい演說を始めたり、客が隣同志でも口を利かなかつたりしたのでは、銘々勝手に飲み且つ食ふだけで、宴會とは言ひながら、入込の料理屋の座敷に、見ず知らずの他人が個々別々に行き合はせたやうなものである。殊に給仕人に依つては、客が洋食の作法を知らぬと見ると、忽ち足元を見て取つて、ぞんざい極まる給仕の仕方をして見せる。如何な御馳走でも興が忽然としてさめる。渾然たる調和などいふものが、何處に求めて得られやう。これでは全くお茶の席に主客がヒブルー語で挨拶してゐるやうなものだ。御馳走になつてもなつた氣のせぬのもさら〳〵無理とは思へぬ。金がかゝつ

す、手間は取らず、末遂に亂るゝ事がないからとて洋食が流行り出したらしいが、そんな事は日本の宴會の末遂に亂るゝ所に日本特殊の趣があるのを解せぬ輩の言ふ事ある。宴會とは場處と人と融け合ひ人と人と融け合ふ所に其の意義がある。食はかゝらぬかも知れぬが、手間は取らず、末が亂れぬと言ふは、融け合ふ融け合はぬよりも、食ふだけの物を食はせて一時も早く追ひ立てやうとする會主の腹が見え透く。斯ういふ處に飲食會はあるかも知れぬが、宴會に至つては斷じて存在して居らぬ。宴會とは物を食はせる許りの會と思つて與れては困る。

宴會とはたゞ飲み食ひさせるだけのものでない。宴會に味ふべき所は調和である。融合である。之を亡みして宴會が成り立たうか。嘗て私の親しい某代議士が選擧區から上つて來た人を新橋の某旗亭に招いで宴を張つたことがある。私も陪賓として招かれた。所がこの日の主賓は新橋の藝妓の名たゝる無性者たるを知らぬから、藝妓が座に着くが早いか、何を彈け彼を歌へと、頻に迫る。女は新橋式に笑つてゐて相手にしない。氣短かな彼は腹を立てゝ、田舍風の端唄を謡ふ。到頭藝妓は怒つて歸つて了つた。これでは折角の御馳走も御馳走にならぬ。お互に面白からぬ思をして別れた。調和の取れぬ宴會ほどつまらないものはない。併し之と同じ不調和は反對にわれらが地方へ出かけた時に起る。

地方の宴會といへば、今に昔風の日本風が多い。先づ上座に恭しく据ゑられる。上客がぽつねんと坐つても、外の客は席次を譲り合つて中々坐らぬ。やい〳〵と腹にもない押問答にやゝ暫く時を消す。やがて坐が定まると、見渡す所、お客も藝妓も見知らぬ人許りである。主人側の代表者が立つて挨拶をする。本人を前において、盛にその學德とやら德望とやらをたゝへる。聞いてゐる本人は消えも入りたくなる。次で本人が遙か末坐まで下つて答辭を述べる。その次手に演説を求められる事もある。この間に吸物の冷め行く事は申すも愚かや、藝妓は皆手持不沙汰に銚子を持つたまゝ控へてゐる。不經濟も甚しい。やつと此等がすんで、上客が席に復して、いざや冷めはてた吸物でも頂戴しやうとすると、何時の間にか八方から人が集つて來て、盛に杯をもちかける。藝妓が側に居て酌をするなら、氣を利かして、半分もつがぬが、鹿爪らしい顏をして上座に收つた見ず知らずの客の前へ、どうして田舍の藝妓が寄りついて來やう。酌といへば擬く杯を持つて來た男が手づからするので、これが毒性になみ〳〵と汲がなければ承知せぬ。さしつめ引きつめ惡酒（大抵は惡酒だ）をあほつて相手になつて居れば、如何な御馳走が列べられてあつても、箸を下す暇はない。この頃にしも

列み居る一同にと見てあれば、銘々別嬪の女を引きつけてふざけてゐる。そろ／＼高聲で歌ひ出す者もある。主賓などはもう眼中にない。恐らくこの中にはおれの歡迎會を口實にして、細君の手前を繕つて來た者もあるに相違なし。その中主賓の兩側の客も追々に立つて出稼ぎに行く。上客一人だけが取り殘される。此處で又切り上げて歸る時刻が頗る頭を惱まさるゝ問題となる。早過ぎては不本意に思はれる、ぐづ／＼してゐては氣が利かぬと笑はるゝ。東京なら、然るべき頃に飯が出るが、田舍では滅多に出ない。やつと、然るべき所を見つけて、宿に歸ると、何一つ喰はずに惡酒ばかりを飲ませられた身は、どうしても食事の仕直しがしたくなる。何の爲の歡迎の宴であつたのか、見當がつかない。私は昔米國の某大官と東京から長崎迄行つたことがあるが、名古屋大阪神戸岡山下ノ關門司と、到る所連日連夜の歡迎會に疲れ切つて、歡迎會の案内が來る毎に、件の大官は、『ゼ・セーム・オールド・シング』(又か)と言つて、顏を蹙めた。

全く顏が蹙む。

十、講演

講演も講演だけなら太した事はないが、地方の講演となると、之に附隨して種々の時間つぶしが起る。何日何時某々の地に於て講演と事が極れば、必ずその到着の時刻を問ひ合せよと言つて來る。知らせると大勢がやゝ／＼と停車場に迎へに來てゐる。[illegible]知らせずに居ても、大抵時刻を見計つて迎へに來る。銘々何の某と名乗り合つて、名刺を一人一人呉れる。無論どの名刺がどの人のか即刻忘れてしまふ。停車場を出れば車の用意が出來てゐて、豫て定めておいた旅館へ否應なしに引つ張り行く。座敷に通れば、土地の有志がそれからそれへとやつて來て、月並な問答を交はす。宿に着いた以上は一人でくつろぎたいと思つても、決して許されぬ。先生お風呂はいかゞですといふ。先生御飯はいかゞですといふ。入りたい時に自由に入り、喰べたい時に勝手に喰べる位の判斷力はおれにもある。やい／＼言つて下さるなと言ひたくなる。風呂に入れば、其の間に皆が歸るだらうと思つてゐると、歸らぬ。食事が始れば引き下るだらうと思つてゐると、先生私共も御相伴をいたしますとて、何やらん宿の番頭へ命じて居る。飯は一人こそ宜けれ、初對面の人と互に敬語を使ひ合ひながら一所に喰べて旨からうか。講演の時刻になると、又ぞろ／＼と迎の人が來る。連れられて會場に至れば、先づ應接の室に通されて茶が出る、菓子が出る、例の月並な問答が始まる。講演終れば、茶話會があつて、又餘分に一席の説を強ひられ、これで放免かと思つてゐると、其夜何々亭で歡迎

の宴會がある。而して例によつて田舍藝妓と惡酒とに惱ませられる。時としては更に二次會に引つ張られる。夜ふけて宿に歸れば、人の睡たいのも構はず、見送の二三人がついて來て、悠長に尻をおちつけて何やら彼やら何時迄でも話してゐる。さて翌朝此處を立たうとする間際になつて、宿屋や其他から、越後なら梨子、山形なら林檎といつたやうな滅法界嵩の高い土産物を下さる。このお土産の爲に乘替驛毎に赤帽を雇ふ、電車に乘れぬから車を雇ふ、兎角して丁度土産物を買ふほどの金がかゝる。

宿の一室で只一人樂々と脚踏み延ばして、休まうとして居ると、人が來て、誰やらに逢つてやれといふ、何やら書けといふ、一寸で宜いから何處やらで話して吳れといふ。又は見せたいものがあるから、一所に來て吳れといふ。少しもぢつとさせては吳れぬ。而してこの見せたいものといふが、大抵は見たくも何ともないものである。田舍の人の世間を見ること頗る狹うして、少し珍しいものといへば、何でも我が土地より外にないものと思つてゐる。越後へ行けば、直ぐ自慢の美人を云々する。交通の開けた今日、都を集ひ寄る一世の傾向から、美人は新橋柳橋に於も多く集つてゐることを知らない。越女一笑云々の支那の昔の越の國の女の事を詠んだ詩の文句を、そのまゝ越後の女と解して吹聽する。信濃へ行けば天龍峽がどうの、內山峽が斯うのと自慢する。紀州の熊野の瀞峽がもつと雄大であつて、米國到る所に存する何々ケニオンが更に怪奇を極めてゐることを知らない。越後の瀬波溫泉では、こんなに溫泉の高く噴き上る所は世界中に又とないとの話であつた。米國のヤローストーンパークには、こんなのが二十本も三十本もあると言はうと思つたが、折角の興を殺ぐと思つてやめた。いつか某縣の某市に行つた時、北市に近い某町の役場から、態々助役と書記とが迎へに來て是非見せたいものがあるといつて來た。行つて見ると大きな料理屋へ連れこまれて御馳走が出た。見せたいものとはと促せば、今御案內をするとて、町長以下車を連ねて行つたのは、平凡な海岸の松原であつた。見物も結構だが、惡くすると、山國の人の足に任せて駈け登る山阪を尾いて行かなければならぬ事もある。又酒には强い雪國の人の相手になつて無理にも杯を取らせらるゝ事がある。尤もこれらは孰れも講演の勞を慰めんとする好意の餘興であつて、遠來の珍客を何もさせずに、宿屋に只一人すてゝ置くなどは以ての外の失禮と心得られてゐればこそ、斯くはつけつまはしつ客に寸暇を與へぬのである。斯う思へば苦情などは冥加に盡きる次第であるが、併しすて置くのが果して失禮かどうか。それを一應點檢したい。

日本では動もすれば、干渉々々と政府を攻撃するが、元來日本人自身が干渉好きでゐる。何かなしに容喙し口をきゝたがり、出でもの所に出しやばりたがるのが、邦人の常だ。人が革鞄をもつて歩けば、屹度「御旅行ですか」と問ふ人が出る。一寸襟卷をしてゐれば必ず「お風ですか」といふ。電車の中で新聞を讀んで居れば、うるさく話しかけに來る人がある。燕尾服を着れば、仁丹の廣告みたいだといふ。途中で人に逢へば、「何處へ」と聞く。默つて聞いて居れば隨分甚しく立ち入つた事を尋ねらるゝ事さへある。要らぬ問ひ角問ひ、求められざるに忠義ぶつた助言をし、頼まれもせぬ内から餘計な世話を燒く事を、禮儀とも作法とも心得て居るらしい。併し世には放任の禮と自由の恭敬とがある。世話を燒く許りが禮でない。西洋では客を芝居に招いた時、自分のボックスを客にあてがつておいて、主人は態と顏を見せぬ。遠慮させまいとの慮である。又家に泊り客がある時、必ず一室を其の私室にあてゝ、主人と雖も戶を叩いて案內を求めた上でなければ入らぬ。「御自由に（アズ・ユー・プリーズ）」といふのが、禮儀の主眼となつてゐる。日本のは客が何をプリーズするか、根問ひ葉問ひして、それを皆主人側でしてやらうといふのである。結構な事には相違ないが、ちと度が過ぎてうるさい。

左はいへども、私は決して此に人の親切を無にして地方を攻撃しやうとする者でない。田舍には此の小うるさい、しつこい待遇を喜ぶ者が多い。あの大袈裟な送り迎へ、あの無意味な歡迎の宴、あの引つ切りなしの訪客、之を何よりの名譽の如く心得てゐる者が、地方へ講演にでも行かうとする者の中に頗る多い。而してこれがない時は冷遇と憤る。折角東京から來て貰つた講師に不興あらしめまいとする朴訥なる地方有志家の心添が、端なくも此にこの時間つぶしの無意義の虚禮を馴致したのである。考へて見ると、罪は講演者に在る。この種の講演者が世の所謂教育家と宗教家とに最も多い。最も少かるべき筈にして。

十一、黎明

嗚呼おれは何をしてゐるのだらう。

日となく夜となく、斯ういふ器械的常務（ルーチン・ワーク）と世俗の儀禮に責め苛まれて、ゆつくりとは書を讀むことも筆を執ることも出來ぬ。われとわが身に省みて考慮することも出來ない。斯うしてゐて、結局おれはどうなるのだらう。

他人には斯な俗事がおれほどにないのか。あつても苦にならぬのか。氣がつかぬのか。氣がついても、おれのやうに洗ひさらひ言つて了ふのを憚るのか。それとも、この俗事が卽ち人生であつて、今更しやうがないぢやないか位に諦めて居るのか。

こんな事に事々しく煩悶するのは、おれ一人なのか。おれ一人が悩人にして且つ變人なのだらうか。

若しこの器械的常務に從はずとも、衣食の累を生せず、妻子を饑ゑしめず、若しこの世俗の儀禮に囚はれずとも、世間が寛容して異邦人扱ひにせず、斯くて天分ある者が自由にその天分に從つて、考慮し、手腕ある者が何等掣肘を受けずして縱まゝに其手腕に任せて活動したら、國が亡びるのだらうか、天下が亂るゝのだらうか。

いま／＼しいから、今一度エマスンの文句を引いてやれ、——『あんなにぱアとして神々しげな「時（タイム）」も、つまらぬ事にこなごなに切斷される。戶にペンキを塗らなければならぬ。錠前を繕はなければならぬ。おれには木が要る、油が要る、麥粉が要る、鹽が要る。家がくすぼる、頭が痛くなる。やがて税がかゝつて來る。頭も何もない奴と何のかのと交涉する。いやな病にさはるやうな言葉も思ひ出される。斯ういふ下らぬ事が時を喰つて了ふ。(These eat up hours) やれ／＼何とでもしろ、夏になれば蝿が來る。森の下道を歩けば蚊に食はるゝ。釣に行けば着物が濡れるに定まつてある。』

いつしか夜はほの／＼と明け放れた。明けないものがある。(完)

本朝烏鷺争飛傳

——古今碁譚——

村松梢風

小さんの落語に碁どろといふがあるが、巧に碁好きの人情を穿つてゐる。碁は親の死に目にさへ會はせぬといふ程で如何な英雄豪傑も是には心を奪はれるのが常だから、梁上の君子遂に我を忘れて助言を始めるなども有りさうな噺である。從つて碁に關する珍談奇話は乏しくない。曾て、二十一世本因坊名人田村氏の逸話として次ぎのやうな噺が傳へられたことがある。夫れは或時田村氏が小石川邊へ用達に赴いた歸り途、ぶらぶら遣つて來ると夏のことで俄か雨に出遇つた。合憎雨具の用意も無く、當惑しながら不圖かたへを見るとさゝやかな碁會所が眼についたので雨宿りの積りで驅け込んだ。する

と四五人の定連が頻りに打つてゐたが、折柄手隙きの席亭田村氏を側へさし招き僧どれ位お打ちかといふ。眞逆名人とも云はれず未だ初心だと答へると、夫れでは先づ四目も置いて御覧なさいといふので、到頭本因坊が四目の置碁を打たせられたが、何う苦勞して負けて遣り度くも、席亭の石が獨りでころころ死んで仕舞ふので始末におへない。すると席亭先生感心して曰く「なかなかお強い、夫れに性のいゝお碁だ」。同時にこんな噺もあつた。本因坊は近頃態々市中の碁會所へヘボ碁を見物に出掛ける、夫れはなまなか上手な碁を見ても參考にならないが、ヘボ碁に限つて折々奇想天外的の奇妙奇手烈な手を打つので大に會得することが有るんださうだといふのである。處が此の話はどちらも噓だ。其の後私が本因坊に面會した折訊いて見ると毛頭そんな覺えはない、第一自分は未だ嘗て碁會所へ足を入れたことが無いと云ふ。總じて奇聞逸話などいふものは根を洗つて見されば信用の出來ぬものである。是から私が記述する幾多の碁語りにも、或ひは斯うした類が有らうも知れぬが、圍碁が元來消閑の技に過ぎないのであるから、是れ春の夜ながの語り草として強ち筆者の過を責むるにも及ぶまいではあるまいか。(戊午歳晩梢風記)

碁勢大德

享保十二年正月廿六日寺社奉行黑田豐後守を以て本因坊家に對し圍碁の傳來に關する御尋ねがあつた。其の時本因坊、安井、井上、林の家元四家が連名で答へた口上書に、「圍碁の始は堯舜より起り吉備公歸朝の節より傳來本朝に流布仕候由承及候。尤其已前より相渡候樣にも申傳へ候得共慥の儀は不奉存候云々」とある。

吉備眞備が遣唐使として彼地に赴いた時「日本に圍碁有りや」と問はれて、例の愛國的自尊心から大いに心得顏をした結果、玄東といふ支那隨一の名手と對局を餘儀無くされたが、安倍仲麿の亡靈に教へられて遂に一目の勝を得たといふ話は頗る著名ではあるが信用は出來ない。圍碁はもつと早く傳來したものであらう。奈良の正倉院には聖武天皇愛玩の碁盤が有る。紫檀製で盤の側面に獅子象駱駝孔雀などの木畫を挿入した美術品としても頗る美事な物だが、年代も慥かであるとの事だから、此の一事を以ても吉備公云々の說は破られてしまふ。支那に於ける碁の始が、黃帝の時洪匪先生といふ仙人が終南山の頂に博棋したといひ、或ひは帝堯陶唐氏が碁技を發明して其の子丹朱に傳へたといひ、或ひは桀の臣烏曹が初て賭博と圍碁を作成したといひ、

或ひは帝舜有虞氏其の子商均を教へんが爲めに是を發明創作したといひ、諸説混沌として歸一して居らぬが、要するに殷周以前の發明に係る事だけは爭はれぬが如く、本朝傳來の年代も甚だ茫漠としてはゐるが、大凡奈良朝前期頃であるらしい事は推測される。

降つて平安朝時代になると、圍碁は既に上流社會に於ては非常な勢ひで流行を極めてゐた。殊に閑で遊び好きな當時の官人宮女に至つては盛んに是に沈湎したものと見え、宮中で碁會を開いた記録などもあるが、遣唐使には大概碁師が一名加はつて行つたものである。源氏物語にも折々碁の事が出て來るが、紫式部は餘程碁もうまかつたと見えてなかなか通を並べたりしてゐる。然し斯く流行したとは云へまだ一般的に普及した譯ではなく、技術の標準も至極低かつたものに相違ないが、延喜の朝に至り、天が突如として一人の天才を降して初て斯道を振興せしめた。夫れが僧寛蓮である。

寛蓮は最初宇多院の殿上法師であつたが、圍碁に堪能なるの故を以て醍醐村上の兩朝に歴仕した。世人は彼を碁勢大徳と呼んだ。彼に就いては次ぎのやうな話がある。

或時寛蓮が醍醐天皇の御前へ出ると、

「寛蓮、今日は懸物をして打たう。二子で若し爾が勝たば金の枕を遣はすぞよ」と、帝が仰せられた。帝は平素寛蓮に對して先と二子の交ぜでお打ちなされたが、二子では決して負けたことが無かつた。だから何を賭けても大丈夫だと思し召したのである。

「其の代り爾が負けたらば以後は[illegible]がやぞよ」

「畏りました」

帝は直ぐに二子を置いてお打ちなされた。處が、どうしたものか今日に限つて樂々と寛蓮に勝たれてしまつた。

「お約束の金の枕を頂き度う御座ります」寛蓮は意地の悪い眼つきをして申し上げた。

帝は今更後悔遊ばしたが仕方が無い。總て侍臣に命じて御秘藏の金の枕を取り出させ、殘念そうな御容子で夫れを寛蓮に賜はつた。寛蓮は大喜びで重たい金の枕を懐に入れて御所を退つた。すると直ぐ後から

「寛蓮待たれよ」と呼びながら四五人の若い殿上人が追ひ掛けて來たが、矢庭に寛蓮を捕へて懐から金の枕を奪ひ取ると、其の儘御所の方へ引き上げてしまつた。

其の次ぎ寛蓮が御前へ出ると、

「寛蓮懸物をしよう。二子で爾が勝たば金の枕を遣はす」と、帝は此の前と同じ様な事を仰せられた。そしてお打ちなされた

お、矢張り寛蓮が勝つた。寛蓮はお約束通り金の枕を頂戴して退いたが、御所を出るが否や又殿上人に奪はれてしまつた。其の後帝は寛蓮の顏を御覽になる度び「賭物をしよう」と仰せられる。寛蓮は其の都度碁に勝つて金の枕を賜はるのであつたが、此の賭物が御所を出てから物の一丁と彼の身に保つてゐた例が無い。

すると或日の事、寛蓮は例の通り拜領物をして御所を退つたが、殿上人に追ひ掛けられると何んと思つたかいきなり金の枕を路傍の井戸の中へ投げ込んですたすた立ち去つてしまつた。

「寛蓮め、腹を立てゝ手數を掛けさせる氣だやな」

あとで殿上人はかう云つて笑つたが、軈て井戸に人を入れて取り出させて見ると、夫れは普通の木の枕に金紙を貼つた物であつた。

寛蓮は金の枕を潰して仁和寺の傍に一寺を建立した。夫れが彌勒寺である。

鎌倉殿中の騷動

或時頼朝が、北條時政、大江廣元、佐々木盛綱、其の他四五の大名を召して圍碁の會を催した。其の時頼朝の相手をしたのが盛綱であつた。處が、此の二人の碁が非常に六ケ敷くなつて

來たので、一同は自分達の席を中にして其の左右に陣取つた。其中に安房の一手信實といふ十五歳の少年が交つてゐた。すると遅れて其へ工藤祐經が這入つて來た。祐經も席を見ようとしたが座る席が無かつたので、丁度前に居た信實に眼を付けると、背後からヒョイと抱えて脇へ除けて置いて、其の跡へ澄ました顔で座り込んだ。一同は碁に氣を取られてゐる最中なので一向そんな事に氣がつかなかつたが、獨り大江廣元だけが其の樣子をジロリと見た。

信實は肝癪筋を額中に現はして祐經を睨め付けてゐたが、邊りに有り合ふ硯箱を手に取るが否や撥矢とばかり祐經を目掛けて投げ付けたが、其の儘一散に此處を逃げ出した。墨汁が一面に散亂した。祐經の額からタラタラ血が流れた。

盛綱は仰天して直ぐに伜の跡を追つたが、最早何處へ逃げたか信實の姿は殿中に見えなかつた。

「何故かは存ぜぬが君前をも憚らぬ信實奴が狼藉、何んとも恐懼に堪へぬ次第で御座る。然し何を申すも若年者の事、この上は何卒君の御前體をよしなにお願ひ仕る」と、盛綱は廣元に向つて萬事を頼んで置いて、萎れ切つて我館へ歸つた。

殿中を飛び出した信實は、何處といふ目當も無く唯一生懸命に駆けて逃げた。すると桐ケ谷迄來た時後から工藤の家來が二

人追つ掛けて來た。信實が後から走つて來た二人に子供で直きに追ひ着かれてしまつた。然し彼は親譲りの豪勇だつたので、最初に飛び掛つて行つた男は三間ばかり投げ出された。それでも懲りずに今一人が組み付いて行くと、是は到頭路ばたの溝の中へ突き落されてしまつた。信實は又もや其の場を落ち延びて、最後に和田義盛の館へ逃げ込んだ。

此の騷ぎは次第に容易ならざる形勢を生じて來た。意地の惡い祐經は、左程の創でもないのを大袈裟に云ひ立てて出仕もせずに引き籠つてゐた。夫れは此の機會を利用して、豫てから餘り快くない盛綱をウンといぢめ付けた上、今後自分に對して頭の上らぬやうにして遣らうといふ魂膽であつた。

義盛は侍所別當たる職責上此の事件の解決を着けなければならないが、出來るものなら內聞に濟まして信實の一命を助けて遣り度いものだと考へた。其處で先づ現場に居合はした人達に就いて其の時の樣子を訊いて見たが、誰も信實が何故あんな狼藉を働いたのか譯が判らないらしかつた。處が最後に大江廣元に會つて訊ねると、

「あれは抑々祐經にも落度が有る」と云つて廣元は自分の見た事を話して、場合に依つては證人になつて遣らうと迄云つた。

義盛は直ぐ樣北條時政の許を訪ねて一伍一什を話して相談したが、縱ひ祐經にも落度が有るにせよ信實を其の儘差し許す譯には行かぬから、一時信實を出家(しゆつけ)させるといふ位の事にして、若し祐經さへ夫れぞ納まるものならば、君の御前躰は時政が引き受けるといふ事になつた。義盛は其の足で祐經の處へ出掛けた。すると病氣と稱して會はない。

「火急の用事故是非共面會致し度い、次第に依つては病間へ通つても苦しう無い」

義盛が押してから云ふので祐經は不承々々出て會つた。彼は痛くもない頭へ大袈裟に鉢卷などしてさも苦しさうな顔をしてゐた。然し義盛は一向そんな事に頓着しない容子で、

「過日は盛綱の悴が貴所に對して狼藉に及んだとの事、誠に不屆千萬の仕儀では御坐るが、餘り事を荒立てるも如何なもの。就いては義盛の計らひを以て、貴所へ申譯の爲め信實に出家を遂げさせようから何分其の儀の處で御得心を願ひ度い」

祐經が飛んでもない話だと云はぬばかりの息込みで何か云ひ掛けようとすると義盛は遮つて、

「若し是を表沙汰に致す時は、何か貴所が佐々木から意恨でも含まれて居る樣な筋合ひにも取られるが、又折惡しう其の御病氣では、あれ見よ工藤祐經とも云はれる者が、高の知れた小

斬に打たれて世も上らねことと、世上で取り沙汰致さうも知れぬ。然る時は何れにしても世評の外聞にも拘ると申すもの。兎角穩便になされたが宜敷からうと義盛は心得る」と、意味有り氣に云つた。

祐經の考では、あの時の自分の落度に氣がついた者が無いのを幸ひに、信賢が何と云つても夫れを否認すれば宜いと高を括つてゐた。處が義盛の口吻で察すると何か自分の弱點を掴つてゐるらしい、とすれば誰か見た者が有つたのに違ひない。「此邊が從き場かも知れぬ」と彼は直ぐに氣がついた。

「是れはく、夫れがため態々貴所がお越しとは祐經近頃恐縮致す。いやなに高が腕白盛りの小倅の仕業、君へ對しての恐惶はともかく、此の祐經に於ては頓と心にも懸申さぬ。萬事は貴所にお委せ申せば、宜敷樣にお計らひが願ひ度い」

から云つて祐經は大口開いて笑つた。義盛は直ぐ樣起つて歸つた。

盛綱は我子の命が助かつたのを此の上もなく喜んだ。そして泣いて厭がる信賢を寺へ連れて行つて坊主にした。

不吉の三劫

文學が一時僧侶の專有物に歸した如き程ではないが、圍碁も矢張り僧侶の手を藉りて其の名を揚げたるは…、明治時代に到り、妙顯寺の住侶と…聞えた者は…ないが、就中日蓮上人へと云ふ都本法寺開基日親上人（是は鍋かむり上人）とも云ふ人で其の双璧とする。建長五年癸丑正月鎌倉松葉谷の庵で日蓮上人と御弟子の吉祥丸（日朗）とが打つた棊譜は未だに傳はつてゐる。是が日本に於ける最古の棊譜である。處が、遙かに降つて戰國時代の末季になつてから、後に一世本因坊算砂と稱した僧日海といふ驚くべき天才が出現した。

日海は京都寂光寺開基日淵上人の法弟であるが、佛學にして圍棊のみならずよく百藝に達してゐたといふことだ。本因坊といふ名稱は、彼が常に寂光寺の塔中本因坊に幽居してゐたところから付けたものである。名人の稱呼も彼から起こり、本因碁將棋所の開祖も彼である。彼は織田豐臣德川の三代を通じて非常に重んぜられ、文祿年間には權大僧都に任じて昇殿を許されたり、德川時代には三千貫の旗本格で道中を往來したものだ。右に左く、夫れ迄は混沌としてゐた圍棊の世界が彼に依つて初て雲を破つて頂點に達し燦爛たる光に浴することが出來たのであつた。

夫れは天正十年六月一日の事である。其の日彼は、當時自身に亞ぐ碁師の鹿鹽利賢を伴なつて右大臣信長の旅館本能寺へ伺

候した。信長が上洛以來彼は屢々招かれては碁を敎へてゐたが、一度利賢との對局を見度いといふ所望を受けたので今日は連れ立つて來たのであつた。

まだ午前の時刻であつたが二人は早速廣い書院へ案内されて其所で打ち始めた。夫れを信長は一段高い處から脇息を引き寄せて眺めてゐた。家來の中でも碁好きの者は下の方に座つて見物してゐた。すると此の碁が何ういふものか次第に亂雜な形勢を呈して來て双方共容易に手が下されなかつた。夫れがために自然暇がとれ、終日打ち通して夜の九ツ近くなつてもまだ百手か幾何も越さなかつた。處が、最後に至つて三劫が出來てしまつた。(此の場合は双方同じ手を繰り返してゐねばならぬ羽目になり終局が着かず、容易に現はれ得べき象でない)

「不思議な碁ぢやな」と、信長は膝を乘り出して云つた。

「御意に御座ります。私も斯樣な象を見ましたは今が初て、嘗て話にさへ承つたことは御座りませぬ」と日海も不思議に堪へぬ面持で答えた。

「で、詰り此の碁はどうなるのぢや」

「私の考では詰(勝負無し)に致すの外はないかと心得ます。然し是は後世への制例ともなりませう事、利賢お身の意見は如何ぢや」

利賢も矢張り同じ考であると答へた。

「世にも珍らしい碁を見て、今日は善い修業を致した」

信長はさも滿足の體で云つた。兩人は稍暫らく石を崩さずに此の不思議な碁の跡を眺めてゐた。

二人の碁師が信長に暇を貰つて本能寺を出たのは九ツ過ぎであつた。日海が途中で利賢に別れて、丁度道の半分ばかり來た時、遙かに本能寺の方に當つて天に轟く鬨の聲が起り始めた。彼は其の場から後へ引き返した。軈て本能寺の間近になると、松明の光が天を焦がし、大路小路には海の穗のやうに劍戟が閃めき渡つた。彼は軍勢に遮られて進むことが出來なかつた。

信長は其の夜光秀に弑せられた。出來間敷き三劫が生じたのは此の凶事の前兆であつたかと後になつて思ひ合はされた。爾來三劫は不吉なものとなつてゐる。

水波論

亂世の武將は一般に圍碁を愛したやうだ。夫れは他の遊技と異り一局の裡に治亂興敗の迹を寓し、韜略玄機の岐るる處が大に武人の賞玩に適した譯であらう。遠き古は措置き戰國時代の名將のうち圍碁に堪能であつた人を擧げれば先づ武田信玄と幸田昌幸が筆頭である。信玄が家臣の春日源五郎と打つた碁や昌

本因坊の信長と打つた碁はどちらも手前が違つてゐる。さきに信長の碁好きは前段の通りだが、秀吉も是に劣らぬ熱心であつた。彼は光秀を滅して上洛した後、天正十一年八月初て日海を引見して爾來碁の教授をうけてゐたが、天正十三年關白となつた時には天下の碁士を伏見の城に集めて勝負を決せしめた。是が所謂御前試合の嚆矢である。日海が或時秀吉の前で彼の戰術を盤上に擬へ、縱横の批評を下して大ひに列座の諸侯をして感嘆せしめた話が有る。日海が破格に重んぜられたのは單に碁が强かつたからばかりでない事は勿論である。

信長秀吉にも增して碁好きだつたのが家康だ。然し彼も中年迄は其の味を知らなかつたものと見えて秀忠の妻に送つた手紙の中にそんな事が云つてある。一面家康の性格も偲ばれるから一寸採錄して置く。

（略）何樣も人の覺えたる事は知り置き候へば何か入用の事あるものにて我等中年の頃迄碁を一向に不存人の打さへ無用の物氣づまりにて役にも足らぬ事とばかり存じ人の好み候はうつけ者の樣に存候處近年覺え候へば雨降り徒然の慰にもなり先達てうつけ者と存候ものを相手に致候是にて察候何事も詮のなき事は古より致さぬ事なれば呉々も自分氣には入らぬものをあしきとなんせぬ樣に致事專一の事に候（略）

信長秀吉家康の三人は何れも本因坊に對して五子の碁に進んだ。此の三人に甲乙をつけぬといふ事は一寸考へると本因坊が如才なく打つたんではないといふ氣もされるが、素人碁の行止りは大概其の邊と相場の極まつたものだから、餘り邪推は廻さぬ方が宜いかも知れぬ。然し爭はれないもので、秀吉の碁が奔放不羈で細目に渡らないのに反し、家康の打ち振りは用意周到で一子も苟くせぬ。碁程其の人を表はすものはないと云つて本因坊が人に語つたことがあるさうだ。

是は家康がまだ秀吉に從つて伏見に居た時の話である。家康の屋敷の前に柳の水といふ名水の湧く井戸が有つた。夫れが茶の湯の水に大層善かつたので諸方から汲みに寄越した。

或日のこと、德川の家來が此の水を汲みに行くと、井戸の側で是も同じく水汲みに來た前田の家來とばつたり出合つた。然し德川の家來の方が一寸遲かつたのだが、遠くから來た前田の家來が愚圖々々手間取つて器など出してゐるので、いきなり釣瓶に手を掛けて先きに汲まうとした。

「これ！」夫れと見ると前田は側へ寄つてむづと相手の腕を押えた。

「後から來居つて、先きに汲まうとは無禮であらう」

「何！」德川も相手の權幕が餘り荒いのでぐつと癪に障つた

らしかつた。

「後から來ては先きに汲み度うても汲めぬわい。こちの方が早かつたら先きに汲んで居るのぢや」

「おのれ、しれじれ敷い事を云ふな。おのれの方が確かに後から來居つたでないか」

「井戸の側迄は遅う來ても、早く釣瓶へ手を掛けた方が先ちやわい。城の側迄早う行つても、中へ入らねば一番乘りとは云はさぬぞ」

「此奴口巧者な奴ぢや。兎に角釣瓶を寄越せ」

「いや渡らぬ」

「吃度寄越さぬな」

「渡してなるものか」

「宜し！」

前田は餘程短氣者と見えて、いきなり拳固をかためて徳川の横面をポカリと喰らはした。「おのれッ」と忽ち徳川も釣瓶を抛り出して前田に武者振り付いた。二人は組んず解ぐれつ井戸の側で組みうちを始めた。

其處へ徳川の家來が二三人飛び出して來たが、此の體を見るといきなり胴猾に加勢をして到頭寄つて集つて前田の家來を散々の目に會はせた。すると此の事を前田の屋敷へ急報した者があつたので忽ち向うからも加勢の人數が繰り出して來た。

仕舞ひには伏見の城下が沸き返るやうな騷ぎになつた。然し喧嘩の原因を知つてゐるものは水汲みの二人だけであつたから、双方の家來達は譯も分らずに唯入り亂れて鬪つてゐた。其所へ太閤の命を受けて伊達政宗が鎭靜に乘り込んで來た。政宗は馬を驅け廻して漸く双方を引き分けた上、頭立つた者を呼び出して爭ひの原因を尋ねたが更に要領を得ない。

「家來が家來なれば主も主ぢや。自身の家來に是程の騷動を起こさせながら、自體家康は何をしてゐるのだ」

政宗は双方を叱り飛ばして置いて徳川の屋敷へ入つて行つた。門内から玄關前迄、八方から馳せ集まつて來た同勢で充滿してゐた。

「家康公は何れに居られる」と、政宗は玄關へ上ると破れるやうな聲で呶鳴つた。

「主君は唯今奥で圍碁を致されて居ります。實は先刻より度々申し上げましたれど、一向お耳にも掛けられぬ御樣子で御座ります」家臣の者が困つた顏をして答へた。

「何、此の騷ぎの最中碁を打つてゐる？」

政宗は直ぐに案内をさせて荒々しく奥へ行つた。すると家康は一人の坊主を相手に餘念無く碁盤に對つてゐたが、政宗が入

つて比べても気晴しともならなかつた。政宗は眉を立てゝポンポン云つた。すると家康は盤面と政宗の顔とを等分に見比べて碁石をチリチリ鳴らしながら、

「何、身が家來と利家が家來と喧嘩をした――夫れをおことが鎭めて呉れたと、夫れは千萬忝け無い――何、家來共は喧嘩の原因を知らぬによつて身に訊き度い――夫れは只今打ち掛けてゐて一寸思ひ出せぬ。とてものついでぢや、おこと利家に會うて訊いて來て下され――晩には料理を調へてお待ち受け申す」

と、圓い顏を一層圓くして云つた。

由井正雪宅の碁會

或日奧村八郎右衞門の處へ丸橋忠彌が遣つて來た。

「今日は碁會があるから貴殿を誘ひに來た」と忠彌が云つた。

「ほう。して場所は何處ぢやな」

碁好きの奧村は直ぐ樣から乘り氣になつた。

「正雪老の宅で開くのぢや。正雪老も拙者に二子で貴殿とは丁度好い相手だと云つて話したものだから、是非今度の碁會にはお近づき傍々奧村殿をお誘ひ申して呉れと云はれて、今朝も又態々手紙を寄越されたのぢや」

すると奧村は急に氣が變つたやうに、

「折角だが、今日はすこし用事が有つて行かれぬ」と云つた。

「そうかも知れぬが、先方では楽みにして待つてゐる事だ。夫れに必ず貴殿を誘つて行かうと引き受けてもあるのだから。偶には拙者の顏も立てさせて呉れ。用事の方はなんとか都合がならうではないか」

かう云つて忠彌は頻りに勸めた。奧村は今迄にも幾度びか忠彌を介して正雪から近づきをし度いと云はれたが、彼は其の都度何んとか口實を設けては面會を避けてゐた。夫れは正雪を初め其處へ出入する人物が、彼にはなんとなく危險なやうな感じを與へるからであつた。忠彌とは不圖した事から斯うして交際をしてゐるが、近頃では夫れさへ成る可く接近しない方針を取つてゐた。然し斯うして忠彌に遣つて來られて見ると、さう無下にも斷り切れなくなつて仕舞つた。

「では折角だから、一寸でも參ることに致さうか」

奧村は最後にかう云つて、忠彌と一緒に牛込榎町の正雪の處へ出掛けた。すると正雪は自身で玄關迄迎ひに出て奧村を座敷へ案内したが、初對面の挨拶が濟むと直ちに酒肴を夫れへ運ばせて頻りに歡待を盡した。其處へ金井半兵衞と熊谷三郎兵衞が遅れて遣つて來ると、正雪は兩人を奧村に紹介して、酒席が一層賑やかになつた。

碁が始まつたのは日暮れ近い頃であつた。正雪の門弟なども加はつて、廣間へ幾つも碁盤を並べて打ち始めた。一番上段の盤では正雪と奥村が互先で打つてゐた。それを忠彌が側へ座つて見物してゐた。大した差ではないが正雪の方が些し弱いやうで、最初の一局は奥村の勝になつた。兩人は直ぐ續けてあとを打ち始めたが、矢張り今度の碁も正雪の方が旗色が惡くなつて來た。すると半ば過ぎ迄進んだ時、正雪の大石が二つにされて殺されそうになつて來た。然し忠彌が視ると其處には繋(ワタ)りの一手が有つて、夫れさへ打てば苦もなく生きられるのであつた。正雪は頻りに考へてゐたが、どうしても彼には其の手が見えなかつた。忠彌はもどかしくて溜まらなかつた。

「渡らば錦中や絶えなん――」

と忠彌が謡曲の節をつけてうたつた。正雪は漸う夫れで氣が付いて盤を打つた。

「偖々渡りに船が來て難風を遁れ、我ら近頃迷惑致す」

と奥村は獨り言のやうに云つて、厭な顔をして忠彌を睨めた。暫らく經つと今度は奥村の石に切れが出來たが、矢張り正雪には夫れが分らなかつた。すると忠彌は又もや、

「鞍の前輪に押しつけて――」

と直實の謡曲をうたつて暗に「切れ」と云ふ謎を掛けた。正雪は相手の石を切つて打つた。

「丸橋、一度ならで二度迄も謡曲に事よせて助言致すとは無禮であらう。ちと愼まつしやい」奥村は鋭い調子で忠彌を叱鳴りつけた。

「何つ！」短氣な忠彌は赫として云ひ返した。「助言をしたら何んとする」

奥村はいきなり刀を取つて起ち上つた。忠彌も續いて起つた。正雪は驚いて中へ入つて双方を止めた。

「奥村氏、御立腹ではあらうが何卒拙者に免じて御勘辨が願ひ度い」

正雪はかう云つて頻りに奥村を宥めた。軈て奥村は不承々々席へ就いたが「少々氣分が惡う御座るから、甚だ失禮ながら是でお暇を申す」と云つて、不機嫌な顔をして直ぐ歸つてしまつた。

奥村は夫れ限り正雪にも會はず、忠彌とも交際を斷つてしまつた。が、後に正雪一味が謀叛を企てた時、弓師藤四郎に續いて訴人をしたのが、矢張り此の奥村であつた。

助言の祟り

碁將棋の大の禁物は待つたに助言である。どちらも相手の感

れを實行することはむづかしいものだといふことは上手な人に限つて決してしないものだが、上手の手に拘はらず岡目八目で助言はついしたくなるが人情だ。本因坊でさへ助言をしたゝめにえらい目に遇ひ掛けたといふ話がある。夫れは前にも出た家康が淺野長政と碁を打つてゐるのを側で本因坊が見てゐたことがあつた。全體この二人は相碁でもあつたが、殊に剛腹な長政は碁に掛ると將軍も絲瓜もない。負けると業を煮やしてお辭儀もせずに歸つてしまふといふ風であつた。すると此の碁に、家康の方で一手撥ねを打つと長政の石が死にになる箇所が出來て來た。家康も一寸そんな氣はしたが、明瞭(はつきり)判らないので手が下せなかつた。

「はてな、撥ねて見ようかな」と家康は獨り言のやうに云つてチラツと本因坊の顏を見た。すると本因坊が眼で笑ひながら首を縱に動かしたので、家康は安心してぴんと撥ねて打つた。夫れで忽ち長政が負けになつてしまつた。

「これ、一寸參れ」

から云つて長政は本因坊の腕を捉へて廊下へ連れて行つた。

「何故上樣に助言をした。見す見す勝ち碁を負けにして仕舞うたではないか」

「否、助言は致しませぬ」

「やいツ！長政を盲目と思ふか！」

長政は刀の柄に手を掛けて鋼鐵が割れさうな聲を出した。本因坊は吃驚して廊下へ尻餅をついた。

○

安藤右京之進の家老小花玄蕃の伜に太兵衞といふ者があつた。若年ながら武藝に秀でてゐたが何分次男の身だつたので、仕官口を求めに江戸へ出て屋代越中守の許へ掛り人になつてゐた。越中守は太兵衞の母の從弟にあたつてゐた。

然し仕官口は容易に目つからなかつた。縱ひ叔父分の處にもせよ何時迄も斯うして掛り人でゐることが、若い太兵衞にとつては殊に苦痛であつた。彼がさうした意味のことを漏らすと「今少し辛抱せい、其のうちには好い事も出來て來るものぢや」かう云つて越中守は宥めた。

或日のこと太兵衞は餘り徒然だつたので廣間の帳付役の石川惣右衞門といふ者と碁を打つてゐた。すると其處へ用人の松井淺右衞門といふ者が廊下を通り掛つたが、此の體を見るとつかつか座敷へ入つて來て、突つ立つたまゝ碁を見下して頻りに惣右衞門に助言を始めた。太兵衞も最初のうちは默つてゐたが餘り激しく助言をするので。

「そうはたから差圖されては困る。默つてゐて下さい」

と淺右衛門の顏を振り仰いで云つた。淺右衛門は一寸てれたやうであつたが、

「太兵衛殿でも矢張り負ける事は嫌ひと見える」と冷笑するやうな調子で云つた。

「太兵衛殿でもとは何んぢや」太兵衛は怫として云つた。

「太兵衛殿だから太兵衛殿と申したがお氣に障つたかな」

「でもとは何ふだと訊いたのぢや。全體お身は先程から立ちながら物を云つて居るが、主人にでもなつた氣か」

「ふふん。掛人の身分で禮儀呼ばわりは口が過ぎるで御座らう」

淺右衛門はから捨科白を殘して向うへ行き掛けた。

「無禮者！」

太兵衛は一喝叫ぶと同時に刀に手を掛けて拔き討ちに斬り付けた。「何！」と淺右衛門が振り向く途端、彼は脇腹から逆に肩先迄斬り込まれて血煙りを立てて其場へ倒れた。惣右衛門が仰天して「狼藉、狼藉」と大聲を上げて叫ぶと、

「石川、拙者は他の者に亂暴はせぬから騒ぐには及ばぬ」と太兵衛は自若として云つて、懷中から紙を出して刀の血のりを拭つた。

太兵衛は越中守の前へ出てからも些か惡びれた樣子はなく、在りの儘を明瞭に答へた。越中守は内心太兵衛を助けて遣り度いと思つたが、喧嘩兩成敗の掟があるので止むを得ず太兵衛に切腹を命じた。太兵衛は其の日のうちに、乘物へ入れられて切腹場所の貝塚青松寺へ送られることになつた。

錠前に繩を掛けた乘物を大勢の者が護衛して青松寺へ向つた。溜池の邊りへかかつた頃はもう陽が餘程傾いてゐた。其の時太兵衛が「一寸乘物を停めて呉れ」と中から云つた。森武太夫といふ士が乘物の側に顏を寄せて聞くと「小用をし度い」と云ふのであつた。武太夫は直ぐに乘物を池の岸に寄せさせて「其の儘でなされよ」と云つて、池の方へ向けた戸を明けて遣つた。すると太兵衛は忽ち身を躍らせて前の池へ飛び込んだ。

陸にゐる者は大騒ぎを始めたが、軈て彼方に繋つてある小舟を、馳付けて夫れを池の中へ漕ぎ出した。然し水練の達人である太兵衛は苦もなく水中を潜つて逃げ廻つてゐるので、一艘ばかりの舟では何うすることも出來なかつた。さうして果てしも無く時を費してゐるうちに日が暮れて來た。其の頃になると報らせに依つて屋敷からも人數が驅け着けて來たので、一同は手に手に松明を持つて池の周りを取り卷いてゐた。

とつぷりと日が暮れ切つてから、溜池の傍にある内藤忠興の屋敷へひよつこり水門口から這ひ込んで來た者があつた。夫れ

其の番の者が發見して「曲者だ、出合へ〳〵」と云つて騒ぎ出した。家老の上田主計が出て行つて見ると、狼藉で大童になつた一人の若者が人々に取り圍まれて地べたに坐つてゐた。

「其方は何者か」から云つて主計が訊ねると、

「私儀は安藤右京之進家中當時屋代越中守方に掛り居ります小花太兵衞と申す者、決して怪しき者では御座りませぬ。何卒御憐愍の程願はしう存じまする」と若者は大地に手を突いて云つた。

主計は凝と其の樣を見てゐたが、軈て傍の者に向つて「此の者に手當てを遣はせ」と云つて立ち去つた。

太兵衞は衣服や粥を與へられて、再び主計の前に引き出された。彼は其の場で包まず一伍一什の事を語つた。主計が其の通りを主君の忠興に告げると、忠興は其の話に餘程興味を感じた樣子であつた。

「其奴(そやつ)なか〳〵水練が達者と見えるな」

「水練ばかりでなく、武藝も餘程出來るやうに見受けました」

「左樣か。殺すは惜しい奴ぢやな。予が抱へても宜い、當家で貰ひ度いと屋代越中守に掛け合ふて見い」

翌日上田主計が屋代家へ出向いて行つて、小花太兵衞を内藤家へ貰ひ請け度いと云つて交渉すると、越中守は太兵衞を助けたいと思つてゐる矢先の事とて直に召抱へられた。太兵衞は二百石で内藤家へ首尾よく抱への身となつたが、當世の一件が世間の評判になると、今度は甲府宰相から所望されて再び五百石で貰はれた。

御城碁

寛永の御吉例に依り例年の通十七日を以て御城碁可有之候

碁所將棋衆

寺社奉行

毎年十一月の月初めに斯ういふ達しが出た。すると家元四家が寄合ひを開いて其の年の手合を定め、其の旨を口上書にして寺社奉行迄差し出した。

當日になると、本因坊は明六ツ大手御門と同時に登城をした。續いて各家元、並に列席の碁士が悉く登城に及ぶと、直ぐ樣黒書院へ案内され手合定めの順序に依つて碁を打つた。

上段の間には將軍の御座が設けられて、其の兩脇に火鉢と刀掛が置いてあつた。將軍の御出座が無い間でも、刀掛には何時も刀が掛つてゐた。下段の間の兩側には老中若年寄を初めとして寺社奉行大目付御小納戸係等が各々定められた席に就いて居た。碁士は常に二組づつ御座の前へ出て打つてゐた。

御城碁は、幕府が高段の碁士を試る一つの方式で、丁度武士の御前試合と同じ意味合ひのものであつた。そして是に列席の資格を有する碁士は四家及び願済みの跡目相續人、並びに七段以上の者に限られてゐた。碁うちの身として是以上の榮譽は無い。夫れだけに當日の碁は大切な勝負である。然し此の晴れの勝負を初て其の場で爭はせる事になると最初の一組が半分も打ち上げぬ間に日が暮れてしまふから、其處で豫め下打をさせた。

寛永二年の御城碁で、僅かに十四歳であつた五世本因坊道知が、當時の大家四世安井仙角と對局して一目の勝を得た話がある。道知は江戸に生れて八歳にして碁に志し、十歳の時四世本因坊道策の門に入つた。彼の師匠の道策は古今獨歩の名人で碁聖とまで稱されてゐる人だけに、數多の門弟の中でも特に此の神童の未來に嘱目して、己れの跡目に直して置いて易簀した。元祿十五年で、道知は十三歳であつた。

其の翌年の御城碁で道知對仙角の手合が定まると、道知の後見人四世井上因碩から仙角に對して、道知と互先の手合あるべき旨を申込んだが、仙角は前例を楯にとつて夫れを拒んだ。すると因碩は更に本多彈正少弼に願書を呈出して道知が技倆大ひに進歩の事實を述べ、仙角に對し互先の手合を命ぜられ度しと願つた。此の問題に就いては可成りのいきさつが有つたが、結極先互先といふ事で解決した。間も無く其の下打が將碁所大橋宗桂の宅で行はれた。

當日になると、因碩は道知及び二三の門弟を伴なつて暗いうちに宗桂の宅へ出掛けた。同じ時刻に仙角も來た。そして五ツ時から碁が始まつた。仙角は道知を侮つてゐた。「何の乳臭兒が」といふ容子を何時も態度や顔に現はしてゐた。然しさうした態度で反感を挑發するには相手の道知が餘りに子供過ぎた。彼れは怖れるでもなく怒るでもなく、唯無邪氣に石を摑んでは打つてゐた。然しどういふものか彼の石立は最初から餘り振はなかつた。仙角は益氣勢を昂げて打つてゐたが、側で見てゐる因碩は氣が氣でなかつた。夜に入つて碁も七分通り打ち上げた時分には道知の旗色は愈々惡くなつて來て、最早勝敗の數が明瞭になつたやうに思はれた。因碩は仕舞ひには到底見てゐるに忍びなくなつて、中途から座を起つて悄然として我家へ歸つてしまつた。彼は獨りで碁盤に對つて調べて見たが、道知の碁には如何にしても恢復の餘地が無かつた。彼は諦めて褥に就いたが終夜輾轉反側して睡ることが出來なかつた。

すると朝の六ツを少し廻つた頃、宗桂の宅へ殘して來た門弟の一人が轉ぶやうに驅け込んで來て、

「先生、本因坊が一目勝ちました。取敢えずお報らせに參り

ました」と息せき切つて報告した。

因碩は最初は我が耳を疑つた。然し段々詳しく訊いて見ると、昨夜彼が歸つた時分から道知が頻りに妙手を打ち出して、今朝六ツ時に愈々打ち上げた時には道知が一目の勝になつてゐた。是には流石の仙角も意外だつたとみえて未練らしく三度も作り直しをして見たといふのであつた。因碩が雀躍りして喜んでゐる處へ道知が一同と共に歸つて來た。

「全體如何(どう)してあの碁に勝てた？」と因碩が祝ひを云ふ前に不審顔をして訊くと、

「途中で調べて見ると負けて居りましたから、是ではならぬと思つて打つたゞけで御座います。」

と、道知は睡たそうな顔をして答えた。

執念

安永年間の話である。

芝増上寺の所化に快禪といふ者があつた。越後の生れであつたが天性碁を善くして、位は五段に居ても實力は遙かに夫れを超してゐた。當時本因坊を除けば快禪に勝ち得る者は無いといふのが定評であつた。

すると茲に上州厩橋の郷士で近藤左司馬といふ者があつたが、[illegible]左司馬は江戸へ出て來たが、當時の名だたる棋士と是非[illegible]はせがして見度く、人を以て頼むと快く承知して呉れて二子で打つて貰つた。處が其の碁に二度續けて左司馬が勝つた。斯うなると先(せん)で打つて見度いのは人情である。左司馬は其の事を申入れたが快禪が承かない。「一生の面目だから是非一度だけ先で打つて頂き度い」と様々手も盡して頼んで見たが「まだ先といふ碁品(ごひん)ではない」と云つて快禪はどうしても打つて呉れなかつた。左司馬は非常に殘念がつて國へ歸つた。

夫れから幾年も經つた。或日快禪は獨り居室に閉ぢ籠つて心静かに棋經をしらべてゐた。秋も終りで、木の葉の散つた庭へはしとしと雨が降つてゐた。其處へ突然一人の男が案内もなく入つて來た。寺では斯んな事も珍らしくは無いので快禪が左程氣にも留めず見遣ると、相當な年配をした男だが病氣と見えて痩せ衰へ、月代なども伸び放題に伸びてゐる。快禪は「見た様な男だ」とは思つたが一寸浮かばなかつた。

「お見それ申したが、其所許は何方で御座つたかな」

快禪が斯う云つて訊くと、夫れ迄這入り口の處に蹲つてゐた男は少し顔を上げて、

「御坊にはお忘れになりましたか。某は先年御教授に預かり

ました上州の近藤左司馬で御座ります」
「ほゝう。是は飛んだ失禮を致した。其の後は一向お見えが無いので何うなされたかと思つてゐました」
「御坊には何時もながら御健勝でお喜びを申上げます。偖御坊、早速ながら折入つてお願ひが御座りまするが……」
「はてな、なんで御座るかな」
「他でも御座りませぬ。先年御坊に先の碁をお願ひ致した處お聞き入れ下さいませなんだが、以來某も劣らず修業致しましたれば幾分上達したかの樣に心得ます。就いては人間老少不定の習ひ、萬一此の儘世を終るやうな事がありますと、某の身にとり是程の遺憾は御座りませぬ故、息ある間に是非一度先のお手合はせに預かり度いと存じて、左司馬一期のお願ひに參つて御座ります」
と左司馬は疊へ額をすりつけて云つた。其の思ひ詰めた樣が頗く快禪の心を動かした。
「其れは〳〵近頃御熱心な事、其の分では必ず御上達もなされたで御座らう。其の儀は承知致した。幸ひ今日は用事も御座らぬ故、直ぐ樣先二つで願つて見ると致さう」
快禪は快く承知して直ぐに碁盤を夫れへ直した。左司馬は非常に喜んで快禪と對き合つて座つた。最初は二子で打つた。少し打つて見ると快禪は相手の碁が非常な進歩を遂げてゐるのに驚かされた。衰弱し切つた左司馬の容子を見ると是で碁が打てるかと案じられる程であつたが、局面の進むにつれて彼は不思議に精力が加はつて來るやうで其の碁品も到底尋常でなく、快禪は到頭中押し(投げ碁)で敗られた。
二局目を打ち始めたのは夕景からであつた。快禪は先なれば大丈夫と思つてゐたが、矢張り打ち始めて見ると左司馬の碁勢は益冴えて來るばかりで稍ともすると壓迫され勝ちであつた。然し彼も必死の勇を振ひ秘術を盡して闘つた結果辛うじて四目の勝を得ることが出來た。其の時は既に明け方に近かつた。
「近藤氏、當に恐るべき御進境で御座る。愚僧ほとほと恐れ入り申した」
かう云つて快禪が口を極めて賞めると、左司馬は世にも嬉し氣な顏をして、
「某も是れにて積年の望を遂げ、最早思ひ置く事は御座りませぬ」と云つた。
軈て左司馬は起つて座敷から出て行つた。快禪は多分用場へでも行くのであらうと思つてゐたが何時迄待つても左司馬が戻つて來ないので、仕舞ひに變に思つて其處らぢう探して見ると、もういつの間にか歸つてしまつたとみえて何處にも姿が見えな

かつた。

「晴し紛れに挨拶も忘れて行つたと見える」

快禪は獨りで可笑しく思ひながら、ごろりと其の場へ横になつて睡つた。

夫れから一と月ばかり經つてから、快禪は餘所で圖らず既橋の者だといふ人に出會つた。彼が「近藤左司馬を識つてゐるか」と訊ねると「よく識つてゐる」と其の人が答えたので、先般近藤が突然訪ねて來たといふと、

「夫んな筈はありません」と其の人が笑つて云つた。

「否全く參つた。懇望されて先二つで打つたが、彼の御仁の上達したには愚僧も一驚を喫して御座る」

から云つて快禪が其の時の事を詳しく話すと、其の人は最後に顏色を變えてしまつた。快禪は其の容子が腑に落ちぬので段々訊いて見ると、左司馬は丁度一と月ばかり前に病氣で死んで仕舞つたが、もう永らく碁にばかり就いてゐたのだから江戸へ出て來る筈が無いと云ふのであつた。日を繰つて見ると、快禪の處へ來た日が丁度左司馬の臨終の日であつた。

嫌疑

泉州堺に大黒屋惣兵衛といふ双物打物の問屋を營む金滿家があつた。其の惣兵衛は[illegible]き盛りであつたが、[illegible]に[illegible]好きだつたので[illegible]の人が碁の相手になつて出入りをしてゐた。

或晩のこと、惣兵衛はつい近所で手習ひに住んでゐる寺澤久之進といふ浪人者を我が家へ招いて、例に依つて碁を打ち始めた。久之進は以前尾州家に仕へてゐた者だが、仔細あつて浪人してから此の堺へ流れて來て、今年十歳ばかりになる娘を相手に手習ひ師匠などをして細々と暮してゐた。然し以前が以前だけに人物も確かりしてゐるので、惣兵衛とは至極話が合つて繁々出入をしてゐるのであつた。

奥の座敷で二人が頻りに碁に夢中になつてゐると、其處へ一人手代が入つて來て、大阪から掛け金を屆けて來たと云つて五十兩の金包みを主に手渡した。

「あゝ宜し宜し」

惣兵衛は碌々手代の言葉も耳に入らぬ樣子で直ぐ又碁に掛つて夢中になつてゐた。其の晩久之進が歸つたのは餘程遲くなつてからであつた。惣兵衛はそれ迄すつかり忘れてゐた掛け金のことを思ひ出して探して見ると何處にもない。直ぐに先刻來た手代を呼んで訊くと確かに渡したと云ふ。彼自身も確かに受け取つた記憶はあるが、夫れを何處へ仕舞つたのであつたか一向

思ひ出せなかつた。彼は直ぐに座敷中を探させて見たが何處からも金は出て來なかつた。

「久之進さんが怪しい」と家内の者が皆云つた。「あの律義な人がそんな惡心を起こす筈はない」惣兵衛は最初は心で否定して見たが、然し考へて見れば自身と久之進の外に此處に居た者は無いのだから、皆の者が彼を疑ふのも無理は無いやうな氣もされた。久之進に對する疑惑の雲が次第に彼の心を掩つて來た。

翌日大黒屋の老手代が久之進の浪宅を訪れて昨夜の一件を話した後、

「誠に失禮なお訊ねを致す樣では御座いますが、若しや貴方(あなた)がお持ち歸りはなされませぬか。今のうちならば內聞で事が濟みます故、どうか正直な事を仰しやつて頂き度う御座ります」と云つた。

すると久之進は非常に驚駭いた樣であつたが、軈て、

「今日お手前が來られたのは、御主人のお差圖で御座るか、夫れともお手前が一存で來られたか」

「無論主人とも談合の上で御座ります」

「左樣か」久之進は腕を拱いて暫時考へてゐた末に、

「いや誠に面目次第も御座らん。あの金は確かに拙者が盜みました」

「では矢張り貴君で？」と手代は今更駭いて云つた。

「確と夫れに相違は御座らん。就いては直ぐ樣御返戻致し度うは御座れど、あの金も最早手許に有りませぬ故、茲兩三日の處を何卒御猶豫が願ひ度う御座る」

「承知致しました。確かにお返し下さいますなら、三日が十日になりましても宜敷う御座ります」

手代は穩やかに斯う云つて歸つた。夫れから二三日過ぎると久之進は五十兩の金を持つて來て、重々謝罪をして歸つて行つたが、其の日のうちに僅かの道具などを賣り拂つて何處かへ行つて仕舞つた。

其の年の暮であつた。大黒屋では、大勢出入りの者なども手傳ひに來て煤拂ひをしてゐたが、一人男が踏臺をして座敷の額を外さうとするとばつたり額の後から落ちた物があつた。拾つて見ると紙包みの中から小判で五十兩の金が出て來たので直ぐに主人の處へ持つて行つた。惣兵衛が夫れを手に取つて見ると、前かた久之進に盜まれた筈の大阪から來た掛け金であることが、包み紙に書いてある文字などから直ぐに判つた「一體何うした譯だらう？」と惣兵衛は不思議に感じたが、肝心の久之進の居所も知れず、糺して見る術もないので、其の儘幾年か經

暮して居りました。

或時惣兵衛は[illegible]へ行つたが、其の滞在中人に誘はれて島原へ遊興に出掛けた。すると彼の相方に出たのは江口といふ太夫であつた。まだ十七位で、標緻も優れて、殊にしとやかな形であつた。

酒宴のあとで惣兵衛は江口を相手に一つ二つ話をしてゐたが、彼が堺の人であることが分ると、

「妾も子供の頃は堺に居りました」と、江口は懐かしそうに云つた。

「夫れは珍らしい事を聞くものだ」惣兵衛は不圖此の女の身の上に興味を有つて來た。

「してそなたは何ういふ譯で苦海へ身を沈めたのか」

すると江口はなんと思つたか眼に一杯涙を浮かべた。

「大方親御のためであらうが、わしに其の話を聞かせては下さらぬか」

「堺のお方といふこと故包まずお話し致します。妾の父は武家で御座んしたが、母は早くに亡くなり其の上父も浪人して、妾を連れて堺で寺小屋をして居りました。其の節父が懇意にした家へ碁を打ちに行きました處、其處に有つたお金が紛失なつたとやらで父に嫌疑が掛りました。其の時父が妾に云ふには、[illegible]で言ひ譯した[illegible]見られるまいではなし、夫れに[illegible]の嫌疑でお上の調べを受ける様な事があつては、縦ひ浪人はしてゐても武士に於ます、此の身の一分も立たぬ譯。何れは明りの立つ時節も有らうから、此の場は黙つて金を出して済ませるに越した事は無いと申して、妾を賣つて先方へお金を渡したので御座います。妾は親のため故身の苦勞は厭ひませぬが、唯一日も早く眞の盗人が露見はれて、父の嫌疑を晴らして遣り度う御座います」

と江口は涙ながらに語つた。惣兵衛は聲へやうもなく黙つて聞いてゐた。此の身の過失が原因となつて久之進親子を斯く迄不幸な運命に陥した事を考へると、彼は良心の呵責に遇つて其處に居溜まらなくなつた。惣兵衛は夫れとなく久之進が現在の居所などを訊いて、其の夜は直ぐに宿へ歸つた。

久之進は郡村といふ處に些かの知邊を手寄つて住まつてゐた。彼は近頃では兩刀も捨て、農業の手傳ひなどして浮世を見限つたやうな暮し方をしてゐた。大黒屋の手代が遥に其處へ訪ねて行つた。すると田圃路で、向ふから鍬を擔いで遣つて來る汚ならしい親爺に出會つた。夫れが久之進であつた。手代が大地に手を突いて先年の過ちを詫び入ると、

「判明つたら夫れでよい」

から云つたはかりで久之進はすたすた向うへ行きかけた。手代は後を追ひ縋つて、先年久之進が出した金と、大黒屋から改めて出す詫び金とを合はせて納めて貰ひ度いと云つて頼んだが「そんな汚れた金は要らぬ」と云つて久之進は見向きもしなかつた。最後に手代が久之進の娘の身請けだけもさせて貰ひ度いと云つたが夫れも承かれなかつた。

「金は金で償へるが、人の心は金では償へぬものだと、よく物兵衛殿に傳へて下され」

久之進は鍬を擔いだまゝかう云つて立ち去つてしまつた。

其の後間もなく島原の江口は大阪の富豪に請け出されて幸福な身の上になつたが、久之進は到頭最後迄郡村を離れずに世を送つてしまつた。江口が請け出されたのが内實物兵衛の計らひから出たものであつたことは云ふ迄もない。

松平邸の碁會

十一世井上因碩といふ人は餘程變り者であつた。記錄に依ると、彼は満面に黒痘痕あり、眼光鋭どけれども散て獰惡ならず、却つて兒女をして馴れしむるの風があつたとしてある。彼は外貌が語る如く、性質も不羈磊落で而も頗る氣概があつた。弘化三年五月江戸城炎上に際し幕府が舊例に依つて築城の費を諸大名に課した時、老中脇阪淡路守を頼つて一片の上書を差し出し、時勢に鑑み諸大名を疲弊せしむるの不可なるを論じて是を諫めたのが彼であつた。彼は僭上の故を以て閉門仰せ付けられたが、言ふ處は甚だ事理剴切であつたがために採用せられ、後には許されて登城の上特に將軍に謁見を賜つた。彼は非常に博識で、碁道に於ける古來の沿革儀式等一切を調査して幕府に奉つた事もあるが、自らは碁士たるに甘んぜず兵學者を以て任じてゐたといふから面白い。鳥取藩かへ兵學者としての仕官運動までした事があるが、採用されなかつた處から見ると所詮は隠し藝の範圍を出でなかつたものであらうと思はれる。總て彼にはかうした豪邁人を呑むの風があつたが、同時に一面に於て非常に優しい寧ろ涙脆い性格の所有者であつた。夫れにはこんな話がある。

彼に一人の妾があつたが、門弟の一人と不義をして駈落ちをしてしまつた。相手の男はまだ年齢も若く師匠からも未來を嘱望されてゐた人間であつたが、かうした迷ひから世間を狭めて見ると稼業か稼業だけに生活の道も立たず、女と二人で裏店へ入つて哀れな暮しをしてゐた。夫れが何處から知れたか因碩の耳に這入ると、或日彼は突然其の裏店へ訪ねて行つた。そして愧ぢ入つて顔も上らぬ男女に對つて懇々と後來を誡め、

「斯うなつたからは必ず一生恩に着ける。然し、無料を貰つても[illegible]茄子を齧つても構はないから碁だけは怠るでないぞ」から云つて表に待たせてあつた供の者に家から持つて來た盤石を運び込ませて置いて立ち歸つた。其の門弟は發奮して後に高段の碁うちになつた。

此の因碩が、肉を啖つても飽き足らぬ程の深い意恨を有つてゐる人間があつた。夫れが十二世本因坊丈和であつた。本篇を草するには、先づ是非とも此の兩者の關係を說明して置かなければならない。

文政年代にあたつて準名人(八段)が三人あつた。本因坊丈和と、安井仙知と、今一人が井上因碩であつた。そして名人碁所は空きになつてゐた。其處で以上の三人が、各々此の棋界の頭目たる地位を得ようとして競爭した。然し是は打碁に依つてのみ得られるものではなく他の家元の推薦を必要とする事であつたから、勢ひ其の競爭は三者互ひに術策權變を弄するに至り、所謂卍巴の形で數年の間鎬を削り合つてゐた。處が最後になつて、丈和は突然因碩に妥協を申込んで來た。そして是非自分の名人碁所に贊成して貰ひ度い、其の代り滿六年經てば必ず退隱して足下に讓るからといふのであつた。是には尚他に附帶條件などもあつたが、結極因碩は承諾して、丈和の名人資格を承認する意味の書面を寺社奉行へ差出した。斯くて天保二年十一月丈和は名人碁所になつて多年の野望を遂げた。

然るに、夫れも全く丈和の策略に過ぎなかつた事が直ぐ判明つた。丈和は最初から因碩との契約を履行する意思は無かつたのである。因碩は地團駄踏んで口惜しがつたが後の祭りであつた。彼が又もや丈和の碁所に不服を唱へて打碁を以て爭はふとすると、丈和は彼が前に差出した書面を楯にとつて、今更伎倆の爭ひをする必要はないと云つて刎ね付けた。因碩はどうする譯にもいかなかつた。

夫れから數年經過した。天保六年に至つて、因碩にとつては、丈和に對する宿憤を晴らすべき絕好の機會が到來した。それは當時權門並びなき老中松平周防守の家老に岡田賴母といふ人があつたが、安井家門下で二段の免狀まで持つてゐて豫て因碩とは昵懇の間柄だつたので、因碩は此の岡田を賴み込んで大規模な碁會を開いて貰ふことになつた。彼は其の席上厭應なしに丈和と對局して、報復の一擊を加へようとしたのであつた。是が有名な松平家の碁會である。

其處へひよつこり旅から歸つて來たのが弟子の赤星因徹であつた。因徹は廿三の時師匠の許を離れて、爾來滿三年旅から旅と修業して廻つた。其の間に、彼はあらゆる高名な碁うちと對

局した。神社に詣でては佼碁上達の祈願をこめた。或ひは深山幽谷を跋渉して膂力の養成を圖つた。彼は近頃碁に負けるといふことを知らなかつた。どれ位強くなつたのか、夫れは自身では見當が付かない。「もういいだらう」彼はただそんな氣がして江戸へ戻つて來たのであつた。

「どうだ、少しは強くなつて來たか」

と、師匠は旅窶れのした弟子の顔を見ると直ぐ云つた。

「上つたやうな氣は致しますが、自分では何んだか分りませぬ」因徹は笑ひながら答えた。

「さうか。それでは俺が打つて試して遣らう」

因碩はかう云つて直ぐに碁盤の前へ弟子を伴れて行つて、先で打たせて見た。夫れから續いて四番打つて見たが、四度ながら因徹が勝つてしまつた。

「強くなつたな」因碩は其の都度驚異の色を現はして弟子に云つた。

彼は因徹を七段に昇進させた。そして松平家に於ける碁會の策戰計畫を變更して、自身の代りに因徹をして丈和に向はしめることにした。夫れは因徹が勝を得た曉には、名人が上手（七段）に對して敗られたやうでは到底其の資格が無いものとして隱退を迫ることが出來るからである。斷念してゐた名人就院の野心が再び彼の胸中に甦つて來た。因碩が其の事を弟子に話した時、因徹は餘りに責任が重大過ぎるからと云つて辭退したが、きかれなかつた。師匠の慈悲に報るために、一つは己れの身の譽れのために、彼は身命を賭しても此の勝負を爭はふと決心した。

碁會は七月十九日から開かれた。其の時の手合は左の顔觸れであつた。

本因坊丈和（名人）　井上因碩（準名人）　安井仙知（準名人）
赤星　因徹（上手）　安井俊哲（六　段）　林　柏榮（六　段）
林　元　美（上手）　宮重　丈策（六段）
服部　雄節（六段）　阪口虎次郎（六段）

然しながら此の碁會の中心が、丈和と因徹との對局にある事は勿論である。世間では寄ると觸ると此の意恨試合の噂で持ち切つてゐたが、此の一と勝負に賭けられた金高も何萬兩か量られないと云はれた。古今を通じて是程力の入つた碁は無いのである。

十九、廿の兩日とも黑白互角の形勢で碁は無事に進展して行つた。すると廿一日の夕景に至つて丈和が七十手目の石を打つた。其處の働きが因徹には解らなかつた。翌日行つて打ち續けると、七十八手目を、又もや丈和に妙手を打たれだ。其の頃か

ら其の顔容が行き交はれ[illegible]た。

蒼ざめた因徹の顔が、毎日目立つて痩せて行つた。[illegible]掛けになつても、家にも歸らず姿を消して仕舞ふこともあつた。そんな時因徹は綾瀬川に舟を浮かべて、暗い灯の下で夜徹し盤面に對つてゐた。水鳥の鳴く聲も、流れのせゝらぐ音も彼の耳には入らなかつた。

師匠の因碩は氣が氣でなかつた。自身の打つてゐる碁のことなどは彼の念頭になかつた。彼は弟子に激勵を加へたり、寺へ行つて因徹のために開運の護摩を修めて貰つたりした。

文和の妻は毎朝淺草觀世音へ裸足詣りをして夫の勝利を祈つた。文和は家に歸つてから、奥の一室で夜なか時分迄盤に對つてゐるのが常であつた。或晩彼の妻はたゞならぬ夫の叫び聲を聞いて色を失つて驅けて行つた。

「大變だ〱」

文和は座敷の中央へ突つ立つて獨りで騷いでゐた。見ると、着物の腰から下がビショ濡れになつてゐた。

「まあ何うなさいましたんです」

「座つた儘で小便をしてしまつた。早くどうかして呉れ」

文和は氣味惡さうな顔をして、悶々とした體を子供のやうに搖すぶりながら云つた。

碁は二十七日[illegible]いた。[illegible]夜に[illegible]敗勢が歴然として、最早一點も彼の[illegible]はなかつた。文和が二百四十六手を打つと、因徹は悲痛な色を浮かべて何時迄も盤面を凝視てゐた。

「恐れ入りました」

軈て彼はかう云つて對手に向つて頭を下げた。文和は無言で禮を返した。座間中がただ森と靜まり返つた。

因徹は靜かに起つて席を退りかけたが、座敷の中程迄來ると突然「あッ」と聲を發して倒れた。一同が驚駭して走り寄つた時には、彼は劇しく手足を痙攣させて、もう息が絶えかけてゐた。

光榮の佛蘭士

土井晩翠

日東の空より遥か雙の手を
擧げてフランス光榮の
極みの勝を得しを讃ぜむ

傾けよ葡萄の美酒の萬石の
生ける者生ける詩歌
美なるフランス遂に勝ちたり

想ひ見るパリ滿城の大歡喜
人は狂ひて舞ひ踊り
勝てりと呼ばむ空どよむ迄

想ひ見るブールバールの人の波
樂土は此地此時と
凱歌を揚げし其宵の興

あゝセイヌ、流照して瑞雲の
幾朶其日の容彩ふ
雙頰の紅人若やかむ

あゝセイヌ其水北に海峽の
潮に入りて「ゼルマンの
ライン」の水に逢ひて何言ふ

あゝセイヌ、空は暮雲の愁より
泣きしは昨日、江上の
歡呼の雷に答へどよまむ

チュウレリイ、シャンゼリゼイの逍遙の
羅綺今晴に驕るべく
樓臺参差樂波と湧かむ

昨日まで五年にたわる暗黒の
愁と恐、寂寞の
すみか、再び樂園の影

昨日迄長距離砲の霹靂に
畏怖の空氣のみなぎりし
パリ今ゆらぐ祝砲の聲

昨日迄砂嚢に嚴に百方に
防盡くせし大伽藍
美の宮殿いや照りまさる

昨日迄轟雷叫び「滅亡」を
降らしし大都今にして
また不夜城の輝を見る

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

ロシニョール愁に醉ひて春宵に
泣きしブウロギ今日にして
霜降る空も花咲くに似む

ブウロギの園の池のへ鶯鶩の
生ける錦繡いくむれの
姿平和を今ぞ彩へる

ルーブルの美の殿堂のおほいなる
扉ふたたび開かれて
色と光と彩と漲る

鐘樓の上より高く祝福の
叫を愛を讃頌を
セイヌ河上の塔とどろかせ

マドレインヌ、サンゼネビイブ、シュルピイス

ノートルダムの莊嚴の
鐘一齊にホザンナ歌へ

エトアール凱旋門の頂に
エルダン、マルヌ、エーヌより
歸る勇武の旗翻せ

光榮の極みの勝に元帥の
若やぐおもて、フランスの
偉なる蘇生の標象を見よ

紅の粧、都の千鳥の
鏡中の春久しかれ
森の兇獨斃れて起たず

歐洲の文化の光傳燈の
ほまれフランス、赫燿と

炎朗いよよ空を射よかし

光榮のグリイス偉なるローマより
華美のイタリイ引き續き
傳へ來りしラテンの精華

五十年むかしセダンに又パリに
白旗立てし國の耻
今こそ雪げラテンの意氣に

コンコルド其一偶に五十年
黑衣纏ひしアルサスと
ローレーンの像と今よみがへる

其黑き喪衣を脱ぎて平等と
愛と自由の標象の
三色の旗今日こそ翻へ

永かりし無念の標をかきのけて
月桂飾れ花飾れ
鹵獲の砲車ひれふす前に

滔天の罪を重ねし兇惡の
國を懲せと星の如
人は集るエルサイユ宮

エルサイユ其玉殿に建業の
式を擧げたる敵の國
その崩壞はこゝよりぞ今

飽く迄も懲らささらめや天人の
ひとしく怒る兇暴の
虎狼無慚の元兇のむれ

監牢に入りし虎狼の爪牙みな
斷たでやまむや至嚴の
禍永く根ざししところ

元兇を飽くまで懲し、公道の
光かゝげよ、西東
瀆武を學ぶ邦の戒め

チユートンの領の要塞ことごとく
赤土と化さば安からむ
誰かラインの岸と限れる

フランスに課すべく毒の宰相の
四年の前に曰ひし聞け
應報まさに毒懲す時

鑑みよ東亞のむかし呉と越の

興亡の跡、おほいなる
禍、根より斷たでやまむや

「恐るべき年」を映ぜし大詩人
陶淵の夢めさめなば
其歌いかに此日此年

わが歌はかく、さはれ見る幽山の
覇國の興りまた滅び、
乾坤永し、一局の棋や

天上の星の世界に身を移し
想像の目に眺め見る
大局遂に蠻觸の郷

光榮をやがては神に皆歸せむ
斬滄のあと白骨の

かたへ夜半の星仰ぐ時

大能をやがては神に皆歸せむ
「不可知」の呼吸一瞬に
天造るべし地崩すべし

肉體美の清長

野口米次郎

特に上海(シャンハイ)を解纜しやうとする歐羅巴行の船へ驅けこむ男があつた。故國との絆をぽつり切つた爲め急に自由(或は放縱といつてもよい)の光で輝いた彼の眼は、波止場の水邊にたつてゐる二人の西洋婦人をちらりと見て不思議な歡喜に撃たれた。彼は三十前後の女性美を味ふことが出來る年配の男であつた。彼が見た一人の女は黑味がかつた綠の着物、他の女は白地を黑の線で拔いた着物を着て、いづれも短いスカートを着けて居た。彼は『さてはこれが雜誌で讀んで居る西洋の流行服だな』と思つた。そして彼は彼等の恰好づいた大な尻に注意した。彼の美に對する敏感は、彼等の着物のしたから包み隱さずさらけ出して居る肉體——落着いた强壯な——を意識した。彼は自分の船室に入つて、今日西洋に於ける女の服裝は單純な直線美の調整で肉體の存在を匿そふとするやうな不自然な臆病なものでたいと思ひながら『日本などへ西洋の新流行がきつこない、よし來たとしてもそれを着こなす西洋人が居ない、一言以てこれを蔽ふと日本は西洋人の掃溜だ、——日本は世界のどんづまりの濁つた溝池で、腐つた人間、廢物が安定を得る場所だ。僕は十一二年前、西洋から歸つて以來、日本でついぞ女らしい西洋人を見たことが無い、——肥つた豚のやうな女宣教師と痩せてひからびた半のやうな女教師のみだ。僕は美人を見ることが出來る點だけでも、今回の歐洲行を祝する』と叫んだ。

彼は誰だ? たれでも無い——僕である。ヨネ・ノグチだ。

靑い〱空と靑い〱水との間を走る海上の旅行位人の心を雜り氣なく正直に赤裸ならしめるものは無い。人生の頁と頁との中間にある白紙みたやうなもので、雜多な反省と更に一層雜多な追憶に耽けることが出來るのもこの海上旅行だ。僕は上海を去つて以來、どうしても棧橋の脇で垣間見た二人の西洋婦人を忘れることが出來なかつた。『何處かで僕は彼等を見たことがあるやうに思はれてならない、——勿論日本でないからひと昔前の紐育であるか、乃至は倫敦でか? それとも夢のなかかで

彼等を見たのか』と僕は獨語した。いろ〳〵と考へて居ると、彼等の肉付のいゝ横顔を背景付けた濁つた黄色の水が、寫樂の一枚物に見るやうな多少變色した雲母となつて見へて來た。僕は『はゝ古い浮世繪のなかで彼等を見たんだ、――彼等の色つぽい立姿は浮世繪美人の立姿だ』と叫んだ。すると彼等の白い顔色は急に茶褐色となり、大な眼はぽてつとしたうるみ眼となり、全體の顏の輪廓が平面的に思はれて來た。『彼等は鳥居清長の美人だ！』と叫んだ。

清長の美人式な彼等と僕はずつとの以前から相識の間柄であると僕は敢へて言ふ、――これに關して一條の物語がある（僕の追憶を聞いて呉れ給へ）。僕が最初渡米したのは十八歳で春心がによき〳〵目覺めかけた頃である。僕は何んなに日本の女を知らずにこのまゝ外國へ渡つて仕舞ふのを殘念に思つたであらう。僕が告別の爲め郷里へ歸つた時、僕は子供の時代からよく出入した隣家の古い貸本屋の土藏を見舞つて再び繪入り草双紙や東海道名所圖繪をひつくり返へして居ると一枚の美人畫が出て來た。僕はそれを貸本屋の主人から餞別に貰つて、内證でトランクの底に匿して日本を立去つた。その美人畫は鳥居清長の作であつたが、多分複製物の一枚であつたであろう。僕は船中で人が寢靜つた頃を見はからつてはこの清長の美人へ（一人の遊女に附添ふもの三名）を眺めては樂んだ。いよ〳〵船が桑港へ入る數日前の夜、僕は『男子がいやしくも志を立てゝ外國に遊ぶに女の思想に捕はれるとは不都合千萬だ、――僕は恥入つた』と叫んで、其晩（麗はしい晩秋の月が皎々と輝いた夜であつた）更けてそつとトランクから清長の美人を取出し固めて甲板から海中に投じた。鳥居清長の美人否な纎くちやに固められた紙は月光の下で油ぎつて大くうねつて居る太平洋の波の上で暫時の間浮いて見へたが、船がずん〳〵走るのでぢきに見へなくなつた。

其後、時には一面感傷的僕の心は宛も年若い美人を海中で溺らしでもした惡人のそれのやうに人知れず戰慄することもあつた。又時には、失つた美人を捜索する健氣な武俠青年の心持ちで勇ましい感激をいだき、歐米の古本屋乃至は骨董店を此處や彼處やと古い錦繪を漁つた。僕が二十幾年前月夜の太平洋中に投げ入れた清長の美人は、何んな打掛を着てそれに何んな模様――花であつたか或は木であつたか、又その名前は何んであつたか今日忘れて仕舞つて居るが、不思議にも僕の身邊に彼女の肉體美――昔アゼンでペリクルスや哲人プラトーを喜ばしたHetairaのやうな――がぼつとした影となつて出没して居る感じがしてならない。僕が上海埠頭で見た西洋の女に對して『彼

等に鳥居清長の美人だ！』と叫んだ時には、僕は僕自中の清長の美人と彼等との間にある類似點に撃たれたのである。

場面はずつと飛んで僕今巴里に居る、――昨日の雨此處へ着いたばかりだから何んといふ名前の街であるか知らぬが、巴里切つての盛り場のあるカフエーで我我四人の日本人（僕と同船で遣つて來た二名の滿鐵留學生と我我を案內した巴里通）が酒をちびり／＼飲んで居ると思ひ給へ。時は十一月の末。花の都の巴里を蔽ふ紫色の夜の霧を貫く金剛石の燈火の街のなかゝら、更に更に電燈美々しいこの酒と女の歡樂場へ乘込んで、少くも僕はその苛立つ田舍者の心を今しがた靜め得た所である。酒を飲み煙草の烟を輪に吹いて、急拵への巴里氣分をそろ／＼出し初めかけると、三々五々、盛裝を凝らして此處へ繰込んで來る巴里美人！　彼等の鷹揚な豁達な歩み工合は、大な氣高い動物のそれにも比較することが出來て、僕は思はずこれは昔の吉原で八文字踏んで道中する太夫の優雅さだと感じた。そして僕は『……此處にも鳥居清長の美人が居る！』と叫んだ。僕の空想（多くの場合に空想は事實よりも一層眞實である）は僕をして、僕が二十幾年前太平洋のなかに捨てた清長の美人が化けて來て巴里の遊君と顯はれたのであらうと思はせた。

僕はいつぞや西洋の雜誌で今日流行の女服裝は日本の浮世繪（この言葉と藝者といふ言葉位西洋でよく弘まつた日本語はない）の影響を受けたものだと讀んだことがあつた。殊に『肉體美』の女なる清長の美人などが着て居る日本服――無個性的な柔軟な情的な感じ易い、着用者の自由自在になる日本服のやうな着物が世界にまたと二つあるだらうか――から西洋の裁縫師は暗示を得たに相違ない。眼をつぶつてじつとして居ると、僕の前に今しがた見た女と清長の美人とが silhouette となつて顯はれ、僕はその兩者の恰好が如何にもよく似て居るのに驚いた。日本服は一番進步した服裝といふことが出來る、――何故なら、在來の西洋服のやうに着用者を傷付け不自然ならしめるもので無く、着用者の肉體と融和してその美の語勢を强めるアクセントの職務を司るものであるから。今このカフエーで見る遊君の服裝は「着用する女の魔力で美の表現となる日本服の眞實の本領に接近したものである。見よ彼等の着物の肩から脊に掛けての大い曲線は、清長の『東之錦』中の一枚『二人の侍女を連れたお姫樣』か或は潮汲みの繪で見る大い曲線美である。更に見よ、彼等が兩手を入れて步く大な羽や毛の Muffler は、清長の『雛形若菜の初模樣』の一枚あふきや內證路が前に結んだ大な遊女の帶の工合にそつくりぢや無いか。

僕の太平無事な空想は此處カフエーの酒の香氣と煙草の烟の

なかゝら眺めた巴里と、清長の畫家としての全盛時代即ち天明時代(千七百八十一年から千七百八十八年まで)に於ける秋は俄の催、春は櫻降りかゝる中の町とを一所に並べて考へさせた。德川初期時代の無邪氣な剛壯素朴も段々豪華な伊達風となつて、それが天明時代には更に變じて放恣な淫靡、纖巧な風流文雅となつて物質的現實主義が吹きすさんで來た。而してこの時代の情調を女風俗や歡樂的世相から表現した鳥居清長の藝術が肉體美を力說して居るのに何等の不思議があらう。更に又僕がこの現實的物質主義の巴里に德川中世期の遊蕩氣分が充實して居るといふのに何等の不思議があらう。僕は『身狹大袖ゆき短かひつこき髮や二ツ拆又二ツ櫛しどもなく雪の素足の花踏みし』といふ貞享時代から天明へかけての遊女の心意氣は今日の巴里の娼婦の方が遙か見事に代表して居るであらうと思つた。かふ考へて來ると、清長の肉體美の美人と巴里の遊女とが一所に絡み合つて來ざるを得ない。僕は『なる程! 西洋人が清長をよく了解して浮世繪派第一の大家とする理由は明瞭だ。春信の夢幻的表象が彼等に解らないとしても、清長の現實的肉體美は彼等に緣の極めて近い藝術である』と叫んだ。

場面は三度變つて僕は一友人の畫家と共に英國は倫敦の博物館の靜まりかへつた一室に座つて居る。時は灰色の霧深い十二月の中旬で、時間はまだ三時半を打つたばかりではあるが電燈は部屋について居る。僕の所望で今しも恭しい態度で館所藏の『清長』を持出して來たのは詩人ビンョン、――清淨教徒然たる彼生來の靜寂な心は東洋の文明と藝術に深く觸れるに從つてますますその落着いた內面的光輝を增して來る趣がある。彼は艷消しの人格である。僕等三人はゆつくり〳〵と清長の美人を批評し合つて見て行くと、此處へ館自慢の一枚即ち前記『潮汲み』が現はれた。一人の女は千鳥、他の女は波の模樣の着物を付け、彼等の帶はいづれも菊の模樣で飾られて居る。左手の女の片袖脫いで下へだらりと垂らした上衣の黑色が繪の上に強い影を投げて居る。僕が『この繪をじつと眺めて居ると、耳に長唄の出語りの美聲が聞へて來る』と語ると、僕の友人畫家は繪の上に現はれた澤山な平行線が奏する銀鈴的な音律を說いた。それから僕等は『雛形若菜の初模樣』を開いて樣々な『あふきや』(遊女屋)抱への太夫の姿を見た。新造や禿を連れた下界の天女! (團扇片手に提燈の下、向島を見渡す部屋の欄干に起つて居る春潮の柱繪がある)榮之歌麿などに描かれて居る。彼等は僕の知つて居るある詩人が嘗て、『何んたる古代の壯麗な人種が今日この我等の人間界を再び見舞つたのであるか? 靜かで淡白で氣

高い衆視を堪へて黄金のやうな鮮かな午後の空氣を歩いて通る』と嘆美したが、それは必ずしも感傷的な修辭とのみ云へない。僕は僕の友人に語つた『今日の西洋人は勿論日本人でも十八世紀の日本（享保時代から初まつて寛政時代に終つて居る）に於ける歡樂境に漲つた情調は兎ても了解されまい。其處を支配する女君なる遊女の勢力は實際絶對無二であつた。禿や新造數人を供につれた太夫の外出の堂々さは、今日如何なる國の貴族の奧樣と雖もそれ以上に出ることは出來まい。外出から家へ歸へると、お抱への醫者が恭しく伺候して太夫の脈を見る。此處に太夫の座る緞子の座蒲團がある、其處に太夫の飲む玉露一杯がある、——太夫の生活が如何に羨望の的であつたかは容易に想像せられ得る。言葉でこそ太夫を買ふといつたけれども、それは彼女の美に接して情調的新しい人生の new chapter を開きたいといふ希望に過ぎなかつた。事實に於ては非道徳な生活であつたが、その精神上に於ける彼女の純白は案外に防護されて居る。彼女のあるものは歌人であり又あるものは畫家であつた、一人として愛戀に行爲に自由思想家で無いものは無かつた。彼女は不自然な束縛された冷かな倫理世界に反抗して情調一點張りの城廓ロマンチシズムを建設してそれに籠城した。眞實な意味に於て彼女は lover であり得る特權の所有者であつた。彼女の生活は愛戀の歴史であつた。かふいう女君を描いた浮世繪師に痛ましい心の躊躇があつた筈がない。彼等は名譽とまで思たつであらう。僕は必ずしも今日に彼女の生活の復活を希望するものでないが、十八世紀の昔に斯かる事實を殘した日本に對して感謝する所が多い。』

僕と僕の友人畫家は博物館を去つて、英國今日の大畫家の一人である某ローヤル・アカデミシアンの畫室をポーランド公園附近に訪問して彼の珍藏する naughtypictures 即ち春畫（春畫とはいゝ言葉だ、かういふ言葉の上でも東洋は藝術國だと僕は思つて居る）——清長から北齋に至る著名な浮世繪師が描いたもの十數枚を見せて貰つた。『此種の繪に顯はれて居る異大な驚くべき構圖の妙は、我々西洋人をして益々浮世繪師に對する尊敬を增さしめる』とこのローヤル・アカデミシアンが僕に語つた。所で僕は彼の言葉につゞいてから語つた『この清長の「大顏」は殘念ながら餘り優秀な作でない、……北齋の奇怪に誇張的な態度はこの種の繪にも情の發露を齎らさない。然し浮世繪研究者は實際是等の naughty pictures を見ずしてはその全班を解したものとは云へない。これは動きの繪で表面的倫理を離脱して abandonment の仙境に入つた表現である放縱な赤裸の抒情詩である、又感激の最高程度に達した人間味の眞實であ

る。この動きの繪を見てから再び浮世繪師の一班世間に行はれて居る靜まつた繪を見給へ。普通は無表情だと言はれて居る彼等の美人が如何に生き〳〵して見へて來るであらうか。人間に兩面がある、――日本人の藝術的表現の大な一面は靜止である、嚴肅である、又沈默である。言ひかへると感激が急に無言の境地に入つた不愛想な瞬間の藝術で、狂氣した情調が自制的な沈着に觸れて平凡化したものである。僕は一斑の浮世繪も此範疇の作品だといつても差支ないと信じて居る。そして浮世繪師が描いた動きの繪から我我は彼等が、人生の眞實を內外表裏兩面から表現して藝術の完全なる全部を期して居たことを知ることが出來る。靜動兩面の繪を描いた點に彼等が浮世繪師の浮世繪師たるところが飛動して見へる。彼等の靜まつた繪は動きの繪があつて益々靜肅を極め、後者は前者を得て益々活動して見へる。彼等は赤裸な人生を見た自由な勇者であつた。彼等は眞實な人間味の藝術家であつた。』

僕の滯英（滯倫敦といつた方が正確だが）十箇月は色々な意味で愉快であつた、――又それが滯巴里十箇月であつたならば、更に更に愉快であつたかも知れぬ。僕は餘暇ある時いつも倫敦の街を歩いて英國人の世相を街上から覗いた。ある時はピカデリの珈琲店の窓近い場所に座つて、外を往來する美人の着物が平行的に波打つ美觀に注意すると、僕の頭腦には直ぐ清長の『東之錦』のうちにある『三歲の女のお宮參り』や『五歲の男の子のお宮參り』などを浮べた。清長のどつしりと肥へた背の高い肉體美の美人は日本人よりは寧ろ西洋人に近い。いく度僕は『清長の現實的表現が西洋人の了解に入り易い理由は明瞭だ』と叫んだか知れない。又ある時は街上で雨に擊たれたり或は風に吹れたりして着物を亂し、細い脛（僕滯英中靴下を穿いて居るか穿いて居ないか分らない位の薄い肉色の靴下穿いた若い女を時時見た）を無遠慮にさらけ出して走る女を見ると、僕は直ぐ清長の柱繪の一枚で『上部に藤、下部に細い手で着物の合せ目を抑へ白い脛を出した女』の繪を思ひ出した。この繪の表情に今日日本で何處へ行つても見ることは出來まい。然るにこの表情――自由な快活な艶美な――は倫敦の街上にころがつて居る。僕が清長は日本の今日に通用するより寧ろ西洋に通用する藝術の所有者であつたといつても、それは必ずしも誤つた言葉であるまいと信じて居る。浮世繪が生きた世相の繪として珍重せられることは少しも不思議でないと僕は思ふ。實際西洋の現實と合體するといふ點から見ると、清長は歌麿以上である。歌麿は現實を藝術化してArt for Art's sakeに入つたので、現實の人間味から離れたところがある。

倫敦の春も漸く熟して紫色の霞たなびくハイド公園の日曜などにぞろぞろと人が出盛る時、僕もよく其處を散歩したものだ。かうかう場合に僕は木の下や草の上で抱き合つたり又接吻し合つたりして居る男女の群を幾組も見た。彼等は酒こそ飲まず又三味線こそ彈じて居らぬが、僕はそれが清長の二枚物『當世遊里美人合』(天明五年頃の作で變化ある描線と優美な構圖で勝れたものが含まれて居る)などによく發見せられる場面であると思つて眺めたことがあつた。僕は西洋へ來て初めて實際に浮世繪の情調に觸れることが出來たやうな感じを得たのを喜んだ。日本に浮世繪は亡びたといふことが出來る。浮世繪的藝術心が稀薄になつたのは、日本の世相人生に浮世繪の情調が烟滅したからであらう。そしてそれは日本が昔の浮世繪の名品を海外に放擲して顧みる所がなかつた大な理由とも云へる。

僕の滯英日記(決して忠實に書いたもので無いが)の某所にかういふ言葉が發見せられる、「僕はこのハームスウオルスの浮世繪展覽會をサウス・ケンシントン博物館で見るのはこれで三度目だ。ずつと一渡り目を通して再び鳥居清長に歸つた。何處の浮世繪展覽會でも春信の展覽會でなければ歌麿の展覽會であり、又さ無くば清長の展覽會となるのは普通だ。所でこのハームスウオルスの蒐集は清長の上では必ずしも重要なものとは云へないが、それにしても清長の見事なもの十枚や十五枚は發見せられる、——十枚乃至十五枚の立派な清長！ それで充分だ、それ以上は望めない。かうずらりと並んだ清長の美人を見て居ると、僕は二十幾年前太平洋中に投じた「清長」を心に浮べて來る。すると是等の清長の美人が僕を「この不人情な野蠻人め」と苦い顏をするやうにも思はれ、又「この非藝術的な破廉恥漢め」と嘲笑してお互に顏を見合せて居るやうにも見へた。人は僕を感傷的に興奮して居るといふだらう——實際だ、異國で彷徨つて居ると、誰れでも感傷的になる、僕をこの點で攻擊するのはいささか酷だね！ 僕は是等の清長の美人の眼を恐れて目を潰つたと思ひ給へ。そうすると彼等は忽ち何處へかばらばらと消へて仕舞つて、後に赤裸な大理石の像一箇を僕の眼前に殘したやうに感じた。僕は「はゝ清長は肉體美だ！」と叫んだ。」

肉體美の鳥居清長——この言葉で盡きて居る。諸君、試に彼を技工の制限の爲め時には不思議な魔法の力で自腕を純一に統一し得た原始時代の作家(師宣祐信から降つて豐信清滿までを含んで居る)に比較して見給へ。又試に彼を不自然な美人の姿は總ては作家の藝術的弛緩倦怠を表白したと評される所謂頽廢時代の浮世繪師(この中には歌麿以下初代豐國并に豐廣を入れ

て、この以後の作家を墮落時代のものとして居る）に比較して見給へ、如何に清長の美人が手足福やかに、又順當に發達した强壯な體格をして内面的生命の均勢が輝いて居るのを見るだらう。再び僕をして『肉體美の鳥居清長！』と叫ばしめよ。ある西洋の批評家は彼の美人を見ると一種の威風に撃たれて自然に『神の國のお姫樣』に接して自分の醜い身體が踢んで仕舞ふやうな心持がすると書いて居る。この批評家も僕同樣に感傷的な嘆美家であらう、——また僕自身は優秀な浮世繪の美人に對して感傷家たることが出來るのをいささか誇るのである。完全な『清長』には自然ではあるが高潮に達し自然に感激した想像上のコンペンションがある。それは彼の長所であつて、このコンペンションこそ希臘彫刻のそれにも比較することが出來ると僕は思つて居る。恐らくは豐春を除くとこの清長位、裸體に對して純一な希臘的感情に近い或物を表現した作家は無いといつた西洋人に僕は同感である。僕は『肉體美の清長』と叫んで彼の裸體を語るけれども、それは彼の美人は着物を纏つて居ても手足骨格ありありとその實在の感を人に與へるといふ事實から云ふのである。湖龍齋の美人を見給へ、豐富な模樣の付いた着物のため人はその肉體美の實感に觸れない。清長の美人は槪して單純な薄い服裝をして居る點もあらうけれども、彼に裸體美に對する現實的な痛切な感度が無かつたならば、何うして斯くの如き作品を與へることが出來やう。

浮世繪發達の第二期時代を最も花々しく劃した畫家は云はずと知れた鈴木春信である。この『お伽噺の春信』の後を受けついで第三期の浮世繪圓熟時代を完成した大立物は清長其人に外ならぬ。原始時代云ひ替へると簡朴時代の浮世繪畫家の藝術的衝動は所謂裝飾美に初まつてそれに終つた。西洋の批評家の言葉を借ると、單純な特殊な表現をたゞ線の動作で出そうとしたもので、現實の形を斷片的に取扱ひその斷片を無遠慮に自分勝手に繼ぎ合せて作家の氣儘な夢を具體化させたものだ。彼等の藝術的態度は「想像的な純直」の一言で蔽ふことが出來る。彼等の藝術は『青春』夢幻の遊び』以外に何物でもない場合が多かつた。然るに第二期時代の浮世繪畫家、春信にせよ又春章（春章のことを考へると僕は直ぐ東京美術學校の所藏と聞いて居る彼の竹林七妍人の掛物七幅つゞきを一度見たことがあるがこれを今に忘れない）にせよ又一筆齋文調にせよ、彼等の作品の大部分は近代語で評すると表象的である、——決して現實的描寫でない。彼等の藝術上の觀念には敏活な意識が無かつたものと見ねばならぬ。彼等は人をしてその藝術の妖幻なインカンテーションに觸れさせるのを重要な中心の意義としたものだ。

繰返へしていふと原始時代の裝飾的衝動と第一期時代の純直な藝術的想像か、第二期時代には自然的現實の發表と進化して居る。これは如何にもそうあるべき自然の進化であると言はねばならぬ。第三期時代の作家は個々の藝術的特質を語らうとしたばかりでなく、忠實な尊敬深い態度で取扱つた材題の素質を研究もして居る。詰めていふと彼等以前の第二期時代の特調を保守してその上に現實味即ち人間味を出そうとした努力が彼等の仕事であつた。春信は眞實の世相人生を平氣で捨てゝ、色彩の快調をお伽話式に追求した稀有の畫家である。然るに第三期時代の代表作家鳥居清長は、如何に創造的想像に强ゐられてもそれを現實以外に奔逸せしめなかつた點に彼の偉大な特質がある。實際彼が藝術家としての一大權威を握り得たのは其點からである。

外面的技工上、早い時代の浮世繪師は自然の背景を重要視しなかつた。又多くの場合ではそれを使用し得る程度に彼等の藝術は復雜な表現を要するものでも無つた。然るに第三期時代の作家は、その描寫しやうとする人物を更に現實ならしめる爲めそれを實際的背景の美のなかに織込んで居る。清長だけを例として、彼の『牛若丸が淨瑠璃姬の館の前で笛を吹いて居る』三枚物や『江之島詣で』の三枚物（中部にある江之島の全景の前に駕籠に乘つた女、左端の一枚に女二人、右端の一枚に床几に腰掛けた女に富士山の遠景といふ彼晩年の傑作の一つ乃至は六郷川の二枚物を見ると、如何に彼が背景と人物との配合調整に巧妙であつたかを容易に知ることが出來る。この第三期をもつと嚴格にいふと、浮世繪歷史の第一装飾期に入る最初の章を開いたものと見るべきであるかも知れぬ。詰り第一第二兩時代の漠然たる理想派と第四期時代の裝飾藝術との中間にはさまつて、その結果から見ると巧に其等の兩極端を程よく融和結合して居ると見ることも出來る。

第一期第二期共にそれ〳〵代表者を持つては居るが、清長位完全に思ふ存分第三期時代を支配し統治した畫家は無つた。清長の仕事は實際浮世繪世界の偉觀であつた。彼は後れて生れた藝術家の特權を最も有利に使用したのである。過去に於て努力し時には滿足し、又時には疲勞し失望して畫筆を投ずるに至つた幾多の畫家の藝術的結果を、彼は一身にそれを集めその種々な特調美質を豐富な天賦の音律でそれ〳〵見事に整齊したのである。多くの畫家に幸運の爲め却つて迷はされ遂には自分を欺き墮落するに至つた例を見るけれども、清長に至つては自分の幸運を自由に支配した。其處が彼の偉大な點だ。然し彼の全盛期を天明二年から八年即ち彼の三十一歲から三十八歲に至る七

年間と見ると、彼の藝術的生命も驚く程短いものであつたと云はねばならぬ。

其他數多い浮世繪諸家同樣に彼自身の歷史も闇黑のうちに葬られて居る。浮世繪備考などでは僅々三行足らずで取扱はれて居る。西洋の浮世繪研究書には千七百四十二年即ち寬保二年の產れで千八百十五年の文化十二年に死んだと書いてあるが、橋口五葉氏の彼の略傳に依ると、淸長は寶曆二年（千七百五十二年）の生れとなつて居る。彼は相州浦賀の人阿波屋甚右衞門の男、姓は關口、通稱は市兵衞、江戶本材木町一丁目で白子屋といふ書肆を開いて居たところから、その居所の通稱で人は彼を新場の淸長といつたさうだ。三代目鳥居淸滿に學んだ（彼の靑年時代に描いた細繪形式の役者の似顏を見ると師匠淸滿の影響よりは寧ろ春信のそれが多いとある批評家は書いて居る）、そして淸滿の沒後適當な相續者が無かつたので彼は四代目を名乘るに至つた。然し彼は元來鳥居家に產れた人でないので、彼が六十四（橋口氏に依る）で死んだ時自分の生家の菩提所江東回向院で埋葬された。墓石は今無いけれども同寺の過去帳には法號を長林英樹信士として載つて居るさうである。淸長は二十一歲の頃から已に一家の畫風を成して、三十歲に入つた時は彼が全盛期に入つた時であつた。彼は恐ろしい早熟の人であつたと云はねばならぬ。然し彼が鳥居家を相續してからは自然に芝居看板繪の製作に忙しく（又師匠淸滿の遺孫庄之助の教育にも注意を拂はねばならなかつたので）寬政半以後に至つては、まるで浮世繪版畫の作品が無い。

淸長の初期時代の作に春信の暗示と影響に動いたと思はれるものを發見するが、彼の時代の浮世繪師で多少たりとも春信の感化を受けなかつたは無いのであるから、彼の場合も決して異例でない。又彼は遠く溯つては菱川師宣の音律的に豐かな線を研究し、更に又彼の描いた美人の風姿を艶麗高雅の點から見ると奧村政信に負ふ所があるやうにも見へる。それに加へるに重政や湖龍齋から得た藝術の明晰な均勢と構圖の諧調を以てして、此處に彼は所謂淸長式美人畫を完成するに至つたのである。嚴肅もあり又優美もありそれに又壯調な現實的忠實さが加つて居るのだ。

人は一度彼の美人を見たならばさふ容易に彼の藝術を忘却することは出來まい。何んたる靜謐の擧動を彼の美人が持つて居るぞ。又人はその美人の麗はしい嚴肅は溢れる愛情を放恣ならしめない安全瓣であると感ずるであらう。ある僕の友人は評していつた、「かゝる美人はヲリム・パス山上の產物で理想の具體化したものだ、――然しその根柢を僞らぬ現實の上に据へ

て居るので、清長の繪には一寸も動かせぬ安定さがある。彼が現實を尊敬したことは明白だが、その後の畫家のやうに現實の賤しき欺瞞や誘惑に捕へられなかつた點が彼の偉大な所である。彼の藝術はそんな薄弱なもので無い。浮世繪師としての彼は實際一頭地も二頭地も拔いて居る。彼は彼の時代での眞實なる現實派であつた、——もつと正確にいふと、彼の藝術を理想を現實で肯定したものである。彼の美人の肉體美は單に寫實で止まらない。彼の作品は寫眞で無い、——眞實なる藝術である。』

彼の三枚物は今日西洋の市場でも手に入れ難いとなつて居る。勿論日本の商賈人の店に[illegible]の立派な三枚物があるとは思はれない。西洋では東州齋寫樂を除くと、價の高い點で彼は浮世繪畫家中の隨一となつて居ることはいふまでも無い。彼の三枚物で極上等の狀態であるならば、それは優に二千圓以上の價を呼び、普通のものでも千圓以下では買ふことが出來まい。元來この三枚物は一枚〱別々に鑑賞することが出來るやうに構圖されて居るから端物でも決して安くない。今ハバー蒐集の相場付を見るに、藤の花の下を通行する美人群の端物が二百圓、又鳥居の前に美人二人、老松の側らなる石の橋を渡る美人二人、その他に男や女の子供の群といふ三枚物の端物一枚が百四十圓で賣れて居る。然し今日の相場はその二倍にもなつて居るやう。『牡丹園を見物して居る玉屋內室』の三枚物、或は隅田川岸の茶屋の桟敷に夏裝束の女がいくたりも座つたり起つたりして居る三枚物の端物でもいゝから一枚僕は手に入れたいと思つて居る。

彼の三枚物で一番有名な作は前記淨瑠璃姫の笛の繪であらう。左の一枚に笛を吹く牛若丸と二人の侍女、中央の一枚に四人の侍女その一人は左の手に雪洞を持つて居る、右の一枚に起つた淨瑠璃姫と三人の侍女が描いてある複雜な構圖であるが、彼は春章の奇僻も春信の精緻な優美も又湖龍齋の滋味も犧牲にして、巧妙に統一された律奏で畫面全體が震動して居るかの感がある。實に線と色と人物と背景とが皆な悉く壯麗無比な一理想境を織出す必要な要素となつて、相互に讓り合ひ其れ〱相助けて此處で一大ハーモニーを作つた。何處にかういふ稀有な三人物を見て嘆美の聲を發せざるものがあるだらうか。一人立ちの肖像で獨奏の妙を盡さしむる點では歌麿は清長以上の技工を所有して居たと思はれるが、爛熟時代に於ける清長の復雜な構圖や背景と人物の配置に對する天才は確に浮世繪世界の偉觀だといふことが出來よう。

嘗てフエノロサの所有であつた『清長』は今では幕斯敦のスボ

ンデング蒐集の誇となつて居る。紐育のマンスフキールドでも又市俄古のバッキングハムでも人に威張つて見せられる清長物を持つて居るそうだ。倫敦のハームスウオルス蒐集中にも、前いつたやうに十枚や十五枚の勝れた『清長』がある。又巴里の蒐集者の掌中には或は英米以上の逸品が握られて居るかも知れない。嚴重にいふと七八年間、長く見てもたか〲十二三年間の製作だが、彼もその他の作家同様に澤山描いたに相違ない。然し今日殘つて居る彼の作品は數がそう多くはない。とはいへ何日何時日本の何處からこれまで發見されて居ない彼の名作が不思議な運命で世に出ないとも限らない。

彼に湖龍齋式の縱横一尺五寸と一尺の一枚物や春信式の小い四角の描面も無い。又春章や湖龍齋の得意とした細長い柱繪にも注目すべき作品があるが、勿論彼の壯大な構圖は彼の三枚物と二枚物のなかに求めねばならぬ。寛政時代は已に彼の衰頽期で、遊女の繪でく〲肥つた新造が付いて居る作品は多く彼の作家としての晩年に屬したものである。

明和七年に四十六歳で死んだ鈴木春信はこの時代に於ける浮世繪世界の最大損失であつたに比すると、鳥居清長の死（文化十二年乙亥五月二十一日於本所番場町）はさほど深い哀惜の感を與へない。清長はその前長らく版畫の製作慾を失つてその筆を斷つて居る。假令彼の全盛時代が短かつたにせよ、彼の眞實なる仕事はその間に完成して居る。彼の大なる製作は已に終結して居る。功成り名遂げて彼は浮世繪世界から退いて而して死んだのである。

僕は今この文を書き終つて筆を投げんとするに際して、再び英國に於ける僕の友人が『今日は清長の時代だ』といつたことを思ひ出した。僕は『肉體美の清長……肉體美の西洋……あゝ肉體美なるかな！』と叫んだ。

露西亞の外套

山本鼎

昨年の一月元日、僕は露西亞の外套を着、雪靴を穿いて、五年の長旅から信濃の親の家へ歸つて來た。其外套に包まれて、今朝も、くぬぎ林の散點する高原の、凍てた畑中に立ち、雪を浴びた野山を寫生したのであるが、僕は今、うづくまつた熊のやうに室の隅に脫ぎおかれた其防寒具に動機して、追憶と今日の事とを語らしてもらひ度い。

千九百十六年の十月、莫斯科で僕は寒さと心細さに顫えて居た。巴里を發たのが六月二十日だから、とつくの昔日本へ歸り着いて居る筈を、船路が厭なのと、北歐の美術を觀たいのとで郵船の切符を倫敦で金に換へ、遠く露西亞を迂廻する事にしたために、莫斯科の停車場へ降りた時には、たつた十三ルーヴルしたか有たなかつた。僕は巴里を發つ時に、豫め此なりゆきを計量して居たから、巴里に居る露西亞の學生から莫斯科に住む二人の露西亞人に宛た紹介狀を用意し（此封書はトロネアの戰時檢閲所で取り上げられてしまつた）萬一の要心に、里昂の美術館で一と月ばかりかゝつて作つたピュヸイス、ド、シヤヷアンヌの『基督信者の靈感』といふ壁畫の、模寫を携へた。金のなくなつた時露西亞の美術好きにそれを買つて貰はうと考へたのである。そんなわけだから、莫斯科へ着いた時、一夜の宿代にも覺束ない位の金しか有たないのをさほど哀れにも思はなかつたが、雨降りだつたのには弱つた。なるべく領事館まで歩かうと思つて、本屋を搜して市の地圖を求めたが無いので、雨に濡れながら、だいぶ街をうろついたあげくに、少年の馭者をつかまへて、二ルーヴル二十五カペックの代で辻馬車を日本領事館に馭らした。巴里の泗水君がくれた領事への紹介は有效だつたし、領事（此人は昨年故人となつてしまつた）も領事夫人も、領事館員も皆珍らしい親切な淡泊な人達であつたから、僕は美術館に通つたり、芝居を見たり、寫生をしたりして、うか〳〵と五ケ月間を領事の別莊と官宅に寐してしまつたのである。此處には舒述を端折るが、露西亞の秋は實に美しかつた、なぜむ

の、涙ぐまるゝばかり澄み徹つた空や、白樺の黄葉林や、黄金の擬寶珠の街殺の寺々を描きに描かなかつたかと、つくぐ自分の臆病と無精とを咀ふのである。秋に見惚れて居るうちに、霰が降り出した。僕は歸路の事と外套の事をしんみりと考へた。そして直ちに考案の實行に取りかゝつた。考案の一つは、模寫畫を賣る事で、これは幸ひに、故本野子爵が話すとすぐに買つてくれた。も一つの考へは、日本の風景を水彩畫に作つて露西亞人に賣る事で、僕は片上君から『日本風景寫眞帖』といふ厚い本を借りて來て、その寫眞をモデルに、一週間ばかり費して七枚の水彩畫を作り、クズネス キイ モストの大きな畫商に見せたが、露西亞人は、水彩畫よりも油繪を好むと知つて、うんざりした。處が、渡邊書記官が、手輕く電話を、或金持の夫人にかけて、とにかく其畫を見やう、といふ段取りに運むでくれた。其夫人といふのは鑛物の採集を道樂にして居る極めて日本びいきな人で、僕がずいぶん氣まり惡く其七枚の水彩畫を出して見せると、胸のあたりに、ふつくりした手の指を組むで、『おゝ奇麗!!』を二三度くりかへしたのには、ほつとすると共に、消え入り度い程氣恥かしかつた。併し、おかげで、更に多くの金を獲たので、早速、片上君に伴はれて、外套を買ひに出かけたのであつた。僕は、襟を羊の卷毛で飾り、胴裏に狐の毛皮のついたのを買ひ度い氣持で出かけたが、幾軒も古着屋を廻つたあげく、自分のものに定つたのは、羊の毛の擬ひで襟を飾つた、重く硬い綿入れの外套であつた。それにも拘らず、豫定の價よりは四十ルーヴルも多く支出せねばならなかつたのだ。僕は更に、羊の卷毛で造つた帽子と、羅紗でこしらへた雪靴を買つてかへり、翌日から揚々と着て廻つた次第である。あの、重い外套を着て、雪の街路をぼくぐ緩歩する時は、何となく裕福な氣持になる。露西亞の細民の重な財産は、實に此重い外套とお湯を沸す道具だといふが、まつたく、彼れ等にとつて、貴重であると共に親愛なる財産に相違ない。僕は、西伯利亞は無論の事、東海道でも着通した、そして郷家へ歸り着いてはじめて脫いで父に獻上したのである。僕の國は雪國だし、父は醫者で、吹雪の日にも往診をせねばならぬ境遇だから、此土産は持つてこいであつた。父は屠蘇機嫌で其重い外套を着、毛皮の帽を冠つて、近傍の村々へ年賀をかねて、悴の歸郷を具體的に知らして歩いたが、二三度着て歩くと、重すぎていけないといつて、僕にかへしてしまつたのである。

○

今日僕は、村の小學校で、『兒童の繪畫教育に就て』といふ題で初めて演說といふものをやり終せた。聽衆は二十人ばかりの

小學校の先生達であつたが、唐草を染め出した茶色の羅紗を掛けたテーヴルのもとに立つた時、僕は自分の氣の弱さにすつかり怯けてしまつた、でも、慄えたり、どもつたりして、大要左のやうな事を喋べつたのである。

『私は兒童の繪畫教育を一變し度いと思ひます。臨本教育を廢して自由畫の奬勵に努めたいのです。私の此希望は、「學齡期前の兒童の畫はたいてい面白いが、それが學校へ通ふやうになると皆惡くなつてしまう」といふ現象が、專ら臨本教育に由來する事を直覺した事から來て居るのですが、理論としても、大人の作つた一定のお手本に、兒童の畫的表現を導く事はいけない事です。小供の畫は小供の眼に、心に、印象し感覺した彼れ等の實相である點に意味があるのですから、大人の認識を以て小供の畫に臨む事は間違つて居るのです。小供は臨本、大人は粉本で修業する事をすつかり廢してしまはなければ、日本の美術及美術工藝は純正なものにならないと思ふのです。「露西亞の農民細工が、すてきに面白く、輸出品として大きな年額を國力に寄與して居るのも、彼の國に自由畫の奬勵が盛んである事に原因して居るやうに思ひます。私は、日本の小學校の繪畫教育の現狀がどんな風であるか悉しくはまだ知りませんが、新定畫帖に基く教授法を見ると、臨畫と寫生とが半々或は寫生の十五課に對して臨本が十七課であつたりして居るといふ事でも繪畫教育が必要のものとせられて居る事は爭はれません。それに、教師用書なるものを見るに、繪畫教育の方針が全然間違つて居るやうに考へられます。例へば、自然の觀察法を、組織的觀察と美的觀察に分けて居て、『鷄脚や啄木鳥の跡は中の一本は前に向ひ、左右の二本は後に向つて居る。鷄の甲の鱗甲形は中央に五枚、兩側に四枚づゝ並び都合十三枚ある』といふやう事を學ぶのが組織的觀察であるとして居るのです。又、『臨本を作つた人は實際的に見えるやうに、且最も美的に現す樣に非常苦心して描いたものだから、兒童は手本に對しては恰も畫者其當時の心情を思ひ遣ることが肝要である』などと、馬鹿氣てむづかしい注文をして居りますし、『臨畫教授は畫手本が準備で實物や模型は單に說明上の方便であるから……』なんて、まるであべこべな意見も見えるのです。『長い直線の歪みたるは眼と水平に畫を上げて明るき方に向ひて發見すべく』なんとも云つて居ます。それ程歪まない線を描かせたいなら、定木を使はせるがいゝのです。『茶碗花瓶の左右相稱形のものは畫面を回轉して眺めて正否を判明すべし』といふのですが、これは、用器畫にでも云ふ事です。又薔薇の畫に就ての希望として、『花瓣は紅色にして表面は濃く裏面は淡き事、萼は五片に分れて綠色なる事、核に細かな

る鋸齒狀の缺刻ある事、葉柄の基に附着したる部分に二枚の托葉ある事、莖は綠色枝は褐色にして所々刺を有する事』といふのですが、而も、此畫を、十六切の用紙に色鉛筆で畫かせる事になつて居るのですが、希望通りの事は大學の標本描きでも骨の折れる事です。そも〳〵斯の如きは、他の學科、例へば植物學の補助畫學であるのです。勿論私は、實際の場合に斯樣にしちむつかしい教授法は行はれて居まいと思ひますが、以上の數項に觀ても、日本兒童の繪畫教育といふものが、馬鹿げた方針に基づいて居る事が察しられるのです。私はまづ、繪畫教育の根本精神を確定する事を要求します。それから、無拘束な自由畫の奬勵です。吾々の大人の畫の表現は、印象感覺とに初まつて、認識の廣野に踏み入るのですが、兒童のそれは、印象と感覺に始終して、認識の量は殆ど無いといつてい〻位に稀薄なのです。兒童にむづかしい觀察を要求するのはいけません。畫は教育せずに單に誘導していたゞき度いと存じます。兒童が自然物を畫にして樂しむうちに自づと美の情操が養はれてゆく事を信じて下さいまし。ですから、諸君は、少くとも十二三位までの兒童には、何事をも教へずに、採點の如きも、多く熱心に畫を作る兒に高點を與へるやうにしたらよいと思ひます。私はむしろ、圖畫の時間は廢してもい〻と思ふのです。そして學校外で畫いた畫でもなんでも持つて來さして、興味を有つて見てやつたら、それでよからうと考へます。要するに、彼れ等の實際生活に獲たる繪畫を奬勵すべきです。故に、私は自由畫の範圍に、寫生畫と、記憶畫とを認め度いと思ひます。美術上の精神は一つです。算術には二二が四といふ正しい普遍標準がありますが、美術には左樣なものはないのです。自分の印象から、感覺から、認識から命じられた表現――そのものが正しい形なのです。……』

私の此議論は、教育といふ文字に囚はれた觀念を脅かすものであつたかも知れない。併し教員諸君は、非常な興味を有つて僕の說を賛成してくれた。そして近く郡の兒童の自由畫展覽會を催す事を承諾してくれた。其場合僕は名譽ある審査員を承る事に決定したのであるが、臨畫の悪影響を審査排斥する事が其役目なのである。

酒合戰物語

田中貢太郎

大師河原酒戰抄

人は鷹揚で、寛大で、たゞ酒の徳を知つて、その害を知らない頃の事であつた。それは慶安二年の八月――遊歷雜記の著者は三月と云つてゐる――であつた。茨木春朔は六郷河畔の南河原の宿から、十五人の酒友を伴れて、大師河原の名主池上太郎右衛門行種の許へと出かけて行つた。

春朔は醫師であつた。酒井雅樂頭の家士で、江戸大塚の下屋敷に住んでゐた。大の酒豪で一斗五升の量を持つてゐると云はれてゐた。彼は己の好敵手として聞えてゐる太郎右衛門と酒量を戰はす積りで、出かけて行く所であつた。彼は自から大塚の地黄坊樽次と云つてゐた。太郎右衛門には、池上太郎右衛門尉底深と云ふ名乘があつた。又、二人の酒友にもそれ／＼名乘をつけてあつた。その日、樽次と一所の酒友には、鎌倉の甚鐵坊常赤、江戸赤坂の毛藏坊鉢呑、新井宿の半齋坊數呑、川崎の小倉又兵衛忠酔、多摩郡菅村の佐保田某酔久、江戸小石川の佐藤權兵衛胸赤、平塚の來見坊樽持、江戸舟町の鈴木半兵衛飲勝。江戸淺草の名古屋半之丞盛安、木下杢兵衛尉飯嫌、江戸小石川富坂の三浦新之丞樽明、江戸麻布の佐々木五郎兵衛すけ呑、同孫三左衛門酒丸、八王子の松井今兵衛夜久、齋藤傳左衛門忠呑など云ふ名乘の付いた人々であつた。その中で、三浦新之丞樽明は、小笠原信濃守の家士――その墓は小石川戸崎町の祥雲寺の中に在る、法名酒德院醉翁樽枕居士――であつた。齋藤傳左衛門忠呑は、樽次が逗留してゐた南河原の茶屋の亭主であつた。甚鐵坊常赤は、五十歳前後の大入道であつた。もと鎌倉の眞言宗の寺にゐたが、ある日、隣家の雞が餌をあさりに來てゐたのを殺して喰つた爲めに寺を追はれて、その頃では樽次の弟子のやうになつてゐる者であつた。

一行は川崎の人家を右に見て、夕陽の射した秋の野を行つた。畝のやうにうねりの多い壟地の上には、尾花に交つて萩や白[illegible]

木が紅葉してゐた。水鳥記には、『比しも八月中旬の事なれば、處々はもみぢして、木々の梢も酒に醉ひたるかとうたがはる。』と云つてある。

臺地をおりた所で、路のふちに仰向に倒れてゐる若い男があつた。樽次は傍へ寄つて行つて、『おい、おい、おい、』と呼んだ。若い男は心地好ささうに鼾をかいて睡つてゐた。酒を飲んでゐるのか、酒の匂もした。

『酒に醉つてゐるらしいな、末頼母しい奴だ。』と樽次が云つた。傍にゐた甚鐵坊が大きな地聲を出して呼ぶと、若い男はやつと眼を覺して、己の周圍に立つてゐる人々の顏を不審さうに見た。『おい若いの、どうした。』と甚鐵坊が云つた。

『川崎へ杵を賣りに行つて、歸りに一杯やつた所が、好い氣持になつたので、ぐつすり寢込んでゐた所を起されて、折角の酒が醒めてしまつた。惡ひ戯をしたもんぢや。』と、若い男は頬を脹らまして舌打をした。

『慍るな、慍るな、お前さん飲けるのか。』と、樽次がにこにこしながら云つた。

『酒なら幾等でも飲まア、今日も杵を賣つた奴で皆飲んでしまつた所ぢや、何もかも酒の爲めにや臺なしぢや』

『そいつは頼母しい。どうぢやの。これから乃公に隨いて、酒合戰の供をするか、』

『なに、酒合戰。』

『さうよ、これから大師河原の池上へ押し寄せる所よ、』

『ぢや、底深どんの所ぢやな、』

『池上太郎右衛門尉底深征伐に行く所ぢや、その方にも供を許さうか、』

『そいつは有難いな』と、若い男はのつそり起きあがつた。

『その方は何と云ふ名ぢや、』と、樽次は又云つた。

『喜太郎つて云ひます。』

『さうか、今からお方に喜太郎醒安と云ふ名乘りをつけてやるから。敵に背後を見せるな。』と云つて、樽次は甚鐵坊に向つて云つた。『盟の盞をやれ、』

甚鐵坊は腰につけてゐた大きな瓢簞の酒を滿々と注いで出した。喜太郎醒安は、それを一寸戴いて飲んだ。皆手を叩いて笑聲を野の面に漲らした。

池上太郎右衛門行種の太郎右衛門尉底深の住居は、武州橘樹郡大師河原村の内の藤崎と云ふ所にあつた。場所は平間寺から六七町の手前で、八幡宮前から南へ入つて二町ばかり行つた所にあつた。池上家はもと荏原郡池上村に住んでゐたが、池上左

衛門康滿になつて、日蓮に歸依すると共に、その宅地を寄附して、其所に移住したものであつた。屋敷構へは三方に濠をめぐらして、堂々たる長屋門を設けてあつた。玄關の前にある塀二重門を潜ると、林泉に趣ある廣い庭があつて、左手に寄つた所に、一株の老松が面白い枝振を見せてゐた。

主人の底深は、六十九になつてゐた。背の低い、角顏の、でつぷり肥つた老人であつたが、丁度その時、ふうどく腫と云ふ腫物を煩つて、それがやつと癒つたばかりの所であつたから、何所かに窶れが見えてゐた。樽次の一行が押し寄せて來ると云ふ事が知れると、附近の酒徒は其所へ集つて來て、この底深老人を取り圍んで策戰をめぐらした。名主の四郎兵衛つねひろ、藪下勘解由左衛門尉早呑、竹野小太郎たゞ呑、同獺太郎數成、米倉八左衛門はきつぐ、田中内徳坊呑久、朝腹九郎左衛門桶呑またを九二郎常佐、山下佐内請安、池上三郎兵衛強成。底深の舍弟池上七左衛門底安、同佐太郎忠成などが一座の酒徒であつた。その席へは十一になる底深の惣領の長吉底成も、次男の白間底平も連つてゐた。その中で山下佐内は、底深の從弟で、池上三郎兵衛は底深が甥であつたが、この二人は嘗て江戸に行つた際、樽次と酒の手合せをして、二人とも血を吐いて戸板に乘つて歸つて來た者であつた。

評議の結果、名主の四郎兵衛が、長吉底成を伴れ、十餘人の味方の酒徒と共に、家から七八町はなれた小松原に出て、敵の不意を襲ふと云ふ事になつた。『いかに名ぬしどの、御邊こそ、度々の勝負にも遂に不かくを取らぬ人と聞いて候へば、今度まつぱらの大將に頼み申なり、もとより敵によつて轉化することなれども、樽次は無双の大酒にて、敵大勢なれば猶ほ以て勇みかかる强者と聞いて有り、あらかじめその覺悟し給へ、』と底深が命ずると、「御心安く思召めせ、たとへ餘人は逃げ散るも、このつねひろに於ては、敵に背後をば見せ候まじ、その上樽次も疊の上にてこそ口をば利き候ふらめ、野原のかけあひをば、いつたんれんじ給ふべきなれば、某はせ向つて松原へ引込み引込みいち〳〵横に寢させなんものを』と四郎兵衛が答へたと水鳥記は云つてゐる。

松原の松の幹に姿をかくして待つてゐると、樽次の一行十七人は、落ちかけ　夕陽の光に顏を染め　やつて來た。底深の方の一行は、ぱらぱらと出て行つてその前に立ち塞がつた。

『先づ此所でお手合せを願ひます』

名主の四郎兵衛は、漆で黑く塗つた木杯を持つて樽次に迫つた。樽次がそれを手にすると、長柄を持つて傍に立つてゐる者が滿々と注いだ。樽次は旨さうに一息に飲んで四郎兵衛にかへ

した。と、四郎兵衛はそれで滿々と飲んで、次にゐた三浦新之亟樽明にと差した。

『貴殿のお名前は、』と、樽明は杯を貰ひながら問いた。

『私は名もない兵武者でございます。』と、四郎兵衛は云つた。

『さう仰せられずにお名乘り下されい、』

『いづれ後刻お名乘り申します。』

樽明は受けた杯を傾けながら、六十餘りに見える瘦せた四郎兵衛の顔を見てゐた。底深の惣領の長吉も小さな杯を持つて、そのあたりに出沒してゐたが、やがて樽明の前にやつて來た。

『この小冠者は、』と、樽明が眼を見張つた。

『それこそ底深殿の一子長吉底皮にて、今日の松原の惣大將でございます。』と、名主の四郎兵衛が云つた。

樽明は長吉の杯を受けて、それを一息に飲んで返すと、長吉も又それを一息に飲んで樽次の前にと行つた。

手合せが一通りすむと、底深方は一足先に引いて行つた。名主の四郎兵衛がしんがりとなつてゐた。

『あれが底深方の齋藤別當ぢや、』と、樽次は笑つた。

『これからいよいよ手詰の戰ぢや、先陣は誰れがする。』と、樽明が云つた。

『この悪僧がうけたまはらう、』と云つて、甚鐵坊が先頭につかつかと出た。

暗くなつてから樽次の一行は、大師河原の底深の家へと行つた。『見れば二階三階を閉けて、用心きびしく見えて候へど、五戒を破つたる入道が、まして、その二かいや三がいを破らんに、何のしさい有るべき、』と甚鐵坊が名乘つた。

敵味方は底深の家の大廣間に對座した。と底深方から四十前後に見える口髭の眞黒な男が出て來て、甚鐵坊の前に坐つた。

『私は朝腹九郎右衛門と申す者でございますが、貴殿を樽次殿の先陣とお見受け申しまして、お手合せを願ひます。』

九郎右衛門は、甚鐵坊の眼の前で、吉野漆のため塗の一升近くも入る大杯に滿々と飲んで、それを甚鐵坊にさした。甚鐵坊も受けて水を飲むやうにゴツゴツと咽喉を鳴らしながら飲んだ。これを一座の手はじめとして、敵味方の手合せがはじまつた。かうした間にも犬居目禮古佛の座など云ふ飲酒の式は忘れなかつた。

底深は五かい破りの甚鐵坊の手並に感じて、あれと一つ手合せをしてみやうと前にある蜂龍の杯に眼をやつた。それは杯の中に蒔繪を描金した物で、右の方から下にかけて上向きに口を開いた龍を畫き、その上に飛んでゐる蜂を畫き、そして、左の

下に鉄をあげた盞を置いてあつた。それは蜂はさし、龍はのみ盞ははさむと云ふ酒盛に縁のある詞の意味をあらはしたものであつた。それは七合五勺入の杯であつた。底深は靜にそれに手をかけたが、まて、まて、これが非常に大事ぢや、あんな柔武者にかかり合つてゐてはならんと考へ直したので、その眼をそらして樽次の方を見ると、樽次は山下佐内と手合せの眞最中であつた。

『樽次殿お手合せを願はふ』

底深は蜂龍の杯を手にして、席を起つてその前に行つた。樽次は佐内との手合せに少し疲れを覺えてゐたが、とても逃れない所と諦めて底深の杯の空になるのを待つてゐた。

『樽次殿の名代を仕ります。』と云つて、底深の前に來て樽次と並んだ者があつた。それは喜太郎醒安であつた。

底深は殘念に思つたが、名代と云へば手合せの杯をやらない譯には行かなかつた。喜太郎はその杯を滿々と飲んで又底深にかへした。底深は又それを飲んで喜太郎につやた。喜太郎も又それを受けて飲んだが、宵から敵を選まずに手合せをしてゐた醉が一時に發して、横にひつくりかへると共に、へえへえと吐きはじめた。

喜太郎をはじめ敵にも味方にも倒れる者が出て來た。赤坂の毛藏坊は縮一揃を眞赤にしてひよろひよろと歩いた。『飯嫌殿は居らるゝか』と、毛藏坊は木下杢兵衛尉を尋ねてゐたが、喜太郎の倒れてゐるのを見ると、座敷の隅の小屛風の蔭まで抱えて行つた。

夜は次第に更けて來た。底深の方では新に大勢の者が加勢に來た。樽次の方では、茜識坊が倒れ、樽明が倒れ、毛藏坊が倒れ、半齋坊が倒れ、平見坊が倒れ、齋藤傳左衛門が倒れて、樽次の傍に居る者は、杢兵衛尉飯嫌、佐々木孫三左衛門酒丸など數人のみであつたが、それでも座を保つてゐた。底深の方では田中内徳坊が宵から動かなかつた。

夜が白々と明けて鷄の聲が聞えて來た。底深も樽次も宵からの酒に疲れ切つて、進んで戰ふ事が出來ないやうになつてゐた。

『田中の内徳坊呑久とて、大盞とつての強者、近畿にかくれなきやく僧のありけるが、底深に向つて申すやう、樽次は聞きしにまさる大酒にて、未だちつとも弱り給はず、その上飯嫌酒丸など云へる癖者片腕に控へ見えて候ぞかし、しかるに味方は大勢なりとは申せども、へろ／＼上戸の柔武者にて、彼の人々にたてあはんずる者は無し。あまつさへ底深にも何とかしたまひけん、今宵は臆して見え給ふなり。かく申すそれがしも、宵より數度のせり合に烈しくこみつけられ、今は前後を忘じて、弓も

なきうつぼばかりつけたる躰なれば、もはや御すけ申す事もなりがたし。この時節をうかがひ、樽次惱り出で給ひなば、底深の御命も危ふく、この内德坊も遂には内損坊になるは、必定なり、たゞとくとく降參し給へとて、小がひな取つて引き立つれば、力なく底深も樽次の御前に跪座き、今より後は、御門外に跡を繼ぎ申さん』と云つて降參したと書いてあるが、口碑によると樽次の方が敗けて歸つたとの事である。水鳥記はこの樽次の手記である。

池上家は大師河原の藤崎へ移つた後に、その土地へ池上新田と云ふ新田を開いて別家して矢張り太郎右衛門を名乘つた者があつたが、其所へも折々人が尋ねて行つて、酒合戰に用ゐた杯を見せてくれと云ふので、近年似寄の杯を作つて持つてゐると云ふ事が遊歴雜記に載つてゐる。

四五年の前の初秋のある日、私も桂月翁などと大師河原へ行つて、そのついでに池上家を訪ふた事があつたが、紹介がなかつたので杯を見る事はなかつた。三人は泉水の美しい庭に通されて茶をもらつて、其所に出してゐる杯の繪葉書を買つた。繪葉書には、蛑龍の杯の外に、先祖が源頼朝から拜領したと云ふ杯も載つてゐた。『これは一升五合入るが、我家の法として、家督相續人は、それを一杯飮まなければならぬ事になつてゐる。』と主人は笑つて、『あなた方もそれを飮むなら、實物を見せて見ませう。』などと云つた。その庭には、幹のまはりが一抱に餘る老松があつて、それが一丈ばかりの處から四方八方に枝を垂らして、丁度傘のやうに見えてゐた。それは日蓮の手植の松で、もと池上村の屋敷にあつたものを移轉の當時に持つて來た物であるとの事であつたが、どうもそれは怪しい。それに、四五年の前で、うつかりしてゐだから明瞭した記憶がないが、どうも私達の尋ねた家は、藤崎の池上家でなくて、池上新田の分家であつたやうな氣がする。さうだとすると、繪葉書にした杯も、庭も、松も、皆、本家の模造品である。これは暇があつたら、も一度大師河原に遊んでしらべたいと思つてゐる。

千住酒戰抄

千住の通りには、薄い寒い陽の光が射してゐた。板塀で取り廻はした唯ある家の門口には、『不許悪客下戸理屈入菴門』と云ふ一つの聯をかけて客を迎へてゐた。聯の文學は當時有名な蜀山人の筆になつた物であつた。文化十二年の十一月二十一日の事で、中六と云つた人の六十の賀を機會に四方の酒徒を集めて、酒戰を催す爲めであつた。

門を入つて玄關に行くと、袴を着けた五人の男が控へてゐて『貴殿は幾等酒をあがられます。』と云つて問ふた。で、其所で量を云ふと、その通りの酒の切手をくれて、一先づ休憩所に入れられ、それから更めて酒戰の席に案内をしてくれたが、其所には白木の臺を据えて六つの大杯を載せてあつた。その内の江島杯と云ふのが五合入。鎌倉杯と云ふのが七合入。宮島杯と云ふのが一升入。萬壽無量杯と云ふのが一升五合入。緑毛龜杯と云ふのが二升五合入。丹頂鶴杯と云ふのが三升入があつた。皆蒔繪の木杯であつた。杯臺の傍には、二つの肴臺があつて、その一つには、蟹と鶉の燒いたのや、鯉の羹などを載せ、その一つには、からすみ、花鹽、さゝれむめなどを載せてあつた。その向ふには、青竹を横にして室に區劃を設け、内に紅の毛氈を敷いてその家の賓客が酒を飲んでゐた。賓客の内には、その日の監杯役とも云ふべき谷文晁と龜田鵬齋との二人がゐた。

酒戰に集まつて來た酒徒は、順々に杯臺の前に進んで、自分の好む杯を手にすると、傍にゐる四人の藝妓が銚子の酒を注いだ。この日の光景は蜀山人の『後水鳥記』に精しく書いてある。これを後水鳥記と云ふのは、樽次の茨木春朔の手記した水鳥記に續ぐの酒戰記と云ふ意味であらう。後水鳥記は一名を高陽鬪飲と云つてゐる。これには龜田鵬齋が序を書き、大窪詩佛が題言を加へてある。

今、後水鳥記などによつて、その日の事を云つてみると、掃部宿の市兵衛と云ふ百姓は、萬壽無量杯を三度重ねて飲んで歸つた。その百姓には一人の叔母があつたが、その事を人から聞いて、心配して家へ行つてみると、隣家で貰つた牡丹餅を圍爐裏の火で燒いて喫つてゐた。

これも同じ掃部宿の者で米屋の松勘と云ふ者は、大長と云ふ男を敵手にして、江島杯から飲みはじめて、鎌倉、宮島、萬壽無量の杯とやつたが、まだ緑毛龜、丹頂鶴とやつて、今日の第一番になると云ひ出したが、それは一賀、新市、鯉隱居など云ふ世話人が證人になつて、來年の霜月の再會の時まで與ると云ふ事にした。察するにこの二人は酒の座が亂れたので、體よく中止したのでもあらう。大長はその日四升あまりを飲んでゐたが遂にその附近の人家の軒下に醉ひ倒れて、翌朝辰の刻まで睡つて、やつと眼が覺めると、又、一升五合ばかり飲んで、前日の禮を云つてから歸つて行つた。

玄慶と云ふ老人は、酒を三升五合あまり飲んで其所を出たが、歩いてゐる内に眠くなつたので、通新町の秋葉神社の堂の中へ入つて一睡りして家に歸つた。

野洲小山の佐兵衛と云ふ者は、緣毛龜杯に三杯飮み、吉原に住んでゐる大熊と云ふ老人は、江島杯から萬壽杯まで飮んで、かへりに小塚原の女郎屋にあがつて遊んだ。

大門長次と云ふ男は、三味線に調子を取り取り、酒一升、酢一升、醬一升、水一升を飮んだ。

石市と云ふ男は、萬壽杯を飮み乾して、大蕪舞をやつた。馬喰町の茂三、千住の船與と云ふ二人は、同じやうに緣毛龜を傾けた。

藝妓には、おいく、お文の二人が江島杯と鎌倉杯とを飮んだ。その他、天滿屋の美代女と云ふ女は、萬壽杯を飮んで、醉拂の世話をした。菊屋のおすみと云ふ女は、緣毛龜杯を飮み、おつたと云ふ女は、鎌倉杯を飮んだ。料理人の太助は、朝から酒を飮んでゐる上に、丹頂杯を傾けた。

文晁鵬齋の二人も、朝から澤山の小盃で飮んだ上に江島杯と鎌倉杯とを飮んだ。會主の方では、夜歸る時、この二先生を駕籠で送らうとしたが、附近の駕籠屋に酒をふるまつた爲めに、皆醉ふて駕籠をかく者がなかつた。

夜になつて會津から來たと云ふ旅人が、宿屋の亭主を伴れてやつて來て、江島鎌倉宮島萬壽緣毛龜と五杯まで飮んだが、明日は大事の用事を抱へて居りますから、殘念ながらこれは飮む事が出來ません』と云つて、丹頂杯には手を觸れないで歸つて行つた。

淺草三くみ町に住んでゐた佐官の正太も、その席へ來る積りで、その日は朝から仕事を休んでゐた。

「お前さん、何故今日仕事に行かないの。』と、女房が云ふと、

『今日は一寸顏を出す所がある。』と彼は云つた。

『顏出すつて何處へ顏を出すの、仕事から歸つて來てからで好いぢやないか、そんなに休んでばかりゐちや困るぢやないか。』

『まア好いよ。』正太はもう女房の言葉が癪に觸つてゐるが、酒を飮みに行くに、慍り慍り行つては面白くないと思ふので、つとめて穩にしてゐた。

『好い事はないよ、仕事を休まれちや困るぢやないか。』と、云ひ云ひ女房は裏口の方へ洗濯物を持つて出て行つた。

その際に正太は、壁にかけてある新らしい半纏を引かけて戶外に出た。ほつかりした陽の光が若い頰にかゝると、彼はもう女房に對する感情も忘れて、好い氣持ちになつて歩いたが、千住に行くには、まだ少し早いので、何處かで一杯やりながら一時位暇潰しをしたいものだと思つて歩いてゐると、橫町の飯屋の事が浮んだ。で、其所へと足を向けた。

正太の女房は、裏の木戶口にある井戶端で、汚物を一二枚洗

濡して内へ入つてみると、もう正太はゐない。彼は火鉢に手をやりながら、今日は何の爲めに仕事を休んだらう、彼の人の事だから、酒を飲む魂膽か何かきつとろくでもない事だらうと考へ出してみると、ますます腹が立つて來たが、隣家から頼まれてゐる大急ぎが縫物の方に心が行くと、さうだ、惱つてゐた所で一文にもなるぢやない、それよりか早く縫ひあげて幾等かの禮を貰はふと、仕事を持つて來て、せつせと針を動かしはじめた。

そして、正午近くなつて、女房は晝飯の仕度をしようと思つてゐると、三河屋の小僧が今朝頼んであつた鹽を持つて來た。

『お神さんも何故一所に行かなかつたね、』と、十八ばかりの面疱の見える小僧がませた口を利いた。

『なんだね、』と、女房は不審さうな顏をした。

『なんだもないもんだ。正太さんはこれから千住の酒合戰に行くと云ふのに、お神さんが知らないと云ふ法はないね、』

『酒合戰てなんだね、』と、女房はきゝ耳を立てた。

『酒の飲みつくらさ、今日は千住の何んとか云ふ隱居が賀の祝に、近郷近在の酒飲みを集めて、酒の飲みくらをさすと云ふんだ。』

『お前さんそれをどうして知つてゐる。』

『今、森田屋の門口で正太さんが云つてゐたのを聞いたよ。』

『なに正太が云つてゐた。どほりで、ろくな事ぢやないと思つたよ。……まだ森田屋にゐたかね、』と、女房は眼を光らした。

『廣小路の方へ行つてたよ、』

『本當に彼の人にも困つたもんだよ、』

正太が雷神門の前まで行つた所で、背後からすたすたと來た者がその片袖をぐつと掴んだ。それは女房であつた。

『お前さん何處へ行んだね、』

正太はしまつたと思つたが、仕方なく澄まして云つた。

『何をするんだ、みつともない。』

『みつともない好く云へたね、馬鹿馬鹿しい、何がなんでも仕事を休んで、酒の飲みつくらなんかに行くものがあるものかね、お歸りよ、』と、女房は燃えるやうな聲で云つた。

もう二三人の人が正太の方を振り振り行きはじめた。

『放さないよ、』

『みつともない、放せ、』

『何』正太は振り返つて、女房の頭に拳をつけた。女房は泣き聲を立てゝ武者振り付いた。正太は牛のやうな力を出して怒つた。

『おい、どうした、正太ぢやねえか、』

から云つて二人の間に入つて來た者があつた。正太はその擘にびつくりして、女房に加へやうとした拳を引いた。女房も泣きながら衝立つた。二人の間に入つて來た男は、長と云ふ仕事師の親方であつた。

正太と女房とは、親方の家に伴れて行かれて、その譯を聞かれたり、物を食はされたりしてゐる内に夜になつた。正太はもう千住へ行く事は諦めて我家へ歸つたが、それが如何にも殘念でたまらないので、翌日になつてとうとう千住へ行つて、三升の酒を枡飲みにして歸つて來た。

惡獸國見物記

生方敏郎

第一信

記者足下。

足下を始め、私の家族も、親族朋友も、恐らく最早私は世に亡き者と、諦めてゐられたことゝ思ふ。私は今日まで、凡そ一ケ月間音信を絶つた。私の便乘してゐた船が、太平洋上で大颶風に遇つて、顚覆し、顚覆した船體は更に岩に當つて、碎け、私は其の後のことは、知らなかつたが、幸運にもこの島へ漂流して、今尚健全に生きてゐる。しかし、足下を始め、故國の人達は、皆私を死んだものと思つてゐることだらう。船の沈沒と、乘客のミツシングとは、多分新聞紙上に、報導せられたことゝ思ふ。そして、私の爲めに葬式も營まれたことゝ思ふ。私は常々「死んでから香奠を貰つても仕方がないから、生きてゐるうちに貰ひたい。手付けだけでも貰つて置きたい」と、思つてゐたが、果してそれが、偶然にも實現されたわけだ。呵々。

閑話休題、兎も角も私は、この通り生きてゐる。私が諸君へ通信したら、諸君は地獄から音信が來たやうに、驚き怪しむことだらう。それが、内容に於ても、實際私自身でさへ、驚き怪

しむことばかりなのだ。

　私がふと目を覺ますと、傍らに河馬の頭をした動物がゐた。私は驚いて逃げ出さうとして立ち上ると、河馬は、

「いや、氣が付いたな。氣が付くと直ぐに禮も云はずに逃げ出すとは、何んと云ふ奴だ。」と云ふから、私も不思議に思つて、再び彼を見ると、頭こそ河馬だが、胴から下は人間だ。

「あゝ、さうでしたか。僕は難船したまでは覺えてゐるが、それから夢を見たやうな心持がしてゐたが、それでは君に救はれたんですか。」

　と私が訊くと、

「さうだよ。お前さんを助けたのは私だ。禮も云はずに、逃げ出さねえでもよかんべえ。」

「そりやどうも、濟みませんでしたね。實はあなたの頭が河馬のやうな頭だから、怖ろしくつて逃げ出したんですよ。人は見かけによらないものだ。」

　と終ひの方だけは、獨言のつもりで云ふと、彼は

「何あに、私や人ぢやねえ、河馬さ、河馬が漁夫をしてるんだよ。だから魚を取るのは巧いものさ。」

　私もこの話にはいよいよ驚いて、

「成る程、そいつはうまいものでせう。だが獲れた魚は何うします。みんな食べ切れないでせう。」

　と訊くと河馬は、詰らないことを聞いたもんだ、と云ふやうに笑つて

「餘りは町へ出して賣るのさ。」

　これを聞いて私は、いよ〳〵驚いてしまつた。河馬が魚を賣つて金を取つたところで、何うするのだらう。

「だつて君、賣つた金を何うするね。」

「何うするねつて、お前さん、そりやいくらにもなりやしないよ。町へ持ち出して賣る位では、僅かな話で商賣にはならないし、網元に雇はれてやるのでは、收入はいくらも無い。儲けはみんな網元に取られてしまふからね。町へ行つて、魚を買つて御覽。怖ろしい高い値段だ。それもその筈、先づ魚を取る私等が儲けて、網元が儲けて、それを運ぶ鐵道院や運送屋が儲けて、それから河岸の問屋が儲けて、小賣人が儲けて、やうやく需用者の口へ入るのだからね。需用者は高い金を出すけれども、それを獲る吾々の手には、いくらも入りやしない。みんな途中で儲けられてしまふのさ。」

　私はこの話を聞いて、驚きもし、感心もした。

「さうかね。そりやお氣の毒です。だが、その金をいつたい君は何うするのです。」

「何うするつて、お前さん、いくら稼いでも私等は足りやしないよ。何しろ暮しに費りがするからね。その物價騰貴と云つたら、素的なものだ。」

おや／＼驚いてしまつた。物價騰貴の風潮は、こんな不思議な國にまで、響いて來てゐるのか。まるでスペイン風邪みたいなものだと、私はつく／＼怖ろしくなつた。と、同時に、この國へ來ても直ぐに必要なのは金だと思つて、ポケットを探つて見ると、幸ひに未だ財布だけは、失はれずに殘つてゐた。

「時に、これは何んと云ふ島ですね？」

と私が訊くと、河馬は、

「惡獸國と云ひますだよ。これでも仲々文明は進歩してゐて、旅行者にはそんなに不便なことは無い。首府もさう遠くは無いから、見物に行つて見なさるがいゝ。こゝから直きの所にステーションがあるから。」

と彼は指示して私に敎へた。

私は取り敢へず、ステーションへ行つて見ると、今汽車が着いたところと見えて、數多の人々が開札口から流れ出て來る。だがそれをよく見ると、その中に一人も人間はゐなかつた。豚の首をしたもの、熊の首をしたもの、驢馬の首をしたもの、兎の首をしたもの、鹿の首をしたもの等ばかりであつた。乘客ばかりでなく、切符賣り場の者も猿のやうな頭をしてゐた。私は待合室へ入つて、賃金表や發着時間表を見ると、それが皆何とも云へぬ不思議な字が書いてあつた。私は切符賣り場へ行つて

「首府までの切符を下さい。」

と云ふと、猿は

「Tまでですか。…………です。」と云つた。それは日本で云へば二圓五十錢位に相當してゐるのだらうと思つて、私は一圓札二枚と五十錢の小額紙幣を出すと、猿君は赤い面を更に赤くして、頬を膨らせ、

「これは何んと云ふ札です。こんなものでは困ります。」

と嚴しく跳ねつけた。私は途方に呉れてしまつた。日本の札で、世界の涯まで通用すると思つてゐたのに、こゝまで來ると、最早反古紙同樣である。日本にゐる頃は私も札を大へん貴重なものと思つてゐたが、今考へると大間違ひだつた。札にも絕對的威力は無かつたのだ。私はこの時思ひ出した。東京にゐる頃、銅貨が非常に拂底した爲めに、商店ではその家だけで通用する小札代りのやうなものを出すのを見て、こんな他方へ通用せぬものでは困ると思つた。それと同樣の困り方を私は日本銀行發行の紙幣に依つて、經驗させられた。私はこのステーションを出て、金策をするより外は無かつた。しかし知らぬ他鄉

で、何うして私に金策が出來やう。私は金の無いことに依つて、丁度難船した時と同じやうな困難と、心細さとを味つた。もう斯うなつては、唯他人の同情に訴へて見るより外は無かつた。

「實は私は、日本の國のものですが、太平洋で難船し先刻漁夫に救はれたところなのですから、日本の札より外には何んにも持つてはゐません。困りましたなあ。」

と、半ば獨言のやうに云ふと、猿君はそれを聞いて、

「それはお困りでせう。」

と云つて呉れたが、しかし切符は只では呉れなかつた。すると傍らで私達の話を聞いてゐたと見えて、

「Tまでならば、私も行くところですから、御同道申しませう。切符は私が立て替へて置きますから。」

と云ふその顏を見れば、羊の頭をしてゐた。羊は私の返事を待たず、ずんずん一人で二枚の切符を買つた。

そのうちにT行の上り列車が來たので、私達はそれに乘つた汽車は動き出した。私達の乘つたのは二等室のやうであつたが、それでもずゐ分混み合つてゐた。

「年末になると、どうも汽車が混んで困ります。それに今年は景氣が好いので、二等室に乘るものが多いのです。」

と羊は云つた。私は日本でも丁度さうだつたがと、この時も日本のことを思ひ出した。羊は

「時に、日本は此の頃どんな狀態です？景氣はいゝのですか？」

と聞いた。

「これまでのところでは、世界戰爭の爲に、漁夫の利を得たやうな格好で、一般の景氣は好かつたやうです。しかし之からは何うなりますか。もう戰爭も濟みましたから。だが、日本は今年はいよ〳〵開闢以來始めての政黨內閣が成立したと云ふので、人民は皆喜こんで居ります。」

「それは結構ですな。この惡獸國などでは、どうもさう巧くまゐりません。この國にも矢張人並に憲法と云ふものがありますが、どうもその運用を誤られてゐるので困ります。この國でも元は、豹閥だの豺閥だのと云ふ、閥族が跋扈してゐて、非立憲のことばかりやつてゐました。ところが此の頃やうやく政黨で內閣を組織するやうになつたやうな鹽梅になつてゐますので、愚かな羊も兎も猿も百獸一般に喜んでゐますが、その政黨と云ふのが、實は怪しいので、どうも羊の毛衣を着てゐる狼のやうに思はれるのです。だが、この國でも少數の猛獸族がだん〳〵勢力を失ひ、吾々多數の羊族がやうやく勢力を得て來たやう

ですから、今度の内閣が若し本當は狼であるとしても、餘程羊族に氣兼ねをしなければなりますまい。唯どの位まで從來の惡政治を改めるか、どの位まで猛獸等に媚びて世間を胡魔化してゆくかが、問題として殘されてゐます。もうとても吾々は例の、白頭狼の所謂是を是とし、非を非とするなどの曖昧な文句で、瞞着されることはありません。しかし、まあ、あなたのお國では純然たる政黨内閣が組織されたさうで、誠に羨ましい次第です。」こう云はれると私は、我が事のやうに嬉しかつた。しかし又眞面目に我が國の政府を政黨内閣なんて褒められて見ると、内心窃に恥づかしくもあつた。羊は尚言葉を繼いで、

「この惡獸國は、これでも表面は立憲君主國なので御座いますが、困ることには國民が政治的に全く眠つてゐるので、選擧法も滅茶々々だし、又選擧人も極めて不眞面目で、從つて選擧されて一國の政治を議する爲に議會へ集る代議士なるものに、殆んど一匹も錄な者は居りません。貴方のお國などでは代議士の異名を、選良とやら云はれるさうですが、嘸かし立派な紳士達ばかりで御座いませうね。誠に羨ましい次第です。」

私はこの言葉を聞いて、顏から火の出るほど恥づかしかつた。彼は私をからかつてゐるのでは無いかとさへ思つた。

「どういたしまして。なか〳〵さうも參りません。」

とだけ私は答へた。私は成る可く政治に就いては、日本のことは自分では語らない方がいゝと思つた。それは結局ボロを出すに止まるからだ。羊君が此のやうに買ひ被つてゐて呉れるものを、何も自分から日本の弱點を曝露することも無いのだからで、私は問ひかけた。

「そこで貴方のお國の選擧法は、何う云ふ風になつてゐますか？」

すると羊は、實に歎はしいと云ふ樣子で、「その選擧法と云ふのが、實に時勢遲れで、馬鹿々々しいものなのです。子供なら兎も角も、一人前の大人が寄つて組織してゐる文明國であり乍ら、こんな子供騙しのやうな選擧法に依つて代議士を選んでゐるかと思ふと、吾々惡獸國の國民は、貴方方が御覽になつたら、氣違ひか茶人としか、思へないで御座いませう。何しろその選擧權を與へる標準と云ふのが、專ら個人の經濟力の方からばかり見たもので、直接國稅何圓以上を支拂ふ者と云ふやうな規定になつてゐるのです。そして、人々の學問とか品性とか、さう云ふものは一切勘定に入れられて無いのです。その癖この國ほど、道德的らしいことを口にする國民は他に滅多に無いでせう。貴方のお國でも皆さんが盛んに、忠君愛國と云ふことを仰有るやうですが、さう仰有る方々が實際に於ても亦忠君者で

あり、同時に愛國者であつて、公私の行ひに於て實に立派な見上げた、紳士的精神に充ちた人々でせうから、甚だ結構ですが、この惡獸國の忠君愛國者連と來た日には、まつたくその美名を賣物にして私利を貪る口先ばかりの忠君愛國者なのですから困ります。殊に官吏や教育家にはそれが多いので、まつたく困つてしまひます。そこへ行くと貴方のお國などは實に立派なものですな。貴方の御國の日本には、忠君愛國を賣物にする教育家や、官吏は恐らく一人もありますまいね。」

彼は如何にも羨ましさうであつた。

「まあ、さうでせうね。」

と私は答へた。

「本當にさうです。そんな僞善者が一番危險な人間です。それこそ本當に危險思想の持主です。」

と羊君は益々メートルを上げる。そこで私は、

「危險思想と云ふのは、私などは、さう云ふ不道德の意味ではなく、外國から來た新らしい思想――例へばデモクラシーとか、民本主義とか云ふものだと、思つてゐました。私達日本人は何んでも古い思想さへ持つてゐれば、大抵安全に世の中が渡れますからね。何も新しい思想を振り廻して、馬鹿者共から迫害を蒙るには及びませんよ。」

と私が云ふと、彼は驚きの眼を見張つて一々[illegible]で云ふのですか。

「さうさね。どうだかね。」

と私が、とぼけてゐるので、彼は私と云ふ者の正體が何んだか判らなくなつたらしく、惑ひの色を眼に浮べてゐた。彼は恐らく日本人と云ふ奴は、否、人間と云ふ奴は表裏反覆のある危險な、動物だと考へたのであらう。私は先刻の話に、よりを戻して

「さうしますと、學問の方は博士でも大博士でも、税金を澤山拂はないと、選擧權は無いと仰有るんですね。それはそれで、結構ぢやありませんか。東海の君主國と、自分で云つては自慢になりますが、現代世界一流の文明國たる私の日本國などでも、矢張りそんな風になつてゐるやうですからね。それは孔子であらうが釋迦であらうが、キリストだらうがソクラテスだらうが、税金を拂はなければ參政權は無いものです。さう考へて來ると、昔からの聖人君子などに選擧權を持つてゐさうな人物は殆ど一人も見當りませんよ。今の四人は勿論のこと、ソクラテスも落第、セント・パウロも落第、セント・フランチェスコも落第、西行も落第、達磨も落第、日蓮も落第。ルーテルなどは大學教授の月俸から云ふと、或ひはその資格を持つてゐるか知

れませんが、若しそれが私立大學であつたなら、恐らく學校の方で氣を利かせて、月俸を小額に書き出して、脫税させたかも知れませんよ。勿論ルーテルには內緒でね。それから文士や詩人も、恐らく選擧權が無かつたでせう。人麿、赤人は腰辨、式部と納言は女のことだから之も落第、近松、西鶴も多分落第でせう。だが、國家と云ふ奴は、平たく言へば、まあ、寄合世帶のやうな格好ですから、餘計に金を出すものが威張るのが當然でせうよ。」

羊は稍々困惑の色を浮べて、

「あなた、そんなことを本當に正氣で仰有るんですか？　私達の考へでは、經濟上からばかり選擧人の資格を考へるのは、正氣の沙汰とは思はれません。それに一般の人民だつて鬼でも猿でも鼬でも馬でも牛でも、間接には立派に税金を拂つてゐるのですからね。」

「さうですか。東洋の君主國でもそれは御同樣です。食べ物でも着物でも、住居でも一つとして税金の掛らないものはありませんよ。だから吾々は知らない間に、ずゐ分多額の税金を取られてゐるのです。しかし、結構ぢやありませんか。知らず識らずの間に取られるから、人民は苦痛なしに、苛斂誅求に應じることも出來るのですよ。日本は無論、苛斂誅求ぢやありませんがね。之は間接税の効能書を云つたゞけです。つまり無痛安産のやうなもので、知らない間に血を絞り、知らない間に骨をしやぶる、と云ふ寸法で、この位人道的な殘酷はありませんよ。」

「さうです。その人道的殘酷を以て、細民に臨まれるのだから堪りません。貴方のお國の日本などでは、そんなことはありますまいね。」

私は曖昧に笑つて、

「さあ、何うですかね。その邊のことは、よく存じませんが。その代り直接税の方を輕減して、資本家に恩惠を施して居るかも知れませんよ。一方に細民を苦しめても、他方に資本家の私腹を肥すことを、援助してやれば、結局とんとんぢやありませんか。そんな所が、私の國の有り難いところでせうよ。」

私のこの出鱈目の詭辯に遇つて、羊は少なからず面喰つたらしかつた。煙に卷かれたやうであつた。かう云ふ方面のことで、あまり先方から訊かれると、遂にはボロを出すかも知れぬ。それよりも、此方から向ふへ、問ひ掛けてさへゐれば、日本の國辱を吐き出させられる憂ひはあるまいと思つた。そこで私は問ひかけた。

「何んだつて、あなたの國では、そんな不都合な課税をするの

です？　そして人民は何故それに對して默つてゐるのですか？」

「それは國法には從はなけりや、なりませんもの。しかし人民は恐ろしく不平なんです。」

「何んだつてそんな嫌な法律を作つたんです？」

「それは狼黨や虎黨など、衆議院の選惡共が勝手に作つたのです。」

「何んでそんな、選惡共を人民は選擧したんです？」

「それは先刻も申し上げた通り、是非共そう云ふものを選擧しなければならないやうな、選擧法になつてゐるからです。」

「それはあんまり、滑稽なる悲慘ですな。何んでそんな、不都合な選擧法を作つたんです？」

「それも大方その選惡共が作つたんでせう。」こゝに至つて私は、眞面目に歎息した。

「それぢや、あなた方は何時になつても浮ぶ瀨はありませんね。選擧法と、選惡との關係が、おたまじやくしと蛙のやうな關係ですもの。換言すれば選惡共が惡法律を作り、惡法律が又選惡を生む、と云ふ風にいつまでも連がつて行くんですからね。だが、その滑稽なる悲慘に對して、細民の中から誰も怨嗟の聲を上げるものは無いのですか。」

「怨嗟の聲は扨措いて、普通に上つ面な政治問題を論じるのにさへ、參千圓の保證金を積まねば[illegible]へられないし、その保證金は積つても、少し思ひ切つた議論をすれば、かなり損害になるやうな重い刑罰を受けるのです。甚しきは法廷で爭ふまでもなく、行政處分で即刻即座に、やられてしまふのです。だから吾々は、口籠を嵌められた犬のやうなもので、唯一つしかない方法の吠えると云ふことまでが、封じられてゐるのです。」

と羊は眼に涙を溜めて云つた。そして、

「貴方のお國の日本などでは、こんな野蠻なことはありますまいね。こゝは惡獸國だからですよ。」

と私の顏を見上げた。

記者足下。

私は羊樣に訊かれた時、何んと答へたものだろう。だが、私としては次のやうに答へる外はなかつた。

「勿論さうです。こゝは惡獸國ですが、私の國は君子國ですもの。だが即刻即座に行政處分でやられると、貴方は仰有つたが、さう云ふことは政府も仲々敏活にやると見えますね。私達の國の政府も、見かけに依らず、商賣などは仲々上手なもので、煙草や鹽が官營になつてから、ずゐぶん値上をしたやうですが、益々多く賣れるやうです。もつとも專賣と云ふので

すから、賣れるのが當然かも知れませんが、何しろその高利多賣主義の實現には感心の外はありません。」

と私は詮方なしに、話を他へ外らせた。だが私は彼等が文明國に普通な言論の自由を得てゐないのを聞いて、同情に堪えなかつた。

「日本でも昔平の清盛が專横を極めた頃、京童を市中に放つて、密に政治を議する者のあるのを、探つたと云ふ昔話もあります。又徳川時代の末期にも、安政の疑獄などゝ云ふ、言論壓迫の時代もありました。惡獸國には、多分憲法はあつても言論の自由が與へられてないのでせう。」

「いゝえ、それは立派に憲法にあるさうです。この國の法律家は皆さう申して居りますよ。」

「そいつはどうも變な話ですね。憲法は飾り物なんですか。」

こんな話をしてゐるうちに、到頭首府T市のT驛に着いた。

「貴方はこの町に誰かお知り合ひでもあるのですか。漂流されて來たのだから、無論そんなことは無いでせうね。なんなら、汚いところですが、私の家へお泊りになりませんか。」

と羊は優しく云つて吳れた。私は喜んでそれに從つた。

二人は驛前から電車に乘つた。四五丁行つたところで、電車の窓から街を見ると、幟を何本も立てた劇場らしい建物が見えた。

「あれは何んですか。」

と聞くと、

「あれは惡獸國の王國劇場です、却々立派なものですから、そのうち御案内いたしませう。なあに、芝居の方はつまらんものですが、小屋の方はちよつと見られます。」

「何を演つてゐますか。」

「何んでも、大變流行つてゐる諷刺劇で外題は、言論壓迫劇國體擁護運動とか云ひましたよ。」

第二信

その晩、山の手の羊の家へ一泊し、翌日は下町を羊の案内で見物した。この町も却々開けてゐて、丁度東京のやうに、電車や自働車が馳け廻り、どこを通つても、獸ばかりだけれど、なか〳〵賑かであつた。

「何うです。昨日の芝居を見物しませんか。」と私が云つた。

「さうさね。現代の芝居の中では、それでも此諷刺劇が一番面白いだらう。惡獸國の劇壇も今は、役者は無し、作者はなし、批評家はなしといふ悲慘な時代で、藝術的には無價値な古いものを繰り返し〳〵やつてゐるに過ぎない。それでも、昨今景氣が好いので劇場も入りを取つてはゐるやうだが、丸で輕業か曲

馬でも見に行くつもりで、行くのだらう。一方に亦新らしい芝居といふものもあるが、實は新しくも何ともない。たゞその特長は役者が下手だといふことゝ、作者が無能だといふことゝを標榜して翻譯劇　主にやつてゐる。」

「さうですか。私の國には女優といふものが出來て、近來大に流行物ですが、貴國では如何です」

と訊くと、羊君は頭をふつて、

「女優も流行つてゐますが、女優その物よりも女優の提灯持の方が却つて上手です。だが、女優なんてものは、勿論、舞臺の上の芝居は内職ですからな」

と答へた。私も、その先を追求して訊くほどの野暮でもなかつた。

學生等は無理に木戸を通つて、私達の傍へ來て見物席に着いた。

舞臺では今、一見ルーズベルトのやうな顔付の、鼻眼鏡をかけた人間と、ビリケンのやうに腦天の尖つた軍服を着てサーベルをぶら下げた男と、フロツクコートを着て、胡麻鹽髯を生した政治家風の男と、三人で何やら相談してゐるところである。

ビリケン、鼻眼鏡君、近頃はどうです?

鼻眼鏡。面白いこともありませんね。國内の羊共が秣の値段が高いと云つて、諸州で暴動を始めたらしいです。

ビリケン。怪しからん。如何に秣價が暴騰したとて國民が暴動を起すとは、何事だらう。早速各地の軍隊を出動させて、鎭壓させるより外にあるまい。今日はとても。手ぬるいことでは駄目だ。なあ、さうぢやないか、憲政の神樣。

(政治家らしい胡麻鹽髯は、憲政の神樣と呼びかけられて、ビリケンにむかひ)

憲政の神。閣下、今朝の新聞を御らんになりましたか。新聞には、この秣騷動の責任者を、閣下の内閣だと書いてありますよ。

ビリケン。又しても新聞の輕卒な漫罵には困つたものだ。それぢやから、益民心が動揺して、騷動が膨脹するばかりだ。こりやあ何んとかせにやなるまい。

鼻眼鏡。手段は簡單ぢや、全國の新聞紙を盡く發賣禁止すればいゝ。彼等が何事を仕出來すものか。吾々の方には軍隊もある。金力もある。警察もある。

憲政の神。その新聞の中でも、最も憎い奴は日の出新聞ぢや。あれが一番ひどく、閣下達のことを漫罵してゐる。あれは唯發賣禁止位のことでは、まだ手ぬるいから、もつとひどい目に會はせてやりたいものだ。

鼻眼鏡。如何にも御もつとも。吾々ばかりでなく、貴君等[illegible]る
ぶん手酷く、あの新聞にはやられましたね。ふゝやられたには、
[illegible]の同様でも、[illegible]なしになつてしまはう。
憲政の神。あつやうに[illegible]名前なく、我が輩の人格攻撃でやられ
るし、最も困ることに[illegible]く経営[illegible]を[illegible]されてしまふんぢ
や。
ビリケン。成る程、貴君にとつても、今の[illegible]を[illegible]へる法ぢやな[illegible]
憲政の神。いや、[illegible]ばかりではない。[illegible]鈴村商
店との関係まで、商店の経営[illegible]までゝ[illegible]で細かに明
白に曝露されて[illegible]には[illegible]がある。
ビリケン。では、目の前の[illegible]は吾々共同の敵ぢやな。うん、何
ん[illegible]それを攻撃したいものぢや。だが、一[illegible]新聞社と
戦ふに[illegible]を用ふるわけにもゆくまいし、言葉戦ひでは、
上手な彼等にはかなはんし、何しろ彼等の方が正義なんだか
ら、それ法[illegible]で争ふわけにもゆかない。憲政の神君、君は随
分智恵者だから、何か方法はあるまいかな。
憲政の神。ふゝん、[illegible]、我が輩の若い時からの得意
さ。昔にいゝことがある。今回の新聞を見給へ。[illegible]
[illegible]。それに又、[illegible]
て[illegible]（[illegible]）に[illegible]てゐる。そ
こでふだんは、博徒と同じく何んの役にも立たないごろつき
だが、[illegible]云ふ時には役に立つ人足がある。それは外でもな
い、狼仁會と云ふ奴等だ。彼等には道徳観念も、國家的観念
も、智恵も無いが、暗殺行と破壊的行為とを、何んとも思
はずにやつつける鉄面皮を持つてゐる。それに第一、最もい
ゝことは、彼等を使ふのは極めて安上りだ。
鼻眼鏡。どの位で請け負ふかな。
憲政の神。みんなで三四千圓もくれば足りませう。
ビリケン。では三人で千圓づゝ出すことにしやうぢやないか。
鼻眼鏡。[illegible]ところで、その策略と云ふのは、先づ狼仁組の暴漢
をして、[illegible]新聞の社長が自働車で出かける[illegible]ところ
を、公園に待ち伏せして暴行を加へさせ、更に一方[illegible]擁護
の会を[illegible]げて、各地で新聞社攻撃の演説をやらせる。
鼻眼鏡。だが、各新聞社が結束して同業者を援助するやうなこ
とがあつては、[illegible]だぞ。
憲政の神。そこは大丈夫、彼等の社會は結束力に乏しいから。

これで第一幕が終つた。

「何か陰謀をたくらむでゐるやうですね。俺はよく分りません
けれども。」

と私は肩を聳やかして云つた。羊は笑ひ乍ら、
「之だから惡獸國の政治家には困るんです。この通りのことをやつて、政權を掌握しさへすれば、それが成功した政治家だと思ひ込んでゐるんです。彼等の眼中に國利民福と云ふことは、少しもないのですからね。こう云ふ政治家はまつたく國家の寄生蟲です。」
「この後、どうなるのです。終ひまで見ませうか。」
と私が訊くと、
「後の筋は新聞の劇評で見たところだと、カラ詰らないものです。だが、あの陰謀の一部分は實現されるのです。あの新聞社の社長は、實際惡漢の手に依つて、公園で毆打されます。けれども天網恢々疎にして洩さず、と云ふ通りその惡漢は、警官に捕へられて一切の罪過を白狀します。それは狼仁組の一人の親分外山惡平の書生で、惡平から金五百圓貰つて、その惡行を敢てしたことを、白狀しました。何んでも惡平は惡政の神から、千圓程貰ひ受けたと云ふことです。又更に一方、狼仁會の一人西藏王高太郎なる男は、金二千圓の運動費を貰ひ受けて、畠中捨信と云ふ馬術と共に國體擁護運動の看板を掲げて、言論壓迫の演說會を興行しました。」
言論の自由の爲めの演說は、私も之まで方々で聽いたことがある。亞米利加のパトリック・ヘンリィの演壇で叫んだ「自由を與へよ。然らざれば死を與へよ。」と云ふ言葉は私等の若い時分、日本ですゐ分青年の間に、持て囃された標語であつた。けれども言論壓迫の演說などをする者があるだらうか。若しあればそれは餘程不思議な腦髓の所有者である。だが彼等は二千圓の金の爲にする一種の營利的運動である。誠意を以てする運動では無い。だがこの國體擁護運動なる名の下になされる、言論壓迫贊成演說と云ふやうな、馬鹿げたものを、聞く聽衆があるだらうか。私は日本にゐた時、內田良平だの、佐々木安五郎だの、田中舎身だのと云ふ人々に依つてなされた、演說會にはずゐ分澤山の聽衆があつた。もつともあの時は吉野博士も出て、對抗演說があつたから、その爲めかも知れない。
「だが、そんな演說會に聽衆がありますか？」
と私がきくと、羊は答へて、
「それはありますとも。一方に言論抑壓に反對する某法學博士の對抗演說がありますからね。」
不思議なことがあればあるもの。私が日本にゐる時、實際社會にあつたものと、あまりよく似た事件を取り扱つた芝居だ。
「その結果は、どちらの勝利になりました。」
「狼仁會は豫て仕組んだことであるから、その入場者さへも學

半其他智識階級の人々の、入るのを拒んで、強て自分の方に屆つて置いた壯士や暴漢を多く入場せしめた。けれども、演説に至つては、元より無學無識無節操で十七世紀頭と來てゐるから、狼仁會は見苦しい敗北を取つて、世の物笑ひとなつた、こゝでも天網恢々疎にして洩さずと云ふことが信ぜさせられます。」

私はこの時、丁度あの日本の東京でなされた浪人會の演説會で佐々木安五郎君が、聽衆の一人宮武外骨から「二千圓はどうした？」と冷罵を浴せかけられて、まごついた時の可笑しさを思ひ出した。

だがもう羊君の話で、芝居の筋は大體判つたから、後は見ないで家へ歸つた。

第三信

記者足下。

私はもう大分[illegible]國の事情に通じるやうになつた。そして、いろ／＼通信すべきこともあるが、特に自分の身の上にかゝつた事件に就て、御報導しやう。

私の寄寓する羊君の家の近所に、碁會所があつて、夕刻から客が集り、頻りに烏鷺を戰はしてゐる。私は或る晩、錢湯へ行つた歸りがけに、碁會所へ立ち寄つた。けれども、そこへ集つてゐた七人の連中は、何れも碁盤に向はずに花を引いてゐた。そして私にも仲間へ入れと勸めた。だが私は、

「私達の國では賭博は禁ぜられてゐますが、當地では許されてゐるのですか？」

と訊くと、中にゐた鼠の形をしてゐる頭を持つた人が、

「矢張りこゝでも、賭博は禁ぜられてゐますが、吾々のは賭しないで、唯花だけ引くのだから、遊戯に止まつてゐます。だからいゝでせう。お仲間入りをし給へ。」

と私に勸めた。併し、私は賭が無くとも花その物を怖れてゐた。それ故、私だけは仲間に入らず碁の相手の來るのを、持つてゐた。すると、却々碁敵は來なかつた。そして、新聞配達が夕刊を投げ込んで行つた。私はそれを拾ひ上げて、讀み始めやうとしてゐると、俄かに、バラ／＼と數名の犬が入つて來た。そして、皆を取り押へた。犬の一人は私の手首にも繩を掛けた。しかし、私だけは反抗した。

「亂暴なことをされちや困ります。僕は新聞を讀んでゐたゞけで、何も惡いことをしちやゐません。」

「言ひ譯があるなら、警察へ來てしろ。」

私が何んと辯解しても、犬は承知しなかつた。そして私を、外の者と同様に、警察へと引き立てた。しかし犬は私にだけは、特に同情するかのやうに云つた。

「君だけ花を引いてゐなかつたのなら、無論、直ぐに宥される。兎も角も警察まで一寸來て呉れ。來さへすればいゝのだから。」

犬は私をお母さんが子供を、だますやうにして警察へ伴はうとした。

「やあ、日本人が縛られた。」

と近所の子供が、わい／＼追いて來る。

「繩だけは解いて呉れ給へ。子供にまで笑はれるから。」

と私が云ふと、刑事の犬は、

「では、こうしてやらう。」

と自分が端を取つてゐた繩を、私の袂へ入れて呉れた。これならば外見には、縛られてはゐないやうだ。

私達は警察へ行くと直ぐに留置所へ投り込まれた。私は警察へ來れば、直ぐに宥されると聞いて來たから、そのつもりで待つてゐたが、何時までしても調べが始まらない。私はもう、我慢が出來なくなつた。

「どうか早く調べて、早く解放して下さい。」と、そこへ來た犬に頼んだが、知らぬ顔で行つてしまふ。この警察にゐる人々を見ると、何れもその頭は犬である。先刻私を縛した犬が來たから、私は詰るやうに、

「何うしたんです？ まだですか。困りますね。」

と云ふと、彼は

「氣の毒だが、今夜は部長がゐないから、明朝調べる。それまで待つて貰ひたい。」

「だつて君は、先刻警察へ來さへすればいゝと云つたぢやないか。實際困るぢやないか、さう云ふ嘘をつかれては。」

「でも部長が留守だから仕方がない。」

「でも實際、家でも心配してゐるだらうし、僕はこの通り湯上りで、シヤボンと手拭ひを下げてゐる位で、寒くつて堪らない。」

その晩の寒さと云つたらなかつた。湯冷めはして來る。それに私は未だ夕飯を食べてなかつた。見ると、向ふに薄つぺらな座布團があるから、それだけでも敷こうと思つて、前にゐる犬に、

「この座布團を敷いてもいゝですか？」

さう訊くと、犬は何も云はずに外方を向いた。默許したと云ふ様子である。私だけは一枚の座布團を敷くことが出來た。けれど外の者は慄えてゐた。コト／＼と靴の音をさせて、別の制服犬がやつて來た。こいつは剽軽者と見えて、

「何んだつて貴様等は、花なんか引くんだ。花を引くから捕ま

るんだ。」

　そこで私の傍にゐた男が、

「花は引いても、ほんの弄びです。賭をしたわけぢやありません。」

「賭はしてもさ、碁でやれ。何故碁でやらない。花を引くから捕まるんだ。」

　こう犬が云つた。この言葉に依つて考へると、警察では賭博を罰するのではなくつて、花を罰するのであるらしい。この犬は頻りに駄洒落を吐き、その癖高慢な顔をして、一人で得意になつて喋舌てゐたが、暫くすると向ふへ行つてしまつた。夜はだん／＼更けて行つた。寒さは益々甚じて來た。火は一かけも無い。私は何んの犯せる罪も無くして、斯様なところで少しも眠られぬ一夜を送らねばならなかつた。

　翌朝になると、小使が辨當を持つて來た。そして、

「ウ、喰へ。」

と畜生にでも、人間が物を與れる時のやうに、或ひはもつとそれよりも侮蔑した態度で、私の鼻先へ、辨當箱を突き出した。この態度はしかし私をして立腹させるよりは、寧ろ笑はせた。私が辨當の蓋を開くと、何んとも云へない嫌な匂ひがした。だが昨夜から私は一食もしてゐなかつた爲に、こんなものでも喰べないわけにはゆかなかつた。そして解放されるのを待つてゐた。八時過ぎてから、漸く部長だと云ふ太つた犬が來た。そして調べが始まつた。私は曰く付きなので、一番後に廻され、他の者から調べ始めた。

「貴様等、昨夜花を引いたんだな。」

と威丈高にその犬が云つた。

「ヘイ、花は引きましたが、ほんの慰みです。賭をしたわけぢやありません。」

「賭をしないで、なぜ花を引くものか。嘘を云ふと許さんぞ。」

「嘘ぢやありません。ほんとうに賭なんかしなかつたんです。何んにもそこに置いてありやしません。」

「嘘を吐け。お前達がいくら嘘を云つても、此方には直ぐ判る。お前達は昨夜花を引いたんだらう。」

「ヘイ、引くには引きました。」

「それ見ろ、俺の云ふ通りだ。それでは賭もしたに違ひない。」

　結局いつまで問答しても、同じことが繰り返されるに過ぎなかつた。すると、部長は、この部長は少し短氣と見えて、急き込んで來た。

「結局こんな押問答では、何時までしても同じことだ。」

と此方で云ひたいことを、向ふで云つて、それから、

「不敬なことがあつたら、公判廷で云ふがいゝ。お前達が白状せんと、いつまでゞも此處に置くから、さう思へ。服罪すれば裁判所へ廻してやる。裁判所へ行つて、公判廷で辯明すれば、直ぐ無罪になる。その方が早いぞ。では諸君。」

働きのある警察部長と見えて、立ち所に七人の罪人を拵へてしまつた。

部長は最後に私に向つて、

「君は唯新聞を見てゐたのか。新聞を見るなら家で見るがいい。なぜ葬會所なぞへ行つて、新聞を讀むか。それだから捕まるんだ。」と私にも高飛車に出て來た。私は、

「私は新聞を見たゞけです。丁度夕刊が來たところだから見たのです。疑はしければ、みんなに聞いて下さい。」

「みんな、さうか？」

「その通りです。その人は唯新聞を見てゐたゞけです。」

「それなら、君だけはもう歸つてもよろしい。」

昨夜から、散々寒い眼に會はせて、恥をかゝせて、人の自由を束縛して置き乍ら、一言の詫びもせずに、そんなら歸つてよろしいも無いものだ、と思つた。そこで私は、

「私が花を引かなかつたことは、今朝まで待たないでも、昨夜から分つてゐたことです。こゝにゐるものは皆、昨夜から私の話相手でした。それなのに、貴方のところの犬は警察へ行けば、直ぐ調べて返すからと云つて私を欺して連れて來て、一晩無理に留めて置かれたのは、人權蹂躙だと思ひます。」

と私は、少し怒つてやつた。すると部長は笑つて、

「そんなに怒り給ふな。放免してやつたらそれでいゝぢやないか。警察法では、たとへ無罪の人でも一晝夜は、勝手に拘留していゝことになつてゐるんだ。」

と彼は勝ち誇つたやうな顏をして云つた。「いつたい其麼不都合な警察法に從つてゐる國が、何處の世界にあるか。」

と私が一本遣り込めてやつた。すると彼は少し狼狽へたが、

「いつたい君の國は何處だ。眞逆イギリスや、アメリカや、フランスぢやなからうな。」

「東洋第一の文明國、大日本帝國が僕の國だ。」

と私は、心から自慢のつもりで名乘りを上げた。すると彼は、さも安心したと云ふやうに、ホツと一息ついて、

「それなら大丈夫。確かに日本の警察法には之と同じ規則がある筈だ。日本では何の警官もこんなことを人權蹂躙とは思つてゐないだらう。國へ歸つて、おまわりさんに、聞いて見な。」

私は俯向いて、默つて警察を出るより外はなかつた。

見物人の最大迷惑たる 相撲苦情速決論

生駒翺翔

相撲の見物にとりて、何が一番苦痛で、且つ不愉快かと云へば、勝負に對する苦情に越すものがない。相撲の弊害を數へ上ぐれば、決して二三に止まらぬのであるが、最も痛切に見物を惱ますのは苦情の永びく事である。力士の立ちの汚ないのも、素より見物を惱殺するのであるが、之は弱者が强者を倒さんとするとき、敵の罅隙を狙つて立たうとするには、策戰上仕切りに念を入れる必要もあるし、又た上位の力士たりとも、呼吸の合はぬのに粗漏の立ち方をして、見惡い敗を取つては、其履歴に汚點を印するから、太刀山程の大力士でも、立ちは寧ろ汚ない方であつた譯で、一概に排斥す事も出來ない。否な仕切中二力士の長所と短所とを知つて、其立上りの策戰を讀まうとするには、寧ろ待つた澤山の内に、無限の趣味を感ずる事もある。

然るに勝負の苦情となると、相撲が濟んだ後の係爭事件であるから、傍に聽いて居る者は、其輿論に惱まされ、遠方の見物は全く無意味に、貴重なる時間を空費させられる次第で、是れ程迷惑至極な事がない。斯の如き非文明的な、愚劣極まる習慣が、年々歳々新聞雜誌上で攻撃せられ、毎場所觀客から罵倒せられつゝ、尙ほ且つ何等改良せらるゝ所なきは、如何に保守的な、非常識の連中に依つて、組織せらるゝ相撲協會とは云へ、頗る奇妙の感なきを得ない。之に就て聊か卑見を述べて、好角家の一考を煩はし、且つ協會の反省を促がしたい。

抑も苦情の無暗に長びくのは、決して相撲道の常態ではない。昔は行司に無限の權威があつて、其裁斷に對して、力士の反抗などを許さなかつたものである。然るに後年力士が各大名のお抱へとなつて、人氣を呼ぶ樣になり、行司は反對に有力なる後援者がなく、寧ろ力士の從屬となつて、僅かに衣食の料を得る有樣で、派出な力士生活に對して、全く影の人となつた結果、土俵の上で、力士の專横を制することが出來なくなつた。其上行司と共に公平なる裁斷をなすべき検査役なる者も、頗る無氣力不徹底の連中で、其任務の神聖なるを自覺せず、人氣力士の

權威を損ふては、營業政策に不利を來すと考へて、力士の無理は或る點迄通させ樣とする。

所が苦情の付いた場合、無理をすら制壓する能はざる程の檢査役がドウして有理の方の力士を抑へる事が出來やうぞ。結局東西兩溜りにお百度を踏んで、徒らに見物を渺かしめるのが落である。四人の檢査役が一致して甲の方の勝を認めても、乙の方の控が橫綱か大關であると、其抗議に敬意を拂つて、或は土俵預りにしたり、或は一方勝星の、他方負けなしなどの、不條理千萬は裁決をなして收まつて居る。呆れざらんと欲するも得んやである。道理の前には力士の位置の上下がない。理のある苦情は、下位の力士たりとも考慮を拂ふべし、理のない苦情は、橫綱、大關の言たりとも、斷然却下すべし。是れ檢査役の權利で且つ義務である。力士としても自分等の勝負を判定せしむべく、多數の投票を與へて、選擧した檢査役である以上、其裁決には絕對に服從すべきである。自分等が選んだ檢査役の裁判に對し、盛んに愚論を吹き掛けて反抗し、或は論旨亂れ語塞りて、明かに自己の非を認めながら、尙ほ我執に囚はれ、服從を躊躇する者あるは、沙汰の限りである。

固より行司、檢査役と雖も、神でない以上は、見誤りが絕對に無いとは云へぬ。比較的上位の行司の關違ひや、檢査役の見落しなどの實例は、每場所一二回發生したい事はないが、此際前例の爲めに、行司、檢査役の權威を無視する事は、不都合と云はねばならぬ。斯ゝる見易き道理が、協會と力士から閑却せられて、何等改良の實を示さないのは、何故かと云ふに、無論前に述べた如く、力士の權力過大なるにも依るが、今一つ世人の注意しない事情がある。夫れは力士の『氣力と勝敗』の關係である。

例を舉げて云ふと、極く早い相撲で僅々數秒間に、二三回も攻手を換へ、結局曖昧た倒れ方をした場合、行司も檢査も一寸判斷に迷ふ事がある。先づ兩體の何れが先きへ落ちたかを判定するのが困難である上、同體なれば仕掛けた方へ軍配を上げるのが法であるが、餘り攻手の變化が早いと、最後の仕掛けが甲乙何れに在るやを見分けるのが困難である。斯かる場合は當然軍配の上からなかつた方から、苦情が出るのであるが、斯の如き場合でも、檢査役の多數決で丸預りとか、土俵預りとか、或は全然勝負を付けるとか、立派に裁決を下して善い筈であるが、一概にサウ出來ない事情がある。夫れが即ち『氣力と勝負』と云ふ、微妙なる心理作用を顧慮するからである。

即ち斯かゝる場合に甲乙何れかに有利の裁決を下して、他の側の言を卻けると假定して、勝負其物が非常に曖昧で、お互に

最後日の一日位の勝と考へて見る時に、反對派に有利な判決を與へられると、其判定に勝つた方の力士は其後で上位に上つたとき嬉しさの餘り、氣力も旺盛で、其座に價値を示すが、自説の通らなかつた方の力士は、怨氣を含んで土俵に上る結果、思慮に周到を缺き、立上りが遅れたり、勝負が粗雑となり、無理な手を出して甘く行かないと、何か急ち挫折し、陰鬱として、往々星勘定にすら不利を招くる實例は、常に目撃する所である。

力士と云ふ者は、見掛けに依らない小心者で、殊に不平不満中は、神經過敏になつてゐるから、相方の出方に多少不愉快を齎らしたら、閉籠したりする者である。若し一度お守りを入れて、不用意に腰を浮かしたり、當時相撲記者室を覗いて、勝利の秘訣をする力士もある。斯く迄も神經的で、デリケートになつて居る彼等の心理状態は、自己の云ひ分が不法に卻けられたと感じたとき、暫く平静を保ち能はざれば、各検査役等が、自己の評判に照らして、大いに同情する所がある。假りに横綱とか、大關とか、或は年寄株候補力士が、衆人環視の下に土表に上つて、思はぬ不利を取り、検査役に對する反感で、最負讀中の数時間に依り、翌日から休場でもすると、忽ち相撲の人氣に響り、協會の收入に迄影響するから、勢ひ検査役の裁斷が、人情に拘まれ、相當の斟酌に左右せられる事になる。是れ多年の弊害の改除され難き最大の禍根である。

既に斯かる事情のある以上、苦情の弊は到底除去出來ないのであるか。我等は決してサウは考へない。是は各力士の考へ一つで、容易に改良出來る事と思ふ。一體我國人には、餘りに議論や勝負に拘泥し、執着し過ぎる弊がある。歐米人は或は議論したり、或は選擧を爭ふ場合に、其戰闘に全力を竭すが、一たび勝敗が決定した以上、敵味方互に握手して、快然敵の勝利を祝するのは洵に美風である。力士の如きも、疑はしき勝負に對して、互に自己を主張するは避けれども、一たび検査役が決斷を下した以上は、快然として之に服從し、氣を新たにして更らに自己の戰ひを戰ふのが善いのである。然らば則ち各力士に心服せしむるに足るべき裁決法は、如何にすべきか。是れ本題の主眼である。

我等の目撃は、力士溜りの後方、餘り遠からざる所にあるので、苦情の場合、検査役や力士の言分が、居ながらにして聽く事が出來るが、非論理的（イルロヂカル）で、不徹底で、歯切れの悪いのには苦笑を通り越して、慨嘆を禁じ得ない。即ち彼等の論法は專ら直覺的で、獨斷的で、其上力士側は之に利己的個癖を加へるのだから、議論の歸結を見ないのが當然である。兩者が今少し事實

を基礎とし、推理的、演繹的に立上りから勝負迄の變化を、論窮したなれば、問題は非常に簡單に解結するのである。行司中に比較的此傾嚮のあるのは、勘太夫で、我等は彼れの衒氣と、稍に衡平を缺くのを好まないが、苦情に對する彼れの說明が、論理的で、直截公明なるを愛する。此點に於ては與太夫彼れに追隨し、庄之助、伊之助の二統領は、寧ろ直覺派に屬する。又た檢査役では尤も論理的であつたのは故尾車で、今では入間川が論理派に屬するが、往々理想に墮し過ぐるの弊がある。

蓋し直覺を根據として、議論する段になると、甲は踏切りがあつたと云ひ、乙は踏み切る前に、敵方の體が落ちたと云ひ、互に盾の半面のみを主張力爭するのみで、其玆に至る迄の推移と、原因とを度外視するから、何時迄も同一文句を繰り返して、一向埒が明かない。普通人の議論は、同一の主旨を論ずるにも、色々と言葉を換へて、各方面から自說を主張せんとするが、力士と檢査役には、言葉が貧しいから『踏切りが早い』、『否や體の落ち方が早い』、と同一文句を數十度も繰り返して、其間に五分間も沈默で睨み合つて居るのである。凡そ斯の如き愚劣なる討論は、相撲場以外何處でも聽く事が出來ない。斯の如くして三四十分も、時には一二時間も、空しく土俵を明け、結局未決定の儘で協會捌きなどは、如何にも現代離れのした遣り方である。議會などでは、同一人が同一論旨に就て、二回以上發言するを禁じて居るが、相撲場でも此議事法を採用すれば、非常に時間を節約するを得べく、又檢査役や力士等も、直覺や感情の上に、立脚せずに、事實と推理で曲直を定める樣に心懸けたら、多年の弊竇も、存外容易に剗鋤せられるであらう。一例を舉げると大正五年春場所八日目、西の海と黑瀨川の取組で、西が左差し西土俵に寄り切つたとき、西が兩膝を土俵に突いたので、西溜りから苦情が出て、數十分押問答の上、協會捌きで西の勝になつた事がある。此時など檢査役は黑の踏切りが早いと云ひ、力士側は西の體が早く落ちたと云ひ、例の水掛論が乾なかつたのであるが、其相撲振りから推論すれば、西の勝利に一言の非を打つ所がなかつた。我等は卽ち推理的に、西の勝利を新聞紙上に主張して置いたが、結局協會捌きも同一の歸結を見たのであつた。若し此時我等の論評と同一の議論を、行司か檢査役かゞ、土俵上で試みたなら、卽座に解結が付いたと考へる。

卽ち此時の相撲は左四つで西一氣に寄つたので、黑瀨は右に廻つて行司溜りの方に逃けんとした。夫れを西は防ぐ爲めに左り差手に掬投け打つて、土俵に詰めたので、黑瀨は右に廻るの

を斷念し、今度は左りに廻轉して正面に逃げんとした。そこで西は右手に敵の差手を捲いて小手を振り、敵の腰の挫けた所へ、便腹を押當てゝ、寄切らうとした。此時黒瀬の踵が俵上にあつて、最早左右何れにも廻る餘地がなかつたので、パッと親柱檢査役の前に飛び下りながら、グイと引いたので、西は不意に障壁が消滅した形ちで、兩膝を俵上に突いたのであつた。即ち彼れの體は、黒瀬が踏み切らない以上、ドウしても前に落つべからざる、論理上の根據があつた。若し彼れが土俵を離るゝこと五寸か一尺の砂上に膝を突いたなら、黒瀬に廻り込む餘地があつたと認められるが、既に土俵一杯に詰まつた事實があり、次で黒瀬が檢査役の前に飛び出して居る事實があり、第三に西が俵の上に兩膝を突いて居る事實がある以上、之から歸納して黒瀬の踏切りの早さは、明瞭なる事實であらねばならぬ。

檢査役も力士も、斯の如く推理的に、勝負を論斷し、夫れで尙ほ疑はしきときは、お互の意見の一致する所を確め、其異なる點は協會捌きにして檢査役の多數決で定める事にすれば一の苦情が三分か五分で濟む樣になり、力士も無理に壓制の裁決をされたと云ふ樣な、感情の動搖がなくして、次の土俵に上り、自分の戰ひを充分に戰ふ事が出來るであらう。正確な時計を態と進まして迄、日光經濟を計る世の中に愚劣な論爭に時間を空費するは、退化的風潮と云はねばならぬ。切に協會と力士との反省を望む次第である。

ハウス大佐は誰ぞ

―「ウイルソンの懐刀」「講和會議の一大立役者」―

某米國通

日本の發言權は局部に制限されて居ると吞氣に構へて（出やう一つでその活動を展開させることが出來るに係らず）青島、西伯利、南洋の占領地に關する要求と主張の智識だけを引掲げて、歐洲の媾和會議に臨むやうでは、日本乃至日本人は到底世界的日本乃至日本人とは云へない。小指一本の怪我を療治することだけ知つて、身體器官の全部に渡る智識を缺いて居る場末の生藥屋の主人に異ならない。米國を見給へ、米國は戰爭に參加したと間も無く、千九百十七年九月に大統領ウイルソンはこの文の題である『ハウス大佐は誰ぞ』のハウスに任命して、媾和會議に列する米國委員の參考に供する爲めとて『媾和調査會』を作つて居る。戰爭を始めたと同時に先を見越して媾和の準備をする――この點がウイルソンの偉い所だ。彼の組織的頭腦は單に旺盛な戰爭氣分の爲めその理智を失はなかつた。彼は假令戰爭に勝つたとしても米國は歐羅巴の地圖の一部分でも米國の色で塗るもので無いことを知つてゐる。又彼は物質的野心に驅られて平和の米國を干戈に起たせたので無く、亂れた歐洲を民主的に整理するといふ理想から出發して居るといふことを忘れない。故に媾和の場合に、責任者の一人として此問題に關する最も正確で詳細な資料を握つて居なくては駄目だといふ見地からして、彼は戰爭を始めたと同時にこの媾和調査會を作つたのである。實に彼の餘裕ある組織的發展には敬服の外無いのである。

ウイルソンの命令を受けたハウスは研究の項目をこう分類した。第一にアルサス・ロレーン問題。第二に波斯灣とバルチツク海間の土地の處分問題（米國の政治家は一班にこの地方に關する智識が稀薄であるから殊に徹底的研究を必要とした）第三に中央亞非利加に於ける殖民地問題。第四に獨逸と墺地利匈牙利の經濟問題。第五に海上の自由問題。第六にパレスタインに於ける猶太人問題とバルガンに於けるスラブ諸民族の葛藤并に墺地利に制服されて居る諸種族の將來其他波蘭希臘問題等。これ等の大な諸問題を科學的に研究するに當つて、研究會はまづ第一に華盛頓と紐育に於ける大圖書館并に米國地理學協會（アメリカン・ジエラグラフヰカル・ソサエチー）并に The National Board for Historical Service 其他の研究倶樂部の一致盡力を乞ひ、調査委員長には『紐育市の大學』（ザ・カレージ・オブ・ゼ・シチー・オブ・ニユウ、ヨーク）校長を又秘書官にニユウ・レパブリツクの編輯記者であつたウオター・リフマンを撰んだ。『紐育市の大學』校長メゼス博士はハウスの義兄弟で、丁度ハウスがウイルソンに於ける如く主義定見の上で異體同心的關係であつた。この調査會に參加して盡力した學者の間にはコロンビア大學の歷史教授ショトウエルや地理學者ボウマン博士や其他最も有力な學者の名前が含まれ

て居る。國際法の問題は種々な助手を使つて紐育辯護士會のミラーが責任を持つて研究したのである。專門の學者をそれ〴〵適所に置いて前記の諸問題を細大洩さず確實に研究したのである。聞く所に依ると、米國地理學協會では領土的經濟的又人種的問題を一目瞭然たらしめる爲め――例せば、幾番の地圖を見るとベサラビアの人種的分配が正確に分る、又幾番の地圖を見ると赤道附近の亞非利加で植民地として適當な場所の面積が分るやうに――幾百枚も製作されて居るといふことである。其他種々様々な研究資料の蒐集が出來上つて居て、これ等の智識的準備を引提げて米國委員は佛國の媾和會議へ臨むのである。斯くの如き緻密な研究を背後に持つて媾和會議に出たといふ例は世界の歴史上未聞の出來事で、又米國にして始めて實行することが出來る所のものであらう。このことは單に米國の新聞が感傷的に誇る言葉のみで無い。

米國諸新聞の報道に依ると、ハウス大佐丼に研究會委員の態度は何處までも科學的調査の嚴肅を守つたもので、諸聯合國政府に於ても夫れ〴〵研究機關の結果を齎らすではあらうけれども、米國媾和委員の所期する所は他の委員に必要な資料を一手で供給するにあるのである。勿論米國は何等一つも私利的動機で汚れずに公明正大な態度で媾和會議に臨むのであるから、獨逸の野心を挫いたと同様にまた聯合諸國の自分勝手な計畫を許すもので無い。大統領ウイルソンは進んで獨逸の權利さへ或る場合には辯護せぬとも限らない。彼等米國人は歐羅巴の正當な整理者を以て自任するものである。それが彼等の理想である。僕は此處では彼等の理想が賢か愚か又實行されるものかされぬものかを論ずるので無い。彼等の理想は即ちそれであると報道するに止める。

戰爭以來米國その他からの外國電報は絶へずハウスなる名前を傳へて來るが、全體この男は何物だ？ 日本に於ける外國人一人として戰爭前にこの名前を耳にしたものは有るまいといつても必ずしも誇張で無い。實際米國でも五年前まではハウスを知るものが少なかつた。我日本に居てこの無名の大佐――日本で大佐といへば相當の將校に相違無いが、米國では Colonel と自稱する田舍の紳士は殊に西部では箒で掃き箕で捨てる位さらにある――が大統領を代表して聯合國間を往來して居るといふ報道を聞くと、彼は怪しい謎の飛將軍とも思はれ又大統領の蓄音器か所謂 Fetch-and-carry man の氣輕な飛脚屋とも感ぜられるが、彼のことを書いた "The Real Colonel House"（紐育市ドーラン會社出版）を讀むと、彼を圍繞する何等暗い不思議な雲を見ない。彼は「世界に於て最も正直な虚心坦懐の米國紳士」

て[illegible]いて[illegible]に於ける[illegible]の[illegible]な、大統領ウィルソンに[illegible]役をして居[illegible]な人物で[illegible]一市民として[illegible]た、[illegible]に[illegible]中心[illegible]に[illegible]く[illegible]い[illegible]るといふことは[illegible]に[illegible]つてのは[illegible]て居るハウス大佐は彼の崇拝者がいふやうに、『この時代の米国に於ける三人と無い政治家中の一人で[illegible]あるかも知れぬ。彼が千九百十七年の[illegible]委員即ち The [illegible] Mission to the [illegible] Conference の委員[illegible]英國に渡つた[illegible]に彼に[illegible]する[illegible]、[illegible]出て居るのは[illegible]無い一市民を以つて欧羅巴の大国を支配する[illegible]聯合[illegible]にテキサス[illegible]い[illegible]てある[illegible]間は、テキサス州(ハウス[illegible]にテキサスの[illegible]、[illegible]法[illegible]の[illegible]、不[illegible]にこの六十[illegible]の中[illegible]中[illegible]一[illegible]るところの『[illegible]』[illegible]としてあるか)の[illegible]、[illegible]一人なるロード・ノルスクリフは[illegible]、ハウス大佐[illegible]の

も[illegible]々な小[illegible]つもに[illegible]ために、長[illegible]組[illegible]は直に[illegible]一[illegible]に[illegible]する[illegible]うな各國の委員は、[illegible]して居るものと思はれたが、賢明な大佐は[illegible]にこの[illegible]から我我を救つた。我我に彼に依頼する。協商[illegible]の[illegible]二分間で終り、直に閉會をして夫れ〲専門的仕事に着手した。』而して見るとこのテキサスからの田舎紳士ハウスは非常な事務的天才に相違ない。

彼は直に沈黙の信者で、鳴物入りの政治家で無い、机上に於ての戦闘家でない。彼はこういつて居る、『僕は人生を見れば見る程、多くの政治家は多辯の爲め不利益を招いて居るのを知つた。[illegible]の注意を[illegible]くやうな言論を吐いて、それから一週間も懶惰に座り込んで自分の話つた言葉を胸中で繰返へして興に入るといふ政治家が[illegible]る。僕はこの主義を嫌ふ。僕は出來るだけ熱心な[illegible]と[illegible]二つを守る[illegible]た、――これで無くては到底今[illegible]ない。[illegible]の民主々義の最大弱點は餘りに澤山[illegible]に[illegible]。彼は[illegible]化である。彼はまた或る意味に於て[illegible]に近い[illegible]事を[illegible]しない、自分が信頼するに足ると思ふ[illegible]な人物を選抜すれば、それが即ち[illegible]にに[illegible]きて一言も干渉しない。彼がホウイルソン[illegible]されたことに關しては何人の助言を謝絶するも

ので無い、彼は賢明な理智を抱いた獨裁論者である。その點ではウィルソンも同型の人であると思はれる。要するにウィルソンとハウス大佐は精神上の双兒である。肝膽相照らす程の親友關係である。勿論後者は前者をして斷然戰爭を布告せしめるに至るのを奬勵鼓舞したに相違ない。ハウスはこういつて居る、『歐洲の聯合國の總理大臣はいつ幾時その職を失ふに至るかも知れぬに引替へて、大統領ウィルソンは向後三年間は確定した支配權を持つて居る。彼は實際に於ける獨裁君主だ。その力を利用してどん／＼戰爭に勝つやうに事業を遂行すれば良い。確定した三年間の支配權といふことは實に重大な力である。』この意氣込みで米國の大統領はハウス大佐を顧問として着々前へ／＼と進んだのである。繰返へしていふがウィルソンもハウスも專制主義者である。又仕事を簡單直接に遂行して目的地へ進むに當つては專制主義を最大便法と認めたのである。而して彼等は共に賢明な事務家である。

ハウス大佐が米國戰時委員長として十一月六日倫敦へ着するや否や、彼は同行の委員（米國海軍を代表するベンソン水師提督や陸軍を代表するブリス將軍、その他は一班的名聲を持つて居なくとも實力の上にて信頼することが出來る人物で成立つて居た）に第一に多辯を嚴禁すと申聞かした。彼等の使命は『喋べることで無く唯もう仕事することにあるのだ』と相互に約束した。それから第二に如何なる場合でも公的酒宴に列し無いこと、第三に專門／＼があるから他人の仕事に差出口せず自分丈けの仕事に對する最善を盡すこと、第四に無用の議論は相互に謹愼することを約して、短日月の間に彼等委員は英佛兩國で巨大な仕事を遂行したのである。ハウスの言葉に、『三四人で結論に達する方が十二三人より餘計な時間が掛かる。出來るならば仕事を小委員に托することだ、――人數が少なければそれ丈け事務は益々運んで行く』とあるのを僕は讀んだ。それは多くの場合に於て事實である。若しハウスが日本に外交調査會といふものがあつて總理大臣級の人間が五人も六人も七人も居て、いつも食事を一所に取り乍ら相談するのだと聞かされたならば、果して彼は何んといふだらう。『そんな馬鹿を遣つて居るから日本に外交が無いのだ、又食事をわざ／＼宮中で取らんでもよい、食事は食事、相談は相談と事務的にするのが國家繁榮の第一歩だ』とでもいつて笑ふであらう。

彼が如何に佛國に於ける聯合國の軍事會議を單に演說會で無く、實際の仕事の會合ならしめたかは前記ノルスクリフの證言でも明瞭であつて彼は一層彼の男振を擧げた次第である。米國式の Business Method は歐羅巴人の知る所でない。この不言

實行の信條は一見米國の民主々義を裏切るやうに思ふ近眼論者があるかも知れぬが、そも〳〵民主々義の要諦は人民の福德利益を念頭に置いて出來る丈け迅速簡單に理智を働かせるにある。この確信を持つたハウス大佐は軍事會議で諸聯合國の關係を更に完全ならしめ、その行動を更に融和せしめた大な楔と成つたのである、即ち彼は諸聯合國に米國式事務法を敎へたのである。十一月二十九日に巴里に着いた米國戰爭委員は佛國內閣の變更の爲め二度まで遲延して、いよ〳〵開會となつた時ハウスは直にクレマンソーに演說抜きで仕事に着手することを申込んだ。この愉快な提議は佛國首相の賛成する所となつて、彼の開會の辭でさへ二分と掛からなかつたのである。そしてそれに準じて會議の仕事は所謂米國式事務法を採用したが爲め、『食糧問題、船積問題幷に米國兵の訓練問題の三つを手取早く決定するに至つたのである。そして聞いて驚くのはこの米國委員が費した全費用は僅々一萬二千弗であるといふとだ。然るについ近頃新聞で見ると今日日本から送る媾和委員の費用は隨分と巨額のやうに思はれる。由來貧乏人（貧乏國も同様）といふものは無茶に金を使ふものだ。

信頼するに足る報告に依ると、彼は一文の金錢も米國政府の支給を受けて居らぬ。戰時委員として歐洲出張の際などもその實費の負擔まで自分で支出はしなかつたに相違ないが、今日までの實際は彼は自分辨當で國家の爲め、少くいふと彼の親友大統領ウィルソンの理想完成の爲めに奮勵して居る。然らば彼は米國の百萬長者かと調べて見ると、たゞ彼は米國の標準で食ふに困らぬ程度の人たるに過ぎない、――彼は年額日本金四萬圓位の納入が保證されて居るだけの身分である。彼が金錢慾に冷淡であるのはいふまでもなく、彼の言葉に依ると『何か國家の繁榮を進める仕事を一應行つて見たい。私利を離脫した眞實の仕事に從事すること位人に滿足を與へるものはない。物質慾に捕はれて居る米國と雖も我黨の士が少いのでない。例を擧げると、軍隊の一工兵將校が支給せられる零細な給金で滿足してあのパナマ大運河を完成したゲザルス將軍を見給へ。更にまた一生をハーバード大學に提供したエリヲット博士を見給へ。仕事に從事してその成功自身を以て厚く報償されたものと滿足する人間の力や蓋し偉大である。大統領ウィルソンも其一人で、僕も亦その種の人間たらんことを私かに期して居る。』國家に對する犧牲心と無金錢慾の二條件位如何なる場所又如何なる時代に於ても力強いものはない。ハウス大佐もこの二大武器を抱いてウィルソン政府の黑幕となり、世間から『ウィルソンの懷刀』と綽名付けらるる程の仕事の功績を擧げて居る。

彼は年額四萬圓以内の生活費であるから、彼の實際の生活は極めて質素である。彼の行爲は何んな場合でも『熟慮の上無駄を省く』といふ一定不動の主義から出發して居る。彼の借りて居る紐育東五十三町目百十五番(公園とレキシントン・アヴェニユウとの中間)のアパートメント・ハウスは紐育中萬を以て數へるもの丶一たるに過ぎない。彼の使用して居る書記もたゞ一人だけで、山なす事務をぐん〳〵整理して行くのを見ると、誰も彼が天品の事務家であるのを感ずるといふことである。彼位生活上に規則正しい男はない、——彼は如何な事情のもとでも夜九時間の睡眠を採ることゝして居る。毎朝半時間を郵便物一覽の爲めに與へ、それから半時間を散歩に供し、散歩後約束の順番で人に接し時には晝食さへ人と重大な問題を議し乍ら取ることがある。午後も午前同樣人に接するのであるが、合間を見てはそつと運動に出掛けることもある。夜分は決して人に面會せず獨り華盛頓から來る　山の報告通信を逐一通讀するのである。彼は滅多に芝居へも行かない、彼は紐育で六つばかりの俱樂部員であるが、いつも俱樂部の門番がその名前を聞かずには家へ入れない位彼の顏は俱樂部で知れて居らぬ。又彼は過去二十年間といふものはついぞ人を訪問したことがないそうである。彼はこう語つて居る、『僕はテキサスの夏に堪へられないのでマサチユセツ州のマグノリアに小な別莊を持つて居る、それは他人のやうに贅澤の結果でなく、自分には必要上止むを得ない。僕の健康は至つて薄弱である。故に人を訪問すると一軒だけでさへ僕を直ぐ疲勞させて仕舞ふ。僕が戶外不出を實行して居る理由は重もにそれであるが、僕が家にいつも坐つて居るといふことが一班友人間に知れて居るので、僕に用のある人はいつ遣つて來ても僕との會見を失したことがない。僕の友人は僕の不在を念頭に置かずに都合のよい時間に遣つて來る、——これも非常な便利であると云はねばなるまい。』

ハウスの書齋兼事務室は八疊間位の小な部屋で、一箇の机と二三の椅子、それに壁を飾るワシントン、リンコルン、リー、ジヤクソンなどゝいふ米國大人物の寫眞、それから書棚に入れてある書物(中にはブツトウやチヤールス・ラムやミルがキプリングやチヤンバレンの『十九世紀の基礎』などゝ肩を擦合して居る)がこの部屋を飾つて居るのみである。彼はこの平凡な部屋で各階級の名士に接見するのである。大統領ウイルソンの訪問の際には例として奉公人の外一人でも家に止まるのを許さない。こんな場合にはハウス夫人は自分の娘の家へ臨時に見舞ふことにして居るそうである。一家の主人として箇人的にハウスは理想に近い人であるそうだ、——彼の禮儀は古風で所謂南方

式の温情に豐かたものである。彼は人を階級や職業の種類で分けて眺めるやうな賤しい人で無いのはいふまでも無い。彼は下女下男を見る宛も大統領を見ると同様であると聞いて居る。彼の態度はいつも平靜恭敬を極め、年に不相應な快活を示して居る。彼を一見したものは彼の眼を忘れることが出來ぬそうである。ハプグートが書いた一文中にこういう彼の描寫がある。『彼の顏は親切で敏活で熱心で柔和である。他人や友人をついぞ傷付けたことが無い彼の舉動と良く一致して居る。人が彼を全體的に見ると先づ第一彼の綠色の兩眼に注意を拂ふ。彼の眼を外にすると彼の外見に特別注意を强いる特調が無いやうである。然し彼の外見以上に高價なものを彼が持つて居る、それは彼の表情と舉動とで創造する彼の空氣である。』

彼の狹い頬骨が高く顯はれて居る顏の樣子は西洋人よりは寧ろ東洋人に近いやうに思はれるそうである。半白の髮毛と上髭、それに深くうねつて居る顏の皺は彼の年齡を匿くしては居らない。彼が自分の感情をぢつと忍んで無表情な態度を採ると、彼の顏は直に假面(マスク)となつて、鄭く兩眼もその色を失つて所謂白紙的空虚な容貌となる。悪くいふと彼は米國境邊で法律を全然輕んじて居る博奕場あらしの型であると思はれる。實に誰も彼に何んとなく帷子好きなでんぼ肌の所があるのを否定することは出來ない。一言で云ふと彼は機略[illegible]深い男である。彼は確にテキサス男である。この博奕場あらし式の意氣込が彼を驅ては政事界の飛將軍としたのである。彼の彗星的行爲は彼が到底米國東部の人間でないことを説明するに餘りがある。彼も亦米國の奇傑であるに相違無い。更にいゝ替へると彼は近代的理智の酒杯に盛つた純然たる投機者である。時代は人間を作るといふ言葉を眞理とすると、彼も今日の米國が必要上創造した人間であつて、今日の米國は何處までもロマンチックであり又突飛である。而して米國が大な半面に細心な熟慮と研究を忘れない所がその價値である。米國は今は常識と非常識、自然と不自然、ロマンチシズムとリアリズムの兩者の間を曲乘して居る。今日の米國は實際上天下の偉觀たるを失はない。米國は大な芝居を打つて居る。米國は大な見物である。

ハウスの語る言葉には米國南方の語調が響いて人に愉快を與へるそうである。又彼が使用する精錬された文字は思想と相待つて彼が身分ある階級の人であることを示すに充分であるとも聞いて居る。彼を直接に知る人は彼が政事上に於ける色彩ある成功を少しも不思議に思はない。

『眞實なハウス大佐』("The Real Colonel House") の中に一章『彼の大統領ウイルソンの評價』と題されたものがある。彼を目

してウイルソンの腰巾着乃至は蓄音器乃至は反響のみと評する彼の敵に彼はこういつて居ると書いてある。『こんな批評に答へる言葉を知らない、——それで充分だが、僕をして言葉を弄せしめるならば僕は「ウイルソンが單に阿諛者を得やうとするならば何にも僕を友とせんでも外に十人も百人も隨時隨所にころがつて居る」と答へる。大統領ウイルソンともあらうものがそんな愚物だとも思はれまい。實際僕は大統領と説を異にする場合が過去にも現在にも澤山あつた。こんな時には僕はその問題を無理に主張しない、そして新材料を手にして大統領を降服せしめるに足る時の來るのを待つのみである。無益な議論は時間潰しで大統領は勿論僕にもそんな優長な時間が無い。』それから彼がウイルソンに對して評價する所の言葉を聞くとこう出て居る。『ウイルソンは驚嘆に値する人物である。彼は確に大統領は無色透明な平凡人で無くてならぬといふ一般的迷信を打破して居る。彼の學識、彼の理想、彼の頭腦に加へて彼の手に握つた大統領の職權！ 天下何事かならざらんやである。彼も第一期時代には胸中多少不安の念無きにしもあらずであつたと思はれた。然し僕は彼に何等の心配は無いと確信して居た。彼の理想と判斷力加へるに政治家的大膽さの三拍子揃つた結果彼に今日の成功を納めさせて居るのだ。最初から彼の唯一の力強い主義は米國民を主として所謂政治家などは彼の念頭に置かなかつた、——勿論この主義は他人の暗示から得たもので無い。彼が大統領たる以前にニュウ・ジャセー州の知事としてその主義を立派に實行した。所謂政治家を除外して掛つた政治家にして成功しない歴史は發見されない。個人的にウイルソンは麗はしい情調の人である、偉大な思想家又實行家詰めていふと大紳士である。人に長たる人物に二種類ある、その一は動物的魔力を持つた活動家で人を自由に服從せしめる、その種の人物に思想を與へたとしても決して洞察の人 The man of vision たることは出來ない。唯目前の目的以上を見ることが出來ぬ。然るにその他の人物は數に於て少く、實行力と魔力と強健な洞察を持つたものをいふのでウイルソンが即ち今日その代表者である。ウイルソンは夢想者内觀の人であり又實行者を一人で兼ねて居る。彼は常に將來を見て、經濟的又社會的改良の上に描いた夢想を着々實行して行く。この種の大人物は實に稀れに顯はれるのみで、又その理想を實行し得る地位に稀れに置かれるのであるが、ウイルソンはこの稀れな實際上の大機會を摑んだ人である。歐羅巴に於ける批評は彼を現時代最大建設的政治家で、その行爲は從來の狹量な卑賤な習慣を破壞し得る人物と認めて居る。彼の如く彼の正直で賢明な行爲に對する世界的尊敬を集めた人物

がこれまでに存在したといふことを聞かない。國内に於ては彼黨では彼の目的の正直を疑ひ又彼の商業に對する態度を是認しない、然しそれは攻撃の爲めの攻撃以外何物でも無い。彼はいつも商業者の味方であつた。大事業者も小事業者も等しく彼から正直な取扱を受けて居る。彼は決して大な社團（コーポレーション）であるからの理由で大な社團を攻撃するもので無い。鐵道の値上を實行してその整理を計畫し又實行し得たのも彼である。國家が必要とするやうな銀行令や貨幣令を制定して過去に於けるやうな恐慌を將來に防いだのも彼である。斯く擧げて來ると彼の大統領としての功績は幾つもある。

『僕自身からいふと彼を個人關係の上に考へたい。彼は何う見ても偉大な人格で、友人に忠實親切で、理智の人たると同時に情の人である。彼の禮節は持つて産れたもので、彼の念頭には常に友人の繁榮が問題になつて居る、——彼位友人と共にその行動を一にする人は稀れである。彼が一度信頼したならば最後まで彼はそのものを疑はぬ。事をそのものに委托して少しも恐れる所がない。一箇人の私事ではあるが彼はいつも僕の健康を心配して居る、餘り澤山の仕事を僕に課するのを恐れて居る。ある晩僕が彼と一所に芝居を見に行つた所が、僕等の前に數人が坐つて居たが僕等を見て急にその席を讓らんとした。大統領は『もう少し前へ出て下さいませんか』といつて彼等の親切を感謝した。こんな一小事に至るまで彼は深情を以て取扱つて居る。彼に少しも驕しい所が無い、——何處の點から見ても彼は大きい。彼はデモクラット黨が持つた最も大なる大統領で、敵黨のものでさへ公然彼の偉大を稱讃して居る。』

ハウスの此言葉を假令多少は割引して聞いてもウイルソンの政治家としての價値は最大高級に屬したものであることを否定することは至難である。而してこの大統領に深く信頼されて居るハウス大佐の眞價も自ら推察せられねばならぬ。テキサス州といへば日本には米を彼地で日本人が作つて居る位の程度しか一班に知れて無い。地圖を開けて見ても米國の南西に當つた國境の大な土地であつて、兎ても文明人が住居して居らうとは思はれぬ田舍としか踏めない場所である。ハウスが産れた六十年以前のテキサスは純然たる殺伐な A frontier state で、米國の内亂が終つたのは彼の七歳の時である。彼の幼年時代はテキサスが渡り政治屋（カーペットバツガー）と黑人とで支配されて居る最も擾々しい建設時代で、こんな時には法律などはてんでその力を失つて人と人の決算は重もにピストルで附けられたものだ。ハウストンの町を歩くと日々路傍に殺された人間が幾つも横はつて居たものだ。アパティエスや其他猛烈な米國土人や巨大な野牛（バツフアロー）の襲撃から至

く安然たるとが出來なかつたものだ。ハウスはこういつて居る、『僕等が幼少時代に經驗した血生臭い記憶は今回の大戰爭の慘劇を見ても僕を戰慄せしめない程深く大なものである。僕は頑丈な武士的小兒として養育されて、幼少時代には今日の子供が自轉車に乘り廻るやうに訓練され無い野馬(ブロンコ)に乘つたものだ。又僕は鐵砲を撃つ技術を持つて居るのはいふまでも無い。』彼はこういふ戰國的空氣を彼の血のなかに入れて居るので、今回聯合國の間を戰爭關係から往來することを愉快に思つて居るに相違無い。彼は幼少の頃乘馬から落ちて腦を痛め續いて日射病に罹つて頑丈な身體狀態から急に虛弱となつた。彼が今日に至るも毎年テキサスの夏を避けてマサチユセツツ州の別莊で休憩するのも一度失つた健康を今に快復することが出來ぬからである。父は金持の一人であつた。彼はエールへ入學する目的でニユウ・ヘブンのホプキンス・グラマー・スクールの初等教育を受けた。彼は必ずしも優秀な學生では無かつたが、その時代に已に彼は仲裁者として平和的感情の所有者である實例を示したそうである。彼の自身の言葉に依ると、彼は兎に角政治と歷史の二學課に興味を持つた。彼は町を散歩し乍らでさへトクヴヰールの『米國の民主々義』を耽讀したそうである。エールへ入學する筈であつた彼は、丁度この頃米國の教育界に一頭地を擡げつゝあつたコルネル大學へ千八百七十七年に入學するに至つた。千八百八十年に起つた彼の父の逝去は彼をして卒業前に退學せしめるに至つた。歸家して三人兄弟の末弟として父の遺產を相當に貰つた、それは亡父の事業の一であつた棉花培養の全部を讓られたのである。して見ると彼は農業家であると云はねばならぬ。その後彼は種々な事業に手を着けたと同時に、着々政治の方面に切込んで自分一手の勢力を利用してテキサス州の知事を三人まで選擧して居る。彼がウイルソンに初めて會つたのは千九百十一年のニユウ・ジャーセー知事時代である。彼が一頭地を拔いた賢明な理智と縱橫な奇智を使用してウイルソンを大統領とまで上らしめるに至つた徑路は餘り日本人には興味の無い米國政界事情であるから此處には全然省略する。然し彼が實際の活動時代に公然入つたのは戰爭が始まつてからで、彼が大統領を代表して歐洲へ渡つた以來と見ねばならぬ。

彼が第一に考へたことは猛烈なプロパガンダの方法を利用して獨墺兩國の人民と政府とを分離せしめねばならぬことであつた。彼が米國參加前の渡歐の際聯合國の政治家にその必要を諄々と說く所があつた。然るに自分共と同樣に政府と人民の行動を一つとして居た聯合國の有力者はハウスの建言に贊成し無かつた。又よしそれを遣つても著しい效果はあるまいと思つて居

たもつと目される。然るに米國が久々戰爭に參加した二つの
た時，彼は[illegible]にこの最大な任務を說いたその首領ウイルソン
の民主主義[illegible]徹底した指導者となつて[illegible]と米國に顯は
れたのである。[illegible]の友人はウイルソンの論說を[illegible]で讀む毎
に[illegible]、[illegible]の上での[illegible]者だ、など[illegible]
ものであつた。しかるにこれは米國が手に持つて居た大なカー
ドの一段と、實際このカードの爲め[illegible]問題に内部から[illegible]
たとへ[illegible]創めたのだといつても必ずしも誇張ではあるまい。
米國政府、[illegible]ウイルソンの民主主義をとし/\[illegible]、
中立國への[illegible]を通じて、いや應なしに[illegible]問題に[illegible]
のである。[illegible]に[illegible]して[illegible]場合であるからウイルソンの民
主義の爲には不用な[illegible]に[illegible]えざるを得なかつた。彼に[illegible]
合い然らしめた所たといふ[illegible]すらをけれども、更に又ハウ
スの政策上[illegible]とは全く[illegible]に當つた[illegible]一端を示し
であらうと傳へ聞いて、首領ウイルソンの赫々たる民主主義が何程

[illegible]たな時代[illegible]した[illegible]その[illegible]を[illegible]のではないか、米
國民はその力と共に彼の[illegible]の力を正當に使付けねばならぬ手落ちで
あるか。

今や講和期に入つて米國は[illegible]に準備した[illegible]資料を引提げ
て[illegible]に乘込むのであらう。果して米國の理想は最後の成功を
得るであらうか否やが實際の見物である。近頃の[illegible]報に一經驗
ある[illegible]者の信ずる所に據れば、他の諸國は米國に不利なる氣
運を作らんとしつゝあつて、米國と諸國の戰爭目的に[illegible]なる
[illegible]を見るかもしれぬとある。故にこそいふ成行にならぬとも限ら
ない。その[illegible]にはハウス大佐が持つて[illegible]れた[illegible]の天才を縱橫
に振ふ[illegible]時[illegible]はれるといふものだ。かう考へて來ると今回
の媾和會議の一大立役者は先づ第一にこのハウスであらねばな
らぬ。果して彼が偉大な一生を飾る大[illegible]を描き得るであらう
かは[illegible]數ケ月を隔てゝ[illegible]して知ることが出來るであらう。彼も
偉い男である。

罪の女三人振袖

澤田撫松

典獄室

波わけ髪の女優卷が、濃化粧の頸脚から綺麗に浮いて、紫紺色金砂縮緬の裾模様に、青磁菊模様の繻珍の丸帯を締めた恰好が、まるで人形の様であつた。妙子は、見る目まばゆい、デパートメントストアーの二階で、縮緬や、御召や緞子のうづ高く積むである賣場の傍に立つて居た。階段の中程でピアノの音がし始めた。妙子は階段を降りて、商品渡し場の前を通つて、出口へ行かうとすると、

『アノー、甚だ失禮でございますが、御買ひ求めになりました品物は、一應番號を記帳いたしまして、その上で御持ち歸りを願ひたいのでございますが……』

頭の半分禿げた、背の高い番頭が、揉手をしながら妙子の前へ頭を下げた。

『私?……私はなんにも買はないのですが』

妙子は桃色の絹のハンケチをいぢりながら、處女らしい品科をした。番頭は暫らく女の顏を見詰めて居たが、

『それでは兎も角こちらへお出でを願ひます』

番頭は女の手を執らうとしたが、氣高い、品位のある顏を見ると、それは出來なかつた

番頭と女の周圍を多くのお客が取り卷いて、珍らしいものでも見る樣に見物して居た。番頭は群衆を掻分けて、重役室へ女を導びいた。女は其の後について行つた。二人が中へ入ると扉が閉められて、見物人は外でワヤ〳〵言ふて居た。重役室には髮はうすいが、顏の脂肪の漲つた、五十年輩の洋服を着た男が居た。番頭は其の男の前へ椅子を直して、

『どうぞこちらへ』

物を受ける樣な手つきをして女に胸せをした、女は無言で其の椅子にかけた。

『私は當店の支配人牧野榮助でござります。實は御買ひ求めの品に就いて番頭より申し上げましたことが、御了解にならな

かつた相ですが、當店には見張番が置いてありまして、御客様のお求めになるところを一々見張つて居りますので、どんなに御上手にお求めになりましても、滅多に見逃しません、御入體にもかゝはりますから、御買求めの品は一應御出しを願ひます』

支配人は鋭い眼を女の方へ向けた。

『それでは私が何か、萬引でもしたとおつしやるのですか』

女は甲走つた聲を出した。

『しらばくれても駄目ですよ、縮緬を引くところをちやんと見て居たのですから、愚圖々々言はずと早くお出しなさい』

傍から番頭が口を入れる、

『御客様に對して失禮なことを言ふな』

と番頭を押へて

『誠に失禮を申しましたが、ナーニあなたが萬引をなさつたと申すのではありません、だまつてお持ちになりましたから、當店の規則上一應お出しを願ふたまでゞす』

支配人は言葉に絹を被せて、女に持つて居る物を出せと迫つた。

『失敬なことをおつしやるな、私は女優の桂木妙子です。萬引と間違へられては迷惑します。お金に不自由をして居る者とは違ひます、欲しい物があれば之で買ひます、と懐中から璽瀬の紙入を出して、十圓紙幣を五枚、支配人の眼の前へ突きつけた。妙子の様子に支配人は一寸たぢろいだが、忽ち態度を一變しだ。

『女に恥をかゝせまいと、お客様扱ひにして居るといゝ氣になつて、何所までもしらばくれるなら仕方がない、氣の毒だが警察へ突き出す』

丁度その時、鳥打帽子を冠つて、縞の羽織を着た男が入つて來た。それはこうした大商店を警戒して居る兼子刑事であつた。

『オイお仙又やつたな』

兼子刑事にお仙と稱ばれて、女は刑事の顏を見た。

『そら商賈でさね、稼がずに居られないじやありませんか、あなたが私達を狙ふて居るのと、マア同じ様な譯さ』

脊中を椅子に當てゝ、兩足を前へ突張ると、艶めかしい赤い蹴出が零れる、

『こうなつちや仕方がねいア、面倒だから出しちまへ』

女は軀を斜にして、赤い蹴出へ手を當てたと思ふと、鶉縮緬の羽織地が二反、椅子の前へ投げ出された。

警視廳から檢事局へ廻された妙子のお仙は、前科があるので、一回の取調べで直ぐ起訴されて、罪の確定するまで東京監

獄の未決監に入れられた。お仙は見たところ十八九としか見えないが、實際の年齢は二十六歳で、瀧夜叉お仙と言へば、掏摸中間でも幅の利く、女掏摸の親分株であつた。お仙は子供の折父親に死別れ、姉のお靜と二人、母親の手で育てられて居たが、其後二人の子供を作れて、母親が下谷の俠客の所に嫁に行つたので、姉妹はみじめな月日を送つて居た。二人の父となつた男は、俠客とは名ばかりで、毎日博打場廻りをして居る、たちの悪い遊び人であつたから、絶えず金にばかり困つて居た。さう言ふ時に毎も引合に出されるのは姉妹で、十七歳になつた姉はたうとう犠牲になつて妾奉公をした。旦那と言ふのは淺草の花川戸に一戸を構へて派手な生活をして居る男であつたが、何を職業として居るのか誰も知る者がなかつた。その時十四歳であつたお仙は姉の傍を離れるのがいやだと言ふて、花川戸の方にばかり居た。旦那の商賣が掏摸の親分だと分つてからお靜は手を切らうとしたが、それは全く徒勞であつた。此家から出たければ命を置いて行けと言ふのが掏摸の親分の言ひ草であつた。お靜はそれを苦にしてその翌年の秋心臓病で死んだ。お靜が死ぬと掏摸の親分はお仙の可憐な姿に眼をつけた。お仙は姉の悲慘な最期を見て、親分を怨むで居たから、うるさく附き纒はれるのをいやがつて、親分の手文庫から七十圓の金を持ち出して逃亡した。お仙のその後は暗い生活を續けて居た。不良少年の群に入つて良からぬことばかり働いて居たので、滿十四歳の責任年齢に達した以後は幾度も監獄の厄介になつた。

十年の間に九回も監獄へ入れられたお仙は、監獄を恐しいともこわいとも思ふて居ない、監獄と言ふ所は一年に一度位行かねばならぬ所の様に心得て居た。警視廳から検事局へ廻され、検事の起訴に依つて東京監獄へ送られたお仙は、自分の下宿へでも歸つた様なつもりで、平氣なものであつた。監房に入れられる前に、典獄から獄則の要點を言ひ聞かされるのが規則であつたから、お仙は看守に導かれて典獄室へ入ると、壁に大きな地圖の掛軸が掛つてあつて、中央に鶯色のテーブル掛のかゝつてある卓子があつた。卓子を隔てゝ藤澤典獄がこちらを向いて居た。典獄の顔を見たお仙は、今まで不貞腐つて居たのと打つて變つて、卓子の端に兩手を突いて、しとやかに頭を下げた。

「すみません、此前、此所を出ます時、二度とふたゝびこう言ふ所へ入つて來るなと、典獄様から御訓誨を受けまして、私も、今度世の中へ出たら、まじめな世渡りをして、典獄様の所へ御禮に伺ふことの出來る身分になりたいと思ふて居たのですけれど、前科數犯、女の掏引と言ふ身に附いた惡名がどうしても取れませんので、人交りが出來ないのと、一つは

自棄自棄も手傳ひまして、とう／＼元の泥田に足を踏み込み又御厄介にまいりました』

お仙は縞絣の袖を眼に當てた、自分の言葉で涙を誘ふたのであつた。

『ナーニ、私の樣な人間は、監獄へ入るのは何とも思つて居ません。鷄が鳥屋につく程にも思つて居ないのです、ですから、今度こうして此所へ來ましても、悔みも後悔もして居ません。ですけれど、私は典獄樣のお顏を見るのが辛いのです。』

黑目勝ちの、才氣に富んだお仙の眼は、藤澤典獄の方へ視線を向けたが、直ぐ伏目になつて、

『私が初めてこの東京監獄へ入りました翌朝のことなんです、朝の御飯を戴きます時、何氣なくお味噌汁を見ますと、ギラ／＼した油の樣なものが浮いて居るじやありませんか、何の油か知らんと同房の者に訊ねますと、汗油だと言ふのです、そしてその汗油は、典獄樣が毎朝御自分でお味噌汁の中へ入れてくださるのだと聞いて私は驚きました、監獄へ入るまでは、典獄樣と言へば地獄の閻魔樣の樣な、殘忍非道なことをする人だとばかり思ふて居りました。それがどうでしやう、御自分の月給で汗油を買ふて、在監人の健康の爲めに、毎朝お味噌汁に入れてくださるじやありませんか、生れて、人の情けと言ふものを知らずに暮して來た私の樣なものでも泣きました、心の底から涙が零れました。世の中の人間は、私にとつては皆敵だと思ふて居ましたのに、監獄の中にもこうした親切なお方があるかと思ひますと、何だか世間が明るくなつた樣な氣持がしまして、娑婆へ出たら自分も明るい道を歩んで見やうと思て居りました、それに在獄中、典獄樣からいろ／＼御訓戒を受けまして、女の身でこう言ふ所へ來る樣なことをしたのは私が惡かつた。どんな事があつても再び此所へ來る樣なことは致しますまいと、出獄の折、典獄樣の前で誓を立てました。』

お仙は自分の姿を見廻して、悔し相に、

『それがどうでせう、娑婆へ出たかと思ふと、又監獄へ入り出ては入り、入つては出て、今度で此所の門を潜るのが九度目になります、毎も出獄をする時、典獄樣から、身にしむ樣な御訓戒を受けますが、私はそれが辛かつたのです。幾度言ふて聞かしても分らない女だと思はれるのが辛いのです。私は典獄樣の御意見を決してあだや疎かには思ふて居りません。もうこれきり監獄の門は潜るまいと堅い決心をして出獄するのですが、娑婆へ出て見るといけません、先づ第一

に自分の軀を引取つてくれるのが仲間の惡黨です、これには出獄人保護所などもありますけれど、さう言ふ所へ行く人は全く引取人のない人達で、私達の樣に、出獄の時刻をはかつて、新しい着物まで用意して惡黨仲間が迎ひに來る樣になつては助りつこがありません、眞人間の方は附合ふてはくださらず、集つて來る者は惡黨で、話の種は惡事の相談ばかりですもの、どうして明るい道へ出られるもんですか、典獄樣の御意見を忘れた譯ではないのですけれど、二度が三度、三度が四度と、幾度も幾度も、再び潜らないと誓ふた門を潜つて、その度毎に典獄樣から溫い御訓戒を受けますが、唯の一度も、又來たかと言ふ樣な顏をなさつたことがありません、來るつもりではなかつたのが、周圍の事情が此所へ追込むのだらうと、まるで私の胸の中を見拔いた樣な顏をしてお居でになります。私はさうした典獄樣を見るのが何より辛いのです。瀧夜叉と名のついた私ですもの、假令脊骨をたち割られ、鉛の熱湯を注がれても、そんなことには辟易しませんけれど、情に向ふ刄は持ちません。こんなにまで私達の心持を知つてくださる典獄樣の御意見を用ゐないで、こうして此所へまいる樣になつたのが辛いのです、私は典獄樣に合す顏がありません』

お仙は袂を顏に當てゝ啜泣きに泣いた。窓の外にサラ〳〵と飫の音がして、冷たい風と共に、枯葉が二三枚吹込むで來た。

濱町の秋雨

『どうしてもいけないのですか』

『考へてごらん、この前も手術をすると言ふて二十圓、この前も子供が入院すると言ふて三十圓、幾等お前さんに腕があるからとて、さう際限もなく注込まれないじやないか。それもさ、お前さんが着物をこしらへるとか、羽織を買ふとか言ふのなら、そらだいじな玉だもの、質八置いても貸してあげるが、とても六ケ敷い子供の病氣にさう〳〵は出せるものでない、子供も可愛からうが、ちつと自分の身も考へたがよい、濱町で桂井のお若と言へば、柳橋の藝者にだつて引けを取らない器量をして居ながら、銘仙の着物でお客の前へ出るなんて、お前さんにも似合はない、私が止めるのも聞かないで、着物でも羽織でも、持つて居る物を皆質に入れて、子供の病氣に入れあげた擧句が金を借せとお言ひだが、うちの爲にもなつてくれたお前さんのことだから、入院する時も、氣よく貸して居るじやないか。』

お召の格子縞の袷に、黑繻子の襟の掛つた半纒を着た桂井のお時は、長火鉢を隔てゝ、項低れて居るお若の顏を覗く樣に首を出

して、
『此節は酔客が尠いので、今までの半分も實入りがないから、お前さんにしつかり働いて貰はねばならぬのに、子供に夢中になつて居るから困つちまう、子供の方は何とか始末をして、商賣にみつちり身を入れて貰ふ譯に行かないかね』
『だから言つて居るぢやありませんか。今一度手術をすれば助かるのですから、三十圓だけ……』
『この前も手術すれば癒るとお言ひだからお金を出したが、駄目だつたじやないか、お醫者はそんなことを言ふとては金を捲きあげるのだわね、どうで助からない病人ならいゝ加減に諦めた方がとくだよ』
お若は、お時の顏を怨めし相に眺めて、
『こんな所へ身を落したのも子供の爲めです。子供がなかつたらこんな事はして居ません、その大切な子供が實扶的里亞に罹つたのですもの、じつとして居られるもんですか、親の手で育てゝ居なかつたので手遅れになつて、血淸注射も利目がなく、氣管を切開しなければ助からないと言はれては、親ですもの、帶でも着物でも投げ出しますわね。』
泣くまいとしても、涙は自然に目尻を傳ふ。丁度その時、コト〳〵と、溝板の上を歩く音が止つたと思ふと格子戸が開いた。

『お若さん御客樣、月の家です』と十二三の女の子が、うす暗い入口に立つて、小聲で呼出をかける。
『雪ちやんかへ、私、今日は少し氣分が惡いから、お座敷は斷つておくれ、すまないけれど』
長煙管で煙草をのむで居たお時は、眉に八の字をよせて、
『此節のお客を逃してなるもんかね、これにお前さん病氣と言ふじやなし、行つておくれ、金のかゝつた軀じやないか。』
雪ちんの後から、郵便！と聲をかけて、封書を一通、投込むで行つた。長火鉢の前から、軀を斜に、片手を突いて、手をのばしながら、
『雪ちん、ちよいと、手紙を拾つておくれ』
お若は、雪ちやんの拾ふて差出す手紙を受取ると、日本橋區濱町△丁目△△地桂井樣方篠原若樣と表に書いて、裏には淺草區淺草町△△△番地篠原まきと書いてあつた。お若は、お時の方を脊にして、手紙を開封した。
『早速ながら本日病院へ參り候處、政雄の病氣よろしからず、先頃手術致し候個所、又々ふさがり、息出で不申、このまゝにして置く時は、今夜の十二時頃までが六ケ敷いとのこと、今一度咽喉へ穴をあけ、其所へ銀の管を差入れ、その穴

から息をする樣にすれば助かるが、その手術も今夜十二時までにせねば手遲れと相成る由、手術料その他の費用に二十圓ばかり是非々々十二時までに御持參被下度候相待ち申居り候』

此手紙を讀むとお若の顏色は變つた。お時の方へ向き直つて、

『お金が借れなければ仕方がありませんが、今手紙が來て、今夜の十二時迄に手術をしなければならないと言ふて來ましたから、すみませんが、これから病院までやらして貰ひます』

お若の聲はふるへて居た。お時の眉間に現はれた八の字が未だとれぬ。

『病院へ行くのはかまはないがね、今かゝつて來たお座敷だけはすまして行つておくれ、そうでないと月の家さんにすまないから』

お若は暫らくだまつて居たが、茶棚の上の置時計を見て立ちあがつた。

『行つておくれかへ』

お時は浴びせかけると、

『行きますよ……』

お若は次の間の鏡臺の前へすはると、櫛や白粉の瓶を敏捷に動かして、直ぐ着物を脊にかゝたが、派手な銘仙の若々しいのを眺めて、今年二十四の、三つになる政雄の母ともあらう自分が、十七八の振袖姿は何事ぞと、鏡に寫る立姿を見てお若は泣いた。

『姉さん、もういゝの』

雪ちゃんは入口からせき立てる、お若は空氣草履を突かけて、雪ちゃんと二人表へ出た。溝板を踏むで、細い露路を右へ廻ると、御燈が鉢合せをせんばかりに、兩側の軒に並んで居る。右から三軒目の、左側の格子の内へ、二人の姿が消えた。後から入つた雪ちゃんが、今自分の入つた格子を締めると、中から格子戸の合せ目へ栓を差した。

『今晩は……』

お若が聲をかけると、

『直ぐ二階へ、御待ちかねだから』

でつぷりと太つて、頭の禿げあがつた、月の家の主人が返辭をした。二階の客は二人で、一人は二十八九、株式仲買の店員らしく、一人は四十二三、土木の受負人と言ふ風體であつた。若い方の客の傍には、先へ來て居た照子と言ふ女が坐つて居たので、お若は太つた男の傍へ坐つた。もう大分酒がまはつたと見えて、男は二人とも醉ふて居た。お若が銚子を取つてむやみに酒を勸めると、二人はグデン〳〵に醉ふた。照子は若い方のお客を次の室へ伴れて行つた。お若も太つた男を、廊下を隔てた向側の小座敷へ伴れて行つて寢さした。醉はらつて居たお客は正體もなく寢込むでしまつた。お若はお客の脱いだ羽織を袖だたみにして枕元へ置いて、その上へ金時計と紙入とを置いた。片硝子の時計がコチ〳〵と小さな音を立てゝ居るのがお若の耳に入つた。時計の面を見ると九時を十分過ぎて居た。お若は帶

の間に手を入れてじつと考へ込むで居たが、時計を見て居た眼が紙入の方に移ると、お若の顔の色が青くなつた。そして四邊を見廻したが、誰も居ないのを見届けて、直ぐ寢て居る男の寢息をうかゞふた。

「モシ／＼」

お若は男の肩のあたりに手を掛けて動かして見たが、目を覺し相にないのを見澄し、鰐皮の紙入をそつと取りあげた。その拍子に二つ折の紙入があいて、中に五圓紙幣のあるのが見えた。お若は顫へる手で五圓紙幣を引拔くと三枚あつた。あとに一圓紙幣が三四枚あつたが、それには其の儘にして置いて、三枚の五圓紙幣を帶の間に挾むだ。忍び足でお若が二階から降りて來た時は、其處に誰も居なかつた。格子を開けて表へ出ると月が隱れて、秋雨が降つて來た。

辨天娘

お濱は、敬一から來た手紙を、膝の上で繰り擴げて居た。初から終りまで讀むと、又初に戻つて、幾度も讀みかへして居た。兵營生活の嚴重なことやら、近頃體量の殖えたことやら、相變らず繪はがきを集めて居ると言ふ樣な無邪氣なことが書いてあつた。そして終の方に、愈々本月は除隊になるから、悦んでくれと書き添へてあつた。お濱は敬一が除隊になつて歸つて來ると言ふ手紙を讀むと、入營前の敬一のことを思はずには居られなかつた。敬一がお濱の家へ引取られたのは、お濱の父親が蠣殼町に株式の仲買店を出して居た時であつた。孤兒となつた從兄の敬一は蠣殼町のお濱の家から小學校へ通ふて居た。一下前一年生であつたお濱は兄さんが出來たと悦んで居た。學校へも二人で一緒に通ふて居た。お濱が女學校へ通ふ樣になつてからは、敬一は中學の寄宿舍へ入つたので、土曜日に歸つて來るのを樂しみにして居た。二人の間は兄弟よりも親しみがあつた。兩親もどうで行くゆくは娶あはすものときめて居たから、二人の仲のよいのを悦んで居た。敬一が中學を卒業して、高等學校の入學試驗に首尾よく及第した時、お濱の父親が腦溢血で死んだ。殘つたものは借金ばかりで、遺族の生活を支ふべき何物もなかつた。こうなると、平生親切らしいことを言ふて來た者も寄りつかなくなつて、お濱一家の者は自力で生活して行かねばならぬことになつた。母親の發案で、身の廻りの物だけを殘して器財家財を賣り飛ばし、それを資本に小煙草店を開いたのであるが、店が新らしいのと位地がよくないのとで、店の賣りあげだけでは生活をして行くことが出來ないから、敬一は學校をやめて日本橋の會社へ入つた。そして二十圓足の月給を持つて歸るので、どうかこうか其の日を送つて居た。以前と變る貧しい暮しではあるが、平和な月日が流れた。然しそれは暫くの間であつた。敬一が適齡になつて入營した後は、お濱親子は店を張つて行くことが出來なくなつた。當座は元方の仕拂を待つて貰つたり、着物を質入したりして一時を凌いで居たが、どうもこうもならぬ行きづまりになつて、二人は如何なる道に進むべきか見當がつかなかつた。こうした空虛な胸へ思はぬ魔がさ

した、お濱の化粧が濃厚になつて、着物の柄が派手になつた。大久保の拔け辨天で、辨天娘と言はれて附近の話題にのぼる機會が多かつた。生活の犧牲になつて居たお濱も、敬一から來る手紙は毎も温い心で讀むで居た。今も、除隊になることを知らして來た手紙を、心から嬉しく讀むで居たのであるが、自分の頭の上から、何だか恐しいものが睨むで居る樣に、恐怖と戰慄とを感ぜずには居られなかつた。

『又手紙がい……』

店から入つて來たお霜は、お濱の前へ坐はると、お濱はあわてゝ手紙を袂の中へ隱した。

『あのことは未だ決心がつかぬかい、その手紙にも來月歸へると書いてあるじやないか、ぐづ〳〵して居て、敬一に感ずかれたらどうおしだ』

『だつて……』

お濱はうつ向いて、右の手で、帶の上から、胸の下を撫でた。

『何もかも私が惡かつた、あの時、いやだと言ふお前を、無理にあゝ言ふことにしなかつたら、斯うしたことにはならなかつたのを、敬一は居なくなるし、店は賣れないし、どうすることもならなかつたところへ、お穪さんがあゝ言ふことを勸めに來たもんだから、……ア、皆私が惡いのだ、堪忍しておくれ』

お霜は襦袢の袖でそつと涙を拭いた。お濱はその夜一睡もしなかつた。敬一が歸つて來るまでに、自分の軀の始末はして置くとしても、若し留守中の行ひが知れたらどうなるであらう。何と言譯をしてもゆるしてはくれまい。その時、自分はどうすればよいか、幾等親の爲とは言ふても、自分のとつた道は確に誤つて居た。その上に、尚ほその上に、考へても恐しいと、懷に收めて居る、母親から渡された、白い紙包を、疊の上へ投げつけた。雨戸の隙から淡い光線が差込むで、鳥の聲が聞えた。

夜が明けてから、お濱は母親と一緒に食事をしたが、お霜は吐息ばかりついて、何にも言はなかつた。その日の夕暮、お濱は錢湯から歸つて來て、帶を締め直して居たが、幾ら締め直してもうまく締まらないで、自分で自分の軀に異狀のあることを意識せずに居られなかつた。こうした軀を敬一が見たら、一目で愛想を盡かすであらうと思ふと、涙の湧き出るのを止めることが出來なかつた。お濱は氣分が惡いと言ふて直ぐ床の中へ入つた。そして泣いて〳〵泣けるだけ泣いた。その明方、母親から渡された白い紙に包むだものを口の中へ入れて、コツプの水を一息に飲むだ。

敬一が除隊になつて歸つて來たのは、お濱が檢事局へ送られた後であつた。

人物評論（一〇〇）

現代の青年を動かしつゝある政論家・思想家

▽福田德三氏と吉野作造氏

室伏高信



一

その思ふところを憚らず述べ、そのなさんとするところを斷々乎として行ひ、何ごとにも徹底しなくては止まないものは、わが畏敬する先輩法學博士福田德三氏である。是いキビキビした文章とその痛烈比ひなき雄辯とは、日本の論壇における誇りである。その徹底を愛する福田氏の今日の論壇における　場は、ロイド・ヂョーヂの攻撃者、ウヰルソンの攻撃者として彼れ一流の徹底性を遺憾なく發揮しつゝある。彼れは今日の國際關係にもかゝわらず、大膽に卒直に、その思ふところを述べて少しも躊躇するところがない。その勇氣と學者的良心の旺盛であることは、實に沈滯せるわが學界の一大警鐘である。最近に福田氏がその立場を明白にしたものは「何の爲めに戰ふ」（「大陽」掲載）「自主的出兵より自主的平和」（「中外」掲載）と「勝者は誰乎」（「中央公論」掲載）の三大論文である。この三大論文の結果はアドヴアタイザア紙から「プロ、ヂヤーマン」と難んぜられてゐる。私は福田氏を「プ

ロ、チャーマン」と呼ぶことの不當であることを信ずる。けれども福田氏の排英米論は、英米記者を昂奮せしむるには充分であるほどに猛烈である。彼れは猛烈な論鋒をもつてウヰルソンとロイド・ヂョーヂとを攻撃する。その攻撃の猛烈な點においては、モーリッツ・ボン教授のウヰルソン攻撃論と符節を合するものがある。モーリッツ・ボンとはデルブリックの腹心の獨逸教授である。その獨逸教授は「ミュンシナア・ノイエステ・ナハリヒテン」(Münchner Neueste Nachrichten, Dec., 1917)のうちで次のように述べる『ウヰルソンの平和政策とはたゞ僞善的のものである……大統領ウヰルソンは武斷政治家(Macht Politiker)である』何故にウヰルソンは僞善者であるか。彼れは「平和のために戰爭」するといふような矛盾をしてゐるからである。何故にウヰルソンは武斷政治家であるか。彼れは武力をもつてその主張を維持しようとするからである。この獨逸教授の意見は、そのまゝにわが畏敬する先輩福田德三氏の意見である。然り、モーリッツ・ボン教授の獨逸人的感情において述べられてゐるところは、福田博士の排英米的感情において述べられてゐるところそのまゝである。モーリッツ・ボンがウヰルソンをもつて僞善者であると攻撃するその同じ言葉をもつて、福田德三氏もまたウヰルソンとロイド・ヂョーヂとは世界における僞善者であると罵しつてゐる。ウヰルソンとロイド・ヂョーヂとを僞善者であると見ることは、福田氏の「三大論文」に一貫した主張である。何故に僞善者であるか、第一にウヰルソンとロイド・ヂョーヂとは民主主義を主張しながら彼等自らオートクラートではないか。第二に「平和のために戰爭」するといふことはそれ自身矛盾ではないか。第三に獨逸は戰勝者であり、聯合國は劣敗者である。無併合無賠償は劣敗者の僞善的の泣言である。戰勝者が土地を要求し償金を要求するは生存權の當然の要求である。福田氏の立場は大體においてこの通りである。獨逸が優勝であること、或は結局あるべきものとの確信は、福田氏の排英米論に一貫してきたところである。福田氏は獨逸屈服の二ケ月以前においてさへ、尚ほ獨逸の優勝を信じて、『獨逸に多くの勝ち味のあることは明白な事實であるが……』と述べてゐる。(「中外」大正七年九月號二十二頁下段)けれども福田氏のこの確信は、福田氏の論文「自主的出兵より自主的平和」が發表されてから二ケ月もたゝないうちに、事實の嚴肅なる裁判によつて排擊されてしまつてゐる。従つて福田氏の排英米論の根柢の第一段は可成り見事に打碎されてしまつたわけである。福田博士の獨逸優勝觀の豫想外れであつたことは、博士自らも認めてゐるとほりである。(「中央公論」掲載「勝者は誰乎」)

その獨逸屈服の原因について、福田氏はこれを聯合國の勝利であるとは見てゐない。獨逸の屈服は、獨逸革命の勝利であるとなしてゐる。その見方は或は當つてゐるかも知れない。けれどもこれは福田氏の所謂アイン・ドイッチェ・レボリューションの勝利であると見るよりは、世界革命 world revolution の勝利と見るべきである。從つて世界民主主義の勝利の第一歩である。われ等が獨逸の屈服を希望したのは、ウヰルソンもいつているとほり、獨逸人民を憎んだのではなくして、獨逸の軍國主義を憎んだのである。英米最負であつたがためではなくしてデモクラシーを愛したからである。福田博士が英米を憎惡するとも、英米の人民を憎惡するのでなくして、その資本主義的エクスプロイテーションとマーキャンチリズムとを排撃するものでなくてはならぬ。その立場こそ眞の民主主義の立場であるからである。モーリス・ヒルキットの主張は、この點に於いても代表的ののである。(M. Hillquit, American Socialist and the war)

二

モーリス・ヒルキットがウヰルソン主義に反對した立場は、同時にわが福田氏がウヰルソン主義に反對した立場でなくてはならない。その立場でなければ、福田氏の排英米論は、獨逸的軍國主義の維持者としての立場であると論ずるのほかはない。私の謂ふところのモーリス・ヒルキットの立場からすれば、[illegible]ルソン主義にも徹底を缺くところの[illegible]議論である。ロイド・ジョーヂに至つては立派なデマゴーグである。民主主義の名によつて英國のマーキャンチリズムを維持してゐるものである。ヘンダアソン、然り。英國における最も卓越したる大政治家アーサー・ヘンダアソンがその「勞働黨の目的」のうちで明[illegible]してゐるとほり、「國內において自由、國外において支配は、民主主義ではない。」ロイド・ジョーヂの政策は決して民主主義の政策ではない。少くとも休戰條約締結後のロイド・ジョーヂは最早や民主主義者ではない。この意味においてロイド・ジョーヂを非難することは、私において一點の異議もないところである。けれども福田氏の論ずるやうに、ウヰルソンやロード・ジョーヂの權力の分量の大きさによつて、彼等が世界におけるオートクラートであると論ずることは、權力の沿革史を全然無視したる俗論である。われ等には一切受取り難き俗論である。その俗論である程度は、米騷動において、岩崎家の寄付金の分量が日本人中最大であるといふの理由をもつて、岩崎家は日本における最大の慈善家であると主張することと同じ程度の俗論である。然り、交詢社的知識階級の程度の俗論ではないか。また福田氏に從へば、「平和のために戰爭」することは一大矛盾であ

る。カーペンタアに從へば平和のために戰爭することは禁酒のために酒を飮むと同じ理由の矛盾である。けれどもこの考へ方は、世界において、平和の攪亂者無しとするの前提からのみ起つてくるところの謬論である。この點においては、プリンストン大學總長ヒッベン博士の言葉を借用することが便利である。彼れはその紐育における開戰演說のうちで次のように述べてゐる。『私は平和主義者としてここに立つ。私は如何なる代價を拂つても平和の信念を維持する。そうして今日においてこの代價は即ち戰爭である。』と。（C. Waldstein, Aristodemocracy 序文參照）この考へは福田氏自身もまた遂に贊成せざるをえないところである。何となれば福田氏はその論文「自主的出兵より自主的平和」のうちにおいて、その所謂自主的平和のためには、即ちその自主的平和の目的を達するために必要とあらば、日本も宜しく出兵を斷行すべきことを主張してゐるからである。（「中外」大正七年九月號二十九頁）然り、「平和のための戰爭」を矛盾でありとして、ウヰルソンの猛烈なる攻擊者であるところの福田氏は、氏自ら、自らの議論に裏切つて、「平和のための戰爭」を主張するに至つてゐるのである。こゝにも、福田氏の排英米論の破滅が證據立てられてゐるではないか。更に福田氏の排英米論の最も悲慘なる破滅は、その生存權論の適用においてである。福田博士の「何の爲めに戰ふ」の主張するところによれば、領土の併合、償金の要求は、戰勝國の生存權の當然の要求である。果して然るか。その論鋒を今日に當て篏めたらどうなるか。英米は戰勝者である。この戰勝者が獨逸の領土を奪ひ、償金を要求することは、英米側の生存權の當然の要求でなくてはならぬ。福田氏の排英米論は、かくして今日においては、英米的資本主義の辯護論となるに至つたのである。かういふわけであつて、福田博士の排英米論には、その排英米的感情の徹底のために、その論旨に矛盾があり、誤謬があり、博士の眞個の立場が、何處にあるかさへ不明瞭な點が甚だ多い。然り、加藤高明子の排獨論が、單に一個の個人的感情論たる以外に何の價値、何の根據もないものである如く、福田氏の排英米論も、その感情的興奮に原由してゐる點の甚だ多いことを遺憾に思ふものである。けれどもこの立場は恐らくは眞實なる福田德三氏その人の思想ではあるまい。私の信ずる福田德三氏は、このような感情論の桎梏を飛び出して、日本における最も徹底したる民主主義者として、新時代の權威者となるであらうと思はれる。私は何人に對してよりも、批評家としての福田氏に多くを期待してゐるものである。

三

今日の政論壇においての人氣者の第一人者は、法學博士吉野作造氏であらう。私は福田氏に望むように、吉野氏に對しても、新時代運動の陣頭に立つことを望むものである。或は既に陣頭に立つてゐるかも知れない。吉野氏が浪人會の荒武者連の包圍のうちにおいて、彼れの主張を斷々乎として述べたところの勇氣に對して、少からず畏敬してゐるものである。帝國大學といふ牢屋の中から、吉野氏のように、その主張に忠實なる學者の現はれたことは、日本の學界のために、大に意を強うする次第である。その吉野氏の民本主義なるものは、私の目には、少しく遠慮過ぎては居るまいかと思はれる。その民本主義はカデト的民本主義である。デモクラシーのうちの最右翼である。この最右翼を維持するために、吉野氏はデモクラシーを數種に分類する。吉野式分類である。この分類は、言論の自由の許されてゐない日本においては、當にありうべきの用意である。然り、用意である。用心深き心の發現である。用心深からざるをえざる時代において、用心深きことは、思慮ある人の行くべき道でもある。それにしても、その用心があまりに過ぎはしないか。用心が過ぎて、そのデモクラシーの理想から、あまりに多く遠ざかつてはゐないか。フランスの社會急進黨が社會黨と稱すべきものであるかどうかが問題となる程度において、吉野氏の分析的政治學の講座においての民本主義なるものが、果して一派のデモクラシーと稱することができるかどうかは、私にとつては一個の問題である。その問題を解決することは、今後における吉野氏の當然の責任でなくてはならない。吉野氏のような、天下の同情と畏敬のうちに立つてゐる學者としては、彼れ自身を擁護することよりも、彼れ自身を躍らせることに力を致すべきではないか。その政治學的分析術に心を用ゐるよりも、徹底民本主義のうちに、彼れ自身を躍らせ、更に現代を躍らせることに心を用ゆべきではないか。われ等は一切の妥協的政治論を排斥する。われ等の世界においては、皮肉術の極意を解するような政論家を必要としない。われ等は唐宋八大家的形容詞澤山の政治論を必要としない。われ等はまた用心深く自己を包んで、その言はんとするところを率直に言ひえざる政論家を必要としない。われ等は最早や皮肉術に驚嘆してゐるには、あまりにその皮肉屋の現代に對する無理解であることを知り過ぎてゐる。またわれ等は形容詞本位の政治論については、あまりにその無内容であることを知り過ぎてゐる。更にわれ等はくど／＼しき論壇的長談議にも飽き果ててしまつたのである。われ等の求むるところの政治論とは、市井の片隅において、彼れ自身に目醒めたる弱き人が、その言はんとして言ひえざるところを、その人の

心となつて、大膽に率直に、彼れ自身を僞らずして述べるところの政論家である。そのやうな政論家こそ、眞に時代を救ひうるところの政論家である吉野氏にしてデモクラツトとしての誇りのうちに、彼れ自身の輝ける將來を見出さうとするならば、最早やアンチークなる、世に謂ふところのポリチカル・デモクラシーから、その立場を躍進させなくてはならぬ。日本における國民黨或はその一派、或は某々の職業的演說家の一團の諸君は、五年十年の前には、少なくとも錦輝館的聽衆の耳には、日本における政談演說の左翼派のやうにも思はれてゐた。それ以來錦輝館は赤旗事件に歴史を止めて、文明的活動寫眞館となつてしまつたが、變らぬものは、依然たる錦輝館式の職業的演說家の一團の諸君である。その諸君の唱へるところの國體擁護の旗印は、既に現代の最右翼、人々も滑稽扱ひをするやうになつた。その人々、國體擁護派の諸君から見ると、吉野氏は現代の危險人物である。現代の最左翼の過激派の驍將である。けれどもカデト的民主黨が民主主義の代表者であつた時代は、一九一七年七月を一期として終りを告げた。吉野氏の民本主義も、今や分析的政治學の講壇の時代から、更に急進躍進を斷行しなければならない時代となつた。その時代の陣頭において、吉野氏がデモクラシーの指導者としての地位を進めてゆくことの、花々しき姿は、今後における、吉野氏に對する期待である。私はこの期待をもつて吉野氏に俟つ。私は現代の青年を動かしつつある政論家または思想家として、鳥居素川氏、田中王堂氏、大山郁夫氏、姉崎正治氏、河上肇氏、または茅原華山氏、若宮卯之助氏、生田長江氏、堺枯川氏、西田幾太郎氏、桑木嚴翼氏、或は北澤新次郎氏、木村久一氏、山川均氏、田中萃一郎氏等についても語らなくてはならないが、それ等は一切他の機會に讓る。こゝにはたゞ福田、吉野の兩博士についてだけにする。(十二月十七日朝)

▽新政論家批判

井口孝親

與へられたる題は「現代の青年を動かしつゝある政論家思想家」といふので、當然吾々青年を動かしつゝある思想家にも觸れなければならない譯であるが、主として紙面の都合上、こゝには政論家についてのみ簡單に卑見を述べ、思想家の方は他の機會に讓ることゝする。唯一言この問題に觸れるならば、私は文學者としての有島武郎、武者小路實篤二氏、哲學者としての西田幾多郎氏、信仰の人としての内村鑑三氏等を以上

の意味に於ける思想家として擧げ度いと思ふ。

青年と政治

私は學生時代高等學校での或る演説に於て、現代青年の我政治に對するインヂイフアレントの態度に關し種々の方面よりその原因を求め結局、(一)時代思潮の影響、(二)政治及び政治家の墮落、(三)先輩の青年に對する無理解、(四)現行教育制度の缺陷の四つを托たのであるが、吾々新時代の青年は決して一派の論者の難ずるが如く、自ら好んで自國の政治と離れ尚更之を回避せんとする者ではない。吾々は人類の一部分として、所詮生れながらの政治的動物である。否吾々青年こそ全國民中眞の意味に於ける政治的動物である。然るに他の一方に於て、吾々の純眞の政治的慾望の實現を阻止すべく、以上の如き數多の內在的及外來的障碍が存在してをる。吾々青年が公明正大なる自國の政治を戀ひ求めつゝ、而かも是と離れ或は涙ながらに之を拒否せざるべからざるに至れる心情は、寧ろ理解ある先輩諸氏の大なる同情に値するものである。

私が右の演説に於て、我青年の政治に對する不關(インディファレント)的態度を憂へたのは今日より僅か二三年前のことであるが、最近一二年來吾々青年の政治に對する態度が、著しく改善し轉化して來たことを私は感ずる。之には勿論、歐洲戰爭後に於ける世界の民主化、ウイルソン其他の進歩的政治家によつて發揮せられし理想政治の勝利、其他國內に於ける政情、一般民衆の政治的覺醒、延いては青年の自覺奮起等種々の原因を求め得べきであるが、就中斯の如き機運を促進せしめた最大動因の一つとして、私はこゝに新らしき政論家の輩出及び其努力を數へざるを得ない。

二大政論家

現代の我國に於ける二大政論家として三宅雪嶺、德富蘇峯の兩先雅を推すことに對し何人と雖も大體異論がなからうと思ふ。併し極めて卒直に且つ忌憚なくいへば彼等は既に過去の人である。彼等と吾々との間には、十數年乃至數十年の時の隔りがあると共にそれに準ずる思想の隔りがある。吾々は彼等に對する時、固より言論界操觚界の耆宿として多大の尊敬を拂ふに吝ならざるも、思想上吾々と同じ國、同じ時代に呼吸せる新らしき政論家としてもはや彼等を迎へることが出來ない。此の意味よりして彼等は所謂現代の青年を動かしつゝある政論家ではない。

然らば現代の青年を動かしつゝある政論家とは果して如何なる人々を指すのであるか。

私は吉野作造、大山郁夫、佐々木惣一、河上肇、及び田中王

黨の諸氏を以て以上の意味に於ける新進政論家であると思ふ。而かも右の中、佐々木博士は寧ろ憲法行政學者として、河上博士は經濟學者として、田中王堂氏は通俗的意味に於ける哲學者、思想家としてより多く其名を知られて居る。それ故純粹の政論家としては、吾々は結局吉野大山二氏に指を屈せざるを得ないのである。

吉野作造氏

吉野博士の專門は言ふまでもなく政治史であるが、博士が政論家として巍然我批評界の一方に重きをなすに至つたのは、確か去る大正三年一月の本誌上に發表せられた日米問題以來のことである。爾後本誌を初め博士はあらゆる機關及機會を利用して我國民の政治教育に意を注がれた。由來我大學教授は因循退嬰、徒らに自己の專門内に立籠り王堂氏の所謂「書齋より街頭へ」の信念と氣魄とを有してゐない。それは尤も各自專門とする學問の性質にも因り、又極めて少數の場合には自己の研究に忠實ならんとする眞摯な學者的良心にも基因してゐるのであるが、其他の場合多くは教授其人の消極的なる退嬰偷安に因由してゐる。然るに吉野博士は歸朝早々この傳説的舊慣を打破し、自ら陣頭に馬を進めて正々堂々の論陣を張り、大學をして單なる死學者の養老院たらしめず、大學と社會との關係交渉を一層密接に且つ眞實ならしむるに努められた。

博士が政論家として嶄然頭角を現はすに至つたのは先づ第一に、歐米諸國の近代政治及政治史に對して深き造詣を有せらるる事、第二に故袁世凱の息克定の家庭教師として支那に留り、親しく彼地の政治經濟外交事情を研究し得せられた事等其最も重なるものであるが、斯の如き博士の蘊蓄を活用せしむべき好個の試金石として與へられたのが即ちかの歐洲戰爭及日支交渉問題である。而して博士が如何に見事なる成績を以て此の二大試錬を通過せられたかは、その大著「歐洲動亂史論」及「日支交渉論」が最も雄辯に物語つてゐる。

吉野博士の近代政治及政治史に對する造詣の深さは今日何人と雖も之を否認し得ないのであるが、或る一派の論者は、博士の政論には其根柢に深き政治哲學的背景がないとの理由を以て、之を論難せんとする傾がある。併し私の觀る所を以てすれば其は甚だ淺薄な見解ではなからうか。成程博士の文章には蘇峯の彫琢なく、雪嶺の雄健なく、華山の精彩熱意がない。博士の文章は飽く迄も平易平明、ソコに何等奇を衒ひ異を求むるの風なきこと正に博士の人格其者の反映である。博士は所謂羊頭を掲げて狗肉を賣り得ざる人である。形式の絢爛文字の深刻を以て、内容の貧弱意義の淺薄を包み得ざる人である。即ち博士よ

非凡の蔭に平凡を蔽ふ僞善者ではなくして、平凡の裡に非凡を藏せる床しき一個の學徒である。博士の文章には確かに彫琢の痕なく、精彩の見るべきものがない。併し乍ら平易の裡自ら雄健存し、平明の背後時に燃ゆるが如き熱意が籠つて居る。試みに博士の政論を手にすれば、必ずや其の根柢の奥深く一種の侵すべからざる基督敎的人道主義の閃きに接する。就中その最も著しき例は、かの朝鮮に於ける我總督政治を批評せられた博士の長論文である。即ち福澤諭吉先生の平易簡明なる著作中自ら深き思想、哲學の見出されたと同じ意味に於て、吉野博士の政論にも立派な儼乎たる政治哲學の背景がある。

私は曾て本誌上に「大學講壇に於ける吉野博士」を紹介した時「先生は自由の爲めに職を辭せぬ人である。民衆の爲めに少數者の專横を指彈するに躊躇せられない」と豫斷しておいたが、加何に博士が自由の爲めに戰ひ、又一個の學徒として己れの信奉せる主義理想に忠實であるかは、過般の神田南明倶樂部に於ける浪人會との立會演説會に於て遺憾なく立證せられた。凡そ青年は高き理想に憧れ確乎たる信念を求めて止まざる者である。博士が我第二國民の中堅たるべき吾々青年中に、最も多くの且つ眞摯なる後援者を有してゐられる寧ろ事理の當然であらう。

大山郁夫氏

氏は既に歐米諸國に留學すること四年、歸朝後直ちに早稻田大學の教授となり、爾來極めて熱烈な學究生活を續けられてゐたのであるが、過般の所謂早稻田騷動に於ける少壯改革派急先鋒の一人として斷然母校を去り、爾後少時靜寂なる文筆、讀書生活に沈潜せる中、前大阪朝日新聞主筆鳥居素川氏と相識り、昨年秋同社に入り最近かの朝日事件に關聯して鳥居、長谷川兩氏の退社するや、他の二三幹部技に同士と共に從來信奉せる高き政治的理想を棄つるに忍びず、斷然己れの主義に殉じて職を辭し、目下市外戸山原頭の瀟洒たる邸宅に蟄居しつゝ徐ろに捲土重來の大潜勢力を養つて居られる。私が初めて氏と相識つたのは大阪朝日に於てゞあるが、爾來今日に至る迄最も敬愛すべき先輩の一人として、私の心より兄事せる一人である。殊に最初私に取つて氏が特に親しく感ぜられたのは、氏が本誌の時評分擔に關して常に我師吉野博士と相交通せる中、智的に又情的に博士と親交を結ぶに至られたといふ一事である。博士の公私生活に於けるフランクな開放的なことは、其の持論たる秘密外交の打破以上に進んでゐる程であるが、大山氏も此點に於ては博士に讓らざる卒直な赤裸々な開放的な人である。氏を最もよく理解せる我先輩の一人は曾て氏を評して「あれだけ教養ある人で

而かもあれだけ無邪氣な正直な人は實に珍らしい」と言はれたが私も之れには全然同感である。惟ふにこの學者としての正直な且つ開放的な所が、兩氏をしてその信奉せる政治的理想以上に相近接せしむるモーティヴになつたものであらう。何れにするも氏は徹頭徹尾秘密を有せざる人、有し得ざる人、又有するを欲せざる人である。氏が政治家としてのウィルソンに對し滿腔の同情と尊敬を拂つてゐられる所以も、全く兩者間に一脈の相通ずるものあるが爲ではなからうか。

大山氏は何人に對しても直ちに眞情を披瀝して相接する人である。氏には秘密がない。隨つて殆ど全く虚僞術策技巧がない。氏に對する時、何人もまづ面して最後まで駘蕩たる春風に接するが如き、柔らかなのび／＼した愉快な感じを與へられる。而かも他の一面に於て氏は飽く迄強き狷介的の人である。已れの主義理想の爲めには一切の妥協を許さぬ強者である。氏をして一度早稻田を去らしめ、二度朝日を棄てしめたのも全くこの非妥協的な強き性格に因るのである。而して私は斯の如き氏の強さを目して一に歸する所氏の第一性格たる正直の強さ開放の強さなりと信じて居る。

大山氏の近代政治及政治學に對する造詣の深き事、こゝに私の贅するまでもないが、その政論家としての非凡なる手腕も夙に本誌讀者の熟知せらるゝ所である。殊に朝日入社以來、氏は從來のアカデミックな評論よりも寧ろ内外の時事評論に多くの興味と自信とを見出されたことは、政論家としての氏の將來に一層の囑望を寄せしむべき有力な素因である。

東西兩朝日

吉野大山兩氏が最近數年來その筆にその舌に、一般國民の政治教育上如何に多大の貢獻をせられたかはこゝに更めて繰返すまでもないが、彼等と相呼應して純正なる民本主義、政黨政治の大旗幟を眞向に振翳し、我國に於ける官僚軍閥財閥のあらゆる反動勢力に相拮抗しつゝ、一歩一歩彼等をして正當なる輿論、醱勃たる時代思潮の前に精神的讓步の止むなきに至らしめた、過去に於ける東西兩朝日新聞の政治的功績に至りては、假令其間多少遺憾の點ありたりとするも、苟も我國に於ける政治上、社會上の啓蒙運動を研究し理解せんとする者の輕々に看過すべからざる一大事である。而かも吾々青年の唯一の賴みとせし東西兩朝日は今日既に土崩瓦解、殊に大阪朝日昨今の不見識極まる反動化は、我國言論界の爲めには固より更に新日本の前途に想到して實に寒心に堪へない。

吾々は現在の朝日新聞に對し既に何等の期待も愛著も尊敬も有するものではないが、せめて鳥居素川、長谷川如是閑兩氏を

初め其他舊朝日幹部諸氏が更に大なる決心と確乎たる信念とを以て、各自政論家としての新らしき道を開拓して行かれん事を衷心切望に堪へざる次第である。

私は今後現代の我青年を動かすべき政論家乃至思想家としての鳥居、長谷川兩氏の將來を最も大なる期待と興味を以つて刮目せる者の一人である。——一九一八、一二、一八、稿

◎▽政論家及思想家に就いて

江口渙

□現代日本に於ける政論家とか、又は思想家とか云ふ言葉は、一寸見ると極めて解り切つた言葉のやうでありながら、好く考へると可なりに意味の曖昧な、從つてその內容の却々捕捉し難いものである。然し私は今ここではそれ等の言葉の概念に拘泥する事なしに、自分勝手な取捨選擇を基本として、平生私が多くの敬意を拂つてゐる若干名の文明批評家達に對する私見を述べる事にする。

□私見と云つても別段これと云つて纏つた意見があるわけではない。それに、私は平生から經濟、法律、外交等に關する專門雜誌を讀んでゐないから、それ等の雜誌に如何なる人が如何なる否や卓説を吐いてゐるかを少しも知らない。從つて私は唯、所謂政治雜誌（文藝雜誌に對しての政治雜誌の意味）例へば太陽中央公論、中外、その他の諸雜誌や大新聞に載せられた政治論、乃至は文明批評しか讀んでゐない。故に私の智識はこれ等に限られてゐると云ふ事を豫め斷つて置きたい。

□私が平生から一番、多くの興味と多くの敬意とをもつて讀むのは京都の河上肇博士の論文である。河上博士はかつて十年程前に井上哲次郎博士の社會主義攻擊に對して痛快極る三十餘枚を喰はせた事があつた。その頃から河上博士の名は私の腦裡に深く刻まれて遂に忘るる能はざる感銘となつた。殊に昨年公刊されたる「貧乏物語」の如きは、私が近頃讀んだ書物の中で最も力強く動かされたものの一つである。

□凡そ世の中の學者と云ふ者に二種ある。周圍の社會、人生の推移如何に關らず唯自己の學問探求に沒頭して他を省みない人と、自己の探求し得た結果を基礎として絶えず救世濟民の大目的を遂行しつゝある人とがある。河上博士が後者に屬する人であるのは云ふまでもない。更に後者に屬する學者の中でも、自己の思想を一般世間へ傳達するに當つて持前の學究的表現をしなければ傳達し能はぬ人と、俚耳に入り易い平易な簡明な表現に依つても尚充分にその重大な學究の結果を世間へ傳達し得る

人との二種がある。そして我河上博士の如きは實にこの後者に屬する人であるのは、今更改めて云ふ必要もない位である。

□然かも一般民衆の自覺が益々顯著となつて來たと同時に、それ等の民衆の根本的の啓蒙が更に一段の急を要する現時の日本に於いて、「貧乏物語」の著者の如きは是非ともゐて貰はなければならない人、最も貴重な人の一人である。

□然し「貧乏物語」が一般世人から多大の賞讚をもつて愛讀せられ、河上博士が是非ともゐて貰はなければならない人の一人である間は、日本は永久に幸福な國にはなれない。何となればその間、日本に決して貧乏人と貧乏生活とが絶えないから。つまり吾々は現代の日本を是非ともこの「貧乏物語」が愛讀されずにすむやうな日本に改造しなければいけない、現代の日本を是非とも河上博士の存在が重要でなくなるやうな日本に改造しなければいけない。その時こそは「貧乏物語」の目的が到達せられた時であり、河上博士の理想が實現せられた時である。

□實際この「貧乏物語」は自己の存在が不必要になる事を究極の目的として現はれたほど、それほど切實な要求と意義ある内容とを持つて生れた書物である。吾々はこの書物の中に盛られた博士の心を體して、今後是非とも有ゆる力を盡して貧乏退治の戰を戰はなければならない。否、この書物はいやでも應でも人を驅つてその戰に赴かさなければ措ない書物である。

□一體、學者と云はれる人々の書物を讀んでも、多くの場合吾々は唯啓蒙はされるが、あまり激勵される事が少ない。然るに「貧乏物語」は啓蒙されるよりも遙かに多くの激勵を受ける。これ云ふまでもなくその中に單に博士の學殖が示されてゐるよりも遙かに多く、熱烈なる精神と高貴なる人格とが示されてゐる結果であらう。

□成程、そこには博士獨特の文章のうまさから來る敍述の巧妙もあらう。又、充分な學殖を背景として通俗的な表現をしたと云ふ、態度の餘裕もあらう。然し何と云つても、この書物が人を動かす根本の强味は、中に溢れてゐる博士の熱誠と高貴な人格とである。實際、人を動かす最後の力は、究極に於いて唯唯その人格の力ばかりである。

□福田博士の「勝者は誰か」と云ふ一文はこれ又近來になく私を動かした論文であつた。その一言一句には悉く博士の鐵火の如き熾烈な人格が溢れてゐると云つても過言ではない。私は「勝者は誰か」と云ふ一文を讀んで、實際思はず會心の微笑を洩さざるを得なかつた。この一文を讀んだ時、私は數月前に露西亞の一新聞が英米佛に警告した言葉、「聯合軍が國家的勝利と云ふが如き愚劣な目的のため徒に獨逸を追窮すると云ふ事は、結局

英米佛それ自身へのボルシエウヰイキーの侵入を恐れたゞけ迅速ならしめる事に過ぎないと云ふ意味の言葉が都下の大新聞に外國電報として載せられてあつたのを想ひ起さざるを得なかつた。實際、勝者は誰か。その勝者は果して東洋にまでも現はれはしないだらうか。然しその事に就いては不幸にして今明言する事を許されてゐない。

□それはとにかくあの一文に見ても福田博士の眞の偉さは那邊にあるかが知る事が出來る。成程、學殖に於いても博士は當今第一流の學者であらう。然し私が見て更により以上畏敬の念を起させるものは、博士の持つてゐる鐵火の如き熾烈な人格である。凡そ有ゆる理想主義者が理想主義者として持つてゐる眞の價値は、一つに懸つてその人格の力にある。その人格の力が生んだ熾烈な精神、血の如く迸る生きた精神である。この精神あつてこそ人を始めて根本から動かす事が出來る。

□殊に福田博士の論文が何時も人を力強く壓するのは、その態度の堂々たる事と、その意氣の盛なる事と、わけてもその動機の極めて純粹な事とである。同時にその論者の率直明徹な事と、飽くまで直情徑行の事とは無論今更云ふまでもない。私は徒に曲學阿櫃、乃至は淺學阿衆の學者の多い現代の日本に於いて福田博士の如き眞の人間、眞の理想主義者の好典型を見得る事を心から歡ぶ者である。

□吉野作造博士を世間では一般にデモクラシーの權化のやうに思つてゐる。然しこれは吉野博士自身にとつても可なりに迷惑な事だらうと私は心私かに推察してゐる。成程、吉野博士はデモクラシーの忠實な研究者である。その忠實な研究の結果を發表した事に依つて、吾々は今までどれだけ啓蒙されたか解らない。

□然し博士の態度は結局研究者としての態度であつて、今までの處では決してデモクラシーのプロパガンディストとしての態度は見えない。成程、博士はそのデモクラシーに關する學研的發表以外にもその學殖を背景とした透明な理智の篩にかけて、時々刻々の問題に對しいろいろ行屆いた批評はしてゐる。然し博士の批評は結局學者の冷靜な批判であつて、いまだ却々デモクラシーのプロパガンダと云ふ域にまでは到らない。何となれば博士の如き理智的な批判は要するに他人の理智にしか働きかけないものであるが、眞のプロパガンダは結局感情を通して直接に全人格に働きかけるものであるから。

□プロパガンダは他人の感情を働かす事が、最初の最大の條件であるから、それに一番必要な事は火のやうな精神である。金石をも融かすやうな人格の火焔である。然るに吉野博士の態度

にはそれがない。ここに博士の位置の安定があるとともに、又、吾々の不滿がある。然るに世間は博士を目して直にデモクラシーのプロパガンデイストとしてゐる人が可なりある。若しこの意味で博士を謳歌してゐるならば贔負の引倒しであり。その反對に博士を怖れてゐるならば要するに風聲鶴唳に驚く臆病者に過ぎない。

□かの徒に特權階級の利益を擁護する事にのみ日もこれ足らざる時代遲れの政治家や、その政治家の手先に使はれて盲動する政治上の低能兒達が、吉野博士に不當な壓迫を加へやうとするのは吾々から見て眞に憫殺に價ひする。

□博士の論文には何時も可なりに行屆いた批判の跡は見えるが、人を驅つてプロパガンダに赴かしめるほどの力と熱とがない。故に今後デモクラシーのプロパガンダのために蹶起する人があるとすれば、それは博士の論文に刺戟された結果ではなく、博士の論旨を其人個人の人格に依つて醱酵させたまでゝある。故に結局責任はその人個人の上にあつて決して博士の上にはない。故に吉野博士に不當な壓迫を加へる位なら、爆彈は危險であると云ふ理由の下に、爆彈を研究しその研究發表してゐる化學者達にも同じく壓迫を加へなければいけない。實際世にこれほどの不合理があるだらうか。私は彼の時代遲れの政治家やその下手に使はれてゐる低能兒の不明を心から輕蔑せざるを得ない。

□まだ論ずべき人は可なりに多いが紙數が盡きたからこれでやめる。唯、最後に一言附け加へて置きたいのは、日本の哲學界思想界に西田幾多郎博士のゐる事は、日本の世界的の誇りであると云ふ一事である。

□西田博士は日本の學界にうようよゐる例の單なる哲學研究者ではない。既に立派な哲學者である。唯、紙數の都合で西田博士に關する感想を唯これだけしか述べられないのは遺憾である。

▽吉野作造博士と與謝野晶子女史

本間久雄

現代の政論家社會批評家で、青年に影響を與へつゝある人は誰ぞ――これは誰人にも容易に答への出來さうな質問で、而も容易に答への出來ない質問です。

第一に青年の範圍がわかりません。ここには文學に浮身を窶す所謂文學青年があります。そこには、天下國家の外、何事をも考へてゐないらしく裝つてゐる政治青年があります。そこに

は又、神とか佛とかいふことに沒頭してゐる固陋的な宗教青年があります。と、思へば又極めて物質的な其日暮しの刹那主義的青年がありもす。そしてこれらの青年が各々自己の執するところにのみ從つて、彼等の間に共通した或物を求めるといふ努力をしてゐない。といふのが現在の狀態であるからです。第二に、現代の社會的風潮が極めて多種多様で跼蹐するところのない渾沌狀態にあるといふのが事實であるからです。尤もこれは第一の狀態を釀し出した直接の源因ではありますが。從つて現今のところでは、青年の萬人が萬人まで仰ぎ崇めるといふやうな思想界の巨人は事實においてありません。たとへ影響を與へてゐると云つても一小部分、感化を與へてゐると云つても一小部分に過ぎません。恐らく往年の福澤諭吉や德富蘇峯や更に下つては高山樗牛のやうな、比較的に一般的な影響を與へつゝある人は、現今では恐らくないだらうと思はれます。尤も、これだけ又、如上の質問は現在において有意義であり又アトラクチブであるわけであることと云ふまでもありません。

で、私は、この質問に對して、私自身の立場から云ふことにします。私自身が共鳴すると同時に、いかなる分野に興味を持ち、活動しつゝある青年も共鳴して欲しいと思はれるやうな人を求めることにします。私の求める人が、實際において多くの青年に影響を與へてゐるか否かは別として、少くとも多くの青年が、その人の感化影響の下にあつて欲しいと私が思ふ人々を求めることにします。

さて前置きが長くなりましたが、私が以上の立場から政論家乃至社會批評家の中に求めて二人を得ます。一人は政論家としての吉野作造氏、他の一人は社會批評家としての與謝野晶子氏であります。

尤も吉野作造博士のものを讀み出したのは、私に取つては極めて最近のことですから、思ひ切つた斷定的批評を博士に對して試みることは出來ませんが、私の見た限りでは、博士は、わが國の現在に取つて最も必要な政論家であると考へます。單に政論家としてばかりでなく、廣い意味の文明批評家社會批評家としても博士は最も優れた人であると考へます。否、文明批評家、社會批評家として優れてゐるからこそ、博士の政論には價値があり權威があると考へます。在來の政論家といふ連中は、大抵政治論の天地に跼蹐してゐました。そしてその政治論を裏づける社會批評の一面を多くは閑却してゐました。吉野博士の政治論には確かにこの缺點がありません。博士は飽くまでも現代思想の批判といふことを背景としてその政治論を試みて居られます。

私は博士を以て現代における最も必要な政論家だと云ひました。私は以下少しくこの意味を説明します。現代は前にも述べたやうに思想上の渾沌時代です。新舊思想があらゆる分野において烈しく爭つて居ります。殊に漸く終りを告げた過去五年の世界大戰は、一層わが國の現在の思想界を攪亂して居ります。戰後の思想界は恐らく一層渾沌狀態になるだらうと思はれます。しかしながら、この渾沌狀態の中にも遠からず一種の傾向乃至歸趨が出て來るに相違ありません。としてこの傾向乃至歸趨は、舊式な偏狹な國家主義が、新しき健全な國家主義に途を讓り、舊式な、偏狹な國家主義が新しき健全な愛國心に途を讓るといふことです。そしてかういふ時代思潮推移の途上において博士は最も必要な、なくてかなはぬ人であると私は考へるのであります。

かう云つただけでは極めて漠としてゐます。私は更に如上の意味を今少し委しく説明しませう。さて舊式な偏狹な國家主義とは何を云ふか。舊式な偏狹な愛國心とは何を云ふか。又新しき健全な國家主義又は愛國心とは何をいふか。これは賢明な讀者にはすぐおわかりのことゝ思ひますが、前者は、自國の利益だけを眼中に置いて他國のそれを眼中に置かない自我的國家主義です。乃至その國家主義の立場に立つ愛國心です。自國の利益だけを眼中に置いて、他國のそれを眼中に置かないから從つてこの國家主義は領地の擴張を以て目的とします。軍備の擴張を以て目的とします。世界統一の夢想を以て理想と誤信します。最近において、この種の國家主義又はこの種の愛國心の最もよく現はれたところは、いふまでもなく獨逸です。そして獨逸の戰敗と共に、この種の國家主義又は愛國心の誤れることが充分に事實において證據立てられました。即ち、この種の偏狹な國家主義又は愛國心を將來把持することは將來の世界平和を攪亂する所以であることが、この大戰亂によつて遺憾なく證據立てられました。そしてこれから先き、世界の平和を維持するためには全く在來とは異つた新しき國家主義の立場に立たなければならないといふことが新時代の人々の胸に痛切にひゞいて來ました。

すなはち、これからの國家主義は、自國の利益を謀ると同時に、他國のそれをも眼中に置くといふやうな國家と國家との相互扶助的觀念に基礎を置くものでなければなりません。即ち更に言葉を換へて云へば一種の國際主義でなければなりません。戰後の世界は、この意味で如上舊式な國家主義から脫して、この新しい國際主義的國家主義の實現でなければなりません。このことは過去五年間に亘つた空前の世界大戰の齎らした最も

偉大なる教訓であること云ふまでもありません。

わが國でも新時代の人は何れもこのことを痛切に感じてゐます。そして遲かれ早かれさういふ新しい國家主義の實現されることは疑ひを入れないところです。しかし舊時代の人はまだ〳〵頑冥です。まだ〳〵固陋です。そして如上新しい國家主義の立場に立つ新しい、而も最も正しき意味において健全なるさま〴〵の思想をあらゆる方法で迫害しようとしてゐます。

この時に當つて、吉野博士はその深い學識と、愛國者の純眞な熱情とを以て、この頑冥固陋な多くの旧い見解と戰ひ、新しい日本のために、その新しい途を拓くことに少なからぬ努力を盡しつゝ居られます。本誌中央公論評論欄における博士の論議を讀んでゐる人には、このことは容易に肯けることゝ考へます。

博士のいかにも學者らしい、辛棒強い、自説を執つて動かないといふ人格にも私は尊敬を拂ふことを禁じ得ません。例へばこの間の浪人會との立會演説です。私は差支あつてその演説を聞くことは出來ませんでしたが、各新聞の記事から推測すると博士は浪人會などゝいふ、愛國者は俺達ばかりだと思ひあがつてゐるらしい連中、國體の擁護者は俺達ばかりだと思ひ上つてゐるらしい連中、壮士的行動を以て志士的行動だと思ひ誤つてゐるらしい連中、かういふ連中に對しても相手に拒否することなく諤々として說かれ、少くも愛國者は俺ばかりだといふ謬見の考へを彼等から棄てさせ、彼等が非愛國者の如く考へてゐた吉野博士等の新しい思想の懐抱者も亦彼等と同じく、或ひは彼等とは別な意味で愛國者であるといふことを彼等に納得させられたらしいですが、これなどにも博士の學者らしい、而し眞實の意味の志士的風丰が忍ばれるではありませんか。

私は今の多くの青年が博士によつて影響されつゝあるか否かは知りません。しかしそのいかなる分野における青年であるを問はず、私は博士の言説によつて深く影響されることを望みます。新しき時代の人たるためには、即ち本當の意味の國家主義の立場に立つた本當の意味の愛國者たるためには、いかなる青年も博士の新しき、而し健全なる言説に耳を傾けることを望みます。

限定の紙數を超過したゝめ與謝野晶子女史については殆んど愚見を述べ得ないのは殘念におもひます。晶子女史を私がこゝに特に擧げたのは主として婦人運動の先驅者としてゞあります。日本の新しき婦人の中には、晶子女史よりも知識において優れた人もあるでせう。西洋の學問について造詣の深い人もゐるでせう。又晶子女子の意見が皆が皆まで賛成さるべきもので

あるとは云ひ得ないでせう。晶子女史の言説には、學究的に見れば幾多の不備もあるでせう。しかしながら、晶子女史の如く生活に徹した情熱を以て物をいふ人は餘り多くはないだらうと考へます。婦人界――それは一般の思想界よりも更に〳〵後れてゐます。從つて又そこには更に〳〵所謂『女大學』式な頑冥固陋の舊式な考へが深く根をひろげてゐますが、この頑冥固陋な多くの見解に向つて晶子女史は徹頭徹尾反抗してゐます。そしてその平和的人道主義の立場から、日本の若き婦人に向つて、新しき道德を說いてゐます。而も晶子女史のは多くの婦人論者のさうであるとは異なり、決して西洋の受賣りではなく、飽くまでも自分の實感を基礎とした意見であります。この點が晶子女史の言說に一層の權威を添へます。

私は嘗つて晶子女史を以て日本のエレン、ケイだと云つたことがありますが、實際この兩者の間には、さま〴〵の點で似類した點があります。こゝで一々細論したくも思ひますが、これは他日の機會にゆづります。とにかく『女大學』式固陋な思想で固つた日本の女が、その固陋な思想の型を破つて、新しい時代の婦人として、新しく蘇るためには、是非とも晶子女史などの言說によつて力と暗示とを得なければなりません。私はこの意味で益々晶子女史の健闘を祈ると共に、日本の若き婦人――必ずしも婦人と限らず、一般青年も無論です――が益々多く女史の言說に耳を傾けることを希望するものであります。

▽我政論界のチャムピオン

田中純

もし、青年と云ふものを、單に二十歲から三十歲までとか、三十五歲までとかと云ふ風に、一定の年齡の人々を指すものとして考へ、彼等に及ぼす政論家、思想家の感化と云ふものを、單に廣く讀まれるとか、廣く感心されるとか云ふ程度に限つて考へるならば、現代の靑年を最も多く感化して居るものは、德富蘇峰や三宅雪嶺や德富健次郎等であると、言はねばならないだらう。しかし、靑年と云ふものを、今少し知識的に選擇され、開拓されたヤンガア・ゼネレイションとして解し、それに及ぼす感化と云ふものをも、今少し根強い深い影響として考へる時には、吾々は、更に別種なチャンピオンの居ることを、是認しなければならないだらう。

無論、現代の進步した靑年と雖、これらの人々が、吾が國民生活の進步の、過去の或る階梯に於て、比類のない貢獻をした思想家であることは認めるであらう。そしてそれ故に、彼等の

言論に耳を傾けるだけの、好奇心を失はないであらう。彼等の著述が、今尚ほ少なからぬサアキユレイションを持つて居る所以である。

しかし、彼等に對する讀書慾の由來するところは、結局、一種の好奇心か、さもなくば「それでも」と云ふ、一種の割引された期待に外ならない。而も、それらの人々から、吾々青年が聞かされるものは、大抵、非常に無理解な、的の外れた青年訓である。吾々は、半白の老人達が寄り集つて、民心統一案に空騒ぎして居るのを見るのと、同じやうな苦笑を感ぜさせられるのが落ちである。

そこで、吾々の眼は、必然に、他のもつと吾々の時代に近い人々、例へば、大山郁夫、吉野作造、福田德三、中野正剛、室伏高信、山川均などの諸君の評論の上に落ちて行く。無論、私は月々の雜誌を讀むのに可なり不精であるから、これらの人々のものも、ごく僅かしか讀んで居ないが、讀めば必ず、何かゞ自分の心に觸れる。彼等の結論が、自分の心に觸れない時にも彼等の神經は、焦燥は、時として癇癪は、自分の心に觸れる。彼等の神經が、自分の心に觸れない時でも、彼等の結論か、自分に滿足を與へることがある。何れにしても、彼等の生活して居る雰圍氣と、私のそれとは、餘り多く距つて居ない。而も、生活の雰圍氣の近似と云ふことほど大きな、言論の力はない。

吉野、大山の二人は、何と云つても、今のところ、日本のデモクラシーの最も適當な、最も必要な二大チャンピオンである。彼等は共に、可なりアカデミックな文體の所有者である。大山君の文體は、吉野君のそれに比して、可なり熱情的であり、時としては、可なり烈しい罵言を、その政敵に向つて放つこともあるが、而もその評論の大體の調子が、可なりアカデミックであり、學術的であることは、相共通して居る。何れにしても彼等には、何處か大學教授らしい風格があり、デモクラシイの原理に對する或る學問的忠實がある。彼等の政敵が、彼等を英米請賣りのデモクラ屋だと呼ぶのも、かうした彼等の態度に對する偏見から來て居るのだらう。兎に角、彼等が、一國の政治生活に對する一種の合理論者であることは認めねばならない。そして、その結果として、彼等の說くところは、大體に於て相一致して居る。

そこへ行くと、室伏高信君にはちよいと變つたところがある。同君が、矢張り熱心なデモクラシイの使徒である點に於ては、前二者と同じであり、英米の、殊に米國の政治說やその實例を引用することが可なり頻繁である爲めに、彼の政敵から英米請賣りのデモクラ屋であるが如くに言はれて居る點も、前二者と

同じである。しかし、同君の主張には、純然たる合理主義の外に、もつと別な、國民生活の感情的分子の權利を認めやうとする傾向が多い。例へば彼が、何人よりも先きに、ロシアのボリシエヰキの人々の主張した民族主義の主張を紹介して、自分もそれを力強く主張したことなどは、彼のさうした傾向を示す可い實例である。蓋、彼は、民族主義の主張の中に、國民生活に於ける民族的感情の要求が、多分に含まれて居るのを見たからであらう。兎に角、彼が、同じデモクラシイの使徒の中でも、何か、彼自身に獨得な、彼の日本人的感情に獨得な、何かを見出さうとして居る努力は、認めなければならない。

福田德三氏や中野正剛君のものは、私は、餘り多く讀んで居ないし、彼等の描き出す結論には、可なり同感し兼ねる點もあるが、さうした文章を通じて私の眼に映ずる彼等の特殊な、強い性格に、心を惹かれることが多い。彼等は時々、私から見て或る曲筆を弄するやうな事さへあるが、しかし、彼等がさうした曲筆を弄さなければならないその心持、その焦燥、その痛嘆に、私は自ら微笑を禁じ得ないやうな場合が多い。

山川君は、何處までも頭の透き通つた批評家であり、氣味の可い彈劾家である。彼の絶えず一種の經濟史觀の上に立つて、各種の政治現象や社會現象を論じる風貌は、單調な我が政論界に於ける、一異彩であることを失はない。

尚、此の外に、吾が政論界の弧線の外に立つて、常に暗示の多い文章を發表して居る人に、若宮卯之助氏がある。氏は政治批評家と云ふよりも以上に、一個の文明批評家である。文明批評家であると云ふ以上に、今のところ、パラドキシアンである。彼のパラドックスが、彼の、吾が社會生活に對する懷疑的心持から來るのか、それともまた、或る倫理的な心持から來るのか、それは私には解らない。が、何れにしても、彼が、その本音を吐かして見たところで、一個の不平家であることは疑へない。彼の、表面上の、現狀謳歌の背後に、或る堪へ難い不平と、時としては絶望的な調子のあることは、少し鋭い讀者の、容易に見逃さない點であらう。彼は、その點に於て、吉野、大山以下の多數のデモクラシイの使徒と、一脈相通じるところがある。しかし、同じ不平でも、それは茅原華山などのやうな、狂燥性のものとは段違ひである。彼の目は、もつと深く、日本の現實の底に喰ひ入つて居る。

これらの人々の何れが、一番力強く、一番廣く、現代の青年に感化を及ぼして居るかは、廣く人氣投票でも募つて見なければ解らない。が、何れにしても、日本現代の進歩した青年達を指導する任務が、これらの人々によつて頒たれて居り、それが

日本の進運に重大な貢獻をして居ることは疑へない。
私は切に、彼等の健在を祈る。

▽もの淋しき我政論界思想界

赤木桁平

正直に云ふと、過去に於いては兎に角、今日に於いては最早私は我國の思想家や政論家から大して動かされることもなければ、また、我國の思想家や政論家から大して教へられるところもない。嘗て高山樗牛や、綱島梁川や、清澤滿之などに對して抱いてゐたやうな感激は、今から考へると、遠く過ぎ去つた時代の夢のやうな氣持すらするのである。遺憾なく思想上の鎖國主義が破れて、人間の精神的交通が世界的になり切つた今日に於いては、我々の頭や心は最早純日本的にのみ動くことも出來なければ、また、純日本的にのみ動く必要はない。レニンが露西亞人だからレニンの思想は純露西亞的のものと考へ、ウヰルソンが亞米利加人だからウヰルソンの思想は純亞米利加的であるなどと考へるやうな迂濶者でない限り、何人と雖もかうした私の心持を是認するに吝かではあるまいと思ふ。

大正の今日にたつても猶ほ蒙昧な自國崇拜の迷夢から醒め切れない厄介者は、かうした私の心持を以て直ちに過激な思想上のXenomanieであると指彈するかも知れない。或はさうであらう。併し、淺薄な思想上のXenomanieに囚はれてゐる私がある程度まで時代の大勢を暗示するものであり、且つ、時代の大勢を暗示することに依つて、疑ひもなく時代の眞理を物語るものであるとしたならば、私の非難者は果してどういふ顔をするであらう。聞かまほしきは國民思想統一の御先棒方の御意見である。俗論の改良（改良すると、最早俗論でなくなることはお氣が付かれない）を以て千萬の心を一つの型に鑄込むことが出來るなどと考へてゐられるやうな博識宏才の諸先生方は私のやうな青年の存在を以て恐らく呪ふべき事實であると嗟嘆せられるであらうが、それは聊かお門違ひではなからうか。個人を責めることを知つて、個人を動かしつゝある時代を責めることを知らないやうな諸先生方は、以て天下のことを托するに足りないと云はれても仕方はあるまい。

天平時代の我國に生れたいとか、盛唐時代の支那に生れたいとか、ペリクレス時代の希臘に生れたいとか、アウグスツス時代の羅馬に生れたいとか、またはルイ十四世時代の佛蘭西に生れたいといふやうな奇態なことを考へてゐた時代もあつたが、今の私にはさらさらさうした懷古的な希望はないと斷じて云ふ。

過去の如何なる時代に生れても、私は現代に生れたほど生甲斐ある生存を受用することは出來なかつたであらうと。ゴルキーはレニンを評して、レニンは露西亞と露西亞人とを鎔爐に入れて實驗の用に供してゐると云つたさうであるが、私は此言葉を改鑄して、上帝は世界と世界の人類とを鎔爐に入れて實驗の用に供してゐると云ひたい。ゲエテのやうな、モンテーヌのやうな或地上の存在から隔離した心があつて、眼前にかうした現象を見せ付けられたならば何と云ふかは知らないが、すくなくとも地上に於ける一個の微生物たるに過ぎない私にとつては、ノアの大洪水以來絶えて見られなかつた上帝の遺憾なき殘忍性の發揮を見るといふことだけでも、どれだけ私の感興を動かすか分らない。すべては眞理の徴候であるが、眞理そのものからは遠いと云つたエマーソンの心持を會得して、絶えず眼前を經過する變幻のやうな事相の推移を見てゐるに至つては、私にとつて何といふ幸福が與へられたのかとさへ云ひたくなる。

筆は岐路に這入つて、當面の設題からは餘りに遠く離れて終つたが、要するに私は精神上に於いて私が一個の日本人であるといふことを意識するよりも、寧ろ一個の世界人であるといふことをより多く意識するといふことが云ひたかつたに過ぎない。從つて、假に私を動かしつつある現代の思想家や政論家があつたにしても、それは反つて私の棲んでゐる日本には尠くて、私が一度も足を踏み込んだことのない外國に多いのである。一例を擧げて云ふと、現在の我國に時めいてゐる某々氏等の民本主義論を拜見するよりも、私にとつてはウヰルソン大統領の教書や宣言の方がどの位ゐ心を動かすか知れないし、同じく現在の我國に時めいでゐる某々氏等の思想問題に關する意見を傾聽するよりも、私にとつては外客ケーベル博士の感想や意見の方がどの位ゐ興味を惹くか分らない。思考の背景として存在すべき日本といふ特種の條件が段々其影を薄くしてゆくにつれて、反對にかうした傾向の累次に遞加してゆくのも或は致し方のない事實であらう。

假令小さくあるにしても、小さい並に私には私の思想があり、私の氣質があり、私の趣味があり、私の體驗があり、且つ、私の態度がある。從つて、私が私の全人格を投じて無條件に傾倒することの出來るやうな人物は、殘念ながら先づ皆無だと云つていい。單に政治上の意見から云つても、私の考へ方は吉野作造博士や大山郁夫氏の考へ方とさしたる相違はないと思ひながらも、氏等の論策に接して、嘗て一度も私は私自身が何等かの感動を與へられたと心付いたことはなかつた。併し、かういふ私の告白は決して氏等の有する卓越性を傷けるものでもなけれ

ば、また、氏等の有する誠實を否定するものでもない。たゞ單に私といふ一個の微少なる存在と、吉野博士と云ひ、大山氏といふ存在との間に、到底相合はない一種の罅隙の存することを立證するに過ぎないのである。

嘗て吉野博士の書かれたものを讀んだ時、私は氏の政論の背景に今すこし思想的な深味があればいいにと思うたことがあつた。嘗て大山氏の書かれたものを讀んだ時、私は氏の學説の根柢て今すこし實際的な興味があればいいにと思うたことがあつた。そして二氏に對して等しく願ふところは氏等が單なる學者であることを忘れて、一個の人間としての要求と感激とに生きて貰ひたいといふことでもあつた。人は云ふ、學者的な良心と。人は云ふ、思想家的な良心と。併し、如何なる良心と雖も人間的な良心の前に優先を主張しうるものがあるだらうか。かういふと、恰も氏等には人間的な良心が缺けてゐるといふかのやうに聞えるかも知れないが、私の思ふところは必ずしもさうでない。フイヒテが教へて呉れた人間としての保證、即ち、自由行爲の自由原因なるものが人間的な良心であるよりも先づ學者的た、若しくは思想家的な良心であることに依つて、常に我々の最深な生命に觸れ悪いといふ事實を指摘するに留まるのである。

この點に於いて見ると、昨臘の本誌にも『勝者は誰か』といふ

明快な論文を書かれた福田博士のやうな學者は、私にとつてかなり有りがたい人物であると云はなければならない。氏が卓れた學者であるといふこと、また、氏の見識が時代に挺んずるといふやうなことも素より私の氏に對する敬重を深からしめる一つの原因には相違ないが、さうした第二義的な事實よりも前に先づ私の心を捉へるものは氏の有する人間的な良心の熾烈なことである。從つて、私は氏の書かれたものを讀むごとに、その尖鋭な眼力と明徹な腦力とを裏付けるに如何に豐かな人間性が渦卷いてゐるか、如何に豐かな良心が動いてゐるかといふことを考へなかつたことはない。氏は相當の年齡でありながら猶ほ今恰度何歳になられてゐるかは知らないが、氏のやうな感激と氏のやうな意氣とに生きてゐられる人を見ると、私は私の青春に對して愧ぢなければならないとさへ思ふことがある。固陋なる一部の人士は氏を以て親獨論者でありと云ひ、有形に、無形に氏に對する一種の迫害を加へてゐるといふやうなことを聞いてゐるが、それらの人士に對して私の聞きたいことは、日本人は何故猫も杓子も英國の提燈持ちを勤めなければならないのかといふことである。二口目にはすぐ我國の光榮を説く連中よ。大正の日本はまだ一個半個の自由思想家を容れうるだけの文化の程度にも達しないのか！

ある支持者は云ふ。現在の我國に於ける Civilization は東京にあるが、現在の我國に於ける Kultur は京都にあると。『善の研究』の著者として嘗ての私に異常な道徳的昂揚を感ぜしめた西田幾多郎博士を初め、哲學史家として名高い波多野精一博士や、我國に於ける眞富の意味の文明史家として擧ぐべき坂口昻博士などは皆京都に在住して、思想を愛し、學問を好む一部靑年の敬仰を一身に鍾めてゐるが、私の好きな經濟學者として福田博士とともに擧ぐべき河上肇博士もまた京都に在住する人である。氏の書かれたものは常に氏の明晰な頭腦と聰明な判斷とを反映して遺憾のないものであると同時に、人間の實生活に對する氏の透徹した理解は、我々に對して常に意味深い暗示を與へなかつたことはない。徒らに抽象的な論議を擅まゝにして、他愛もない觀念の遊戯をのみ事とする學者の多い中にあつて氏の生きた文字と思想とは遙かに珍重すべきものであらう。

三四ケ月前のことであつたと思ふ。丁酉倫理會の機關誌上に於いて國家思想に關する論議が沸騰し、思ひもかけぬ人が危險呼ばはりをされたり、また、思ひもかけぬ人が健全組に屬してゐるのを見て非常な興味を感じたことがある。さらに最近に至つては岩野泡鳴氏が飯野某と提携して、大いに日本主義の運動を興すといふやうな奇聞がある。併し、かうした事實は現在の私に對して一種の微笑を與へるに過ぎないが、微々たる雜誌『思潮』が今月限り廢刊するといふことを聞くと、何となく殘り惜しいやうな氣持がしないではない。ある意味に於いては時代の良心を代表し、また、ある意味に於いては時代の警告者を以て任じた一團の年少思想家等に對して、私はかなり深い愛着を持つてゐたのであつた。

その他にも多くの經濟學者はある。多くの思想家はある。また多くの政論家はある。皆立派な人々には相違ない。併し私自身の求めるところ、それらの人々の與へるところとが或程度まで合致しない限り、私にとつては遂に永遠の他人として終るかも知れない。思想上の Anti-boden は相距ること地球の直徑よりも甚しいと云つたのはゲエテであるが、我々は何時までかうした淋しさを感じなければならないのであらうか。

評論

時論

講和會議に提言すべき我國の南洋諸島處分案

法學博士　吉野作造

今度の講和會議に我日本は如何なる問題を提げて出る積りであらうか。此會議に於て主として論ぜらるべき各種の問題は、已に歐米諸國の政治家によつてあらかた公にされてゐる。從來の國際的諸會合に於けるが如く、問題は何時でも先方から出され、こちらは全然受け身になつて諾(イエス)、否(ノー)の返答を聞かれる丈けでは大國の面目として餘りに肩身が狭い。何か一つ位は歐米諸國の政治家を成程と感心せしむるやうな問題を出したいものだ。然るに今日我國政治家の講和會議に對する實際の態度を見るに、彼等の見識が歐米諸國の政治家のそれに比して餘りに低い爲めでもあらう。どんな問題がどう云ふ風に說き出されるかの見當が丸でつかずして、恰度怠惰學生が嚴威な試驗官の前に出たやうに、戰々兢々たる態度を示して居るのは餘りに見つともないではないか。其癖陰では隨分大きい事をいふものがある。或は東洋の問題に關しては我に於て優越の發言權を收めざるべからずとか、獨逸に取て代つた諸占領地の領有は既定の事として一言も異議を挾ましむべからずと云ふが如き是である。然し乍ら彼等は講和會議の席上に於て果して眞にかう云ふ景氣の好い提議をなし得べしとするの確信ありや否や。

此點から觀て予輩がこゝに特に讀者と共に研究して見たいのは、南洋に於ける占領諸島の處分問題である。

之に關する今日の普通の俗論(敢て予は俗論と云ふ)は、之が領有を既定の事實として認めしむべしと云ふのである。日本の立場から云へば、云ふまでもなく洵に結構な立論である。無條件に之を日本の領有に歸するに何の妨げもないなら、我々は勿論之に大贊成を表する。併し乍ら我々は此等諸島の處分は講和

會議の決定によつて初めて極まるものなることを忘れてはならない。然らば我々が此等諸島を確定的に領有せんとならば、相當の根據に立つて之を講和會議に主張しなければならない。然らば何の根據によつて之を主張するか。若し之を我國が力爭して取つたからといふならば、同じやうな口實で他の與國は尚一層の大なる利益を主張しないことも限らない。又之を日本國防上の理由から主張するなら、同じ理由で米國が一層の利權の確立を主張し得ないと限らない。我が一の利益を得るが爲めに、他國をして又之に作つて二三の利益を得しむることは果して得策であらうか。且つ夫れさう云つたやうな根據で敵國の領土を掠め取ると云ふ事は、今日の大勢たる非併合の原則と相容れない。今や歐米諸國は今日現在の戰爭を終止し、更に將來の平和を確保するの新事業を完成せんが爲めに、各多少の犧牲は忍ばうとして居る際で居る。何を苦んで少しばかりの離れ島の領有を爭つて此大方針の進行を紛亂するが如き事があらうか。故に聯合國の一として我が國は與國が悉く獨逸植民地の分割に與らうといふ事になつた場合に限り、南洋諸島の確實なる領有を主張し得べき正當の根據がある。然らざる以上は玆に帝國の主權を確立し得べしとするの迷夢より一日も早く醒めて居るの必要がなからうか。

尤も他の諸國が一般に植民地の處分に對してどう云ふ態度に出でようとも、我國は常に必ず之に拘束さるべしといふのではない。併し乍ら聯合與國の輿論に反して我が國が獨立の主張をなさんとせば、與國の政治家をして成程と納得せしむる丈けの特別の理由がなければならない。此等特別の理由がない以上は、與國の輿論に從ふのは日本にとつて何等不面目な事ではない。吾人の希望を率直に述べしむるならば、予輩は寧ろ我國の政治家が此世界の大勢に乘じ、更に一歩踏み進んで積極的に大勢を指導するの地位を取られんことである。外交上常に受け身の地位を脫したことのない我國も、千載一遇の此好機に當り、一度位は一人並の發言をして見てもいゝではないか。

聯合與國の占領にかゝる獨領植民地を如何に處分すべきやに就いては、講和會議の開催の日の迫るにつれ、いろ／＼の細目の問題がいろ／＼の人によつて說かれて居るに拘らず、割合に論じられてない。此點に關して聯合與國の間に略ぼ纏つて居る議論とも見るべきは、昨年一月のロイド・ジョージ及びウイルソンの言明に現れたものである。當時予輩は之に本誌上に於て評論を加へて居つたから重ねて玆に詳しく論ずるを避けるが、あの要點は矢張り民族自決主義を原則とし、更に所領國の主張

と在住民の希望を考慮することを參酌して講和會議に於て極めようと云ふのであつた。併し之には只大綱を掲げたものであつて細目の點には更に觸れて居ない。けれども我々は之れ丈の原則に基ゐて植民地問題が結局如何に取扱はるゝであらうかを、今日略ぼ推測し得ない事はない。

要するに今度の講和會議に於て所謂民族の問題に關しては、民族自決主義を以て解決の根本原則とするとは疑を容れない。而して民族自決主義は露西亞の過激派の主張するが如く、世界中の總べての民族問題に例外なく適用するといふのではなく、ウイルソンも已に明言して居るが如く、今度の戰爭に直接關係ある民族問題にのみ適用すると云ふことになるのであらうから、具體的にいへば同盟側諸國の支配の下にあつた異民族に主として適用せらるゝのである。然るに其の適用を受くべき民族には明白に二つの種類を區別せねばならない。一つはフインランド人とかポーランド人とか又はチエツク・スロヴアツク人とか、それ〲歐羅巴の眞中にあつて既に相當の文明を持つて居る民族である。他は土耳古の支配の下にあつた未開の民族、又は獨逸の植民地たる亞弗利加南洋諸島の未開の土民である。(此等土民の中には若干の開明民族もあるけれども)而して前者に今日直ちに相當の設備を設け、周到なる注意の下に民族自決主義を行ふは妨げが無いけれども、後者に在つては今日直ちに之を行ふ事は出來ない。未開なる彼等には自己の政治的運命を如何に決すべきやの判斷力を缺くのみならず、今急いで之を決定せしむるのは彼等の眞の希望利益に反するものと見なければならない。然らば之を如何に處分するかと云ふに、領有國の恐らく主張すべきが如く、之を元通りに返すといふ事には聯合與國の承認を得難かるべく、さればとて聯合與國が之をその儘占領すると云ふにも理論上並に實際上多くの困難があらう。して見れば結局どうなるかと云ふに、恐らく此等の地方は一括して講和會議參列諸國の責任として其の開明を計るの義務を負擔し、一定の程度に達するを待つて自決主義を行ふと云ふことになるだらう。列國の保護の下に彼等が教育せらるゝ間の彼等の國際法上の地位如何の如きは、會議の席上細目の協定に伴つて自ら定まる所があらう。而して開明に導くの任務を負擔した列國は、更に各々其方面を分ち其便宜とする所に從つて、或る特別の國に教育の任務を委托することゝなるだらう。さうなると外の方面の事は暫く措き、少くとも我が國の現に占領して居る南洋諸島に就き教育の任務を引き受くるといふ事にならざるを得ない。

以上は講和に關する當今の大勢より推測して植民地處分に關する我輩の豫想である。默つて居つても結局此邊に落ち着かね

ばならぬと思ふものであるが、理に於て正々堂々たり、又實際にかて極めて穩當の處分と信ずるが故に、或は日本の提案として之を發議するも亦妙ならんと考へて居るのである。此處にでも問題を探さなくては、我國が積極的に大勢を率ゐて乘り出すべき問題はない。

假りに植民地處分問題が上述の如く所決せらるゝと其の結果は如何なるであらうか。之は講和會議の研究に直接の關係はないけれども、極めて大事なことであるから特に一言するの必要を認める。

第一に疑のないのは之によつて土民の幸福が著しく增進せらるゝと云ふことである。或國が土民の教育を引受けると云ふことは、土民から觀れば或國の領有に歸して其國の支配を受くると大差なきも、而も其國は列國の依托の下に又列國の精神的監督を受けつゝ土民を世話せねばならぬから、植民政策の動機が全然變つて來なければならない。殊に其植民政策に成功すれば他日民族自決權行使の際、土民は其國に合併せられんことを希望して來るかも知れない。少くとも其處まで行かなければ列國の依托に背かず教育の義務を完全に盡したと云ふ事は出來ない。從つて各國は一日も早く自決權を行使し得る程度に土民の教育を高め、而かも土民を全然心の底から服せしむることを競爭するといふ事になるから、之に依つて土民の幸福の增進せらるゝは疑を容れないのである。之れ迄のやうな母國對植民地の關係ではどんな善良な植民政策でも、右申すやうな效果を土民の幸福の上にあらはし得なかつた。

右の當然の結果として第二に我々は我國の植民政策に及ぼす重大なる影響をも考へなければならない。從來我國の植民政策が如何なる批判を受けて居つたか、又如何なる評價を受くべきものであつたかは今茲に贅說しない。只日本が他の諸國と共に列國の名を以て土民の教育を托せらるゝと云ふ事の結果、茲に全然從來とは違つた全く新な植民政策を打ち建てねばならぬ必要に迫らるべきを見逃す事は出來ない。而して之が必ずや從來の植民政策を根柢から動搖せしむるものである事も疑を容れない。其利害得失に就ては人に依つて各觀る所を異にするだらうけれども從來の植民政策に甚だ慊焉たりし我々は、此の動搖を以て最も喜ぶべき現象と認むるに躊躇しない。願くは我國の政治家が之に依つて大いに其蒙を啓き、我國の植民政策史上に一新紀元を劃するに到らんことを希望して止まない。

十二月九日桑港發電として十四日の東京日々新聞に見ゆる所によれば、米國前大統領タフト氏は獨逸殖民地を國際聯盟

の管理の下に置くべきの説を公にせりといふ。果して然らば是れ恐らくは植民地處分問題に關し予輩と同一の結論に到るものではあるまいか。記して以て後報を待つ。

青年學生覺醒の新機運

最近青年學生の間に潑溂たる生氣の勃興しつゝあることは極めて著しき現象である。予輩の主として接觸するは高等の諸學校に於て政治法律等を研究する方面の青年であるが、恐らく他の方面に於ても同樣の現象を見ることが出來るのであらう。而して之が主として歐洲戰爭の影響に出づるものたるは言ふを俟たない。

從來の青年學生の專ら憧れ且つ努むる所は、概して淺薄なる社會的成功に外ならなかつた。就職難の呼ばれ且つ強く感ぜらるゝ十餘年このかたは、殊に此點が著しかつた。之が爲めにどれ丈け青年學生の元氣が徒らに消耗されたか分らない。何となれば我國に於ける所謂立身出世は、其人の眞の能力によるよりも寧ろ一定の學校を卒業し、繁文縟禮を極むる一定の方式に順應するの巧拙によつて定つたからである。學校で教へる事も總して此種の形式的智識に外ならなかつた。即ち教育の實際的方針は開發にあらずして詰込みである。學生の努むる所も亦理解にあらずして暗誦でなければならなかつた。此教育によつて日本の青年は其最も優秀なるものでも、精々日本といふ巧みに作られた形式的器械の運轉手以上に出づることは出來ない。從つて日本には通用するけれども、日本以外の變つた組立の社會には全然通用しない。之れ彼等には眞の能力が開發されて居ない、從つて全然創造的才能を缺いて居つたからである。

斯くの如くしては日本其物の進歩發達も亦覺束ない。之れ已に夙に多くの識者の憂慮して居つた所であり、其結果屢々諸種の改革が企てられたけれども、未だ要點に當つた本當の眞面目な改革案は現はれなかつた。而して他の一方から觀れば日本が東洋の一隅に惰眠を貪つて居る間は、先づ之れでも怎うか怎うか行けたのである。それでも世界の大勢の壓迫は爭はれないもので、不知不識幾分の進歩改善はあつたに相違ないが、今度の歐洲戰爭に至つて初めて日本は積極的に世界の大勢の渦卷の中に投じ、或意味に於ては所謂揉まれに揉まれて此處にやつと否でも應でも眼が醒めねばならぬ時期に到來した。勿論未だ醒め切つて居ない。故に今現に大いに迷つて居るものはある。所謂

思想界の動揺は觀やうによつては覺醒の曙光なりと云つていゝ。何れにしては今や我々は上下を擧げて大いて覺醒すべく世界の大勢から迫られつゝある。青年學生の最近の奮起に卽ち之れが當然の結果と見なければならない。

斯くして最近の青年學生は如何なる風に動いて居るか。兎に角いろ／＼の方面に溌溂たる生氣を以て突進せんとする緊張した態度を持して居る事丈けは疑ない。而して就中特に著しく吾人の眼に觸るゝのは、彼等が國家社會の制度文物を批評的に觀察せんとするの態度である。之れ蓋し世界的知見の開發の結果、自ら彼我の文明を比較觀察する所から來るものであらう。

更に此事からどういふ結果を生ずるかと云ふに、思索の方面をいへば卽ち自由討究である。盲目的に遵奉を强ひられて居つたあらゆる權威に對し、囚へられざる自由の精神を以て合理的批判を加へんとするのが、今や彼等の止む能はざる學術的良心の發露である。更に實行の方面からいへば卽ち社會的活動である。制度文物の合理的批判の結果、必然に發見せられたる幾多の社會的缺陷に對し、彼等は啻に不滿を抱くのみならず、更に之が改善を計らんとするの熱情を有するに至つた。缺陷の認識に加ふるに改善の熱情を有するに至つた事は、實に世界變局の賜物であらねばならぬ。

かゝる風潮の起つた事の國家社會の爲めに誠に喜ぶべき現象たるは言ふを俟たないが、只玆に吾人の特に注意を要するは、此等青年學生の思索上並びに實行上の活動に對しては親切なる指導を要する事である。

自由討究其物には何の非議すべき點はない。併しながら青年學生の之に動くものゝ動もすれば陷る弊害は、在來の因襲乃至權威に對する自由批判の域を超えて徒らに之に反抗する事である。此事は爲政者が新機運に盲目にして妄りに思索の自由を壓迫する場合に殊に激しい。而して此種の過激なる批判は大勢に盲目なる頑迷者流と共に、社會國家の健全なる進歩を害するは卽ち一である。同じやうな事は學生の社會的活動についても云へる。特に我國に於ては從來青年學生を餘りに社會から離隔する方針を取つて居つた。彼等は社會に實際的効果を及ぼすべき仕事に與かるの地位にあらざるは勿論だが、然し我國のやうに全然社會の事物に興味を持つことすら禁ずるやうな遣り方は餘りに無謀である。それ丈け社會に對する不滿を自覺したる青年の社會的活動は、動もすれば只徒らに古習舊慣に反抗するといふ事になり易い。

之を遂行するに青年學生の動もすれば陥る弊害は、思想上に於ても實行上に於ても反抗其物に陥ることである。其國家社會に取つて不祥事たるは言ふを俟たない。

然らば何を以て青年學生を適當に指導し得べきか。曰く、彼等の自由討究をして飽くまで科學的・合理的ならしむる事である。曰く彼等の社會的活動をして飽くまで獻身的奉仕の精神に基かしむることである。此二つの外に適當な途はない。之を以て彼等を導けば初めて潑溂たる生氣と熱情とを失ふことなくして、而も彼等を誤らさらしむることが出來る。青年學生は兎角常軌を逸し易いからと云つて、生氣と熱情との迸るをも阻止せんとするが如きは、所謂角を矯めんとして牛を殺すの類ひではないか。古來大事を決行したものは生氣に燃ゆる青年ではないか。今度の戰爭で佛蘭西が豫期以上の奮闘に堪え得たのも、モロッコ事件に激發されたる同國青年の元氣恢復にあることは人の已に知る所である。青年の活躍には常に多大の危險を伴ふとは云へ、之を抑ふるは即ち結局に於て國家の元氣を將來に消耗せしむる所以である。故に我々は青年學生の間に起つた最近の新機運を大いに助長せしめたい。否、更に鞭撻を加へたい。而して是と共に熱心なる監視を加へつゝ親切に彼等を指導することに努めたい。此文字には語弊があるかも知れないが、予の所謂指導といふのは一日の長あるを以て任ずるものは、自分自ら科學的精神を以て思索し、獻身的奉仕主義を以て活動することである。青年を指導するには、青年に求むる所を先づ吾人自ら之を實行することの外に途はない。

第四十一議會を迎ふ

世界の變局に伴ふて我國の政界も最近とんと活氣づいた。議員其人は依然吳下の舊阿蒙で特に面目一新の大活動は期待され得ざるの感なきにあらざれども、兎に角新聞等の傳ふる所に據れば、來るべき新議會に於ては種々清新の題目が、前とは變つたより深き意味を有つて問題に上るやうに思はるゝ。中に就き其主なるものを列擧すれば、選擧法改正の問題である、物價調節の問題である、税制整理の問題である、教育刷新の問題である、之に續いて外交問題、思想問題等である。

選擧法の改正につき主として說かれて居るのは、選擧權擴張の問題である。之については擴張の程度並びに急進的に擴張す

べきや、漸進的に擴張すべきや等につきいろ〳〵の說があるが、併し議員諸公に擴張の論據並びに其利害得失につき、將た又之に關する現在多數國民の要求につき、果して根本的研究ありや否やを疑はざるを得ない。尙又選擧法の改正については獨り擴張問題ばかりでない、記名無記名の利害得失につき、大選擧區單記といふ世界無比の惡制度の存廢につき、更に取締り方法につき、選擧權擴張にも劣らざる重大なる幾多の問題がある。唯選擧權の財產的制限を弥縫的に少し低下した丈けで、現選擧法に對する國民の不滿を癒し得べしと思ふならば大いなる誤りである。寧ろ予輩は選擧法改正の要求が、政權の分配に關する正義の國民的要求の僅に其一端を現はしたものとして之を觀察したい。一問を解いて更に一問を喚び、引續いて幾多の難問の解決を俟つて居るものあるを覺悟せねば、他日大いに狼狽する日があるだらう。

之と同じやうな事は物價調節問題についても言へる。此問題の最も代表的なるは米價調節であるが、併し米價を調節した丈けで國民は滿足しない。否、米價以外の凡ての物價の調節に相當の成功を收めても、生產・交易・分配の諸々の組織が今日のまゝでは依然として國民の間に不滿は殘る。故に物價調節問題の如きも之を徹底的に解決せんと欲すれば、之を國民生活の充實安固を總括的に計らねばならぬと云ふ大きな題問の一端として取扱ふの聰明が無ければならない。隨つて所謂稅制整理の問題の如きも亦此見地から改正を企てられなければならない。稅制整理を徒らに財源を發見するの具に供したり、又は些細な稅目の廢止輕減によつて、淺果敢な民心に阿るやうな事に利用してはならない。

教育制度改革の問題も兩三年このかた朝野の間に甚だ矢釜しく論じられて居る。而して最近一個の成案を得たりとして世上に發表されて居るが、之れが果して本問題を喚起した本來の趣旨に適合するものであらうか。一體教育制度改革問題の起つたのは、現在の制度が餘りに國民の能力の自由なる開發を妨げて居ると見られて居つたからである。主觀的に見れば國民個々の能力の開發、客觀的に見れば國民全體の能率の增進、此點が歐米諸國に比して餘りに低いので、曩に識者が教育制度の革新を叫んだのである。而して今此要求に促されて作り上げられたいろ〳〵の案は、果して其實行によつて能力の開發、能率の增進にどれ丈け目醒しい成績を擧げ得るものであらうか。之れ亦何人も疑ふ所、從て若し來るべき議會に於て教育問題が大いに論ぜらるるならば、願くは此要點に當つた議論をして貰ひたい。教育問題の項目の中に國民思想の統一だの、危險思想の抑壓だの、

西歐思想の感染から青年を救濟すべしなどいふやうな問題が唱へらるゝならば之れ以ての外の事である。

若し夫れ外交問題に至つては今の議員諸公に之を求むるは或は無理かも知れぬが、強ひて吾人の希望する所を卒直に言はしむれば、世界の大勢を看取し之に逆行する俗論に對して飽くまで堅く反對せられんことである。講和問題其他に關して我國官僚軍閥の一部の間には、今日驚くべき頑迷な思想の流れて居ることは隱れもない事實である。我國今後の進運をして正當なる軌道を外れしめざらんが爲めには、是非共此等の僻論に對抗する一大勢力を作ることが必要である。而して之を作り得るものは結局に於ては民間の健全なる輿論であるが、直接に最も有效なるは云ふまでもなく議會の言論的監督である。吾人は切に議員諸公が民間に於ける我々の努力と相呼應して、熱心に此事に盡されんことを望むものである。

從來の例によると、議會に於ける討論は問題の標目丈けが徒らに大きくして、内容は空疎を極めるのが常である。其成績に至つては貧弱なること更に一層甚だしい。政府の提案は多く所謂羊頭を掲げて狗肉を賣るの類である　反對黨の攻撃亦徒らに末節に拘泥して喧々囂々の論難を逞うする。故らに國民生活の

著しき問題に觸れざるは新舊共に同一である。故に國民は從來議會に多くを期待せざるの例である。最初の平民内閣として多大の期待を懸けられて居るが如き原内閣と雖も、國民の監視にして堅からざらんか、何をするか分らない。否、何もしないで過に其日を過すかも知れない。已に斯く斷定すべき二三の證據は我々の耳にも入つて居る。故に此平民内閣をして眞に國家民生の爲めに貢獻する所あらしめ得るや否やは、直接に繫つて第四十一議會の態度に在りと云はなければならない。今や世界の變局に伴つて國民の政治的覺醒は實に驚くべきものがある。一部の人の憂ふる青年思想の動搖の如きも畢竟其一波動に過ぎない。若し之を國家の爲めに危險なりとするならば、須らく其由つて來る所の源に手をつけなければならない。斯くの如きは獨り國家民生を安固ならしむるのみならず、又以て日本をして世界に雄飛せしむるの本當の基礎を作るものである。此種の諒解を現在の議員に求むるの難きを知りつゝ、内外の情勢の推進の抑ふべからざるに鑑み、來るべき議會に對し以上當面の重大なる希望二三を述べて置く。

小題小言

◎獨逸に於ける人心の動搖

去年十二月央ば到着した八月十五日發行の獨逸の雜誌「エヒヨウ」にルドルフ・ストラッツと云ふ人の論文が載つて居る。其一節に次のやうな文句がある。「誰か今を去ること四年數ケ月前、歐羅巴の大部分、殆んど亞細亞の全部、全アフリカ、全濠洲、北アメリカの殆んど全部、及び南アメリカの半分が獨逸に對して戰を宣すべきを豫言し得たであらうか。今や十二億を越ゆる人類が、彼等の間に平和的に棲息せし六千八百萬の文化國民並びに其多數の同盟國民に向つて猛擊を加へつゝある。彼英州大國、老大國支那、東洋の世界的勢力たる日本、米大陸諸國、武勇の聞えある佛蘭西、大國伊太利、ルーマニヤ、希臘、葡萄牙、ハイチ、リベリヤ、世界のもの今や結束して而も文明の名に於て毒手を伸ばして、グーデンベルグの國、ゲーテの國、ルーテル、カントの國、シルレル、ベートーベンの國、リヒアート、ワグナーの國、ロベルト、コッホの國を滅ぼさんとして居るではないか。云々」彼が自國民を呼ぶに文化國民の名を以てし、又自國の產出した英雄を名ざすに學問藝術の天才のみを擧げ、從來彼等の口癖に賞め讃へて居つた政治家軍人の名を一人も擧げて居ない點が面白いではないか。

之によつて我々は獨逸の近狀に關し、少くとも次の諸點を看取することが出來る。(一)世界の進運に對する獨逸文化の貢獻を說明するにビスマルクやモルトケの名は必要にあらず、若くは之を擧ぐべからずとするの思想が獨逸人の間に起りつゝある事、(二)從來獨逸文化の優秀にして世界の人類はすべて我を敬仰して措かざるものと教へ込まれて居つた獨逸國民の間に、十二億を越ゆる殆ど全世界の人民が我に抗敵し居るの爭ふべからざる事實に逢着して大いに疑惑の念を抱くに至つた事之れである。

どんな自惚れた人間でも、永い間何處へ行つても喜び迎へられざるの經驗を重ぬれば、遂に自ら自分に缺點のあるのではないかと反省する。自信の強き世界無敵の稱ある獨逸國民も、開戰後四年の苦き經驗を積んで今や漸く反省し初めつゝあると斯くて獨逸の人心は昨夏以來大に動搖したものと見える。

之も近着の獨逸雜誌に據れば、食物並びに武器の窮乏にも大に困つて居つたやうだ。潛航艇政策の遂に英國を屈服し得べしとするの確信の動いた事も亦有力な原因である。海軍大臣は一昨年の夏以來一九一八年の一月一日までには、立派に潛航艇戰

償の目的を達し得べしと再三議會で宣言したけれども、事實は之に裏切つて居る。去年春の大々的攻勢も獨逸の花々しき勝利には相違ないが、結局近き將來に於て敵國を屈服せしめ得るの見込は立たないといふ確信を國民に與ふるに止つた。民心の動揺せざらんとするも得んやである。

◉獨逸國力の恢復案外に速かならん

獨逸の將來については悲觀樂觀兩様の觀察がある。併しながら疑の無い點は（第一）軍國主義の國としては永久に滅亡するだらうけれども、學問・藝術・産業の所謂文化國としては戰前に優る勢を以て發達すべき事である。況んや今次の革命と共に所謂社會組織の根本的改革を見るに至らば、或は少くとも其端緒に着くに至らば、文化國としての發展力に著るしき彈力を見るべきは疑を容れない。ウイルソンの聲明して居る十四ケ條の講和條件の如きは、少くとも文化國としての獨逸の復興に格別妨げとなるものではない。（第二）に問題となるのは獨逸に要求せらるべき償金であるが、之は恐らく相當に寛大なる程度に止るであらう。例へば白耳義、セルビアの如きに對して巨額の償金の支拂を命ずべきは疑を容れないけれども、之とても國家並びに個人の實際に受けた損害の所謂實額以上に出づるや否やは大に疑問である。若し其れ以上の償金例へば英米佛側の戰費の一部賠償と云ふが如きは、恐らく[illegible]主義に於て[illegible]力なき[illegible]事を得ない。之まで擔はされては獨逸の前途を妨げても見るまい[illegible]し、且つ又斯ういふ意味の償金は本來敵國をして近く再び干戈を執り得ざらしむるの目的を有するもので、從つて國際聯盟の如きが問題となつて居る今日に於ては、敵國の他日の復讐を顧念するの必要が大いに減少して居るからである。果して此豫想の如く償金が案外に多額に上らないとすれば、之れ丈け戰後に於ける獨逸の恢復力は早いと見なければならない。（第三）に戰後の獨逸國民は恐らく軍事費の負擔から免るゝだらう。少くとも大いに此負擔を輕めらるゝだらうと云ふ事である。財政上の最大の壓迫が何處の國でも軍事費であることは云ふを俟たない。戰前の獨逸に於て殊に此點が甚だしかつた。而して今獨逸は戰後に於て一轉して軍備を最少の限度に止むるの國となるとすれば、其國力の恢復は益々早いと見なければならない。之に加ふるに（第四）に軍費負擔の免除は必然に兵役負擔の免除を伴ふ。働き盛りの壯丁が之れ迄兵營の中に閉ぢ籠められたのが、大部分生産的事業に從事するといふことであれば、之れ亦著しく國力の恢復に貢献するものである。

此等の觀察點から獨逸の前途は寧ろ樂觀すべきものであると思ふ。只獨逸の前途を樂觀する所以は、彼が軍國主義の國とし

に永久に亡んだ結果である。故に曾て一部の人の間に懸念された如く國力の恢復が案外に早いからと云うて、何等彼等を恐るべき理由はない。政變以前に於ける獨逸の前途の樂觀は或意味に於て將來の世界に對する驚異であつた。今や獨逸の急速なる恢復に於て我々は寧ろ手を携へて世界の進歩に貢獻し得べき因緣を見んと欲する。

◉何ぞ國際聯盟に加入するを躊躇する

國際聯盟が今度の講和會議に於て最も主要なる問題の一たるべく、若し之が講和會議の問題にあらずとせば、特に此問題の爲めに引續き他の一大國際會議が開かるべきは疑を容れない。而して此問題の何等かの形を以て實現すべき事、又其實現の曉には我日本も之に加入せざるべからざる事は、多くの人の豫見し且つ覺悟して居る所である。然るに一部の人の間には國際聯盟につき一旦成立するにしても結局二三の大國が勝手我儘に振舞ふやうな事はなからうかと懸念して居るものが少くない。斯くして大勢に引ずられながら國際聯盟の結局の效果を疑うといふ風潮は、我國最高政客の間にも甚だ多いやうに見受けらるゝ。

最近の世界の風潮に照して、來るべき次の世界に小國の權利の依然として無視蹂躪せらるゝ事戰前と同一なるべしとは何うしても思はれない。よしんば之あるにしても、すべての大國が小國の權利を蹂躪することに完全に一致結束するといふ事はあり得ない。何故なれば小國の權利を十分に保護せざるほど道義の光に鮮明を缺くものあらば、必ずや大國同志の間に又衝突反目無きを得ないからである。果して然らば將來の國際聯盟に於ける小國權利の無視蹂躪は、之れ取りも直さず國際聯盟其物の破壞自滅に外ならない。

是に於て我々は國際聯盟に加入すべきや否やについて躊躇すべき何等の理由を見ない。國際聯盟が立派に續けて行けるものなら、我々の之に加入して滿足すべきは云ふまでもない。假りに之に入つても二三大國の我儘の爲めに我々の權利が無視蹂躪せらるゝ事あるべしとするも、尚吾人は今日國際聯盟に加入せんとするの決心を翻す必要はない。何故なれば我々の權利の無視蹂躪せらるゝ時は即ち國際聯盟其物の成り立たない時であり、從つて我々は直ちに加入によつて蒙るべき幾多の拘束から解放せらるゝを得べきを以てゞある。

故に予輩は言ふ。聯盟の規約が完全に守らるゝにしろ、守られざるにしろ、我國の立場として之に加入するを躊躇すべき理由はない。況んや進んで之に加入することは、一方に於て國際聯盟の基礎たる正義の權威を一段に高むる所以たるに於てをや。

◉再び國際聯盟について

我國には英、[illegible]盟論は理論としては結構だ、只之が實際的組織を怎うする、いろ／＼細目に入ると此處にも障害あり、彼所にも障害あり、結局議論倒れで實現を見ずして終るだらうなどゝいふ人がある。成程日本では細目を整へた上でないと大綱の是非を說かない。斯くして末節に拘泥して常に大事を誤るは我々の常に見る所である。不都合な通行税を廢せよといへば之に代る財源をどうすると云ふの類は、毎年の議會に於ける閣僚の常套的答辯であり、而かも堂々たる議員は皆之を諒として居るではないか。

然し西洋は違ふ。先づ大綱の主義に於て一旦定まる所あれば、細目の整頓はどんな事をしても着けて行く。否、細目の事は初めから全然問題としない。よしんば細目の實際的取扱に於てどんな不便があらうも、大綱に於て一旦定る所あれば斷じて其實現と決行とに躊躇しない。

故に國際聯盟は議論倒れとなつて實現を見ないだらうなどゝ安心して居るのは、少くとも大に輕率なるの譏を免れない。

◉朝鮮の友よりの手紙

內地に於て高等の教育を受け、大いに同胞の爲めに盡さんとの勃々たる勇氣を抱いて歸つた朝鮮青年の我々に與ふる第一の手紙は、期せずして絕望的嘆聲に終始して居るものたらさるはない。彼等は歸つて周圍團體の拘束的生活が益々索寞たる環境に沈淪しつゝあることを見た。而かも有爲の才能を抱いて歸つた彼等の前途には何等の光明がない。少くとも彼等は殆ど例外なく斯の如く觀じ、深き絕望の淵に沈みつゝある。

我國の當局者は朝鮮民族の爲めに幾多有益なる施設經營に力を盡しつゝあると云ふだらう。又實際多大の努力を傾注しつゝあるを認めないではない。併し理解にしろ內地で高等の教育を受けた朝鮮の同胞が、歸國すると悉く勃々たる勇氣を失つて俄に絕望の嘆聲を發すると云ふ眼前の事實に對しては、深く反省せられんことを望まざるを得ない。

願はくは朝鮮民族に前途の光明を與へよ。少くとも前途に光明を認め得たりと感ずるに至らしめよ。

◉佐々木博士の著「立憲非立憲」

京都法科大學教授佐々木惣一博士は頃者豫て發表せる政論數篇を輯めて「立憲非立憲」と題する一書を公にした。博士が篤學の士であり又我黨の論客であり、同時に最も自由な、最も深刻なる實際政治の批評家であることは世已に定評がある。博士の著の細評を試むるは自ら之を他の機會に讓らう。只「中央公論」の特に主張せんとする政治主義に同情を有し共鳴を感ずる讀者に向つては、特に博士の此著を推薦するを吾人の義務なりと感ずる。

文學博士
坪內逍遙譯

【既刊】

ハムレット	ロミオとジユリエット	オセロー
リヤ王	ジユリヤス・シーザー	ヹニスの商人
テムペスト	アントニーとクレオパトラ	眞夏の夜の夢
マクベス	以尺報尺	四六判布製函入 正價各壹圓五拾錢 郵税各八錢

シェークスピヤ傑作集（第十二）
冬の夜ばなし

つい先年英のバーカーが最新式の上演をやつて大評判になつた沙翁の最晩年の最練熟した技巧に成つた作で、今尚舞臺上で必ず成功する不思議に歌舞伎劇式の世話と時代と喜歌劇的氣分との混淆した夢幻劇である。四大悲劇ぐらゐでは萬魂の沙翁は分らない。斯ういふ作を含味しないうちは沙翁を語る權利がないのである。

四六判布製函入 挿圖數個入 正價壹圓五拾錢 郵税八錢

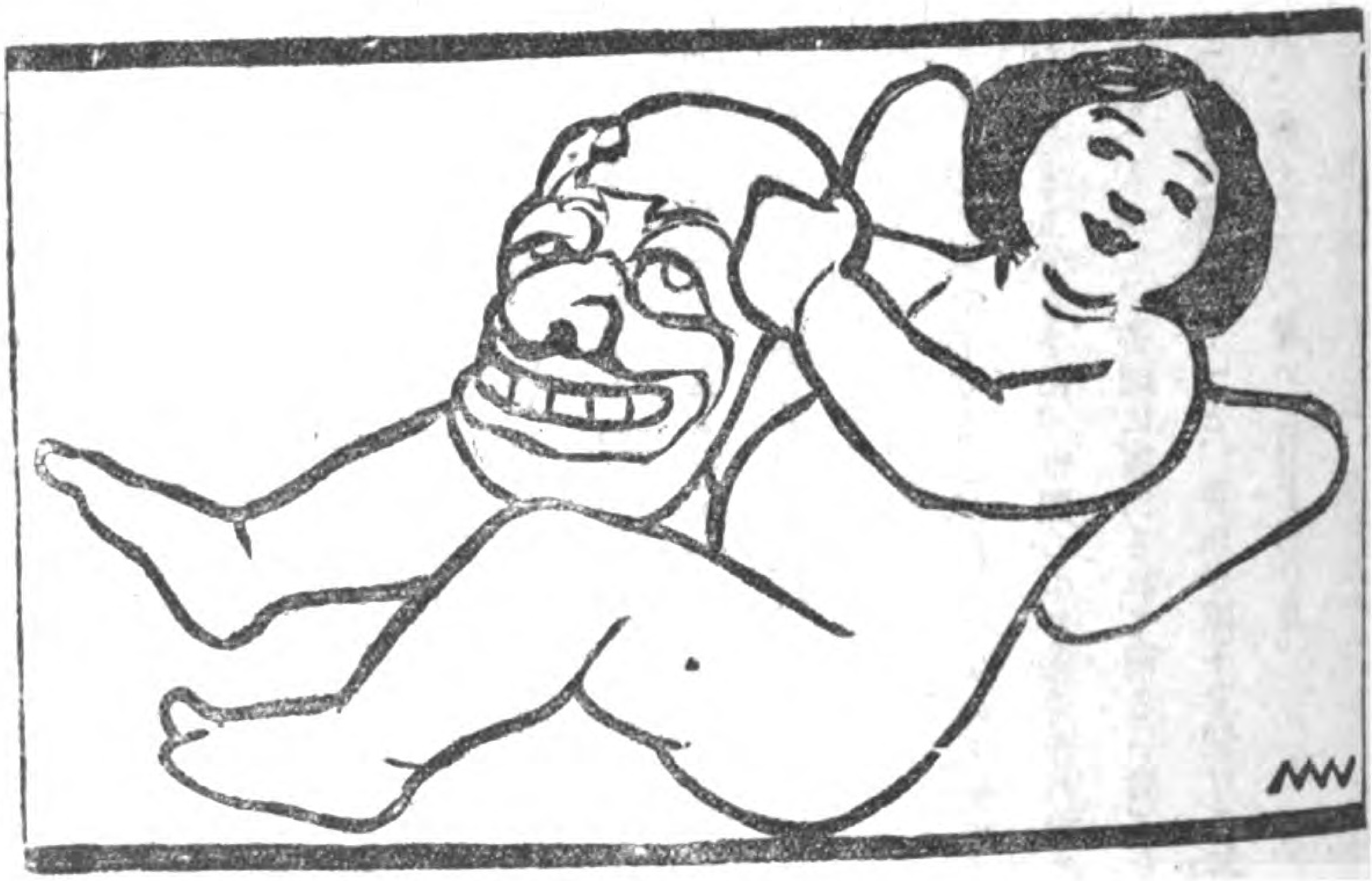
シェークスピヤ傑作集（第十三）
リチャード三世

沙翁が習作時代の傑作で純粹の正史劇の標本、主人公は傴僂で容貌の醜い惡魔的天才、作者はニイチェが大發見らしく唱へた逆道德の骨子を三百年前に此天才に道破させてゐる、エリザ劇勃興當時の代表作、既譯十二篇とは全く撰を異にしてゐる。

四六判布製函入 挿圖數個入 正價壹圓五拾錢 郵税八錢

【賣捌所】
東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂、盛文館、星野

發行所 東京牛込
早稻田大學出版部
振替東京一一二三番



牢獄

正宗白鳥

（一）

みよ子は新橋から汽車に乘つて腰をおろすと、牢獄から廣い世界へ出たやうな氣持がした。巴町の家の二階から毎日見馴れてゐて、悲しい時悦しい時、あるひはじれつたい時や、心淋しい時に、いろ〳〵な思ひを寄せかけてゐた愛宕の塔に見送られて東京を旅立つのは自分ながら夢のやうな氣がした。

海を見るのも久振りであつた。薄ぼんやりと日の照つてゐる冬枯れの野面も、彼女の目には生氣に滿ちてゐるやうに映つて、朽ちた切株でも葉の落ちた裸木でも、見飽かぬ眺めになつた。室の中はスチームで次第に溫まつて乘客の顏はどれも〳〵幸福な旅を喜んでゐるやうに見えた。「私も皆さんのお仲間入りをしてゐます」と、云ひたげに、みよ子は左右を見廻した。そして、誰れかゞ話しかけて呉れたなら、喜んで腹臟なく何でも話し出したかも知れなかつた。

紫色を帶びた夕暮れの富士の姿や、炊煙の棚引いてゐる農家ののどかな有様などが、一々巴町以外の平和な世の中を現はしてゐるやうで、親しい同伴者が側にゐたなら、あれをもこれをも指差して共に樂みたいほどに、途中の眺めが面白かつた。箱根に差懸る時分から夜になつて、三島で小さい列車に乘り換へると、燈火は薄暗いし寒くはなるし乘客は少いし、獨り旅の淋しさが感ぜられたが、それにつれて、夫の泊つてゐる溫泉宿の樣子や、どんな風に夫が自分を迎へて呉れるかといふことが、みよ子の頭を煩はせだした。屢々寄越した夫の手紙によると、宿は滿員で隣室には子供連れの客がゐて騷々しくて困るといふことであつたが、自分には賑かなのは些とも苦にならないけれど、腦の惡い夫がそのために弱らされて、何時か大磯へ行つた時のやうに腑甲斐なく沈んでゐやしないかと氣遣はれた。やう／＼の思ひで姑の許しを得て、許しを得たといふよりも監視の目を掠めて來たと云つた方がいゝくらゐなのに、若しもの夫身體が健かでないやうであつたなら、東京へ連れて歸つた後の祟りが恐ろしく思はれた。

「あの意地惡の婆さん、また私の所爲にするだらう」と、みよ子は今からその時のことを想像した。

大仁で汽車を下りると、かねて夫の手紙によつて心得てゐる通りに、乘合自動車に乘ることにして、どこをどう通つたか些とも分らずに、暗闇の中を修善寺の宿にまで運ばれた。

宿へ入つて、番頭に案内されて明るい廊下を步いてゐると、廊下の下から幽かな水の音が聞えて來た。

「お連れ樣が……」と、番頭が障子を開けて知らせると、褞袍を着て火鉢に兩手を翳してゐたみよ子の夫の下山久一が、廊下の方へ驚いた目を向けた。

「よく出て來られたね。意外だ」

「わたし夢中で來たのよ。此方も外は寒いのね」

みよ子は明るくつて溫い部屋の中を見廻して、いゝ夢を見てゐるやうな氣がした。夫の顏も幸ひに東京にゐた時よりも元氣がよかつた。コートを脫いだり手荷物を開けたりする間にも、あれもこれも話したくつて胸がワク〳〵した。周圍は寂としてゐて、草履の音が幽かに聞えるばかりであつた。

「とに角湯に入つといでよ。その間に食事の仕度を云つて置くから」

「まあ緩くりでいゝわ」みよ子は鞄の中から、夫へ來た郵便物や、夫の着替えのシャツやら羽織やら、大急ぎで買つて來た夫の好物の西洋菓子などを取出しながら、途中で見聞したことを取留めもなく、喋舌つた。それは、巴町の家庭にゐる時とはまるで異つた素氣ない甘えたやうな口調であつた。

「田舍もちよつとはいゝが淋しくなつてね。僕も二三日中に歸らうかと思つてゐたのだよ。家には變つたこともないのだらうね」

久一が何よりも先に聞きたかつたのは、前觸れ無しに妻の來たことであつたが、それを訊ねるのは恐ろしいものに觸れるやうだつたので躊躇された。

「變つたことなんかあるものですか。お父さんは何時もの通り、お母さまも何時もの通りですよ。あなたの書齋もお立ちになつた時のまゝで、書物一冊紙一枚置きどころが違つてゐやしませんの」

みよ子は火鉢の側へ寄つて、身體の割合に大きな、指の太い手を出した。夫が手紙や端書を讀みだしたのをもどかしく思ひながら、

「後でお母さんが怒つてゐなさるかも知れないわ」と、夫の注意を惹くやうに云つて、「わたしね、もう餘程日が立つか

ら此方の樣子を見に、一晩泊りでもいゝから行かせて下さいつて、先日來機會を見ちや、根氣よくお母さんにお願ひしてゐたの。無論快く許して貰へようとは思はなかつたのですけれど、一年に一度や二度外へ出させて貰ふくらゐは當然なことと思はれるし、外のことゝは違つて、轉地療養をしてゐらつしやる貴下のお見舞に行かうといふのは妻たる者の義務のやうに思はれたから、斷然決心をしてゐたのです。ぢや、久一が歸つて來る日が極つたら迎ひをかねて行くことにしたらいゝだらうと、お母さんもわたしの根氣に負けて云つて下すつたの。さうして今日は今日はと待つてゐる中に、今朝あなたの端書が屆いて、近々お歸りになりさうなことが書いてあつたのを幸ひに、お母さんにさう云つて、急にお迎ひに上るやうに願つたんです。何日のいく時の汽車で立つと話が極つた譯ぢやなかつたのですけれど、お母さんが川井さんへ遊びにいらしつた留守の間に、思切つて大急ぎで旅仕度をして家を出て來たんですの。叮嚀に譯を書いた置手紙をして、きよにもお母さんへの傳言をよく賴んで置いたのですけれど、後でお母さんにお小言を頂くのは極つてますよ。無論はじめからその覺悟はしてゐますの」

「ぢやお前は無斷で家を出て來たやうなものだね。あまり考へがなさ過ぎるよ。それでいゝと思つてるのかい」久一は妻の平氣な顏を見て呆れてゐた。

「だつて、わたし此方へ來たくつて〳〵、どうしても辛抱し切れなかつたんですもの。家から外へは手紙を入れにさへ出ることはならないといふむごい規則を長い間守つて來たんですから、一度くらゐ破つてもいゝと思ひますよ。お母さんが怒んなすつたら、あなたからよくお詫びして下さいな。」

「しかし、どう云つて詫びていゝか僕には分らないよ。第一夫の留守中に女房の外出を禁じるのをむごい規則とは云はれないからね」

「でもわたしの身になつて御覧なさい。随分むごい御規刑だと思はれてよ。下山家の家憲々々で、これまで何事にでも素直に随つて來たのだけれど」みよ子はこんな話をしだすと、夫の顔付の嶮しくなるのにふと氣づいたので、「來早々六ケ敷話は止しませう。それよりも此方の面白い話を聞かせて下さいね。わたしちよつと大急ぎでお湯に入つて來ますから。……外は眞暗で分らなかつたけれど、この温泉場は景色がいゝんでせう」

みよ子は心置きなくこの夕を樂まうとして、却つて心が落着かなかつた。夫に教へられて浴室の方へ階段を下りて行くと、艶々と顔を光らせて出て來る男や女に出會つたが、どの人も暢気に湯治を樂しんでゐるやうに見えた。「無斷でも何でもいゝ、此處へ來てよかつた」と、みよ子はひとりで喜びながら、朦々と湯氣の立籠つて、人の顔のよく見えない浴槽の中へおそる〳〵入つて行つた。他の客の浮世話に興を覺えながら、心ゆくばかり湯に浸つて身體を磨いて出たが、部屋へ歸ると、彼女一人のための膳立てはしてあつたが、夫の姿は見えなかつた。みよ子は空腹を感じながらも箸を執りかねてゐたが、

通りがゝりの女中に訊くと、「先つき何處へかお出掛けになりました」といふ返事だつたので、暫くして寒さうにして歸つて來た久一は、妻に訊かれない先に、

「僕は郵便局へ行つて來た。電報を打つて來たのだ」と、重々しく云つた。

「家へですか。わたしが無事に着いたといふことを」

「まあさうだが、電報の文句には頭を痛めたよ」

「なぜなの?。ミヨコイマツイタでいゝぢやないの」と、みよ子は字數を指で數ながら云つた。

「お前は呑氣だねえ。後でお詫さへすればそれで無雜作に事が濟むと思つてるのかい。」

「それで濟まなければどんな罰でも受ける覺悟をしてればいゝでせう。わたし、先日來晝も夜も獨りでいろ〳〵に考へ

てゐたのよ。さうして、自分が悪意をもつてしたことでなければ、どんな目に會つても構はないと決心したんです。だから東京へ歸つてお母さんの前へ出た時に何と云はれてもビク〳〵しないつもりよ。」みよ子はさう云つて、晴れ切らぬ夫の顏を見て、「だけど、わたしが此方へ來たのがあなたのお氣に入らないのか知ら。わたしが此處に一緒にゐちや、あなたのお邪魔になることでもあるの」

みよ子は次の間つきの部屋を見廻はしたが、夫が一人ぼつちでゐた外には誰れもゐたらしくはないので、自分が夫の邪魔にならうとは思はれなかつた。「邪魔になる筈はない」と、夫も明らかに答へた。

「ぢや、安心して御飯を頂きますよ」

みよ子は久振りで舅姑の目の光つてゐない所で快い食事をした。そして、この快い食事のためにだけでも、「思切つて此處へ來てよかつた」と思つた。

「折角此處へ來たのだし、この後何時こんな所へ遊びに來られるか分らないのだから、お湯へもよく入つて、見物する所があれば寒くつても見て歩きたいと思つてよ。明日はあなたが案內して下さるでせう」

「夜が明けてから廊下へ出て見りや分るが、いゝ土地ぢやないよ。寒くなけれや疾つくに外の土地へ移つてるんだが」

久一は修善寺の地形や名所についてポツリ〳〵說明して、伊豆の他の溫泉の事を話して聞かせたが、その話振りはいかにも氣乘りがしてゐなかつた。氣乘りのしない話でも、みよ子は久振りに耳に入れる懷かしい話として喜んで聞いてゐた。

「わたし、汽車の中でもさう思つたんですがね、このまゝ東京へは歸らないで旅行ばかりしてゐたらいゝでせうにね」と云ふと、

「僕と二人連れでかい。旅費が充分に有つても、まさか一人で日本國内は出來やすまい、」

「出來ないことはないわ。巴町に一人でポツネンとしてるよりは、汽車にでも何にでも乘つて方々を見て廻つてる方がどれほどましか知れないと今日ツクヅク感じたんですもの」

「ぢや、旅費を出してやるから、お前一人で十日でも二十日でも旅行したらどうだ。僕は明日立つて獨りで東京へ歸つてるから……。戯談に云ふんぢやないよ」

「どうしてそんなことを仰有るの？」

「さうした方がお前のためにも僕のためにもいゝと思ふからだよ。お前も勝手に家を飛出して來たくらゐだから、次手に思ふ存分好きな眞似をして見たらいゝぢやないか。どうせ無事に濟まない以上、親爺や母に對しても、僕が半分責任を背負つてやるよ」

「だけど、わたし一人で當てなしに旅行なんかしてゐちや餘程妙だわね。……お母さんに逆らつてわたしが今日家を出て來たのだから、當り前では巴町へ歸れないと、あなたは心配してそんな事云つてゐらつしやるのかも知れないけれど、それはあなたの思ひ過ぎなのよ。あなたさへ確かりしてゐて下されば、お父さんだつてお母さんだつて些とも怖かないわ。あなたのお迎へに此處まで來て、あなたに隨いて歸るんですもの。

久一は夫婦差向ひの話にも倦んだので、時刻はまだ早かつたけれど、女中を呼んで寢床の仕度をさせて、自分一人浴室へ出掛けた。誰れも入つてゐない奥の小さい浴室へ入つて、頭を湯槽の縁へ凭らせて、湯氣につゝまれた淡い燈火を夢心地で見ながら、湯治に來て以來も毎日一度や二度考へないことのなかつた妻のみよ子の事を考へてゐたが、今夜は現實の彼女が自分の部屋に腰を据ゑてゐると思ふと、湯槽を出て温まつたいゝ氣持で寢床へ急ぐ氣になれなかつた。あの

無邪氣で、歯痒いほど無神經なところのある妻が、なんにも知らないのが、氣づかないのが、不憫ではあつたが、と云つて彼女を厭ふ自分の心をどうすることも出來なかつた。結婚後間もなく、云ひやうのない厭はしさを覺えて、厭はしさは日に月に増すばかりであつたのを、口にも出さず顔にも擧動にも現はさずに、一年あまりを送つたのであつたが、今年の月はじめに此方へ出立する時分からは、日に夜に、一つ部屋に起臥して、何かにつけて口を利き合ふのが堪へがたい苦しみとなつたのであつた。元來腦神經の弱い方だつたが、妻に對する不快から――その不快を外へ現はさないで、自分ひとりの胸に收めて置かうと努めてゐたゝめに尚更――腦の惱みが烈しくなつたやうだつたので、兩親の許しを乞うて、轉地療養に來たのであつた。妻の性質や行爲のどの點が氣に入らないといふハツキリした理由があるのではないし、嫁に對しては可成り嚴しい母親の側に一人でゐるのは居づらいだらうといふ多少の同情もあつたので、柔しい文句を書並べた繪葉書などををり／＼送つてゐた。

「あんな繪葉書なんかやらなければよかつた」と、久一は面と向つては滅多に云つたことのないやうな柔しい言葉を、うかと筆先で弄んだことを後悔した。

（二）

みよ子は何の屈託もないものゝやうによく眠つた。いくら熟睡してゐても明るくなると目の醒めるのが、結婚後の癖になつてゐたが、此處では、目が醒めても、巴町の家でないのに安心して、夫の寢顔を見てから、再び誰れをも憚らない快い朝寢の夢に入つた。幼い弟や妹を相手に、遠い田舍の實家の裏庭で遊んでゐた時分などの夢を見てゐた。

眠足つて自然に目の開いた時には、鮮かな朝日が障子に映つてゐた。障子を開けたなら、どんないゝ景色が目の前に現はれて來るかと樂みにして、

「今日は寒い思ひしないで起きられて有難いわ」と、火がカン〳〵熾つて丁度暖かの湯の沸つてゐる火鉢のそばで衣服を着替えた。

二人は同時に起きて、連立つて湯に入つて來た。その間に寢床が片付けられて掃除もされてゐて、朝餐の膳も備へられてゐたが、それだけのことでもみよ子には物珍らしく思はれた。巴町の家にゐるよりも宿屋へ來てゐることの有難さを感じた。廊下に立つて、まだ蕾の堅い梅の樹や、眺望を遮つてゐる向ひの二階の長い廊下を見上げてゐたが、東京にゐた昨日までとは世が違つてゐるやうで、日の光も吸ふ息もいゝ氣持であつた。

「こんな所になら一生住んでゐたつて飽かないやうな氣がしてよ」と、褞袍を着て懐手して欄干に寄りかゝつてゐる夫の側へ近寄つて云つたが、ふと氣づいたやうに、「でも、一生ゐることに極つたら、どんないゝ所でも厭になるでせうね。せめて十日か十五日くらゐ此處で遊んでられることになつたら、巴町へ歸つてから二月や三月は一足も家の外へ出して貰へなくつてもいゝやうに思はれるけれどね」

「此處にゐたつて、湯に入つちや寢てゐられるくらゐなもので、遊びやうもないよ」

「それでもいゝわ。それでも結構よ」

みよ子は夫がこのいゝ朝景色をも樂んで見てゐないのを不思議に思つてゐたが、向ひの二階では、若い夫婦がヨチヨチと辛うじて歩ける可愛らしい女の子を連れて廊下へ出て來た。

「あの女の人には昨夕お湯で出會つたのよ。靜岡の人ですつて」

みよ子は自分達の部屋が、左右の座敷や向ひの二階に比べて見劣りのしないのをも喜んでゐた。そして、朝餐後には夫の案内で見物に出掛けられることに獨り極めにしてゐて、兩親の思惑などは殆んど念頭に置かなくなつてゐたが、夫

が女中から受取つた手紙の上書をチラと見ると、流石に打遣つてはゐられなかつた。

「お母さんからでせう。どんなことが書いてあつて？」と、覗きかゝると、久一は手を振つて遮つて、急いで用を通して、

「お前の讀むべきものぢやないよ。お前よりも僕の方が却つてひどく叱られてるんだ。割が惡いぢやないか」と笑つた。

「お母さんはわたしのした事を怒つていらつしやらないの？。變ですわね」

「母はあれで腹の底は弱いんだね。お前の方で少し突飛な事をしたもんだから心配してるらしいよ」と云つて、久一は手紙の一部分を突出して、「ソラから書いてあるだらう。……そちらにて四五日湯治をいたさせし上お連れ歸り相成りたく候」と、指差しゝながら讀んだ。

「お母さんのお許しが出たら、わたしも心丈夫ですよ。わたしからもお詫びの手紙を出して四五日遊ばせて頂きますから、あなたもよく譯を書いた返事を出して下さいね」

「しかし、僕は今日中に東京へ歸れるやうに此處を立つもりだ。ちよつと急用が出來たから。お前一人後へ殘つてる譯には行くまいから、午前中に見たい所は見てしまつて、正午過ぎには直ぐ立てるやうに仕度をしとかなければいけないよ」

久一の語調は柔しかつたけれど、その言葉の意味は可成り殘酷であつた。少くもさう言出した久一の心持は、みよ子の解釋してゐるよりは殘酷であつた。

「直ぐ歸れと手紙に書いてあつたなら仕方がないけれど、四五日此方にゐてもいゝつてお母さんが云つてゐなさるの

に、急いで歸るのは詰らないぢやありませんか」と、みよ子はちよつと爭つたが、夫が飽くまで主張するので、「ぢや、いつそ何處も見ないで歸りませうよ。綺麗なお湯へ入つたゞけでも此處へ來た甲斐があつたのだから、それで諦めることにしてもいゝわ」と、不滿足ながらに云つた。

「この土地には大した見る價値のある所はありやしないよ。二階へ行つて御覽。修善寺中が一目に見えるよ。この土地はそれつきりなのだ」

久一は妻が自分の目の前を離れたら、伜の手紙についてもつとよく考へようと思つてゐたが、妻が直ぐに三階の方へ行かうとはしないで、火鉢の側に根を据ゑてゐるので、それが彼れの目障りになつて、自由に考へ事も出來なかつた。

「折角此處まで來たのだから、記念に方々へ繪葉書を出しときませうよ」と、みよ子は夫の使ひ餘しの繪葉書を貰つて、田舍にゐる妹や昔の學校友達へ宛てゝ、夫婦連れで溫泉場へ來てゐることを知らせた。自分ながらおまけが過ぎると思はれるほどに旅行の樂みを書いたりして、

「わたしが繪葉書をやつても喜んで見れさうなところは二三人しかないんだから」と云つて、次第に疎遠になつた昔馴染を思出してゐたが、そこへ、ふと、

「御免なさいまし」と、障子の外で聲がした。聲とゝもに障子を細く開けて顏出したのは、目鼻立の鮮かな色白な中年增であつた。「御本を有難う御座いました」と云つて、二三冊の小說本を返したゞけで、直ぐに行つてしまつた。

「綺麗な人ね」と、みよ子は簡單に云つて、昨夕から今朝へかけて、浴室や廊下などで見た浴客のいろ〳〵な顏を思浮べたが、下山の一族や自分の昔友達などに比べると、此處へ來てゐる人達はみんな美しいやうに思はれたので、

「此處へ來てゐる人はみんないゝ家の人なんでせう。お金持なのね」と云つた。

先つきから、意外にも妻を憚つてゐるらしい弱音を洩らしてゐる母の手紙の文句をフラ〳〵と思出しては、その眞意を捜してゐた久一は、

「さうみんなが金持ちやあるまいよ。十日や二十日湯治に來るくらゐ、お前が思つてるほどの贅澤な沙汰ぢやないんだ」と、妻の話に應じた。そして、遲かれ疾かれ、一度は必ず云はうと、かねて機會を待つてゐたことを、今度こそ露はに言出さうとしたが、みよ子の下膨れの顔を正面に見てゐると、女の上に落ちる打撃の烈しさが察されて、自から口が硬ばるやうであつた。

「でも、わたし、一日でも二日でも此處にゐられたらどれほど幸福か知れないと思はれてよ。私達にはこれ以上の贅澤は思ひつかれないんですもの」

「馬鹿に慾が少いんだね。僕はお前にお前の親爺や兄貴も敎へて與れないやうな幸福や贅澤を敎へてやらうと思つてるんだけれど、お前に聞く氣がないから駄目だ。」

「わたし何でも聞きますよ。あなたの仰有ることなら。どんなことなの？」

「下山家の家風だの、むごい規則だのとお前の云つてることは、舊弊な母が自分だけ當然なことゝして無理に强いるので、僕の知つたことぢやないんだ。僕はお前が今度無斷で來たやうに、勝手に家風でも規則でも破ればいゝと望んでたくらゐなものだ。これだけのことでもお前が平氣でやれやうとは今まで思はなかつたのだよ。……一體下山の家庭は、生活に窮しないだけの財産があつて、繫累は少いし、お前の親爺なんかには、みよは仕合せだと思はれてるのだらうが、その實大して幸福ぢやないんだ。お前の性質は何事でも面白がつて笑つて暮らさせれるやうに生れついてるのに、僕の家に親爺をはじめ母でも僕でも、家の中を面白くするやうな人間ぢやないんだからね。お前の友達の緣付いてる家

だつて、世間の普通の家だつて、決して僕の家のやうぢやないのだ。このまゝ辛抱して歳を取つたなら、お前は若い間に樂しめるものを、ついに樂しめないで一生を終ることになつてしまふよ。一度歳を取つたら、も一度若くなりたいと思つたつてなれやしない」

「わたしも時々さう思ふことがあるの。だけど仕方がないぢやありませんか」みよ子は、巴町で冷たい寢床に獨り寢をしてゐた間に、ふと思浮んでゐたことを、夫に云はれてゐるやうな氣がした。

「お前の決心次第でまたどうにでもなるぢやないか」

妻を唆かすやうにさう云つた久一は、自分自身に向つてもさう云つてゐるのであつた。みよ子には夫の意味ありげな言葉が冷たいものゝやうに胸に觸れたので、

「わたし、東京には相談相手になる人一人ないのだから、面倒な恐ろしいことをわたしに聞かせないやうにして下さいな。お母さんにきつい目で見られるくらゐなら覺悟して我慢するけれど、あなたに怖いこと云はれちや溜らないから」と、不安な目付して夫を見て、「わたしは自分に秘密を持つてゐないと同様に、あなたにも秘密のないのを確信してるの」

「秘密のないのが左程幸福の證據にやならないぜ」

久一はいつもの事だが、妻と差向ひで話してゐると、議論めいた殺風景な理屈の連續見たいになつて、打解けた心の親しさが湧いて來ないのに、われながらウンザリするのであつた。

「ねえ、あなた。明日の朝歸ることにしちやいけなくつて？お願ひだからわたしのためにたつた一日延ばすことにして下さらない？」みよ子はふと目顔に媚びを寄せてさう云つた。

「さうさねえ」久一は氣のない返事をして、夫婦差向ひの一日一夜の長さ怠屈さを豫想して、「まあ、もう一度湯に入つて來ようか」と、浴室へ逃げ場を求めた。

妻に飽足らない彼れは、此處へ來てゐるある浴客のやうに、女房以外のある女を連れて湯治に來る樂みを望んでもゐなかつた。盛裝した美しい女を連れて町を散歩してゐるのを見ても羨ましいとは思つてゐなかつた。親の目や妻の目を晦まして、秘密に女をこしらへようといふ上ついた氣にはなれなかつたが、と云つて、どういふ女との正當な結婚を望んでゐるのでもなかつた。三十になつてみよ子によつてはじめて女の肉體を知り、女の心を知つた彼れは、女といふものにかねて豫想してゐたほどの價値のないのに、はじめて目が醒めたやうなものであつた。兩親が死んだ後、あるひは生きてゐる間にでも、生涯の眞正の同伴者になるものは、妻といふ者の外に、女の外に有るのぢやないかと疑はれてゐた。……………女と男と、その外にはどんな形を具へた人間も無くつて、世の中から世の中が、幸福な住み場所として、何千年何萬年續いて來たことが、彼れにはむしろ不思議であつた。

戀とか色とかはどういふものかと、彼れは、結婚の當時にみよ子から得た經驗を、浴槽に腰を掛けて明り窓を見上げながら、うつら／＼思浮べてゐた。そして、かういふ夫をもつてあんな家庭に閉籠められて、とに角滿足してゐる女の心持に不審を寄せたりしてゐた。

長湯に醉つて頭がクラ／＼するやうになつてから浴室を出ると、廊下に出て待受けてゐたみよ子は、

「どうしませう？ お母さんが今日入らつしやるんですつて」と、電報用紙を見せてキヨト／＼してゐた。

「ぢや、お前の望み通り今日は歸られなくなつたね」と、久一は何氣なく云つたが、母が來るといふことは、妻の來たことよりも一層意外に思はれた。

「でも、お母さんはわたしのことでわざ〳〵いらつしやるに違ひないのよ」

「お前に難癖をつけに來るのぢやないからいゝさ。とに角母が溫泉へ來るなんて珍らしいことだね。四五年この方東京を出たことさへないのに」

（三）

歸京の延期が極つたので、二人は散步に出掛けた。久一は雁皮紙や細工物や、土地の產物について、問ひに應じて說明したりして、町を一通り見て、賴家の墓所まで行つて來た。景色や名所よりも、あちらこちらの溫泉宿の樣子や、步いてゐるいろ〳〵な浴客の樣子が、みよ子には面白かつた。

「お母さんはまだ來てゐらつしやらないわね」と、みよ子は母親が來た時に自分が云はなければならぬ言譯を夫に相談などしながら、繪葉書と蜜柑とを買つて宿へ歸つた。前の日に自分が通つて來た所を追想して、今母親が見てゐるらしく思はれる沿道の景色を目の先へチラつかせてゐたが、一刻々々と母親の影が此方へ近づくのを思ふにつれて、夫を賴みにする心もます〳〵強くなつた。

廊下にバタ〳〵と足音がしたり、自動車や馬車の音が表通りから聞えて來たりするたびに、夫婦は母親の到着に思及んでゐたが、電燈の點く時分までは、その姿は見えなかつた。よかれ惡かれ、來るべき者は來なければ極りがつかないので、夫婦は午後は散步にも出掛けないで、湯に入つたり假寢をしたり、手紙を書いたりして時を潰しながら待つてゐた。途中で故障が起つたのではないかとか、出立が延びるかあるひは中止になつたのではないかとか、ともすると、母親の事を話の種にしてゐたが、

「お母さんはあなたの身體の弱くなつたことをわたしの所爲にしてゐらつしやるのよ。先日そんな風なことを云つてま

したよ。何故でせう」と、みよ子はふと訊ねた。

「さう云はれちやお前も割りに合はないね」と、久一は微笑した。

「こんなことを云つちや、あなたが怒りなさるか知れないけれど、わたし、きよからお母さんの昔の事を聞きましたよ。本當でせうか」

「昔の事つてあの事だらう。母が親爺にある嫌疑を受けて家を逃出したといふ話だらう」と、久一はわざと事もなげに云つて、「僕は久堅町のお喋舌な伯母に聞かされたのだが、その時は死ぬるかも知れんと云つて大騒ぎだつたさうだ。なにしろ僕が腹の中にゐた時分ださうだから」

「おや、あなたもお母さんのお腹の中で詰らない災難に會つたのね」みよ子はその話を面白く思ひながら、事件が事件だから、無遠慮にその話を進めることは出來なかつたが、「女は根も葉もないことでも嫌疑を受けちや大變だと、お母さんは思つてゐなさるから、それであなたのお留守中にあんなに嚴重だつたのか知らん」と、一本の手紙も母親の監視を免れがたかつた譯が多少分つたやうに思はれた。さう思ふと、母親の意地の悪い仕打もいくらか和らげられるのであつた。

「若しお前の今度の旅行が僕のところへ來るためでなかつたとしたら騒ぎだつたらうね。……僕達親子は眠入つてるやうで、家の中には何事もないんだから、お前でも事を起して呉れなければ、世間の家のやうに活氣がつきやしないよ」

久一はさも煽動するやうにこんなことを云つてゐたが、みよ子のどんな所行があらうとも、そのために自分の心に激しい動揺が起されようとは思はれなかつた。

電燈の明るい温泉宿の夜も、長い間見馴れてゐる久一には、宵の長さを覺えさせるばかりであつたが、みよ子に取つ

ては、湯に入つても部屋にゐても夜の方が温泉宿らしい異つた面白さが感ぜられた。何處からか一杯機嫌の聲が聞えて來て、浴室も賑はつてゐた。

數人の新たな客が着いた後で、瘦つぽちの母親が寒さに震えながら俥で來て、番頭に案內されて二人の部屋へ入つて來た時には、みよ子は他所の座敷の廊下に立つて、蓄音機に聞惚れてゐたので、待つてゐた人の來たのにも氣づかなかつた。

「みよは？」と、母親に訊かれたので、

「そこらにゐますよ。呼んで來ませうか」と、久一は座を立たうとしたが、母親に留められて、そのまゝ腰をおろして、「實は今日歸らうかと思つてたところなんです」

「お前の電報は見たけれど、ちよつと不安心だから、急に思立つて來ることにしたのだよ。」と云つて、母親は後を顧みてから稍々聲を潛めて、「みよはお前にどう云ひました？お前がどうしてゐるか氣遣ひだから樣子を見に來たと云つたのかい」

「まあ、さうです。無論僕が呼寄せようとしたのぢやありません。自分一人の量見で來たのです」久一は、妻を庇ふ氣も傷つけようとする氣もなく、無關心にさう云つたのであつた。

「お父さんには何も云はなかつたけれど、お前の電報を見るまでは、私一人で氣が氣ぢやなかつた。今世間から後指を差されるやうなことが出來て御覽、これから世の中へ出ようといふお前が一生肩身の狹い思ひをすることになるんだから。」

「そんなに世間を恐れるには及びませんよ。あれが一人で此方へ來たのが惡ければ惡いで、些細な內輪の事なんだから」

「お前はまだ世間をよく知らないから、さう輕々しく思つてお出でだけれど、些細なことつちやありませんよ。みよは年齡の割りに子供々々してゐて、第一言葉つきから子供じみてるけれど」と、母親は平生氣にしてゐるみよ子の廿つたれた口吻を思ひ出して、眉を顰めて、「當人には間違つた了見はあるまいが、世間にはタチの惡い人間がいくらもゐるのだから、お前もそこはよく考へてゐなければなりませんよ。寛大に過ぎて取返しのつかないことが出來ちやならない。若い男もみんなお前やお前のお友達のやうな者ばかりぢやないのだから」

久一は擽つたい思ひをして母の言葉を聞いてゐた。

「お前も一度會つたことのある富岡といふ男は何だか變ぢやないか。おみよの、緣つゞきで姫路の者だと云つてはじめて私の家へ來た時から私はどうも蟲が好かないのだが、お前は何とも思はないのかい。この頃明舟町の下宿屋に移つたと云つて、お前が此方へ來た後で訪ねて來たから、追返す譯には行かないし、私が出ていゝ加減に應對しといたけれど、あんな男には成べく出入りして貰ひたくないと私は思つてるのさ。三十にもなつて下宿屋にごろ〳〵してゐるやうな男は碌な人間ぢやないと、私には思はれるのだよ。それに先日も歌舞伎座を見たとか云つて、役者の繪葉書をおみよに宛てゝ寄越したりするのだもの、いやな奴ぢやないかね。お前もこの後あの男を相手にしないやうにして、おみよにもお前から注意して、あんな男とは手紙の遣取りもさせないやうにしたらいゝと思ふよ」

「しかし富岡といふ男は氣さくな面白い人らしいですよ」と、久一は一度富岡に會つた時の公平な感じを口に出しながらも、何となくいやな氣持がした。自分の不在中にその男が訪ねて來たことをみよ子が故意に云はなかつたやうにも思はれるし、今朝みよ子が書いた數枚の繪葉書の中の一つは、富岡に宛てたものゝやうに思はれないでもなかつた。

勸進帳を聽いてカツポレを聽いて、落語の「高砂や」を聽いて、込上がる笑ひを強いて堪へて歸つて來たみよ子は、

何氣なく障子を開けたが、母親の姿を目にすると、意外な客に會つたやうに驚いた。

「入らつしやいまし」と、晴ましやかに挨拶したが、この場に相應しいお詫びの言葉がうまく思付かないので默つてゐた。

「汽車を下りてからが寒くつてね」母親は穏かにさう云つて、端の方に遠慮して坐つてゐるみよ子を火鉢の側へ招いた。

（四）

みよ子を附けて母親を浴室へやつ後で、久一はちよつと樂々とした氣持になつたが、やがて、富岡といふ男の眉の濃い鼻の高い色の淺黒い、ゝゝしい顔付や、テキパキした快活な音聲が、知らず〳〵自分の注意を烈しく惹いてゐるに氣づいて、われながら忌々しくなつた。

「馬鹿なことだ。愚にもつかぬ母の邪推をおれが眞に受けるつてことはない。……よしまた富岡の腹の中に性の惡いところがあつたつていゝぢやないか。萬一みよ子が富岡をどうか思つてゐるにしたところが構はないぢやないか。おれの方では少しも女房なんかに執着してゐるんぢやないんだもの」と、久一は自分で自分を戒めた。そして、妻の持參の西洋菓子を抓んで茶を飲んで、煙草を吹かしなどして、思ひを外へ轉じようとしてゐたが、差當つて考へるべき事は外にないので、母の用事の事、それに連絡して富岡の事が、昨日までは退屈に過ぎるほどに安易であつた彼れの心の煩ひとなつた。

で、二人が浴室から歸つて來るまでには、茶や煙草にも手伸はれて、可成りに神經の興奮を覺えてゐた。

「いゝお湯だことねえ、これで生返つたやうだ」と、母親は先つきよりは顏までも和いでゐた。

「ぢや、逗留してゆつくり湯治をしちやどうです」と、久一が云ふと、

「いゝえ、さうしちやゐられないよ。明日中には歸ることにしなければ」

「ぢや何のために來たか分りませんね」

「いゝえ、來た甲斐がありましたとも」と、母親は快さうに云つた。

「私はもつと此處にゐさせて貰ひませうか」

「お前一人でかい」

「えゝ」

すると、母親とみよ子の目は一度に久一の顏に注がれたので、久一は、

「成ろべくなら、も少し此處にゐて、身體をもつとよくして、書物ももつと讀んで歸ることにしたいと思つてゐたところなのです」と、言譯をした。

「でも、みよも私もわざ〳〵迎へに來たのだからね。都合でまた出直して來ることにしてもいゝから、お前も一先づ此處を引上げることにおしなね」と、母親はみよ子の心をも察して云つた。

「ぢや、さうしてもいゝです」

久一は心からこの上の滯在を望んでゐたのでもないから、強いて母に逆ひはしなかつた。そして、入浴中に氣まづい思ひを取拂つたらしい母と妻とが他所目にはいかにも睦まじげに、途中やこの宿で見聞したことを語合つてゐるのを、無表情なポカンとした顏して、自分の方からはあまり言葉を挿まないで聞いてゐたが、暫くしてみよ子が便所へ立つと、

「あれが一存で此方へ來たのも、別に惡い量見をもつてゐたのぢやなささうだから、今度のことは此だけでの胸に收めといて、何も云ふまいよ。こんな時に烈しい小言を云ふと、却つて無分別なことをされないとも限らないからね。……今だから云ふけれど、あれが家にゐづらくなつて逃げ出して此處へ來たのだとすると、お前が持餘してゐやしないかと、汽車の中でも隨分心配してゐたのさ」と、云つて、母親は事が惡い方へ傾かなかつたのを喜んでゐた。

「お母さんはみよの事をそんなに構つてゐなくつてもいゝんですよ」と、久一は自分達二人の間の顚末な事にまで母親が氣を配つてゐるのを煩さく思ひながら云つた。

「それだからいけない。お前がさういふ氣だから、私が餘計な差出口も利くやうになるのだよ」

そこへ、みよ子が入つて來たので、急込んだ母親の言葉の端が折れて、話は自から外へ轉じた。

三つの寢床が並べて延べられたが、久一は目がます〳〵冴えて、どうしても睡られさうでないので、母と妻とを先へ寢させて、自分は狹い次の間の長火鉢の側へ移つて、貸本屋から持つて來た紙の汚い小說本の讀殘しのところを讀みつづけた。さして興味を寄せてゐるのではないので、讀んで來たところの筋さへよくは頭に殘つてゐないくらゐであつたが、有りうちの色戀沙汰の愚かしさに屢々頰笑まれるのであつた。……どうしてから一生懸命になつて女を追驅けてゐるのかと、作中の幸吉といふ男の性根が理解出來なくつてたゞ可笑かつた、不思議であつた。淚を浮べながら男を喜ばせるやうな口を利いてゐるお菊の言語動作は、「おれがこんな風に仕向けられたらどんなに厭な氣持がするだらう」と、云ふやうに書かれてあつた。幾冊か讀んだ貸本屋の小說のどれにも、ある部分には屹度かういつた厭な氣持を起させるところを大眞面目で力を入れて書いてあるのを見ると、これが世間人間通有のことなのかと、彼れは書物を擱いて、自分の知人の實際の事を例として思浮べたりしてゐた。

「おれが小説家だつたら、かういふ風に趣向を立てゝやる」と、久一は、この汚ならしい紙の上に描かれてゐる幸吉に、自分の魂を吹込んで、お菊をして彼女が竊かに慕つてゐる男の所へ行かせるやうに仕向けて、彼女と男との竊かにめぐらしてゐる奸計を見破りながら、自分は彼等の手に乘つて目を晦まされてゐるやうに裝つてゐることを趣向の中心とした。寄りつ縺れつ女を側へ据ゑてゐるよりも、側から離して勝手な眞似をさせて置いて、自分は無關心に見てゐる方を面白い趣向だとして、お菊風情の手管にまるめられて、ついに毒殺された幸吉を腑甲斐なく思つてゐた。

夜も可成り更けて四邊がひつそりして來たのに、ふと、廊下の足音が久一の部屋の方へ近づいた。そして、出拔けに障子が開いて、酒臭い赤い顏した、だらしなく寢衣を着てゐる男が、一足部屋の中へ踏込んだ。

「あなた誰れです？」と、久一が聲を掛けると殆んど同時に、

「いやこれは失禮」と、侵入者は無間な會釋をして出て行つた。

久一は噴出したが、それで小説の趣向も止切れた。讀終つた貸本を投出して、消えかゝつた炭火を搔きさがして温まりながら、母や妻の安らかな寢息を聞いてゐたが、すると、平生夫婦の寢室にまで母の監視の目の光つてゐることが思出されて、三つ並んでゐる寢床の方へ入つて行く氣になれなかつた。「下山家の一粒種だから」と、妻にも誰れにも、久一の心をも身體をも傷つけさせまいと絶えず警戒してゐる母親の魂は、安らかな寢息の間にもちやんと醒めてゐるやうに思はれた。

火の氣が無くなつてから、久一はソツと襖を開けて、冷たい寢床の中へ不承々々に入つて行つたが、廊下から差して來る電燈の薄明りで見える母親の寢顏は、疲勞困憊した生氣のない相をしてゐて、みよ子の寢顏は樂しい夢でも見てゐるやうにニコついてゐた。半ば口を開けて唇をピク／＼動かしてゐた。

一昨夜までの獨り寢の自由を戀ひながら、彼れは目蓋を閉ぢたが、明け方から眠入つて、厨房の騒ぎに無理強いに目を醒まさゝれた時には、母親がみよ子に向つて、丸髷に結つて歸るように説き勸めてゐるところであつた。日本髮の嫌ひなみよ子は、氣乘りがしなかつたが、漸々承知して、女髮結ひを呼寄せるように女中に賴んだ。

「家にゐる時はどちらでもいゝけれど、外へ出てゐる間は、女は髮からしてちやんとしてゐなければいけないよ」と、母親は、下山家の嫁として耻かしくないやうにみよ子を仕立てゝ歸りたかつた。

久一は荷物の整理をして帳場への支拂ひをも濟ませて、女達の身仕度の出來上る間、廊下をブラついたり庭へ下りて見たりしてゐたが、次手に例の中年增――雜誌や小説本などを時々借りに來てゐた新井といふ女――の部屋へ顏出しゝて別を告げると、その女はさも名殘り惜しさうに、

「折角奥さまが入らしつたのに、もうお歸りになるんですか。奥さまとは是非御懇意にして頂かうと樂みにしてゐまししのに」と云つて、自分も今月中には東京へ歸るつもりだから、通りがゝりの時に寄つて吳れと、屢々話してゐた東京の住所を改めて詳しく知らせた。

旅先で知らない女と近付になつて、しかも懷つこく隔てのない話をされたのは、久一に取つては先例のないことだつたので、その女を好く好かぬに拘はらず、妙な印象が彼れの頭に殘された。

「ではお見送りはいたしませんから」と、彼女は廊下へ出て、「奥さまにもよろしく」と、恭しく別れを告げた。

（五）

姑に小言一つ云はれないで巴町の家へ無事に歸つて來たのはいゝやうなものゝ、みよ子は今度の旅がいかにも飽氣なかつた。三人揃つての賑かな歸途よりも、多少の氣遣はしさのある淋しい往路の方が却つて樂しかつた。

「いくら修善寺のお湯がよくつても、旅に出てゐると何か知ら氣骨が折れていけない。矢張り自分の家ほどいゝところは何處にもありやしないよ」と云つて、父親一人は、一日二日家を空けてゐた間に何事もなかつたのを、非常な幸福なことのやうに喜んだ。

久一は重い鞄を提げて先づ二階の書齋へ入つて、埃の目立つてゐる机の前に腰をおろして一つ大きな息を無意味に吐いた。月はじめに出掛けた時のまゝで、花瓶の水仙が磯馴れに變つてゐる外には、何一つ變つてゐない殺風景な書齋の中を、懐手をしてボンヤリ見てゐたが、そこへ、みよ子が火を盛つた火斗を運んで來ると、最早ボンヤリを續けてはゐられなくなつた。汽車の中よりも家へ歸つてからの方がみよ子の丸髷は一層異樣に目についた。

「何を笑つていらつしやるの」と、みよ子も微笑して、頭を動かして、「髪が變でせう。どうせ私には似合はないんだから」「さうぢやないよ」と、久一は笑ひを收めた。

「わたし、明日は壞さうと思つてるの」

「だつて、髪なんかどうでもいゝぢやないか。それよりも、お前はお母さんに連れて歸られないで、もつと旅をしてればよかつたと後悔してゐないのか。汽車の中ではさう思つてるらしい口振りだつたが」

久一がさう云ふと、みよ子の答へは彼れには意外であつた。

「え、後悔してゐましたとも。隨分後悔してたわ。汽車から外を見てると、一思ひに窓からでも飛下りて、向うの方へ勝手に驅けて行きたいやうな氣にいく度もなりましたよ。……お母さんの前だから默つてゐたのですけれど、あなたは前の日には急用が出來たから直ぐに歸ると云つてゐなさつたのに、お母さんが入らつしやると手の裏返すやうに、御自分だけ後へ殘つてゐたいなんて、あなたの仰有ることがわたしには手頼りないんですもの。……でも、思切つて修善寺へ

行つたことはよかつたの。わたしにはいゝ經驗になりましたよ。自分でかうと思ひついたら、遠慮しないで何でも遣り通せばいゝのね。心の中でさう極めてゐれば、家にぢつとしてゐたつて、今までのやうに屈託してなくつてもいゝんですよ」

「お前の獨り合點で僕にはよく分らないよ」と、久一は口では云つたが、今までは何もなかつたみよ子の腹の底にも見透ない物が淀んで來たやうに思はれだした。修善寺で母親に囁かれたことが、新たに、前よりも強い力で彼れの胸に響きだした。

「わたしの獨り合點が今にあなたにも分るやうになるわ」

みよ子は快活にさう云つて、火斗を置いて緣側へ出て、寒い風に頰を打たれながら雨戸を締めにかゝつたが、直ぐ前の愛宕の塔が月の光で鮮明に見上げられた。

「二日の間だけあの塔を見ないで濟んだ」と、獨り言のやうに云つて、火鉢の側へ戾つて、もつと無駄口を利かうとしてゐるところへ、したから母親に呼立てられたので、慌てゝ下りて行つた。

「みよも少し目が醒めて來たのだらうが、おれのためにもその方がいゝのだ。女房といふ重荷が自分の身體から離れるやうになつたら結句仕合せなのだから」と、久一は母と女の間の愛情離合をも、妻の今後の所行をも、從來よりも更に無關心に傍觀してゐようと思ひながら、旅鞄の中から使ひ殘しの繪葉書を出して、二三の友人へ宛てゝ歸京の知らせを書いた。

「お父さんが呼んでらしつてよ」と、みよ子に聲を掛けられると、久一は、母親にも勝つた子煩惱の父親に對して、旅中の生活の概要を報告しなければならぬのに氣づいて、修善寺案內記を手にして、階下へ居りて父の居間へ行つた。會

社の務めが終つてからある宴會へ出席して來た父親は、微醺を帶びて艶々した顔をしてゐた。久一が出立前よりもいくらか丈夫さうになつたのを喜んで、彼れの事務的口調の報告をも熱心に聞いた。

「しかし、お前はなか〳〵辛抱強いよ。わしも湯治に行つた經驗はあるが、退屈で十日とも一つ所には居られなんだ」

「へえ、お父さんも温泉へお出でになつたことがあるんですかねえ」と、久一は不思議に思つて訊返した。

「それは古いことさ。お前がまだ生れない前のことだ」父親は久一の顔をしげ〳〵見入つて、古い記憶を辿つて、「さう、さ、たしかお前が生れた年だつたよ。わしも詰らんことから一時家が厭になつて家を出たのだ。まづ箱根へ行つて、彼方此方の湯に入つて、それから山を越して、三島から沼津だのと、興津までも歩いて行つたのだがね。あの時分にわしも健脚だつたよ。何しろ諸式の安い時で、興津の水口屋へ泊つて、茶代を二十錢置くと、宿の主人が羽織袴でお禮を云ひに來た」

「さうですかね」

久一は、母親が自分を胎内に宿してゐた時分に、家を逃出したことがあつたのは、薄々聞いて知つてゐるのだが、父親までがその時分に流浪の旅へ出たことは、今度はじめて耳にしたのであつたので、さう思つて見てゐると、父親の醉顔に昔の苦しい夢が漂つてゐるやうに思はれた。

話が止切れたところで、追憶に耽りだした父の側を離れて、彼れは二階の書齋へ戻つて來たが、自分に物心のついてからは何の波瀾もなかつたこの家庭にも遠い昔には悶着のあつたことが、自分の身心に關係があつて、よく覺えてゐなければならないことのやうに深く胸に刻まれた。「それは兩親の結婚後間のないころで、自分が胎内で人間としての身體と靈魂とを具へつゝあつた時のことだぞ」と、自分がこの世の息を吸ふ前に蒙つたむごい災難として考へたりして

ゐた。

翌日は久一も久振りに事務服を着けて會社へ出勤した。父親が退官後ある知人に誘はれて、一部分の出資をして仲間に加はつて、柄にない經營をやつてゐる玩具製造會社へ、彼も勤めてゐるのだが、年二季の賞與以外には表向きは殆んど無給金で、そのかはりに父から相當な手當を支給されてゐるのであつた。受持の職務と云つては極めて閑散なので、父の秘書役同樣であつた、玩具に關係のある外國の雜誌や著書を買はせて、外人の嗜好を研究するとか、嶄新な品物を工夫するとかして、一ぱし會社の爲めを計つたつもりでゐたが、そんなことは元より彼れの柄にないのだから、實際の上に何の效果もなかつた。むしろ一部の人達の物笑ひの種になるのに過ぎなかつたので、自分も厭氣が差して來て、今は氣に入つた他の仕事を見つけるまでの間のつなぎに、暇潰しとして氣儘に出勤してゐるのであつた。

皆んなが働いてゐるのを久振りに見ると、自分も早く身に適した働き甲斐のある事業に取掛らねばならぬと、久一は暫く遊惰に過してゐた後なので、一層興奮してイラ〳〵した氣持になつた。今のところ下山の家が生活に窮する恐れのないためと、兩親があまりに一人息子の事に心を遣ひ過して職業の自由を許さないために、徒らに月日を送りつゝあるのが、彼れには口惜しかつた。貧乏なために忙しい定職の外に内職までもしてゐる本田のやうな男をむしろ羨ましく思つたりした。

みよ子は、母親の差圖で日常の家事にたづさはつて日を暮らすので、月に六度生花の師匠の來るのを樂みにして待受けるやうになつてゐた。兩親の勸めによつて不承々々に稽古をはじめたのだが、遊藝や物見遊山の娛樂を殆んど遠ざけてゐる家庭にゐるのだから、生花のやうなことでも、せめてもの慰めになつてゐた。習つて見ればこんなことにでも多少の興味が興らないではなかつた。

ところが、修善寺から歸つて來た後は、唯一の娯樂としてゐた生花の稽古も、みよ子に取つて何の興もないものとなつてしまつた。枝を撓め花や葉の形を整える師匠の技術も、わざとらしいうるさい價値のないものと見做されて、以前生花の原則や道德などを感心して聞いてゐたことが馬鹿々々しく思はれだした。天地人三才の位取りに圓滿な家庭の様が示されてあるとか、正しい女の姿態が現はされてゐるとか、鹿爪らしく說立てる師匠の言葉を、舊弊な母親と一緒になつて聞いてゐた自分のお目出度さを自分で笑ひたくなつた。

で、みよ子は夫に向つてその事を打明けた。鋏使ひなどの巧みな師匠にも今日は些とも尊敬の念が起らなかつたと話したが、すると、久一も手易く同感して、

「いやになりや何時でも稽古を止めることにするさ。僕だつて自分の氣に向いた仕事が見つかり次第、今度は傍でどんなに反對されてもその方をやるつもりだ。何時まで親爺の腰巾着で愚圖々々してゐても果してがないからね」

「小さい家に住むことにしてもいゝから、私達の趣味に合ふやうにして暮らしたいと思つてよ」

「お前の趣味に合ふ生活といふのはどんなのだね」

「さう改まつて問かれちや返事にも困るけれど」

みよ子は二三の夫の友人の生活を例に擧げたが、久一は見たところ夫婦水入らずで睦じさうに面白さうに暮らしてゐるKやBやSの家庭を幸福な實例とはしたくなかつた。氣に向いた職業をしてゐるのは羨ましくないではないが、夫婦關係については彼等から何の刺戟をも得られなかつた。むしろ妻をば母の監視に委ねてゐる自分の方が、氣輕であつて、苦痛も少いやうに思はれた。

「僕は一粒種だから別居する譯には行かないし、たとへ別居したつて駄目だ。いゝ事が待つてやしない」と拋り出すや

うに云ふと、

「なんだつて懐手してゐちや駄目よ。自分で一生懸命よくしようつて氣にならなければ駄目ですよ。家庭のことでも」と、みよ子は多少夫に當てこするつもりで云つた。

久一はそれを察しても、敢て反抗はしなかつた。「その點では僕は甲斐性無しに見えるだらう。しかし僕の力ではどうしようもないんだ。生れた時から悪い運を背負つてるんだね。……つまり僕の兩親は僕をこんな風に生みつけたのだが、お前は僕とは違つて生れついてるのだから、僕の眞似をしなくつてもいゝだらう」

「わたし、あなたをそんな情愛のない人とは思つてゐなかつたの。それが、お母さんの側を離れて、たつた一日修善寺であなたと二人きりで暮らしたので、始めて分りかけたんです」

「僕もさうでないとは云はない。しかし自分の力ではどうすることも出來ない。……お前がどうかしたら僕の心を變へることが出來るかも知れないけれど」

「わたしにそんな力があるものですか。わたしはそんなえらい女ぢやないの。あなたが汽車の中で話してゐらしつた荻井とか云ふ、男を魅する力を持つてるやうな女ぢやないんですもの」

「しかし、僕はまだどんな女にも魅せられた經驗はないぜ」

「あなたにそんな經驗があるかないか、わたしは知りませんよ」

みよ子の聲は例になく高まつた。夫に取縋つて泣立てようとしながら、流石に四邊を憚つて躊躇してゐたが、そこへふと、階子段の方で足音がしたので、急いで後退りして睫の涙を拭つた。泣くことさへ妨げられるのが腹立しかつた。

上つて來た母親は、迂散臭い目付をして二人を見下した。そして、湯加減を見にみよ子を階下へやつた。

（六）

翌日、久一は定刻の同時に會社を出て、寒さ避けに足に力を入れて歸りを急いでゐたが、ふと、目に一杯涙を溜めて自分を見詰めてゐる妻の顏が頭に浮ぶと、どうしても家の方へ向つて急ぐ氣になれなかつた。われながらKやBやSとは頭の構造が違つてゐるやうに思はれてゐる久一は、妻の不滿足を充分に理解して、あるひは不憫にさへ思ひながらも、おのれの力でそれを滿たしてやり、涙を拭つてやることは出來ないと堅く信じてゐたので、妻と相對して同じ居間の空氣を呼吸するのが苦しかつた。

「いつそおれの留守中に、母の嚴しい目をのがれて何處へでも、當人の好きなところへ逃げてゐて呉れゝばいゝ。行く先に當てがなければ、母が氣にしてゐた富岡のところへ手頼つて行つたつていゝ。おれは構はない。そんなために妻を憎みはしない」と、自問自答して、友人のBの家へ寄つて一時の氣晴らしをしようとして、方向を轉じた。が、Bの家へ行くと、みよ子の事について、彼等夫婦からいろ〳〵な立入つた問ひを出されるに違ひないと、途中で氣づいたので、その家も今訪問するに相應しいところではなくなつた。

と、ふと、彼れの心に浮んだのは、修善寺で懇意になつた新井といふ女の住所であつた。Bの隣り町の備後町にゐるのだから、次手に外から家の樣子だけでも見ようといふ好奇心を珍らしく起して、寒い吹風を浴びながら、一軒々々町内の標札を見てその家を搜した。

が、耳に留まつてゐる番地を調べても、新井といふ名前は出てゐなかつた。念のために角の酒屋で訊ねても、この近所にはそんな人はゐないといふことであつた。「ぢや、一杯喰はされたのかな」と、久一は、通り一遍の女の言葉を眞に受けてゐた自分の愚かさに氣づいて、笑ひを洩らしながらその町を離れたが、目鼻立の鮮かな色の白いその女が、寒

さにもめげない澄かさうな顔して目の前に現はれてゐるやうに思はれた。
親類の女か友人の妻君かの外には、女に知合ひの無い彼れは、新井がどんな種類の女だか殆んど見當がついてゐなかつたが、たゞその冴えた音聲の耳に快かつたことを、自分に否定することは出來なかつた。で、住所が分つたにしろ押つけがましく訪問する氣には無論なれなかつたが、自分の家の門に着くまで、その女の顔形や言語動作を絶えず思出し〳〵してゐた。

みよ子は茶の間で母親の側で働らいてゐた。久一は聲も掛けないで直ぐに二階へ上つた。そして、みよ子が昨夕のやうな泣顔して追つて來るのを豫め氣遣つてゐたが、間もなく階子段を上つて來た足音は、母親に違ひなかつた。

「今日は非常に寒いですね」と、云ふと、

「あゝ……」と、母親は氣のない返事をして、火斗に盛つて來た火を火鉢へ移しながら、「みよは××（實家）へ行かせて呉れと云つてるのだが、お前には何も云はなかつたのかい。私にはどうも腑に落ちないよ」

「さう云ふのなら行かせたらいゝぢやありませんか。修善寺へ行つた時のやうに、無斷で出抜けに家を出られても仕方がないのだから」と、久一は無雜作に云つた。意外とも何とも、彼れの神經に何の觸りをも感じなかつた。

「だけど、たゞ行きたいから行かせて呉れと云ふんぢや困るよ。一日や二日で行つて來られるところぢやないしさ。此間からの樣子と云ひ、あれにも何か深い思惑があるやうだから私も心配してゐるのだが、お前にはあれの氣持がお分りでないのかい」

「みよがお母さんの手におへなくなつたら、私には尙更駄目です。お母さんが見つけて嫁に貰つた女ですから、どうにでもお母さんの考へで仕末して下さい。私は異存を申立てませんよ」

事もなげに云つてゐる久一の顏を、母親は呆れたやうに見てゐた。二人が口を噤むと家の中はしんとしてゐた。母親は階子段の方を氣にしながら、

「みよがお前の氣に入らないと云ふのなら、話は別だけれど、あれのために、下山家の家名にもお前の身にも傷をつけられちやならないと、それが何よりも私の氣に掛つてるのだよ。あの女の外にこの家へ嫁に來て呉れる者がない譯ぢやないから、……なに、あのくらゐな嫁なら明日が日にでも私が見つけて來やうが、あの女のために私の家に傷をつけられても知らん顏しちやゐられないからね」

「どんな傷をつけられてるんです。私には合點が行きませんよ……」

久一は、母の心の蟠つてゐるらしい富岡といふ名を口に出さうとして躊躇した。

「惡い事のない先の用心が大切なのさ。取返しのつかないことの出來ないやうにと、そのために、私がどれほど氣をつかつてるか、お前にも分らないのかい。他人のことぢやない、お前自身の身に關はつたことだよ。」母親はさう云ひながら異樣に興奮して、潜めてゐる聲も次第に震えて來た。「一生に一度はお前にだけは打明けたいと思つてるのだけれど、お前は安穩にこの世に生れて來たのぢやないのだよ。お前は子供の時から、誰れの口からも荒い言葉一つ出るのを聞いたことがあるまい。親子三人でヒツソリと睦まじさうに暮して來たから、お前は何も知らないのであらうが、お前といふ者が生れるまではお父さんも苦勞なすつたし、私も容易ならん苦勞をしたんですよ。………私にはお父さんも御存じのない苦勞があるんだよ。よく覺えてゐてお呉れな。お前の顏を見てゐると、三十年も前の事がつい此間のことのやうに思ひ出されて、悲しくもなるし、不思議で溜らなくもなつたりするのだからね。……それで、私やお父さんの事は過ぎ去つたことゝして、お前にだけは、たとへ私が憎まれ者にならうとも、あんな思ひをさせないで、一生を素直に

送らせたいと、随分氣骨を折つてゐるのだ」

から云つてゐる母の靑褪めた顔を正視しないやうに久一は目を伏せて、火箸の先で火をいぢくつてゐた。

「よく分りました。さう云ふ話は今日は止しませう」と、云つて、氣を取直して顔を上げると、母の兩眼には涙が一杯溜つてゐた。

幸ひに格子戸が開いて父親の歸つて來た氣色がしたので、話はそれで切れて、母親は階下へ下りて行つた。

後で久一は、下山家の一粒種である筈の自分の身を省みた。

親子夫婦揃つたその夜の晩餐の座は平生の通りであつた。酒量の減つてゐる父親は、銚子一本の晩酌で陶然として、昔を語り今を語つた。久一は煙草を吸ひながら夕刊を讀んで、その中の二三の記事を話した。

（七）

「お前は××へ歸りたいんだつて？」と、久一はその夜、溫められた寢卷に着替えてから云つた。みよ子が默つてゐるので、

「用事があつて歸るのか。それともこの家にゐたくなくなつたのか」と、重ねて訊ねた。

「どちらでもありません」と、みよ子は突つかゝるやうに答へて、「わたし、東京には一人も親身の相談相手は無いんですから」

「マア××へ行きたけりや行つといでな。僕は決して妨げやしないよ」

「あなたは……」と、みよ子はふと涙聲になつていきり立つて、「あなたはわたくしが早く家を出て行けばいゝと待つてるんだわ。お母さんと連合して兩方からわたしを苛んで、ゐようにもゐられないようにしてるんです。卑怯ぢやあり

ませんか。そんなになされてまで此處に置いて貰はうと、わたし思つてやしないの。……だけど、わたしにどんな罪があるんです。どれほどの大きな落度があるんです。ハッキリわたしの腑に落ちるやうに聞かせて貰ひたいの。……わたし監獄へ入るやうにお父さんに勸められてこの家へ來たのぢやなくつてよ」

「僕はお前に罪を着せた覺えはない」

久一は、BでもSでもKでも、女房を持つた男が皆んなこんな性の惡い芝居染みたことをし合つたり言ひ合つたりしてゐるのかと思ひながら、他人はとに角、自分には云ひやうのない不快が胸に込上つた。で、こんな芝居の一刻も早く切上げられるのを望んで、「お前も保養のつもりで故鄕へ行つて來たらいゝぢやないか。僕から手紙を出しといて、お前の立つ時には停車場へ見送つてやるよ」と、宥めるやうに云つた。

「こんな時に實家へ歸つたつて保養になんかなりやしないわ。それにあなたに見送つて頂くなんてそんな悠長な考へは持つてゐないの」

「ぢや、どうする氣だね」

「それは聞かないでゐて下さい。大きなお世話だと云ひたくなるわ」

妻の口からこれまでに出たことのないふてくしい言草のやうに、久一の耳に響いたので、

「しかし、お前はまだ下山家の一人なのだからね。お前の獨斷で勝手なことをする譯には行くまい」と、夫たる威を見せて云つたが、それだけでは蟲が收まらなくつて、「お前は親類の中だと云つてゐた富岡にでも相談しようといふ腹なのか」と、自分でも餘計なことゝ氣づきながら云つた。

「富岡さんがどうしたんです？」

涙が稍々乾いて、神經も稍々鎭まりかけてゐたみよ子は、嶮しい目を据ゑた。富岡の名を口にした最初の一言で、此間からの奥齒に物の挾まつたやうな母の言葉などが、明らかな意味をもつて、邪慳に胸に響いたのであつた。

「富岡さんがどうしたと云ふんです？　わたし譯を聞かなきや承知しませんよ」

「別に重大な譯はありやしないが……」と、久一は言淀んだ。こんな時にこそ例のやうに母親が來て呉れゝばと望んで耳を欹てたが、階下では最早みんなが熟睡してゐるのか、コトリとも音がしなかつた。

「だつてお母さんも、富岡さんがどうのかうのとをり〱云つてゐなさるんですもの、どうも變だ〱と思つてたら、今やうやく分つてよ。……そんな恐ろしい疑ひを掛けられて、侮辱されても、わたしは默つて笑つて濟ますと思つてんですか。……さあ、謝まりなさい。わたしの前へ兩手をついて、根もないことを疑ぐつて惡かつたとお詫びをなさい」

妻の激しい權幕に、久一は云ひやうのない不快と間の惡さとを感じた。

「マアいゝぢやないか。僕は夢にもお前を疑つちやゐないよ。お母さんが何と云つたか知らないが、お母さんの云つことを僕に塗りつけちや溜らないね」

「實家の母がわたしのことを心配して、時々樣子を見に行つて呉れと、富岡さんに頼んだから、あの人は來て呉れたのです。好意をもつて來るものを無愛想にあしらふ譯には行かないぢやありませんか。先方から親切な手紙を呉れるのを、知らん顏して打遣らかしとくこともわたしには出來ないんですの」

「お前が富岡の所へ遊びに行つたつて、僕は何とも思やしないよ。僕も事によつたらその人と交際してもいゝと思つてるくらゐだ」

寢卷一枚着けたゞけで寒さにも惱まされてゐた久一は、妻の態度の稍々鎭まつたのを見ると、寢床の中へ潜り込んで、「後の話は明日の事にして、今夜はもう寢なさいよ」と云つて目を瞑つた。

みよ子は暫く壁に向つて坐つて、自分の身の處置を考へてゐたが、夫の寢息を聞くと、獨り起きてゐるのが張合ひがなくなつて、電氣を消して寢床へ入つた。夜が更けるにつれて寒さうな風が勢ひを增して、雨戸に音を立てた。みよ子は東京にゐる唯一の同鄕の知人として、何氣なく應對して、手紙の遣取りをもしてゐた富岡の事を思出してゐた。意地くね惡い老婆に對する敵意が新たに感ぜられたが、それとともに、富岡に對する親しみの新たに加はるのをどうすることも出來なかつた。會つた時に故鄕の話をしたり幼かつた時の話をしたり、あるひは彼女自身のまだ知らない東京の名所や芝居の話を聞いたりするだけであつた富岡に、自分の身に關はつたもつと立ち入つたことを打明けたいやうな氣がしだした。この家を出れば、廣い東京に火鉢に當らせて呉れる所一つ無いのを思ふと、富岡のゐる門前町の下宿屋でも手賴りにしたくなつた。

みよ子は眞夜中に見てゐた惡夢から醒めると、夫に向つて何か云つてやりたくつて、荒々しく起上つて電氣を點けた。すると、同じやうに惡夢を見てゐた久一は、口をモグ／＼させながら薄目を開けて、妻のしどけない立ち姿を見上げて、

「どうかしたのか」と、夢のやうに云つた。

「わたし、夜が明けてお母さんの顏を見るのがいやだから、これから出て行きます」と、みよ子は咄嗟に思ひついて云つた。

「下らんことを云はないで寢ろ／＼」と、久一は云つて目を閉ぢたが、みよ子がなほ寢卷のまゝ立つてゐるので、頭を

持上げて手を伸して、妻の足を捉へて、「寝ろつたら寝ろよ。お母さんに知れるのがいやだつても、今時分出て行きや階下の者が目を醒まして引留めるに極つてらあ」

みよ子は夫に足を引かれるのをいゝ機會として、蒲團の上に俯伏して、「口惜しい〳〵」と、續けざまに聲を震はせた。そして、夫の手で燈火が消されたのを幸ひに、温い夜具の中へ入つた。

「口惜しい〳〵」といふ怨み聲は、此間まで快活であつた彼女の身體の何處から絞り出されたのかと、久一は自分の耳に留つたそのいやな音聲を掻きむしりたかつた。そして、階下の寢室で父と母とが平和な睡りを貪つてゐるのが皮肉に感ぜられた。

毎朝床離れを苦しがつてゐた久一も、翌朝は妻が雨戸を開けかけると同時に跳ね起きて、縁側に立つて、疼いやうな寒い風に觸れた。が、悪夢の襲つて來る温い寢室に蒸けてゐるよりは、凍つてゐる大地を踏んで行つた方が遙かに氣持がいゝやうに思はれた。

「母がどう云つて留めようとも、僕が親爺に話して許可を得てやるから、お前は今日直ぐにでも故郷へ立つことにしたらいゝだらう」と云つたが、みよ子は默つてゐた。

久一は、妻が顏を見るのも厭だと云つてゐた母親の差圖を受けて、何時もの通りに家事の手助けをしてゐるのを不思議に思ひながら、平生よりも早目に家を出た。無斷に外で夜を更かせたり、他所で飲食したりしてさへ、母親が一方ならぬ心配をするのだから、夕方には、珈琲店に寄つて、温い飲料を取つたくらゐなところで我慢して、不承々々に家へ歸つたが、みよ子の身に異狀はなかつた。顏を見るのもいやだと云つてゐた母親の側で家事をいそしんでゐた。そして就眠時にも昨夕のやうな不穩な口は利かなかつた。夫の方から問ひかけることに簡單に答へて、冷靜な顏して枕に就いた。

このまゝ無事に済んで、修善寺行き以前のやうな状態に後戻りするのかと、久一は變な氣がしたが、それは幸福とも思はれなかつた。母の言葉妻の言葉は、何時までも彼れの心から離れなかつた。三十年の昔の暗い秘密の影を微見かした母の言葉は、彼れをして母の顔から眼を背けさせた。

「故郷へ行きたけや僕から親爺にさう云つてやるぜ」と、久一は改めてみよ子に云つたが、

「あなたに云つて頂かなくつてもいゝの」と、みよ子はたゞ空虚な返事をした。

（八）

久一は焦燥に堪へないやうな氣持で數日を過した。何時戸外から歸つて來ても、みよ子が從來の通りに、茶の間か臺所か、あるひは二階かに、ちやんと根を据ゑてゐるのが齒痒く思はれた。みよ子が上邊だけでも落着いてゐるのに滿足してゐるらしい母親の態度も牴牾しかつた。

ところが、ある日の午後、會社の小使が富岡三郎といふ名刺を、彼れの机の上へ持つて來たので、久一は暫く念頭を去つてゐたその男の顔を思出して、胸を騷かせた。

「ぢや、通して置け」と云つて、煙草一本吸盡くす間、相手の用向きについて取留めのない想像に耽つてから、應接所へ出掛けた。椅子から立ち上つた富岡の顔は、かねて記憶に刻まれてゐた顔よりも、もつと元氣がよかつた。

「お宅へはあの後一二度お伺ひしましたが、御旅行中だとかで、お目に掛かれませんでした」と、云つて、富岡は旅行先のことをいろ〳〵と訊ねた。

久一は、相手の用向き如何に拘はらず、自分の友人などからは得られないやうな興味を感じて來たので、「君の事はあの後いろ〳〵聞いてることもあつて、一度ゆつくり話したいと思つてゐたんですが、この頃は暫らく僕の家へ入らつし

やらんやうですねえ」

「たびたびお伺ひしちや失禮だと思ひまして」と、富岡は輕く答へて、「實は一度極つてゐた××會社の口がふいになつて、閒暇ついてゐるところなんです。今日突然お伺ひしたのも、あなたからお父さんにお願ひしたら、私にでも出來さうな仕事を何處かに見つけて頂けやしないかと思つてゞすが、…………いかゞでせう。御周旋は願はれますまいか」「さうですね。親爺にさう云つて置きませう」久一は世間並の挨拶として、さう答へたが、生活のための求職にはあまり同情は起らなかつた。「君の下宿屋は僕の近所ださうだから、散歩の次手にお寄りするかも知れませんよ」と馴々しく云つて、椅子を離れると、

「職業の御周旋は別として、私のやうなものにでも御用がおありでしたら、何時でもお命じ下さいまし」と、富岡は頬に似合はず、卑下した口を利いて出て行つた。

久一は富岡に會つたことは父にも母にもみよ子にも知らさなかつたが、翌朝、久一が楊枝を使ひながら茶の間で新聞を讀んでゐるところへ、下女がいつものやうに門側の郵便函から持つて來た數通の手紙や端書の一つは、富岡からのであつた。

「同じく令夫人様としてあるぜ」と、云つて、妻に見せて、久振りに微笑を與へた。

「富岡さんからだつて？何を云つて來たのだい」と、母親の目は光つた。

「あんな立派な體格をしてゐながら、喰ふに困つてるんですつて」

「さうかい。口では景氣のよさゝうなことを云つてゐたけれど、それでお金でも貸して呉れつて云つて來たのかい」

が、みよ子は、自分達二人へ宛てて、職業の周旋を賴むと、いやに謙遜した文句を連ねた端書を見て、富岡の遊び半分の筆すさみのやうにひそかに思つてゐた。

「それだから、さういふことを賴みたいために、來るたびに私達にうまいお世辭なんか云つてゐたのだね」と、目をしかめて端書を覗きながら云つて、機嫌のいゝ聲して、「みよの家とは親類の端になると云ふのだから、此方で口添へして、仕事を捜して上げたらいゝだらう」と自分からでも父親にそのことを傳へようとした。

母親が奥の座敷へ入つて行つた隙を見て、「お母さんとお前との間のイキサツも何でもなしに濟むんだね。お母さんも富岡に惡意を持たなくなつたやうだから」と、久一が云ふと、

「どうですかね。富岡さんの職業のことなんか、此方で構つて下さらなくつてもいゝの。わたしのためにそんな御面倒をかけたくないの」と、みよ子は頑なに云つて、「今度のことで下山といふ家の中の眞相がよく分りましたよ。わたし怖くなつてよ」

「何が？」

「口に出しちや云へないけれど……」

そこへ、母親の足音がしたので、みよ子の言葉は止切れたが、意味ありげな二人の樣子は母親の目に留まるほどだつた。

「今日は溫かさうだから、梅見にでも行つて來ちやどうだい」と、二人に媚びるやうに云つた。

「お前遊びに出る氣があるかい」久一は母の勸めを珍らしく思つて、妻の同意を待設けないで云つたが、「えゝ。お伴しますわ」と、みよ子は案外快く應じた。

「ぢや、出掛けようかねえ」

會社の缺勤などは、父に一言斷はつて置けばいゝのだから、直ぐに身仕度に取掛つたが、久一は夫婦連れの物見遊山といふBやKやSの眞似事をこれからするのが擽つたくなつた。

母親はみよ子の髮の世話衣服の世話をしながら、「次手に寫眞でも撮つといでな」と、獨りで喜んだ。家庭の安穩を喜んでゐた。

門口まで母親に見送られて、二人は春のやうな溫かい光の中へ出て行つた。梅見にと云はれたのだから、梅の有る手近かな公園の方へ先づ足を向けた。

「歸りに三田の××軒へ寄つて寫眞を撮つて來ようかね」と、久一は結婚當時に行つたことのある寫眞屋を思ひ出して云ふと、

「あなたはお母さんの命令通りになつてゐらつしやるのね」と、みよ子は少し冷かしたやうに云つた。

「それがいけないのかい」

「いけないつて譯はないでせうけれど、あなたは三十年の間お母さんの心持通りに育てられて來たのね。お父さんの感化は殆んど無いやうに思はれてよ」

「それがお前にどういふ關係があるんだい」久一は烈しく問詰めながら、疑ひの雲に胸の鎖されるのを覺えた。

「わたしたゞさう思つたゞけなの。そして、自分が何も知らないで馬鹿だつたことにこの頃やうやく氣がつきましたよ」

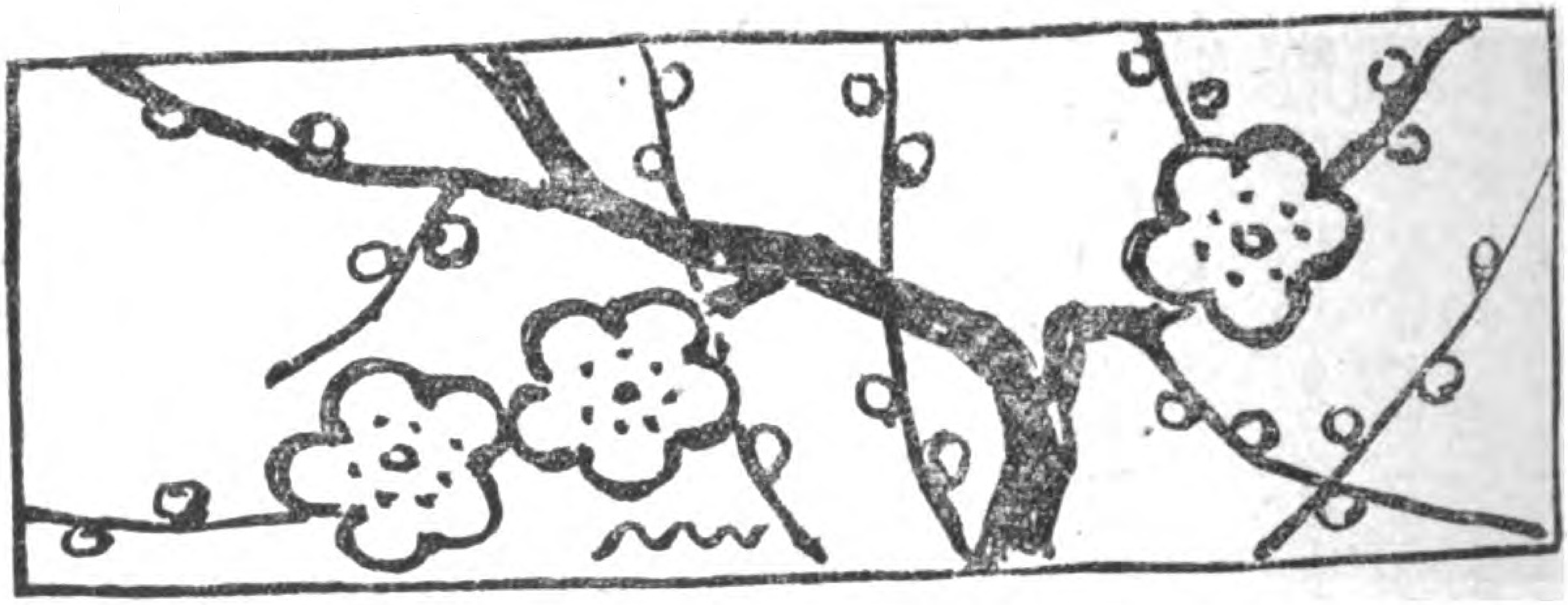
「そんなことを云ひたいために、面白くもない梅見なんかに假言付けて出て來る氣になつたのかい」

「わたし、今日はいやなことを云つてあなたを怒らせようと思つてやしないわ。あなたがお母さんの心持通りになつていらつしやるのを不幸だと獨りで同情してゐるんですもの」

「お前よりも僕の方が不幸なのかい」久一は妻に見下されてゐる自分の見窄らしさを感ずるとともに、妻の同情を得たゝめに何の幸福も自分に加はらないことが感ぜられた。

「だから、わたし、これまでとは量見を持直して、あなたのためにはどんなにしてゞも盡すつもりなのよ」

二三日來獨りで思込んだ決心覺悟を、みよ子が得意げに話出すのを、久一は呆氣に取られて聞いてゐた。



恩讐の彼方に

菊池寛

一

市九郎は、主人の切り込んで來る太刀を受け損じて、左の頬から顎へかけて、微傷ではあるが、一太刀受けた。自分の罪を――縱令向ふから挑まれたとは云へ、主人の寵妾と非道な戀をしたと云ふ、自分の致命的な罪を、意識して居る市九郎は、主人の振り上げた太刀を、必至な刑罰として、譬へその切先を避くるに努むる迄も、夫に反抗する心持は、少しも持つては居なかつた。彼は、たゞかうした自分の迷から、命を捨てることが、如何にも惜しまれたので、出來る丈は逃れて見たいと思つて居た。それで、主人から不義を云ひ立てられて斬り付けられた時、有合せた燭臺を、早速の獲物として、主人の鋭い太刀先を避けて居た。が、五十に近いとは云へ、まだ筋骨のたくましい主人が、疊みかけて切り込む太刀を、攻撃に出られない悲しさには、何時となく受け損じて、最初の一太刀を、左の頬に受けたのである。が、一旦血を見ると、市九郎の心は、忽ちに變つて居た。彼の分別のあつた心は、闘牛者の槍を受けた牡牛のやうに荒んでしまつた。何うせ死ぬのだと思ふと、其處に世間もなければ、主從もなかつ

た。今迄は、主人だと思つて居た相手の男が、たゞ自分の生命を、脅さうとして居る一個の動物──夫も兇惡な動物としか、見えなかつた。彼は猛然として、攻撃に轉じた。彼は「おう」と叫きながら、持つて居た燭臺を、相手の面上を目がけて投げ打つた。市九郎が、防禦の爲の防禦をして居るのを見て、氣を許してかゝつて居た、主人の三郎兵衞は、不意に投げ付けられた燭臺を受けかねて、その蠟受けの一角が、したゝかに彼の右眼を打つた。市九郎は、相手のたぢろぐ隙に、脇差を拔くより早く飛びかゝつた。

「おのれ、手向ひするか！」と、三郎兵衞は激怒した。市九郎は無言で付け入つた。主人の三尺に近い太刀と、市九郎の短い脇差しとが、二三度烈しく打ち合ふた。

主從が必死になつて、十數合太刀を合はす間に、主人の太刀先が、二三度低い天井をかすつて、屢々太刀を操る自由を失はうとした。市九郎は其處へ付け入つた。主人は、その不利に氣が付くと自由な戸外へ出やうとして、二三步後退りして椽の外へ出た。その隙に市九郎が、尙も付け入らうとするのを、主人は「えい」と焦だつて切下した。が、焦だつた餘りその太刀は、椽側と、座敷との間に垂れ下つて居る鴨居に、不覺にも二三寸切り込まれた。

「しまつた」と、三郎兵衞が、太刀を引かうとする隙に、市九郎は踏み込んで、主人の脇腹を思ふ樣横に薙いだのであつた。

敵手が倒れてしまつた瞬間に、市九郎は我に復つた。今迄昂奮して朦朧として居た意識が、漸く落着くと、彼は、自分が主殺しの大罪を犯したことに、氣が付いて、後悔と、恐怖との爲めに、其處に半臥つてしまつた。

夜は初更を過ぎて居た。母屋と、仲間部屋とは、遠く隔つて居るので、主從の恐ろしい格鬪は、母屋に住んで居る女中以外、まだ何人にも知られなかつたらしい。その女中達は、此の烈しい格鬪に氣を失ひ、一間の内に集まつて、たゞ身

を顫はせて居るのであつた。

市九郎は、深い悔恨に囚はれて居た。一個の蕩兒であり、無頼の若武士ではあつたけれども、まだ惡事と名の付くことは、何もして居なかつた。まして八逆の第一なる主殺しの大罪を犯さうとは、彼の思ひも付かぬ事だつた。彼は、血の付いた脇差を取り直した。主人の妾と懸想して、その爲に成敗を受けやうとした時、却つてその主人を殺すと云ふことは、何う考へても、彼にいゝ所はなかつた。彼は、まだビク／＼と動いて居る、主人の屍體を尻眼にかけながら、靜に自殺の覺悟を堅めて居た。すると、その時、次の間から、今迄の大きい壓迫から、逃れ出たやうな聲がした。

「ほんとにまあ、何うなる事かと思つて心配したわ。お前が眞二つにやられた後は、私の番ぢやあるまいかと、先刻から、屛風の後で息を凝して見て居たのさ。が、ほんとうにいゝ按配だつたね。かうなつちや、一刻も猶豫はして居られないから、在金をさらつて逃げるとしやう。まだ仲間達は氣が付いて居ないやうだから、逃げるなら今の裡さ。乳母や、女中などは、臺所の方でガタ／＼顫えて居るらしいから、私が行つて、じたばた騷がないやうに云つて來やうよ。さあ！お前は在金を探して下さいよ」と、云ふその聲は、確に顫へを帶びて居た。が、さうした顫へを、女性としての強い意地で抑制して、努めて平氣を裝つて居るらしかつた。

市九郎は――自分特有の動機を、スッカリ失くして居た市九郎は、女の聲を聽くと、蘇つたやうに活氣づいた。彼は、自分の意志で働くと云ふよりも、女の意思に依つて動く傀儡のやうに立ち上ると、座敷に置いてある桐の茶簞笥に手をかけた。そして、その眞白い木目に、血に汚れた手形を付けながら、引出しをあちこちと探し始めた。が、女――主人の妾のお弓が歸つて來る迄に、市九郎は、二朱銀の五兩包を、たゞ一つ見付けたばかりであつた。お弓は、臺所から引返して來て、その金を見ると、

「そんな端した金が、何うなるものかね」と、云ひながら、今度は自分で、自棄に引出しを引掻き廻した。しまひには、鎧櫃の中迄探したが、小判は一枚も出て來はしなかつた。

「名うての仕末屋だから、瓶にでも入れて、土の中へでも埋めてあるのかも知れない」、さう忌々しさうに云ひ切ると、金目のありさうな衣類や、印籠を、手早く風呂敷包にした。

かうして、この姦夫姦婦が、淺草田原町の旗本中川三郎兵衛の家を出たのは、安永三年の秋の初であつた。後には、當年三歳になる三郎兵衛の一子實之助が、父の非業の死も知らず、乳母の懐ろにスヤ／＼眠つて居るばかりであつた。

二

市九郎とお弓とは、江戸を逐電してから、東海道は態と避けて、人目を忍びながら、東山道を上方へと志した市九郎は、主殺しの罪から、絶えず良心の苛責を受けて居た。が、けんぺき茶屋の女中上りの、莫連者のお弓は、市九郎が少しでも沈んだ様子を見せると、

「何うせ兇状持ちになつたからには、いくらくよ／＼しても仕様がないぢやないか。度胸を据えて、世の中を面白く暮すのが上分別さ」と、市九郎の心に、明暮惡の拍車を加へた。が、信州から木曽の藪原の宿迄來た時には、二人の路用の金は、百も殘つて居なかつた。二人は、窮するに連れて、惡事を働かねばならなかつた。最初はかうした男女の組合せとしては、最も犯し易い美人局を稼業とした。さうして、信州から尾州へかけての宿々で、往來の町人百姓の路用の金を奪つて居た。初の程は、女からの烈しい教唆で、つひ惡事を犯し始めて居た市九郎も、遂には惡事の面白さを味ひ始めた。浪人姿をした市九郎に對して、被害者の町人や百姓は、金を取られながら、頗る柔順であつた。

惡事が段々進歩して行つた市九郎は、美人局からもつと單純な、手數のいらぬ強請をやり、最後には、切取強盜を正當な

稼業とさへ心得るやうになつた。

彼は、何時となしに信濃から木曾へかゝる鳥居峠に土着した。そして晝は茶店を開き、夜は強盗を働いた。

彼はもうさうした生活に、何の躊躇をも、不安をも感じないやうになつて居た。金のありさうな旅人を狙つて、殺すと巧みにその死骸を片附けた。一年に三四度、さうした犯罪を犯すと、彼は優に一年の生活を支へることが出來た。

夫は、彼等が江戸を出てから、三年目になる春の頃であつた。參勤交替の北國大名の行列が、二つばかり續いて通つた爲、木曾街道の宿々は、近頃になく賑つた。殊に此の頃は、信州を始め越後や、越中からの、伊勢參宮の客が街道に續いた。その中には、京から大阪へと、遊山の旅を延すのが多かつた。市九郎は、彼等の二三人を殺して、その年の生活費を得たいと思つて居た。木曾街道にも、杉や檜に交つて咲いた山櫻が散り始める夕暮のことであつた。市九郎の店に男女二人の旅人が立ち寄つた。夫は明かに夫婦であつた。男は三十を越して居た。女は二十三四であつたらう。伴を連れない氣樂な旅に出た、信州の豪農の若夫婦らしかつた。

市九郎は、二人の身裝を見ると、彼は此の二人を今年の犠牲者にしやうかと、思つて居た。

「もう藪原の宿迄は、何程もあるまいな。」かう云ひながら、男の方は、市九郎の店の前に、足鞋の紐を結び直さうとした。市九郎が、返事をしやうとする前に、お弓が、臺所から出て來ながら、

「左樣でムいます、もう此の峠を降りますれば半道もムいません。まあ、ゆつくり休んでからになさいませ」と、云つた。市九郎は、お弓の、この言葉を聞くと、お弓が既に恐ろしい計畫を、自分に勸めやうとして居るのを覺えた。藪原の宿迄には、まだ二里に餘る道を、もう何程もないやうに云ひくるめて、旅人に氣をゆるさせ、彼等の行程が、夜に入るのに乘じて間道を走つて、宿の入口で襲ふのが、市九郎の常套の手段であつた。その男は、お弓の言葉を聽くと、

「それならば、茶なと一杯所望しやうか」と、云ひながら、もう彼等の第一の穽に陥つてしまつた。女は赤い絹の付いた旅の管笠を取り外づしながら、夫の傍に寄り添ふて、腰をかけた。

彼等は、此處で小半刻も、峠を登り切つた疲れを休めると、鳥目を置いて、紫に暮れかゝつて居る小木曾の谷に向つて、鳥居峠を降りて行つた。

二人の姿が見えなくなると、お弓は、それとばかり合圖をした。市九郎は、獲物を追ふ猟師のやうに、脇差を腰にすると、一散に二人の後を追ふた。本街道を右に折れて、木曾河の流に添ふて、險しい間道を急いだ。

市九郎が、藪原の宿手前の並樹道に來た時は、春の長い日が全く暮れて、十日ばかりの月が木曾の山の彼方に登らうとして、ほの白い月しろのみが、木曾山々を微かに浮せて居た。

市九郎は、街道に添ふて生えて居る、一叢の丸葉柳の下に、身を隠しながら、夫婦の近づくのを、徐ろに待つて居た。彼も心の底では、幸福な旅をして居る二人の男女の生命を、不當に奪ふといふことが、どんなに罪深いかと云ふことを、考へずには居なかつた。が、一旦爲しかゝつた仕事を、中止して歸ることは、お弓の手前彼の心に委せぬ事であつた。

彼は、此の夫婦の血を流したくはなかつた。成るべく相手が、自分の脅迫に一言もなく服從して呉れゝばいゝと、思つて居た。若し彼等が路用の金と、衣裝とを出すならば決して殺生はしまいと、思つて居た。

彼の決心が漸く固まつた頃に、街道の彼方から、急ぎ足に近附いて來る男女の姿が見えた。

二人は、峠からの道が、思惰の外に遠かつた爲、疲れ切つたと見え、お互に助け合ひながら、無言の儘に急いで來た。

二人が、丸葉柳の茂みに近附くと、市九郎は、不意に街道の眞中に突立つた。そして、今迄に幾度も口にし馴れて居

る脅迫の言葉を浴せかけた。すると、男は必死になつたらしく、道中差を拔くと、妻を後に庇ひながら身構へした。市九郎は、一寸出鼻を折られた。が彼は聲を勵まして「いやさ、旅の人、手向ひしてあたら命を落すまいぞ。命迄は取らうと云はぬのぢや。在金と衣類とを大人しく出して行け」と、叫んだ。その顔を、相手の男は、ぢーつと見て居たが、

「やあ！　先程の峠の茶屋の主人ではないか」と、その男は、必死になつて飛びかゝつて來た。市九郎は、もう之迄と思つた。自分の顔を見覺えられた以上、自分達の安全の爲、もう此の男女を生かすことは出來ないと思つた。相手が必死に斬り込むのを、巧みに引はづしながら、一刀を相手の首筋に浴せた。見ると連の女は氣を失つたやうに道の傍に蹲くまりながら、ブル／＼と顫えて居た。

市九郎は、女を殺すに忍びなかつた。が。彼は自分の危急には代えられぬと思つた。男の方を殺して、殺氣立つて居る間にと思つて血刀を振り翳しながら、彼は女に近づいた。女は、兩手を合はして、市九郎に命を乞ふた。市九郎は、その時に見つめられると、何うしても刀を下ろせなかつた。が、彼は殺さねばならぬと思つた。此の時市九郎の慾心は此の女を斬つて、女の衣裳を臺なしにしてはつまらないと思つた。さう思ふと、彼は、腰に下げて居た手拭を外づして女の首を絞つた。

市九郎は、二人を殺してしまふと、急に人を殺した恐怖を感じて、一刻も居た堪まらないやうに思つた。彼は、二人の胴卷と、衣類とを奪ふと、あたふたとしてその場から一散に逃れた。彼は、今迄十人に餘る人殺しをしたもの丶、夫は半白の老人とか、商人とか、さうした階級の者ばかりで、若々しい夫婦連を二人迄自分の手にかけたことはなかつた。

彼は、深い良心の苛責に囚はれながら、歸つて來た。そして家に這入ると、直ぐ様、男女の衣裳と、金とを、汚らは

しいもの丶やうに、お弓の方へ投げやつた。女は、悠然として先づ金の方を調べて見た。金は思つたより少く、二十兩を僅に越して居るばかりであつた。

お弓は殺された女の着物を手に取ると、「まあ、黄八丈の着物に紋縮緬の襦袢だね。だが、お前さん！　此女の頭の物は、何うおしだい」と、彼女は詰問するやうに、市九郎を顧みた。

「頭の物！」と、市九郎は半返事をした。

「さうだよ。頭の物だよ。黄八丈に紋縮緬の着付ぢや、頭の物だつて、擬物の櫛や笄ぢやあるまいぢやないか。わたしは、先刻あの女が菅笠を取つた時に、ちらと睨んで置いたのさ。瑇瑁の揃に相違なかつたよ」と、お弓はのしかゝるやうに云つた。殺した女の頭の物の事などは、夢にも思つて居なかつた市九郎は、何とも答へるすべがなかつた。

「お前さん！　まさか、取るのを忘れたのぢやあるまいね。瑇瑁だとすれば、七兩や八兩は確だよ。駈け出しの泥棒ぢやあるまいし、何の爲に殺生をするのだよ。あれ丈の衣裳を着た女を、殺して置きながら、頭の物に氣が付かないとは、お前は、何時から泥棒稼業にお成りなのだえ。何と云ふどぢをやる泥棒だらう。何とか、云つて御覽！」と、お弓は、威丈高になつて、市九郎に喰つてかゝつて來た。

二人の若い男女を殺してしまつた悔に、心の底迄責まれかけて居た市九郎は女の言葉から、深く傷けられた。彼は、頭の物を取る事を、忘れたと云ふ盜賊としての失策を、或は無能を、悔ゆる心は少しもなかつた。自分は、二人を殺した事を、悪い事と思へばこそ、殺す事に氣も顚動して、女がその頭に十兩にも近い裝飾を付けて居る事を全く忘れて居た。市九郎は、今でも忘れて居たことを後悔する心は起らなかつた。強盜に身を落して、利慾の爲に人を殺しては居るものゝ、悪鬼のやうに相手の骨迄は、しやぶらなかつた事を考へると、市九郎は悪い氣持はしなかつた。夫にも拘はらず、お

弓は、自分の同性が無殘にも殺されて、其の身に付けた下衣迄が、殺戮者に對する貢物として、自分の目の前に晒されて居るのを見ながら、尚その飽き足らない慾心は、流石惡人の市九郎の眼をこぼれた頭の物に迄及んで居る、さう考へると、市九郎はお弓に對して、居た堪らないやうな淺ましさを感じた。

お弓は、市九郎の心にかうした激變が、起つて居るのを全く知らないで、

「さあ！　お前さん！　一走り行つてお吳れ。折角、此方の手に入つて居るものを遠慮するには、當らないぢやないか」

と、自分の云ひ分に充分な條理がある事を信ずるやうに、勝ち誇つた表情をした。

が、市九郎は默々として應じなかつた。

「おや！　お前さんの仕事のアラを拾つたので、お氣に觸つたと見えるね。本當に、お前さんは行く氣はないのかい。十兩に近いもうけ物を、みすみすふいにしてしまふ積かい。」と、お弓は幾度も市九郎に迫つた。

何時もは、お弓の云ふ事を、唯々として聽く市九郎ではあつたが、今彼の心は烈しい動亂の中にあつて、お弓の言葉などは、耳に入らない程、考へ込んで居たのである。

「いくら云つても、行かないのだね。それぢや、私が一走り行つて來やうよ。場所は何處なの。矢ッ張り何時もの處なのかい」と、お弓が云つた。

お弓に對して、抑へ難い嫌惡を感じ始めて居た市九郎は、お弓が一刻でも自分の傍に居なくなることを、むしろ欣んだ。

「知れたことよ。何時もの通、藪原の宿の手前の松並樹さ」と、市九郎は吐き出すやうに云つた。

「ぢや、一走り行つて來るから。幸ひ月の夜で戸外は明るいし……。ほんとうに、へまな仕事をするつたら、ありやし

ない」と、云ひながら、お弓は裾をはしをつて、草履をつゝかけると馳け出した。

市九郎は、お弓の後姿を見て居ると、淺ましさで、心が一杯になつて來た。死人の髪の物を剝ぐ爲に、血眼になつて馳け出して行く女の姿を見ると、市九郎はその女に、曾つて愛情を持つて居た丈けに、心の底から淺ましく思はずには居られなかつた。その上、自分が惡事をして居る時、縱令無殘にも人を殺して居る時でも、金を盜んで居る時でも自分がして居ると云ふ事が、常に不思議な分疏になつて、その淺ましさを感ずることが少なかつたが、一旦人が惡事を爲して居るのを、靜かに傍觀するとなると、その恐ろしさ、淺ましさが、飽くまで明かに、市九郎の目に映らずには居なかつた。自分が、命を賭して迄得た女が、僅か五兩か十兩の瑇瑁の爲に、女性の優しさの凡てを捨てゝ、屍骸に付く狼のやうに、殺された女の死骸を慕ふて馳けて行くのを見ると、市九郎は、もう此の罪惡の棲家に、此の女と一緒に一刻も居た堪まれなくなつた。さう考へ出すと、自分の今迄に犯した惡事が、一々蘇つて自分の心を喰ひ割いた。絞め殺した女の眸や、血みどろになつた商人の呻き聲や、一太刀浴びせかけた白髪の老人の悲鳴などが、一團になつて市九郎の良心を襲ふて來た。彼は、一刻も早く自分の過去から逃れたかつた。彼は、自分自身からさへも、逃れたかつた。まして自分の凡ての罪惡の、萠芽であつた女から、極力逃れたかつた。彼は、決然として立ち上つた。彼は、二三枚の衣類を風呂敷に包んだ。先刻の男から盜つた胴卷を、當座の路用として懷ろに入れたまゝに、仕度も整へずに、戶外に飛び出した。が、十間ばかり走り出した時、ふと自分の持つて居る金も、衣類も、悉く盜んだものであるのに氣が付くと、跳ね返されたやうに立ち戻つて、自分の家の上り框へ、衣類と金とを、力一杯投げ付けた。

彼は、お弓に逢はないやうに、道でない道を木曾川に添ふて、一散に走つた。何處へ行くと云ふ當もなかつた。たゞ自分の罪惡の根據地から、一寸でも、一分でも遠い所へ逃れたかつた。

三

二十里に餘る道を、市九郎は、山野の別なく唯一息に走せて、明くる日の午下り、美濃國の大垣在の、淨願寺に駈け込んだ。彼は、最初から此の寺を志して來たのではない。彼の逃走の中途、偶然此の寺の前に出た時、彼の惑亂した懺悔の心は、ふと宗教的な光明に縋つて見たいと云ふ、氣になつたのである。

淨願寺は、美濃一圓眞言宗の總録であつた。市九郎は、現住明遍大徳衲の袖に縋つて、懺悔の眞を致した。上人は道に、此の極重惡人をも捨てなかつた。市九郎が有司の下に、自首しやうかと云ふのを止めて、

「重ね〳〵惡業を重ねた汝ぢやから、有司の手に依つて身を梟木に晒され、現在の報ひを自ら受くるのも一法ぢやが、それでは永氷未劫焦熱地獄の苦艱を受けて居らねばならぬぞよ。夫れよりも、佛道に歸依し、衆生濟度の爲に、身命を捨てゝ人を救ふと共に、汝自身を救ふのが肝心ぢや」と、教化した。市九郎は、上人の言葉を聽いて、又更に懺悔の火に心を爛らせて當座に出家の志を定めた。彼は、上人の手に依つて得道して、了海と法名を呼ばれ、只管佛道修業に肝膽を碎いたが、道心勇猛の爲か、僅か半年に足らぬ修行に、行業は氷霜よりも皎く、朝には三密の行法を凝し、夕には秘密念佛の安座を離れず、二行彬々として豁然智度の心萠し、天晴れの知識となり濟した。彼は、自分の道心が定まつて、もう動かないのを自覺すると、師の坊の許しを得て、諸人救濟の大願を起し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

美濃の國を後にして、先づ京洛の地を志した。彼は、幾人もの人を殺しながら、縱令僧形の姿なりとも、自分が生き永らへて居るのが心苦しかつた。諸人の爲、身を粉々に碎いて、自分の罪障の萬分の一をも償ひたいと思つて居た。殊に自分が、木曾山中にあつて、行人をなやませたことを思ふと、道中の人々に對して、償ひ切れぬ負擔を持つて居るやうに思はれた。

行住座臥にも人の爲を思はぬことはなかつた。道路に難澁の人を見ると、彼は、手を引き、腰を押して、その道中を助けた。病に苦しむ老幼を負ふて、數里に餘る道を遠しとしなかつたこともあつた。本街道を離れた村道の橋でも、破壞されて居る時は、彼は自ら山に入つて、樹を切り、石を運んで修繕した。路の崩れたのを見れば、土砂を運び來つて繕ふた。かくして、畿內から、中國を通して、只管善根を積むことに腐心したが、身に重なれる罪は、空よりも高く、積む善根は土堆よりも低きを思ふと、彼は今更に、半生の惡業の深きを悲しんだ。市九郎は、些細な善根によつて、自分の極惡が償ひ切れぬことを知つて、心を暗ふした。逆旅の宿の寢覺にはかゝる賴母しからぬ報償をしながら向き生を貪つて居ることが、甚だ不甲斐ないやうに思はれて、自ら殺したいと思つたことさへあつた。が、その度毎に、不退轉の勇を鼓し、諸人救濟の大業を爲すべき機緣の來らんことを祈念した。

享保九年の秋であつた。彼は、赤間ケ關から小倉に渡り、豐前の國宇佐八幡宮を拜し、山國川を溯つて耆闍崛山羅漢寺に詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷に添ふて辿つた。

筑紫の秋は、驛路の宿り毎に更けて、雜木の森には櫨赤く爛れ、野には稻黃色く實り、農家の軒には、此の邊の名物の柿が、眞紅の珠を聯ねて居た。

夫は八月に入つて間のないある日であつた。彼は、秋の朝の光に輝く、山國の清冽な流れを右に見ながら、三口から佛坂の山道を超えて、午近き頃樋田の驛に着いた。淋しい驛で晝食の齋に有り付いた後、再び山國谿に添ふて南を指した。樋田驛から出外れると、道は又山國川に添ふて、火山岩の河岸を傳ふて走つて居た。

歩み艱い石高道を、市九郎は、杖を賴りに辿つて居た時、ふと道の傍に、此の邊の農夫であらう、四五の人々が罵り騷いで居るのを見た。

市九郎が近附くと、その中の一人は、早くも市九郎の姿を見付けて、

「之は、よい所へ來られた。非業の死を遂げた、哀れな亡者ぢや。通りかゝられた縁に、一遍の回向をして下され」と、云つた。

非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた、旅人の屍骸ではあるまいかと思ふて、市九郎は、過去の惡業を想起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚の竦むのを覺えた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々皮肉の破れて居るのは、如何した仔細ぢや」と、市九郎は、恐る〳〵訊いた。

「御出家は、旅の人と見えて、御存じあるまいが、此の川を半町も上れば、鎖渡しと云ふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が、悉く難儀する所ぢやが、此の男は此の川上柿坂郷に住んで居る馬士ぢやが、今朝鎖渡しの中途で、馬が狂ふた爲、五丈に近い所を眞逆樣に落ちて、見られる通の無殘な最後ぢや」と、その中の一人が云つた。

「鎖渡しと申せば、兼々難所とは聞いて居たが、か樣なあはれを見ることは、度々厶るかの」と、市九郎は、死骸を見守りながら、打ちしめつて聞いた。

「一年に三四人、多ければ十人も、思はぬ憂目を見ることがある。無双の難所故に、風雨に桟が朽ちても、修繕も思ふに委せぬのぢや」と、答へながら、百姓達は死骸の始末にかゝつて居た。

市九郎は、此の不幸な遭難者に、一遍の經を讀むと、足を早めてその鎖渡しへと急いだ。

其處迄は、もう一町もなかつた。見ると、川の左に聳える荒削りされたやうな山が、山國川に臨む所で、十丈に近い絶壁に斫り截たれて、其處に灰白色のギザ〳〵した襞の多い肌を露出して居るのであつた。山國川の水は、其の絶壁に吸ひ寄せられたやうに、此處に慕ひ寄つて、絶壁の裾を洗ひながら、濃緑の色を湛へて、渦卷いて居る。

里人等が、鎖渡しと云つたのは之だらうと、彼は思つた。道は、その絶壁に絶たれ、その絶壁の中腹を、松、杉などの丸太を、鎖で聯ねた棧道が、危うげに傳つて居る。かよはい婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰ひで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戰くも理であつた。

市九郎は、岩壁に縋りながら、慄く足を踏み占めて、漸く渡り終つて其の絶壁を振向いた刹那、彼の心には突差に大誓願が、勃然として萌した。

積むべき贖罪の餘りに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業に逢ふことを祈つて居た。今目前に行人が難儀し、一年に十に近い人の命を奪ふ難所を見た時、彼は、自分の身命を捨てゝ、此の難所を除かうと云ふ思付が旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百餘間に餘る絶壁を刳貫いて道を通じやうと云ふ、不敵な誓願が、彼の心に浮んで來たのである。

市九郎は、自分が求め歩いたものが、漸く茲で見附かつたと思つた。一年に十人を救へば、十年には百人、百年、千年と經つ内には、千萬の人の命を救ふことが出來ると思つたのである。

かう決心すると、彼は、一途に實行に着手した。その日から、羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川に添ふた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めた。

が、何人も此の風來僧の言葉に、耳を傾ける者はなかつた。

「三町をも超える大盤石を、刳貫かうと云ふ瘋狂人ぢや、ハヽヽ」と、嗤ふものは、まだよかつた。

「大騙りぢや、針のみゝそから天をのぞくやうな事を云ひ前にして、金を集めやうと云ふ、大騙りぢや」と、中には市九郎の勸説に、迫害を加ふる者さへあつた。

市九郎は、十日の間、徒らな勸進に努めたが、何人もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、獨力此の大業に當ることを決心した。彼は、石工の持つ槌と、鑿とを手に入れて、此の大絶壁の一端に立つた。夫は、一個のカリカチユアであつた。削落し易い火山岩であるとは云へ、川を壓して聳へ立つ蜒々たる大絶壁を、市九郎は、己一人の力で、刳貫かうとするのであつた。

「到頭氣が狂つた!」と、行人は、市九郎の姿を指しながら、嗤つた。

が、市九郎は屈しなかつた。山國川の淸流に沐浴して觀世音菩薩を祈りながら、渾身の力を籠めて、第一の槌を下した。

•

夫に應じて、たゞ二三片の碎片が、飛び散つたばかりであつた。が、再び力を籠めて第二の槌を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から、分離したばかりであつた。第三、第四、第五と市九郎は懸命に槌を下した。空腹を感ずれば、近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて槌を下した。懈怠の心を生ずれば、只眞言を誦へて、勇猛の心を振ひ起した。一日、二日、三日市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人は、その傍を通る度に、嘲笑の聲を送つたが、市九郎の心は、その爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に槌を持つ手に力を籠めた。

やがて、市九郎は、雨露を凌ぐ爲に、絶壁に近く木小屋を立てた。朝は、山國川の流が、星の光を寫す頃から起き出で、夕は瀨鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃迄も、止めなかつた。が、行路の人々は、尙嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたはけぢや。」と、市九郎の努力を眼中に置かなかつた。

が、市九郎は一心不亂に槌を振つた。槌を振つて居さへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔も、其處に無かつた。極樂に生れやうと云ふ、欣求もなかつた。たゞそこに、晴々した精進の心があるばかりであつ

た。彼は出家して以來、夜毎の寢覺めに、身を苦しめた自分の惡業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。彼は益々勇猛の心を振ひ興して、一向專念に槌を振つた。

新しい年が來た。春が來て夏が來て早くも一年が經つた。市九郎の努力は、空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれて居た。夫は、ホンの小さい洞窟ではあつたが、市九郎の强い意志は最初の爪痕を明かに止めて居た。

が、近鄕の人々は又市九郎を嗤つた。

「あれ見られい！狂人坊主が、あれ丈掘り居つた。一年の間、もがいて、たつたあれ丈ぢや……」と、嗤つた。が、市九郎は自分の掘り穿つた穴を見ると淚の出るほど嬉しかつた。夫は如何に淺くとも、自分が精進の力の、如實に現はれて居るものに、相違なかつた。市九郎は年を重ねて、又更に振ひ立つた。夜は如法の闇に、晝も尙薄暗い洞窟の裡に端座して、たゞ右の腕のみを、狂氣の如くに振つて居た。市九郎に取つて、右の腕を振る事のみが、彼の宗教的生活の凡てになつてしまつた。

洞窟の外には、日が輝き月が照り、雨が降り嵐が荒んだ。が、洞窟の中には、間斷なき槌の音のみがあつた。

二年の終にも里人は尙嗤笑を止めなかつた。が、夫はもう、聲に迄は出て來なかつた。たゞ、市九郎の姿を見た後、顏を見合せて、互に嗤い合ふ丈であつた。が、更に一年經つた。市九郎の槌の音は、山國川の水聲と同じく、不斷に響いて居た。村の人達は、もう何とも云はなかつた。彼等が、嗤笑の表情は何時の間にか、驚異の夫に變つて居た。市九郎は、梳らざれば頭髮は何時の間にか、伸びて双肩を掩ひ、浴せざれば垢づきて、人間とも見えなかつた。が、彼は自分が掘り穿つた洞窟の裡に、獸の如く蠢めきながら、狂氣の如くその槌を振ひつゞけて居たのである。

里人の驚異は何時の間にか、同情に變つて居た。市九郎が暫しの暇を盗んで、托鉢の行脚に出かけやうとすると、洞窟の出口に思ひがけなく、一椀の齋を見出すことが、多くなつた。市九郎はこの爲に、托鉢に費すべき時間を、更に絶壁に向ふ事が出來た。

四年目の終が來た。市九郎の堀り穿つた洞窟は、もはや五丈の深さに達して居た。が、その三町を超ゆる絶壁に比ぶれば、其處に尙、亡羊の嘆があつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものゝ、未だ、かくばかり見えすいた徒勞に合力するものは、一人もなかつた。市九郎は、たゞ獨りその努力を續けねばならなかつた。が、もう堀り穿つ仕事に於て、三昧に入つて居た市九郎は、たゞ槌を振ふ外は何の存念もなかつた。たゞ土鼠のやうに、命のある限り、堀り穿つて行く外には、何の他念もなかつた。彼は、只一人拮々として堀り進んだ。洞窟の外には春去つて秋來り、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の槌の音のみが響いた。

「可哀さうな坊樣ぢや。物に狂つたと見え、あの大盤石を穿つて行くわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを」と、行路の人々は、市九郎の空しい努力を、悲しみ始めた。が、一年經ち二年經ち、丁度九年目の終りに、穴の入口より奥迄、二十二間を計る迄に、堀り穿つた。

樋田郷の里人は始めて市九郎の事業の可能性に氣が付いた。一人の痩せはてた乞食僧が九年の力で、之迄堀穿ち得るものならば、人を增し、歳月を重ねたならば、此の大絶壁を、穿ち貫く事も、必ずしも不思議な事ではないと云ふ考が、里人等の胸の中に銘せられて來た。九年前、市九郎の勸進を斥けた山國川に添ふ七郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に付いた。數人の石工が市九郎の事業を、援ける爲に雇はれた。もう、市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の槌の音は、勇ましく賑やかに、洞窟の中から、洩れ始めた。

が、翌年になつて、里人達が工事の進み方を測つた時、夫れがまだ絶壁の四分の一にも達して居ないのを、發見すると、里人達は再び落膽疑惑の聲を洩した。

「人を増しても、とても成就はせぬ事ぢや。あたら、了海どのに騙かされて入らぬ物入をした」と、彼等は捗らぬ工事に、何時の間にか倦き切つて居つた。市九郎は、又獨り取殘されねばならなかつた。彼は、自分の傍に槌を振る者が、一人減り二人減り、遂には一人も居なくなつたのに氣が付いた。が、彼は決して去る者を追はなかつた。默々として、自分一人その槌を振ひ續けたのみである。

里人の注意は、全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が、深く穿たれゝば、穿たれるほど、その奥深く槌を振ふ市九郎の姿は、行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は、闇の裡に閉された洞窟の中を透し見ながら、

「了海さんは、まだやつて居るのかなあ」と、疑つた。が、さうした注意も、しまひには、段々薄れてしまつて、市九郎の存在は、里人の念頭から、屢々消失せんとした。が、市九郎の存在が、里人に對して沒交渉であるが如く、里人の存在も亦市九郎に沒交渉であつた。彼にはたゞ、眼前の大岩壁のみが、存在するばかりであつた。

然し、市九郎は、洞窟の中に端座してから、もはや十年にも餘る間、暗澹たる冷めたい石の上に、坐り續けて居た爲に、顏は色蒼ざめ双の眼は窪んで、肉は落ち骨露はれ、此の世に生ける人とも見えなかつた。が、市九郎の心には、不退轉の勇猛心頻りに燃え旺つて、たゞ一念に穿ち進む外は、何物もなかつた。一分でも、一寸でも岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎は、たゞ一人取殘されたまゝに、又三年を經た。すると、里人達の注意は、再び市九郎の上に歸りかけて居た。彼等が、ホンの好奇心から、洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間、川に面する岩壁には、採光の窓が一つ穿たれ、

もはや、此の大岩石の三分の一は、主として市九郎の瘠腕に依つて、貫かれて居る事が判つた。

彼等は、再び驚異の眼を刮いた。彼等は、過去の無智を恥ぢた。市九郎に對する尊崇の心は、再び彼等の心に復活した。やがて、寄進された十人に近い石工の槌の音が、再び市九郎の夫に和した。

又一年經つた。一年の月日が經つ裡に、里人達は、何時かしら目先の遠い出費を、悔ひ始めて居た。寄進の人夫は、何時の間にか、一人減り二人減つて、おしまひには、市九郎の槌の音のみが、洞窟の闇を、打ち顫はして居た。が、傍に人が居ても、居なくても、市九郎の槌の力は變らなかつた。彼は、たゞ機械の如く渾身の力を入れて、槌を擧げ、渾身の力を以て、之を振り降ろした。彼は、自分の一身をさへ忘れて居た。主を殺した事も、剽賊を働いたことも、人を殺したことも、凡ては彼の記憶の外に、薄れてしまつて居た。

一年經ち、二年經つた。一念の動くところ、彼の瘠せた腕は、鐵の如く屈しなかつた。丁度、十八年目の終であつた。彼は、何時の間にか、岩壁の二分の一を穿つて居た。

里人は、此の恐ろしき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を、少しも疑はなかつた。彼等は、前二回の懈怠を、心から恥ぢ、七郷の人々合力の誠を盡くし擧つて市九郎を援け始めた。その歳、中津藩の郡奉行が、巡視して、市九郎に對して、奇特の言葉を下した。近郷近在から、三十人に近い石工が、蒐められた。工事は、枯葉を燒く火のやうに進んだ。

人々は、衰殘の姿いた〳〵しい市九郎に、

「もはや、そなたは石工共の統領を、なさりませ。自ら槌を振ふには及びませぬ」と、勸めた。が、市九郎は頑として應じなかつた。彼は、倒るれば槌を握つたまゝと、思つて居るらしかつた。彼は、三十の石工が、傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ、懸命の力を盡くすこと、少しも前と變らなかつた。

が、人々が市九郎に、休息を勸めたのも、無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く、坐り續けた爲であらう。彼の兩脚は、永い端座に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いで居た。彼は、僅かの歩行にも杖に縋がらねばならなかつた。

その上、長い間、闇に坐して、日の光を見なかつた爲でもあらう、また不斷に、彼の身邊に飛び散る碎けた石の碎片が、その眼を傷けた爲でもあらう。彼の兩眼は、朦朧として光を失ひ、物のあいろも辨へかねるやうになつて居た。

追がに、不退轉の市九郎も、身に迫る老衰を痛む心はあつた。身命に對する執着はなかつたけれど、中道にして斃れることを、何よりも無念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱ぢや」と、彼は心の裡に叫んで、身の老衰を忘れやうと、懸命に槌を振ふのであつた。

冒し難き大自然の威嚴を示して、市九郎の前に、立ち塞がつて居た岩壁は、何時の間にか衰殘の乞食僧一人の腕に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は、命ある者の如く、一路その核心を貫かんとして居るのであつた。

四

市九郎の健康は、過度の勞働に依つて、痛ましく傷けられて居たが、彼に取つて、夫よりももつと、恐ろしい敵が、彼の生命を狙つて居るのであつた。

市九郎の爲に、非業の横死を遂げた中川四郎兵衛は、家臣の爲に殺害された爲、家事不取締とあつて、家は取潰されその時三歳であつた一子實之助は、緣者の爲に養ひ育てられる事になつた。

實之助は、十三になつた時、初て自分の父が、非業の死を遂げたことを聞いた。殊に、相手が、對等の士人でなくして、自分の家に養はれた奴僕であることを知ると、少年の心は、無念の憤に燃えた。彼は、即座に復讐の一義を、肝深く銘じた。彼は、馳せて柳生の道場に入つた。十九の年に、免許皆傳を許されると、彼は直ちに報復の旅に上つたのである。若し、首尾よく本懐を達して歸れば、一家再興の肝煎もしやうと云ふ、親類一同の激勵の言葉に送られながら。

實之助は、馴れぬ旅路に、多くの艱難を苦しみながら、諸國を遍歴して、只管敵市九郎の所在を求めた。市九郎を、たゞ一度さへ、見た事もない實之助に取つては、夫は雲を掴むが如き覺束なき搜索であつた。五畿内東海東山山陰山陽北陸南海と、彼は漂泊の旅路に、年を送り年を迎へ、二十七の年迄空虚な遍歴の旅を續けた。敵に對する怨も憤も、旅路の艱難に消磨せんとすること度々であつた。が、非業に殪れた父の無念を思ひ、中川家再興の重任を考へると、奮然と志を振ひ興すのであつた。

江戸を經つてから、丁度九年目の春を、彼は福岡の城下に迎へた。本土を空しく尋ね歩いた後に、邊陲の九州をも探つて見る氣になつたのである。

福岡の城下から、中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日宇佐八幡宮に賽して、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。實之助は、參拜を終へてから境内の茶店に憩ふた。其時に、ふと彼は傍の百姓體の男が、居合せた參詣客に、

「その御出家は、元は江戸から來たお人ちやげな。若い時に、人を殺したのを懺悔して、諸人濟度の大願を起したさう

ぢやが、今云ふた樋田の刳貫は、此の御出家一人の力で出來たものぢや」と、語るのを耳にした。

此の話を聽いた實之助は、九年此方未だ感じなかつたやうな興味を覺えた。彼は、やゝ急き込みながら、

「卒爾ながら、少々物を訊ぬるが、その出家と申すは、年の頃は、何程位ぢや」と、訊いた。その男は、自分の談話が。武士の注意を惹いた事を、光榮であると思つたらしく、

「左樣で厶いますな。私はその御出家を拜んだ事は、厶いませぬが、人の噂では、もう六十に近いと申します」

「丈は高いか、低いか」と、實之助は疊みかけて訊いた。

「夫もしかとは、判りませぬ。何樣、洞窟の奧深く居られる故、しかとは判りませぬ」

「その者の俗名は、何と申したか存ぜぬか」

「夫も、とんと判りませんが、お生れは、越後の柏崎で、若い時に、江戸へ出られたさうで厶ります」と、百姓は答へた。

茲迄聽いた實之助は、躍り上つて欣んだ。彼が、江戸を立つ時に、親類の一人は、敵は越後柏崎の生れ故、故郷へ立ち廻るかも計りがたい、越後は一入心を入れて探索せよと云ふ、注意を受けて居たのであつた。

實之助は、之ぞ正しく、宇佐八幡宮の神託なりと勇み立つた。彼はその老僧の名と、山國谿に向ふ道を訊くと、もはや、八つ刻を過ぎて居たにも拘はらず、必死の力を双脚に籠めて、敵の所在へと急いだ。その日の初更近く、樋田村に着いた實之助は、直ちに洞窟へ立ち向はふかと思つたが、焦つてはならぬと思ひ返して、その夜は樋田驛の宿に、焦慮の一夜を明すと、翌日は早く起き出でゝ、輕裝して樋田の刳貫へと向つた。

刳貫の入口に着いた時、彼はそこに石の碎片を、運び出して居る石工に訊ねた。

「此の洞窟の中に、了海と云はるゝ御出家が、おはすさうぢやが、夫に相違ないか」

「おはさないで何としやう。了海樣は、此の洞の中も同樣な方ぢやハ、、、」と、石工は心なげに笑つた。

實之助は、本懷を達する事、はや眼前に在りと、欣び勇んだ。が、彼は周章てゝは、ならぬと思つた。

「して、出入の口は茲一個所か」と、訊いた。敵に、逃げられてはならぬと思つたからである。

「夫は知れた事ぢや。向ふへ口を開ける爲に、了海樣は塗炭の苦しみを爲さつて居るのぢや」と、石工が答へた。

實之助は、多年の怨敵が、嚢中の鼠の如く、目前に置かれてあるのを欣んだ。譬ひ、その下に使はるゝ石工が、幾人居やうとも、斬り殺すに何の雜作もあるべきと、勇み立つた。

「其方に少し頼みがある。了海どのに、御意得たい爲、遙々と尋ねて參つたものぢやと、傳へて兒れ」・と云つた。石工が、洞窟の中へはいつた後で、實之助は一刀の目くぎを濕した。彼は、心の裡で、生來初めて廻り逢ふ敵の容貌を想像した。洞門の開鑿を、統領して居ると云へば、五十は過ぎて居るとは云へ、筋骨たくましき男であらう。殊に、若年の頃には、兵法に疎からざりしと云ふのであるから、ゆめ油斷はならぬと思つて居た。

が、暫くして實之助の面前へと、洞門から出て來た一人の乞食僧があつた。夫は、出て來ると云ふよりも、蟇の如く這ひ出て來たと云ふ方が、適當であつた。夫は、人間と云ふよりも、むしろ人間の殘骸と云ふべきであつた。肉悉く落ちて骨露はれ、脚の關節以下は處々爛れて、永く正視するに堪へなかつた。破れた法衣に依つて、僧形とは知れるものゝ、頭髮は永く延びて皺だらけの額を掩ふて居た。老僧は、灰色を爲した眼をしばたゝきながら、實之助を見上げて、

「老眼衰へはてまして、孰れの方も辨へ兼まする」と、云つた。

實之助の、極度に迄、張り詰めて來た心は、此の老僧を一目見た刹那タヂ／＼となつてしまつて居た。彼は、心の底から憎惡を感じ得るやうな惡僧を、欲して居た。然るに彼の前には、人間とも死骸とも付かぬ、半死の老僧が蹲まつて

居るのである。實之助は、失望し始めた自分の心を勵まして、

「そのもとが、了海と云はるゝか」と、息込んで訊いた。

「如何にも、左樣でムります。して其許は」と、老僧は訝しげに市之助を見上げた。

「了海とやら、如何に僧形に身を窶すとも、よも忘れは致すまい。汝、市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川四郎兵衛を打つて立退いた覺があらう。某は、四郎兵衛の一子實之助と、申すものぢや。もはや、逃れぬ所と、覺悟せよ」と、實之助の言葉は、飽く迄落着いて居たが、其處に一歩も、許すまじき嚴正さがあつた。

が、市九郎は實之助の言葉を聽いて、少しも駭かなかつた。

「如何さま、中川樣の御子息、實之助樣か。いやお父上を、打つて立退いた者、此の了海に相違ムりませぬ。」と、彼は自分を敵と狙ふ者に逢つたと云ふよりも、舊主の遺兒に逢つた親しさを以て答へた。が、實之助は、市九郎の聲音に欺かれてはならぬと思つた。

「主を打つて立ち退いた非道の汝を打つ爲に、十年に近い年月を艱難の裡に過したわ。玆で會ふからは、もはや逃れぬ所と尋常に勝負せよ」と、云つた。

市九郎は、少しも怯びれなかつた。もはや、期年の裡に成就すべき大願を見果てずして、死ぬことが稍悲しまれたが夫もおのれが惡業の報であると思ふと、彼は死すべき心を定めた。

「實之助樣。いざお斬りなされい。お聞き及びもなされたらうが、之は了海奴が、罪亡しに、堀り穿たうと存じた洞門でムるが、十九年の歳月を費して、九分迄は竣工致した。了海身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ殘すこともムりませぬ」と、云ひながら、

彼は見えぬ眼をしばたゝいたのである。

實之助は、此の半死の老僧に接して居ると、親の敵に對して懐いて居た憎しみが、何時の間にか、消え失せて居るのを覺えた。敵は、父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて、半生を苦しみ拔いて居る。而も、自分が一度名乘りかけると、唯々として、命を捨てやうとして居るのである。かゝる半死の老僧の命を取ることが、何の復讐であるかと、實之助は考へたのである。が、然し此の敵を打たざる限りは、多年の放浪を切り上げて、江戸へ歸るべきよすがは、なかつた。まして家名の再興などは、思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は、憎惡よりも、むしろ打算の心から、此の老僧の命を縮めやうかと思つた。が、烈しい燃ゆるが如き憎惡を感ぜずして、打算から人間を殺すことは、實之助に取つて忍びがたい事であつた。彼は、消えかゝらうとする憎惡の心を、勵ましながら、打ち甲斐なき敵を打たうとしたのである。

その時であつた。洞窟の中から、走り出て來た五六人の石工は、市九郎の危急を見ると、挺身して彼を庇ひながら、「了海樣を何とするのぢや」と、實之助を咎めた。彼等の面には仕宜に依つては、許すまじき色が、歴々と見えた。

「仔細あつて、その老僧を敵と狙ひ、端なくも今日廻り合ふて、本懐を達するものぢや。妨げ致すと、餘人なりとも容捨は致さぬぞ」と、實之助は凛然と云うた。

が、その裡に、石工の數は増え、行路の人々が、幾人となく立ち止つて、彼等は實之助を取卷きながら、市九郎の身體に、指の一本も、觸れさせまいと、銘々に敦圉き始めた。

「敵を打つ打たぬなどは、夫はまだ世に在る裡の事ぢや。見らるゝ通、了海どのは、染衣薙髪の身である上に、此山國谿七郷の者に取つては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや」と、その中のある者は、實之助の敵打を、叶はぬ非望で

あるかのやうに云ひ張つた。

が、かう周圍の者から、妨げられると、實之助の敵に對する怒は何時の間にか、蘇つて居た。彼は、武士の意地として、手を拱ねいて立ち去るべきではなかつた。

「譬ひ沙門の身なりとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を打つ者を妨げ致す者は、一人も容捨はない」と、實之助は一刀の鞘を拂つた。實之助を圍ふ群衆も、皆悉く身構へた。すると、その時に、市九郎は、しはがれた聲を張り上げた。

「皆の衆、お控へなされい。了海、打たるべき覺え充分御座る。此の洞門を穿つことも、たゞその罪滅しの爲ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり、半死の身を終る事、了海が一期の願ぢや。皆の衆妨げ無用ぢや」。かう云ひながら市九郎は、身を挺して實之助の傍に、いざり寄らうとした。兼々、市九郎の强剛なる意志を、知りぬいて居る周圍の人々は、彼の決心を飜すべき由もないのを知つた。市九郎の命、玆に了るかと思はれた。その時に、石工の統領が、實之助の前に進み出でながら、

「御武家樣も、お聞き及びでもござらうが、此の刳貫は了海樣、一生の大誓願にて、二十年に近き御辛苦に身心を碎かれたのぢや。いかに、御自身の惡業とは云へ、大願成就を目前に置きながら、お果てなさるゝこと、如何ばかり無念であらう。我等の與つてのお願ひは、長くとは申さぬ、此の刳貫の通じ申す間、了海樣の、お命を我等に預けては下さらぬか。刳貫さへ通じた節は、卽座に了海樣を存分になさりませ」と、彼は誠を表して哀願した。群衆は、口々に

「ことわりぢや〳〵」と、贊成した。

實之助も、さう云はれて見ると、その哀願を聽かぬ譯には、行かなかつた。今此處で、仇を討たうとして、群衆の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待つたならば、今でさへ自ら進んで討たれやうと云ふ市九郎が、義理に感

じて首を授けるのは、必定であると思つた。又さうした打算から離れても、仇とは云ひながら此の老僧の大誓願を遂げさしてやるのも、決して不快なことではなかつた。實之助は、市九郎と群衆とを等分に見ながら、

「了海の僧形にめでゝその願ひ許して取らさう。束へた言葉を忘れまいぞ」と、云つた。

「念もないことで御座る。一分の穴でも、一寸の穴でも、此の刳貫が向ふ側へ通じた節は、その場を去らず了海樣を討たさせ申さう。夫迄はゆる／＼と、此の邊りに御滯在なされませ」と、石工の頭梁は、穏かな口調で云つた。

市九郎は、此の紛擾が無事に解決が付くと夫に依つて徒費した時間が如何にも惜しまれるやうに、にぢりながら洞窟の中へ這入つて行つた。

實之助は、大切の場合に思はぬ邪魔が入つて、目的が達し得なかつたことを憤つた。彼は如何ともし難い鬱憤を抑へながら、石工の一人に案内せられて、木小屋の裡へ入つた。自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら、討ち得なかつた自分の不甲斐なさを、無念と思はずには居られなかつた。彼の心は何時の間にか焦ら立たしい憤りで一杯になつて居た。彼は、もう刳貫の竣成を待つと云つたやうな、敵に對する緩かな心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立ち退かうと云ふ決心の臍を固めた。が、實之助が市九郎の張り番をして居るやうに、石工達は實之助を見張つて居た。

最初の二、三日を、心にもなく無爲に過したが、丁度五日目の晩であつた。毎夜の事なので、石工達も警戒の眼を緩めたと見え、丑に近い頃には何人もいぎたない眠に入つて居た。實之助は、今宵こそと思ひ立つた。彼は、瓦破と起き上ると、枕元の一刀を引き寄せて、靜に木小屋の外に出た。夫は早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦卷きながら流れて居た。が、周圍の風物には眼も呉れず、實之助は、足を忍ばせて潛かに洞門に近づいた。

削り取つた石塊が、所々に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。

洞窟の中は、入口から來る月光と、所々に刳り明けられた窓から射し入る月光とで、所々ほの白く光つて居るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探り／＼奥へ／＼と進んだ。

入口から、二町ばかりも進んだ頃、ふと彼は洞窟の底から、クワツ／＼と間を置いて響いて來る音を耳にした。彼は最初夫が何であるか判らなかつた。が、一歩進むに從つて、その音は擴大して行つて、おしまいには洞窟の中の夜の寂靜の裡に、こだまする迄になつた。夫は、明に岩壁に向つて鐵槌を下す音に相違なかつた。實之助は、その悲壯な、凄みを帶びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近附くに從つて、玉を打ち碎くやうな、鋭い音は洞壁の周圍にこだまして、實之助の聽覺を、猛然と襲つて來るのであつた。彼は、此の音をたよりに這ひながら、近づいて行つた。此の槌の音の主こそ、敵了海に相違あるまいと思つた。私に一刀の鯉口を濕しながら、息を潛めて寄り添ふた。その時。ふと彼は槌の音の間々に囁くが如く、うめくが如く、了海が、經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしはがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜、人去り、草木眠つて居る中に、たゞ暗中に端坐して鐵槌を振つて居る了海の姿が、墨の如き闇にあつて尙、實之助の心眼に、歷々として映つて來た。夫は、もはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、たゞ鐵槌を振つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は、握りしめた太刀の柄が、何時の間にか緩んで居るのを覺えた。彼はふと、我に歸つた。既に佛心を得て、衆生の爲に、碎身の苦を嘗めて居る高德の聖に對し、深夜の闇に乘じて、ひはぎの如く、獸の如く、瞋恚の劍を拔きそばめて居る自分を顧ると、彼は、强い顫慄が身體を傳ふて流れるのを感じた。

洞窟を搖がせるその力强い槌の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打ち碎いてしまつた。彼は、潔く竣

功の日を待ち、その約束の果たさるゝのを待つより外はないと思つた。

實之助は、深い感激を懐きながら、洞外の月光を目指し、洞窟の外に這ひ出たのである。

其の事があつてから間もなく、刳貫の工事に從ふ石工の裡に、武家姿の實之助の姿が見られた。彼はもう、老僧を闇打にして、立退かふと云ふやうな險しい心は、少しも持つて居なかつた。了海が逃隠れもせぬことを知ると、彼は好意を以て了海が、その一生の大願を成就する日を、待つてやらうと思つて居た。

が、それにしても茫然と待つて居るよりも、自分も此の大業に一臂の力を盡す事に依つて、幾何かでも復讐の期日が短縮せられる筈である事を悟ると、實之助は自ら石工に伍して、槌を振ひ始めたのである。

敵と敵とが、相並んで槌を下した。實之助は、本懐を達する日の一日も早かれと、懸命に槌を振つた。了海は實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して孝子の願を叶へてやりたいと思つたのであらう。彼は、又更に精進の勇を振つて、狂人のやうに岩壁を打ち砕いて居た。

その裡に、月が去り月が來た。實之助の心は、了海の大勇猛心に、動かされて、彼自ら、刳貫の大業に讐敵の恨みを、忘れやうとし勝であつた。

石工共が、晝の疲れを休めて居る眞夜中にも、敵と敵とは相並んで、默々として槌を振つて居た。

夫は了海が、樋田の刳貫に第一の槌を下してから、二十一年目、實之助が、了海に廻り合つてから、一年六ケ月を經た延享三年九月十日の夜であつた。此の夜も石工どもは、悉く小屋に退いて、了海と實之助のみ終日の疲勞にめげず、

懸命に槌を振つて居た。その夜九つに近き頃了海が、力を籠めて振り下した槌が、朽木を打つが如く何の手答もなく力餘つて、槌を持つた右の掌が岩に當つたので、彼は「アツ」と思はず聲を上げた。その時であつた。了海の朦朧たる老眼にも、紛れなくその槌に破られたる小さき穴から、月の光に照されたる山國川の姿が、歴々と映つたのである。了海は「おゝ！」と、全身を顫はせるやうな名狀しがたき叫聲を擧げたかと思ふと、夫につゞいて狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑が、洞窟を物凄く動揺めかしたのである。

「實之助どの、御覽なされい。二十一年の大誓願端なくも今宵成就いたした。」かう云ひながら、了海は實之助の手を取つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黒ずんだ土の見ゆるのは、岸に添ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは、そこに手を取り合ふて、大歡喜の涙に咽んだのである。が、暫くすると了海は身を退つて、

「いざ、實之助殿、約束の日じや。お斬りなされい、かゝる法悅の眞中に往生致すなれば、極樂淨土に生るゝこと、必定疑ひなしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工共が、妨げを致さう、いざお斬りなされい。」と、彼のしはがれた聲が洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助は、了海の前に手を拱ねいて坐つたまゝ、涙に咽んで居るばかりであつた。心の底から湧き出づる歡喜に泣く凋びた老僧の顔を見て居ると、彼を敵として殺す事などは、思ひ及ばぬ事であつた、敵を打つなどゝ云ふ心よりも、此の羸弱い人間の双の腕に依つて成し遂げられた偉業に對する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はいざり寄りながら、再び老僧の手を取つた。二人は其處に凡てを忘れて、感激の涙に咽び合ふたのであつた。



家つき女房

岩野泡鳴

一

『おい、お葉、おまへも早く湯に行つて來ねいか』と、うちの人は今夜も亦店の方から聲をかけた。こちらと殆ど同じやうに太つてて、男だけにそのうへ巖丈でどツしりしてゐる人の言葉だが、きいた風に近ごろ江戸ツ子じみた眞似をし出したのが——初めから江戸ツ子なるこちらには——少しきざに見えるだけで、人がらにも似ぬその聲の優しさにはいつもながらこちらの身も心も引き入れられるのであつた。ましてやこの二三日と云ふものは、それにまた一層の優しみが加はつてこちらの心を動かすのであるが、そこに一點の疑ひを入れて見れば、その加はつた優しみだけが餘計のやうだ。人のよく云ふ猫撫で聲にも聽こえる。それが如何にも不思議であつた

……………』だから、わざと直ぐには返事をしなかつた。その爲め、つい、心がいらいらしてゐるのが自分ながら桶の中で皿小鉢や猪口のちやら〳〵云ふ音に分つた。

『…………　うちの人はなほ、餘りにわざとらしいほど優しい聲で、一言をつけ添へたのである。『お瀧ではとても赤ン坊の世話はできめいから、な』

『はい。』赤ン坊と云はれたので、つい、お葉も返事をしてしまつた。

きのふも考へたことだが、子どもをひとりも産んだ經驗のない者が、可愛がつて湯屋へもつれて行つて吳れるのはこちらの急がしい時間を全くありがたいことでないことはない。が、不慣れの爲めにあつい湯の中へすべり込ませたり、板の間へ落されたりしては困るのであつた。それに、折角、あツたまつたものにうか／＼して湯さめの風を引かせられても可哀さうであつた。けれども、どうも不思議で溜らなかつた。

一體、お瀧さんは何の爲めにしげ／＼とうちへ來るやうになつたのか？ただうちの人のいとこの女房であると云ふだけではないか？そのうへ、うちがまだここへ移つて來なかつたつい此の間までは、いとこもさう親類づき合ひをしなかつたではないか？淺草からこんなところへ移つて來たので、うちが近くなかつた爲めだと云ふだけなら、それまでを餘り薄情にしてゐたわけではないか？まさか、手ぢかへ女の好む吳服屋がやつて來たからと云ふばかりでもあるまいに――？

そしてやつて來るときツと、おのれのうちででもあるやうな顏をして、店の小切れや反物を勝手次第にいじくりまわして、高いからもツと安くしてやれとか、安いから今少し高く賣るがいいとか、あまツたるい言葉を以つて、失禮にも、こちらにまで差し圖がましいことを云ふ！

ずツと年が若いからツて、年うへのものを馬鹿にする氣か？

『あたしが色をとこを持つたら、先づ、ね、これを襦袢の袖にしてやる、わ。』

『…………』かの女はお瀧がうちの人にべた／＼してゐる樣子やら言葉ぶりやらをあの時見てゐ、聞いてゐたままに思ひ出してた、團十郎の歌舞伎十八番の富樫や辨慶や、名古屋さんさの模樣のついた羽二重切れを、そして欲しさうに取

り出して來た。

如何にもいやな女だ。

絹琉おほ島がすりの羽織り地に、かすりの崩れがある爲めに、たッた拾圓五十錢の札を附けてあつた。それを値切りもしないで、而も利いた風に、

『これはあんまり安過ぎる』などと云つた。

『………』こちらにはそんなおせッかひは云つて貰ひたくない。

また男の袖にはいいがらだけれども、少し紡績が這入つてゐるので四圓五十錢になつてゐた。ところが、あの女には紡績入りと本物とを見分けるだけの目がまだできてゐなかつた。安ッぽい職人ふぜいのかみさんとしては、つまり、それが當り前でゞあらう。そして、

『あたしに呉れるなら、これでもいい、わ』などと、虫のいいことを云つた。

『………』然しまた別に不思議なことがある。めん甲斐絹のうらでも附けたら、前かけとしてちよツと本物にも見えるだらうと見立てられたところの、黒地に黄色と赤との格子じまがあつたのだが、それが賣れたおぼえのないのに、きのふから見えないのである。『あなたは御存じありませんか』と、うちの人に聽いて見ると、

『………』少し小くびをかしげて見せてから、——それも然し疑へばわざとらしかつたが、——『はて、な』と答へたのがそのこなしに釣り合はなかつた。そして曖昧な顏つきで返事をした、おりやア知らねいぞ。店さきにかけてあつたのだから、盗まれたか、な？』

『まさか——？』證據もないのに云ひ出して、また年甲斐もなく燒き餅かと突ッ込まれるのが面白くなかつた。うちの

人には少なからず氣が立つてるやうなところも見えたので、それッ切りさし控へた。が、きッと、お瀧さんが渠の承知のうへで持つて行つたのであるに相違ない。

なんしろ、晝までも夜でも、かの女が來て、店さきでぺちやくちやしやべつてゐられちやア、お客さんの邪魔になつて、邪魔になつて――。

『これがいいでしよう、あなた、お價段も安くツて』とも、かの女は店でお客さんがその買ふ反物をはでなのにしようか、それとも少し地味でもいい方にきめようかと考へてたのに云つて聽かせた。

『………』安けりやアいいとばかりは云へないのである。そのうへ、そんなことは向ふのふところを馬鹿にした言葉ではないか？ほんとに、邪魔になつて、邪魔になつて――。

奥に這入つてる時でも、またかの女の聲は晴ればれして氣持ちがいい代りに、餘り甲高いのが氣になつて溜らない。

『あら、あぶない！』かの女は自分で赤ン坊の枕もとに突き當りかけて、頓狂な聲を出したッけ。折角よく寢ついたものがその爲めにまた目をさました。こちらのやうに調子が低く、而ものッそり物を云ふと時々叱られてるものには、唐人喇叭のやうにまことに耳ざわりでならぬ。

『もツとおとなしくおしやべりをするものですよ、あなたはあんまり活潑過ぎます』とたしなめてやつた。成るべく角の立たぬやうに笑ひにまぎらして云つてきかせたのだが、向ふにこたへがなかつたのである。

『おばさんとあたしとアまるツ切り性分が違つてるんですもの！』

『………』こちらには矢ッ張り人を馬鹿にしたとしか響かなかつた。

實際に、お瀧さんが何の爲めにやつて來るのか分らないが、そんな若いものを相手にして喜んでるうちの人の心持ち

も亦こちらには分らなかつた。

かう云ふことを考へ込んでると、今ふたりに飲ませた酒の徳利と共に皿小鉢が桶の水の中でちやら〳〵云つてるのが自分の耳には氣遠くも聽えてゐた。

二

この商買は何と云つてもおほ問屋に信用がなければならぬ。そしてこの信用を得るまでなか〳〵容易でない。ところが、うちなどは、一たび今の代となつて失敗してしまつたものの、兎に角、もと〳〵から數代に渡つての呉服屋であつた。それが一つの信用その物であるから、たとへ初手からの資本がなくとも、再び斯うやり初めることができた。品物は店相當にどし〳〵持つて來て呉れる。

それも然しうちの人に對してではない。云はば、つまり、家つきの自分に免じてである。このことはうちの人も十分に承知してゐて、いよ〳〵再びこの店が持てるやうになつた時、

『お前の爲めだ、お前の働きだ、實に、ありがたい』と、涙をこぼさんばかりにして、こちらに向つてあたまを下げた。それほどのことは當前である――實に、家つきのものとして自分のうちの古い信用を持つて行つて問屋によく分るやうにかけ合つたのだから。そしてよく頼んで品物が來るやうになつたのだから。その時までは、まだうちの人は然し江戸ツ子氣取りではなかつた。この氣取りがをかしいほど俄かに出て來たのは、お瀧さんが來初めてからである。かの女は女の癖に何かと云ふと、

『なんだ、べらんめい』とか、『やツ付けちまへ』などを口に出す。職人とのつき合ひがある爲めにだらう、冗談やらから意張りはうまいものだが、落ち付いた商買のことなんかは殆ど全く知つてゐない。

『…………』氣の毒なことには、反物屋がちよツくらちよいとにできるものとでも思つてるらしい。

『あたしも、おばさん、ここの旦那に呉服屋の店を出して貰はうか知ら——一體、日にいくら儲かるんでしよう、ね?』

『…………』こちらはその無邪氣だが丸で無茶苦茶な問ひには、ただ笑ひを以つて返事なしの返事をするより外に道がなかつた。資本にもよるではないか?する場所にもあるではないか?ここのやうな——つまり、——日本橋や淺草に比べては、——云はば、まア、場ずゑに當るところと、ほん場とでは、また丸で違ふ。それに、うちの先代のやうに、小僧や番頭を多く使つては、そのことも考へなければならぬ。

『大きくやれば大きく儲かるし、小さくやれば小さく儲かる』と、それにはうちの人も冷かし半分に分り切つたことを云つて、にや〱笑つてゐた。

そりやア、知れたこツてしようが、ね——」斯うまたあまへたやうにからだをちよツと二つに折りひねつて、それでも少しはおこつたやうすであつた。多少は人並みのたましひもあるらしいその横ずわりを、後ろから見ると、根のゆるくなつたぺちやんこのいてふ返しがぐら〱動いてゐた。

『…………』こちらにはそれが夜のことまで察しられて、如何にもだらしがなかつた。

色はさう白くないけれども、かの女の顔立ちがきやしやで仇ツぽく、若し賣られて行くなら藝者向きだ。どツちかと云へば、いきな肌合ひに生まれてゐるからこそ、あんなにだらしない風をしてゐても通れるのであらうが——しろうとにしては餘りあけすけな、ざツくばらんで、うちの娘どもに比べては、丸で行儀作法をわきまへてゐない。遠慮と云ふものを知らず、そのうへ立ちゐ振舞ひに不注意だらけだ。

大きな方の娘は今ここに一緒にゐないからかまはないけれども、若しゐたら、もう年ごろになつてるのだから、お瀧

のやうな女をうちの人のいとこに當る人のかみさんとして斯うしげ〳〵見せて置くことはできなかつただらう。うちが淺草にゐた時には、お瀧の方は少しも來なかつたからよかつた。が、うちが失敗の結果、一度しもた屋になり、新宿の奧の長屋へ假り住まひをすると、いとこが一度やつて來た。そして、

『どうも敷居が高くなつて、とても行けなくなつてましたが、斯うちよくになつたから、またちよく〳〵寄せて戴きます。』

『………』人を馬鹿に！こちらの失敗したのをちよくになつたなどと云つた。あの時には、こちらもくさ〳〵してゐたのだから、お前のずツと年うへいとこが道樂とお人よしとの爲めに家をぶツつぶしてしまつたんだぞと、餘ツぽど云つてやりたかつた。

『やつて來るのはいいけれど、お前ももツとしツかりしなけりやアいかんぞ――さう仕事嫌ひでは』と、うちの人にさへこんなたしなめを受けてゐる人で――勇ましい職人はだでもなかつた。

『へい』と、まづい返事であつた。

いよ〳〵ここへ來てからは、またいとこは蔭張り來ない。その代り、仕事嫌ひの亭主をいやがつてるその女房が來てその亭主に對する不平をあの甲高い聲でさんざんに並べ立てた。

『あんな男ぢやアなかつたのだが』と、うちの人も多少身うちをかばふやうに困つてゐた。

『………』それから時々足が向いて來るやうになつたが、初めのうちは、こちらも、あれだけの器量のいい江戸ツ子むすめをあんな亭主に――たとへ、好きでくツつき合つたとは云へ――いつまでも添はせて置くのは可哀さうだと思つ

た。よく持て爲してもやつた。が、それをいい氣になつて圖に乘つて來た爲めだらう、この頃ではいやなほど多くのあらを見せるやうになつた。そしてかの女のそのあらのあるところにつけ込んで、うちの人がよく冗談を云つたり、手でからかつたりするやうになつた。そしてまたお瀧がそれを嬉しがつてるやうにも見える。

うちのが女にかけてはなか〳〵喰へないところのあるのはよく分つてるだけに、この頃、時々おそくまでもうちを明けることがあるのを、疑つて見れば、お瀧とくさいやうにも取れないことはなかつた。そんな時に限つて、かの女はよひから顏を見せない。

ここへ持つて來ての新銘仙だ、高が知れたきず物とは云へ、あの前かけをいつのまにかやつてしまつたりして——ふと、にッこり獨りで笑はないではゐられなかつた。あの代物にはちよツと人の氣が付かないやうなしみの如きものがあつた。當り前に賣らうとしては、毎日見る度毎に氣になつてゐたのを、うちの人はえい、いッそのことにと思つてそのきずを云はずに向ふを嬉しがらせてやつたに違ひない。隨分、人が惡いのだから。

さうして置いて、而もうちの人はかの女をうちのもののやうにこき使はうとしてゐるのだ。

『おい、そのそろばんを取つて呉れ』などと、きのふもかの女にあごで命令した。いい氣になつてる女は、然し、奮發して立つて行かうともしなかつた

「…………』不しようたらしく坐わつてるままで橫ずさりをして、からだと手とをその方に延ばした。ところがその爲めに、おのれの膝の方がお留守になつて、洗ひざらしでもちよツと氣の利いた銘仙の衣物の褄のあひだから、唐ちりめん——せめて本ちりでもあればいいのに——のはじが自慢さうにはみ出した。それに氣が付かないでだか、延ばして突いた手を疊のうへでなほ一二度に押し延ばしながら、齒切れはいい口調で、『なか〳〵とどかない、ね。』

『…………』とどかないのは分り切つてるではないか』

『その主にお隣もとが火事だ、火事だ』と、うちの人もじッと見てゐたので知らせてやつたけれども、左ほどきまりの悪がりもしなかつた。

『消しに來な‥!』

『…………』こちらでは、女が見ても見ッともないと思へたのに。男なら、きッとみだらな考へを起さしめられたに相違ない。

大きな方の娘がまだうちにゐた時には、うちの人にはままッ子だけれども、自分は先代との間に生んだ實子としてできるだけ行儀を教へ込み、作法も仕込み、また女の道の一部として茶の湯、生け花、三味線なども習はせた。

そしてお瀧さんなどが平氣で云ふやうなみだらな言葉は用ゐさせず、膝などを不恰好にはだけることなどかないやうに不斷から愼しませてあつた。

それにも拘らず、年ごろになつて來れば、その年ごろになつたと云ふだけででも一般の男の氣まぐれな心を引くものらしかつた。わざはひは外にあるばかりでなく、うちの中にもあつた。

その頃には、もう、うちの人も二進も三進も行かなくなつて、燒けばかりを起してゐたが――

俄か貧乏のやりくり算段をしにこちらが日本橋の問屋へ行つて留守だッたあひだに、いつもの一杯機嫌にまかせて何か變なことを云ひかけたとかで、自分の娘は自分に泣いてそのことを訴へた。

『おッ母さん、どうかこれから買ひ出しにはお父ッアんに行つて貰つて下さい。さうして若しどうしてもお出になる時はあたしをも一緒につれて出て下さい。』

『………』自分は娘の手を取つて泣いた。そしてうちの人を大切と思ふだけに、どうしていいか分らなかつた。

娘の手を放して見ると、一人前になつて來たかの女を妬ましくならないでもなかつた。うちの人に對して憤りを發しないでもなかつた。さうかと云つて、うちのを面と向つて責めるのは氣の毒でもあり、またこちらの氣が咎めもした。

で、うちにも外にもそれとなく、その夜から娘を千住の親類へとまりにやつた。その後はとてもうちには置けないので、どこかへやつてしまうことにした。それには、もちろん、斯う暮しが押し詰まつて來ては、どうせかの女をもともと通り有福にうちで育てて行くことができず、また自分らと共にこんな所帶の苦勞をさせるのも可哀さうだと云ふ、二つの理由をつけることもできた。

『てけ、てけ、すつてけ、敷島―ほい！』

若いをんな藝人どもがそのをんな師匠の三味線につれて、揃つて順番に面白い歌を歌ふありさまが浮んだ。

源氏節の連中は、そのをんな芝居や語り物をやつた最後に、必らず『てけ、てけ』をやつたものである。自分ら親子はもとそんな物を好きであつた。それが千住や近處の小さな寄せにかかると、一度なり二度なりはきツと聽きに行つた。そしてその女どもをうちへ呼んで御馳走をしてやつた。渠等はまた、東京へまわつて來ると直ぐ、向ふからきツとみやげ物を持つてこちらへ機嫌伺ひにやつて來た。

そんな、こんなの關係を辿つて、やがて娘をその連中に入れてしまつた。かの女自身も好きであつたところへ半ば無理に因果を含めて、そのお師匠なるなかなかしツかりした女のもとへ、藝人にするつもりで、やつてしまつたのである。

『こんなむごいことはせんでもよかつたのに』と、うちの人は云つた。

『…………』これは、若し實父が生きてたら、なか／＼聽かないでおこのただらう。また、おこのにしても仕方がなかつたらう。が、うちのには心におぼえての弱みがあつた。そしてこちらはまた再びそんなことをさせないと云ふ覺悟を持つてゐた。

『若しおツ母さんが無理なら許して、ね。』斷う最後に溜りかねてなだめて見た時には、

『オツとも無理とは思ひません』と答へて、娘は泣き崩れた。

『…………』こちらもそれに釣り込まれて泣いてしまつた。そしてそのそば杖を喰つた爲めに、自分の次ぎの娘も、まだ小學校さへ終はらぬのに、可哀さうにも奉公にやられてしまつた。

それからと云ふもの、自分は油斷ならぬうちの人の、そとにおける行ひには私かになか／＼注意を怠つてはゐないのである。

三

時々店へ買ひ物に來るどこかのおかみさん達があると、もう、その二度目からはにや／＼と冗談を云つてゐた。それがここへ來てから一層目に立つやうになつた。

そしてその上手な冗談に乘つて來るものには、直ぐ

『おやノ、負けて置きます』などと云つてしまう。

『負けるのア當り前でしよう——何かその上に景物を添へて置きなさい。』

『まア、この小切れぐらゐなら——』

『…………』商賣人がそんなあぶないことでは今度も亦失敗するにきまつてた、——あなたはあんなことを云ふア上手でも恢復が

できませんよ。もつとしツかりやツて戴かなけりやア――』

『よし、よし』と云ふ返事もそらごとのやうに聽こえた。『然し、ね、さうお前のやうに欲張らうとしたツて、ここいらのお客は神田や淺草とは違つてらア。』

『でも、あなたはさう氣まへがよ過ぎて向ふをもしくじつたんぢやアございませんか』それがさうなら、まだ殘つてる帳簿を出して、店の缺損とそとで遊んだ馬鹿々々しい費用とを一度見せてもかまはないのであつた。

『なアに』と、うちの人は平氣であつた。『この商べいは一等氣まへを見せて置かないと、あとが續かぬものだ。』

『それもよろしいでしょうが、ね。』こちらはこれ以上に直接の反對もできなかつた。あなたのは然しお客さまぢやアないのでしょう――女の顏をでしょう、と、おしまひにはこちらも笑ひにまぎらしてしまつた。

そしてその女の顏を濱は初めて――店へのお客さんではないけれども――お龍さんに續けることができたのではないか知らん？自分には斯う考へられないこともなかつた。どうせほかの男にべたべたしてゐる女だもの。

『うちの野呂間にやア』と、かの女はその亭主のことをあけすけに云つて、『ほんとに呆れッちまうわ、よ―ろく／＼膝いでも來やアがらねいで、人よりも早くおまめしを喰らつて、おなかが一杯になると、職人ふぜいで、ふん！きいた風に、あア腹が張つた、張つた、散歩でもして來るツて、さア―その散歩でもが生意氣に呆れらア、ね。』

『ステツキでも持たせてやればよ。』

『ほ、ほ―ほんとに、さ―！』

『…………』こちらは腹がけどんぶりの兄さんが書生のやうに手もとの丸く曲がつた杖を持つて歩いてる樣子を思ひ浮べてゐた。男も意久地がないやうだが、女も亦あんまりだらう。

『それでももとは惚れ合つた仲だア、ね。』

『馬鹿々々しい！――こッちも癪にさわらア、ね。今晩は何もうツちやらかして置いて、あすんでやるんだ。』

『あいつア、實際――』と、うちの人も一緒になつてのわる口だ、――もとから少しうす馬鹿だから、な。』

『……』けれども、こちらにはそれが惡口と云ふよりも、お瀧を喜ばせるうは言らしかつた。うちの人だツても、そのいとこのことをこちらに話しする時は、さう馬鹿扱ひにはして聽かせなかつたから。で、『そんなことはありませんのに、可哀さうに』と、自分は義理あるいとこの肩を持つてやつた。

うちのが身うちのことを惡く云ふのもよくなかつたが、お瀧さんが兎も角そのつれ添つてる亭主のことをよそへ來て棚おろしするのは、こちらには以つての外であつた。

然し、そこにこの二人の間にどこまでかの馴れ合ひができてるのではないかと感づかれたので、ゆふべもうちのが云そく出て十二時過ぎに歸つて來たのを自分はそれとなく責めて見た。

すると、夫は問ふに落ちず、語るに落ちて、

『お瀧だツて、な、あのうす馬鹿にばかりかかり合つてゐちやア、一生浮ぶ瀬がねいや、な。』

『とう〳〵うす馬鹿にしておしまひですか、あなたのおいとこさんを？』

『聽いて見りやア、おいらも呆れてしまはア、な。』

『だから、あなたがお瀧さんを横取りしてもいいとおッしやるんですか？』

『馬鹿を云へ！』餘ッぽど圖星をでもさされてきまりが惡かつたと見え、そのまぎらしにだらう、聽きもしないことを附け加へて、『そばぐらゐ振舞つてやつたツて――』

『お振舞ひのわけが違ひましよう。』斯うやわらかにだが抗辯をした。それも、つい思はず出た言葉であつたが、自分ながらその實際の意味に這入つて行つて、いやアな、きたならしいことまで自分の想像に浮んで、而もこれを押しのけるよりも、寧ろ〳〵それに引き入れられた。そして自分はからだ中があたまの方にかけて熱くなつて行つて、胸にはさきに娘に對して持つた妬ましさよりもずッと根づよい、力づよい妬みと敵意とが燃えた。

『そッちの亭主が馬鹿だからッて、こッちの亭主を寢取るつもりか？』宇津木正次郎はよしんばのろい男であつたとしても、この宇津木燁子がそんなことを承知できない！

自分は一旦後家となつた家つき娘で、暫らくは後家を通してゐた。それがやがて一人の田舎ものの爲めに——自分にも足りない落ち度があつたとは云へ——矢ツ張り、お說きさんが今始めさせられてると思はれるやうな手で、段々口說き落されてしまつた。渠はその時はまだ全くの田舎ものであつた。

自分のうちへ、初めの頃は度々反物をおろして貰ひにやつて來た。そして實着さうに見せて、金錢上の取り引きはてきぱきとかたづけてゐた。こちらの方では、第一に、確かな人間と見た。それから、なか〳〵働きのある男と分つた。そして奥へも入り込んで來られるやうに許されたる。それから、また、段々とこの女主人の心を動かすやうになつた。その手や言葉を今から考へて見ても、なか〳〵うまい物で、この道を若し泥棒の方にでも持つて行けば、無論、一寸な細工ではとてもをへる人物ではなかつただらう。

泥棒ともののうちには、口で鼠の聲を出したり、足おとや手おとで物のころがつた音をしたりするものがあるさうだが、うちの人と來ちやア、云ふことがうらはらで丸ツきり違つてゐる。そして猫をかぶつて猫撫で聲が上手だ。それが最初にはこちらに少しも分らなかつた。

いよ／＼二度目のむこ養子にしてからのこと、

『どうしてほんとの問屋へいらッしやいませんでしたの』と尋ねて見たら、

『それも手よ』と、わけもなく答へた。『人からこの家のことを詳しく聽いたので、おれはお前を見込んで張りに來たのが仕事だ。だから、この色をとこがお前のとこでおろして貰つた品物は、皆、直ぐまたほかの反物屋へ賣り飛ばしてゐた。その間に多少でも口錢が取れたのは、ほんの、ただ二の町の儲けであつたのだ。』

『………』自分は驚いて一度は全く呆れてしまつた。そこまでもたくらみがあるとは夢にも知らなかつた。けれども、こちらは再婚の嬉しさで心が一杯になつてた時だから、さうちよくに打ち明けられたのを、意外と思つてしまうよりも、却つて一層嬉しかつた。親に知れないやうに子供がいたづらを成し就げられたやうに――もちろん、それは寢物語りに於いてであつたが――。

その時自分にはもはや十四歳の娘と八歳の娘とがあつたのだから、今更ら、まだ子供を産んだこともないお瀧さんと比べられては、ずツとお婆アさんであるのは分り切つてゐる。が、自分だツてまだお役に立たぬことはない筈である。その證據には、娘をその十七と十一との時にふたりともよそへ出したその翌年には、珍らしくも、貧乏の中にだが、今の人の子を設けた。それが近頃ではうツくんを云つたり、にツこり笑つたりするやうになつた。そしてその子がなければ、ひよツとすると、こんな亭主には見切りをつけたかも知れなかつた。

渠のお人よしとをんな道樂との爲めに、俄かに家運が衰微に向つて、夫婦になつた三年目には、もう、うち輪では餘ほど苦しいありさまになつてゐた。その出直しを今、やツと氣を持ち直して、やつてるのではないか？こんな見すぼらしい店であるにしても、渠が前のことを悔いてれば、うか／＼してはゐられないのだ。

それに何ぞや、お瀧さんの仕込みでだらうが、近ごろでは、俄か仕立ての而も下級な江戸ツ子などを氣取つて、——實に、ほん氣の沙汰とは思はれない。それも一つの浮氣の手でがなあらうか？　馬鹿々々しい！

若しお瀧さんの亭主がろくに稼がないで夜遊びをする爲めに、かの女が氣まぐれをする申しわけのできるものなら、こちらにこそは同じよりも以上の申しわけもできようと云ふもの。然し自分には可愛い兒もある。そして自分は決してそんな薄情をんなや不貞腐れではない。かど張つて出れば、自分は家つき女房であり、うちのはむこ養子でしかないと云へるけれども——。

四

こんなことを獨りで考へながら、ゆふべは夜ツぴて眠られなかつたのだが——赤ン坊も何かの具合ひでそれを感ずつてか、特別に寢付きがよくなかつた。

『可哀さうに、さう泣かせるなよ』と、うちの人も申しわけのやうには云つてゐた。

『…………』こちらは然しそんな氣まぐれなとぼけかたを相手にしなかつた。無理に泣かせたのではなく、どうしたのか獨りでにぎやア〳〵と云ふのであつた。

何をお瀧さんに振舞はうとするのかと云ふこちらの意味には、然し、うちの人もてツきり勘定をさされて少しは氣がとがめたと見え、それツ切りなアんにも云はないで果は眠つてしまつた。

そしてそのたわいのない男の腰すがたを横から見てゐると、こんな時にこそ、燒き餅ぶかい女が出齒鉋丁などを男の喉に持つて行くのだ、な、と思はれた。

ところが、お瀧さんはそんないさかひのあつたことを知らないので、

『坊や、お湯に行きましようか、ね』などと云つて、今夜もまたやつて来た。

『…………』ゆふべと同じやうな時間であつた。

矢ツ張り、こちらの食事半ばに来て、自分らのそばで赤ン坊をだいて現れながら、相変らず例のおしやべりをしたり、うちの人の盃を受けたりした。

『あたしも赤ン坊がひとり欲しい、わ。自分のができて、こんなに抱けたら、まア、どんなに嬉しいだらうか、ね』

『…………』こちらはその言葉をさう悪く取つたわけでもないが、かの女が如何にも淫乱の本性を云ひ現はしてるものとしか見えなかつた。

『拵へてやつてもいい、さ。』うちの人は酔ひにまかせてのやうな風をして、馬鹿なことを云つた。

『ほ、ほ』と、お瀧は胡麻化し笑ひをしてから、『どうか、ね。たんとお礼をしますから。』

『…………』馬鹿もの！と叱つてやりたいほどであつたが、おだやかに出て、『あなたはそんなことを男の前で冗談にも云ふものぢやアありませんよ。』

『おばさんは大層堅いんです、ね。』

『…………』こちらには、かの女の目つきと口調とが――どうも――こちらの結婚に関する時の事情をあさ笑つてるやうに受け取れた。

そして食事がすむ頃になると、また、かの女は自身の持つて来た手ぬぐひやしやぼんと共に坊やをだいて行つた。

もう、そんなあぶなツかしいおせツかひには及ばぬと云つてやりたかつたのだが、うちの人が『早く行け、早く行け』と頼んでたので、こちらはどう云ふわけかと考へながら、遠慮して黙つてゐた。そしてそのあ

とになつてから、わざと思しぬけに斯う云つて見た。

『あの人は一體、坊やを可愛いのでしようか、それともあなたが好きで――?』

『何を云ふんだ?』胡麻化しのてれ隠しにだらり、横を向いてしまつた。そしてその時、丁度ひとりお客さんがあつたので、粂はそれにかこつけて店へ坐わりに出た。

『……』こちらはその惱々しい後ろすがたをじツと見送つて、子どもさへなければ自分の權利として追ひ出してやらうかとも考へた。が、これまでに、もう數年間を辛抱して一緒に住んで來たことを思ふと、さまざまの未練がないでもなかつた。そして自分の胸にはむら〳〵と妬みの血が涌いて出た。

食事がすんでも、まだ自分はそのまゝお膳に向つてゐたのだが、ふと、いい考へが一つ出たので、立ち上つてその室の横手の、横丁に向つた窓の障子をそツと少し明けた。そして寒いので一旦は戸締まりをしてあるその戸のさんを外し、二つの戸を少しづつ引き戻してそのさきへ五分ばかりのすきを殘し、そこに當る障子紙のところへ、自身の指さきにつばを附けてちよツと穴を明けた。

店で客をあしらつてるうちの人を見ると、これに氣が付かないやうすであつたから、安心して、自分はそ知らぬぶりで臺どころの用事に臺どころへ出た。

そして皿小鉢をちやら〳〵云はせてゐるのだとは、神ならぬ身の知らう筈はなく、向ふもわざとぼけたふりで、

『おい、早く行つて來なよ』と、また湯の催促をしたのである。

『……』その來なよがお瀧の消しに來なよをこちらに思ひ出させた。そしてゆふべから今夜にかけて、たださへ嚴しい聲が一層嚴しくなつてるのをいよ〳〵怪しまずにはゐられなかつた。

不良（わるぐ）関つた女が別に男を持つた、そのわが亭主を却つて一段と以前よりもよくすることだ。一つにはおのれの悪事を感づかせない爲め、また一つには申しわけがないと云ふ心の引け味からであらう——が、自分としては今、そんな女心手をあべこべに男から仕向けられてゐるやうだ。

斯うなると、もう、たとへ坊やが鬼のやうなお瀧の爲めに熱湯の中へ突ッ込まれて死んでしまはうとままよ！自分は自分の大切な所天（をつと）のそばを留守にして置きたくはなかつた。

自分と入れ替はりにお瀧さんはここへ歸つて來るのであるから、自分の留守に——赤ン坊はどうせ何も知らないから——さうだ、自分の留守に、ゆふべも何をしてゐやアがつたか分らない。

坊やをつれて出るのも、疑つて見れば見るほど、こちらを湯におびき出してしまふ手であつて——そのあとをふたりは前以つて申し合はせて狙つてるのかも知れない。

『あたしも子どもを欲しいツ』と、うす暗いところでまたあごをしやくつて、私かにお瀧のあまツたるい言葉を眞似て見ながら、この妬ましさが絶頂に達したのをおぼえた。

『おい、のろい奴だ、なア——早くしろよ』と、うちの人の氣がせき出したのにも矢ツ張り優しみがあつた。

『…………』からだ付きから云つても、こちらののろくさしてゐるのは昔からのことである。それを人の浮氣の爲めに手ばしこく直すことはなほ更らできなかつた。

然し、餘りにせつかれるので、丁度、髮どころごとがかたづいたのを幸ひ、その氣になつて先づつべたい濡れ手をふいた。そして自分も手ぬぐひとしやぼんとを用意して、家を出た。

『坊やに風を引かすなよ』と云つたうちの人の言葉を、わざとにもそらぞらしいお世辭としか聽いてやらなかつた。こ

して自分ばかりが坊やの味かただと云ふ、親子の愛着心がそとの寒い夜かぜに滲み出て來て、浮き世が何だか溜らなく心ぼそかつた

しやぼん箱を兩手でしツかり胸に抱き込んで、自分のくびを下向きにすツ込めながら、しめつて堅い道を、少しちよこ〳〵と足を急がせた。そして自分の心のうちには、よく人の云ふ『世が世ならば』を繰り返したから、死に別れた人の番頭から直つた、堅くてすツきりした人物やその命令を今更らのやうに懷かしかつた。

五

少し行きかたが後れたので、もう、お瀧さんはお湯からあがつてゐた。板のまで衣物をたくつて、そのきやしやなからだに擲ふところであつた。

『…………』ふと、自分も赤い物を腰に卷いた時のことが思ひ出されて、若い女の身を羨ましくまた妬ましくなつた。

『なか〳〵おとなで、ね』と、はき〳〵した口調で云ふかの女の言葉を自分は無理にこれもそらぞらしいものだと見た。『いい氣持ちさうに目を半分つぶつて、だまアつておぶうに這入つてるの。』

『さうでしたか?』自分の返事も亦よそ〳〵しかつた。そしてこの相手の女が男に接する時のやうすや氣持ちをその言葉につれて想像された。無理に見せた笑ひを直ぐ赤ン坊の方に轉じた時には、然し、もう、その笑ひの無理はおのづからの和らかみに變はつてゐた。『おう、坊や、あツたいか、え』と云つて、おほがらな紫矢がすりのねんねこにくるまつてる兒を抱き上げた。そしてそれとなく、お瀧さんには悟られぬやうにして、ねんねこの上からその脊中やら足のかやらを調べて見た。そしてさう寒がりさうでもないのに安心した。それから、ヤツとかの女に向つて、できるだけ穩やかに、然し半ばは獨り言になつて、『どうもお世話さまでした。』

『からだがちツぽけで、は、お負けにたわいがないから』と、かの女も何げなく出てゐるやうだが、見ると、その切れめの長い目もとを細くしてゐた。少しも油斷してゐるやうすはなかつた。うツかりすると、落してしまひさうで

『さうでございますよ、まだこツちのしてやる通りになつてるんですから、ね。一面もこんな物を預かるのをしまに人を安心させて置かうとしたり――決してその手は喰はれ。

『おう、笑つてるよ！』お瀧さんも然しほんとに可愛いと云ふやうすをして、この時はこちらの方をのぞき込んだ。

『……』坊やのことが云はれてると、それでもこちらはちよツと氣が變はつて、別にいやな感じに襲はれなかつた。ほかのものも一二三名ゐて　あたりから坊やを可愛がつて呉れた。かう云ふ可愛いものがあるのに、その人は物好きた――！

『ぢやア、置いてきますよ』と云つて、かの女はせか／＼と獨りで出て行つてしまつた。

『……』自分はそれにもあツけに取られたのである。子どもだけはてツきりゆふべ通りにつれて行つて呉れるものと思つてたのに。

成るべく急いで這入り、成るべく早く湯をあがらうと思つて、兒を湯屋のおかみさんにまかせることにしたが、帯を解き初めて見ると、その解くと云ふことにいやな感じが伴つて出たのである。自分は留らなくなつて、俄かに解くことを思ひとまつた。そして斷うしてはゐられなかつた。

亭主が夜遊びに出たからおのれも出てやるのだと云つてるほどの者が、何でさう急がねばならぬことをその家に持つてゐようぞ。

ゆふべまではかの女がまだこちらに氣兼ねがあつて、お湯を出て行く時には殊勝らしくあとを伴なつてさきへつれて歸つて

呉れたのだらう。が、不都合にも、もう、こちらを相手にし易いとでも思つてか、副々しくもその地がねを現はしたのは？手としても、餘りにまづい！

きッと、きれいになつたところで――？さうだ！斯う考へると、自分の心からが先づ自分のあし場を引ツくり返すやうな氣がして――どうしても、斯うしてはゐられなかつた。

ぷんと、ほかの人からにほつて來た人間のにほひをも癪にさわつた。急いで自分の帶を卷き直し、赤ン坊をおかみさんから抱き取るが早いか、土間へ下りようとして、くら／＼と目まひがしたのを番頭臺につかまつてやッと自分の日より下駄のうへに踏みこたへた。そしておほ急ぎで湯屋を出た。そして頭巾をした坊やの額には夜かぜが當らないやうにしてやりながら、自分ながら呆れるほどのろい足を速めて、自分の家のそばまで來た。

店へのお客さんは來てゐるやうすがない。店さきの右手の棚へ自分が人の目に立つやうに積み上げた白毛布を後ろに照らさせて、店かざりに軒から下げてある多くの小切れの風にゆら／＼動いてるのが見える。が、淺草の時に比べてはこれぐらゐではまだ／＼ずッと見すぼらしかつた。

これに然しはすかひに遠見して、ちよッと立ちどまつたのだが、自分の店が何だか自分の家ではないやうで――坊やと自分とはもはや、振り棄てられた末、どこかの場すゑにさまよつてる氣がした。

先づ、然し、大通りと横丁との角に當る自分の店の隅へ拔き足で近づいて、坊やを少し自分の右の方へ隱しながら、こッそり店の中をのぞいて見た。ところがうちの人の姿が果して見えなかつたので、今度はあわてゝ例の窓に接して置いた戸のすきまへ行つて見た。

自分は一ときに卒倒しさうになつた。あごががく／＼とし出して、ふらつく足を、これでも、自分ながら踏みしめて

今一度のぞいて見ようとしたが、餘りに遠慮された間から思はず、
『えへん』と、一つ、大きなせき拂ひをしてしまつた。そして直ぐ勝手口の方から、わざと障子や壷どころの板をがたぴしさせながら、あがつて行つた。

家ちうが眞ツくらに見えたのは、自分が餘りにのぼせてゐた爲めで――少し氣を落ちつけて目が見えると、赤い顔をしたお瀧がこちらの直ぐそばで部屋の眞ン中に突ッ立つてゐた。そしてうちの人は、もう、店の方へ行つて、このそばにはゐなかつた。

『お歸り――あたし、おやア歸る、わ』と云つた。このあとの方の言葉はかの女がうちの人に云つたのか、これともこちらへか、どちらとも判然しなかつた。

『……』自分はかの女を睨みつけたけれども、返事をしてやらなかつた。

『おやア、左樣なら。』お瀧はこと更らに平氣さうにして店の方へ行つた。

『……』こちらも直ぐには坐わらないで、奥からかの女の方をじツと見つめて見てゐると、土間へ下りた時直ぐくるりと向き直つて、今一度こちらをじろりと見返した。

『……』かの女は、もう、腹ツぽやでも据ゑたと見え、こちらが見てゐるのを知りながら、下駄をはく時その手を帳場に突いて、うちの人の坐わつてゐる方へ顔を突き出して、ちよツと何か耳うちをした。

『……』自分はこの二晩、三晩をお人よしの故を以つて皆に出し抜かれてゐたのかと思ふと、あらゆる口惜しさと立ちしこみに火の失望とに押し付けられて、赤ン坊をじツと抱き締めたまま、天井でもくづれて來たやうにどツたりと重い膝を火鉢の坐に落した。

そとにはどちら行きかの電車の通つてる響きがする。自分はお瀧の逃げて行つたあとばかりが憎々しかつた。

『お湯にへいつて來なかつたのけい？』店からはうちの人が斯う聲をかけた。

『…………』よくさう澄ましてゐられるものだ！相變らずわざとらしい部分の優しみには、ぬら〳〵した靑大將のやわらかいうねりを思ひ合はされた。自分はぞッとおぞ毛をふるつたが、その勢ひについ、心でなんだ、とぼけてゐやアがつてと云つてしまつた。

暫らく互ひに奥と店とを隔てて無言であつた。

一もう、どうなつてもかまはないと思つた自分だが、宇津木お葉としてはいつまでもここに斯うして坐わつたまま、坊やともろ共に死の來たるのを待つてもいいと云ふ氣であつた。うちの人に向つても、あんまり人を馬鹿にした仕うちが悔しかつた。

ぼんぼん時計の後ろで鳴るのを――見る氣もないままに――數へてゐると、九時まで打つた。もう、大分に夜が更けたと思つてるのに、まだ冬の夜は長かつた。

うちの人のゐる店の方から這入つて來るものは、この奥へ吹き入る風までが薄情らしくに寒い。坊やにばかりは湯ざめをさせないやうにと、赤い頭巾を目ぶかにまたかぶせ直してやつた。

前通りを今、四谷見附けの方から來た電車が新宿の方へ通つて行つたやうだ。そしてそのあとに支那そばの喇叭が聽えてゐる。これとあめ屋の唐人笛ほど子供の寢てゐる神經にさわるものは恐らくあるまい。この二つに自分が今一つ、いやな物を加へて見れば、あのお瀧の中高ごゑだ。

『およしツては、おかみさん、助平ッたらしい！』

『…………』あのおこつたやうな面も皆がつてる聲と來たら、そもそも何たることであらう――！うちの人もまた人の前をも憚らないで――！化合はせにも、うちの娘はあんな淫風ちきではなかつたので、直ぐとその母へ泣き訴へた。

けれども、そのおかげで、可哀さうにも、鸚人ふぜいに落ちて行つた。

ふと、障子の腰がらすからそとをのぞいて見た人のあし音がしたので、お客さんかと思つたのだが、さうでもなかつた。こんな寂しい店では、とても繁昌して行きさうがない。

支那そばの喇叭は今電車の行つたさきとは反對の方角へ遠のいて行つたのだが、そのあとに向つて、これを無遠慮なおほ聲で呼び戻す聲がした。

『支那　ば！支那ーば！おい、そばや、そばや！』

『…………』お向ふの西洋小間物屋のせツかちな旦那であるので、またかと、こちらはをかしくなつた。

『もう、寒いから店を締めろよ。』

『…………』これはまたうちの人の突然な言葉であつたが、お向ふのに比べてはいつも馬鹿におとなしいのである。これで惡い氣まぐれさへして呉れなけりやア――。

『おいらァちよツと出て來るから、な。』

『…………』てツきりあれだと直ぐ想像はついた。

がらすからのぞいてゐると、うちの人は店の丸火鉢のそばを立ちあがるが早いか、待ちかまへてゐたかのやうに、こちらをふり向きもしないで下におり、下駄を突ツかけてそそくさと行つてしまつた。

自分には、然し、渠がいくら隠れ遊びをしようたツて駄目であつた。

自分は先づ抱いてる子をねんねこでしッかり、あッたかにおんぶしてしまつた。それから、店へ出て土間へ下りた。

そこには、半襟や小切れやちよッとした反物類の陳列品がうへからつる下がつてゐた。——めりんすの半襟——銘仙、秩父、ちりめん、羽二重などの小切れ——黒地にみどりとゑび茶のおほがら子持ちじまの銘仙を二つ折りにしたもの——すべてこんな品々を手速く取り外した。そして外せないのは自分の力で引きちぎつた。そしてそれらを一緒くたに二度にも三度にもくる／＼と丸めて、疊の方へ投げ込んだ。

この時、丁度ひとり、

『もう、おしまひですか』と云つて、女の客があつた。が、殆んど夢中になつてる自分には、これも亦お瀧の同類ではないかと思はれたので、すげなく斷つて、まるで相手にしなかつた。そしておもてのはづし戸を店の横手から一々運んで、ずん／＼うちがわへ縮めてしまつた。それから、臺どころの方へ行つて、勝手口からそとへ出て、そこの戸を立て寄せて置いて家を離れた。

『……………』お瀧と申し合はせがあつて、うちのはきッとどこかへ落ち合つてるに相違なかつた。それを突きとめて置きたかつたのである。

『そばぐらゐ振舞つてやつたッて——』ふん、何を云やアがるんだ、あんな女に！畜生！お瀧をだッてそのまゝにして置くと思ふのか？

六

お巣がそれと心あたりをさして行つたのは近處で有名なそば屋であつた。

その前へ來ると、ぷんと一つ、湯屋などのとは違つて、色けを離れたいいにほひがした。それで自分もちよッと喰ひ

氣の方が動いた。そして猶ほ自分はわれ知らずの熱をこ來した。

直ぐ暖簾をくゞつて這入ると、そこの障子に近いおもて店であつたが、ここには一人のすがたが見えなかつたで、門の方を奥へ這入つて行つた。そして足おとのしないやうに附き行をよけながら、客のゐてもひとりやふたりやの、または全くからツぽの座敷々々をこツそりのぞいて見た。

すると、一番奥の、大きな行のこうづ鉢に近い小座敷に、果してふたりはふたりツ切りの夫婦氣取りでさし向つてゐた。そしておかめか何かのどんぶりを明けて、一杯やつてるところであつた。

それがそとから障子のがらす越しに見えてるので、ぐうツと自分の喉が鳴つた。

『御馳走さま』と云つて、出しぬけにあがつて行つてやらうかとも思つた。が、――若しうちの人がうま〳〵と見つけられたそちらの不始末を胡麻化す爲め、こちらの女としての餘りはしたなさを楯に取つて、こんな時のいきどほりを漏らしでもしたら、どうだらう？殆ど密會のやうないい氣持ちになつてゐるところを、突然にびツくりさせられては、卑怯なこそ〳〵泥棒も俄かに強氣にゐなほるかも知れなかつた。あたまから若し怒鳴り付けられては、自分としてお瀧に對しても癪の種がふえるわけだし、また他のお客やここの人々に向つても面目がないのであつた。

自分が來て聽いてるとは夢にも知らないふたりの話だ――

『お前さんだツて、もう年が年だらうから、ね――』

『…………』畜生！失禮な！

『さうだ、存外を云はせぬことにして置くとしようかい？』

『さうだとも！』

『……』何がさうだともだ？おほきにお世話だ！たとへ一杯機嫌のうへのことにしたところが、こちらをさし置いて夫婦にでもなる氣だ、な！人があの人の爲めにはこれまでどれだけ苦勞をさせられて來たかも知らないで――先祖の家をつぶされただけでも、その恨みが一層執念深くあの人に對する自分の離れられぬ心となつて、ただそれだけででも滿足をして來たのだのに。

自分は今まざ〱と渠に初めてうまくだまされて行つた時のことが思ひ出された。――番頭も引け、小僧も休み、娘どものよく眠りに就いたのを見計らつてだが、自分はそツと家をぬけ出した。そして、いつも近處まで來て待つてる男の手に迎へられた。そして淺草公園の、矢ツ張りそば屋でなければ牛肉屋で會合した。そして誰れにも見付けられるおそれがないと云ふことが、不思議にも安心であり、またおもしろ味であつた。自分はその時のことを今や後悔しつつも、ます〱懷かしくなつた。あの時からして、こちらも向ふもよく太つてゐた。

『さうだ、あの時には、自分は男の身ぶんがあまり低いのを卑しめて、まだ夫婦になるまでの考へは持つてゐなかつた。ただ兎に角に太いからだを、自分獨りで手よりなく持て餘してゐたのであつた。

『……』まだ何か向ふのふたりは云つてゐるやうであつたが、そのあひだに『あなたがした手に出てゐるからいけないんだ、わ――よしんば、養子だツても』と云ふのも、何だか耳遠く聽えた。

『……』いつのまにか、自分はあの時の氣ぶんを恢復して、胸が早がねを打つやうに鳴りとどろいてゐた。からだぢうの血があたまのどこか一ケ所に集つて行くのであつた。

すると、俄かにまたふら〱と自分はそこに顚倒しかけたのである。そのあひだに、渠等がかげで何を云つてたか、

要は覺えてゐながらも、その意味は全く分らなかつた。何でもこちらの惡くうと向ふうに都合のいいことゝばかりでもつたのは、それでも、あきらかにおぼえてゐる。

が、若しここで子どもをおんぶのまま氣絶でもすると——さうだ、それが自分には甚だおそろしくなつた。そして自分はまたそこの敷き石をさけて、庭の土を踏みながら、こツそりとそとへ引き返した。

いいにほひや喉の鳴りなどはどこへやら行つてしまつた。あまりの妬ましさが先づ心のさきに立つてゐた。が、自分の目に映つてたところを思ひ出すと、お瀧のしてゐた前かけはどうもうちで無くなつた品物のやうであつた。あいつが盗んだのか、それともうちの人がやつたのか？

烈しくびん〱する兩方の米かみを兩手で押さへながら、急いで自分はうちへ戻つた。そして勝手ぐちを這入つたあとの戸締まりをしてから、茶の間へ來ると、何だかきなくさかつた。

何か火鉢へくべて行つたか知らんと、直ぐそこへ行つて見たけれども、そんなやうすもなかつた。

念の爲めにあんかを二つとも調べて見たが、まだ火を入れてないのに物がくすぶるわけもなかつた。

まきで焚く釜の下だツても、朝焚いた切りで、火のありやうわけがない。

はばかりへ行きたくたつたので、行つてきてからまた茶の間の手前で鼻を明かせて見ると、矢ッ張り、然しきなくさい。

ふと、うちの人が店で坐わる火鉢のそばを思ひ出し、瀧があわてて出て行く時に何か粗相をして行つたのではないかと考へた。そしてそこへ行つて見ると、——さうだ！自分の出る前に、繕くたにして投げ込んだ切れがごちや〱と火鉢の周圍にちらかつてゐた。そして自分ながらびツくりしないではゐられなかつたことには、火がその上へ落ちた一つ

の切れのはじを傳つて疊に移り、丁度他の切れの落ちてないところを、くさし渡し二尺ばかり燒いたところである。あわてて水を持つて來て消しとめたことはとめたけれども、今少しぐづ〱してゐれば下の根太へ燒け移り、根太が燒ければ緣の下から風があふつて、ほんとうの火事になるところであつた。

自分のお友達のうちに夫婦喧嘩からおほ火事を起したものがあるのを思ひ出して、ぞツとした。嫉妬さわぎどころではなかつた。うちの人が歸つて來て、これを見た時、どう云つて申しわけをしよう？けれども、その時には、もとの起りに對して云ひぶんのないことはない。いや、十分にあるのである。

兎に角、氣を持ち直して、自分は寢どこを取つた――いま〱しいけれども、いつも通りの二つを。そしてうちの人の方へもあんかの火を叮嚀に注意して入れた。どうせ歸つて來ることは來るだらうから。

赤ン坊の時々ぎやア〱泣くのも、今夜に限りうるさかつた。そして珍らしくもうへの娘のことが頻りに思ひ出された。若しうちにゐたら、もう、こんな時にも隨分話し相手になつて吳れて――さうしたら、また、こんな粗相もなかつたものを！

今から思へば、あんなに取り急いであんなものにしなくツてもよかつた。別にもツといい考へもあつたらう。自分があんまり面喰らひ過ぎたのである。源氏節は自分も好き、娘も好きであつたが、――さて、かの女が行つて見ると、早速――器量がいい方である爲めだらうが――お師匠さんの御亭主に當る人のおめかけにされてしまつたと云ふ。かの女だツて初めはいやであつたさうだが、お師匠さんからも達ての頼みがあつてよんどころないので、とう〱いはれるままになつてしまつた。

が、どこの男もなぜそんなにみだらなものであらう？尤も、娘はお師匠さんも承知の上のことだから、――そしてその

れが爲めに歌や三味線その他の藝ごとは他のものらよりも一層可愛に、また親切に教へて貰へるだらうから。——のち／＼は人よりもすぐれて一かどの藝人にはなれるだらう。が、——

『然しその爲めにわたしは却つてほかの朋輩衆よりも氣苦勞が多うございますよ』と、可哀さうに、ませたことを云ふやうになつた。『お師匠さんのお膝もとで大切にされてをりますだけに、それだけまた位も見せて置かないといきませへんし、な、また下のものへ情愛も持つてあげまへんと——』斯う云つて、ませた上にもお師匠さんの連中が使ふかみがた言葉がまじるやうになつたのも可哀さうであつた。

けれども、大阪へ行つても、仙臺や北海道へ行つても、師匠の一弟子だと云ふのでお座敷がかかることが多い。從つてお祝儀を貰ふことも澤山で——然し、それだけ、連中の間へ歸つて來てからは、朋輩衆に十分滿足を與へるほどのおすそ分けをしてやらねばならぬさうだ。

いつか淀橋の柏木亭ができた時に、その舞臺びらきをやりに來たが、——こちらがまだしもた屋でゐた住まひの近處なる料理屋へ呼ばれたついでだとか云つて、久し振りで尋ねて來たのだ。丁度、うちの人が留守であつたので、あがつて暫らくいろんな話をして行つた。その話のあひだに、斯う云つたこともある、——

『わたしが度々來ますと、またおツ母さんの爲になりまへん。たよりもしたいのは山々ですけれども、まア、たよりのないが無事だとおもて貰ひます。お互ひにいつ死ぬやも分りまへんが、死んだ時には誰れからでもまた知らせて來まッさ。』

『……………』そんな心ぼそいことを云はれては、娘に向つてだツてこちらの肩身が狹かつた。しないでもよかつたものにしたと云ふ、かの女からの棄て鉢の恨みが云はせてゐるのかとも思はれたが、あながちさうでもなかつた。きのふは

東、けふは西の旅藝人になつてゐては、かよわい女としてもそれ位の覺悟が出るものらしい。早くから世の中の苦勞をした爲めでもあらうが、年の割りにはほんとうにませたことを云つた。その言葉があとまでもこちらの耳に殘つて、可哀さうで、可哀さうで溜らなかつた。

『わたしは、もう、これで仕かたがおまへんさかい、これでよろしゆおますけれど、世間にはわたしらよりもツと、もツと不仕合せた人があります。』

『……』こちらから見れば、娘はその自分自身も不仕合はせであるのを忘れて、人のことを考へてやつてゐるのであつた。朋輩衆の中には、よくその身の上を聽いて見ると、隨分氣の毒なものがあつて——親があつてもその行く處が分らないのや、兄弟どもが薄情で世話一つしないのや、病身の母に年中みついでゐるのや、男に棄てられて棄てツ鉢になつてるのや！

『さう云ふ人に比べますなら、わたしらはまだ〱仕合はせの方ですさかい、自分の身のことは二の町にしても、成るたけそんな人をようしてやらうとおもてます。』

『ああ、さう親切にしておやりよ。』こちらは思はず涙をこぼしてゐるのであつた。『女と云ふものはどこへ行つてもよう せ不仕合せだらけだらうから、ね。』

いつまた會へるか分らないと云つて、かの女は母に壹圓、妹に五十錢を殘して行つた。

その時には、まだ今度のことなどは夢にも起きてゐなかつた。こんな小さい店でも再び持つことになつたのを喜んだのに、うちの人は直ぐまた心がつのつて、この昨今のありさまである。これを娘に聽かせたら、また〱悲しみを加へさせるに違ひなからうけれども、斯う獨りぼツちのやうになつては、今ここにかの女がゐて呉れれば、自分の心を少

しても晴らして貰へただらうに！

七

十二時も打つた。そのうちにまた一時も鳴つた。

と切れてゐた電車が一つ、がら／＼と音を立てて新宿の方へとほつたのを、多分赤電車であつたらうと思つた。

じツとなほわけもなくそと通りの方へ耳をかたむけながら、自分の目はあふ向けに寝たまま、天井を見つめてゐた。

『支那そば！支那そば！そばや、そばや！』お向ふの旦那の口調を口のうちで早くちにくり返して、われながらまたをかしくなつた。

『わたしなどよりもツと、もツと不仕合はせな人がをります。』斯う云つた源氏節の娘は今ごろ、どこの、どんなところで眠つてるだらう――はねたあとの席に寒い蒲團を着て皆とごツちやに寝てはゐなからうか、それとも男と一緒にあツたかく？

その次ぎの娘の奉公も、まだ年が行かないのであるから――さぞこの寒さがつらいであらう。近ごろは一向にやつて來ないが、今度來たら、坊やの笑ふのを見せてやりたいのに――。

『…………』ふと、泥棒が來たのぢやアないかと云ふ氣になつて、ぎよツとした。先づ坊やをかた手でかばひながらあたまを枕から上げて耳をきき澄ますと、勝手の戸ががた／＼云つてゐる。ああ、それかと分つたのでまたあたまを下げてしまつた。

『あけて呉れ！あけて呉れ！』

『…………』自分には、うちの人の聲が今夜に限り、全く誰れかほかの人のそれのやうに聽えた。

『あけて呉れ！おい、あけろ！』

『…………』

『おい、お葉、あけて呉れ！』

『…………』

『おい。あけろ、あけろ！』

『…………』先代のたましひでもあつて呉れれば――。これともまた別にもツとまじめな人であらば――。

『おい、こら！あけろ！』

『…………』そちらがあのさまなら、こちらも亦今來た人が別な男であつてもかまふまいと云ふ反抗心があつた。

『こら、お葉、あけろ！』

『…………』ます〱戸の叩きかたの烈しくなつたのが却つてこちらにはをかしかつた。自分はなほうツちやつて置いた。尤も、もツとがた〱させてゐるうちには、自然に明くだらうと思へるほどに戸締まりをゆるくして置いたのだ。

『…………』聲が納まつたと思ふと、果して戸が明いた。

『…………』こちらは俄かに、火の粗相をあした見られた時、どう云つて申しわけをしようかと考へてゐた。

『もう寢てゐるのかい』と云つて、うちの人は寐どころから茶のまへ這入つて來た。

『…………』心でばかり叫んだ、夜たかぢやァあるめいし、今ごろ、誰れが起きてるものか？顏でも洗つて出直して來るがいい！

『起きねいか、なア』と、失望でもしたやうな聲はこちらの枕もとなる上の方から聽えた。ぼんやりと突ッ立つてるら

しいおみやげがあるぞ。』

『…………』自分は横を向いて蒲團を引ッかぶつてゐたが、その中で、つい、ぷッと私かに吹き出した。お瀧さんのおこばなど、もう、もう、十分であつたから。

『仕かたがねいや――ぢやア、うッちやつてしまへ！』

『…………』聽いてると、渠がわざとらしく投げ出した物は果して疊の上でばたりとひらべッたい音を立てた。

『きみがアなさアけエのウかり寢エのウとこウよッか』と、鼻うたを歌ひながら、渠はその角帶を解き初めたやうすだ。きゆう〳〵と云ふ音がした。「まくらアかたア敷きイ夜もウすがアらア』

『……　……』御苦勞さまと云つてやりたかつた。自分を初め、いろんな女を、恐らくその手でたらして來たのかと思ふと、憎らしくツて！

その横ツつらをいきなり一つ、起きて行つて張り飛ばしてやりたいのだ。自分の身うちに燃え立つ血を抑さへるやうにさへしてゐれば、男と云ふものが帶を解いたあとの姿ほど、今や思つて見ても、これほど見にくいものはなかつた。而もいい年をして、いまだに浮氣ばかり！

餘ッぽど飲んで來たものと見え、こちらまで酒のにほひがきこえる。

『ヤア、どうだい、一度起きねいか？』またおそくなつた申しわけとも、また全く別な意味とも取れるこの捨てぜりふで、どたりと大きなからだをとこの中へ投げ込んだ響きがした。

『…………』何かのきッかけさへあらば、それをしほにしてまた一つ――今度は確かな證據を握つてるから――十分に責めつけてやらうと考へてゐた。

『おう、あツたけい、な!』

『……』あんかを入れて置けば、あツたけいのは知れたことではないか?

『矢ツ張り、自分のうちほどいいとこアねいや、な。どこへ行つてもこんなにして呉れるところはねい。へん、女房と云ふものアありがたいものだ、わい。』

『……』お葉はその所天の獨り言を聽いてをかしくもあり、また憎らしくもあつた。が、矢ツ張り、そら寢をしてゐながらも、所天の歸つたのが一番安心であつた。

――大正七年十二月十七日作――

新作能

實朝

虚子

「金槐集」の歌を五六纏ぎ合せた丈けのもの中央公論社の勸めに從つて倉卒に筆を採り一回の推敲も無しに寄出す。大正七年十二月十六、七日。

囃子方（笛、小鼓、大鼓）座付きて、作り物「銀杏」を出す。これは後になつて二つに割れ「船」になる仕掛けのもの。

名乘り笛にて脇出る。着流し水衣の旅僧。

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。我此程は伊豆の國に候ひしが。これより鎌倉へと志し候。道行 箱根路やわが越え來れば伊豆の海。〱。沖の小島に波のよる。晝ともわかぬ旅衣。脱ぎ重ねつゝほし月夜。鎌倉山に着きにけり。〱。急候程に。これは早鎌倉に着きて候。これこそ名にし負ひたる。鶴岡八幡宮と拜まれ申し候。社段の下に立てる銀杏の木こそ。彼の實朝の卿を弑しまゐらせし。公曉法師の隠れたるところと覺え候へ。宮柱太しきたてゝ萬代に。今ぞ榮え

ん鎌倉の里。これ實朝の卿の詠歌なり。其萬代と頼まれし。源家の榮えも露霜と。消えて久しき夢のあと。見るに涙もとゞまらず。草木國土悉皆成佛と聞く法の。僧は木の下に禮拜し。南無幽靈成等正覺。出離生死頓證菩提。

僧は脇座に着座。

一聲（越ナシ）の囃子になる。此囃子はシテの出る氣分を作るものなり。シテは直形に一二着附も面も「田村」などよりは淋しく沈みたるもの。着流し。箒持つ。

シテ「うつゝとも夢ともわかぬ世にしあれば。有りとてありと頼むべき身は。これは幡此八宮に仕へ申す。庭掃きのをのこにて候。けふも亦た庭を清め候。鶴が岡仰ぎて見れば嶺の松。〳〵。梢遥に舞ふ田鶴の。羽音にも散るいてふ葉を。今こそ秋の錦ぞと。黄金の波を踏みわけて。神のお前を掃き清む。や。これに見なれ申さぬお僧のわたり候。何方より御出候ひけん。ワキ「これは一所不住の僧にて候が。此銀杏の木の下に佇み。宮柱の詠歌を口ずさみ。實朝の卿の御あとを弔ひ申候。シテ「げによく御弔ひ候ものかな去りながら。其御歌の心を何と御覽じ候ひけん。此御歌は實朝の。やがて亡ぶる源家の運を。思ひ明らめ給ひながら。強ひて慶賀の心をと。祝ぎ讀める御歌なり。ワキ「實にも哀れや實朝は。無常を觀じ世を厭ひ。なけきわび世をそむくべきかた知らず。吉野の奥も住うしといへり。かや

うに讀ませ給ひしとかや。シテ「又人につかはすかたに　世の中にかしこき事もわりなきも。地「思ひしとけば夢にぞありける。これも無常の心なり　上曲「源家の運は己が身に。縮まりぬるを知る故に。廣元が。いさめをしりぞけおはしまし。位を極め官を帯び。又宋人、の船だくみに。船を作らせ給ひつゝ。先生の御住所。醫王山に詣でんと。入唐の心おはしましぬ。シテ上羽「されど又實朝の。歌の姿は雄々しくして。地「加茂の眞淵が奥山の。谷の岩垣さぐゝみ出で。天にかける龍のごと。天ぎらふ。五百重の雲を踏みあかち。草木を拂ふ風の如く。ひたぶるにして心高く。雄々しくしてみやぶりなる。古への姿ぞと金槐集には評き添へたれ。塒を急ぐむら鴉。門遊びする童達の。罵り騒ぐ聲迄も。夕間暮して宮奴の。姿も定かならず。物すごの景色や。御身いかなる人やらん。とく〱名乗らせ給ふべし。シテ「今は何をか包むべき。我實朝の幽靈の。これ迄現はれ來りたり。地「扨ては不思議や實朝の。其幽靈にてましまさば。蹴鞠の庭の面。詩歌管弦の月の御舟の。御遊をもまのあたり。其ま見え申さんと許りにて。社段の方に去るかと見えつるが。風打騒ぐ銀杏の木の下に。ゝ見えずなりにけり。〱。

シテは銀杏の作り物の中に隠れ去るなり。

中入は間狂言一人出で、次の意味のシャベリをする。間狂言は一枚の銀杏の葉の心。

其シャベリの意味は、「實朝が殺された時から今の世迄の有様を、自分等は悉く知つて居る。其間七百年の星霜を經て居るが、人の世は少しも變つた所は無い。今の世の人は昔と今と大變變つて居るやうに思つて居るが、我等から見ると同じことだ。いつも同じことを繰り返して居るのだ。此銀杏の木の下で亡びた實朝も、現在此銀杏の木の下で遊んでゐる子供等も、皆生じては消え消えては生じる泡のやうたもので、さういふものゝ生滅のつながりを人の世と言つて居るのだ。流石に實朝は其をよく知つてゐて、此銀杏の木の下で殺された時も、何の驚きも何の怨みもなしに死んでしまつた。我等木の葉が梢から落る時も同じ心持で、其時はまことに心やすいものである。」

右のシャベリが濟んでから、次の意味のことを唄に謡ひながら退場する。

「先づ梢の一番先に在る一葉が風も無いのにはらりと散る。其一葉に誘はれた次の二三枚の葉もはらりと散る。其等の葉が次々下の枝の葉を誘うて散る。其等が又下の葉を誘うて散る。其誘ふ葉の數は數限りも無く殖えて來る。初めは唯一枚の梢の葉の落ちたのが、おしまひには數限りも無い木の葉となつて、大地へ網を廣げたやうに落ちる。」

此の間狂言が退場してワキは待謡を謡ふ。

ワキ 待謡「夜もすがら散るや銀杏の影に居て。〳〵。心もすめる法の場に。寢られぬまゝに座具をのべ。彼の御あとを弔はん。〳〵。」

此待謡の終ると同時に越の段ある一聲の囃子にて後シテの出る氣分を作る。

此囃子の終る時、作り物左右に二つに割れ船となる。後シテは衣冠束帶にて太刀を帶びたる實朝の姿。船の中に在り櫂柄にかゝり居る。

シテ 一聲「大海の磯もとゞろに寄する波。われてくだけてさけて散るかも。あら嬉しや行光が。行(ぎやう)

事たりし唐船の。船よそほひも事終り。今こそ波に浮みしぞや。ワキ「不思議やなうばたまの闇の中より艪聲して大船一艘浮み出でしが。衣冠束帯の御装ひ。管弦の役者を從へて。現はれ給ふ御姿。若し寶朝にてましますか。シテ「早くも御覽じ給ひたり。午の刻より申の刻迄。諸人力を盡して引くといへども。遂に浮み出でずして。地「彼の船徒らに。砂頭に朽損したりしと。世につたはりし面なさも。今は嬉しや大海原。波も靜かに浮み出でゝ。心晴れたる船路かな。抑も延保。元年の秋の一夜とかや。時しも子の刻の。南おもてに御出ありて燈消え人定まり。悄然として音もなく。唯月の色蟋蟀の思ひ。心をいたましむる許りなり。或時は又雪の日の。山家の景色見給ふとて。民部太夫の家にして。和歌管弦の御遊あり。行光がはなむけの。黒駒の立髪に。紙を結びて此の雪を。分けて心の君とかや。又或時は此國の。土居といふ所に。九十に餘るくち法師の。おのづから來り。昔語りなどするに。シテ「思ひ出で。よるはすがらに音をぞ鳴く。地「ありし昔の物語。ことに秦の公氏に。髮一筋を取り出でゝ。之をかたみと夕づく日。早夜に入りて戌の刻。燭を秉る人進りて。いと嚴かにありけるが。寶朝供奉の人々を。樓門の外にとゞめ給ひて。仲章のみ從へて、參拜事終り。社段を下る時しもあれ。暗き銀杏の木影より。現はれしますらをの我首取りて高らかに。公曉法師とのりにける。思へば遠き昔なり。山は裂け。海はあ

せなん世なりとも。君にふたごゝろ我あらめやも。

此間にカケリといふ短き活動的の舞入る。

地ノツキ「武士の矢並つくらふ小手の上に。霰たばしる。有明の月の。夜は早明けぬ。おのづから。我を尋ぬる人もあらば。野中の松よ見きと語るな御僧と。かき消すやうに失せにけり。〳〵。



あの頃の自分の事

芥川龍之介

以下は小說と呼ぶ種類のものではないかも知れない。さうかと云つて、何と呼ぶべきかは自分も亦不案內である。自分は唯、四五年前の自分とその周圍とを、出來る丈こだはらずに、ありのまま書いて見た。從つて自分、或は自分たちの生活やその心もちに興味のない讀者には、面白くあるまいと云ふ懸念もある。が、この懸念はそれを押しつめて行けば、結局どの小說も同じ事だから、そこに意を安んじて、發表する事にした。序ながらありのままと云つても、事實の配列は必しもありのままではない。唯事實そのものだけが、大抵ありのままだと云ふ事をつけ加へて置く。

十一月の或晴れた朝である。久しぶりに窮屈な制服を着て、學校へ行つたら、正門前でやはり制服を着た成瀨に遇つた。こつちで「やあ」と云ふと、向うでも「やあ」と云つた。一しよに角帽を並べて、法文科の古い煉瓦造の中へはいつたら、玄關の掲示場の前に、文和服の松岡がゐた。我々はもう一度「やあ」と云つた。立ちながら三人で、近々出さうとしてゐる同人雜誌「新思潮」の話をした。それか

ら松岡がこの間、珍しく學校へ出て來て、西洋哲學史か何かの教室へはいつたが、何時まで待つても、先生は勿論學生も來る容子がない、妙だと思つて、外へ出て小使に尋いて見たら、休日だつたと云ふ話をした。彼は電車へ乘る心算で、十錢持つて歩きながら、途中で氣が變つて、煙草屋へはいると、平然として「往復を一つ」と云つた人間だからこんな事は家常茶飯である。その中に、傴僂のやうな小使が、朝の時間を知らせる鐘を振つて、大急ぎで玄關を通りすぎた。

朝の時間はもう故人になつたロオレンス先生のマクベスの講義である。松岡と分れて、成瀨と二階の教室へ行くと、もう大ぜい學生が集つて、ノオトを讀み合せたり、むだ話をしたりしてゐた。我々も隅の方の机に就いて、新思潮へ書かうとしてゐる我々の小說の話をした。我々の頭の上の壁には、禁煙と云ふ札が貼つてあつた。が、我々は話しながら、ポケットから敷島を出して吸ひ始めた。勿論我々の外の學生も、平氣で煙草をふかしてゐた。すると急にロオレンス先生が、黑い鞄をかかへて、はいつて來た。自分は敷島を一本完全に吸つてしまつて、殼も窓からすてた後だつたから、更に恐れる所なく、ノオトを開いた。しかし成瀨はまだ煙草を啣へてゐたから、すぐにそれを下へ捨てると、慌てて靴で踏み消した。幸、ロオレンス先生は、我々の机の間から立昇る、縷々とした一條の煙に氣がつかなかつた。だから出席簿をつけてしまふと、早速何時もの通り講義にとりかかつた。

講義のつまらない事は、當時定評があつた。が、その朝は殊につまらなかつた。始からのべつ幕なしに、槪略ばかり聽かされる。それも一々Act I Scene 2と云ふ調子で、一くさりづつやるのだから、その退屈さは人間以上だつた。自分は以前はかう云ふ時に、よく何の因果で大學へなんぞはいつたんだらうと思ひ思ひした。が、今ではそんな事も考へない程、この非凡な講義を聽く可く餘儀なくされた運命に、すつかり默從し切つてゐた。だからその時間も、機械的にペ

ンを動 て、帝劇の筋書の英譯のやうなものを根氣よく筆記した。が、その中に教室に通つてゐるスティムの加減で、だんだん眠くなつて來た。そこで勿論、眠る事にした。うとうとして、ノオトに一頁ばかりブランクが出來た時分、ロオレンス先生が、何だか異様な聲を出したので、目がさめた。始はちよいと居睡りが見つかつて、叱られたかと思つたが、見ると先生は、マクベスの本をふり振しながら、得意になつて、門番の聲色を使つてゐる。自分もあの門番の類だなと思つたら、急に可笑しくなつて、すつかり眠氣がさめてしまつた。隣では成瀨がノオトをとりながら、時々自分の方を見て、くすくす獨りで笑つてゐた。それから又、二三頁ノオトをよごしたらやつと時間の鐘が鳴つた。さうして自分たちは、ロオレンス先生の後から、ぞろぞろ教室の外の廊下へ溢れ出した。

廊下へ出て、黄いろい葉を垂らした庭の樹木を見下してゐると、豐田實君が來て、「ちよいとノオトを見せてくれ給へ」と云つた。それからノオトを開けて見せると、豐田君の見たがつてゐる所は、丁度自分の居睡りをした所だつたので、流石に少し恐縮した。豐田君は「ぢやようござんす」と云つて、悠然と向うへ行つてしまつた。悠然と云ふのは、決して好い加減な形容ぢやない。實際君は何時でも、悠然と歩いてゐた。豐田君は今どこで何をしてゐるか、判然とした事は承知しないが、ロオレンス先生に好意を持ち、若しくはロオレンス先生が好意を持つた學生の中で、我々――と云つて惡るければ、少くとも自分が、常に或程度の親しみを感じてゐた、たつた一人の人間である。自分はこれを書いてゐる今でも、君の悠然とした歩き方を思ひ出すと、もう一度君と大學の廊下に立つて、平凡な時候の挨拶でも、交換したいやうな氣がしないでもない。

その中に又、鐘が鳴つて、我々は二人とも下の教室へ行く事になつた。今度は畔柳勝次博士の言語學の講義である。外

の連中は皆先へ行つて、ちやんと前の方の席をとつて置くが、なまけ者の我々は、何時でも後からはいつて行つて、一番隅の机を占領した。その朝もやはりさう云ふ傾で、愈々鐘が鳴る間際まで、見晴しの好い二階の廊下に低徊してゐたのである。藤岡博士の言語學の講義は、その朗々たる音吐とグロテスクな諧謔とを聞くだけでも、存在の權利のあるものだつた。尤も自分の如く、性來言語學的な頭腦に乏しい人間にとつては、それだけで存在の權利があつたと云ひ直しても別に差支へはない。だから今日も、ノオトをとつたりやめたりしながら、半分はさう云ふ興味で、マックミユラアがどうとかしたとか云ふ講義を、面白がつて聽いてゐた。すると自分の前の席に、髮の毛の長い學生が坐つてゐて、その人の髮の毛が、時々自分のノオトの上を、掃くやうにさらさら通りすぎた。自分は相手が名前も知らない人の事だから、どう云ふ了見で、あんな長髮を蓄へてゐるのだか、つひ今日に至るまで問ひ質す機會を失つてしまつたが、兎に角それが彼自身の美的要求には合してゐても、他人の實際的要求と矛盾し得る事を發見したのは、正にこの言語學の講義を聞いてゐた時間である。しかし幸、その講義を聽かうと云ふ、自分の實際的要求がそれ程痛切でなかつたから、髮の毛が邪魔になつた所だけは、ノオトをとらずに捨てゝ置いた。その中には邪魔にならない所でも、ノオトの代りに畫を描く事にした。所が向うに坐つてゐる、何とか云ふ恐しくハイカラな學生の横顏を、半分がた描いた所で、運惡く鐘が鳴つた。講義の終を知らせると同時に、午になつた事を知らせる鐘である。

我々は一しよに大學前の一白舍の二階へ行つて、曹達水に二十錢の辨當を食つた。食ひながら、いろんな事を辯じ合つた。自分と成瀨との間には、可成隔てのない友情が通つてゐた。その上その頃は思想の上でも、一致する點が少くなかつた。殊に二人とも、偶然同時にジアン、クリストフを讀み出して、同時にそれに感服してゐた。だからさう云ふ時になると、毎日のやうに顏を合せてゐる癖に、やはり話がはづみ勝ちだつた。すると二人のゐる所へ、給仕の谷がや

つて來て、相場の話をし始めた。それも「まかり間違つたら、これになる覺悟でなくつちや駄目ですね」と、手を後へまはせて見せたのだから恐しである。成瀬は「莫迦だな」と云つて、取合はなつたが、當時「財布」と云ふ小說を考へてゐた自分は、さまざまな意味で面白かつたから、食事をしまふまで彼の相手になつた。さうして妙な相場の熟語を、十ばかり一度に敎へられた。

午後は講義がなかつたから、一白舍を出ると二人で、近所の宮裏に下宿してゐる久米の所へ遊びに行つた。久米は我々以上のなまけ者だから、大抵は敎室へも出ずに、下宿で小說や芝居を書いてゐたのである。行つて見ると、やはり机の側に置炬燵を据ゑて、「カラマゾフ兄弟」か何か讀んでゐた。あたれと云ふから、我々もその置炬燵へはいつたら、懸蒲團の脂臭い匂が、火臭い匂と一しよに鼻を打つた。久米は今、彼の幼年時代に自殺した阿父さんの事を、短篇にして書いてゐると云つた。小說はこれが處女作同樣だから、見當がつかなくて困るとも云つた。が、相不變元氣の好ささうな顏をして、餘り困つてゐるらしい容子もなかつた。その後で「君はどうした」と尋くから、「やつと「鼻」を半分ばかり書いた」と答へた。成瀬も今年の夏、日本アルプスへ行つた時の話を書きかけてゐると云ふ事だつた。それから三人で、久米の拵へた珈琲を飲みながら、創作上の話を長い間した。久米は文壇的閲歷の上から云つて、ずつと我々より先輩だつた。と同時に又表現上の手腕から云つても、やはり我々に比べると、一日の長がある事は事實だつた。特に自分はこの點で、久米が三幕物や一幕物を容易にしかも短い時間で、書き上げる技倆に驚嘆してゐた。だから我々の中で久米だけは、彼自身の占めてゐる、或は占めんとする、文壇的地位に相當な自信を持つてゐた。さうしてその自信が又一方では、絕えず眼高手低の歎を抱いてゐる我々に、我々自身の自信を呼び起す力としても働いてゐた。實際自分の如きは、もし久米と友人でなかつたなら、卽彼の煽動によつて、人工的にインスピレエシヨンを製造する機會がなかつたなら、生

涯一介の讀書子たるに滿足して、小說なぞは書かなかつたかも知れない。さう云ふ次第だから創作上の話になると――と云ふより文壇に關係した話になると、勢何時も我々の中では、久米が牛耳を執る形があつた。その日も彼が音頭とりで、大分議論を上下したが、何かの關係で田山花袋氏が度々問題に上つたやうに記憶する。

今になつて公平に考へれば、自然主義運動があれ丈大きな波動を文壇に與へたのも、全く一つは田山氏の人格の力が然らしめたのに相違ない。その限りに於て田山氏は、氏の「妻」や「田舍教師」が如何に退屈であるにしても、乃至又氏の平面描寫論が如何に幼稚であるにしても、確に我々後進の敬意――とまで行かなければ、少くとも興味位は惹くに足る人物だつた。が、遺憾ながら當時の我々は、まだこの情熱に富んだ氏の人格を、評價するだけの雅量に乏しかつた。だから我々は氏の小說を一讀して、月光と性慾とを除いては、何ものも發見する事は出來なかつた、と同時に氏の感想や評論も、その怪しげな a la Huysmans の入信生活を聞かされる度に、先 Durtal と田山花袋氏との滑稽な對照を思ひ出させて、徒に我々の冷笑を買ふばかりだつた。では我々は氏を目して、全然ハムバツグとしてゐたかと云ふと必しも亦さうぢやない。成程小說家として氏や思想家としての氏は、更に本質的なものだとは思はなかつたが、それらに先立つて我々は、紀行文家としての田山氏を認めてゐた。Sentimental landscape-painter――これが當時の自分が、田山氏へ、冠らせてゐた渾名だつた。實際氏は、小說や評論を書く合ひ間に、根氣よく紀行文を書いてゐた。いや小し誇張して云へば、小說の多くも紀行文で、その中に Venus Libentina の信者たる男女を點出したものに過ぎなかつた。さうして、その紀行文を書いてゐる時の氏は、自由で、快活で、正直で、如何にも青い艸を得た驢馬のやうに、純眞無垢な所があつた。從つてそれだけの領域では、田山氏はユニイクだと云はうが何だらうがかまはない。が、氏を自然主義の小說家たり、且思想家たる文壇の盟主に考へる事は、今よりも更に出來憎かつた。遠慮のない所を云ふと、自然主義

運動に於ける氏の功績の如きも、何しろ時代が時代だつたからね——などと輕蔑してゐたものである。

大體こんなやうな氣焔をあげてから、又成瀬と二人で、久米の下宿を出た。出た時分には、短い冬の日脚が、もう往來へ長い影を落してゐた。さうしてその中で、被服を着た下宿の女の子が、毛の長い黑犬と一しよに遊んでゐた。我々は我々のよく知つてゐる、しかも常になつかしい興奮を感じながら、本郷三丁目の角まで歩いて行つて、それから別々の電車へ乘つた。

二

その頃自分は日本間の二階に、安物の西洋机や倚子を並べて、そこを書齋に定めてゐる。本は一時大分賣り拂つたから、書棚にはどれも大抵穴のあいた所が出來てゐた。その書棚のない壁には、西洋の畫の複製が、額になつて何枚もぶら下つてゐた。尤もこれはメディチの複製が關の山で、碌なものは一つもなかつた。額と云へばもう一つ、隅によせた机の前の壁には、寫樂の幸四郎の複製の額があつた。當時の自分は如何に西洋人が褒め立てた所で、浮世繪が日本美術の精髓だらうなどとは、どうしても考へられなかつた。大部分の浮世繪は、唯、版畫としての色の面白さが自分に訴ふだけだつた。畫家で云ふと世界的な北齋が、自分は先大嫌ひだつた。彼はマンネリズムの大家であると共に、鼻持ちのならない俗趣味の大家だとしか思はれなかつた。（何時かヂオオヂ・ムウアが、一枚の北齋を救ふ爲なら、世界中の日本人を鏖殺しにしても好いと書いたのを讀んで、自分は半可の癖に生意氣を云ふなと憤慨した覺えがある。）廣重も人の騷ぐ程、難有い風景畫家だとは思はなかつた。歌麿は流石に立派な藝術家には違ひなかつたが、あの繭紬の油のぬくみのやうな、纏綿たる情緒の世界は、餘りに自分と縁が遠すぎた。清長は——以下面倒だから省畧するが、その中で自分がほんとうの意味で美しいと思つたのは、東洲齋寫樂の繪と鈴木春信の繪とだけだつた。そこでもう一度、机の前の壁にかけ

ある窮梁の複製へ立ち戻るが、自分はその額の下で、毎晩本を讀んだり、小説を書いたりした。時々洒落れて、側机や机の上へ、草花の鉢を置いた事があつたが、無精な自分は水をやる事を忘れて、大抵は情なく枯らしてしまつた。

この書齋の中が、混沌たる和漢洋の寄せ物であるが如く、その頃の(或は今でも)自分の頭の中には、やはり和漢洋の思想や感情が、出たらめに一ぱいつまつてゐた。だから讀む本もそれだけ又、恐る可く雜駁を極めてゐた。のみならずその和漢洋が、それぞれの範圍内でも、やはり雜駁を極めてゐた。尤も洋と云つても語學は、獨乙語も佛蘭西語もものにならなかつたから、比較的ものにならなさの甚しくない英語で、一番餘計本を讀んだ。(語學と云へば思ひ出すのは、當時成瀬と二人で伊太利語を習つた事である。これは習ふ學生が我々二人の外にゐなかつたので、途中で辟易し出したにも關らず、先生に對する義理から已むを得ず一年教はつてしまつた。おかげで「一二三四」と云ふ勘定位なら、今でも出來る。)讀んだ本の中で、義理にも自分が感服しずにゐられなかつたのは、何よりも先ストリントベルグだつた。その頃はまだシエリングの譯本が澤山あつたから、手あたり次第讀んで見たが、自分は彼を見ると、まるで近代精神のプリズムを見るやうな心もちがした。彼の作品には人間のあらゆる心理が、あらゆる微妙な色調の變化を含んだ七色に分解されてゐた。いや、「インフエルノ」や「レゲンデン」になると、怪しげな紫外光線さへ歴々としてそこに捕へられてゐた。「令孃ジユリア」「グスタフス・アドルフス」「白鳥姫」「ダマスクへ」――から並べて見ただけでも、これが皆同一人の手になつたとは思はれない程、極端に懸け離れたものばかりである。何かの中でドオデエは、小説を一つ書かうと思つても、パリの町には至る所に、バルザツクの影がさしてゐると嘆じてゐたが、ストリントベルグを知らない彼は、まだしも幸福な人間だつた。「マイステル・オラアフ」が現れて以來、我々は世界の至る所に、ストリントベルグの影がさすのを見た。しかもこれは獨り人間の上ばかりぢやない。彼は獸も書いた。鳥も書いた。魚も書いた。昆蟲も書いた。更に一歩を進

めては、日の光を吸つてゐる向日葵の花や風に吹かれてゐる樹木も書いた。實に彼は當時の自分にとつて、愛嬌のあるノアの箱船が蜃氣樓よりも、化粧に容を塞いで漂つてゐるやうな感があつた。さうしてかう云ふ以上に彼の作品を喋々するのは、僭越のやうな氣が今でもする。又喋々した所で、到底あの素ばらしい箱船を、彫琢出來るものぢやない。出來たと思つたら、それは僕に船腹の板をとめてゐる釘の一本位なものだらう。(序に云ふが、ストリントベルグの「青い本」の中に、彼は内村鑑三氏の「余は如何にして基督教徒たりしか」を讀んだと云ふ事が書いてある。はつきりは覺えてゐないが、そこには何でもあの樂天的な日本人でさへ、神を求めるのにはこれ程苦しんでゐるとか何とか註がついてゐた。尤も彼に比べれば、樂天的なのは獨り日本人に限つた事ぢやない。)ぢや嫌ひな方は誰かと云ふと、モオパスサンが大嫌ひだつた。自分は佛蘭西語でも稽古する目的の外は、彼を讀んでよかつたと思つた事は一度もない。彼は實に惡魔の如く巧妙な贋金使だつた。だから用心しながらも、何度となく自分は贋金をつかませられた。さうしてその贋金には、どれを見ても同じやうな [illegible] と云ふ字が押してあつた。強いて褒めればその巧妙さを褒めるのだが、遺憾ながら自分はまだ、掏摸に懐のものをひきぬかれて、あの手際は大したものだと敬服する程寛大にはなり切る事が出來ない。好惡から云つてこの二人の中間にゐる作家のものも、ちよいちよい覗いて見た事があるが、やはり面倒だからあとは省略する事にする。

それからこの自分の頭の象徴のやうな書齋で、當時書いた小説は、「羅生門」と「鼻」との二つだつた。自分は半年ばかり前から惡くこだはつた戀愛問題の影響で、獨りになると氣が沈んだから、その反對になる可く現狀と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短篇を書いた。書いたと云つても發表したのは「羅生門」だけで、「鼻」の方はまだ中途で止つたきり、暫くは片がつかなかつた。その發表し

た「羅生門」も、當時帝國文學の編輯者だつた靑木健作氏の好意で、やつと活字になる事が出來たが、六號批評にさへ上らなかつた。のみならず久米も松岡も成瀨も口を揃へて惡く云つた。それから自分の高等學校以來の友だちの中には、一體自分が小說を書くのが不了見なのだから、匆々やめるが好いと意見の手紙をよこした男さへゐた。自分が Cacoethes Scribendi と云ふ碌でもない拉甸語を覺へたのは、その男の手紙を讀ませられたおかげである。（彼はその下へ括弧をして、「書きたがる病」と註を入れてゐた）が、自分は小說を書くのは書く事に意味を認めてゐるのだから、出來不出來にまで心を煩はす必要がないと云ふ便利な論理を楯にして、自分で自分の辯護をした。勿論それでも心細い事は、依然として心細かつた。事によると自分は、やはりその「書きたがる病」にとりつかれてゐるだけで、中學の英語の教師にでもなる方が適材ぢやないかと云ふ氣もする事があつた。そこへ幸「新思潮」再興の相談が持ち上つたものだから、多少勇氣を得て「鼻」を書き出した。それが採取らずになる事は前にも云つたが、一週間ばかり捏ね返した揚句、やつと曲りなりにも始末がついたのは、成瀨と二人で久米の所へ行つた、その日の晩の事である。自分は書いてしまふと、丁度鼻の先の置時計の針が、一時を指してゐるのを見た。書齋の中には、凋んだ菊の匂がかすかにしてゐる。前の壁には寫樂の幸四郎が、人を莫迦にしたやうに睨下つてゐる。机の上には書き損じた原稿用紙が、羅紗の色も見えない位ちらかつてゐた。自分はひどい氣疲れと一しよに、何とも云へないはかない心もちがした。愉快なる可き小說が、一向愉快とも何とも思はれなかつた。さうしたらどこか遠くの方で、夜啼鷄の聲が二三度した。

三

三四日たつた、これも好い天氣の日の事である。自分は午前の講義に出席してから、成瀨と二人で久米の下宿へ行つて、そこで一しよに晝飯を食つた。久米は京都の菊池が、今朝送つてよこしたと云ふ戯曲の原稿を見せた。それは一坂

田藤十郎の戀」と云ふ、德川時代の名高い役者を主人公にした一幕物だつた。讀めと云ふから讀んで見ると、テエマが面白いのにも關らず、無暗に友染縮緬のやうな臺辭が多くつて、どうも永井荷風氏や谷崎潤一郎氏の糟粕を嘗めてゐるやうな觀があつた。だから自分は言下に惡作だとけなしつけた。成瀨も讀んで見て、やはり同感は出來ないと云つた。久米も我々の批評を聞いて、「僕も感服出來ないんだ。一體に少し高等學校情調がありすぎるよ」と、同意を表した。それから久米が我々一同を代表して、菊池の所へその意味の批評を、手紙で書いてやる事にした。ここへ幸松岡も遊びに來た。松岡は我々三人が英文科に籍を置いてゐるのにも關らず、獨り哲學科へはいつてゐた。が、勿論我々と同じやうに、創作もする心算だつた。彼は我々の中で、一番久米と親しかつた。一しきりは二人で、同じ家に下宿してゐた事もあつた。それは砲兵工廠の裏にある、職工服を造る家だつた。實生活上のロマンテイケルだつた久米は、今にあの青い職工服を着て、アトリエのやうな書齋へ西洋机を据えて、その書齋を久米正雄工房と名づけたいなどと云ふ、途方もない夢をよく見てゐた。自分は彼等をその下宿に訪問すると、何時もかう云ふ久米の夢を思ひ出したものだつた。が、松岡はその時分から、餘り職工服とは緣のない思想なり心もちなりを持つてゐるらしかつた。まだ感傷癖こそ脫しなかつたが、彼の中には宗教の匂のするものが、もうふんだんに磅礴してゐた。彼はその東洋とも西洋ともつかないイエルサレムの建設を目ろみながら、キエルケガアドを愛讀したり、怪しげな水彩畫を描いて見たりした。當時彼の描いた水彩畫の一つにさかさまにした方が遙に畫らしくなるものゝあつたのは、今でもよく覺えてゐる。その後松岡は久米が宮裏へ移ると共に、本郷五丁目へ下宿を移した。さうして今でもそこにゐて、釋迦傳から材料を取つた三幕物の戲曲を書いてゐた。

我々四人は、又久米の手製の珈琲を啜りながら、煙草の煙の濛々とたゞよふ中で、盛にいろんな問題をしやべり合つ

た。その頃は丁度武者小路實篤氏が、時にパルナスの頂上へ立たうとしてゐる頃だつた。從つて我々の間でも、屢氏の作品やその主張が話題に上つた。我々は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、爽な空氣を入れた事を愉快に感じてゐるものだつた。恐らくこの愉快は、氏の踵に接して來た我々の時代、或は我々以後の時代の青年のみが、特に痛感した心もちだらう。だから我々以前と我々以後とでは、文壇及それ以外の鑑賞家の氏に對する評價の大小に、徑庭があつたのは已むを得ない。これは丁度我々以前と我々以後とで、田山花袋氏に對する評價が、相違するのと同じ事である。（唯、その相違の程度が、武者小路氏と田山氏とで、どちらが眞に近いかは疑問である。念の爲に斷つて置くが、自分が同じ事だと云ふのは、程度まで含んでゐる心算ぢやない。）が、當時の我々も、武者小路氏に文壇のメシヤを見はしなかつた。作家としての氏を見る眼と、思想家としての氏を見る眼と——この二つの間には、又自らな相違があつた。作家としての武者小路氏は、作品の完成を期する上に、餘りに性急な憾があつた。形式と内容との不即不離な關係は、屢氏自身が「雜感」の中で書いてゐるのにも關らず、忍耐よりも興奮に依頼した氏は、屢實際の創作の上では、この微妙な關係を等閑に附して顧みなかつた。だから氏は從來冷眼に見てゐた形式は、「その妹」以後、作毎に、徐々として氏に誅戮を始めた。さうして氏の脚本からは、次第にその秀拔な戯曲的要素が失はれて、（全くとは云はない。一部の批評家が戯曲でないやうに云ふ「或青年の夢」でさへ、一齣一齣の上で云へばやはり戯曲的に力強い表現を得た個所がある。）氏自身のみを語る役割が、己自身を語る性格の代りに續々としてそこへはいつて來た。しかもそこに語られた思想なり感情なりは、必然性に乏しい戯曲的な表現を借りてゐるだけ、それだけ一層氏の「雜感」に書かれたものより稀薄だつた。「或家庭」の昔から氏の作品に親しんでゐた我々は、その頃の——「その妹」の以後のかう云ふ氏の傾向には、慊らない所が多かつた。が、それと同時に、又氏の「雜感」の多くの中には、我々の中に燃えてゐた理想主義の火を吹いて、一時に光

焔を放たしめるだけの、大風のやうな雄々しい力が潜んでゐる事も事實だつた。往々にして一部の批評家は、氏の「雑感」を支持すべき論理の缺陥を指摘する。が、論理を待つて確められたものと云ふか、眞理である事を認めるには、餘りに我々は人間的な素質を多量に持ちすぎてゐる。いや、何よりもその人間的な素質の前に眞面目であれと云ふ、それこそ氏の闡明した、大いなる眞理の一つだつた。久しく自然主義の淤泥にまみれて、本來の面目を失してゐた人道が、あのエマヲのクリストの如く「日昃きて暮に及」んだ文壇に所姿を現した時、如何に我々は氏と共に、「われらが心熱し」事を感じたらう。現に自分の如く世間からは、氏と全然反對の傾向にある作家の一人に數へられてゐる人間でさへ、今日も猶氏の「雑感」を讀み返すと、常に昔の澎湃とした興奮が、一種のなつかしさと共に還つて來る。我々は――少くとも自分は氏によつて、「驢馬の子に乘り爾に來る」人道を迎へる爲に、「その衣を途に布き或は樹の枝を伐り一途に布」く先例を示して貰つたのである。

散々話をした後で、我々は皆一しよに、久米の下宿を出た。それから本郷三丁目で成瀬と松岡とに別れた。久米と自分とは電車で銀座へ行つて、カツフエ・ライオンで少し早い晩飯をすませてから、ちよいと歌舞伎座の立見へはいつた。はいると新狂言の二番目もので、筋は勿論外題さへ、更に不案内なものだつた。舞臺には悪く納つた茶室があつて、造花の白梅が所々に、貝殻細工のやうな花を綴つてゐた。さうしてその茶屋の椽側で、今の中車の侍か、歌右衛門の娘を口説いてゐた。東京の下町に育ちながら、更に江戸趣味なるものに興味のない自分は、芝居に對しても同様に、滅多にドラマテイツク・イリユジヨンは起す事が出來ない程、冷淡に出來上つた人間だつた。（或は冷淡にならされた人間かも知れない。芝居を見る事は二歳位の頃から、よく家のものと一しよに見た。）だから芝居よりも役者の藝が、役者の藝よりも土間桟敷の見物が、餘程自分には面白かつた。その時も自分の隣にゐた、どこかの御店者らしい、鳥打帽をかぶつ

た男が、甘栗を食ひながら、熱心に舞臺を見てゐる方が、天下の名優よりも興味があつた。この男は熱心に舞臺を見てゐると云つたが、同時に又甘栗もやはり熱心に食つてゐた。それが懐へ手を入れたかと思ふと、甘栗を一つつまみ出して、割るが早いか口へ入れる、口へ入れたと思ふと、又懐へ手を入れて、つまみ出すが早いか割つて食ふ。しかもその間中、眼は終始一貫として、寸分も舞臺を離れない。自分はこの視覺と味覺との敏捷な使ひ分けに感心して、暫くはその男の横顔ばかり眺めてゐたが、とう／＼しまひに彼自身はどちらを眞劍にやつてゐる心算だか、尋いて見たいやうな氣がして來た。するとその時、自分の側で、久米がいきなり「橘屋あ」と、無鐵砲に大きな聲を出した。自分はびつくりして、思はず眼を舞臺の方へやつた。見ると成程、女をたらすより外には何等の能もなささうな羽左衛門の若侍が、従容として庭傳ひに歩いて來る所だつた。が、隣の御店者は、久米の「橘屋」も耳にはいらないやうに、依然として甘栗を食ひながら、食ひつくやうな眼で舞臺を眺めてゐる。自分も今度はその滑稽さが、笑ふには餘りに眞劍すぎるやうな氣がした、さうして又そこに小説めいた心もちも感じられた。しかし舞臺の上の芝居は、折角その「橘屋」が御出でになつても、池田輝方氏の畫以上に俗惡だつた。自分はとうとう一幕が待ち切られなくつて、舞臺が廻つたのを潮に、久米をひつぱつて外へ出た。

星月夜の往來へ出てから「あんな聲を出して、莫迦だな」と云つたが、久米は「何、あれだつて中々好い聲だよ」と自慢して容易にその愚を認めなかつた。今でもあの時の事を考へると、彼はカツフエ・ライオンで飲んだウイスキイに祟られてゐたものとしか思はれない。

四

「一體大學の純文學科などゝ云ふものは、頗怪しげな代物だよ。あゝやつて、國漢英佛獨の文學科があるけれども、

あれは皆何をやつてゐるんだと思ふ？　實は何をやつてゐるか、僕にもはつきりとはわからないんだ。成程研究してゐるものは、各國の文學に違ひなからう。さうしてその文學なるものは、まあ藝術の一部門とか何とか云へるにや違ひない。しかしその文學を研究する學問だね、あれは一體學問だらうか。（或は獨立した學問だらうかと云つても好いが）もし學問とすれば、――むづかしく云へば、Wissenschaft として成立するのに必要な條件を具へるとすればだね。さうすれば美學と同じものになつちまふぢやないか。いや、美學ばかりぢやない。文學史なんぞは、始から史學と同じものだらうと思ふんだ。そりや成程今純文學科でやつてゐる講義にや、美學や史學と緣のないものだつて、澤山ある。が、その澤山あるものは、義理にも學問だとは思はれないぢやないか。あれはまあよく云へば先生の感想を述べたもので、惡く云へば出たらめだからね。だから僕は大學の純文學科なんぞは、廢止しちまつた方がほんとうだと思ふんだ。文學概論や何かは美學と一しよにする。文學史は史學へ片づけてしまふ。さうしてあとに殘つた講義は、要するに出たらめだから、大學外へ驅逐しちまふんだ。出たらめだからと云つて惡るければ、餘りに高尚で、大學のやうな學問の研究を目的にする所には、不釣合だと云つても好い。これは確に目下の急務だよ。さもないと同じ出たらめでも、新聞や雜誌へ出た評論より、大學でやる講義の方が、上等のやうな誤解を天下に與へ易いからね。それも實は新聞や雜誌へ出る方は、世間を相手にしてゐるんだが、大學でやる方は學生だけを相手にしてゐるんだから、それだけ馬脚が露れずにすんでゐるんだらう。その安全なる出たらめが、一層箔をつけてゐるのは、どう考へたつて不公平だ。實際僕なんぞは無責任に、圖書館の本を讀まう位な了見で、大學にはいつてゐるんだから好いが、眞面目に研究心でも起したら、一體どうすれば文學の研究になるんだか、途方にくれちまふのに違ひない。それや市河三喜さんのやうに言語學的に英文學を研究するんなら、立派に徹底してゐると思ふんだ。けれどもさうすると、シエクスピイアだらうが、ミルトンだらう

が、詩でも芝居でもなくなつて、唯の英語の行列だからね。それぢや僕はやる氣もないし、やつたつて到底ものにはなりさうもないだらう。勿論出たらめで滿足してゐりや好いが、それなら御苦勞にも大學へはいらずともの事だ。又美學なり史學なりの立ち場から、研究しようと云ふんなら、外の科へ籍を置いた方がどの位氣が利いてゐるかわからない。から考へて來ると、純文學科のレエゾン・デエトルは、まあ精々便宜的位な所だね。が、いくら便宜でも、有害の方が多くつちや、勿論ないのに劣つてゐると云ふもんだ。劣つてゐる以上は、廢止した方が正當だよ。――何、あれは中學の教師を養成する爲に必要だ？　僕は皮肉を云つてゐるんぢやない。これでも大眞面目な議論なんだ。中學の教師を養成するんなら、ちやんと高等師範と云ふものがある。高等師範を廢止しろなんと云ふのは、それこそ冠履顚倒だ。その理屈で行つても廢止さるべきものは大學の純文學科の方で、高等師範は一日も早くあれを合併してしまふが好い。」

その頃の或日、古本屋ばかり並んでゐる神田通りを歩きながら、自分は成瀨をつかまへて、こんな議論をふつかけた事がある。

五

十一月もそろそろ末にならうとしてゐる或晩、成瀨と二人で帝劇のフイル・ハアモイ會を聞きに行つた。行つたら、向うで我々と同じく制服を着た久米に遇つた。その頃自分は、我々の中で一番音樂通だつた。と云ふのは自分が一番音樂通だつた程それ程我々は音樂に縁が遠い人間だつたのである。が、その自分も無暗に、音樂會を聞いて歩いただけで、鑑賞は元より了解する事も頗怪しかつた。先一番よくわかるものは、リストに止めをさしてゐた。何時か帝國ホテルで、あのペツツオルド夫人と云ふお婆さんが、リストの der heilige Antonius schreitend auf der Wellen（だと思ふ。ちがつたら御免なさい。）を彈いた時も、そのピアノの音の一つ一つは、寸刻も流動して止らない、しかも不思議に靜

な畫面を、ありありと眼の前へ浮ばせてくれた。その畫面の中には、どこを見ても、際限なく波が動いてゐた。それからその波の上には、一足毎に波紋を作る人間の足が動いてゐた。最後にその波と足との上に、煌々たる光があつて、それが風の中の太陽のやうに、眩く空中で動いてゐた。この明い幻を息もつかずに眺めてゐた自分は、演奏が終つて拍手の聲が起つた時に、音樂の波動が消えてしまつた。空虚な周圍の寂しさがしみじみ情なく感じられた。が、こんな事は前にも云つた通り、リストが精々行きどまりで、ベエトオフエンなどと云ふ代物は、好いと思へば好いやうだし、悪いと思へば悪いやうだし、更に見當がつかなかつた。だからフイル・ハアモイ會を聞くと云つても、一向藝術家らしくない、怪しげな耳をそば立てて、樂器の森から吹いて來るオオケストラの風の音を、漫然と聞いてゐたのである。

當夜は確、閑院宮殿下も御臨場になつたので、帝劇のボツクや我々のゐるオオケストラ・ストオルには、模樣を着た奥さんや御孃さんが大分方々に並んでゐた。現に自分の隣なぞにも、白粉をつけた骨と皮ばかりの老夫人が、金の指環をはめて、金の時計の鎖を下げて、金の帶留の金物をして、その上にもまだ慊らず、歯も一面に金を入れて、(これは欠伸をした時に見えたのである。)端然として控えてゐた。が、前に歌舞伎座の立見をした時とは異つて、今夜は見物の紳士淑女より、シオパンやシユウベルトの方が面白かつたから、それ以上自分はこの白粉と金とに埋つてゐる老夫人に、注意を拂はなかつた。尤も彼女自身は、自分に輪をかけた、ディスイリユウジヨンそれ自身のやうな豪傑だつたと見えて、舞臺の上で指揮杖を振つてゐる山田耕作氏には眼もくれず、頻に周圍ばかり見廻してゐた。

その中に山田夫人の獨唱か何かで、途中の休憩時間になると、我々は三人揃つて、二階の喫煙室へ出かけて行つた。するとそこの入口にモオニングコオトの下へ赤いチヨツキを着た、背の低い人が佇んで、袴羽織の連れと一しよに、金口の煙草を吸つてゐた。久米はその人の姿を見ると、我々の耳へ口をつけるやうにして、「谷崎潤一郎だぜ」と敎へて

くれた。自分と成瀨とはその人の前を通りながら、この有名な耽美主義の作家の顏を、偷むやうにそつと見た。それは動物的な口と、精神的な眼とが、互に我を張り合つてゐるやうな、特色のある顏だつた。我々は喫煙室の長椅子に腰をを下して、一箱の敷島を吸ひ合ひながら、谷崎潤一郎論を少しやつた。當時谷崎氏は、在來氏が開拓して來た、妖氣横溢たる耽美主義の畠に、「お艷殺し」の如き、「神童」の如き、或は又「お才と巳之助」の如き、文字通り底氣味の惡い Fleurs du Mal を育てゝゐた。が、その斑猫(はんめう)のやうな色をした、美しい惡の花は、氏の傾倒してゐるポオやボオドレエルと、同じ壯嚴な腐敗の香を放ちながら、或一點では彼等のそれと、全く趣が違つてゐた。彼等の病的な耽美主義は、その背景に恐る可き冷酷な心を控えてゐる。彼等はこのごろた石のやうな心を抱いた因果に、嫌でも道德を捨てなければならなかつた。嫌でも神を捨てなければならなかつた。さうして又嫌でも戀愛を捨てなければならなかつた。が、彼等はデカダンスの古沼に身を沈めながら、それでも猶この仕末に了へない心と—— une vieille gabare sans mâts sur une mer monstrueuse et sans bords の心と睨み合つてゐなければならなかつた。だから彼等の耽美主義は、この心に劫かされた彼等の魂のどん底から、やむを得ずとび立つた蛾の一群だつた。從つて彼等の作品には、常に Ah! Seigneur, donnez-moi la force et le courage/ De contempler mon cœur et mon corps sans dégoût と云ふせつぱつまつた嘆聲が、瘴氣の如く纏綿してゐた。我々が彼等の耽美主義から、嚴粛な感激を浴びせられるのは、實にこの「地獄のドン・ジユアン」のやうな冷酷な心の苦しみを見せつけられるからである。しかし谷崎氏の耽美主義には、この動きのとれない息苦しさの代りに、餘りに享樂的な餘裕があり過ぎた。氏は罪惡の夜光蟲が明滅する海の上を、まるでエル・ドラドでも探して行くやうな意氣込みで、悠々と船を進めて行つた。その點が氏は我々に、氏の尊敬するゴオティエを髣髴させる所以だつた。ゴオティエの病的傾向は、ボオドレエルのそれとひとしく世紀末の色彩は帶びてゐても、云はば活

力に滿ちた病的傾向だつた。更に洒落れて形容すれば、寳石の重みを苦にしてゐる、肥滿したサルタンの病的傾向だつた。だから彼には谷崎氏と共に、ポオやボオドレエルに共通する切迫した感じが缺けてゐた。が、その代りに感覺的な美を叙述する事にかけては、滾々として百里の波を飜す河のやうな、驚く可き雄辯を備へてゐた。(最近廣津和郎氏が谷崎氏を評して、餘り健康なのを憾とすると云つたのは、この活力に滿ちた病的傾向を指摘したものだらうと思ふ。が、如何に活力に溢れてゐても、脂肪過多症の患者が存在し得る限り、やはり氏のそれは病的傾向に相違ない。)さうして此の耽美主義に慊らなかつた我々も、流石にその非凡な力を認めない譯に行かなかつたのは、この滔々たる氏の雄辯である。氏はありとあらゆる日本語や漢語を浚ひ出して、ありとあらゆる感覺的な美を(或は醜を)、刺靑以後の氏の作品に螺鈿の如く鏤めて行つた。しかもその氏の Les Emaux et Camées は、朗々たるリズムの絲で始から終まで、見事にずつと貫かれてゐた。自分は今日でも猶、氏の作品を讀む機會があると一字一句の意味よりも、寧その流れて盡きない文章のリズムから、半ば生理的な快感を感じる事が度々ある。ここに至るとその頃も、氏はやはり今の如く、比類ない語の織物師だつた。たとひ氏は暗澹たる文壇の空に、「恐怖の星」はともさなかつたにしても、氏の培つた斑猫色の花の下には、時ならない日本の魔女のサバトが開かれたのである。――

やがて又演奏の始まりを知らせる相圖のベルと共に、我々は谷崎潤一郎論を切り上げて、下の我々の席へ歸つた。歸る途中で久米が、「一體君は音樂がわかるのかい」と云ふから、「隣の金と骨と皮と白粉とよりはわかりさうだ」と答へた。それから又その老夫人の隣へ腰を下して、ショルツ氏のピアノを聞いた。確、シオパンのノクテュルヌとか何とか云ふものだつたと思ふ。シモンズと云ふ男は、小供の時にシオパンの葬式の進行曲を聞いて、ちやんとわかつたと廣告して居るが、自分はショルツ氏の器用に動く指を眺めながら、年齡の差を勘定に入れないでも、この點ではシモンズ

に到底及ばないと觀念した。そのあとは何があつたか、もう今は覺えてゐない。が、會が終つて外へ出たら、車寄のまはりに馬車や自働車が、通りぬけられない程澤山並んでゐた。さうしてその中の一つの自働車には、あの金と白粉との老夫人が毛皮に顔を埋めながら、乘らうとしてゐる所だつた。我々は外套の襟を立てて、その間をやつと風の寒い往來へ出た。ふと見ると、我々の前には、警視廳の殺風景な建物が、黒く空を衝いて聳えてゐた。自分は歩きながら、何だかそこに警視廳のある事が不安になつた。で、思はず「妙だな」と云つたら、成瀨が「何が？」と聞き咎めた。自分はいやとか何とか云つて、好い加減に返事を胡麻化した。その時はもう我々の左右を、馬車や自働車が盛んに通りすぎてゐた。

六

「君の方の大學も退屈だらうが、こつちだつて格別面白い事はない。英文科ぢや、松浦さんの講義が評判が好いやうだ。齋藤さんの講義も聞いたが、これもロオレンス先生よりは面白いと思ふ。ロオレンスと云ふ人は個人的には好い御爺さんらしいが、講義だけは實際支離滅裂でね。さうさう、ロオレンス先生と云へば、この間僕が圖書館の入口で遇つたら、僕をつかまへて、何だか譯のわからない事を十分ばかりしやべり續けた。英語が判然しないばかりでなく、一向要領を得ないから、唯、顔ばかり眺めてゐると、向うでも妙だと思つたと見えて Are you Mr. ——? 何とかと云つた。そこで斷々乎としてノオと云つたら、損をしたやうな顔をして、匇々元來た方へ歸つちまつた。して見ると、僕はそれまでそのミスタア・何とかと間違へられてゐたんだらう。これが今日までの所、僕とロオレンス先生との間に起つた一番親密な十分間だつた。

「西洋人には君も知つてゐる通りまだ外に、スヰフト先生と云ふ人がゐる。何でも松岡はこの間この先生に、英語で話

を一つしろと命令されたら、『昔々或所に犬が三匹居りました。所がその犬が一匹どこかへ行つてしまひました。すると暫くして又一匹どこかへ行つてしまひました。さうしたら三匹目の犬も、やがて見えなくなつてしまひました。先生、この三匹の犬がどこへ行つてしまつたか御存知ですか』と云つたさうだ。勿論先生には、そんな事のわかる譯がないから、知らないと返事をした。すると松岡は『私も知りません』つて、それつきりで御しまひにしちまつたつて云ふんだがね。いくらスヰフト先生だつて、(この先生自身も、この間久米に詩を讀ませて、聲だけ好いと褒めた事がある)こんな悪辣な學生にかかつちや、手がつけられないのに違ひない。僕はこの話を松岡自身から聞いて、大に先生の方に同情した。

「それからこの間は、上田敏さんの講義の模様を知らせてくれて、大に面白かつた。あの人位影響する所が廣くつて、あの人位何にもしてゐない人はない。考へると少し氣の毒な氣がする。その上この間上田さんの「獨語と對話」を讀んで見て、すべてが甚陳腐なので驚いた。昔から上田さんと新しいと云ふ事とは、始終僕の頭の中で一つになつてゐたんだから、それだけ餘計驚いた。が、考へて見ると、その新しいと云ふ事はインフオメエションの上の新しさで、思想そのものの新しさぢやなかつたんだ。だからさう云ふ新しさに冷淡になつた我々が、上田さんの書いたものを陳腐だと感じるのは、勿論不思議でも何でもないんだ。それでも『上田さんも古くなつたかな』と思つたら、實際妙に寂しかつた。上田さんは結局、いろんな着物をシツクリつける名人だつたんだらう。が、我々の問題はもう着物やその着方を通り越して、下にある肉體に及んでゐるんだから仕方がない。

「この頃久米と僕とが、夏目さんの所へ行くのは、久米から聞いてゐるだらう。始めて行つた時は、僕はすつかり固くなつてしまつた。今でもまだ全くその精神硬化症から自由になつちやゐない。それも唯の氣づまりとは違ふんだ。さつき

着物の例を出したから、その例をもう一度使ふと、つまり向うの肉體があんまりよすぎるので、丁度體格檢査の時に僕の如く瘦せた人間が、始終感ず可く餘儀なくされるやうな壓迫を受けるんだね。現はに僕は二三度行つて、何だか夏目さんにヒプノタイズされさうな、——たとへばだ、僕が小說を發表した場合に、もし夏目さんが惡いと云つたら、それがどんな傑作でも惡いと自分でも信じさうな、物騷な氣がし出したから、この二三週間は行くのを見合せてゐる。人格的なマグネテイズムとでも云ふかな。兎に角さう云ふ危險性のあるものが、あの人の體からは何時でも放射してゐるんだ。だから夏目さんなんぞに接近するのは、一概に好いとばかりは云へないと思ふ。我々は大人と行かなくつても、まあいろんな點で全然小供ぢやなくなつてゐるから好いが、さもなかつたら、のつけにもうあの影響の捕虜になつて、自分自身の仕事にとりかかるだけの精神的自由を失つてしまふだらう。兎に角東京へ來たら、君も一度は會つて見給へあの人に會ふ爲なら、實際それだけにわざわざ京都から出て來ても好い位だ。——」

自分は當時菊池へ宛てて、こんな手紙を書いた事があつた。

七

フイル・ハアモニイ會へ行つたあくる日、午前の大塚先生の講義(題目はリツケルトだつた。が、自分が聞いた中では最も啓發される所の多い講義だつた。)をすまさせた後で、又成瀨と風の吹く中を、わざわざ一白舍へ二十錢の辨當を食ひに行つたら、彼が突然自分に、「君は昨夜僕等の後にゐた女の人を知つてゐるかい」と尋ねた。「知らない。知つてゐるのは隣の金と皮と骨と白粉とだけだ。」「金と皮と——何だい、それは。」「何でも好い。兎に角、後にゐた女の人ぢやない事は確だ。さうして君は又その女の人に惚れでもしたのかい。」「惚れる所か、僕も知らなかつたんだ」「何だ、つまらない。そんな人間なら、ゐたつてゐなくたつて、同じ事ぢやないか。」「所がね。家へ歸つたらムツタアが後の女の人を見

たかと云ふんだ。つまりその人が僕の細君の候補者だつたんださうだね。「ぢや見合ひか」「見合ひ程まだ進歩したものぢやないんだらう。」「だつて見たかつて云へば、見合ひぢやないか。君のムツタアも亦、迂遠だな。見せる心算なら、前へ坐らせりや好いのに。後にゐるものが見える位なら、こんな二十錢の辨當なんぞ食つてゐやしない。」成瀨は親孝行な男だから、自分がかう云ふと、ちよいと妙な顔をした。が、すぐに又、「しかし向うの女の人を本位にして云へば、僕等が前にゐた事になるんだからな。」「成程、あすこぢや兩方で向ひ合つてゐやうと思つたら、どつちか一方が舞臺へ上らなくつちやならない譯だ。――譯だが、それで君は何つて返事をしたんだい。」「見なかつたつて云つたあね。實際見なかつたんだから仕方がないぢやないか。」『さう今になつて、僕に鬱憤を洩したつて駄目だよ。だが惜しい事をしたな。一體あれは音樂會だつたから、いけないんだ。芝居なら僕が頼まれなくつたつて、帝劇中の見物をのこらず物色をしてやるんだのに。」――成瀨と自分とはこんな話をしながら、大笑ひに笑ひ合つた。

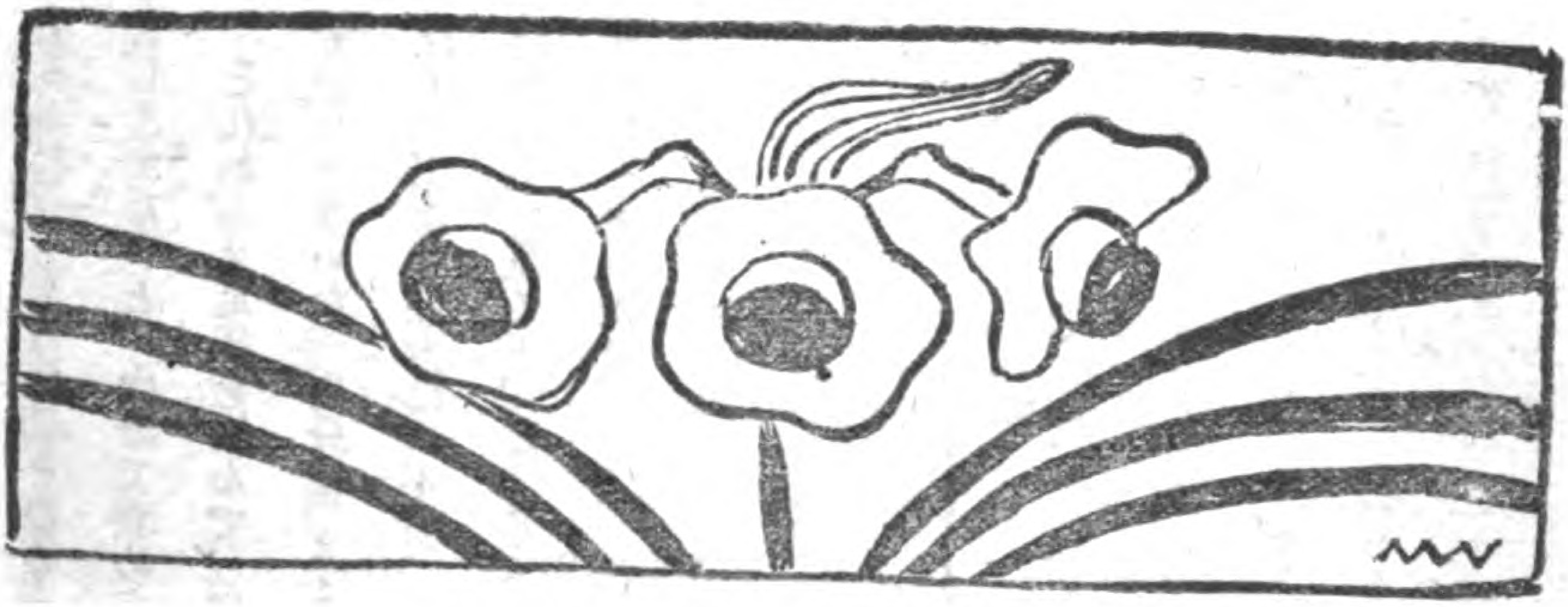
その日は午後には、獨逸語の時間があつた。が、當時我々はアイアムビツクに出席するとか何とか云つて、成瀨が出れば自分が休み、自分が出れば成瀨が休んでゐた。さうして一つ教科書に代る代る二人で假名をつけて、試驗前には一しよにその教科書を讀んで間に合せてゐた。丁度その午後の獨逸語は成瀨が出席する番に當つてゐたから、自分は食事をしまふと、成瀨に教科書を引き渡して、獨りで一白舍の外へ出た。

出ると外は風が、砂煙の往來の空に捲き上げてゐた。黃いろい並木の銀杏の落葉も、その中でくるくる舞ひながら、大學前の古本屋の店の奧まで吹かれて行つた。自分はふと松岡を訪ねて見ようと云ふ氣になつた。松岡は自分と（恐らくは大抵な人と）違つて、大風の吹く日が一番落着いて好いと稱してゐた。だからその日なぞは殊に落着いてゐるだらうと思つて、何度も帽子を飛ばせさうにしながら、やつと本郷五丁目の彼の下宿まで辿りつくと、下宿のお婆さんが入

口で、「松岡さんはまだ御休みになつていらつしやいますが」と、氣の毒さうな顏をして云つた。「まだ寢てゐる？　恐ろしく寢坊だな。」「いえ、昨夜徹夜なすつて、ついさつきまで起きていらしつたんですがね、今し方寢るからつて、床へおはいりになつたんでございますよ。」「ちやまだ眠がさめてゐるかも知れない。兎に角ちよいと上つて見ませう。寢てゐればすぐに下りて來ます。」自分は松岡のゐる二階へ、足音を偸みながら、そつと上つた。上つてとつつきの襖をあけると、二三枚戸を立てた、うす暗い部屋のまん中に、松岡の床がとつてあつた。枕元には怪しげな一閑張りの机があつて、その上には原稿用紙が、亂雜に重なり合つてゐた。と思ふと机の下には、古新聞を敷いた上に、夥しい南京豆の皮が、杉形に高く盛り上つてゐた。自分はすぐに松岡が書くと云つてゐる、三幕物の戲曲の事を思ひ出した。「やつてゐるな」――ふだんならかう云つて、自分はその机の前へ坐りながら、出來ただけの原稿を讀ませて貰ふ所だつた。が、生憎その聲に應ずべき松岡は、髭ののびた顏を括り枕の上にのせて、死んだやうに寢入つてゐた。勿論自分は折角徹夜の疲を癒してゐる彼を、起さうなどと云ふ考はなかつた。しかし又この儘歸つてしまふのも、何となく殘り惜しかつた。そこで自分は彼の枕元に坐りながら、机の上の原稿を、暫くあつちこつち讀んで見た。その間も凩はこの二階を搖ぶつてしつきりなく通りすぎた。が、松岡は依然として、靜な寢息ばかり殘してゐた。自分はやがて、かうしてゐても仕方がないと思つたから、物足りない腰をやつと上げて、靜に枕元を離れようとした。その時ふと松岡の顏を見ると、彼は眠りながら睫毛の間へ、涙を一ぱいためてゐた。いや、さう云へば頰の上にも、涙の流れた痕が殘つてゐた。自分はこの思ひもよらない松岡の顏に氣がつくと、さつきの「やつてゐるな」と云ふ元氣の好い心もちは、一時にどこかへ消えてしまつた。さうしてその代りに、自分も夜通し苦しんで、原稿でもせつせと書いたやうな、やり切れない心細さが、俄に胸へこみ上げて來た。「莫迦な奴だな。寢ながら泣く程苦しい仕事なんぞをするなよ。體でも毀したら、どう

するんだ。」――自分はその心細さの中で、かう松岡を叱りたかつた。が、叱りたいその裏では、やつぱり「よくそれ程苦しんだな」と、內證で褒めてやりたかつた。さう思つたら、自分まで、何時の間にか涙ぐんでゐた。

それから又足音を偸んで、梯子段を下りて來ると、下宿の御婆さんが心配さうに、「御休みなすつていらつしやいますか」と尋いた。自分は「よく寢てゐます」とぶつきらばうな返事をして、泣顏を見られるのが嫌だつたから、匆々風の往來へ出た。往來は相不變、砂煙が空へ舞ひ上つてゐた。さうしてその空で、凄じく何か唸るものがあつた。氣になつたから上を見ると、唯、小さな太陽が、白く天心に動いてゐた。自分はアスフアルトの往來に立つた儘、どつちへ行かうかなと考へた。



青白い熱情

佐藤春夫

私の友達Ａ・Ｆは口のなかで何かを呟きつづけて居る。さうして私には決して一言も言ひかけない。彼の呟くのをよく聞いて居ると、それはポオの詩「アナベル、リイ」であるらしかつた――

For the moon never beams, without bringing me dreams
  Of the beautiful Annabel Lee;
And the stars never rise, but I feel the bright eyes
  Of the beautiful Annabel Lee;
And so, all the night-tide, I lie down by the side
Of my darling—my darling—my life and my bride,
  In the sepulchre there by the sea,
  In her tomb by the sounding sea.

それが彼の口について居るのであらう。その重苦しい、しかし清澄な、思ひつめた心持をもつた、空間に隠れて居る或る情熱的なためいきを呼び起さねば措かないやうなこの旋律は、もう幾十変かＡ・Ｆの唇の上で繰り返された。かうして我々は、この日の暮れてしまつた部屋のなかで、うすら寒い、暗い、怪しい沈黙の時間をつづけて

居た。私はその時、何故に彼と同じやうにその不可思議な沈黙をつづけて居たのであらう。それが今どう考へて見てもわからない。思ふにその部屋のなかには、私にも沈黙を守らせるやうな何物かが、確にあつたのである。實際、私は昂奮しきつてこの部屋へ入つて來た。しかし部屋へ入ると直ぐに妙に氣が滅入り出したのである。都會の夕方の騒々しさは、この石造りの倉のやうな家のなかまでは決して侵入しては來なかつた。さうして窓は勿論ぴつたりと閉ぢられて、鎧戸さへも下されてあつた。この家が東京の駿河臺の眞中にあるといふ事實を、私はその時ふと忘れてしまつて居た。それが私を一層淋しくした。私は妙に戰慄を覺え初めた。それはストーブを焚かないこの廣い書室のせいばかりではない。何か或る精神的な戰慄のやうであつた。

一たい、私は二ケ月程以前から熱中して居た或るロマンティクな叙事詩をやつと今日の夕方完成すると、もう家のなかにぢつとしては居られなくなつて、その新作を讀んで聞かせるために、私の唯一の親友――特にロマンティシズムに於ける唯一の親友A・Fをかうして訪れて來たのであつた。私はその厚い詩稿を外套のポケットのなかに納めたまゝ、A・Fの今日の氣持が、私の期待した事を果してくれるに適當して居ないことを、私はこの部屋に入つて最初の瞬間から直覺したのであつた。

In her tomb by the sounding sea 私の友達は、ふるへる聲で呟いた。さうして恰も西風のやうに深い吐息を一つすると、不意に立上つた。その黒い影が部屋を横切つて行くと、その片隅で燭臺を捜し出したと見える。それに灯をともして居た。あたりは一時に赤黄色く輝いて、併し一本の蠟燭はこの廣い部屋の隅にまでへはとどき兼ねて、うす暗（くらがり）が灯から遠いところの部屋の三方の隅で、ぶるぶると慄へて居た。彼はその燭臺を手にもつて私の方へ歩いて來た。私はその時初めて、この日の彼を見ることが出來た。彼はその日極く舊式なモオニングコオトを著て居た。それは胸の小さ

く開いた、さうして黒い細い線で線をとつたもう三四十年も前に行はれた形のものであつた。それは多分、この風變りな石造りの家や、彼の奇異な才能やと共に、彼の夭折した父が遺して行つた代物であるに相違ない。藝術家特有の好奇心から、彼は近頃そんなものをわざとゝり出したのであらう。彼はその時そんな服裝のために一見不遇な音樂者といふ風に見えた。何故か、私はその時さういた形容詞をつけて考へた。

彼は片手に燭臺を持つたまゝ、その光で顎の方から光線を浴びた顏を、私が今まで決して見た事もないほどな嚴肅な顏付をして、その顏はまともに私の方に向けられて居た。けれども彼の瞳は私よりもずつと後の、ずつと高いところに向けられて居た。彼自身の背丈けの三倍もあるやうな何處かを、上眼でぢつと凝視して居た。瞳はいつまでもさうしたまゝ、And the stars never rise, but I feel the bright eyes of the beautiful Annbel Lee と重い聲で呟き歌ひながら、殆んど夢遊病者のやうな足どりで、その背後には自分自身の大きな影を背負ひながら、私の傍まで進んで來た。ふと彼が一時に目を落した瞬間に、彼のその怪奇にさへも思はれる樣子を見守つて居た私の目と、その彼の目とがぴつたりと觀線を合した。その時、彼は危く手の燭臺をとり落すところであつた。さうしてやつとそれを支へると叫ぶやうに言つた。

「おゝ！ 君か！」

「私さ！」

その樣子には寧ろ私の方がもつと愕かされた道理である。といふのはその樣子から見ると、Ａ・Ｆは自分で私をこの部屋へ案内して通して置きながら、私の居たことを今までは忘れて居たのである。私は常軌を逸した人として、そのロマンティクな性格を尊敬しつゝ、幾年か彼と親しい交をつゞけて來た。けれども今日の態度のやうな彼を、私は未だ見た事も、想像したこともなかつた。併し彼は直ぐに私を思ひ出した。

「さうだ、さうだ。君だ。君が居たのだつた。僕も君にだけはあれに逢はせるつもりだつた。さうして君をこゝへ通した。ねえ。是非逢つてやつてくれ給へ。君はこれを見る資格のある人だ。」

　Ａ・Ｆは突立つたまゝ、囁くやうに、しかしどこか強い調子でさう言つた。私は彼がまた製作をでも私に見せるのかと思つた。實際その時の彼の態度は、人に示さずに居た製作を初めて見せる時の彼の態度に非常によく似て居た。併し私がそんな事を怪しんで居るひまもなく、彼は彼の言葉を言ひ終るや否や、我々のすぐ傍にあつた黑い天鵞絨の帳の一端を掴ると、それをかき抱くやうな手つきでひきしぼつた。さうして手にあつた燭臺をその今開けた帳のなかに置いた。そのために部屋の大部分はまた再びほの暗くなり、帳で光のかくされた方の壁は、ほとんど無限の闇のなかにあつた。私は今まで氣がつかずに居たのだつたが、私と彼とは今までこの黑い帳が重々しく垂れて居る彼のアルコオブの寢臺の傍で、あんな沈默をつゞけて居たのであつた。

「見給へ！　私の可愛相な妻を。」

　彼は身を踞めたまゝ帳のなかにあるものを見つめながら低い太い聲で、さう言つた。さうして私の方を靜に見かへつて、私を目で招いた。私は立上つて彼の方へ二歩ほど歩んだ時、踞んで居る彼の肩ごしに、その帳のかげに、寢臺の上に一人の若い女が横はつて居るのをちらと見た。「私の可愛相な妻」？彼は何時、妻をめとつたのであらうか、私は私の詩作のために二ケ月ほど自分の書齋にばかり籠つて居た。すべてはその間の出來事であらう。さうしてその女は、彼の妻は病氣して居るのであらうか？　それとも今日死んだのであらうか？

「あゝ死んだのだ。」

　私は一目見た時にさう感じた。

Ａ・Ｆはその死んで居る妻の顔の上へ、彼の顔を翳して居た。私はＡ・Ｆの顔に自分の顔を並べてその女の顔を覗き込んだ。異様な美しさが白い大きな枕の上にその頭を埋めて居る。私はぢつとそれを見入つた。今枕もとの小卓の上に置かれた燭臺からの光が、その女の顔を少し斜に上から照して居た。女といふよりも未だ少女であつた。光を上からうけたやゝ廣い額があつた。それがその顔全體の上に或る神的な趣を與へた。切れの長い眼がごく柔かに瞑ぢられてあつた。若しそれが見開いた時にはくつきりと二重（ふたへ）になるであらうと思はれるその瞼は、下瞼と輕くくつゝいて、その兩方からの睫毛が入交つて居た。長い少し反つた睫毛であつた。その豐かな黒い長い睫毛が、下瞼の上へやさしい纖細な影をうつして居た。眉から鼻へ曲る線には青い影がその線に伴奏して居た。すべては磨き出された象牙の線であつた。その顔全體は貝殼の裏のやうに白くつて、それのやうに怪しく艶やかであつた。あの長い睫毛の影と鼻すじを形作つた青い影とが不思議に悲歎の心持を呼び起させた。私はその顔をぢつと見つゞけた。さうして何處かで屢々見た事のある顔だと思つた。さう思ひつゞけたけれども、それをどうしても思ひ出せなかつた。私はそれをプレ・ラファエリストの畫のなかで見たのではなかつたか、とさう思つた時、ふと私はこれらの情景が悉く夢のやうな氣持がした。さうしてその青白い女の顔を中心にして、私も、彼も、その顔も、白い大きな枕も、白い布も、青黒い天鵞絨の帳も、燭臺も、その火盞の上の靜かな赤い炎も、だんだん、少しづゝ極く少しづゝ下降し沈んで行きつゝあるやうに感ぜられ出した。さうしてその時、私はその女の圓い頬の上に落ちたものがあつて、それが頬の上で彈かれたやうに滑ると、美しいその頸を傳うて、こ盤上の眞珠のやうに轉（ころ）つて消え落ちたのを見た。それがどうやら私の目から出た涙であつたらしい。實際、その死顔は崇高で、淸麗で、涙を誘ふ程のものであつたかも知れないが、若し私がほんたうにその涙を流したのであつたとすれば、それはその時私が可なり激しい神經衰弱に陷入つて居たといふ證據にはなるであらう。私は私の敍事詩のうちの最後の

章である。二百餘行を書くために、その前五六日殆んど全く眠ることが出來なかつたのだから……。私はそんなことを思ひ出しながら、やはりその死顔を見つめて居た。さうして私の目に見えるすべてのものとゝもに、私の體がだんだんだんだん底の方へ引き入れられるといふ感じが、益々激しかつた。

ふと、A・Fは手を延してその燭臺をとつた。A・Fはその燭臺を靜に持ち上げると、足音を忍ばせながら、その寢臺の傍を離れた。私はうす暗がりのなかに、その白く殘つて居る死顔をもう一度見ながら、何も言はれなかつたけれども、私の友達の意志を感じた。さうして彼について歩いて行つた。彼は或る壁の前で立ち止つた。彼はその壁の上に唯一つあつた畫の方へその燭臺をさし出した。私はその黄色く照し出された畫面を見た。

あの死顔を、曾て何處かで見たことがあつたと思つたのも道理である。あの寢臺の上に死んで横はつて居るあの少女こそ、この畫面のなかに、幾つも幾つも描き出されて居るその顔ではないか。さうして私は彼のこの製作を以前から屢々見慣れて居たのだ。人の視力を吸ひ込むやうな黒い背景の、夢幻的な深い效果のなかに、同一の顔が幾つも幾つも。―それは同一の畫面のなかに七つだか八つだかあるのだけれども、たゞ視覺にだけ訴へる時には、人はそこに殆んど二三十もその顔があるやうに思はれるであらう、不思議に描き出された畫。A・Fが「よく見る夢」といふ題をつけて居た畫。その繪のなかの幾つも幾つもの顔は、今のさつき私があの寢臺の枕の上に見出して、それを見つめたあの少女の顔と正しく寸分も違つては居なかつた。あの鼻のわきにある青い陰もある。額はやはり廣い。さうして顳顬が少し怪異な迄に於て短い。口は無心で心持開かれて居る、今や何か言葉でも囁き出さうとするかのやうに。さうしてそれはあの死顔もちやうど然うであつた。その繪とその死顔と、それ等二つが互に相違するところは、畫面のなかの顔は今も言うとほり、おぼろに浮び出して幾つも幾つもあつた。寢臺のなかの顔はくつきりと唯一つで、白い枕に頭を埋めて浮彫の顔のや

うであつた。畫の中の顏は低いところを見下して居るやうに目を伏せて居た。私の今まで凝視して居た枕の上の死顏では、柔かに瞑目して居た。併し、その何れにもせよその長い睫は下瞼にかぶさつて、かすかな悲しい影をつくつて居る。さうして畫の上にもそれはあつた。

私がそれらのものを明瞭に比較して考へるちやうどその時間、A・Fがそれを見計つて居たかとも思へるほどちやうどきつちり、その時間だけA・Fは燭臺で畫面を照して居てくれたが、ついとその燭臺をひつこめると、再び寢臺の方へ歩み歸つた。私も亦さうした。燭臺は再びその死顏の枕もとに置かれた。我々はその寢臺を護るやうに、その死顏の前に對座した。さうしてA・Fと私とは申し合せたやうに、もう一度、寢臺のなかの顏を見守つた時、

「すべての事情は解つたらう。」

A・Fは震へる聲で、けれども寧ろ快活な調子でさう私に言ひかけた。

私は默つて頷いた。A・Fは「よく見る夢」だのその外の幾多のエチュドのモデルに使つた少女と結婚したのだ。さうしてその少女が死んだと、さう私は思つたからである。それで私は言つた。

「君は何時この人と結婚をしたのだ。」

私のこの問ひに對するA・Fの答へは、今にして思へば實に不可思議なものであつた。A・Fの言つたところによると、彼はその少女を何時何處から娶つたか解らないと言ふのである。「多分永遠の世界から」と彼は言つた。「さうして嚴密に言へば、この少女が極くおぼろに私の幻に現はれ出した時から、私はこの少女と婚約をしたのであつたかも知れない。この少女、私のアナベル、リイはその時以來、度々私に現はれて來た。さうしてそれが現はれる度毎に、私は必ず見ることが出來たゞけ、覺えて居ることの出來ただけづゝ、それを描き出した。それが私には數々のエチュドになつて私に殘つて

居る。それでは私は一たいどんな時に、この少女を幻に見たか。それは私が深い神興のうちにある時、言はゞ藝術のエクスタシイに陥入つて何もないところを見入つた時、或はまた非常な疲労を身に感じた時、ほんたうに孤獨の自分を感ずる時、その機會は實にさまざまであつたが、去年の晩春のある夜であつた、私は身に何とも知れない昂奮と陶酔とを感じて、須田町の通りをどういふ風にであつたか、道に迷ふた人のやうに歩き廻つて居た。それは未だ宵で人通りは澤山あつた。歩き廻つて居るうちに私は、ほんたうにそのよく知つて居る筈の道に迷ひ込んで仕舞つた。私は廣告塔のイルミネエションを中空に見つめながら、幾度も幾度も同じ小路からもう一つの小路へぐるぐる廻りつゞけて居た。その時は私はその道を曲る角毎に、必ずその少女が突立つて私の足もとを見下して居るのを見た。道の曲り角が幾つあつてもその一つ一つには必ずその少女が居た。それ以來、私はその時の少女の顔をよく夢に見た。「よく見る夢」はそれである。その夜の後、その幻の少女はだんだん所謂現實的に私に實現せられた。私は時々その少女が私の前に坐るのを感じた。私はまたそのうらゝかな聲を聞いた。さうしてそれにつれて私のブラッシュが藝術の世界であれを實現しつゝあるのを感じた。恒に言ふとほり、この現實世界以外に、どこにとは知らないが——多分高いところに、未だもう一つ本當の世界があることを私は信じて居た。そこには美の法則に適つたものばかりが存在して居る。我々が懸命で製作するところのものが全く完成された時には、その高いところにある藝術の世界に、永遠の世界に、我々の努力そのまゝの形をとつたそれぞれのものが、ぽつかりとそこに生れ出す。その永遠の世界の形が、かすかに、おぼろに、はかなくこの我々の世界の方へ影を落す。我々のすべては、我々が現實と呼んで居るものゝすべては、悉く影だ。さうして幻影といふものは、永遠の世界でまだ完成されて居ないものゝ我々の世界にうつる影だ。さうして永遠の世界はそれの完成の努力を藝術家に求める。あゝ今こそ私はひとりの女を、その永遠の世界へ私の妻としてつくり出した。私は花を咲かせた木のやうな

ものだ。花といふものは、あれは君、草や木のそれぞれの憧れの夢なのだ。それが形になつて我々に見えるのだ。」彼の聲には歡喜の人のやうな昂奮があつた。それが話のすすむにつれて加速度的に激しくなつて來る。「私は或る夜自分の眠つて居る傍に一人の女を感じた。それが永い間私の夢想して來たあれなのだ。私は最初はやはり夢だと思つた。併し！私が目を覺した時に、やつぱりその夢は消えなかつた。それは藝術の世界で私が創造したものゝ模造である。イミテーションである。さうして私の傍に居る女は、正に「現實と人々が稱へて居る夢」のうちの一つだつたのだ。私はその女を抱かうとした。その時、初めて私は知つた。私の何處から來たとも知れない妻、多分永遠の世界の影として私の傍に來た女は、氷のやうに冷たい。私はその顏を見つめて泣いた。その女が死んで居ると思つたものだからねえ！　君、君も或は私の妻は死んで居るものと思つて居るのではないか。それは間違ひだよ。私の妻は、ほんのまあ言はゞ假死の狀態に居るのだよ！　その證據には私は一週間以上もこの女をかうして置いた。けれどもこの女は少しも變らない。そればかりか、私がアナベル、リイの詩を讀むと、あれは微かに笑ふのだよ……」

彼はなほ語りつゞけて居た。私はそれを聞きながら、怪しい事には彼の語ることを少しも不合理とも、無意味とも思はなかつた。妻を失つた悲歎のあまり氣が狂つたか、と疑つて見ることさへなかつた。それは彼のせき込んだ低い力のある聲が、その語られることに或る實感的な魅力を與へたことにもよる。その上彼は今更そんな事を言ひ出したのでは無かつた。彼はふだんからそんな風なものゝ考へ方をして居る人の一人であつた。私は彼の言ふのを聞きながら、自分の詩のなかにもそんな事をいくらか書けばよかつた。書くべきところがあつたのに、とふとそんな事を思つた。さうして私はたゞ星を見つゞけて居た。といふのは、彼の話のうちで「多分高いところに」と言ひながら彼が高いところを見上げた時、私もふと高い所を見上げたが、その時思ひがけなくもこの部屋から星が見えるのに氣がついたのであつた。

私は深い土の底からでもそれを見るやうに、その時星を限りなく懐しいものに思つた。それはあまり大きな星ではなかつた。多分「小狐」か「矢」あたりの星座の諸星であつたらう――私はあの詩のなかで天體のことを歌つたので、これを知つて居た。その遠くにきらきら、きらきらと群簇して輝く星が、部屋の鴨居の上に、平つたくひしやげた形をして居る穹窿形の高い窓を透して見えたのであつた。この窓だけは外の窓のやうに鎧戸を下ろされもせず、又窓かけも引かれては居なかつた。さうしてそのガラス窓を透して星が見られた。さつき燭臺を運びながら、A・Fの見上げたのもこゝだつたのだな? うす暗い壁の上の穹窿形の窓の底に、無限のところに、星は寒い空で身慄ひして居る……

その星をながめながら、私にはその星空の下にある賑やかな街の事が、そこの明るい華やかな燈火のことが思ひ出された。するとその東京の街が、自分自身その街のなかに居ながらその時恰も星と全く同じ程遠い所のやうに思ひ做された。私はノスタルジヤを感じた、その遠い街へであるか、………それとも星の方へであるか、さうして自分達の居るこのうす暗い部屋から脱れ出たいやうな氣持がふと湧いた……

「君は私の言ふのをほんとうには聞いて居ないんだね!」

その時、A・Fの鋭い聲がして、聲とゝもに彼は私の前に突立つた。私は愕いて何か言ひ譯けをしやうとする暇もなく、彼はひよいと片手を上に突き延したかと思ふ瞬間に、その高いところの穹窿形の窓の窓かけは、恰も生あるものが命令されたかのやうに、針金の上をつゝいと滑る音がして、もうその窓には、黒い、どつしりとした、窓そのものよりはずつと長い、襞のたつぷりある窓かけが、窓の上一面に覆ひ引かれてあつた。さうしてそこからはもう星の光は見られなかつた。その高いところの窓かけは一本の緒をたぐつて開閉するやうな仕掛けになつて居たのであるが、その時の私には、彼が手を擧げた時に何か或る不可思議な方法と早さとをもつて、ひとりでに引かれたものゝやうにしか思へなか

つた。かうしてその窓から星の光をかぐすと、彼は再び座に歸つて私の前に坐つた時、今引き展げたその窓かけを、いかにも不機嫌さうに見上げながら、彼は獨り言に呟き歌うた——

And the stars never rise, but I feel the bright eyes
  Of the beautiful Annabel Lee;
And so, all the night-tide, I lie down by the side
Of my darling—my darling—my life and my bride,
  In the sepulchre there by the sea,
  In her tomb by the sounding sea.

突然、

「おゝ！ 見給へ。あれが笑ふのを。君はそれをも信じないのか。」

彼はさう叫ぶと、再び立上つた。さうして死顔を指した。私はそれを見た。勿論、それは笑ひも何もしなかつた。併し、立つて居たA・Fは、何のためであるか、づかづかと部屋の眞中の方へ進んで行くと、不氣味な微笑と一瞥とを私の方へ（？）或は死顔の方へ投げながら、兩手を游ぐ人のやうな手つきで、力一ぱい振ると、それを飛鳥の翼のやうに擴げ、同時に片足を卒さまに擧げると、別の片足に、身を托してそれを中心に、自分自身をぐるつと一つ廻した。もう一つ廻した。やがて彼の體は獨樂のやうにくるくるまわつた。旋風のやうにまわりつゞけた。身に纒ふて居たあのモオニング、コオトは風を含んで、その裾は空にはねて折れ返つた。さうして體は廻つた。どういふ加減かその時、彼の體は非常な大男のそれに思はれた。そこまでは充分とゞきかねる蠟燭の淡い光と、壁の方から彼の背景になつて押寄せて居

る濃い闇とは互に縺ひ合ひ抱き合つて、彼の體を中心にして、渦巻き、旋回し、舞踊した。闇と光とのその舞踊はめまぐろしく部屋の三方の壁に反響し、部屋中に擴がつた。私は、

「危い！」

と口のなかで叫ぶと、心配のあまり立ち上つた。併し、私自身が目がまわりさうになり、私はよろよろとよろけると、自分の椅子の背につかまつて、自分自身の身を辛うじて支へた。その時であつた。まだその不可思議な舞踊のきりきり舞ひをつづけて居た彼は、

「おゝ！」

と唸くやうに叫ぶと、眼には見えない高いところの何者かを掻き抱くやうに兩手を一度に閉ぢて、しつかりと自分自身の胸を抱き締めた。闇と光との旋回はぱつたりとやんだ。彼は自分の胸を抱いたまゝ、ぱつたりと、そこへ棒片か何かのやうに眞直ぐに倒れた。その瞬間に、倒れる彼の體が起した風のために、燭臺の火の穂が一時に大きく揺れなびいた。灯は丁字になつて燃えだした。私はふと死顔を見た。

「おゝ！」

その眞白な死顔の口角には、正にはつきりとした笑があつた！

「おゝ、笑つて居る！」

私はA・Ｆの方をふり返つた。横倒しに倒れた私の友の横顔はやはり笑つて居る人のやうに見えた。床には大きいぎらぎらと光つた塊があつて、彼の片頬はそのなかに埋つて居た……

＊　＊　＊　＊　＊

私はその翌日、A・Fのその畫室の床の上で倒れて居るところを、私の妻と私の友人E・Oとに見出された。部屋のなかには驚愕し狼狽して居るその二人の外には、その時私一人しかなかつた。窓は悉く開放されて、その一つからは日光が斜に射し入つて、それが私の片方の掌に當つて居た。私は正氣に返ると眞先きにA・Fのことを聞いた。彼は血を吐いて、その血のなかに片頰を埋めて、床に倒れて死んで居た。併し更に角、病院へ運ばせた。さうして今度は私を病院へ運ばうとするところであつた。

「さうして女は？」

「女？」

「うん。あの死んだやうな女は？」

「死んだやうた女？」

「うん。寢臺に横はつて居る女さ！」

私は苛立しくなつて立上つた。私は目眩くのを感じたが、それは直ぐになほつた。私は妻とE・Oとに兩脇から支へられながら、黒い帳のある寢臺の傍へ歩いて行つた。私が覗き込んだ。私の妻が覗き込んだ。E・Oが覗き込んだ。三人は一度に覗き込んだ。さうしてその帳のかげに、寢臺の上に何があつたか？何もなかつた！たゞ昨夜のとほりに枕があり、枕もとの小卓の上には既に燃え盡きた蠟燭が、燭臺の火盞の上に一杯に流れて居た。さうしてそれが火盞から更に蠟涙になつて通うて小卓の上にまで滴つて居るのであつた。長く床に垂れた黒い天鵞絨の帳は、昨夜A・Fが開けたとほりのまゝに、たゞ三尺足らずしぼられてあつた。そしてその前には、A・Fと私とが怪しい幾時間かを對座した椅子が

あつた。その一つ——私が腰をかけて居た方の椅子は倒れて居た。思ふに、それは私が倒れた時に同時に倒れたものが、そのまゝにされてあつたのではあるまいか。A・Fの倒れて居た場所を見た。床の上の血はもう拭はれてあつた。その血の痕のあるところからやゝ離れた床の上には、物で軽く削られたやうな渦巻の小さな圓い形が九つか十かあつた。それは言うまでもなく、A・Fのあの不可思議な解し難いきりきり舞ひの痕跡に相違なかつた。私は急に思ひ出して尋ねた。

「おい、A・Fは笑つて居やしなかつたか」

「え、につこり笑つて居らしつてよ。それに目を閉いたまゝでね。私なんだか恐いわ！」

私の妻は早速さう答へた。

「馬鹿！」

私は私の妻を一喝した。私の妻が「私なんだかこわいわ」などと餘計なことを言つた事が、その時の私の感情にそぐはなかつたからであつた。(それをまで私が氣違ひになつた證據のやうに彼等は考へて居たらしい) 私は又思ひ出して、A・Fがモデルを使つて製作したかどうかを、壁の上の「よく見る夢」を指して、E・Oに問うた。A・Fの舊の方の友人であるE・Oはそれをきつぱりと否定した。

私達がA・Fの畫室を立ち去らうとした時である。私はふとその部屋の高い天井の上で何か白いものがぎらぎらと動くのを見た。併しそれは、家の下の方に當る屋敷の泉水の水がこんなところへ反射するのであつた。私はあのL字形の階段を昇らうとする時に、ふと聲を聞いて立とまつた——

In the sepulchre there by the sea,
In her tomb by the sounding sea.

併し、その聲は他の二人には決して聞えなかつたといふ。

私は私の見たところの物事を一つ一つ人々に精しく述べた。人々はA・Fの死に方に就ては、その死體の狀態や、彼の平常に考へ合してそれを信じたやうであつたけれども、あの假死の狀態で寢臺の上に橫はつて居たA・Fの幼な妻、永遠の國から來た女、その女の靑い笑顏、それに就ては何人もそれを信ずる人はなかつた。人々はそれを私の夢だと言つた。私がそれを極力力說した時に、人々は私を氣違ひのやうに取扱ひ出した。私は見張り人をつけられて書齋のなかへ閉籠められた。私はそれを拒まなかつた。何故かといふに、その間に、私はあのやつと脫稿した敍事詩をもう一度最初の行から全く改作しなければならないからである。今になつて見ると私のロマンティシズムは實に力のないものであつた。それはたゞ一つの趣味であつて、そのなかには私の命がけの本質は何一つなかつた。私はA・Fの死を見て今日痛切にそれを自覺した。生存中に私の藝術にさまざまな暗示をしたA・Fは、その死際に於て、或る神祕を示して眞の藝術家の使命を私に敎へた。私はあの長篇敍事詩を完成した時には、それをA・Fの靈に捧げる筈である。それに就て、私はあの「よく見る夢」を彼の寢室から持つて來て、この書齋へ掛けたい。しかし、私の家族がそれを許さない。けれどもあの靑白い笑顏は、「よく見る夢」以上に私の印象に殘つて居る。さうしてそれを私が回想することまでは、誰も禁ずることは出來まい！

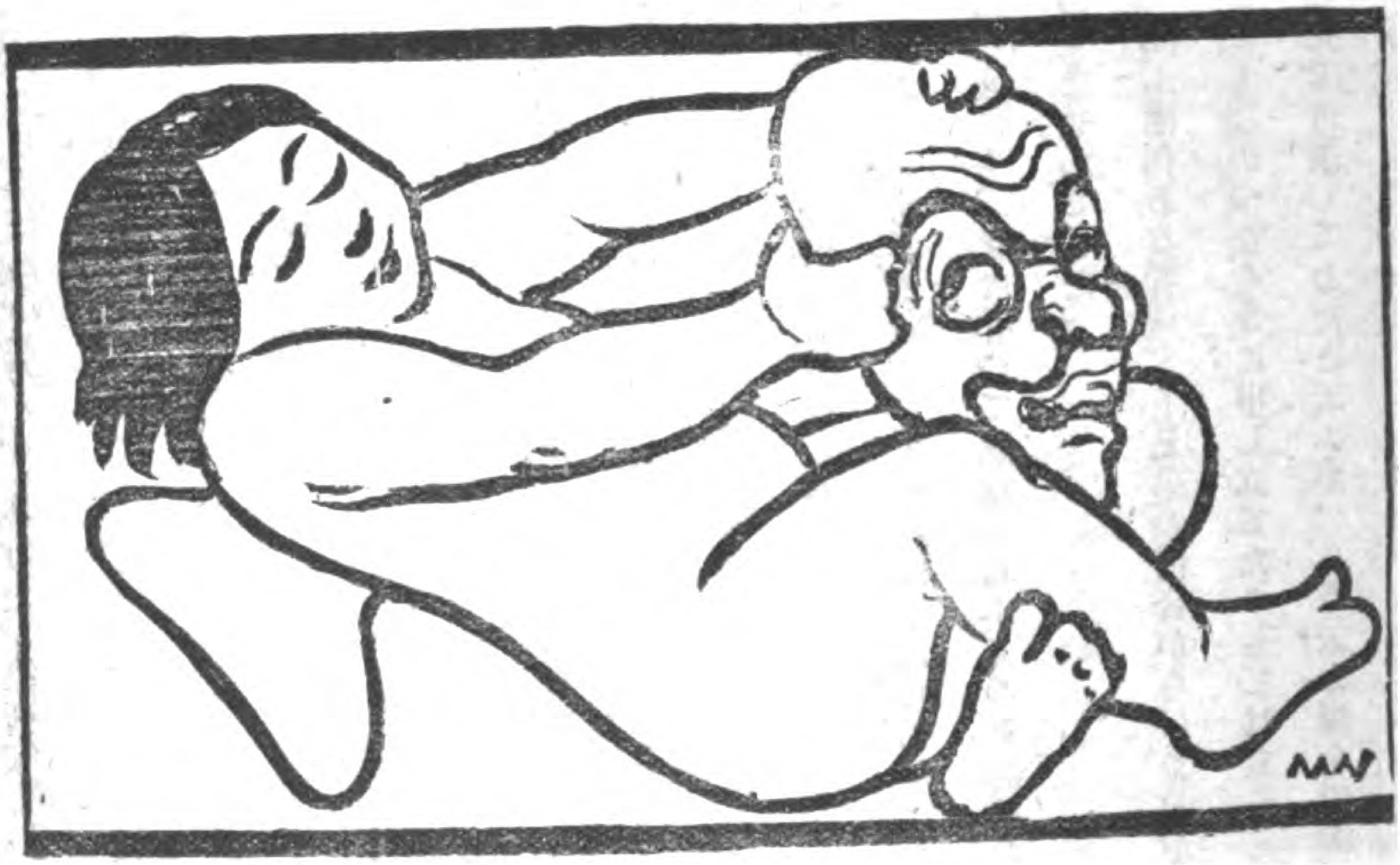
あの女が、どこから、どうして來たか。どうしてあの晩のうちに消え去つたか、それが私にも最初はよほど疑はしい神祕すぎる事實であつた。私はそれに就てあれ以來不斷に考へつゞけて來た。今日やつとそれを充分に了解した――さうして、その理由で今この記錄をつくるのである。

それを文字で說明することは全く一つの困難事である。それはニイチェが或ることに關して言つた如く、「了解する人に

は立ちどころに了解され、然らざる人には遂に說得する方法がない。」私は思ふ。あの女は確にA・Fの空想が生み出した、ものに相違ない。さうしてA・Fは實際、彼の寢姿の上にあんな狀態に居るところのあの女を、一週間以上も幻想しつゞけて來たに相違ない。然も、彼自身それが幻影であつたといふ事を決して思ひ出さない結果、その異常な美を具へた青白い女は、A・Fにとつては實在そのものと全然同樣であつたのである。その時、彼の部屋中には、彼の幻影と、彼の意志とが犇きながら滿ち充ちて居た。私は偶然さういふ狀態のA・Fに遭遇した。私はあの時あの部屋に一歩足をふみ入れた刹那に、既に全く彼の意志に征服された。あの思ひつめて何等の疑うところもない彼の幻影が、彼の意志によつて征服されて居る私にまで感じられたのである。A・Fは彼の短い一生を常にあの少女を空想するといふ奇異な方法で彼の精神を統一しつゞけて來た。さうしてあの時、手短かに言へば、彼は最大限度に於ての自己催眠の狀態にあつたのである。それがやがて私をまで被催眠術者の狀態へひき入れたのではなかつたか。彼が片足の踵で立つて不思議な旋風のやうな舞踊をつゞけた時、彼自身の意志と幻影とに陶醉した彼は、期せずして古來からの最高の魔術者になつて、彼の意志と空想とが、あの笑ふところの女を私の目の前にありあり現出し得たのではなかつたらうか。自己の最大限度の意志を集中することによつて彼の命を賭した人間の精神作用のなかには、果してその程度の力もないものであらうか。無いと斷定するところの人達はそれは人間に對する冒瀆者だ。

私は今も時々、あの長い睫毛のある、柔かに閉ぢられた目と鼻との間に青い陰のある、廣い額と短い頤(おとがひ)とをもつて、全體に貝殼のやうな青白い或る輝しさのある、あの異常な魅力と美とを具へた若い女が、心持開かれてあつたト脣を輕く閉ぢて口を結んだ時、その口角に漂うてリト・アップした笑をありありと思ひ起して恍惚とすることがある。その女の不思議な美しさこそ、それはA・Fの青白い熱情が創造し得たものであると言はなければならない。然もそれを完全に創

造するために彼は彼の命を捧げた。藝術家といふものは彼自身の持つて居る一切のものを擲つて、それから永遠な何物かをクリエートしやうとする苦行者であり、錬金術者である以上、A・Fは正しいことを行つたと言はなければならない。さうしてその酬ひのために彼は藝術の法悦のなかに死んだ。彼が倒れた瞬間を思ひ起す毎に、私は彼の所謂「永遠の世界」の一現象が私の目前に展開されたやうにも思ふ。或はあの瞬間、彼はその「永遠の世界」のたゞなかに生きた永遠の人の姿であつたのではなからうか。私はA・Fがどんな風にして、どこかに葬られたかを知らない。人々は私がA・Fのことを尋ねても滿足に返事を聞かせてはくれないからである。併し、何れ彼はどこかに葬られたに相違ないが、若し彼の墓場を發いて見たならば、私が發いて見たならば、そこに、狭い穴のなかに、法悦のうちに微笑して居るA・Fが同じやうに微笑して居る彼の青白い幼な妻をしつかりと胸に抱きしめて、彼の女を接吻しながら、永眠して居はしないであらうか。それとも、A・Fの墓はむくむくとひとりでに持ち上つて居て、そこには既に彼の屍は無いかも知れない。若しさうだとしたならば、A・Fはあの青白い幼な妻を捜し求めて、それが住んで居る筈の彼の所謂どこか高いところにある「永遠の世界」の方へ昇つて行つたに違ひない。私はA・Fの墓を發いて見たいやうな好奇心がある。それがだんだん日々に盛んになつてくる。さうして私はそれをよく空想する。私は昨夜たうたうそれを實行した夢を見た。……夢のなかでは、彼等は雲のやうに中空に横はつて浮き漂うて居た。彼等は互に抱擁し、接吻して居た。その上には高い大きな星空が無限の上からその彼等をつゝんで居た。



死まで

里見弴

問ふ權利ある者。――お前と信次郞とは、平常兄弟仲はいゝ方だつたか。

答ふる義務ある者。――格別よかつたとも云へません。親しい友達などに比べれば、勿論ずつと他人行儀なところがありました。然しそれは兄弟として當り前のことでせうから、まづ世間普通の兄弟仲と云つたらいゝのでせう。決して惡いと云ふほどではありませんでした。

問ふ權利ある者。――事件以前に、何か云ひ爭つたとか、或はお互に心に含むところがあつたとか云ふやうな事實はなかつたか。

答ふる義務ある者。――事件以前と申しますと、あの當夜の……。

問ふ權利ある者。――いや、それはよろしい。それは追つて尋ねるが、今云ふのは、その數日、或は數週間以前に、と云ふほどの意味だ。

答ふる義務ある者。――特にさう云ふ事實はありません。

問ふ權利ある者。――フン。……一體信次郎は、所謂不良青年と云つたやうな、大分よくない評判のあつた人物だが、何か金錢上その他でお前に迷惑をかけた、と云ふやうな事實もなかつたのか。

答ふる義務ある者。――ありません。あれはいつも私には、チヤンと、弟と云ふ分を忘れずに事へて居りました。……それから唯今の不良青年云々のお言葉ですが、成程世間からはさうも見られてゐたやうですけれども、私は決してそんな人間とは考へて居りません。

問ふ權利ある者。――然し、信次郎の行蹟から云つて、……例へば、お前が離緣した先妻と手を携へて亞米利加に走つたとか、亡父の少なからぬ遺産を蕩盡して了つたとか、或はまた三十二歲にもなるまで、曾つて職業らしい職業に從事したことがないとかと云ふ諸狀件を擧げたならば、充分不良青年の名に値するではないか。最近には、二三軒の待合その他に、大分借金も出來てゐたと云ふが……。

答ふる義務ある者。――それは唯だらしがなかつたと云ふだけのことで、人間は至つて善良でした。あれのどんな行爲の底にも、私は曾つて惡意と云ふものを認めたことがありません。どの點から云つても、不良と云ふところは少しもありませんでした。

問ふ權利ある者。――兄弟の情合から、お前が信次郎を庇ふのは無理もないことだが、そのために、實際あつた事實までもなかつたやうに申し立てたりしてはならんぞ。……最近には、お前の行きつけの待合立花へ行つて、總てお前の勘定で遊蕩してゐたと云ふが、さう云ふ場合でも、果してお前は信次郎に好意をもち續けてゐたかな。

答ふる義務ある者。――ほかのことではなし、どうせ遊ぶ金のことですから、さして迷惑とは感じませんでした。さ

うなればこそ、あの晩偶然立花で落ち合つても、直ぐ私の座敷に一緒になつて、おそくまで愉快に酒を飲んでゐたのです。

問ふ權利ある者。――ウン。……先刻本官がお前たち兄弟の間に、最近何か云ひ爭つたとか、或は不快に思ひ合つてゐたとか云ふ事實の有無を尋ねた時に、お前は、特にさう云ふことはなかつたと申し立てたが、ことさら、特に、と附け加へたのは、あれはどう云ふ意味であつたか。

答ふる義務ある者。――それは、全然なかつたとも、また慥かにあつたとも、どちらとも判然云ひ切れないことのやうに思はれたからです。最近に、特にさう云ふ事實は、私としては考へられませんが、昔から、――小供の時分から、そこに何かあつたやうな氣はするのです。けれどもそれは、弟の方では何んとも思つてゐなかつたことを、私の方だけで、一人相撲に考へ過してゐるのかも知れません。つまり、少しも客觀的な憑證のないことなのですから、申し上げかねたのです。

問ふ權利ある者。――參考として聞いて置くから、申してみるがいゝ。

答ふる義務ある者。――では申し上げますが、これは飽までも私の獨斷でございますから、その點はくれぐれもご承知を願ひます。

――それにはまづ、私の理解に從つて弟の性格からお話して行きたいと思ひます。第一には、あれがヒドく氣の弱かつたことは慥かです。それから先刻も申し上げました通り、お人よしと云つてもいゝほどに善良でした。けれども、世間に馬鹿正直とかお人よしとかで通用する人ほどに愚かしくはありませんでした。肩肘張つて人を押し退けるほどではなくとも、兎に角世間的に生きて行けるだけには、自分の利害を知つてゐました。一寸のことでは露れない位の嘘もつ

きました。よくひとの肚も讀みました。現に、二十歳前までは、父母を初めうちのものは、みんなあれを相應なものになると信じ切つてゐたのです。後に至つて、一門の恥さらしのやうに憎まれたり、それほどでなくても、取柄のないグウタラのやうに輕蔑されたりするやうな男にならうなどとは、誰一人思ひもかけなかつたことです。要するに、あれは至つて善良であると同時に、一人前やつて行けるだけの理智もあり教養もあり手腕もある立派な人間だつたのです。……これが私の理解してゐる弟の信次郎です。

――これからちつと、私としては、お話し憎くなりますが、唯一つ、本當に不思議と云つてもいゝほどの力で、あれを全く狂はせて了ふものがあつたのです、……女です。女に惚れたとなると、あれは、字義通り盲目になり、字義通り氣が逆つて了ふのです。その上にまた、矢鱈に惚れッぽいのです……。

問ふ權利ある者。――さう云ふ、女に對して特に警戒を要する人物を、何故またお前は、兄の分際として、待合などに平氣で出入させて置いたのだ。先刻のお前の口吻から推せば、お前の態度では、默許と云ふ以上に、幾分獎勵或は煽動してゐたやうにも思はれるが……。

答ふる義務ある者。――女に惚れると云ふことは、少しも咎むべきことではありませんから……。

問ふ權利ある者。――然し、それを原因として、他に咎むべきことが直ぐ起つて來るのは、お前としては解りきつた話である筈だが……。（間）お前が云ふやうだと、信次郎は、謂はゞ戀愛的禁治產者ではないか。

答ふる義務ある者。――さようです。それどころか、寧ろ既に戀愛的破產者だつたのです。そして、そしてあれを破產させた商敵は、誰でもない、この私だつたのです……。

問ふ權利ある者。（間）――本官から持ち出した比喩ではあるが、餘り抽象的にならないやうに、それから、餘り亢奮

してはないやうに注意する。……そこで？

答ふる義務ある者。——そこで？……そこで私は、武運拙くも敗れた私の立派な商敵に、七度でも、七度を七倍したほどでも、あれが再び起つことが出來るまで、資本を注ぎ込みたいやうな氣持になつてゐました。そしてあれはたうとう……。

問ふ權利ある者。——本官はもう一度先刻の注意を繰返さなければならない必要を認めるが……。ではかうしよう、お前がこれまでに、信次郎の戀敵であり、且つその勝利者であつたことを、具體的に説明するやうに要求しよう。どうだな。

答ふる義務ある者。——自分ばかりいゝ子になるやうなお話で、申し上げ惜うございますが、ではお話します。

——私には、五つの年からハッキリ意識して戀し始めた娘がありました。一心不亂にその戀を胸に秘めて十年、丁度十五の年に、ぼんやりした言葉でその戀が打ちあけられ、そして、その、一つ年下だつた娘に受け容れられたのでした。私のうちでも、その娘のうちでも、西洋人との交際が多かつたので、見やう見眞似と云ふのですか、よく接吻はしましたが、それ以上のことはなくて、幸福に二三年が過ぎました。そしてあれが、丁度初めて戀を打ちあけた私の年ごろになつて來ました。或る日何氣なくあれの日記をアチコチ開いてゐるうちに、ふと私い目を惹く英字が出て來ました。娘の名の頭字です。直ぐ私は自分の日記を繰つて、その同じ日の件を調べて見ますと、その日は娘が母親と一緒に私のうちを尋ねて來てゐます。あれが、日記のうちに細々と、自分の熱い戀情を訴へたり、相手の美しさを賞へたりしてゐるのが、まがふかたなく私の戀人だと分ると、私はおだて上げられたやうな氣持で、噴きだして了ひました。こつちは十年も前、——まだお前なんぞ赤ちやんだつた時分からだ、と云ふのが、いろ／＼の意味で私の強い自信でした。惡

戯ッ子の氣持でなほ讀み續けてゐるうちに、然し、餘りの熱烈さに私も何んとなく不安にされ、腹立たしくもされました。併もだん／＼近い頃に來ると、打ちあけこそしないが、あれの戀の矢が正しく相手の心を射てゐる喜びを謳ひ始めてあるのです。仕舞には、既に遂げられた戀人の心が、紙の上に狂喜してゐました。勿論私は嫉妬に燃えて娘を詰りました。若死をしただけに賢い娘でしたが、優しく微笑みながら云ひますには、あれが戀してゐるのは、ずッと前からよく自分には分つてゐた、そして自分もあれが好きだ、然し自分の心はどうしたつてお前から離れはしないが、若しお前が不安に堪えないなら、自分ら二人が既に心を許し合つた仲だと云ふことをあれに知らせたらい〻……。それで直ぐ私の心もとけて、どう云ふ風にしてそれをあれに解らせたものかと云ふ相談をしました。或る日、――初夏の晴れ亘つた午後のことでした、あれが隱れんぼの鬼として、深い新緑の木蔭に、柔かに陽(ひ)の斑點を浴びながら唇を接してゐる私たちを見出さなければならなかつたのです。あれにとつて、何んと云ふ呪はれた日だつたでせう。有繫に娘は心の陰るのを隱し切れない容子でしたが、私は、――その時の私は、唯もう有頂天でした。

――けれども、こ〻があれの、――馬鹿かエラいかはご判斷に任せますが、兎に角ひと〻違つたところです。――その日私たちがあれに與へた効果(エフエクト)をみやうとして、私はその後も時々あれの日記を竊視してゐますと、半月ほどは空頁(ブランクペイヂ)が續きましたが、いつの間にかまた前と同じ、――ではない、更に熱烈な戀を謳ひ始めました。それはさして不思議ではありませんが、相手の娘の方でも、心の極く底の底では、私よりもあれを餘計に戀してゐるのだと信じ切つて、これんばかりも疑はない心持を讀むと、その所謂あまさを嘲笑はふとする私の口もとが、自然とベソをかいたやうになつて來ました。現に私の耳に私語かれる娘の戀の言葉よりも、あれの一人で自惚れ切つてゐる日記の方が、より本當のことでゐるやうに私を呪伏(パアスウエード)する力をもつてゐるとは！ 不思議ではありませんか。それ以來、今まで私があれに對して抱いてゐ

た優越の感じと、それから私が恐らくは先に生れたために得てゐた有利な位置とは、殆ど全くこの價値を失つて了つたのです。あれが、飽までも闘はなければならない手强い戀敵として、シッカリと私の前に立つてゐるのを感じました。もう私には、これまでの位置を利用して、あれを陥れるやうな卑怯なまねは出來ませんでした。私たちは一歩でも深く戀ひ進まうとして、唯自分たちの心にあらゆる試煉の火を加へて精進しました。ほんとに、私たち二人で、あの娘の心を、——命を吸ひ盡して了つたのだとさへ信じられます。同じ年の九月に、娘は十八でなくなりました。その頃私は或る塾に預けられてゐましたが、うちからその知らせを受けながら、大勢の前にとめどのない涙を見せるのが辛さに、親類同樣につき合つてゐた娘のうちへも、葬式へも一切顔出しをしないで、病氣だと云つて塾の一室に寢たきりになつてゐました。本當に寢ついて了ひさうに、肉體的にまで苦しい悲嘆のうちに、時々あれはどうしてゐるだらうと思ひやりました。思ひやる、と申しても、その嘆きのほどを同情すると云ふやうな意味ではありません。私よりも以上に嘆いてゐはしまいかと云ふやうな、そこまでいつても競爭心と嫉妬との混つた氣がゝりなのです。あれは自殺するかも知れない、何、負けるものか、こつちが先にやつて了はふ、と幾度も決心しかけました。嘘をつけば、自殺を思ひながら、三日と云ふもの、私は夜も晝もなく泣き續けてゐたと云つてもいゝでせう。葬式は、冴え返つて來たヒドい暑さの日でした。私はもう泣き勞れた上に、その暑さでヘトヘトになつて、丁度式の擧げられる午後二時頃、軒と板塀とに限られた青空をポカンとして眺めてゐました。青桐の葉がじゆつなげに垂れ下つて、そよとの風もありません。あたりは蟬の聲ばかりです。

——あゝ、これでやつとすんだ！　ふと、私は、さう云ふ氣持の吐息をついてゐる自分を見出したのです。この不思議に氣安い心地には、死んで行つた娘に對する甚しい不貞の意味が、どう誤魔化しやうもなく纏はりついてゐて、ヒド

くその場合の私を苦しませました。……けれども、これは後に考へたことですが、あすこに娘の死と云ふ壁が突然立ち塞がらなかつたとしたら、一體私たちはどこまで駈ツこを續けたでせう。二人のうち、どつちか一人が死ぬまで、――さう私は感じます。盲メツポウにのめり込んで行つた私たちは、あの固い冷たい壁に頭を叩きつけて、ヒドく傷きはしましたが、然しそのおかげで命だけは取り止めたのだ、――さう私は感じます。(間)

――もう晩の八時過ぎでした。あれが、飯倉の聖アンドリウス教會で擧げられた葬儀のなかば頃からふと見えなくなつて、いまだに歸らないと云ふうちからの知らせを受けて、私は思はず跳ね起きました。いよ／＼やつたな、と思つたことは申すまでもありません。式場で涙一滴みせなかつたあれの失踪を、うちのものは誰一人、娘の死と關聯して考へた者はありませんでしたから、顔色を失つて泣き騷ぐ私は、たゞ弟思ひの兄さんにされて、人々に慰められてゐるよりほかどうすることも出來ないのでした。十二時頃、芝の警察からの電話で、あれがそこに、生きて、保護されてゐることが分りました。紅葉山から大門の方へぬけるあの砂ツ埃の往來に、烈しい腦亂か何かでぶツ倒れたまゝ、その時刻まで正氣づかなかつたのださうです。勿論ほどなくそこへ通りかゝつた人の世話で、即刻警察醫の手當は受けてゐたのでせうが、正氣づくまでは、どこの者か分らなかつたのです。

――早速二人引で飛ばして行つた私は、唯わけもなく胸を躍らせながら、あれが寢かされてゐると云ふ二階の一室へ導かれました。何んとなく、悲痛な表情を豫期してゐた私は、そこに、心持口をあけて、ポカンと天井を見詰めてゐるあれを見出した時には、これは氣が違つて了つたな、と思ひました。

「オイ、どうしたい」と、わざと私は快濶に呼びかけました。私を見ると、あれは人のいゝ、はにかんだやうな微笑を浮べて、床のなかゝら兩手を差し出しました。私はそれを把りました。變な氣持の一秒ほどが過ぎたと思ふと、二人は同

時に聲を立て笑ひ出したのです。……何がそんなに可笑しかつたのだか、いまだに解りません。――もう一ついまだに解らないのは、あれが葬式のなかばに教會堂を出て、待たしてある俥に乘らなかつたばかりでなく、六本木のうちとは丁度正反對の大門の方へ出て行つたことです……。（間）

――然し、こんな話がご參考になるでせうか。

問ふ權利ある者。――兎に角、先を話してごらん。

答ふる義務ある者。――で、……どうもあたしにはあの不思議な笑ひがさうさせたのだと感じられるのですが、……それ以來私たちは、きわ立つて親しくなりました。なに隔てなく親しくしながら、お互に尊敬し合ふやうになりました。つまらない謙遜はやめにして眞直に申せば、あれの私に對する心持などは、敬愛と云ふよりも、寧ろ崇拜に近いものでした。思想でも感情でも、一寸した口の利きやうなどまで、そつくり私のまゝだと、よくひとが云ひましたが、あれのやうな氣の弱い人間は、一旦惚れ込んだとなると、その人のどこからどこまでよくつて堪らなくなるものですから、これは本當のことだつたらうと思ひます。

――そのうち、翌年の春でした、第二の事件が起つたのです。

――先刻あれの性質に就いて申し上げました折に、さも他事のやうに、やれ惚ッぽいの、惚れたとなるとまるで夢中だのと申しましたが、それは、……今更お斷りするまでもなく、只今申し上げた話でもお分りでせうが……、それはまた私自身の性分でもあるのです。――私のゐた塾の主人、……六十ばかりになる漢學者でしたが、……その先生の姪にあたる、私より三つ上の、出戻りの女が、先生の奧さんの病中すけに來てゐました。例によつて、私の戀は熱烈で眞劍でした。けれども、この女には全く弄ばれて了つたのです。私が童貞を失ひ、羞恥を失ひ、面目を失つて、うちへ

歸されて來た時には、もう一歩で自尊心までなくしかけてゐました。そこへ、飽まで惡戲なその女が、「婆アくつた爺ヤイ、流しの下の骨をみろ」と云つた調子で、故郷の博多から小包で送つてよこしたものと云ふのが、あれからその女に送つた戀文でした、けれども、その、娗ふつもりでよこした一束の戀文が、すんでのことで自暴くそな生活にはいらうとしてゐた私を、危く喰ひ止めてくれたのです。あれの手紙には、あれらしい眞情と意慾の烈しさと、相手を少しも疑はない無邪氣さとが最後まで失はれずにありました。若しその機會さえあつたならば、あゝ云ふ女のことで、あれも私同樣の目に遇はされてゐたらうと思ひますから、別段それによつてあれのエラさを證明しやうと云ふのではありませんが、兎に角その時の私は、全くあれのおかげで救はれたのです。（間）

——その女で懲りもしたのですが、私はもう戀をするのが薄氣味惡くなりました。私が二度戀をする間に、恐らくはあれも二度しか戀してゐないだらうと思ひますが、その二度が二度、同じ一人の女を兄弟で爭つてゐたのですもの……。遺傳された趣味、——そんな解釋よりは、何かの因緣ごと、とでも云つた言葉の方が、私の胸にピタリと來るやうになつて來ました。

——けれども、更に第三の事件が起るのです。今度私が戀したのは、學校へ行く通り道の、至つて貧しげな鹽煎餅屋の娘でした。籠目に編んだ、茶庭の竹木戸の扉をはずして來たやうなものゝ上に煎餅を置き並べたのが、埃だらけな低い軒先に乾してありました。或る時そこへ小猫が上つて、じやれついて、あちこちへ煎餅を跳ね飛ばしてゐるのを見たので、私は誰もゐない店さきから奧へ聲をかけてやりました。買ものと思つたか、「いらつしやいまし」と、少し鼻にかかる大人びた聲で答へながら出て來たのは、健康らしい赤い頰をした十六七になる美しい娘でした。

「買ものぢやアないんです。あの、あすこに猫が上つてるから……」と、ドギマギして云つた私も、多分赤くなつ

てゐたらうと思ひますが、娘の方でも、赤い頬を一層赤らめて、「アウラ」と口のなかで云ふと、そのまゝ奥へ駈け込んで了ひました。翌日から、往復二度の道に私は必ず鹽煎餅屋の店に氣をつけて通るやうになりましたが、それッきりついぞその娘を見かけないので、あの日よそから遊びに來てゐたのかしらと思つて、一寸ガッカリしたやうな氣持になつてゐました。或る日、うつ向きながら歩いてゐた目をふとあげた瞬間に、すウと視野のはづれを掠めて、煎餅屋の店に消えたものが、どうもあの娘であつたやうに直覺されました。それだけでもう私の胸はドキつくのです。努めて平氣を裝ひながらも、店の前を通る時には、私の體は硬くなつてゐました。そのくせ、私は戀するもの丶大膽さで、眞面に店の方を向いて通りました。そこには、娘の代りに、五十前後の胡麻鹽爺が、さも待ち構へえてゐたやうに、仕事の手をやめてゐたのが、グイと頭を引くと、眞鍮縁の眼鏡ごしにヂロヂロと私を眺め廻しました。それは不愉快でしたが、直ぐ「なアんだ、くだらない」とでも云ふやうに、上の前齒がズラリとぬけてヒドく老人じみた口をパクリとあけて、また煎餅を燒き始めた容子が、何んとなく私の氣に入つて了ひました。……戀人に附屬するものならば、何んでもよくなつて了ふのです。

——いつとはなく、だんだん娘の姿を店さきに見出すことが多くなつて來ました。遂に私たちは、けはしい、今にも喧嘩を始めさうな目つきで、チツとお互の目を見入るやうになつたのです。その目が、故もなく涙ぐんで了ふやうになつたのです。

——うちで女中がなくて困つてゐた時に、或る日私はツカツカと例の齒ぬけ爺の前に行つて、娘を女中に出すことは出來ないか、とぶつきら棒に尋ねました。——若しあれが東京にゐたならば、私は決してさうはしなかつたでせう。が、丁度その頃あれは、健康のためと、郷里に一人で淋しがつてゐる祖母のためとから、岡山の方で中學をやつてゐま

したので。——何んでも當つてみなければ分らないものです、間もなく煎餅屋の娘が私のうちに働くことになりました。——不思議な戀の表出しでした。私たちは、稀に二人きりになつても、相變らずあの怒つたやうな目つきをして、お互の目のなかを見入るよりほかに、口一つ利きませんでした。それで、私がかれを妻にしやうと云ふ心も、かれが私を良人と許さうと云ふ心も、お互によく解り合つてゐたのです。この時分ほどしみ〴〵と戀を有難く味つたことは、あとにもさきにもありません。(間)

——どうでせう、そこにあれが、急に體の具合が惡くなつて、東京に歸つて來ることになると云ふのは！……あれが、歸つて直ぐ父の居間で話してゐる時でした。おきぬ(と云ふのが娘の名ですが)おきぬがそこに茶器を運んで來ますと、知らぬまに私は、あれの一擧一動にヂツと目つけるやうになつてゐたのです。茶碗に手をかけて、ふと、全く邪氣なしに、おきぬの方を見たと思ふと、あれは、「アツ」と云ふ聲を、危く口のなかに堰き止めました。その表情は、前から知つてゐる人を、全く思ひがけない所で見出した時のそれです。それから直ぐ何か父の言葉に答へて話し續けてゐましたが、染附の、猪口よりも少さいほどの煎茶々碗を、膝の上で、兩の掌のなかに揉みつぶして了ひさうにギユー〳〵捩ぢ廻し始めました。出口を與へることの出來ない激情を、纔かに硬い瀬戸もの丶上に放散させてゐると云つた心持です。あれの生存を、その時、生れて初めて私は心から呪ひました。(間)

——二人の男が一人の女を戀わたりながら、三人とも一つ家のなかに住むことになつたのです。今度こそ絶對に優勝者だと信じ切つてゐられた私ですら、決してそれを愉快なものとは感じないのに、あれにはそんなことはまるで氣にもかゝらない容子です。今度もあれはおきぬが既に私の戀人であることを知つてゐた筈ですが、あれの戀は一度だつてその理由で阻まれたためしがありません。その點まるであれは、戀愛の個人主義、——戀人の獨占、と云ふ眞理を認め

ない男のやうでした。たゞ、然し、あれの戀の眞劍さが、私に對する意地惡や何かから、故らに私の戀人ばかりを選んで横戀慕すると云ふやうな氣持を、決して抱かせませんでした。そして、崇拜は崇拜として、戀愛にかけては、兄貴は兄貴、俺は俺だと云つた調子で、例の如く平氣で戀ひまさるのだから驚きます。併もさう云ふ根强さが、あれの戀愛生活以外には、まるで影をひそめて了ふのも不思議ではありませんか。例へて云へば、試驗場に出ると、すつかりあがつて了つて知つてゐる答でも書けなくなつて了ふとか、他人に何んの理由もない頼みごとをされても決して拒めないとか、寫眞やテニスを熱心に始めるが、必ずものにならないうちに飽が來てやめて了ふとか云つた風な、誠に弱々とした性分なのです。戀の仕方にしても、どこまでも思ひ込み、慕い續ける心底の根强さには似げなく、いつもワク／＼するばかりで、手を把るなどは未、碌に口も利けなかつたらしいのです。これはおきぬから聞いたことですが、近所の同じ小學校に通つてゐて、かの女とは舊くからの顏馴染だつたのださうですから、その點を利用しやうとさえ思へば、幼い頃の懐しい思出でも持ち出して、私には醸すことの出來ない、戀に適はしい或る空氣に包まれることも出來たのでせうが。それどころか、あれはいつも主人が女中に對する態度を崩さないやうにして、その久濶を叙したことすらなかつたと云ひます。

――そんなわけで、表面上には何んの波瀾もなく半年ほどたつうちに、私は高等商業を済して、上海に赴任することになりました。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、――、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。――恐ろしいのは戀するもの丶目です。翌朝起きてからうちを出るまでの五六時間のうちに、あれは私たちの新しい關係を、誤りなく觀て了ひました。純な淸教徒的な青年だつたあれは、そこにピタリとあれほど撓みのなかつた戀の歩みを止めて了つたのです。日本を離

れて行く私の唯一の心配は全く無駄になりました。――船が横濱の岸壁を離れる前に、そつと私の船室に殘して行つたあれの手紙には、淋しくたよりない私の愛人を、きつと歸朝の日まで慰め護るから安心しろ、また二人が樂しい家庭をつくるまでは、自分が力かぎり二人のために盡すだらうことを、いま神かけて誓ふ、どうぞそれを信じてくれ、といふ意味が書いてありました。――勿論私は信じました。そしてあれは最後までその信を裏切りませんでした。おきぬの手紙には、いつも、あれがいかに忠實なよい友であるかが細々と書いてありました。讀む度に私は泣かされました。――あれの心は、恐らく初戀の娘の死に會つた時よりも、遙か餘計に苦んでゐたに違ひありません。忠實なよい友としてのおきぬの信頼を、どんなに痛く感じたことがあつたか知れません。(間)

――上海に行つてから丸二年ほどたつた時です、……あゝ、さうです、これから第四の事件に移るのですが、……私をM――會社に世話してくれた父の友人で、本店から上海の支店長に榮轉した人が、(いかにも西洋人のしさうなことですが、)大勢の家族のうちから、お氣に入りの娘さんを一人だけつれて赴任して來ました。――色魔のやうに思はれるのが辛さに、自分ばかりいゝ子になるわけではありませんが、正直なところ、それから一年とはたゝない後の私と云ふものが、その美しい支店長の娘さんの思ひ人として、朋輩に憎まれほど幸福な、若い店員だつたのです。……さう笑はないでください。笑ふなら、なかば榮達と云ふことに目が眩んで、直ぐその戀に應じる氣になつた點でお笑ひください。然し、これから自分の腕ツぷし一つで、位置も財産も名聲も築き上げて行かうと云ふ、靑年らしい野心に充ち滿ちてゐた當時の私が、煎餅屋の娘から、支店長の娘に乘り換えたことを、多分あなたがたはお笑ひはなさるまいと思ひます。婦人雜誌の小說で泣かされる女學生や、「運命」と親類づきあひをしてゐるやうな書生さんたちには憎まれても、あなたがたに同感して頂ければ、それで本望です。

――餘計なことを申しました。榮達も榮達ですが、それに劣らず私を誘ひましたものは、娘の美貌でした。そこへ Coquette 型の、表情の豐かな、話上手な、――一口に云へばヒドく當世向きな調子なのですから、上海でよく外國人とばかり交際つてゐるうちに、どうも日本の娘は……などゝ云ひたくなつてゐた私にとつては、お誂へのツボです。私は今までに覺えのない、小器用な、輕快な戀からはいりましたが、性分は仕方のないもので、二三ケ月後には、矢ツ張りまた持前の熱情に悶えて居りました。おきぬの手紙を讀む時や、それに返事を出す時の「良心」には、いつも苦められましたが、然し兎に角私は素晴らしく幸福だつたのです。

――ところが、どうでせう、遠い浪路を隔てたこゝまで、あれの影はさしてゐたのです。――支店長親子が着いて來て、初めて私が晩餐に招かれて行つた晩、たつ前私のうちから托かつて來た品々を、兩手と顎とで胸一杯に擁え込んで、娘の閑枝が部屋にはいつて來ました。父親はその時までそとから歸つてゐませんでしたが、東京でも二三度遇つたことのある私たちは、もうその應接間で差向ひになつたのです。

「うちのやつらもまた、無遠慮に大層お願ひしたものですね」と、私はしんから氣の毒に思つて云ひました。

「おんなじことですわ。だけど、隨分重たい」娘はさう云ひながら、ソフアの上にドシンと置いて、「いづれおあとから、誰かにあなたのお宅まで屆けさせますけれど、きつと少しでも早くごらんになりたいでせうと思つて……」

それで私は、くだらない安ものなどが現はれてくれなければいゝがと心配しい〳〵あれこれと包紙をやぶいてみなければならないはめに陷りました。けれども、直ぐにもう私はもとより、そこから離れて來て間もない娘さへ、生れた國の品を異郷で眺める嬉しさや、小供がガラ〳〵を破る時と同じ好奇心で興じ樂みながら、一品々々手から手に渡したりしてゐました。

「お使賃に、このなかの品をどれか一つだけ私にくださへつて云つたら、あなたどうなすつて？」突然娘が、戯談とも本氣ともつかない調子でさう云ひました。

「どうぞ、どれでも。喜んで差上げますから」私もそつくりその調子に則つて答へました。

「ぢやアこれ、――一番ご大切だらうとは思ひますけれども、二枚あるからいゝでせう？お庭の方がいゝかしら。それとも、こつちのお座敷のにしませうかしら……」

私に送つてくれるために、うちの者がみんな揃つて撮つた二枚の寫眞を、娘はあれこれと見比べるのです。もうチヤンとやるやらないの問題は片がついて了つて、庭で撮つた方かそれとももう一枚のかと云ふのが、當面の問題になつてゐました。その我が儘も私には嬉しかつたのです。――どつちの方に、あれがよりよく撮れてゐるかを見比べてゐた娘だらうとは、誰が思ひつきませう！

――後に分つたことですが、その前年の夏、伊香保で、娘の一家とうちのものたちとが偶然同じ宿屋に泊り合せてゐた間に、あれと娘とは、立派に互の胸を打ちあけ合つた戀仲だつたのです。尤も、さうとは知らずに私たちの戀が成り立つたのちに、私はその關係を思ひ浮べたことがないでもありません。最近に、うちの方で起つた小さな出來ごとで、かの女に向つて私の母などが書く筈のないやうなことを、不思議に娘が知つてゐる時があるのです。――さう云ふ時に、私の目の前には、あれが、……とうとう死ぬ瞬間まで私と女を爭ひ合つたあれの姿が、影のやうに立ち顯れました。けれどもその都度、これまでに三度もあつたことだけに、却つて私は、まさか、と思ひ返したのです。（間）

――五年目に故郷の土を踏まうとしてゐた私は、年にしては破格な昇進で可なりの位置も得ましたし、その上、上海支店長から重役の一人に舉げられて、益々羽振りのよくなつた實業家の、所謂「愛婿」となる結婚式を目の前に控えても

ゐました。當時熱心なトルストイヤンになつてゐたあれには、「復活」のネフリュウドフ公爵を眞ツ先に押し立てゝ、おきぬに對する私の無節操を烈しく攻撃されましたが、そこまで踏みかけた幸運の階段から、私は決して降りやうとはしませんでした。これには、さしも兄貴崇拜だつたあれも、恐らくは生れて初めてでせうか、私に敵意を感じ、園枝に反感をもつやうになりました。

――無力なおきぬは、金の鉾を背負はされて、手輕く捨てられました。思ひ詰つた私は、開運のお札はこゝから出るやうな顏をして、樂しい新婚の日を送りました。あれはまた、いつの間にか私たちに對する敵意も反感もケロリと忘れて了つて、よくうちに遊びに來てゐました。

――けれども、かう云ふ平穩はいくらも續きませんでした。園枝と私とはどうしたつて反の合ふ人間ではありません。小綺麗な、おそ行きの愛情を示されゝば示されるほど、私は園枝を憎みましたし、執念深く、腸の底まで食ひ込んで行かうとする私の愛情は、直ぐ園枝の胸をムカつかせるのでした。私は、こんな奴と一緒に住む位なら、嫁館良くなつて下宿屋の二階に轉がつてゐる方がまだましだ、と思ふやうになりました。園枝にはテンデ執着などはないのです。よく私はヂヤンチオットの役廻りで、パオロと一緒に、圓卓騎士と王妃との戀物語を讀まうとする、イヤに（Coquettish な、和製のフランチェスカを、しらく／＼と眺めてゐました。結婚してからはやつと十四五ケ月目のことですが、考へてみれば、結婚前に、既に二人はお互にイヤ氣がさしてゐたのですから、それだけでもう充分辛抱強かつたと云つてもいゝのです、――私は安樂椅子に深く腰を下ろして、葉卷を吃しながら、――微笑さへ浮べながら、或る日突然云ひました。

「どうだ、暇をやらうか。お互に痩我慢をしてゐたつてしやうがない」

「えゝ、結構ですわ」

それで離婚が濟みました。それに凡そ豫想通りでしたけれども、園枝が、私から直ぐに、私と同型の、ねつこい戀より出來ないに知れ切つてゐるあれを相手に選ばうとは全く意外でした。若し、二人が日本を離れる前にそれを知つてゐたなら、私は、私たちの結婚を思ひ止らせやうとした時のあれの二十倍以上の熱心をもつて、必ずあれを救ふことが出來たらうと思ひます。

――亞米利加に行つてからの始末はご承知でせう、あのKとやら云ふ領事補とは、まだ女學生時代からの關係ださうですから、あれはたゞ金方で同時に隨行たるの名譽を擔つたわけなのです。それにしても、あんなくだらない女一人のために、あれの生活がグズ〳〵に崩されて了つたのは、返す〴〵も殘念でした。――何んだか、私の脊負ふべき筈のものが、神様の一寸した手違ひから、あれの肩へズリ落ちて行つたやうに思はれて、氣の毒でなりません。(間)――園枝を離縁すると同時に、私は、あの半官的なM――株式會社から退きました。何から何まで自分のあたま一つでやつて行くやうな忙しい事業のなかに身を投じました。實用的に肉體を買ふのを除けば、それ以來私は女とは全く縁を絕つたやうな形で三年を過ごしました。その間を、あれはまた、メチヤクチヤな放蕩、――斷片で、安ツぽくつて、滅クチヤになつた、まるで紙屑籠のなかを見るやうな戀愛生活に暮したのです。

――けれども、こゝはシツカリ聞いて頂かなければなりません。亞米利加から歸つて來た頃から、あれの性質は著しく傷き歪み始めましたが、――そして外面的に云へば、ご承知の通り放蕩無賴でしたが、あれの戀愛だけは遂に汚されなかつたのです。女を愛し、女を所有しやうとする本能の動き方は、益々純に、愈々強くなつたとさへ云へると思ひたす。――事實に就いて申しますならば、あれは亞米利加で園枝を失つてからこの方、恐らく百人位上の女と關係したで

せうが、——そしてそのなかには隨分くだらないのや、卑しいのや、變挺なのが澤山あつたやうですが、一人だつてかれに心の底から愛されなかつたものはなかつたと信じます。世間普通の道樂者なら、——いやひと樣のことを申すより、第一にこの私なら、イヤで〳〵堪らないやうな女でも、或る場合には平氣です。選り好みの標準は、大體その「或る場合」から割り出さるのです。やれ女郎は汚いの、やれ後家はどうだのと云つて潔癖がつてみても、要するにそれは「趣味」の範圍で解決される問題で、謂はゞ、金が云はせる贅澤沙汰なのです。さう云ふ「趣味」の點から云ふなら、あれ位また不潔癖になつた人間も少なかつたでせう。然し、あれの自分から愛さない女には一せつ用がない、——それがどんな美しからうが、さきからどんなに持ちかけやうが、——一せつご免かふむると云ふ潔癖に至つては、殆ど儔がないと云つてもいゝかと思ひます。

——かう申したところで、私が、あれの「愛」と云ふものをプラトニックに考へてゐるわけでは毛頭ありません。例へば、あの初戀の娘と戀してゐたやうな氣持で、最後まで女を愛したなどゝは決して申しません。云ふまでもなく、私たちと同樣に、多分の痴情を含むだものです。それなら何も普通の道樂者と變りはないではないか、矢つ張り「或る場合」の豫想が選り好みの標準になつてゐるわけではないか、とおつしやるかも知れませんが、それは違ひます。萬事好都合に運んで、あと腹の痛む心配もなく、イザとなつた場合に、普通の道樂者なら、いゝ加減たまらない女でもあとには引かないでせう。よく、何んとやらを食はぬは男の恥だなどゝ申すではありませんか。惚れた女に對する執念が人並はづれてゐただけ、（と私は云ひたいのですが、）それだけ、さう云ふ不潔癖は、あれには出來ませんでした。本能的に出來ないのです。

——これだけ媚く申したら、大抵お解りくだすつたでせうが、今度はあれの戀愛の積極的な方面からお話して、もう

一寸妾うちをして置かうと思ひます。

——或る女に惚れる、——勿論もう以前のやうにウヂ〳〵してゐる筈もありませんが、——亞米利加から歸つて以來著しく衰えて了つたあれの理性は、相手や、場合や、あと〳〵のことなどに就いて、童貞の頃の盲目的な戀よりも更にヒドいくらゐに、少しでもあれを反省させる力がなかつたのです。戀の烈さと、相手もまた自分に惚てゐると信じ切るあまさとは、あれの一生を通じた一枚身上で、以前と變りませんでした。イヤに氣取つたりなんぞしてゐません、直接法に、眞劍に、正直に、正面からヒタ押しに戀ひ迫るのです。相手が素人なら、大抵氣違ひだと思つて逃げ出してます。實際もう色氣違ひだと云ふ評判もチラホラあつたくらゐですから、隨分うちでは心配して探してゐたやうですが、嫁に來てなどあるわけがありません。

問ふ權利ある者。——お前は嫡子でありながら、何故その相談にあづからなかつたのか。嫁でも持たしたら、と云ふ考はさう云ふ場合だれでも直ぐ抱くことだらうが……。

答ふる義務ある者。——お言葉ですが、それでは普通の道樂者扱ひです。あれは漁色家ではなくつて、謂はゞ專門の戀愛家です。はたから嫁の世話などは、釋迦に說法だと思ひまして、初めから私は、兩親に、その相談は受けたくないと云ひ切つて置いたのです。それに、これは我が田に水を引くやうですが、闌枝を出してからこつち、私は後妻がほしいやうな氣持になつたことは、たゞの一度だつてありませんし……。(間)ですが、もう少し仕かけた話を續けませう。——

——そんなわけで、勢ひあれは玄人に馴いたのです。私と違つて、酒は嫌ひだし、唄一つ唄ふでもないあれにとつては、待合は、種々の女と會合することの出來る、文字通り待合の場所だつたのです。玄人だつて、正面にあの調子は受け切れません。たま〳〵受けるものは、あれの本心とは沒交涉に、たゞ身すぎ世すぎの足として受けるのですが、可哀想に、

あれは決してさうとは思はないのです。全く、惚れ込んで來たあれを縲るだけのことなら、女でさへあれば、子守ッ兒にでも出來るでせう。けれども、結局は矢つ張りどんな女にも受け切れないのです。女どもはその理由を、あゝ執抑(しつこ)くては、と云ふ言葉で云ひ表すさうです。——全く、何ごとも中庸の世です。香水でも、茶でも、程度以上に匂ひ高いのは、“Strong!”と一口にこなされます。“Strong”——「強い」と云ふ言葉の反對語は「弱い」で、前者は常によく、後者は常に惡いものだと思つてゐると間違ひです。強いがためにこなされるものゝ仲間に、——茶や香水などのなかに、——さしづめ戀愛と藝術とは是非とも差し加へて置かなければならないものだと思ひます。……どうもこの、程度問題と云ふやつほど、喧嘩にならない、張合のないやつはありません。若しあれの程度に strong な戀をなし得る女がゐたならば、其女の目には、どんなにか潔く、美く、逞く、淡(ほのか)く、あれの心が映つたことでせう！　百人ものなかには一人くらゐ……。いや、女と云ふものはイブ以來おやさしいものと相場がきまつてゐますから、そんなことを云つたつて、それは、時代を拔きすぎた藝術家が認められないからと云つて不平を洩すのよりも、もつとずツと無理です。殊にあれの戀愛は、片輪と云へば片輪的でした、——若し人間の全人格的衝動が、必ず智情意の三本足で立たなければならないものだと云ふのが本當なら……。あれの全人格的戀愛には、情に灼熱や純一があり、意慾に不撓や、把握はありましたが、智に至つて片なしでした。でも戀愛にだけは、この最後のものは不用、どころか、却つて邪魔ものゝやうにも云はれてゐますが、それは所謂舊思想で、人間が今の世に立つ窮定(スタビリテイ)の上から云つて、三本の足は常に缺く可らざるものと考へる方が新思想たらうと思ひます。

——さう云ふわけで、あれは女に逃げられるとは、直ぐにまた他の女に惚れて、またその女にも逃げられると云ふ風な生活にゐたのです。よくまアさう直ぐにあとから／＼と惚れたものだ、——と、その點からあれの眞實さをお疑ひに

なるかも知れませんが、(これは男女を問はずですか、)常にどんな人でも頭から信用してかゝつたあれの心は、女には殊更寛大だつたからと、私どもには隨分變に見える女にも、どこかしらに、あれ一流の目で、精神なり肉體なりの美を見出す力があつたからです。他人に美點を見出すと云ふことは、自體誠に結構なことで、一人でも餘計に見出せば見出すだけいゝではありませんか。——屢々惚れるからと云つて、その戀が必ずしも輕薄だとは限りません。

——かやうにしてあれは、大勢の女を強く愛しながら、一度も本當の意味では報はれなかつたのです。これが、先刻私が、あれを戀愛的破産者だと呼んだわけです。それから、私自身が、あれをさう云ふはめに陷れた不思議な商敵だつたと申したわけも、私ども兄弟の間の感情がどんなものであつたかも、以上の長話のうちにお了解くださいましたことゝ思ひます……。(以下五頁、當局の注意によつて全部削除。此旨作者並びに讀者の御諒恕を乞ふ……編者しるす。)

▽法學士 小川鐵堂先生新著

投資物の比較研究

▽定價壹圓二十錢 ▽郵稅六錢四六判

先決問題は先づ自己の境遇位置、才能、金額に應じて其投資物を選定するに在り

▽株券投資 ▽米相場利用 ▽勤儉貯金
▽家屋投資 ▽債券利用 ▽天引貯金
▽土地放資 ▽株相場利用

巨萬の富も僅か十金の運用

經濟記事の讀方

細貝法學士著
▽定價一圓 ▽郵稅六錢
第二十版出來

複利增進 資金運用論

興梠前教授著
▽定價九十錢 ▽郵稅六錢
第二十版出來

東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替東京三二六番

闊露香先生新著

裏門から

天狗の面の鼻は高い、裏から見ればそれだけへッこんでゐる、人間もさうだ、著者は裏門から其人間を見た、さうして人間にからかつた、眼を剝いたり、舌を出したり、泣いて見せたり、笑つて見せたり、怒つて見せたりした、かうして種々様々に人間を突衝いて、人間の多くの方面も研究した。それは本書である。骨を刳るやうな諷刺、戰慄すべき教訓、抱腹絶倒の滑稽、人間の醜美、善悪、眞僞の徹底的批判、洵に之れ著者會心の著である。

四六判三五〇頁 總布裝函入美本
定價一圓五十錢 郵送料八錢

發兌 東京日本橋數寄屋町 振替東京一三七五番
大阪屋號書店
電話本局 三七三七番 四二八九番

一月一日發行

婦人公論

特價五拾錢
郵稅三錢

新年特別號 現代の悩み』號目次

■「婦人の時代」は來れり……谷本博士
■倒壊せんとする官僚主義の悩み……吉野博士
■中流階級の悩み……馬場孤蝶
■劃一主義の教育に悩まさるゝ我國の學生……木村久一
■現代家庭婦人の悩みについて……らいてう
■結婚難・離婚難及び其の救治策……本間久雄
■「戸惑ひせる花嫁」の悩み……茅原華山
■現代婦人と出産難……久保徳太郎
■子を持った親の悩み……山田わか
■物價騰貴の今日に際して主婦の感想……

長編連載小說
□白い鳥……田山花袋
□傾城大橋……池田大伍
□嵐の曲……長田幹彦

現代の悩みを取扱へる小說
□醜い顔……森田草平
□戯曲 黒髪……坪内士行
□娘も憎い……上司小劍

■懸賞應募『結婚難の聲』當選發表
■一身の榮達に代へて可憐な許婚を棄てた大學の秀才……小泉花外
■女どもよ夜は明けたり……矢田挿雲
■所謂新しい女の哀み……中村孤月
■母子相擁して鐵道自殺……蘆谷蘆村
■都會の灯に身を焦く女……小野賢一郎
■「身の上相談」に現はれたる「愛の悩み」……大月隆杖
■分限者の嫁選み……中川愛氷
■「放火女優」が冤罪の恨み……澤田撫松
■鎌子再度の家出……澁谷黃葉

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
同 神田區裏神保町 上田屋
同 京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 日本橋區本石町 良明堂
大阪市北區梅田町 至誠堂
同 北區東梅田町 盛文館
京都市七條停車場前 立盛堂
同 四條西洞院 共盛社
朝鮮京城本町二丁目 前田大盛社
日韓書房

○定價 金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

◎本號に限り特價金壹圓

郵稅金六錢

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合に發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本郷區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金口座は**東京三十四番**なり
一郵劵代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄 金六錢（集金委託料
　一金五圓迄 金七錢 及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年十二月廿五日印刷納本
大正八年一月一日發行

（禁轉載）

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行兼編輯人 菅谷盛治

印刷人 高木西三

發行所 中央公論社
東京市本鄉區駒込西片町十番地
電話局小石川一四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所 秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正七年十二月廿五日印刷納本

中央公論新年號